熊本県文化財調査報告第２９３集

伝大道寺跡遺跡群

-熊本地方気象台遠隔露場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-

熊本県教育委員会

２０１３

２区黒褐色整地層 全景（北東から）

２区 163-SK 出土遺物状況（北東から）

左から立会 502-SK、２区 38・163-SK 出土古代瓦

巻頭カラー②

２区 164-SK 出土土製品（鴟尾か）（二方向）

３区 65-SK 出土軒丸瓦

２区 172-SK 出土鉄絵緑彩草花文皿

３区 77-SK 出土唐津溝縁皿

３区 70・77-SK 出土唐津溝縁皿

２区 175-SK 出土唐津皿

２区全景（南から）

３区 65-SK　遺物出土状況（北西から）

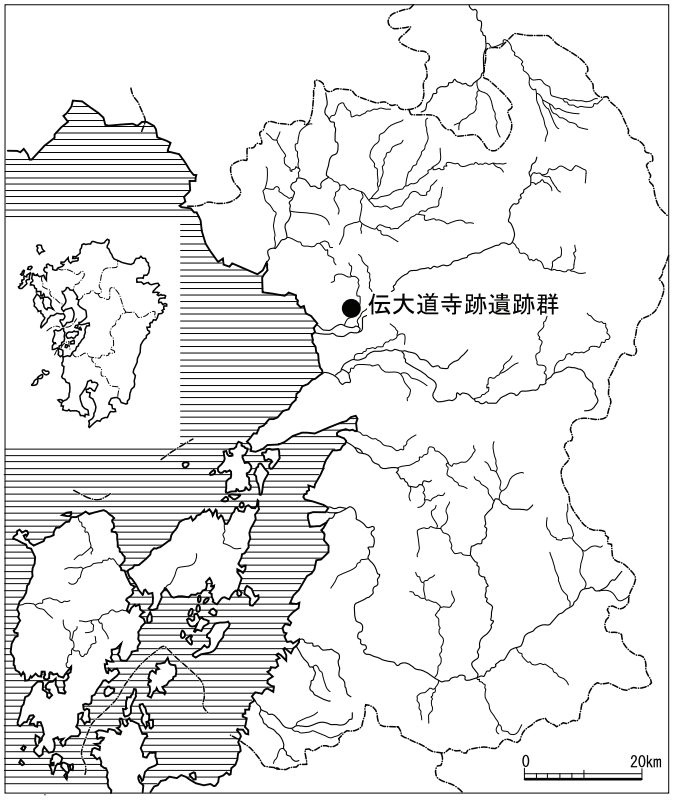
３区 70・77-SK　瓦出土状況（北東から）

熊本県文化財調査報告第２９３集

伝大道寺跡遺跡群

－熊本地方気象台遠隔露場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

熊本市中央区京町所在



熊本県教育委員会

２０１３

序　　文

熊本県教育委員会は、熊本地方気象台遠隔露場整備事業に伴い、埋蔵文化財の調査を実施しました。この地は豊前街道や豊後街道等の基点となる道路が隣接してあった地です。熊本城が南に見渡せるように見晴らしは良く、熊本の気象を測るのに適した地です。

この地は『肥後國誌』によれば、仏厳寺の北東に「大道寺」と言う天台宗の寺が存在したと伝えられ、この地が寺域の有力候補地でありました。

今回、古代の整地層や柱穴とともに白鳳期に制作されたと考えられる軒丸瓦のほか、奈良時代～平安時代の瓦がたくさん出土しました。

平安時代の遺構等が見つかり、周辺に古代の寺院もしくは役所の跡等が存在していたことは確実になりました。

また、奈良時代にさかのぼる瓦が大量に出土しました。後世に再利用した可能性もありますが、奈良時代にさかのぼる寺の存在にまた一歩近づいたと言えます。

さらにこの地は､江戸時代武家屋敷になっていたことが絵図にも記載されている場所です。

何度もの整地や改変により、江戸時代後期以降の遺構が大半ですが、江戸時代前期にさかのぼる穴や唐津周辺で焼かれたと思われる陶器類も出土しています。

建物の復元には至りませんでしたが、ゴミ捨て穴や貯蔵のための穴から当時の武士の家族等の生活の様子が垣間見ることができました。

今回記録保存という形ではありますが、本報告が地域の発展とともに、未来に地域の貴重な歴史の情報として引き継がれ、生かされていくことを望んでおります。

なお、本調査を実施するにあたり、ご理解とご協力をいただいた地元の皆様、並びに気象庁福岡管区気象台・熊本地方気象台・熊本市教育委員会・熊本市観光文化交流局文化振興課・地元自治会をはじめ関係各位に深く感謝申し上げたいと思います。

平成 25 年 3 月 29 日

熊本県教育長　田崎　龍一

例　　言

1　本書は、熊本県熊本市京町２丁目に所在する伝大道寺跡遺跡群の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2　発掘調査は、気象庁福岡管区気象台の依頼を受け、熊本県教育委員会が実施した。調査費及び整理報告費については、気象庁福岡管区気象台が負担した。

3　遺物の整理は、熊本県文化財資料室で実施した。

4　遺跡の発掘調査は平成 22 年度に実施し、整理報告作業を平成23年に主たる作業を行い、平成24年度報告書を作成した。

5　本書で用いる地形図は、熊本市の都市計画図を元にした遺跡地図及び国土地理院発行の２万５千分の１地形図を元に作成した。また、『新熊本市史　別編第１巻　絵図・地図　上中世・近世』1993　熊本市　から絵図を転載した。

　遺跡の測量の基準点測量及び水準測量は坂井測量設計に委託して実施した。

6　現地での写真撮影は横矢晋二郎、木下　勇、亀田　学、が行った。遺構実測は前記３人の他、松本和徳、宮本　厚、尾浦公治、竹馬　武、岡本泰寛、椎葉　博昭、上高原　聡が実施した。現地での掘削作業は、先程挙げた方々の他、多数の作業員の協力を得た。遺物の実測は、土器を藤島友美、川井田久子、那須昭、瓦を川井田、那須、土製品・金属製品等を亀田、川井田、製図は主に川井田、那須が実施し、一部を（株）埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に委託した。遺物洗浄･接合・復元・注記等は、松本直枝、上野栄子、三井佳子、松原泰子、井上秀子、生　美恵、西野佳子、水牧藤美等が行った。

　遺物の写真撮影は、藤島、亀田、村田百合子が行い、これを上田佳奈子、蓮池千絵、那須、生、が補助した。

7　土人形の写真の掲載にあたっては、大分市歴史資料館の江口勇三郎、江口誠二、原田　誠、水町英邦諸氏の協力を得ました。

8　本書の執筆は、亀田、藤島、坂本千恵が執筆した。

9　整理後の保管は熊本県文化財資料室で保管している。

10　本書の編集は、熊本県教育庁文化課が行い、川井田、藤島が担当し、亀田が総括した。

凡　　例

1　**方位／座標**　国土座標直角平面座標系　第II系（世界測地系）を基準とし、方位もそれに準じた。

2　**遺跡地区名**　遺跡全体の地区は図 16 を参照願いたい。X＝－20615.000m,Y＝－27440.000mを原点(N0.E0)として､東西南北への距離(m)で記した。グリット(G)は 5m 間隔で設定した。(本文中のグリット図参照)

3　**遺構名略号**　次の通りである。SB;掘立柱建物､SD;溝、SK; 土坑、SX ; その他（不明土坑など）

4　**遺構図版**　標高は東京湾平均海水面(Tokyo Peil[T.P.])

6　**遺構図版・縮尺**　遺構図版は、ブロックごとに掲載し、縮尺はキャプション及びスケールで図示した。

7　**遺構図版・線種**　遺構平面図は原則として確定ラインは実線で掲載し、遺構上・下端の推定線は破線で示した。また撹乱および調査区範囲については一点破線で示した。

8　**遺構図版**　瓦及び金属製品などの断面については斜線で示している。

9　**遺構図版**　断面ポイント　各遺構の平面及び断面図では―ラインの外側をポイントとしている。

10　**遺物図版・縮尺**　遺物実測は原則として土器と瓦は 1/3、鉄及び青銅製品、銅製品は 2/3、古銭の拓本は 1/1 で掲載した。

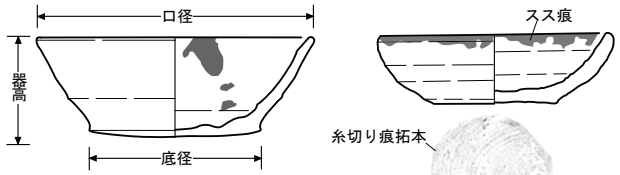
11　**遺物図版・線種**　外形線、中心線及び区画線は実線、稜線は一点破線または二点破線、推定線は破線で示した。また、須恵器については、断面を塗りつぶし、回転ヘラ削りを実線で示したのち、以下底部まで砂粒の動きを示している。復元できない土器片については、断面の左に内面、右に外面の立面図、拓本貼付もこれに準ずる。(凡例図参照)

12　**接合痕跡**　断面の内側に破線を入れている。

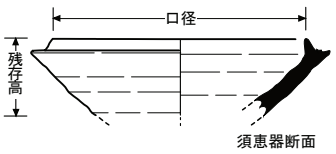
13　**遺物観察表**　すべての実測個体について、遺物観察表を掲載した。その凡例は、各観察の下に別項にて注記している。

14　**省略文字**　本文中及び図面・写真図版中の「包〇層」は遺物包含層の省略である。

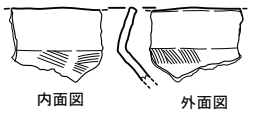
凡　例　図



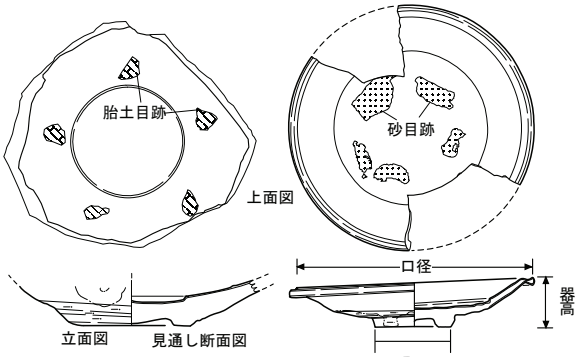
土師器

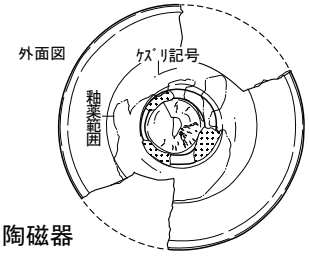


須恵器

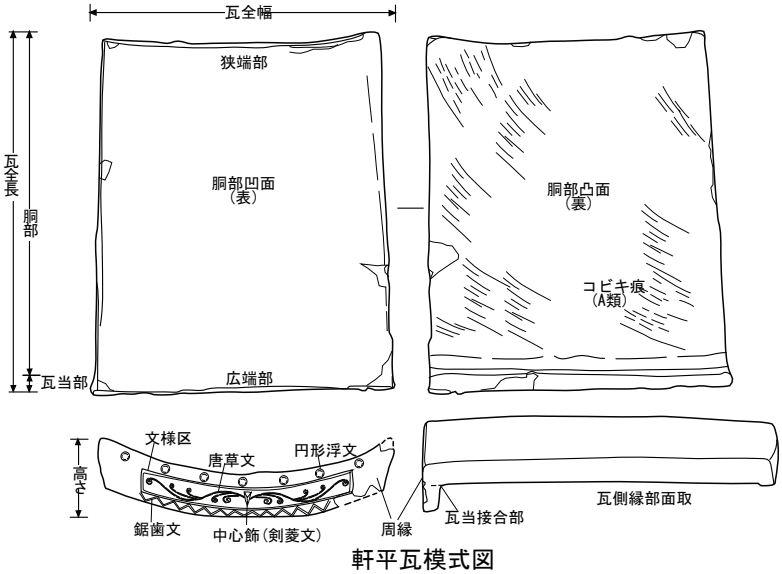


土器破片

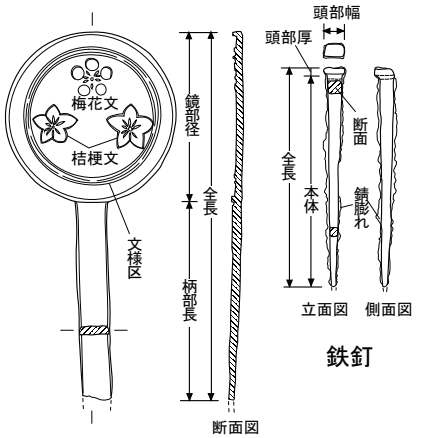




陶磁器

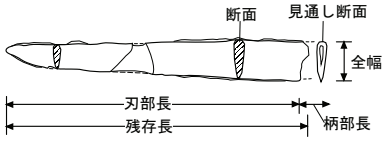


軒平瓦模式図

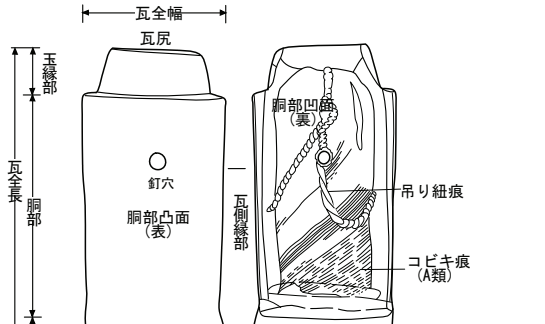


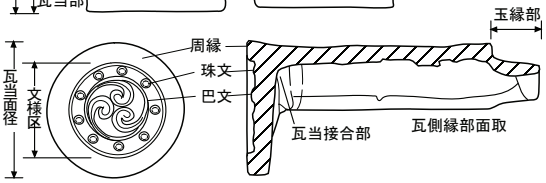
鉄釘

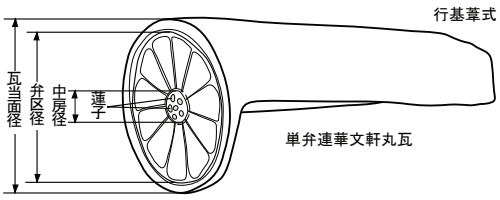
青銅製柄鏡



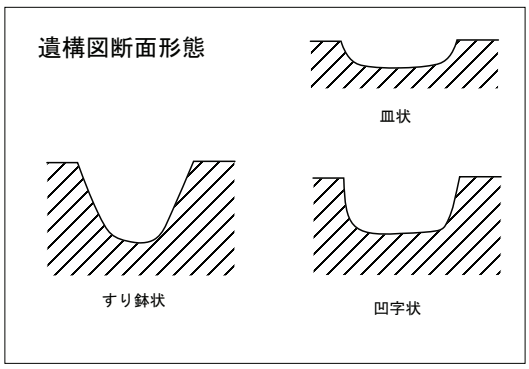
刀子

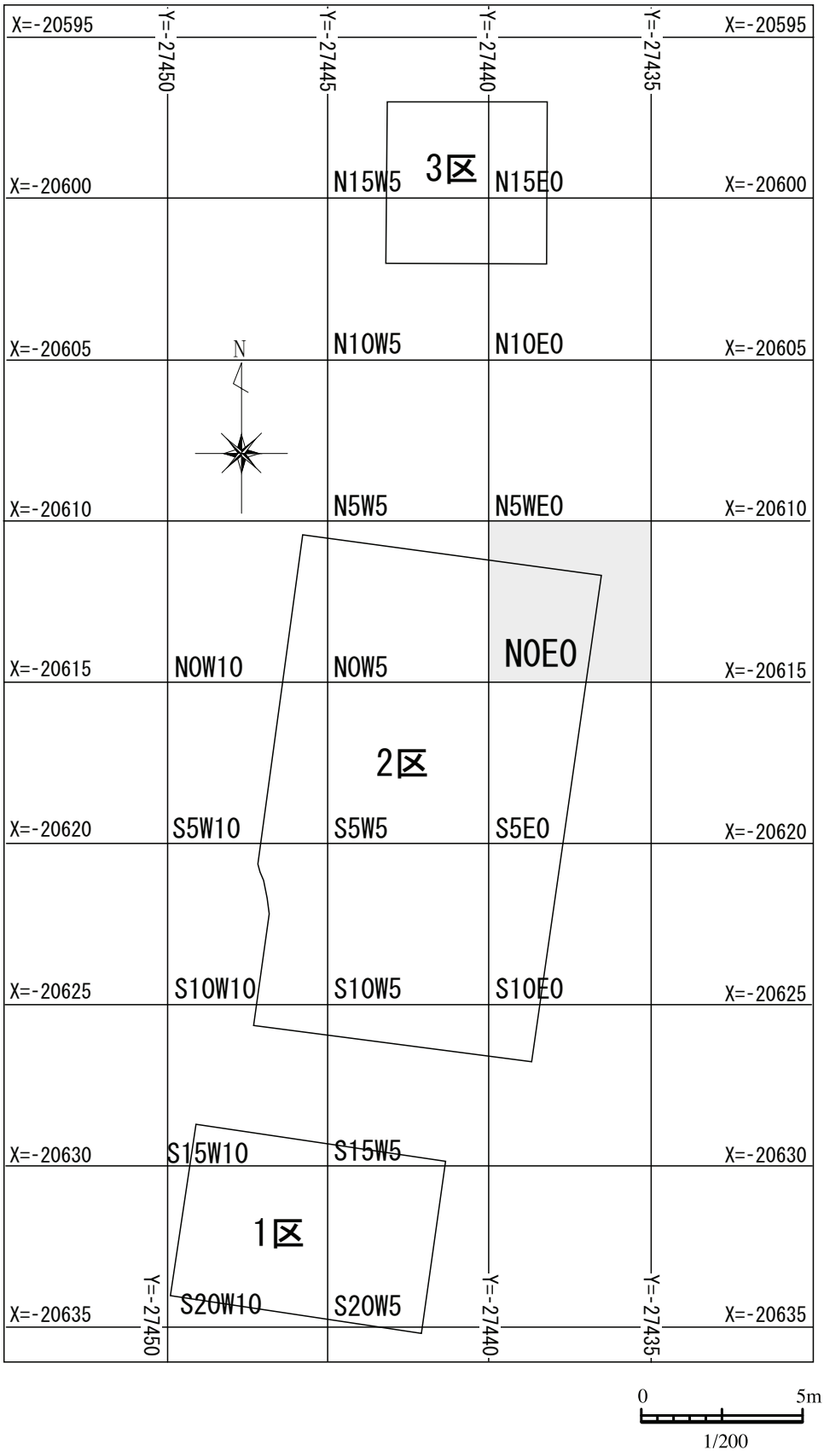






軒丸瓦模式図





伝大道寺跡遺跡群　調査区配置及びグリット図

本文目次

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯と経過…… 1

第２節　調査の組織…… 1

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　周辺の地形 …… 2

第２節　文献調査及び既往の調査 …… 2

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　調査区の位置…… 3

第２節　調査概要 …… 3

第１項　白鳳期～平安時代 …… 3

第２項　江戸時代 …… 3

第３項　近代以降 …… 4

第３節　基本土層 …… 4

第４節　弥生時代の遺物

第１項　概要 …… 4

第２項　遺物包含層及び弥生時代以降の遺構から出土した遺物…… 4

第５節　古代の遺構

第１項　概要 …… 5

第２項　３区の遺構 …… 5

(1)　掘立柱建物 …… 5

(2)　柱穴 …… 6

第３項　２区の遺構 …… 6

(1)　黒褐色整地層 …… 6

(2)　土坑 …… 7、8

(3)　柱穴 …… 8

第４項　１区の遺構 …… 8

(1) 土坑 …… 9

第５項　古代以外の遺構から出土した瓦 …… 9、10

(1)　軒丸瓦 …… 9

(2)　軒平瓦 …… 9、10

(3)　平瓦 …… 10

(4)　丸瓦 …… 10

第６項　立会調査 …… 10

(1)　旧塔の解体掘り方調査区 …… 10

(2)　平成 23 年度埋設管敷設工事調査区 …… 10

(3)　平成 24 年度埋設管敷設工事調査区 …… 11

第６節　中世後期の遺構 …… 11

第１項　概要 …… 11

第７節　近世以降の遺構と遺物 …… 11

第１項　概要 …… 11

第２項　３区の調査 …… 11～14

(1)　土坑 …… 11～14

(2)　柱穴 …… 14

(3)　井戸 …… 14

第３項　２区の調査 …… 14～23

(1)　土坑 …… 15～23

第４項　１区の調査 …… 23～27

(1)　土坑 …… 23～26

(2)　溝 …… 26

(3)　柱穴や建物 …… 26

第８節　近代以降の建物等の調査 …… 26

第９節　立会調査 …… 27

第Ⅳ章　考古学的分析

第１節　古代の瓦について …… 28～29

第２節　不明土製品について …… 29

第３節　古代の遺構の変遷について …… 29～30

第４節　近世の遺構の変遷について …… 30

第５節　近世の瓦について（藤島）…… 30～32

第６節　土人形について（坂本）…… 32～35

第７節　近世の多様な遺物について …… 36～38

第Ⅴ章　まとめ

第１節　調査成果…… 39

第１項　弥生時代 …… 39

第２項　飛鳥～奈良時代 …… 39

第３項　平安時代 …… 39

第４項　江戸時代前期 …… 39

第５項　江戸時代後期 …… 39

第６項　明治以降 …… 40

参考引用文献…… 41

表

表１　２区遺構法量表 …… 42～43

表２　伝大道寺跡遺跡群出土土器観察表…… 44～49

表３　伝大道寺跡遺跡群出土瓦観察表…… 50～53

表４　伝大道寺跡遺跡群出土金属製品観察表… 54～56

表５　伝大道寺跡遺跡群出土瓦の重量、枚数表… 57～58

図面・写真図版・表　目次

図　　面

位置図関連

Pl.1　図1　伝大道寺跡遺跡群周辺遺跡分布図(古代・近世)(1/25,000)
Pl.2　図1　付表　伝大道寺跡遺跡群周辺遺跡名一覧
Pl.3　図2　京町之絵図1
Pl.4　図3　京町之絵図2
Pl.5　図4　京町之絵図3
Pl.6　図5　京町之絵図4
Pl.7　図6　南京町之絵図1
Pl.8　図7　南京町之絵図2
Pl.9　図2～図7の説明文
Pl.10 図8　伝大道寺跡遺跡群及び調査区位置図(1/5,000)
Pl.11 図9　熊本地方気象台実測平面図(旧庁舎《昭和41年》)描写(1/700)
Pl.12 図10 熊本管区気象台敷地建物配置図(1/600)(遠隔露道整備事業前)
Pl.13 図11 熊本地方気象台庁舎解体に伴う立会掘削時断面図1(1/60)
Pl.14 図12 熊本地方気象台庁舎解体に伴う立会掘削時断面図2(1/40)
Pl.15 図13 熊本地方気象台庁舎解体に伴う立会掘削時断面図3(1/40)
Pl.16 図14 熊本地方気象台庁舎解体に伴う立会掘削時断面図4(1/40)
Pl.17 図15 熊本地方気象台庁舎解体に伴う立会掘削時断面図5(1/40)
Pl.18 図16 伝大道寺跡遺跡群全調査区古代遺構配置図(1/200)
Pl.19 図17 2区153a-SK遺物出土状況図(1/20)
Pl.20 図18 2区163-SK遺物出土状況図,153b-SK検出状況図(1/20)
Pl.21 図19 2区(N0.W5)下層検出遺構平面図及び黒褐色整地層断面図(1/40)
　　図20 1区18-SK遺物出土状況図(1/20)
Pl.22 図21 3区古代～中世(78-SP・66-SK・100-SP)遺構平面・断面図(1/40)
Pl.23 図22 伝大道寺跡遺跡群全調査区近世遺構配置図(1/200)
Pl.24 図23 3区81-SK・83-SP・126-SP平面・断面図(1/40)
Pl.25 図24 3区77-SK遺物出土状況平面・断面図(1/20)
Pl.26 図25 3区65-SK遺物出土状況平面・断面図(1/20)
Pl.27 図26 3区近世遺構平面・断面図(1/40)
Pl.28 図27 3区68-SE・67-SE平面(1/40)・断面図(1/80)
Pl.29 図28 2区SK及びSX検出状況平面図1(1/80)
Pl.30 図29 2区(N0.E0)(N0.W5)検出土坑平面・断面図(1/40)
Pl.31 図30 2区175-SK 遺物出土状況平面・断面図(1/20)
Pl.32 図31 2区106-SK 遺物出土状況平面・断面図(1/20)
Pl.33 図32 2区134a-SK 遺物出土状況平面・断面図(1/20)
Pl.34 図33 2区134b-SK 遺物出土状況平面・断面図(1/20)
Pl.35 図34 2区掘立柱建物(98-SB)平面・断面図(1/40)
Pl.36 図35 2区168・111c(184)・111b(185)・211・228・172・85b・85-SK平面・断面図(1/40)
Pl.37 図36 2区97b・119・222・107・150他-SK・210-SX平面・断面図(1/40)
Pl.38 図37 2区198・154・157・159・165(158)・169・160-SK・176-SP平面・断面図(1/40)
Pl.39 図38 2区216・127・218(166b)・166・91・88b・90・84・85(b・c・e)-SK平面・断面図(1/20)(1/40)
Pl.40 図39 2区39・38・38b・35-SK平面・断面図(1/40)
Pl.41 図40 2区31-SX 平面・断面図(1/20)
Pl.42 図41 2区31-SX 石組展開図(1/40)
Pl.43 図42 2区31-SX 完掘状況図(1/40)
Pl.44 図43 1区遺構配置図(1/40)
Pl.45 図44 1区18・55・49・59(23)・20・06c・43(30)-SK・05b-SD平面図(1/40)
Pl.46 図45 1区20・43(30)・59(23)・06c・18・49・55-SK・05b-SD断面図(1/40)
Pl.47 図46 1区17・05・09・123・12・54・06・08・21・40a・125-SK・47-SD・197-SP平面図(1/40)
Pl.48 図47 1区08・06・21・05・40a・123・09・17・12・54・125-SK,47-SD,54b-SP断面図(1/40)
Pl.49 図48 1区22・52・51・41・04・11・124・50-SK,54b・197-SP平面図(1/40)
Pl.50 図49 1区22・52・51・41・04・11・124・54・50-SK,54b-SP断面図(1/40)
Pl.51 図50 1区14・06b・122-SK,10(44)-SD,その他平面図(1/40)
Pl.52 図51 1区14・06b-SK,10(44)-SD断面図(1/40)
　　図52 1区122-SK,南壁断面図(1/40)
Pl.53 図53 1区14b-SK・20b(23)-SK・46-SK,その他SK平面図(1/40)
Pl.54 図54 1区14b-SK・20b(23)-SK・46-SK断面図(1/40)
　　図55 1区西壁面・東壁面・北壁面断面図(1/40)
Pl.55 図56 1区Pit群(掘立柱建物)検出状況平面図(1/40)
Pl.56 図57 1区Pit群(掘立柱建物)断面図(1/40)

Pl.57 図58 2区Pit検出状況平面図(1/80)
Pl.58 図59 2区ぐり石出土状況(1/80)及び、
掘立柱建物(96-SB)断面図(1/40)
Pl.59 図60 1区・2区出土弥生土器実測図(1/3)
Pl.60 図61 3区近世以降の遺構出土土器実測図(1/3)
図62 2区163-SKほか出土土器実測図(1/3)
図63 2区近世以降の遺構出土土器実測図(1/3)
Pl.61 図64 3区77-SK・70-SK・81-SK出土遺物実測図
(1/3)
Pl.62 図65 2区出土遺物実測図1(1/3)
Pl.63 図66 2区出土遺物実測図2(1/3)(1/8)
Pl.64 図67 2区出土遺物実測図3(1/3)
Pl.65 図68 2区出土遺物実測図4(1/3)
図69 1区11-SK出土遺物実測図(1/3)
Pl.66 図70 伝大道寺跡遺跡群出土土製品(鴟尾か)及び
軒平瓦実測図(1/3)
Pl.67 図71 伝大道寺跡遺跡群出土軒平瓦実測図(1/3)
Pl.68 図72 3区・2区出土軒丸瓦実測図(1/3)
Pl.69 図73 2区黒褐色整地層(遺物包含層4'層)出土
瓦実測図(1/3)
Pl.70 図74 2区黒色整地層(遺物包含層4層)出土
瓦実測図(1/3)
Pl.71 図75 2区163-SK・209-SK・184-SK出土
平瓦実測図(1/3)
Pl.72 図76 2区112-SK・111-SK・175-SK・203-SP出土
平瓦実測図1(1/3)
Pl.73 図77 2区209-SK出土平瓦実測図(1/3)
Pl.74 図78 1区18-SK出土平瓦・熨斗瓦実測図(1/3)
Pl.75 図79 2区163・206・175・112-SK出土
丸瓦実測図(1/3)
Pl.76 図80 2区209-SK・88-SK出土丸瓦実測図(1/3)
Pl.77 図81 2区218c・85b・97b・175・86・184-SK出土
丸瓦実測図(1/3)
Pl.78 図82 1区11-SK・12-SK・18-SK出土
丸瓦実測図(1/3)
Pl.79 図83 3区77-SK・立会(05-SK)出土滴水瓦,
2区185・134a-SK出土軒丸瓦実測図(1/3)
Pl.80 図84 2区159-SK・立会(SK07)出土軒平瓦,
3区70(平瓦)・77-SK(熨斗瓦)・立会出土
平瓦実測図(1/3)
Pl.81 図85 2区(211-SK)・3区(包含層3層・70-SK)出土
丸瓦、3区(77-SK)出土軒丸瓦実測図(1/3)
Pl.82 図86 3区70-SK出土銅製品・鉄製品実測図
(2/3)(1/1)
Pl.83 図87 3区70-SK(青銅製柄鏡)・
77-SK(鉄釘)実測図(2/3)
Pl.84 図88 3区65-SK出土鉄製品実測図(2/3)
Pl.85 図89 2区出土銅製品及び鉄製品実測図(2/3)
Pl.86 図90 1区出土鉄製品・青銅製品・銅製品実測図(2/3)
Pl.87 図91 3区70-SK・77-SK出土古銭拓本(1/1)
図92 立会(SK05)出土板塀瓦実測図(1/4)
Pl.88 図93 2区近世遺構変遷図
Pl.89 図94 伝大道寺跡遺跡群出土軒丸瓦・
軒平瓦型式変遷図(案)
Pl.90 図95 伝大道寺跡遺跡群出土平瓦型式変遷図(案)
Pl.91 図96 伝大道寺跡遺跡群出土丸瓦・
熨斗瓦型式変遷図(案)

写真図版

巻頭カラー

1　古代整地層・出土瓦
1. 2区黒褐色整地層全景（北東から）
2. 2区163-SK出土遺物状況（北東から）
3. 立会502-SK、2区38・163-SK出土古代瓦

2　遺物1　古代
1. 2区164-SK出土土製品（鴟尾か）
2. 3区65-SK出土軒丸瓦

3　遺物2　近世
1. A期2区172-SK出土鉄絵緑彩草花文皿
2. A期3区77-SK出土唐津溝縁皿
3. A期3区70・77-SK出土唐津溝縁皿
4. A期2区175-SK出土唐津皿

4　調査区　2・3区
1. 2区全景（南から）
2. 3区65-SK遺物出土状況（北西から）
3. 3区70・77-SK瓦出土状況（北東から）

Ph.1　3区遺構検出状況
1. 3区全景（東から）
2. B期65-SK遺物出土状況（北西から）
3. 68-SE（北から）
4. B期65-SK完掘状況（北西から）
5. A期70・77-SK遺物出土状況（北東から）

Ph.2　2区遺構検出状況1
1. 2区全景（南から）
2. 112-SK（南から）
3. 116-SK（南から）
4. 153a・163-SK遺物出土状況（南から）
5. 163-SK完掘状況（南から）

Ph.3　2区遺構検出状況2
1. 北側黒色整地層全景（北東から）
2. 黒色整地層包含層4層（北西から）
3. 黒色整地層断面（西から）
4. 243-SK完掘状況（南から）
5. 153b-SK（北東から）

Ph.4　2区遺構検出状況3
1. A期169-SK完掘状況（東から）
2. A期172-SK遺物出土状況（北から）
3. A期175-SK完掘状況（北から）
4. A期209-SK完掘状況（南から）
5. A・C期106・130b-SK石出土状況（南から）
6. A・C期106・229-SK完掘状況（南西から）
7. B期38-SK完掘状況（南西から）
8. 26-SK石出土状況（南から）

Ph.5　2区遺構検出状況4
1. 84-SK礎石・瓦検出状況（南西から）
2. 91-SK完掘状況（東から）
3. 107-SK完掘状況（北から）
4. 111b-SK完掘状況（南から）
5. 113-SK下層出土遺物検出状況（北東から）
6. 134a-SK石組検出状況（南西から）
7. 134b-SK石組検出状況（南から）
8. 149-SK埋1層遺物出土状況（西から）

Ph.6　2区遺構検出状況5
1. 161-SK完掘状況（北から）
2. 184-SK完掘状況（北から）
3. 211-SK完掘状況（北から）
4. 216a-SK遺物出土状況（南西から）
5. 218c-SK完掘状況（西から）
6. 225-SK完掘状況（北から）
7. 240-SK完掘状況（南から）
8. 241・245-SK完掘状況（西から）

Ph.7　2区遺構検出状況6
1. 黒褐色整地層247-SK完掘状況（南から）
2. 37-SE井戸石組検出状況（東から）
3. 31-SX完掘状況（南から）
4. 31-SX石組取り上げ状況（北東から）
5. 96･98-SB(ぐり石の溝を伴う建物)検出状況(東から)

Ph.8　1区遺構検出状況1
1. 1区4層上面完掘状況(11･12-SK他)(南西から)
2. 18-SK布目瓦出土状況（北から）
3. 17・18-SK土層断面（西から）
4. 40a-SK完掘状況（東から）
5. 54-SK完掘状況（南東から）

Ph.9　1区遺構検出状況2
1. 54b-SP完掘状況（南から）
2. 04-SK完掘状況（北東から）
3. 05-SK完掘状況（西から）
4. 06-SK完掘状況（南から）
5. 08・20-SK土層断面（南から）
6. 09-SK遺物出土状況（北から）
7. 11-SK完掘状況（東から）
8. 17-SK完掘状況（東から）

Ph.10　1・2 区出土遺物

Ph.11　2 区出土遺物 1

Ph.12　2 区出土遺物 2

Ph.13　2 区出土遺物 3

Ph.14　2・3 区出土遺物 4

Ph.15　2 区出土遺物 5

Ph.16　2 区出土遺物 6

Ph.17　2 区出土遺物 7

Ph.18　2 区出土遺物 8

Ph.19　2 区出土遺物 9

Ph.20　3 区出土遺物

Ph.21　A 期 3 区出土陶磁器 1

Ph.22　A 期 3 区出土陶磁器 2

Ph.23　A 期 3 区出土陶磁器 3

Ph.24　A 期 3 区出土陶磁器 4

Ph.25　A 期 3 区出土陶磁器 5

Ph.26　A 期 2 区出土陶磁器 1

Ph.27　A 期 2 区出土陶磁器 2

Ph.28　A 期 2 区出土陶磁器 3

Ph.29　A 期 2 区出土陶磁器 4

Ph.30　B 期 2 区出土陶磁器 1

Ph.31　B 期 2 区出土陶磁器 2

Ph.32　B 期 2 区出土陶磁器 3

Ph.33　B 期 2 区出土陶磁器 4

Ph.34　B 期 2 区出土陶磁器 5

Ph.35　B 期 2・3 区出土陶磁器

Ph.36　B・C 期 2・3 区出土陶磁器

Ph.37　C 期 2 区出土陶磁器 1

Ph.38　C 期 2 区出土陶磁器 2

Ph.39　D 期 2 区出土陶磁器

Ph.40　1 区・2 区出土陶磁器

Ph.41　2・3 区出土陶磁器

Ph.42　2 区出土陶磁器 1

Ph.43　2 区出土陶磁器 2

Ph.44　2 区出土陶磁器 3

Ph.45　2 区出土陶磁器 4

Ph.46　2 区出土陶磁器 5

Ph.47　2 区出土陶磁器 6

Ph.48　2 区出土陶磁器 7

Ph.49　2 区出土陶磁器 8

Ph.50　2 区・3 区出土陶磁器 9

Ph.51　2 区出土陶磁器 10

Ph.52　2 区出土陶磁器 11

Ph.53　2 区出土陶磁器 12

Ph.54　2 区出土陶磁器 13

Ph.55　1 区出土陶磁器 1

Ph.56　1 区出土陶磁器 2

Ph.57　1 区出土陶磁器 3

Ph.58　1 区出土陶磁器 4

Ph.59　1 区出土陶磁器 5

Ph.60　1 区・3 区出土陶磁器 6

Ph.61　1 区出土陶磁器 7

Ph.62　1 区出土陶磁器 8

Ph.63　3 区出土瓦質・土師器

Ph.64　立会第２庁舎出土遺物

Ph.65　1・2・3 区出土瓦

Ph.66　3 区出土瓦 1

Ph.67　3 区出土瓦 2

Ph.68　3 区出土瓦 3

Ph.69　立会・3 区出土瓦 4

Ph.70　3 区出土瓦 5

Ph.71　2・3 区、立会出土瓦・土製品

Ph.72　2 区出土瓦 1

Ph.73　2 区出土瓦 2

Ph.74　2 区出土瓦 3

Ph.75　2 区出土瓦 4

Ph.76　2 区出土瓦 5

Ph.77　2 区出土瓦 6

Ph.78　2 区出土瓦 7

Ph.79　2 区出土瓦 8

Ph.80　2 区出土瓦 9

Ph.81　2 区出土瓦 10

Ph.82　2 区出土瓦 11

Ph.83　2 区出土瓦 12

Ph.84　2 区出土瓦 13

Ph.85　1 区出土瓦 1

Ph.86　1 区出土瓦 2

Ph.87　1 区出土瓦 3

Ph.88　1 区・2 区出土瓦 4

Ph.89　2 区出土近世瓦 1

Ph.90　2 区出土近世瓦 2

Ph.91　2 区出土近世瓦 3

Ph.92　2 区出土近世瓦 4

Ph.93　2 区出土近世瓦 5

Ph.94　2 区出土近世瓦 6

Ph.95　1・2 区出土近世瓦 7

Ph.96　1・3 区、立会出土近世瓦 8

Ph.97　3 区出土青銅製品

Ph.98　2 区出土青銅製品

Ph.99　3 区出土鉄器 1

Ph.100　3 区出土鉄器 2

Ph.101　2・3 区出土鉄器

Ph.102　2 区出土鉄器

Ph.103　1 区出土鉄器

Ph.104　1 区出土鉄器

Ph.105　1 区出土青銅製品

Ph.106　1・2・3 区出土硯・碁石

Ph.107　2 区出土瓦・石製品

Ph.108　2・3 区出土土人形

Ph.109　1 区出土土人形

Ph.110　熊本地方気象台旧敷地内立会調査

1. SK-01-L2
2. 立会 502-SK・A-3 土層断面
3. SK-01-L2
4. SK-07 D地点
5. SK-11 ～ 14 B地点
6. A-1 土層断面

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯と経過

今回報告する伝大道寺跡遺跡群は熊本地方気象台の遠隔露場整備事業に伴い、塔・倉庫・観測庁舎の新営工事に伴い発掘調査を実施した。平成22年の予備調査を経て、埋蔵文化財の存在が検出された。

そのため、気象庁福岡管区気象台より平成22年4月13日付け福気会第483号により文化財保護法第94条の通知が出され、法第99条（平成22年4月19日付け教文第166号）の通知により、熊本県教育委員会が調査を実施した。

調査過程で1区から深い井戸が出土したため、塔の方向を変更する協議が行われ、一部調査区を拡張した。平成23年度後半から遺物及び遺構の整理を実施した。報告書等と併行に整理作業を再開した。

第２節　調査の組織

【平成22年度】埋蔵文化財発掘調査（現地本調査）

調査主体者　山本　隆生（熊本県教育長）
調査責任者　小田　信也（熊本県教育庁文化課長）
調査総括　　村崎　孝宏（文化財調査第一係長）
　　坂田　和弘（文化財資料室長）
調査調整　　長谷部善一（文化財調査第一係参事）
調査事務　　川上　勝美（課長補佐）
　　水元　敬浩（高校教育課主幹兼総務係長）
　　山田　京子（高校教育課総務係参事）
整理担当者　亀田　　学（主任学芸員）
　　横矢晋二郎（嘱託）
　　木下　　勇（嘱託）
調査指導　　金田　一精（熊本市観光文化交流局
　　文化振興課埋蔵文化財調査室）

【平成23年度】整理・報告書作成

整理主体者　山本　隆生（熊本県教育長）
整理責任者　小田　信也（熊本県教育庁文化課長）
整理総括　　村崎　孝宏（文化財調査第一係長）
　　坂田　和弘（参事兼文化財資料室長）
整理事務　　川上　勝美（課長補佐）
　　水元　敬浩（高校教育課主幹兼総務係長）
　　山田　京子（高校教育課総務係参事）
整理担当者　亀田　　学（主任学芸員）
　　坂井（西野）　由葉（嘱託）
専門調査員　江浦　久志（天草高浜焼久窯主宰）
　　竹田　知美（元県教育庁文化課嘱託）
調査協力　　山下　義満（文化財調査第二係参事）
　　岡本　真也（文化財調査第二係参事）

【平成24年度】報告書作成

調査主体者　山本　隆生（熊本県教育長）（6月15日まで）
　　田崎　龍一（熊本県教育長）（6月16日から）
整理責任者　小田　信也（熊本県教育庁教育総務局文化課長）
整理総括　　西住　欣一郎（課長補佐）
　　村崎　孝宏（文化財調査第一係長）
　　後藤　克俊（文化財資料室長）
整理事務　　川上　勝美（課長補佐）
　　中津　（課長補佐；施設課総務・助成担当）
　　天草　英子（施設課主任主事）
整理担当者　亀田　　学（参事）
　　西野　由葉（嘱託）（平成24年5月まで）
　　藤島　友美（嘱託）（平成24年6月から）
報告書協力　岡本　真也（文化財調査第二係長）
　　山下　義満（文化財調査第二係参事）
　　坂本　千恵（文化財調査第二係嘱託；執筆者）
　　江見　恵留（文化財調査第二係嘱託）

＊その他報告書には多数の方の協力を得た。

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　周辺の地形

熊本地方気象台が位置する京町台地は、熊本城の北部、茶臼山から北へ続く標高30mから40mの細長い丘陵地帯で、東・西側ともに急傾斜である。東に坪井川、西を井芹川に挟まれた位置にある。

特に気象台は現京町２丁目にあたり、近世には柳川小路が東側に面し、町人町には仏厳寺を介してほぼ接する位置にある。豊前・豊後街道の拠点となった地点にあたる。

熊本地方気象台が位置するのはその京町台地の中央部の東側にあたる。

第２節　文献調査及び既往の調査

京町台地周辺は、弥生時代（約1800年前）から江戸時代までの長い間にわたって昔の生活の跡が残っている。特に注目されるのは、江戸時代（1772年）に編纂された「肥後國誌」という地誌によると、京町の東側にある仏厳寺（ぶつごんじ）の北東に、境内が広い、大きな寺があったと伝えられている。また、この周辺の屋敷に古瓦や石等が土の中から出土する事があると記されている。これらから、平安時代の天台宗の「大道寺」があったと推定されている。

古代の西海道（さいかいどう）の駅として、駅馬/伝馬五疋（ひき）が置かれていた養蚕（こかい;子飼）の駅があるが、この駅から京町台地への道があったと推定されている。また、熊本駅前の合同庁舎周辺に位置する二本木遺跡群（にほんぎいせきぐん）［(飽田郡（あきたぐん）の役所ないし飽田国府があったと考えられている)］からの道も京町台地へ通っていたと推定され、この地は古代から交通の要衝であったと考えられる。また、江戸時代にも京町台地を南北に走る道路は豊前街道であり、豊後街道の起点にもなる交通の要衝であった。

今回、調査を実施した200m程南側の裁判所北側では、熊本市教育委員会文化財課が調査を行った。調査成果から、奈良時代前葉から中葉の軒丸瓦が出土している。それとともに製鉄関連の工房跡と考えられる竪穴建物（たてあなたてもの）等数軒が見つかっており注目される。

さらに、仏厳寺、熊本地方裁判所一帯、熊本城監物櫓の前、監物台樹木園と広範に布目瓦が確認され、京町台地の丘陵部を利用した大寺（天台密教に特有な山岳伽藍の配置等）であったとも推定されている。

江戸時代の絵図によると、豊前街道に面した京町台地の中央部は町人町で、その周辺は、武家屋敷となっていた。

1660年代から1670年代にかけて、仏厳寺の隣に春木主税（ちから）の屋敷があり、その北側に筑後の戦国武将筑紫広門の系譜を持つ筑紫左近後家屋敷（200石取り）が存在している。

春木主税は1000石取りのお側者頭衆という細川綱利の直接の家臣で、長柄頭という役職であったと記録されている。子孫は、町奉行もしていた家柄である。

気象台の南側に春木坂があるが、春木氏が敷地の一部を提供し道路にして交通の便を図ったと言われている。

1750年代から1760年代にかけては、両屋敷の区画は５区画にわかれ、併せて200石程度の下級家臣の屋敷地となっている。

（参考文献）

『熊本市埋蔵文化財調査年報　第５号-平成12年度～平成13年度』2003　熊本市教育委員会

『熊本市埋蔵文化財年報　第４号-平成11年度』2002　熊本市教育委員会

『肥後國誌』1772　森本　一瑞

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　調査区の位置

熊本城の北側にある稲荷神社を左手に見ながら北西方向に坂を上ると右手に熊本県立美術館分館、伝統工芸館が見えてくる。それを見ながら右に曲がると右手に熊本地方裁判所を見る。

さらに北へ行くとなだらかな谷地形をはさみ、坂を上がった所で右手に折れる。牛綴り坂を東に行くと熊本地方気象台である。

第２節　調査概要

発掘調査の範囲は、気象台旧庁舎の南側、観測地点の西側である。南から西側進入路部分を１区・観測新庁舎部分を２区・新たな観測のための塔部分を３区の３つの区画からなる。１区と２区の南側には江戸時代後期から明治時代にかけての遺構が主に広がり、２区の北側から３区にかけては江戸時代前期から明治時代までの遺構が広がっている。

奈良時代から平安時代の遺構は、３区の一部と２区の北側にかけて土坑が広がっている。

第１項　白鳳期～平安時代

江戸時代の土坑からではあるが、７世紀（600年代）後半の軒丸瓦が出土している。この瓦は熊本市南区城南町の陣内（じんない）廃寺や熊本市東区の詫麻郡家（たくまぐうけ;役所の施設）、玉名市の立願寺廃寺（りゅうがんじはいじ）、八代市の興善寺（こうぜんじ）等から出土している軒丸瓦（のきまるがわら）に類似している。

中房（ちゅうぼう;瓦の真ん中の部分）の連珠や厚み等からそれらの一群より先行する型式とも考えられる。熊本県内では、鞠智城（きくちじょう）の軒丸瓦に次ぐ段階のものとも考えられるが、出土数が少ないことからどういった経緯でこの場所から出土したかを特定できる材料が少ない。

また、奈良時代の軒丸瓦や軒平瓦（のきひらかわら）の破片（玉名市の立願寺廃寺等と類似）や平安時代（800年代終わり頃?）の軒平瓦等、古代のなかでも時期の違う瓦が出土している。このことは、古代のお寺が長い期間存続したという見解や、古い瓦を利用してお寺を奈良時代に造った等様々な可能性があると考えられる。今後、寺院跡や古代の土器を捨てた跡等が見つかれば、遺跡の解明につながるのではないかと期待される。しかし、今回の調査ではそうしたことを裏付ける材料が少ないと考えられる。

古代の生活跡としては、瓦を捨てた跡や建物の柱穴の一部が見つかっている。大きさ60 ～ 80㎝くらいの柱を据えるための穴が確認されている。このことから掘立柱建物が存在したと推定できる。

また、中央の調査区（２区）の北側では、幅2m以上、長さ約6.5mの範囲で、深さ60 ～ 90㎝に黒色土で埋められた掘り込みを確認した。布目瓦や古代の土器が出土しており、建物を建設する際の地業（ちぎょう）である可能性があると考える。９世紀代の土器を含む土坑が、その層の上面で検出されており、その時期以前の地業であると考えられる。

この層を古代の地業と考えると、１区と２区の間に建物の痕跡が見つかる可能性があろう。また、２区の北東側の調査区外との境界付近に径80㎝程の柱穴と推定できるピットが２間以上並ぶ。詳細は不明であるが、２区の東側に掘立柱建物が存在した可能性が高い。

その他２区の北西側の整地層以外の場所にも柱穴が並ぶ可能性があり、掘立柱建物が複数並んでいた景観が想像できる。

今後さらに、出土した古代の遺構の分析だけでなく、江戸時代の遺構から出土した古代の遺物の分析を行い、少しでも古代の寺院関連遺跡の年代や性格が解明できればと考えている。

第２項　江戸時代

古い遺構は17世紀前半から後半の時期と推定する２区の北側や３区には1.2 ～ 1.4m程の大きさで、深さ50 ～ 60㎝以上の円形の土坑がある。17世紀中頃を中心とする土坑は２区211-SK等があり、絵唐津や胎土目の皿等が出土している。他にも２区170-SK･169-SK･175-SK･172-SK･209-SK、３区77-SK･70-SK等がその時期に属す可能性がある。２区111-SKの古相、２区97b-SKの古相の遺物がこの時期に該当すると考えられる。

それからやや時期を下る遺構は、２区150-SK等がある。内野山窯系の銅緑釉の皿を指標とし、17世紀後半から18世紀中葉までの時期と推定できる。

他の遺構としては、３区65-SK、２区201-SK、209-SK、38-SK等と考えられる。２区97b-SKの新相、135-SKの古相、111-SKの中相の遺物群等もこの時期に該当すると考えられる。

時期的には希薄であるが、次に来るのが、「くらわんか手」磁器の大量生産時代の18世紀中葉から19世紀前後の時期が該当する。２区106-SK新相・135-SK新相や１区09-SK古相等がこの時期に該当する。調査区では、この時期にあたる遺物の出土数は少ない。

ゴミ捨て穴と推定できる遺構が調査区内で多数見つかっ

ている。

1区から2区の南側にかけては、大きさ約1m・深さ1m以上のものが多い。中には袋状に掘られた土坑もみられる。

出土遺物から江戸時代後期（19世紀代）から明治時代にかけての遺物が多く、その時代のゴミ捨て穴の可能性が高い。

代表する遺構が1区09-SKや2区91-SKである。特に91-SKは、一部1700年代のものも含むが、端反（はぞり）椀や蓋付椀、茶椀のほか、土瓶（どびん）・小甕・角皿・鉢等多様な器種があり、中には熊本市の松尾焼や小代焼の土瓶も出土している。磁器は天草陶石を用いたものも多く、3足のハリ目が残存し、高台の外側には釉薬の溜まりが青色を帯びる等、時期的に見て熊本県宇土市の網田（おうだ）焼や天草高浜の磁器の特徴を持つものが確認されている。地元産の陶磁器が多数流通している可能性が高い。
薄手の杯等は明治時代まで下る可能性がある。2区97-SKの他、1区の大部分の土坑がこの時期である。

一方、2区の中央や北側が貯蔵エリアとして利用されたと考えている。凝灰岩（ぎょうかいがん;灰石）を使って円形に組んだ貯蔵穴も見つかっている。

3区の南側や2区の北側には小規模な建物の礎石や、礎石の根石等が見つかっており、何棟か建物が建っていたと考えられる。しかし、現在のところ、ちゃんと復元するには至っていない。もう少し遺物の整理をする必要がある。

その他の出土遺物には、寛永通宝（かんえいつうほう）、柄鏡（えかがみ）、かんざし、刀の切羽（せっぱ）、煙管（きせる）、灯火具、碁石、かすがいや紅皿（化粧道具）、唐津焼系陶器や伊万里焼の染付等に該当する時期の天目茶椀、小代（しょうだい）焼、素焼きの土器（土師器;はじき）の皿、滴水瓦（てきすいかわら）、巴文（ともえもん）の軒丸瓦等様々なものがある。

第3項　近代以降

明治時代以降の建物の基礎や石組みの貯蔵施設、ゴミ捨て穴、貯蔵穴、瓦溜、防空壕？等が検出されている。中には江戸時代に使用され明治時代以降に埋められたゴミ穴や、再利用した貯蔵施設等もあると考えている。

礫を溝状に敷き詰めて基礎に使用したと考えられる遺構も検出している。

また、西南戦争ないし、太平洋戦争で焼けたと思われる焼土も一部で見られる。

熊本地方気象台の当初の建物は、位置図によると、1区は熊本地方気象台旧1号宿舎の中にあたる。2区は北側の一部3m程が熊本地方気象台旧倉庫部分にあたる。3区は北側約1.5mが熊本地方気象台旧車庫にあたる。

第3節　基本土層

基本的には、Ⅰa層は表土（山砂）、Ⅰb層は灰褐色シルト（7.5YR4/2）、Ⅱ層は黄褐色ローム（明褐色粘質土）で現代に近い整地層である。コンクリート基礎の整地面と考えられ、昭和40年代以前の面と考えられる。

Ⅲ層は褐色シルト（7.5YR4/2;赤色礫・焼土混）で近代の遺物包含層である。大半の遺構はこの面を除去した段階で検出できたものである。この層の年代が鍵となる。この層が整地される際に近世の生活面（遺構面）が削平されたと考えられ、遺構の時期を検出面では分けられないと推定される。

Ⅳ層は黄褐色粘質土いわゆるローム層である。（ID-1による。）

2区の北西側検出の163-SK周辺に黒褐色整地層（包含層4'層）が存在する。出土遺物からは奈良時代後半から平安時代前期と推測する。

第4節　弥生時代の遺物

第1項　概要

本調査区から出土した弥生時代の遺物はごくわずかである。周辺を調査した熊本市教育委員会は、弥生時代後期を中心とする集落を発見し、弥生時代の遺跡の範囲に本調査区のあたりも含まれると想定した。今回顕著な遺構を検出していない。ただ、遺構が存在しないのではなく、古代以来の開発により、造成で削平され様相が不明になったと考えられる。

この地が周辺で小高く、遺物の状況から見て弥生時代後期後葉から終末にかけての集落が存在していた可能性がある。おそらく、古代に寺院の造営にあたり整地された際に、竪穴建物等が削平されたと考える。

第2項　遺物包含層及び弥生時代以降の遺構から出土した遺物

弥生土器（図60、Ph.10･16）

図60-1～7は甕である。1は2区209-SKからの出土で、ナデ調整である。口縁部のみの小片のため詳細は不明である。時期を特定するには不十分な資料だが、おそらく弥生時代後期後半にあたると思われる。

2は2区包含層4'層（黒褐色整地層）出土の甕頸部である。復原すると直径15.0㎝未満の小型である。胴部外面はハケ調整で、頸部外面は丁寧なナデで内面はナデである。時期は弥生時代後期中葉から後葉と思われる。

3は2区135-SKからの出土である。器面摩耗で調整不明瞭であるが、横方向のナデ調整である。頸部のみの小片だが、弥生時代後期後半にあたるものであろう。

4は2区包含層4'層（黒褐色整地層）出土の甕頸部であ

る。胴部外面は平行タタキ、内面はハケ調整、頸部内外面は丁寧なナデ調整を施す。時期は弥生時代後期後葉から終末と思われる。

5は2区85b-SKからの出土で脚部である。外面は縦方向のハケ調整で、胴部と脚部の接合面ではハケのちナデで調整している。胴内底部ではハケのちナデ調整、脚天井部は指ナデで平坦である。

6は1区11-SK出土の脚部である。外面は摩耗が著しいため調整不明瞭であるが､ハケのちナデ調整をしており、胴部と脚部の接合面ではナデ調整をしている。胴内底部はナデ、脚部ではハケ調整で脚天井部に砂が付着し、平坦である。胴部が欠損しているため詳細は不明である。

7は2区168-SK出土の脚端部である。内外面ともナデ調整で、全体的に被熱しており一部スス付着である。5～7は脚部が長脚化していることから弥生時代後期後半と考えられる。

8は2区230-SP出土の鉢である。外面は平行タタキ調整、内面はナデ調整している。口縁端部を丁寧にナデているが口縁部のみの小片のため詳細は不明で時期は弥生時代後期後半であろう。

9～13は壷である。9は2区包含層4'層(黒褐色整地層)出土の口縁部である｡外面は口縁部から頸部にかけてナデ、胴部はハケで､内面はナデである。口縁部は直線的に伸び、短い。時期は弥生時代後期後半と考えられる。

10は2区35-SK出土の口縁部である。調整は器面摩耗につき不明瞭だが、外面から口縁端部にかけてナデ調整、内面はハケ調整を施している。

11は2区169-SK出土の口縁部だが端部は欠損。内外面とも器面摩耗により調整不明瞭である。

10、11は二重口縁壷で弥生時代後期中葉以降に白川流域に特徴的な壷である。時期は弥生時代後期後葉～終末を中心とする時期と考えられる。

12は2区135-SK出土の口縁部である。調整はナデで内面一部指おさえが見られる。頸部には一条の突帯が施される。時期は弥生時代後期中葉以降と考えられる。

13は2区包含層4'層（黒褐色整地層）出土の頸部で一条突帯を施す。内外面とも器面摩耗により調整不明瞭であるが、頸部外面、突帯部分は丁寧なナデを施す。時期は弥生時代後期にあたると考えられる。

14、15は高坏である。14は2区154-SK出土の坏部である。調整は内外面ともナデである。口縁部欠損のため詳細は不明だが、坏部は緩く内傾し、直線的に口縁部へと伸びていく。

15は2区212-SP出土の肩部である。内外面とも器面摩耗のため調整不明瞭であるが､外面はヘラミガキを施し、内面はナデ調整である。脚部は裾部にかけて広がりラッパ形を呈す。小片であったため、穿孔が何孔開いているかは不明である。

14、15の特徴から弥生時代後期後葉から終末と考えられる。

小結　遺物の特徴から時期を分けると、弥生時代後期中葉以降、弥生時代後期後葉～末の2つに分けられる。

弥生時代後期中葉からの形式を持つものは北側で出土している。N0E0からN0W5に分布する。

弥生時代後期後葉～末にかけては出土量が増加する。北側に集中するがほぼ中央からも出土している。遺物は甕片が多い。1点だけ鉢片が出土している。N0W5内に甕2点、鉢が1点、N0E0内に甕1点、S5W5内に甕1点、S10W5内に甕1点分布している。

高杯・壷はほとんどが北側で出土しており一点のみ南東で出土している。N0W5内に壷3点、高杯1点、N0W10内に高杯1点、S10W5内に壷1点分布している。

これらの遺物から、時期の主体は後期後葉から終末にあたると考えられる。しかし、どれも遺構に伴うものではなく流れ込みである。

しかしながら、遺物は時期に関わらず、ほとんどがN0W5、N0E0つまり黒褐色整地層等2区の北側から出土している。

また、出土した遺物は小片のみで、全体の器形（形式）を復原できるものがなかったが、甕・壷・鉢・高杯等各器種が揃って出土している。

黒色整地層や遺物包含層等の削平を考えると2区と1区の間や調査区の西側等周辺に建物跡等があったと可能性がある。

つまり、弥生時代の集落が存在していたと推測できる。

（藤島）

第5節　古代の遺構

第1項　概要

近世遺構の貯蔵穴やゴミ捨て穴等に壊されており、不明な部分があるが、1区18-SK等古い瓦が出土する遺構や2区163-SK等古代の土師器が出土する遺構のほか、3区では掘立柱建物を構成していたと考えられる柱穴が数基、2区の東側にも柱列を検出した。また、建物の年代は柱穴や近世に撹乱された土坑内等から出土した遺物から、7世紀中葉から9世紀と考えられる。

第2項　3区の遺構

⑴　掘立柱建物　（図16･21、Ph.1）

概要　古代の遺物包含層が削平されており、柱穴の年代を推定するのは困難である。

3基の柱穴は60㎝以上の柱の掘り方を持つもので、古

代にさかのぼる可能性が高い。

柱の深さも、78-SPは掘り方の形状はやや隅丸方形で一辺は約90㎝で、深さ約75㎝である。

以下個々に、詳説する。

⑵ **柱穴**

78-SP（図16･21･61、Ph.1･20）

位置 3区のN15W5に位置する。

構造 掘り方の形状はやや隅丸方形で一辺は約90㎝で、深さ約75㎝である。東側に深さ40㎝の所に段を持つ。柱痕跡は幅14㎝程観察できた。

遺物出土状況 古代土師器の杯(図61-1)(図61-2)が出土している。

66-SK(SP)（図16･21、Ph.1）

位置 3区のN10E0に位置する。東側は調査区外に伸びる。

構造 掘り方の形状はやや隅丸方形で一辺は約75㎝で、深さ約75㎝である。南側に深さ40㎝の所に段を持つ。柱痕跡は幅14㎝程観察できた。柱の埋土は黒褐色～暗褐色系の土で粘質が強く、しまりがある。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

100-SP（図16･21、Ph.1）

位置 3区のN15E0に位置する。

構造 掘り方の形状はやや隅丸方形で一辺は約60㎝以上で、深さ約20㎝である。65-SK（近世遺構）に半分ほど壊されている。

柱痕跡は幅15㎝程観察できた。

遺物出土状況 掘り方から布目瓦が出土している。

小結 3基の比較的規模の大きい柱穴を検出したが、そのうち、78-SPと66-SPには掘り方の規模や深さ等に共通点が多い。この2基の柱穴が同一の建物と仮定すると建物方向は、地形や道路等から推定するとほぼ南北軸を向く可能性が高いと考えられる。

そうすると、65-SKの中央やや北側に柱穴を想定すると柱間8尺を測る側柱建物の可能性が考えられよう。

ただし、2基の柱穴だけでは推定の域をでないため、周辺の確認調査等が必要となろう。

建物の時期については、近世の土坑ではあるが、65-SKから出土の遺物が参考になる。

また、100-SPからは布目瓦が出土しており、別のやや時期の離れた建物の想定が可能となる。

第3項 2区の遺構

⑴ **黒褐色整地層（遺物包含層4'層）**（Ph.7･71･72･74）

位置 3区に古代と推定される柱穴を検出したが、2区の北西側（N0W10）に黒褐色の硬くしまる整地層（247-SK他）を確認した。

構造 上部は焼土層整地層に削平されており、また、北側が調査区外であり、厚さは不明であるが、北側の深い部分で75㎝以上残存する。北側及び西側の構造が不明であるが、幅約1.1m、長さ3.7m以上の不整形の整地層である。一部遺物包含層4層として遺物を取り上げている。

断面を観察したが、分層できず、下面に凹凸を持つ。

遺物出土状況 2区の北西隅を中心に瓦片及び少量の土師器が出土している。

瓦（軒丸瓦）が1点出土している。図73-1は軒丸瓦の下部の破片で外区の周縁部の一部である。外区の周縁の幅は約3㎝である。凹線状の周縁で、白鳳期までさかのぼる可能性がある。

平瓦は凸面に縄目タタキを持つ。凹面に布目と模骨痕が残存するものと、残存しないものがある。

また、少量ながら、凸面に格子目タタキ、内面に布目と模骨痕が残存するものも存在する。

図74-3･5･6（Ph.74）は平瓦で、凹面は布目の痕跡、凸面は縄目タタキである。タタキ板は長さ10㎝、幅4㎝程のタタキ面が残存している。厚さ1.3～1.6㎝と薄手のもの（図73-6）と2.2～2.3㎝（図74-3・5・6）の厚手のものがある。

いずれの布目も細かい部分で8本/㎝､荒い部分で5本/㎝

図74-1･2･4は丸瓦と見られるもので、瓦の厚さは平瓦と同様に2分できる。

図74-1（Ph.73）は丸瓦で、縄紐の痕跡がある。吊り下げ痕か、粘土を型から外しやすいようにするための縄の痕跡と推定できる。

図74-2は丸瓦で、外面に縄目タタキを消すのにヘラを使用している可能性がある。砂粒の動きが見え、削り状の痕跡も伺える。

図70-1(Ph.71-9)は鴟尾かと考えられる破片である。黒色整地層と164-SK（163/153b-SKと同一）と接合している部分である。筒状の部分が小さく、大寺院のものと比べるとミニチュアとも言える。形式的には法輪寺のような鴟尾の小形品と考えたい。

図73-4・5・6（Ph.72-1・4・5）は格子目タタキの平瓦で、ほぼ直角の格子目タタキ（直行平行の格子目タタキ）を凸面に施している。小片のため単位は不明である。凹面には布目痕を残す。縄目タタキのものより1㎝あたり1本から2本布糸が多く、細かい。また、小片のため断定できないが、模骨痕を残す。

県内の調査例を考えると平原瓦窯跡等の類例がある。

黒色整地層出土の直行平行格子目タタキは『平原瓦窯址』のタタキ板復原・タタキ目集成図のＥ型式に相当する。

なお、図73-3（Ph.72-2）は斜格子目タタキの平瓦である。『平原瓦窯址』のタタキ板復原・タタキ目集成図の０型式に相当する。

小結　断面の形状を見ると逆台形状で調査区に伸びるため範囲は明確でないが、断面形状等を見ると4m×6m以上の規模の整地層と考えられる。また、底面に凹凸があることから、スコップ等の工具で土を入れ変えた可能性がある。整地層の下部は土坑状に凹凸を持ち人為的に土を入れ替えていると推定される。

そうした推定が正しければ、建物を建てる際の地業の可能性を想定したい。

時期的には、整地層内に出土する瓦及び153a-SK、153b-SK、163(164)-SKの年代が問題となる。

時期的には、凸面は縄目タタキで、凹面は布目痕を残すが、模骨痕がなく１枚板に粘土板を押し付けたと考えられる形式と、凸面が直行格子目タタキ、もしくは斜格子目タタキで、凹面にやや細かい布目痕を残し、模骨痕が遺存する形式に大別できる。

前者は１枚板作りで奈良時代中葉以降に一般的に制作された技法であり、後者は粘土紐か粘土板かは問題になるが、桶巻作りと考えられ、奈良時代中葉以前の形式である。

今回出土した瓦について、後者はいずれも摩滅しており、明らかに整地層以前に使用されたものである。後者も整地層内の出土であるが、摩滅は激しくない。奈良時代中葉頃まであった建物等で使用された建物を壊して整地された可能性がある。

(2)　土坑

163-SK　（図16･18･62･71･79、Ph.11･17･71･75）

位置　２区N0W5に位置する。南側は103-SK（撹乱）、北東側は98-SBのP7に壊されている。

構造　長軸約150㎝以上、短軸75㎝以上を測る。深さ約30㎝で断面は逆台形状である。

埋土は灰褐色粘質土混暗褐色シルトである。

遺物出土状況　153a・b-SKに重複して出土しており、153a-SKと大きくプランが変わらないため、伴う遺物は不明である。

遺物

土器　図62-9(Ph.17)は回転台土師器の杯で、口縁部が上方に広がる。図62-11･12･13(Ph.17)は器高が約3㎝、口径が10㎝前後で底部の胴部との境界の調整がなされていない。太宰府編年ⅥＢ～Ⅶ期併行期と推定できる。

瓦　図71-3(Ph.71)は軒平瓦である。偏行唐草文で上の外区に珠文、外区側縁と外区下部には幅約9㎜の面違鋸歯文が施されている。瓦当部分には外側が下方向に唐草が巻時計回りに巻く。内側の唐草文は上方に時計と反対側に巻く。また、瓦当部分の范に傷があるためか粘土の押しつけの段か不明であるが左下がりの斜め方向に段ができてしまっている。

本来の瓦当部分は2.4㎝程度、丸瓦部分の厚さも2.4㎝程度で厚み1.8㎝程度の粘土を長さ7.5㎝程のものを継ぎ足して丸瓦と瓦当を接合している。凹面は瓦当部分の軒部分から幅5㎝程は瓦当部分に向かって丁寧に縦方向にナデて布目の痕跡を消している。その他の凹面には９～10本/㎝の糸の布目痕が遺存する。また幅約5㎝程の縦方向の段差があり、模骨痕と推定できる。

図79-3(Ph.75)は丸瓦で、凸面に縄目タタキが施された後、横方向にナデて消しているが、端部から7㎝程の間は縄目タタキが顕著に残る。タタキ板が当たっている部分は5㎝四方程と推定できる。凹面は紐の痕跡か、布の巻き込み痕跡か判断は難しいが、両方が遺存していると考えられる。

断面を観察すると、内側に白い粘土が斜めに入っており、粘土紐を積み上げた痕跡の可能性がある。

端部の厚みが2㎝あり、反対の厚さは1.6㎝、分割界線に粘土を足して分割時に折り取っている可能性がある。

図79-1(Ph.75-6)は丸瓦で、凸面部分を縦方向に丁寧にタタキ目を消している。幅約2㎝程の多角形状になっているので、ヘラ等の工具を使用していると考えられる。

凹面は10本/㎝の布の糸で非常に細かい。破片で詳細は不明であるが、5㎝程の縦方向の緩やかな段がある。布のたわみや粘土の隆起等の可能性もあるが、模骨痕とも考えられる。粘土紐積み上げ痕は不明である。

図75-3(Ph.75-5)は平瓦で、凸面は縄目タタキで5㎝程のタタキ痕９本/3㎝程の縄目間隔である。

凹面は７本/㎝とやや荒めの布目痕が見られる。模骨痕は確認できず、粘土紐の積み上げ痕も確認できない。

図72-9(Ph.75-2)は丸瓦の破片で、玉縁の部分が欠損しているが、玉縁型であることは確認できる。凸面は横方向や縦方向に丁寧にナデてタタキ痕を消している。

小結　整地層の南東隅にあたる。時期的には、153b-SKで出土した土師器の型式から９世紀前半以前と推定できる。

建物の地鎮等のための遺構や建物に付随する遺構の可能性もある。

瓦は桶巻作りのものと１枚作りのものとが混在している。黒褐色整地層とほぼ似たような出土状況である。

153a-SK(163-SK)（図16･17、Ph.2）

位置　２区N0W5に位置する。南側は103-SK（撹乱）、

北東側は98-SBのP7に壊されている。

構造　平面形は隅丸方形を呈する。長軸約150㎝以上、短軸60㎝以上を測る。深さ約30㎝で断面は逆台形状に近い。

埋土には下層に黄褐色シルト層を含む。上層には褐色粘質土混暗褐色シルトである。

上層を153a-SK、下層を163-SKとして検出している。

遺物出土状況　上層に瓦が出土している。下層には遺物を含まない。

瓦は凸面に縄目タタキや格子目タタキ及びナデ調整で、凹面は布目圧痕が残存する。平面出土状況図では6点以上は出土しているがうまく検出できなったため、153b-SKとして取り上げられるべきものも存在すると考えられる。

小結　整地層の南東隅にあたる。時期的には、153b-SKとほぼ変わらないか、やや古い可能性がある。153b-SK出土土師器の型式から9世紀前半以前と推定できる。163-SKの掘り直しの土坑の可能性もある。用途としては、建物の地鎮等のための遺構や建物に伴う遺構の可能性もある。

153b-SK（図16･18、Ph.3）

位置　2区N0W5に位置する。南側は103-SK（撹乱）、北東側は98-SBのP7に壊されている。

構造　163-SKの最上層とも考えられる。長軸約1m以上の円形もしくは隅丸方形のプランである。短軸60㎝以上を測る。深さ約20㎝で断面は緩やかな皿状である。

埋土には下層に黄褐色シルト層を含む。上層は灰褐色粘質土混暗褐色シルトである。

遺物出土状況　上層に瓦及び土師器杯が出土している。3つに重複して検出した遺構であるが、遺物はほとんどこの遺構に属すると推定できる。土師器杯は内外面に焼成を受けているのか煤がつく。下層には遺物を含まない。一部下層を163-SKとして取り上げられているものもある。

瓦は凸面に縄目タタキ及びナデ調整で、凹面は布目圧痕が残存する。丸瓦及び平瓦である。20点以上は出土しているが瓦片が大部分である。基本的には廃棄されていると考えられる。焼成を受けている様子は顕著ではない。

小結　整地層の南東隅にあたる。時期的には、中層で出土した土師器の型式から9世紀前半と推定できる。

建物の廃棄に伴う土坑の可能性もある。

⑶　柱穴

112-SK　（図16･28･36･72･76･79、Ph.65･75･84）

位置　2区S5E0に位置する。上層を145・146-SKに壊されている。当初は切り合いを反対に考えていたが、埋土のしまり具合等を考えると土層から考えて古代にさかのぼると考えたい。

構造　長軸約80㎝、短軸20㎝以上を測る。深さ45㎝で、断面は逆台形状である。深さは東側大部分が調査区外のため、20㎝以上は深くなると考えられる。

埋土は堅緻で暗褐色と黒褐色系の土を5㎝程ずつ固めた様な層で版築の可能性がある。

遺物出土状況　図72-2は複弁蓮華文の軒丸瓦で、図76-1は凸面には格子目タタキ痕、凹面にはかすかに布目痕が残る。また、丸瓦(図79-3･4･6･7･9)が出土している。

小結　埋土のしまり具合や下場の形状から考えて、掘立柱建物に伴う柱穴と推定できる。

243-SK　（図16･28･35、Ph.2･3）

位置　1区S5E0に位置する。240-SKに南側一部を壊されている。埋土のしまり具合や土層から考えて古代にさかのぼると考えたい。

構造　長軸約80㎝、短軸25㎝以上を測る。深さ55㎝で断面は逆台形状である。東側大部分が調査区外のため、深さはもう少し深くなると考えられる。

埋土は堅緻で暗褐色と黒褐色系の土を5㎝程ずつ固めた様な層位である。

遺物出土状況　遺物は出土していない。

小結　埋土のしまり具合や下場の形状から考えて、掘立柱建物に伴う柱穴と推定できる。

116-SK　（図16･36、Ph.2）

位置　2区S5E0に位置する。149-SKに南側一部を壊されている。東側が調査区外で十分に検出できていない。

構造　長軸約90㎝、短軸15㎝以上を測る。深さ15㎝で断面は逆台形状である。東側大部分が調査区外のため、構造の詳細は不明である。

埋土は暗褐色でしまりがある。径約15㎝の19世紀頃と推定できる柱穴が撹乱として入っている。時期を決定できる要素が希薄であるが、位置や規模から考えて古代にさかのぼる可能性を考えておきたい。

遺物出土状況　遺物は出土していない。

小結　位置や規模から考えて古代にさかのぼる掘立柱建物に伴う柱穴の可能性を指摘しておきたい。

第4項　1区の遺構

概要　近世後期～近代の遺構が重複して検出され、古代の遺構と考えられるものは1基の土坑しか検出できなかった。

ただ、122-SK等は近世後期と推定したが、埋土のしまりもあり、古代にさかのぼる可能性もあるかもしれない。

遺物包含層には古代の瓦等出土しており、3区や2区北側周辺だけでなく、1区周辺に遺構が広がっていたと推定できる。

⑴　土坑

18－SK　（図16･20･43･44･45･78･82、Ph.85･86･91）

位置　1区S20W5に位置する。南東部を25－SPに、北西部を17－SKに壊されている。

構造　長軸90㎝、短軸80㎝を測る。深さ70㎝で断面は逆台形状である。

遺物　図78－3（Ph.85－1）は平瓦で、凸面が斜格子目タタキで、凹面に布目の痕跡が遺存する。布目の糸は8本/㎝程で細かい。凸面のタタキの一部がナデ調整で消されている。凹面には5㎝幅程の模骨痕が遺存する。

図78－1（Ph.85－3）も図78－3と同様である。黄灰色を呈し、焼成は良好である。凸面の斜格子目タタキは、5㎝幅程の方形のタタキ板が当たっている部分であることが観察できる。凹面の模骨の痕跡も5㎝程の幅で段差があり、模骨痕と推定される。

図82－3（Ph.85－7）は丸瓦の小さくなった玉縁の部分である。凸面の端部に粘土がたまり一部が折り返されている。途中に沈線を横方向に残す。凹面には紐痕跡が縦から斜め方向に遺存する。側面は丸瓦の本体部分の方へ面取りしている。凹面の布目痕は玉縁の先端から幅2㎝程の間に布目痕が変わり、紐の痕跡も明瞭でない。（Ph.85－8）も凸面に端部から5㎝のところに沈線が施されている。凹面端部も内側に面取りを施している。

（Ph.85－5･6）は平瓦の破片で、凸面が縄目タタキで凹面に布目痕が残る。また、破片であり明確ではないが粘土紐の痕跡のようなものも観察できる。平たく、厚さ1.2㎝のため、熨斗瓦として使用された可能性がある。

遺物出土状況　底面近くの埋土3層下層には10～15㎝の瓦が、底面から30～40㎝の深さの埋土3層上層には20～30㎝の瓦片が出土している。凸面は縄目タタキ及び格子目タタキ及びナデ調整で、凹面は布目圧痕が残存する。

破砕された瓦を捨てられた坑と考えられる。下層に炭化物が出土している。

小結　遺物からは古代と考えられるが、埋土のしまりがなく、遺構としては近世に下る可能性もあることを指摘しておきたい。ゴミ捨て穴と考えられよう。

古代と仮定すると凸面縄目タタキの細片が出土するので、8世紀中葉以降と考えられる。

第5項　古代以外の遺構から出土した瓦

⑴　軒丸瓦

図72－1（Ph.65）は3区の近世の土坑（65－SK）からの出土である。軒丸瓦の軒部分の瓦当で単弁の蓮華文である。中房は珠文が3個遺存している。間弁に珠文が位置するので復原すると中央に珠文1、外側に8つの珠文、間弁8、単弁8の文様構成である。

中房の高さは6㎜と高く、間弁も中房まで入っており大野城等の単弁蓮華文と共通する。ただ、弁の頂部に稜線が入らない。弁の高さも3㎜程度である。

すなわち、新しい要素と古い要素を持っていると考えられる。

熊本県で型式的に一番古い瓦は鞠智城出土瓦である。その次に位置づけられるのは陣内廃寺出土単弁蓮華文瓦や渡鹿A地点出土の単弁蓮華文瓦である。

渡鹿A地点出土遺物等との関連が難しい。

厚さ1.3㎝程の丸瓦に接合していると考えられる。瓦当の裏面は指ナデ調整が明瞭に残る。

図72－2・3(Ph.65)は近世の土坑(2区112･175－SK)からの出土である。複弁蓮華文瓦である。複弁部分はいずれも摩滅して高さは不明である。間弁の高さは3㎜程の高さがある。珠文は間弁と複弁の中央に配置されている。

図72－4（Ph.65）は2区の近世の柱穴(133－SP)からの出土で、図72－2･3(Ph.65)に類似する。丸瓦との接合部の破片である。瓦当部の厚みは1.3㎝と薄く、8㎜程粘土を後ろから足して接合している様子がわかる。

図72－8（Ph.71－6）は2区37－SEから出土している。外区の一部が剥離した破片である。凸線の鋸歯文である瓦当面の幅派2.6㎝と推定できる。瓦当面の中央を作り、丸瓦部分を上に被せて接合していると推定される。

⑵　軒平瓦

図71－4（Ph.73）は2区38－SKからの出土の軒平瓦である。偏行唐草文で上の外区に珠文、外区側縁と外区下部には幅約9㎜の面違鋸歯文が施されている。瓦当部分には外側が下方向に唐草文が巻時計回りに巻く。内側の唐草文は上方に伸び時計と反対側に巻くものと下方向に唐草文が巻時計回りに巻くものがある。また、瓦当部分の范に傷があるか粘土の押しつけの段か不明であるが、左下がりの斜め方向に段ができてしまっている。

本来の瓦当部分は2.4㎜程度、丸瓦部分の厚さも2.4㎜程度で厚み1.8㎝程度の粘土を長さ7.5㎝程のものを継ぎ足して丸瓦と瓦当を接合している。凹面は瓦当部分の軒部分から幅5㎝程は瓦当部分に向かって丁寧に縦方向にナデて布目の痕跡を消している。その他の凹面には9～10本/㎝の糸の布目痕が遺存する。また幅約5㎝程の縦方向の段差があり、模骨痕と推定できる。

図71－7（Ph.71）は77－SK出土の軒平瓦で周縁部は半裁花文である。周縁部（圏線）の上部が7㎜幅、下部は4㎜と細い。瓦当部分は1.3㎜の厚さで厚さ2.3mの平瓦を瓦当上部やや5㎜程下に差し込み、下部に厚さ1.8㎝の粘土板を接合し、上部に5㎜の粘土を幅4㎝程足して接合している。

二本木遺跡群６（県報告第274集）では、半裁花文を２重の凸線で斜めに区画している例が見られる。

⑶　平瓦

図75-１（Ph.83-３）は184-SKからの出土である。厚みは約2.7㎝である。凸面は斜格子目タタキで、凸線幅は3㎜程度である。凹面は布目痕が残る。凸面のタタキが当たっている部分約４～５㎝四方である。摩滅している部分も顕著であるが、一部をナデ消したりしながら10㎝幅程度の曲線に成形している。凹面は幅5㎝程度の模骨痕が遺存するが、一部の布目痕をナデ消しており、緩やかな曲線を描く。

図76-５(Ph.83-２)は２区111-SKからの出土である。凸面に格子目タタキがあるが、格子目の凸線幅１～２㎜と細い。また、格子目が当たる部分も3㎝四方である。厚みは2.5㎝である。胎土に砂粒が多く含まれる。内面には細かいところでも糸の本数が５本/㎝の布目の痕跡が遺存する。5㎝幅の模骨痕が遺存する。

図76-６（Ph.80-７）は２区175-SKからの出土である。凸面の幅3㎝、長さ6㎝程の縄目のタタキ痕が遺存する。凹面は糸の本数が７本/㎝の布目痕が遺存する。模骨痕は明確でないが、5㎝幅程度に布目が乱れている。

⑷　丸瓦

図81-４（Ph.80-６）は２区175-SKからの出土である。厚さ1.3㎝の丸瓦で幅2㎝程度に縦方向にナデているが、その前に縦方向に削り（へらナデ?）を施している。側面は凸面側にヘラ切りしている。

図82-２（Ph.87-３）は１区12-SKからの出土である。凹面に糸の数が10本/㎝の布目痕が遺存する。側面もヘラ切りで凹面側に面取りを施す。厚さは1.8㎝で玉縁の連結部には凹面側に粘土を足して接合しているためか厚くなっている。

第６項　立会調査

⑴　旧塔の解体掘り方調査区

502-SK（図10･12･70、Ph.71・110）

位置　棟掘り方の南側(断面ポイントA-1)から土坑を検出した。

構造　棟解体時の南側の壁面に長さ約40㎝、深さ約25㎝の土坑を検出した。

遺物出土状況　軒平瓦部分１個体を検出した。

遺物　図70-２は軒平瓦で凹面には布目が残存し、模骨痕も残存する。凸面は格子目タタキのちナデで、格子目タタキがかすかに残る。

軒部分の文様については、下部は面違鋸歯文、上部は連珠文で中央には偏行唐草文を配している。

⑵　平成23年度埋設管敷設工事調査区

平成23年12月12日に工事立会に当たって埋蔵文化財発掘調査を実施した。

位置　熊本地方気象台敷地南側で調査３区の東側である。管の埋設のための調査区で幅1m前後である。最終検出面は地表面から約70㎝。調査区の北側はローム面であるが南側に黒色整地層を検出した。

層序　表土の下は白色の砂で旧テニスコートの整地層、その下層には焼土の混じる層が２層あり（黒灰色及び淡灰色)、その下にはややしまりがない褐色シルトがある。その下層には暗褐色シルト（整地層Ⅰ層上層)、やや黄色味を帯びる暗褐色シルト（整地層Ⅰ層下層）で近世面の可能性がある。南側で土坑を２基検出している。

その下が古代の整地層（整地層Ⅱ層）でローム層や凝灰岩が部分的に混じる。古代の丸瓦片が出土している。

柱穴

08-SP（図10･11）

位置　埋設管敷設調査区の南北トレンチ(断面ポイントZ)の北から5m50㎝程のところで検出した。検出面はローム層で上面は削平されている。東側は調査区外に伸びている。

構造　長軸約80㎝、短軸30㎝以上を測る。深さは約60㎝で断面は逆台形状である。底面は約40㎝の大きさである。深さは東側部分が調査区外のため、やや深くなる可能性もある。

柱穴の痕跡は約15㎝で埋土は３層で下層は暗灰褐色シルトで中層はその土にロームブロック混じるもの、上層は暗灰褐色シルトである。

遺物出土状況　時期の判明できる遺物は出土していない。

小結　埋土のしまり具合や下場の形状から考えて、掘立柱建物に伴う柱穴と推定できる。

09-SP（図10･11）

位置　埋設管敷設調査区の南北トレンチ(断面ポイントZ)の北から5m50㎝程のところで検出した。検出面はローム層で上面は削平されている。東側は調査区外に伸びている。08-SPに北側を壊されている。

構造　長軸約70㎝、短軸30㎝以上を測る。深さは約60㎝で、断面は逆台形状である。底面は約40㎝の大きさである。深さは東側部分が調査区外のため、やや深くなる可能性もある。

柱穴の痕跡は約15㎝で埋土は３層で下層は褐色シルトで中層はその土にロームブロック混じるもの、上層は暗褐色シルトやや粘質が強い。

遺物出土状況　時期の判明できる遺物は出土していない。
小結　埋土のしまり具合や下場の形状から考えて、掘立柱建物に伴う柱穴と推定できる。

10-SP（図10･11）
位置　管埋設調査区の南北トレンチ（断面ポイントZ）の北から5m50㎝程のところで検出した。検出面はローム層で上面は削平されている。西側は調査区外に伸びている。
構造　長軸約60㎝、短軸約50㎝を測る。深さは約60㎝で断面は逆台形状である。底面は約40㎝の大きさである。
柱穴の痕跡は約20㎝で埋土は3層で下層は黒褐色粘質土でロームブロックを多量に含む。中層は暗褐色シルトでロームブロック混じる、上層は暗褐色シルトで橙色ブロックを少量含む。
遺物出土状況　時期の判明できる遺物は出土していない。
小結　埋土のしまり具合や下場の形状から考えて、掘立柱建物に伴う柱穴と推定できる。

黒褐色整地層
位置　埋設管工事区の南側に見られる。
構造　厚さ20 ～ 30㎝の黒褐色の硬くしまる整地層を確認した。赤色の粒子や若干の炭が混じる人為的なものと推定できる。上部は整地層Ⅰにより造成される折に若干削平されている可能性が高い。
3区で検出された黒褐色整地層に比べるとしまりは弱く､下面の凹凸が断面を観察している限りでは見られない。
遺物出土状況　土師器片と丸瓦が出土している。
瓦　丸瓦は内面に布目が残存する。
図73-2（Ph.72）は丸瓦の小片で内面に布目が確認できる。
小結　黒褐色整地層上面では11-SPを確認したが、樹痕等により上層が撹乱されており、明確でない。
整地層の断面観察や分布及び遺物の混入状況から考えて古代の整地層と考えられる。

まとめ　この調査区の南側は近世中期に春木坂が作られたいわゆる丘陵の末端である。当時の面も南側に傾斜しており、高い部分を削って整地したことは容易に推測できる。近接して08・09・10-SPを検出したことにより、少なくとも古代には2時期の建物が存在したことが判明した。3区では18-SKに古代の瓦が細片ではあるが、一定量出土している。
3区18-SKからは凸面は縄目タタキだけでなく、格子目タタキで、凹面に模骨痕が認められるものもある。柱の掘り方も2区で推定された柱穴より整然とした掘り方ではない。8世紀中葉以前の建物が存在した可能性も指摘しておきたい。

⑶　平成24年度埋設管敷設工事調査区
遠隔露場の中心部の埋設管の撤去・埋設工事に立ち会った。
芝生の下は山砂で黒灰色シルト層の下が黄褐色粘質土の整地層でその下が灰褐色シルト層である。この層の下で近世の土坑が検出できた。中央のハンドホールから東に3m程のところで1点凹面格子目タタキの平瓦が出土しているのみである。
掘削は旧埋設管の掘り方の範囲に収まる場合が多いが中央ハンドホールから北へ屈曲しながら伸びる管路から4つの土坑が重なっている状況も見られた。
旧温室度計撤去の部分も土坑がある状況であった。この様相は2区の様相に近く、近世の遺構で古代の遺構が壊されている可能性も高い。ただし、黄褐色粘質土の混じるしまった層もあり、切り合いからも古代の遺構の可能性もある。

第6節　中世後期の遺構
第1項　概要
今回の調査区で中世の遺構と断定できるものはない。ただ、中国の輸入陶磁器である青磁の破片（Ph.11-15）が1点出土している。細かい型式を推定できる資料ではない。他の瓦質土器や瓦も確実に中世後期にさかのぼれるものではない。
立地から考えると周辺で一番高い箇所であるため、周辺になんらかの遺構が存在した可能性がある。
中世後期の生活面及びそれに伴う遺物は東側ないし西側に検出される可能性のみ指摘しておきたい。

第7節　近世以降の遺構と遺物
第1項　概要
大きく分けて4時期に区分される。①古い唐津系の陶器を伴う17世紀代の遺構、②唐津系の見込みが釉剥ぎされ、銅緑釉薬を掛けた椀や皿で佐賀県の嬉野の内野山窯系の特徴を持つもので17世紀後半から18世紀前半を中心とするもの、③くらわんか手と呼ばれる波佐見等で焼かれる肥前系の時期の時代、④広東椀や端反椀を伴う時期のもので18世紀から19世紀にかけてのものである。

第2項　3区の調査
⑴　土坑
77-SK（図22･24･27･61･64･83･84･85･87･91、Ph.1･17･14 ～ 25･63･69･96･97･100）
位置　3区の西側N15W5に位置する。151-SK及び撹乱に壊されている。70-SKを壊している。67-SEに南東側の一部を壊されている。
構造　掘り方は楕円形を呈する。長軸径約1.8m、短軸約

1.1mで、断面は皿状を呈する。検出面からの深さは約10㎝である。

埋土は2層に分けられる。埋土1層は黄褐色ローム混灰褐色シルトで硬くしまりがある。埋土2層は灰褐色シルト7.5YR4/2硬くしまりがある土である。埋土3層はにぶい褐色シルト7.5YR5/3である。70-SKの上層部の可能性があるが、10～30㎝の丸石や礫と一緒に瓦や陶磁器類が多量に出土しているため、別遺構として扱う。

遺物出土状況　埋土上層から径15～30㎝の円礫及び角礫とともに瓦が出土している。その隙間に陶磁器は少量であるが出土している。近世の棟瓦も出土している。

見込みに砂目を持つ淡橙色の溝縁皿と灰色の溝縁皿の他、鉄釉薬の抹茶椀等が出土している。

遺物

陶磁器

図64-4（Ph.24）は黒釉の椀で抹茶椀と思われる。図64-5･6･7（Ph.22･23･25）は溝縁皿で見込みと高台に砂目が付着する。図64-7（Ph.25）は、三日月高台で梅花皮（かいらぎ）が見られる。

図64-5（Ph.23）は溝縁皿で底部は三日月高台で3カ所に砂目が残存する。内面見込みにも3カ所砂目が残存する。

図64-6（Ph.22）も溝縁皿で底部は三日月高台で3カ所に砂目が残存する。内面見込みにも3カ所砂目が残存する。

焼成が酸化焼成になり、橙色を呈する。

図64-2（Ph.14）は土師器の皿で、底部から体部の変換点の部分が未調整で、底部は糸切調整である。口縁部は丸みを帯び、内側にはつまみあげていない。図64-3は土師器の皿で、底部から体部の変換点の部分が未調整で、底部は糸切調整である。口縁端部はやや上につまみ上げている。器高が2.4㎝と深く、杯の形態である。

図64-5（Ph.23-2）は見込みに砂目の痕跡が3カ所残存する。底部にも同様の痕跡が残存する。釉は白色である。

Ph.20-2はすり鉢の破片である。摩滅が激しい。

Ph.24-4は猪口と推定でき、混入品の可能性がある。

鉄器

図87-3（Ph.100）は9寸釘で、基部の厚さが5㎜程度である。先端部2.5㎝が折れ曲がる。

図87-5･6（Ph.100）は6寸釘と推定できる。頭部はT字形で先端部は使用により1.5㎝程屈曲している。7.5㎝程度のものを固定していたと考えられる。

図87-8･9（Ph.100）は1寸半の釘である。図87-8（Ph.100）は基部幅5㎜と図87-8（Ph100）に比較して太い。いずれも約3㎝付近で屈曲していることから厚さ3㎝程のものを固定するのに使用されたと推定できる。

図87-15は釘等の先端部と考えられるが幅1.5㎜と細い。針やピン等の用途も考えられよう。

まとめ　遺物の出土状況から70-SKがある程度埋まった段階で南東側から廃棄された状況と考えられる。

70-SK（図22･26･61･64･84･85･87･91、Ph.1･17･14･25･63･70･97･99･100・108）

位置　3区の西側N15W5に位置する。81-SKを壊している。77-SKに南側上層部が壊されている。

構造　掘り方は楕円形を呈する。長軸径約1.2mで、短軸85㎝、深さは南側がやや浅いW字状を呈する。切り合い関係があるような断面であるが、⑤層が南から流れ込むように堆積しており、当初が貯蔵穴等の用途であり、ゴミ捨て穴等の用途に変質した可能性がある。検出面からの深さは浅い所で70㎝、深い所で約90㎝である。

埋土は6層に分けられる。埋土1層は黄褐色ローム混灰褐色シルトで硬くしまりがある。埋土2層は灰褐色シルト7.5YR4/2硬くしまりがある土である。77-SKの上層部の可能性があるが、10～30㎝の丸石や礫と一緒に瓦や陶磁器類が多量に出土しているため、別遺構として扱う。

遺物出土状況　埋土上層から径15～30㎝の円礫及び角礫とともに瓦が出土している。その隙間に陶磁器は少量であるが、出土している。磁器の人形や近世の棟瓦も出土している。

遺物

陶磁器

Ph.21-3は肥前系陶器である。胴部付近で屈曲をし、口縁端部が上方につまみ上げられている。

Ph.21-1は口縁部付近のみ灰釉が掛けられ、胴部下半は削りによる成形である。破片であるが、内面に胎土目が2カ所確認できる。

図64-9（Ph.14）は土師器の皿で糸切調整である。底部調整はなく口縁部はやや上方につまみ上げられている。底部内面の形状が平坦面をつくりだしていない。

図64-10（Ph.25）は褐釉陶器の甕で口縁部に胎土目の痕跡が残存する。口縁部は肥厚して端部が平坦である。肩部内面に同心円文タタキが残存する。

人形

Ph.108-4は高麗聖人と考えられる。高さ4.5㎝で白磁であるが顔の表現は鉄釉で手捻り中心に成形している。顔の部分は型にあてている可能性がある。背中には径8㎜の穿孔が穿たれている。高さ4.6㎝、厚み1.6㎝である。灯芯押と推定できる。類例では1650年代を中心に制作されている。

鉄器

図86-5（Ph.99）は刀子で基部が欠損している。刃部最大幅1.6㎝で厚みは3～4㎜、長さは12㎝以上を測り20㎝程度のものと推定される。

図86-7（Ph.99）の器種の認定は困難であるが、基部

の厚みが5㎜で、刃部の厚さが3㎜程のやりがんなが折れているものとして推定したい。基部が反っているのが特徴である。

図86-8（Ph.99）は径約1㎝の円形の頭部を持つもので頭部には片側から穿孔が施されており、約1㎜の糸や紐や針金等が通る。

図86-18（Ph.99）は幅7㎜の釘に屈曲した厚さ1㎜に満たない鉄板が付着している形状で蝶番のような用途が考えられるが、明確でない。

図86-9･11（PH.99）は3寸釘と推定できる。基部の幅は6～7㎜である。頭部はT字形である。

図86-10･12･13（Ph.99）は2寸程度の長さの釘で基部の幅は4～5㎜である。頭部はT字形である。

65-SKと同様に大きく分けて2種類の釘に分類される。

図86-6（Ph.99）は刀子で全長は20㎝程度と推定できる。刃部の基部側は3㎜以上で厚みがある。

青銅器

図87-1（Ph.97）は柄鏡である。圏線に桔梗及び梅の紋が浮かび上がっている。

図86-4（Ph.97）は刀子の鞘と考えられる。背部が切り込み状になり内面に折り込まれている。緑青で覆われており装飾は不明である。

図90-2（Ph.105-5）は青銅に鍍金が施されている菊花状に型押しにより整形されたと推定される飾金具で断面U字形の頂点に径1㎜の穿孔が見られる。

まとめ　貯蔵穴の可能性もあるが、最終的にはゴミ捨て穴として使用されている。

65-SK（図22･25･26･72･88、Ph.1･65･99～101）

位置　3区のN15E0に位置する。100-SP及び87-SKを壊している。

構造　明確に検出できなかったが、検出面では長軸約2.2m、短軸約2.0mで深さ約60㎝である。埋土は5層に分けられるが、3～4層で瓦や礫とともに陶磁器が出土している。東側から廃棄されている状況である。完掘された断面の形状は緩やかなU字状である。用途は不明であるが、東側に段を持つ。貯蔵穴等の可能性もある。

遺物出土状況　埋土は6層に分けられるが、3～4層で瓦や礫とともに陶磁器が出土している。東側から廃棄されている状況である。ある程度埋まった段階（6層埋没後）で遺構が埋められている可能性がある。

遺物

陶磁器

Ph.35-3～5は唐津系陶器片である。釉薬が一部かかる。

Ph.35-2は網目文染付の椀の破片である。

鉄器

図88-14（Ph.99-1）は鎌で先端部が欠損しており、途中で折れた状況である。基部の厚みが3～4㎜、刃部の背部の厚みが3㎜と厚みがある。下草だけでなく、かなりのものを刈りとれると推定できる。

鉄釘類は12点以上出土している。大きく分けて2種類のものが出土している。1つは、3寸程と推定できるもので最大基幅約6～7㎜、頭部幅1～1.2㎝で頭部はL字形に屈曲している。（図88-2･3･4･6･9･10･13、Ph.100･101）（Ph.100上段）

もう1つは推定2寸程と推定できるもので、基部最大幅が4～5㎜のものである。頭部は8㎜程度で同じくL字形に屈曲する。（図88-5･7･8･11･12、Ph.100･101）

まとめ　貯蔵穴の可能性もあるが、最終的にはゴミ捨て穴として使用されている。

151-SK（図22･26）

位置　3区のN15W5に位置する。灰・炭・ガラス片等を多量に含む76-撹乱に壊されている。77-SKを壊している。

構造　南側が調査区外に伸びており、明確に検出できなかったが、検出面では長軸約1.2m、短軸約1.0m以上で深さは撹乱に切られており、1m以下としか判断できない。

76-撹乱の一部かもしれないが、判断できかねる状況であった。

遺物出土状況　遺物は出土していない。

まとめ　貯蔵穴と考えられる。

81-SK（図22･23･64･86、Ph.1･41･97）

位置　3区の西側N15W5に位置する。70-SKに壊されている。

大部分が調査区外に伸びている。

構造　掘り方は楕円形を呈すると推定できる。長軸径約1.3m以上である。30㎝以上で大部分は調査区外である。検出面からの深さは55㎝以上である。

埋土は3層に分けられる。埋土1層は褐色シルト（10YR3/4）しまりがあり、粘性がある。炭粒（0.2～0.4㎜）を少し含む。埋土2層は黒褐色シルト7.5YR3/2しまりがあり、粘性がある土である。埋土3層は埋土2層の土とロームブロックが混在している。

遺物出土状況　埋土から陶磁器類や青銅器が出土している。近世の瓦も出土している。

遺物

青銅器

図86-3（Ph.97）は青銅製の煙管の吸い口である。吸い口の径は約5㎜である。雁首側が若干欠損している。

陶磁器

図64－11（Ph.41－5）は黄褐色の釉薬がかかる陶器の水指である。口縁端部に段を持つ。蓋があったことが伺える。胴部中央付近に沈線がある。3段階に分けて作成していると考えられる。

図64－12（Ph.41）は京風陶器の椀である。手絵が施される。高台の形態からはやや新しいか、18世紀代と考えられる。

（Ph.41－7）は染付の皿で見込みに2重圏線で草花文が描かれる。18世紀代と考えられる。

まとめ　遺構の大半が調査区外で切り合い関係をつかむのが困難であったが、遺物等から70－SKを切っている（壊している）と考えられる。

遺構の用途としては、貯蔵穴やゴミ捨て穴等と考えられよう。

⑵　柱穴

a　径30㎝以上の規模のピット

126－SP　（図22･23）

調査位置　3区のN15W5に位置する。70－SKに切られている。

構造　長軸50㎝、短軸35㎝の楕円形を呈し、深さ55㎝を測る。南側に径約10㎝の柱痕跡を持つ。

遺物出土状況　遺物は出土していない。

83－SP　（図22･23）

調査位置　3区のN15E0に位置する。

構造　径約30㎝の円形を呈し、深さ約35㎝を測る。中央に円礫が3点出土した。礎盤や根石の可能性がある。

遺物出土状況　遺物は出土していない。

b　径25㎝以下のピット

140－SP（図22･26）

調査位置　3区のN15W5に位置する。

構造　長軸約25㎝、短軸約20㎝で楕円形を呈し、深さ約25㎝を測る。柱痕跡は明確ではないが、底部の形状から柱痕跡は約8㎝の可能性がある。

遺物出土状況　遺物は出土していない。

142－SP

位置　3区のN15W5に位置する。

構造　短軸約20㎝、長軸約60㎝で楕円形を呈し、深さ約55㎝を測る。柱痕跡は中央に検出した。底部の形状から柱痕跡は約8㎝の可能性がある。

遺物出土状況　遺物は出土していない。

⑶　井戸

掘削時期は不明である。30m以上掘削していると考えられるので江戸時代後期以降の可能性を考えている。

上下水道の普及以前まで使用されていたと考えられるため、昭和になって埋没していると考えられ、上層には近代以降のものが多い。

68－SE　（図22･27･61、Ph.1･17）

位置　3区のN10W5に位置する。

構造　径115 ～ 120㎝の円形を呈する。凝灰岩の石組を持つ。面を揃えて加工している。凝灰岩の大きさは長さ約20㎝のものと約40㎝のもので、幅は20 ～ 40㎝、厚さは30 ～ 40㎝のものである。石積みの井戸枠は5段で2m程度掘削したが、翌日2.5m以上落ち込んでいる状況であった。4m50㎝の深さまで確認した。黄褐色ローム層を基盤とする。

断面の形状はほぼ直に掘削している。

深さは少なくとも30m以上は掘削されていたと考えられる。

遺物出土状況　遺物は陶磁器類が出土した。ごく新しい灰皿等が出土している。昭和40年代頃埋められた可能性がある。磁器製の人形も出土している。

遺物　図61－7（Ph.17）は古代土師器、図61－8（Ph.17）は須恵器の破片が出土している。

Ph.108－8は白磁で衣を着て右手に宝珠を持ち、左手は垂れている。頭部は欠損している。右胸に径4㎜の穿孔がある。

観音様の可能性がある。現存長は約10㎝で底部は径約5㎝である。中は空洞である。

67－SE　（図22･27）

位置　3区のN10E5を中心に位置する。

構造　径約3.6mの円形を呈する。黄褐色ローム層を基盤とする。形状から井戸と考えられる。

断面の形状はほぼ直に掘削している。

深さは少なくとも30m以上は掘削されていたと考えられる。

遺物出土状況　遺物は陶磁器類が出土した。ごく新しい灰皿等が出土している。昭和40年代頃には埋められた可能性がある。

第3項　　2区の調査

熊本管区気象台の今回の調査区で一番面積が大きい調査区で約140㎡である。敷地の西側の南北方向には中央の位置に存在する。

調査区の北側と東側には古代遺構が残存するが、それ以

外の場所には近世以降の遺構しか確認できない。

その中でも17世紀中葉から後葉(一部18世紀に入る);A期(3区70･77-SK、2区170･169･172･175･209-SK)

17世紀後葉から18世紀中葉を中心とした時期;B期(3区65-SK、2区150･201･97b･204･135（古相)･111（中相)･38-SK)、主に18世紀（一部19世紀）に入るか;C期（2区106-SK（新相)、135-SK（新相）等)、主に18世紀末から19世紀にかけて;D期、の時期区分としては4時期に大別できる。圧倒的に多い時期は、3区と同様、D期である。

3区からつながる北側に17世紀時期の遺物及び遺構が見られる。2区北側は17世紀代の貯蔵穴やゴミ捨て穴の区域である。

遺構としては、円形や隅丸方形の約1.5mや約1mの規模のもので、前者は深さ約70cmから1mのものである。後者は深さ約50cm以下のものも多い。

貯蔵穴や廃棄土坑（ゴミ捨て坑）が多いと考えられる。

柱穴は近代の遺構を除くと、貯蔵穴の希薄な部分に検出できている。中央部に径20～30cm規模の柱の掘り方が約1.2m間隔で検出されたり、径50～60cm規模の柱の掘り方が約2.4m間隔で検出されたりしている。また、南側にも撹乱が多く建物の復元までには至らないが、建物が存在した可能性がある。また、北西区域及び東側にも建物が存在した可能性が示唆できる。

建物の時期は土坑が埋まった段階のものも多く18世紀後半（古くとも）から19世紀にかけてのものが多いと推定できる。礎石となりうる石材も明確でない。出土石材はぐり石のほかは凝灰岩が多く、化粧材や排水に伴うものとして活用されたものか。

敷地内の区画を時期的に判別するのは困難である。

区画としての溝も確認できていない。

ただ、31-SXの西側から北側に検出された幅約1.8mで、長さは土坑に切られて不明であるが、暗褐色のしまった粘質土であり、古代にさかのぼらない場合、区画としての意味がある可能性がある。

石で組んだ貯蔵穴が見られるのも特徴である。

また、凝灰岩が捨てられた土坑なども見られ、近世中～後期には凝灰岩を利用した構造物等があったことがわかる。

また、貯蔵穴等もないしゴミ捨て穴が多数見つけられ、近世後期～近代にかけては2区南側に顕著に見られる。

(1) 土坑

106-SK（図22･28･29･31･63･68･72、Ph.10･16･42･54･71･81）

位置　1区の北側N0W5及びN0E0に位置する。153b-SK及び175-SKの東側を壊している。

構造　掘り方の形状は不整形の楕円形で、長軸約120cm、短軸約110cmの楕円形で上層はやや北側に広がる。深さ40cm、埋土は大きく4層に分けられる。断面の形状は逆台形状である。最下層は黒灰色シルト、3層目は黒褐色シルトでやや粘質が強い。1･2層目も黒褐色シルト系の土で黄色褐色粘質土が混じる。

土坑底面から40～90cmのところから長さ35cm、厚さ5～15cmの凝灰岩が積み重ねられたように捨てられている。

埋土や断面形状から考えて大きく4時期に分けられる。

上から2層は長さ30cm前後の石を捨てている。遺物は北東側肩部に石や瓦片が出土している。

下部は凝灰岩の廃棄は見られず、この遺跡の通常の貯蔵穴や廃棄土坑の形態を示す。

遺物出土状況　埋土下層から凸面に縄目タタキ、凹面に布目が残存する平瓦片が出土している。埋土上層からは近世の瓦及び肥前系くらわんか手、見込み釉剥ぎ等の陶器を含み、18世紀後半頃の時期のものと考えられる。

遺物　図63-27･33･34･36の古代の土師皿、図68-1は糸切り痕の残る土師皿、図72-7は軒丸瓦の破片で、外区に櫛歯文が施されている。

まとめ　下部は貯蔵穴及び廃棄土坑等の用途が考えられ、上層は地下石組の貯蔵穴等の石材の廃棄の遺構と考えられる。

175-SK（図22･28･29･30･63･68･76･79･81、Ph.17･27･80）

位置　1区の北側N0W5及びN0E0に位置する。

構造　掘り方の形状は楕円形で、長軸約150cm、短軸約130cmと推定できる。

深さ約60cmで、埋土は大きく3層に分けられる。最下層は約10cmの厚さで、15cmの大の丸石や瓦等遺物を多く含む黒褐色シルト、中層は黄色ローム層を含む暗褐色及び灰褐色シルトで瓦や陶磁器を多く含む。上層は黄色ローム層を含む褐灰色シルトで下層に比べて遺物は少ない。

遺物出土状況　埋土最下層から凸面に縄目タタキ、凹面に布目が残存する平瓦片が出土している。長さ25cmの石も出土している。一部撹乱の遺物が入ると考えられ明治期と考えられる遺物も見られる。近世の瓦及び肥前系陶磁器(2重網目文）等を含み、17世紀後半頃の時期のものと考えられる。

唐津焼系の灰色の釉薬がかかった三日月高台を持つ17世紀前葉から中葉のものも含んでいる。209-SKに伴う遺物の可能性がある。

遺物　図68-4は三日月高台を持つ唐津焼系の皿である。灰色の釉薬が体部の途中までかかる。

図68-5は大皿の底部で灰色の釉薬がかり、体部で屈曲する形態である。

まとめ　下部は貯蔵穴及び廃棄土坑等の用途が考えられる。時期的には17世紀までさかのぼると考えられる。

208－SK　（図22･28･63、Ph.13）

位置　1区の北側N0W5及びN0E0に位置する。175－SKに中央部の大部分を壊されている。

構造　掘り方の形状は楕円形で、長軸約140㎝、短軸約95㎝と推定できる。

深さ約40㎝で、埋土は3層に分けられる。最下層は2～3㎜のローム混の暗褐色土で、中層は暗褐色シルトでローム層の混じりが少ない。上層はにぶい褐色シルトである。

遺物出土状況　埋土に遺物はほとんど出土していない。

まとめ　209－SKや175－SKの出土遺物から考えて、17世紀にさかのぼると考えられる。下部は貯蔵穴及び廃棄土坑等の用途が考えられる。

209－SK　（図22･28･29･60･68･77･80、Ph.15･14･18･29･77･78）

位置　2区の北側N0W5及びN0E0に位置する。175－SKに中央部分を壊されている。

構造　掘り方の形状は楕円形で、長軸約200㎝、短軸約140㎝と推定できる。

深さ約70㎝で、埋土は6層に分けられるが、大別すると4層に分けられる。埋土5層は褐色粘質土である。埋土4層は灰褐色シルト混、最下層は2～3㎜のローム混の暗褐色土で、中層は暗褐色シルトでローム層の混じりが少ない。上層はにぶい褐色シルトである。

遺物出土状況　図60－1の弥生土器、図68－7～9の陶器、図77の平瓦と図80丸瓦が出土している。

まとめ　208－SKや175－SKの出土遺物から考えて、17世紀にさかのぼると考えられる。下部は貯蔵穴及び廃棄土坑等の用途が考えられる。

245－SK（図22･28･29）

位置　2区の北側N0W5及びN0E0に位置する。106－SKに壊されている。

構造　掘り方の形状は楕円形で、軸の一つの長さが約130㎝と推定できる。

深さ約75㎝で埋土は4層に分けられるが、最下層は一気に埋められていると推定できる。下層には約20㎝の安山岩や丸石、上層には黄色粘質土のブロックが混じる灰褐色シルト。下から2層目は顕著に炭と黄褐色粘質土が混じる褐灰色シルトである。いずれも人為的に埋められた埋土であることが伺える。

遺物出土状況　埋土1層から瓦片が数点出土している。

まとめ　209－SKや175－SKの出土遺物から考えて、17世紀にさかのぼる可能性がある。下部は貯蔵穴及び廃棄土坑等の用途が考えられる。

＊209・175・245－SKは1つのエリアに、17世紀から18世紀にかけて、位置的には重複しながら掘削されたゴミ捨て穴ないし貯蔵穴と推定される。

172－SK（図22･28･35･65、Ph.13･26）

位置　2区北側のS5W5に位置する。焼土層の下から検出されている。228－SKの底面から検出されている。

構造　掘り方の形状は隅丸方形で長軸約60㎝、短軸約50㎝である。断面は柱穴状を呈する。柱痕跡は12㎝である。深さは約55㎝と推定できる。

遺物出土状況　堀り方埋土から図65－13・15が出土している。

遺物　図65－13は肥前系磁器の皿で、底部に砂目が3箇所付着し、内面見込みに草文が描かれる。菊花形の型打ち成形である。

図65－15は緩やかな溝縁状口縁で内面に砂目が4箇所付着する。唐津系の鉄絵緑彩草花文皿である。

まとめ　柱痕跡を確認しており、建物の柱穴の可能性がある。主柱穴か補助柱穴かは不明である。

検出状況や出土遺物から考えて17世紀中葉に建物が建っていたことを傍証するものと考えられる。

135－SK（図22･28･29･57･60･63･66、Ph.5･11･37）

位置　2区の東側N0E0に位置する。北西部の一部を134－SKに、中央部を129a－SKに壊され、北東部は調査区外に伸びる。

構造　掘り方の形状は楕円形で、長軸約2m、短軸70㎝と推定できる。軸方向はN－10°－E程振れている。

深さ約15㎝である。埋土は灰褐色シルトである。

遺物出土状況　陶磁器類が出土している。

図66－13は見込み釉剥ぎに砂目が残存する。波状の線刻に銅緑釉がかかる。内野山窯系のものと推定できる。図63－45の土師器も出土している。

まとめ　出土遺物から考えて、16世紀～17世紀にさかのぼる可能性がある。

211－SK（図22･28･35･63･66･85、Ph.7･43･46･79）

位置　2区北側のS5W5に位置する。焼土層の下から検出されている。184・173－SKに東側を壊されている。244(228)－SKを壊している。

構造　掘り方の形状は隅丸方形で、長軸約1.5m、短軸推定約1.3m、軸は北東から南西にかけて30°程触れているような形態である。深さは約40㎝で、埋土は2層に分けられる。下層は暗褐色シルトで黄褐色粘質土（ローム）を

多く含む。上層は5～10㎝の炭の他、1～2㎝の炭、焼土・黄褐色粘質土（ローム）を多く含む。

遺物出土状況　埋土1･2層から糸切調整のある土師器（灯明皿など）（図66－1～5）、近世瓦（図85－1）が出土している。最下層からも瓦片が出土している。上層には20㎝程の石も出土している。

遺物　Ph.46－13は緑釉がけで、高台部分には胎土目の痕跡がある陶器である。

Ph.46－17は陶器の鉢で、Ph.46の14・15・16は注口の鉢である。

小結　抹茶関連の遺物が出土している。廃棄土坑と考えられる。

228－SK（図22･28･35）

位置　2区北側のS5W5に位置する。焼土層の下から検出されている。211－SKに北側を壊されている。

構造　掘り方の形状は隅丸方形で長軸約1.3m以上、短軸も推定1.1～1.2mである。軸はほぼ南北と推定できる。断面は逆台形状を呈する。深さは約40㎝で、埋土は2層に分けられる。

下層は暗褐色シルトで黄褐色粘質土（ローム）の他焼土を少量含む。上層は焼土・黄褐色粘質土（ローム）粒を少量含む。

遺物出土状況　近世の瓦も古代の瓦も70g程度であるが出土している。なお、古代の摩滅した瓦も出土している。

遺物　瓦の他顕著な陶磁器は出土していない。

まとめ　底面が平たく貯蔵穴ないしゴミ捨て穴等の用途が考えられる。

113－SK（図28･36、Ph.108）

位置　2区中央東側のS5E0に位置する。焼土層の下から検出されている。210－SKや222－SKに東側を壊されている。

構造　掘り方の形状は楕円形で長軸約1.0m、短軸約70㎝と推定される。軸は東に45°振れている。断面は逆台形状を呈する。深さは約45㎝で埋土は2層に分けられる。下層は暗褐色シルト、上層は炭を含む灰褐色シルトである。

柱穴が重複している可能性があるかもしれないが、径約15㎝の柱痕跡を持つ。

遺物出土状況　小代焼土瓶、二彩唐津系鉢、瓶（花器）、紅皿、擂鉢等を含む。土人形も出土している。

遺物

土人形

Ph.108－1は達磨である。

型押しと考えられ、内面に粘土の押しつけ痕が縦方向に残る。型合わせの痕跡が明瞭でないが、頂部の合わせ目付近に丁寧なナデと削りの痕跡があり半分にも割れている。赤褐色を呈する。

まとめ　柱穴が重複している可能性があるが貯蔵穴ないしゴミ捨て穴等の用途の可能性も考えられる。出土遺物から19世紀代のものと推定できる

134a－SK（図22･28･29･32･63･68･89、Ph.16･12･101）

位置　2区北側のN0E0に位置する。北側が調査区外に伸びる。134b－SKを壊している。焼土層の下から検出されている。

構造　掘り方の形状は北半分が調査区外に伸びるため、詳細は不明であるが、石を円形から楕円形の空間になるように積み上げた構造である。径約1.4mの円形で石組の内径は約80㎝と推定できる。掘方の内側は石積みで凝灰岩を主に使用している。南西側の石積みはほぼ凝灰岩であるが、南東側の石積みは安山岩系の石である。基本的に4段積みで、高さは約50㎝である。ところどころ掘り方内に裏込め石が配置されている。

高さ10～15㎝、長さ20～25㎝程の石材を中心に積み上げている。

埋土最下層は黒褐色シルトが10㎝程堆積しているが、その上は灰褐色シルトでぼそぼそである。

遺物出土状況　須恵器の杯（図63－18）や鉄製槍鉋（図89－10）が出土している。。

小結　134b－SKの年代から18世紀後半から19世紀にかけてのものと考えられる。

134b－SK（図22･28･29･32･68･89、Ph.16･12･47･101）

位置　2区北側のN0E0に位置する。北側が調査区外に伸びる。134a－SKに壊されている。

構造　掘り方の形状は北半分が調査区外に伸びるため、詳細は不明であるし、上面が削平されており最下段のみ石積みしか残存しておらず、石列の東隣の1石しか残存していないため、推定するのが困難であるが、掘り方の形状から考えて東西幅は約1.2m、南北は1.3m以上の掘り方を持つ。内径で東西80㎝、南北90㎝以上の石積みの貯蔵穴と推定される。

石積みの内側は面とりされている。長さ30～40㎝で高さ15㎝の石材を積んでいる。もし、4段積みであれば、30～40㎝以上削平されていることになる。

遺物出土状況　お神酒徳利か花瓶として用いられたと思われるものやその他の出土陶磁器が上層から出土している。また、丸形椀等陶磁器が出土している。

遺物

陶磁器

Ph47－6はお神酒徳利か花瓶で草花文を施し、Ph47－2は丸形の椀で高台が小く、稲藁を束ねたものが2つ格子に配置されている。

紅皿（Ph.47-7～9）は3点出土している。

Ph.47-10は広東椀で外面に花文を持つ。その他(Ph.47）多数出土している。

まとめ　広東椀やお神酒徳利等から考えると18世紀後半を中心とする時期と推定できる。

金属器

図89-7（Ph.101）は幅約6㎝、折返部の幅約3㎝の袋状の鉄器である。鋤先等の用途が考えられる。

まとめ　機能としては地下貯蔵施設と考えたい。

91-SK（図22･28･38･68、Ph.11･12･44･48･49･54）

位置　2区中央のS5W5に位置する。焼土層の下から検出されている。166･218(166b)-SKの南東側を壊している。

構造　掘り方の形状は隅丸方形で、長軸約1.3m、短軸も推定約1.1mである。軸はほぼ南北と推定できる。断面は逆台形状を呈する。深さは約135㎝で、埋土は4層に分けられる。

埋土はいずれもしまりがない。最下層は灰褐色粘質土で、下から2層目は黄褐色粘質土（ローム）の混じり褐灰色シルトである。下から3層目は瓦を多く含む。褐灰色シルト層である。埋土1層は黄色粘質土（ローム）混じりの褐灰色シルトで、完形の陶磁器を多く含む。

遺物出土状況　埋土1層をはじめ、陶磁器の皿、椀、土瓶、火鉢、炮烙、灯明皿、蛸唐草文の徳利、桟瓦等多彩な種類の遺物が出土している。

その他二彩唐津（弓野)、小代焼等も含まれる。

遺物　Ph.49-5は口紅の皿で、見込みに風景が描かれている。

Ph.49-8は玉縁の鉢である。

Ph.48-5～8は端反椀の蓋で、Ph.48-9～12は端反椀の身である。見込みに省略された松竹梅文や虫文等を施している。

Ph.49-7は鉢である。外面に「コ」字型が3個重ねられたものである。

Ph.44-6は唐津の刷毛目の花瓶で器壁が3㎜と非常に薄く、小石原焼き等肥前系の系統のものか。

Ph.44-8は土瓶である。

Ph.48-2･3･4は白土による象嵌で、松尾焼もしくは肥前系の陶器と考えられる椀である。

Ph.42-1は陶器の甕の胴部である。

まとめ　遺構の所属時期は埋土から見て、近代遺構のものとも考えたが、遺物（土瓶や端反椀等）から見ると19世紀前半頃と推定したい。

廃棄土坑であるが、遺物が完形に近いものが多く。何らかの際に埋納された可能性も考えたい。

遺物にはやや幅はあるが、消費段階での良好な一括資料に比定される可能性があると思われる。

166-SK（89b-SK）（図22･28･38、Ph.13･49）

位置　2区中央のS5W5に位置する。焼土層の下から検出されている。91・88-SKに南側を壊されている。

218-SKの西側を壊している。

構造　掘り方の形状は隅丸方形で、長軸約1.1m、短軸も推定約90㎝である。軸は北東から南西方向で東に45°触れる。断面は逆台形状を呈する。深さは約135㎝で、埋土は4層に分けられる。

埋土はあまりしまりがない。褐灰色シルト系の土で埋まっており、最下層は粘質が強く、炭やロームブロックの入り方で分層される。最上層は黒褐色の土である。

遺物出土状況　埋土1層をはじめ、陶磁器の鉢、椀、土瓶、桟瓦等の遺物が出土している。

白磁菊花皿、よろけ文端反椀、段重、黄色釉朝顔鉢も出土している。

遺物　Ph.49-1･2は土瓶である。胴部上端は藁灰釉薬で施釉、下半部は釉薬がかからず煤が残存している。

Ph.49-3は91-SK出土のものとセットになるべきものである。この遺構に伴うものか。

Ph.49-4は高台が小さく、胴部下半にかすかな稜を残すもので、やや時期が他の遺物より時期が上る可能性がある。

89-SK（図22）

位置　2区中央のS5W5に位置する。焼土層の下から検出されている。91・88-SKに北側を壊されている。
南東側を壊している。

構造　掘り方の形状は隅丸方形で、長軸約1.1m、短軸も推定約90㎝である。軸は北東―南西方向で東に45°触れる。断面は逆台形状を呈する。深さは約135㎝で、埋土は4層に分けられる。

埋土はあまりしまりがない。褐灰色シルト系の土で埋まっており、最下層は粘質が強く、炭やロームブロックの入り方で分層される。最上層は黒褐色の土である。

遺物出土状況　埋土1層をはじめ、陶磁器の鉢、椀、土瓶、桟瓦等の遺物が出土している。最初のうちは、89b-SKとの区別が明確でなく、取り上げている。ほぼ共通していると思われる。

まとめ　遺構の所属時期は埋土から見て、近代遺構のものとも考えたが、89b-SKや91-SK出土の遺物（土瓶や端反椀等）から見ると19世紀前半頃と推定したい。

廃棄土坑もしくは貯蔵穴と推定できる。

127-SK（図22･28･38、Ph.15･53･106）

位置　2区中央のS5W5に位置する。焼土層の下から検出されている。218-SKに南側を壊されている。

構造　掘り方の形状は隅丸方形で、長軸約2.5m、短軸も推定約1.2mである。軸は西側に80°程振れている。断面は逆台形状を呈するが底面は緩やかである。深さは約60㎝で、埋土は3層に分けられる。

埋土はあまりしまりがない。灰褐色シルト系の土で埋まっており、最下層は粘質が強く、鉄分を含む。下から2層目はシルト層でこの層に陶磁器の細片が含まれる。

最上層は黒褐色の土である。

遺物出土状況　埋土2層に陶磁器片が多く含まれる。蛇の目凹形高台、二重圏線、松笹文等の磁器、小代輪花鉢、段重、小代土瓶等を含む。

清代と推定できるレンゲ等も出土している。陶磁器の鉢、椀、土瓶、桟瓦等の遺物が出土している。

遺物

陶磁器

Ph.53-3は広東椀である。

Ph.53-4は内面に墨流し技法を施す2重網目文の端反椀である。

Ph.53-7・8は肥前系の青磁の香炉である。胎土はやや灰色を呈する。

硯石

Ph.106-5は黒色の石製の硯である。粘板岩である。1/3程度の残存状況である。墨堂、硯池、硯縁が確認できる。

まとめ　遺構の所属時期は埋土から見て、近代遺構のものとも考えたが、89b-SKや91-SK及びこの遺構出土遺物（土瓶や端反椀等）から見ると19世紀前半頃と推定したい。

廃棄土坑もしくは貯蔵穴と推定できる。

111c（184）-SK（図22･28･35･65･72･76･89、Ph.53･83･111･65）

位置　2区中央のやや東側S5E0に位置する。焼土層の下から検出されている。111b-SKの西側を壊している。

構造　掘り方の形状は楕円形で、長軸約1m、短軸約80㎝である。軸は西側に15°程振れている。

断面は緩やかなU字状を呈する。深さは約30㎝で、埋土は3層に分けられる。

下層は灰褐色シルト系の土で埋まっており、中層は褐灰色シルトで黄褐色ローム層が混じる。最上層は焼土・炭が混じる。

遺物出土状況　埋土3層に瓦・陶磁器片が多く含まれる。

遺物　Ph.53-2は備前焼の煎餅皿である。蝶の文様が内面に型押しで描かれている。

Ph.53-1は白磁の合子の蓋でつまみが花文になっている。釉薬は青みがかっており、網田焼と考えられる。

まとめ　焼土を多く含み、焼土の下の検出ではあるが、遺構の所属時期は埋土や出土遺物から見て、近代遺構のものとも考えられる。幕末から明治期のものか。

廃棄土坑もしくは貯蔵穴と考えられる。

111b（185）-SK（図22･28･38･65、Ph.12･16･43）

位置　2区中央のやや東側S5E0に位置する。焼土層の下から検出されている。111c（184）-SKに壊されている。

構造　掘り方の形状は隅丸方形で、長軸約1.5m、短軸約1.2mである。軸はやや東側に振れている。

断面は袋状を呈する。底面は80㎝程の平坦面がある。深さは約1.1mで埋土は大きく4層に分けられる。

断面の堆積状況からは東側と西側から交互に堆積しているような状況である。下層に黄色ロームのブロックが多く含まれる。埋土は、褐灰色シルト層で土質やブロックの混じり方で分層できる。

遺物出土状況　埋土の2層以下から瓦等が出土している下層に瓦・陶磁器片が多く含まれる。

遺物　Ph.46-12は水指である。黄瀬戸の可能性があるが、産地は不明である。

まとめ　焼土を多く含み、焼土の下の検出ではあるが、遺構の所属時期は埋土から見て、19世紀以降のものとも考えられる。幕末か明治期のものか。

廃棄土坑もしくは貯蔵穴と考えられる。

168-SK（図22･28･35･60、Ph.15･18）

位置　2区中央S5W5に位置する。焼土層の下から検出されている。105-SE（撹乱）に南側を壊されている。

構造　掘り方の形状は楕円形で、長軸約2m、短軸約1mである。軸はほぼ南北方向である。

断面は緩やかな凹字状を呈する。深さは約80㎝で、埋土は4層に分けられる。

褐灰色シルト系の土層で土質やローム層の混じり具合で分層できる。上層には鉄分を多く含む。

遺物出土状況　埋土から瓦・陶磁器片が多く含まれる。

遺物　Ph.43-11は磁器の椀で釉裏紅と呼ばれる磁器で草花文が描かれている。

Ph.46-11は小代焼の涼炉である。

まとめ　出土遺物の幅はあるが、18世紀後半以降と考えられる。

廃棄土坑もしくは貯蔵穴と考えられる。

97b-SK（図22･28･36･67、Ph.18･30）

位置　2区中央東側S5E0に位置する。焼土層の下から検出されている。

構造　掘り方の形状は楕円形で、長軸約1.2m、短軸約1.1mである。軸は西側に30°程振れている。

断面は逆台形状を呈する。深さは約60㎝で、埋土は2層に分けられる。下層に礫を含む。灰褐色シルトでやや粘質土である。上層は褐灰色シルト系の土層である。

遺物出土状況　下層から肥前系青磁や陶磁器が出土している。

遺物　図67-6（Ph.39-5）は波佐見で生産されたと見られる青磁の香炉である。口縁部がやや内傾している。

図67-11（Ph.39-7）は唐津系陶器の大皿である。口縁部が屈曲し、面を持つ。

まとめ　出土遺物の幅はあるが、17世紀後半以降と考えられる。

廃棄土坑もしくは貯蔵穴と考えられる。

97c-SK（図22･67、Ph.18･39）

位置　2区中央東側S5E0に位置する。焼土層の下から検出されている。

構造　掘り方の形状は楕円形で、長軸約2m、短軸推定約1.5mである。軸は西側に30°程振れている。軸は97b-SKとほぼ同じと考えられる。

断面はU字状を呈し、深さは約45㎝である。埋土は灰褐色シルト系の土でやや粘質土である。

遺物出土状況　下層から陶磁器が出土している。

遺物　図67-10（Ph.39-4）は雨降り文の染付で「大明年製」銘款を持つ。17世紀末から18世紀のものと推定できる。

まとめ　出土遺物の幅はあるが、17世紀後半以降と考えられる。

廃棄土坑もしくは貯蔵穴と考えられる。97c-SK周辺は意図的に同じ場所に何度も掘削されている可能性がある。

210-SK（図22･28･36）

位置　2区中央東側S5E0に位置する。焼土層の下から検出されている。

構造　掘り方の形状は楕円形で、長軸約80㎝、短軸約60㎝である。軸はほぼ南北方向である。

断面はU字状を呈する。深さは約50㎝で、埋土は2層に分けられる。下層は灰褐色シルトでやや粘質土である。上層は褐灰色シルト系の土層である。

遺物出土状況　遺物は出土していない。

まとめ　遺構の重複関係などから18世紀後半以降と考えられる。

廃棄土坑もしくは貯蔵穴と考えられる。

222-SK（図22･28･36、Ph.25･41）

位置　2区中央東側S5E0に位置する。焼土層の下から検出されている。97b-SKに壊されている。

構造　掘り方の形状は楕円形で、長軸約1.3m、短軸約1.1mである。軸は西側に60°程振れている。

断面は逆台形状を呈する。深さは約40㎝で、埋土は3層に分けられる。下層は褐灰色シルト、中層は灰褐色シルトでやや粘質土である。上層は褐灰色シルト系の土層である。下層には礫を含む。

遺物出土状況　埋土から陶磁器片が出土している。

遺物　Ph.41-1は見込みにダミで表現した五弁花と2重圏線などの表現がなされる。17世紀末から18世紀前半のものと推定できる。

まとめ　遺構の重複関係などから18世紀前半と考えられる。

廃棄土坑もしくは貯蔵穴と考えられる。

119-SK（図22･28･36）

位置　2区中央東側S5E0に位置する。焼土層の下から検出されている。

構造　掘り方の形状は楕円形で、長軸約80㎝、短軸約70㎝である。軸は西側に30°程振れている。

断面はU字状を呈する。深さは約45㎝で埋土は灰褐色シルト層である。

遺物出土状況　埋土から陶磁器が出土している。

遺物　凹形釉剥ぎ高台の肥前系磁器及び肥前系刷毛目の陶器等が出土している。

まとめ　出土遺物から18世紀後半以降と考えられる。

廃棄土坑もしくは貯蔵穴と考えられる。

150-SK（図22･28･36･65、Ph.21･33･34･53）

位置　2区中央やや北東側N0E0に位置する。焼土層の下から検出されている。

構造　掘り方の形状は楕円形で、長軸約70㎝、短軸約60㎝である。

断面は凹字状を呈する。深さは約40㎝で、埋土は3層に分けられる。埋土は暗褐色シルト系の土で下層にいく程しまりが弱くなる。上層に炭・ブロックが入り、中層に炭が入る。

遺物出土状況　埋土から肥前系陶器及び磁器が出土している。

遺物　Ph.34-2は肥前系陶器で鉄釉に灰釉がかかる。

Ph.34-3は唐津系の皿で外反する口縁を持つ。酸化焼成で褐色を呈する。

また、図65-11（Ph.33-2）見込み釉剥ぎの銅緑釉の皿で高台は三日月高台に近い。

まとめ　出土遺物の幅はあるが、18世紀前半を中心とす

る年代と考えられる。

廃棄土坑もしくは貯蔵穴と考えられる。

154－SK（図22･28･37･60、Ph.16･53･63）

位置　2区北西側N0W10に位置する。焼土層の下から検出されている。157－SKを壊している。

構造　掘り方の形状は楕円形で、長軸約1.3m、短軸約1.2mである。断面の観察によると再掘削もしくは重複したような形状のため、内側を154－SK、外側を154b－SKとして掘削した。内側の埋土は褐色～黒褐色、外側は灰褐色系のシルトである。

断面はU字状を呈する。深さは約40㎝で、埋土はそれぞれ2層に分けられる。

遺物出土状況　埋土から肥前系陶器及び磁器が出土している。88－SKの遺物と接合する。瓦質の炮烙（Ph.63－3）が出土している。

遺物　Ph.53－14は肥前系鉄絵椀である。口縁は外反するが、器壁は薄く、高台も新しい形態である。

まとめ　出土遺物の幅はあるが、18世紀後半から19世紀を中心とする年代と考えられる。

廃棄土坑もしくは貯蔵穴と考えられる。

157－SK（図22･28･37）

位置　2区北西側N0W10及びN0W5に位置する。焼土層の下から検出されている。

構造　掘り方の形状は円形で、径約1mである。

断面は皿状を呈する。深さは約20㎝で、埋土は2層に分けられる。埋土は下層が灰褐色シルトで、上層は黄褐色シルト混灰褐色シルトである。

遺物出土状況　埋土から肥前系陶器及び磁器が出土している。土瓶及び筒形椀、凹形釉剥ぎ高台が出土している。

まとめ　出土遺物の幅はあるが、19世紀前半を中心とする年代と考えられる。

廃棄土坑もしくは貯蔵穴と考えられる。

159－SK（図22･28･37、Ph.22･47･53）

位置　2区北西側N0W10及びN0W5に位置する。焼土層の下から検出されている。周辺では最も新しい土坑である。

構造　掘り方の形状は楕円形で、長軸約1.2m、短軸約1mである。断面は上層が凹字に近く下層はU字状である。

深さは120㎝で、断面の観察によると埋土は3層に大別できる。最下層が20㎝埋没した時点で炭層が堆積し、さらに50㎝埋没した後に最上層が埋められたと考えられる。

間にローム層が帯状に堆積している。中層のしまりがない。

遺物出土状況　埋土から肥前系陶器及び磁器が出土している。くらわんか手の茶椀、土瓶の他、銅緑釉の鉢、飴釉四耳壺等が出土している。十能も出土している。（Ph63－1）

遺物　Ph.53－16は飴釉の四耳壺である。Ph.47－16・17は仏花器である。Ph.47－15は銅緑釉の香炉である。

Ph.47－13は端反椀、Ph.47の14は扇子の染付である。

Ph.47－12は松等を描いた猪口である。

まとめ　出土遺物の幅はあるが、18世紀中葉から後葉を中心とする年代と考えられる。

廃棄土坑もしくは貯蔵穴と考えられる。

165（158）－SK（図22･28･37･63、Ph.17･46）

位置　2区北西側N0W5に位置する。焼土層の下から検出されている。周辺では最も新しい土坑である。

構造　掘り方の形状は楕円形で、長軸約1.1m、短軸約1mである。断面はU字状である。

遺物出土状況　埋土から丸瓦・平瓦等が出土している。

遺物　Ph.46－5はそうめん手の技法を用いた椀である。

まとめ　出土遺物や遺構の重複関係等から18世紀後半から19世紀を中心とする年代と考えられる。

廃棄土坑もしくは貯蔵穴と考えられる。

85c（86）･85－SK（図22･28･35･38･89、Ph.98）

位置　2区中央S10W5及びS10W10に位置する。焼土層の下から検出されている。

構造　85c－SKの掘り方の形状は方形で、長軸約1.3mである。断面は皿状である。85－SKの掘り方の平面形は円形で、径約1.1mで、深さは約1.1mである。断面は逆台形状である。

遺物出土状況　遺構検出の不備で、2つの遺構の一部を同時に掘っているので遺物を混同して取り上げている。埋土上層から急須、植木鉢、花瓶等が出土している。段を持つ瓦等が出土している。

遺物

青銅器

図89－1（Ph.98）は径5.2㎝の扇型状の切り込みが2カ所あり、中央に孔径が約1㎝で、高さ約2㎝の軸受の筒が付いている。紡錘車や灯火具の一部の軸受金具と考えられる。

まとめ　出土遺物や遺構の重複関係等から19世紀中葉以降をと考えられる。

廃棄土坑もしくは貯蔵穴と考えられる。

85b－SK（図22･28･35･81、Ph.22･43）

位置　2区中央S10W5に位置する。焼土層の下から検出されている。85－SKに東側を、南側を撹乱に壊されている。

構造　掘り方の平面形は隅丸方形で、長軸約2.5m、深さは約12㎝以上である。断面は逆台形状である。

遺物出土状況　平瓦類が多量に出土している。いわゆる瓦溜である。桟瓦及び土管状のものを切断した形状の瓦がある。古代の瓦や陶磁器類も出土している。

遺物　Ph.43-4は陶胎染付である。その他数点陶磁器が出土している。

まとめ　出土遺物や遺構の重複関係等から19世以降と考えられる。

廃棄土坑と考えられる。

84-SK（図22･28･38･39、Ph.50）

位置　2区南西側S10W10に位置し、焼土層の下から検出されている。西側は調査区外である。

構造　掘り方の形状は隅丸方形で、長軸2m、短軸約1m以上である。深さは1.3mである。中層に凝灰岩が廃棄されている。断面は逆台形状である。

遺物出土状況　埋土から瓦・陶磁器類等が出土している。瓦は桟瓦の桟の部分の先端が細くなっている形式である。紐伏間等の棟瓦等も出土している。くらわんか手､赤絵瓶、京焼き風とっくり、十六弁菊花紋椀、広東椀等が出土している。

まとめ　出土遺物や遺構の重複関係等から18世紀後半から19世紀を中心とする年代と考えられる。

廃棄土坑もしくは貯蔵穴と考えられる。

216-SX（図22･28･38･66･89、Ph.6･98･108）

位置　2区の中央西側S5W10・S5W0に位置する。166-SKが埋没してから置かれたものと考えられる。

構造　長軸約70㎝、短軸約60㎝の掘り方に、高さ約64㎝の瓦質火鉢が埋設されている構造である。底部が一部欠損している。埋土は黒褐色のしまりのない土である。

遺物出土状況　内部や周辺から端反椀、凹形釉剥ぎ高台や明治と考えられる染付等を含む。19世紀代と考えられる。

遺物

土人形

Ph.108-3は216-SK出土の猫である。胡粉が残る。型押しで型合わせである。2枚の型を合わせたものである。首輪の表現がある｡尾崎人形等の型に良く似た事例がある。赤褐色を呈する。

Ph.108-2は216-SK出土で、子どもを抱いた山姥金時等の小型品の可能性がある。胡粉が残り、2枚の型を合わせた痕跡がある。高さ約5.5㎝である。小型品のため、内面に横方向のナデ痕が残る。赤褐色を呈する。

まとめ　図66-19は瓦質土器であるため、液体も貯蔵しにくいし､火鉢を転用して何か貯蔵していた可能性がある。

内部から木質が残存した青銅製の煙管の吸口（図89-2）が出土している。

218-SK（218b･c）（図22･28･38･81、Ph.6･45･46）

位置　2区の西側S5W10に位置する。91・166-SKに壊されている。

構造　掘り方の形状は隅丸方形で、長軸約150㎝、短軸約100㎝と推定できる。深さ約130㎝で、埋土は4層に分けられる。埋土はあまりしまりがない。褐灰色シルト系の土で埋まっており、最下層は粘質が強く、炭やロームブロックの入り方で分層される。最上層は黄褐色ローム混黒褐色の土である。

遺物出土状況　油壺、小代焼椀、仏飯具、刷毛目の唐津系(弓野)、蛇目釉剥ぎの肥前系白磁等が出土している。

遺物　Ph.45-7は小代焼の椀である。胎土に鉄分が多い。濃い青色と部分的に褐色に釉薬がかかる。

Ph.45-11は仏様に供えるご飯を盛る器である。口紅で外面に花文の染付である。

まとめ　遺物から見ると18世紀後半以降と考えられる。ゴミ捨て穴か貯蔵穴と推定できる。

また､隣接して深さ70㎝(218b-SK)と深さ30㎝(218c-SK）がある。218-SKに壊されており詳細は不明であるが、1 ～ 1.2m前後の長さの土坑が重複して存在する。

重複している古い遺構は出土遺物から考えて、16世紀～ 17世紀にさかのぼる可能性がある。下部は貯蔵穴及び廃棄土坑等の用途が考えられる。時期的には16世紀までさかのぼる可能性もある。

31-SX（図22･28･39･40･41･42･66･89、Ph.1･7･11･52･98･101）

位置　2区の南側のS10W5に位置する。北側を撹乱（コンクリート水路）に壊されている。28-SX、38-SKを壊している。32-SKに北東側の掘り方の一部を壊されている。

構造　石を方形の空間になるように積み上げた構造である。掘り方の形状は隅丸方形で､長軸約1.9m､短軸約1.5mで、深さ約75㎝である。掘り方の内側は石積みで凝灰岩を主に使用している。北側の石積みは5段で目地が揃う。2段目の石積みは高さ10㎝、長さ15 ～ 25㎝と比較的小形の石材を積んで東側等の石材と目地をあわせるのに用いられていると考えられる。

3段目以降は高さ10 ～ 15㎝、長さ30 ～ 40㎝の石材を丁寧に3 ～ 4個積み上げて段を形成している。

東側の石積みは下段については高さ20㎝、長さ40㎝以上の凝灰岩2個、2段目は高さ40㎝の中央の石に合わせて南側は石材を縦置きにして調整している。

それに対して、西側は目地を揃えているものの最下段の石は川原石で、3段目、2段目は凝灰岩を使って整然とつ

まれているが、それより上部は乱石積みである。この面が北壁及び南壁より新しく作られたことは掘り方から明らかである。上面には壁材のぐり石を含んだコンクリート材を組み合わせている。

遺物出土状況　埋土からは寛永通宝や端反椀、紅皿、花器、皿類が出土している。

遺物

陶磁器

Ph.52-3は紅皿で外面に唐草文を持つ。コバルトの発色である。また、Ph.52-7は赤絵で内面に釉薬剥ぎが認められる。Ph.52-4は端反椀で内面見込みの松竹梅文が簡略されている。

鉄器

図89-14（Ph.101）は全長16.5㎝で、幅4.5㎝の包丁等の鉄板である。包丁等の用途も想定されるが詳細は不明である。

まとめ　明治期の遺物が数点出土しており、その頃まで機能していたと考えられるが、19世紀前半以前のものも含まれる。

また,石組の構造等から西壁は明治期以降に積み替えられた可能性を考えたい。

機能としては地下貯蔵施設と考えたい。

第4項　1区の調査

概要　3区や2区の北側とは異なり、江戸時代前半の遺物や遺構はほとんど見られない。

⑴　土坑

50-SK（図43･48･49）

位置　1区の南側S20W5に位置する。10-SDとの切り合い関係は10-SDが調査区外に伸びている等のため困難であるが、10-SDに切られている可能性が高い。

構造　南側大部分が調査区外に伸びており、詳細は不明であるが､掘り方の平面形は隅丸方形を呈すると推定される。長軸約1.4m、短軸0.5m以上を測る。断面は逆台形状を呈する。検出面からの深さは約1.6mである。

埋土は大きく3層に分けられる。下層は暗褐色シルト、中層は灰褐色シルトで、最上層は褐色シルトで埋まる。

遺物出土状況　遺物はあまり出土していないが、平瓦片が10数点出土している。

まとめ　埋土のしまり具合から考えると古い遺構の可能性を考えたが詳細は不明である。

122-SK（図22･43･50･52）

位置　1区の南側のS20W5に位置する。10-SDと50-SKに切られている。

構造　掘り方は南側大部分が調査区外に伸びているが隅丸方形から楕円形を呈すると推定される。長軸約1.5mである。断面は逆台形状を呈する。検出面からの深さは約70㎝であるが、10-SDの底面で検出したため、本来はもう少し深くなると思われる。

埋土は大きく3層に分けられる。下層は暗褐色シルトに多量のロームブロックを含み、中層は暗褐色シルトで少量のロームブロックを含む、最上層は暗褐色シルトでしまりのある土である。

遺物出土状況　埋土からはほとんど遺物が出土していない。

まとめ　近世の貯蔵穴もしくはゴミ捨て穴と推定できる。

54-SK（図22･46･47）

位置　1区の南側のS20W10に位置する。10-SDや11･54b-SKに壊されている。

構造　平面形は楕円形を呈すると推定される。長軸1m以上、短軸約90㎝である。断面は逆台形状を呈する。検出面からの深さは約40㎝であるが、10-SDの底面で検出したため、本来は65㎝以上を測る。

遺物出土状況　遺物はほとんど出土していない。

まとめ　近世の貯蔵穴もしくはゴミ捨て穴と推定できる。

54b-SPに桟瓦等が出土していること等や周辺の遺物の出土状況から考えて17～18世紀の時期のものと推定したい。

55-SK（図43･44）

位置　1区の西側S20W10に位置する。10-SDや54-SKに壊されている。

構造　掘り方は楕円形を呈すると推定され、平面形は長軸径約0.8mで､短軸0.5mである｡断面は逆台形状を呈する。検出面からの深さは約25㎝であるが、10-SDの底面で検出したため、本来は65㎝以上を測る。

埋土は1層で、灰黄褐色シルト（7.5YR4/2)、ブロック土、炭が混入。

遺物出土状況　遺物は出土していない。

まとめ　埋土のしまり具合から考えると古い遺構の可能性を考えたが詳細は不明である。

まとめ　貯蔵穴や柱穴等と考えられる。

05-SK（図22･43･46･47･83）

位置　1区の東側S20W5に位置する。04-SKに北側を壊されている。

構造　掘り方の形状は隅丸方形で､長軸約2m､短軸1.25mで、深さは70㎝を測る。南西隅に階段状の幅約40㎝の三角形のステップがある。埋土は4層に分けられる。黒褐色系の粘質及びシルト層である｡埋土2層には炭化物を含む。下層のしまり具合が弱い。

遺物出土状況　出土遺物は2層目から小代焼・八代高田焼・広東椀、平戸焼等18世紀後半から19世紀にかけての遺物を含む。

まとめ　遺構の構造から地下の貯蔵穴等の可能性を推定しつつもゴミ捨て穴等の可能性もある。

04-SK（図22・43・48・49、Ph.9・55・56）

位置　1区の西側S20W5に位置する。05-SKの北側を壊している。上層の埋土が陶器の管（撹乱）により壊されている。

構造　掘り方の形状は隅丸方形で、長軸約1.6m、短軸1.5mで、深さは約50cmを測る。埋土は3層に分けられる。下層・中層は黒褐色シルトで、赤褐色の鉄分が広がる。上層は灰黄褐色シルトで、黄褐色土ブロックが全体に広がり、炭化物も少量含む。

遺物出土状況　底面に擂鉢が出土している。2層目から小代焼・八代高田焼・広東椀、平戸焼等18世紀後半から19世紀にかけての遺物を含む。

遺物　Ph.55-1は広東碗等の蓋で、Ph.55-2は小代焼の朝顔鉢、Ph.55-3は草丸文の肥前系染付の丸碗である。

Ph.56-1は見込みが昆虫文で、外面下部に○×の文様が残存する肥前系の筒形椀である。

まとめ　遺構の構造から地下の貯蔵穴等の可能性を推定しつつもゴミ捨て穴等の可能性もある。

02-SK（30-SK）

位置　1区の北東部S20W5に位置する。04-SKに南側を壊されている。

構造　掘り方の形状は不定形で、北側の床面がやや高い。他の遺構が切り合っている可能性もある。約1m、短軸60cmで、深さは40cmを測る。埋土は2層に分けられる。黒褐色系の粘質及びシルト層である。埋土上層には炭化物・焼土粒を含む。しまりのある埋土である。

遺物出土状況　陶器の甕は17世紀後半の可能性があるが、擂鉢は新しく、18世紀の後半から19世紀の遺物を含む。

まとめ　遺構の構造から地下の貯蔵穴等の可能性を推定しつつもゴミ捨て穴等の可能性もある。

06-SK（図22・43・46・47、Ph.96）

位置　1区の北側S20W10に位置する。07-SKに北側の上層を壊されている。07-SKは埋土にビニール袋を含んでおり、撹乱と考えられる。

構造　掘り方の形状は不定形で、長軸約70cm、短軸50cmで、深さ35cm、埋土は4層に分けられる。埋土は灰褐色ないし褐灰色シルトでしまりはない。

遺物出土状況　土瓶及び青磁染付、小代焼等が出土している。18世紀後半から19世紀代の遺物を含むと考えられる。

遺物

まとめ　上部が削平されたゴミ捨て穴等の可能性がある。

09-SK（図22・43・46・47）

位置　1区の南側S20W10に位置する。北側の45-SP及び西側の柱穴の一部及び123-SKを壊している。

構造　掘り方の形状は隅丸方形で、長軸約130cm、短軸100cmで、深さ40cm、埋土は3層に分けられる。最下層は黒褐色粘質土で上層よりしまりが弱い。遺物はほとんど見られない。それに対して埋土2層には瓦や石や磁器類が集中している。埋土1層には1～3cmの炭片等と共に磁器や瓦の細片が出土している。上層に遺物が廃棄されたと推定できる。

遺物出土状況　土瓶及び刷毛目唐津系くらわんか手、見込み釉剥ぎ等の陶器を含み、18世紀後半から19世紀にかけての時期のものと考えられる。

まとめ　上部が削平されたゴミ捨て穴等の可能性がある。

12-SK（図22・43・46・47・82・90、Ph.87・105）

位置　1区の中央S20W10に位置する。西側の上層を11-SKに壊されている。またこの遺構の埋土が埋没してから48-SPが掘削されている。

構造　掘り方の形状は隅丸方形で、長軸約170cm、短軸120cmで、深さ約80cm、埋土は6層に分けられる。最下層は黒褐色シルトで上層よりしまりが弱い。遺物はほとんど見られない。それに対して埋土3層には瓦や石や磁器類が集中している。埋土1層はしまりや粘性のある暗褐色シルトに黄褐色土が混じる。

遺物出土状況　青銅製煙管（図90-5）や布目の平瓦（図82-2）や端反椀など（Ph.62）等出土している。

18世紀後半から19世紀にかけての時期のものと考えられる。

まとめ　上部が削平されたゴミ捨て穴等の可能性がある。

49-SK（図22・43・44・45、Ph.104）

位置　1区の中央S20W10に位置する。西側を12-SKに壊されている。63-SP、64-SPを壊している。

構造　掘り方の形状は隅丸方形で、長軸約90cm、短軸約80cmで、深さ約30cm、埋土は2層に分けられる。下層は黒褐色シルト、上層は灰褐色シルトである

遺物出土状況　19世紀と推定できる釉生掛けの磁器が出土している。

遺物

鉄器

Ph.103の鉄釘などが出土している。

まとめ　上部が削平されたゴミ捨て穴等の可能性がある。

14-SK（図22･43･50･51）

位置　1区の中央S20W10に位置する。49-SKや12-SKに壊されている。

構造　掘り方の形状は楕円形で、長軸約120㎝、短軸約80㎝で、深さ約30㎝、埋土は2層に分けられる。埋土は灰褐色シルトである。断面や切り合い関係を見ると再掘削を受けている可能性があり、調査時は14a-SK、14b-SKと区別して調査を実施した。

遺物出土状況　18世紀後半頃と推定できる四方襷文の染付が出土している。

まとめ　上部が削平されたゴミ捨て穴等の可能性がある。

123-SK（図22･43･46･47、Ph.103）

位置　1区の中央S20W10に位置する。09-SKに壊されている。一部攪乱が入っていた。

構造　掘り方の形状は不定形で、長軸約160㎝、短軸90㎝以上、深さ約13㎝である。埋土は灰褐色シルトである。

遺物出土状況

陶磁器

くらわんか手の染付椀破片、蛇の目凹形高台、蛸唐草文の破片、玉縁の白磁等が出土している。

まとめ　上部が削平されたゴミ捨て穴等の可能性がある。

11-SK（15-SK）（図22･43･48･49･69･82･90、Ph.10･60･87･103）

位置　1区の西側S20W10に位置する。

構造　掘り方の形状は楕円形で、長軸約210㎝、短軸170㎝で、深さ約110㎝、埋土は9層に分けられる。最下層は黒褐色粘質土で、上層よりしまりは強い。最下層には遺物は少ない。それより上の層には瓦や石や磁器類が集中している。埋土3層までを別遺構（15-SK）として掘削した。11-SKの埋没する際にくぼんでいたものと思われる。埋土1～2層には1～3㎝の炭片等と共に磁器や瓦の細片が出土している。上層に遺物が廃棄されたと推定できる。

遺物出土状況　各層から多量の陶磁器及び瓦が出土している。様々な時期のものが入る。

1700年代中後期のころの茶椀や広東椀、土瓶や端反椀等が出土している。最下層にはレンガやガラス等を含み（ガラスは混入品の可能性もある）、19世紀後半（明治）以降の遺構と推定できる。中層に寛永通宝を含む。埋土3層にコンクリート壁を含む。

遺物

陶磁器

図69-1は陶器に染付をしている皿で、高台径7.6㎝、残存器高4.8㎝を測る。陶胎染付であるが胴部が欠損しているので描かれている文様の内容は不明である。見込み部分に重ね焼きのための蛇の目釉はぎを施し、砂を置いている。

陶器の特徴から17世紀後半と考えられる。

古い段階の代表的なものはPh.59の中段のものである。Ph.60-5は雪持笹文の筒形椀である。Ph.60-4はくらわんか手の内面唐草文で見込みにこんにゃく印判がある皿等の時期のものと推定できる。

Ph.56-13は二重網目の小形高台の椀である。

新しい段階のものはPh.55-14・15、Ph.61-3・4等の端反椀、Ph.59-4･5の広東椀である。

青銅器

図90-4（Ph.105）は北側の埋土2層から出土したもので、径8.2㎝、厚さ1㎜に満たない薄さの皿と考えられる。木質状の痕跡が一部残存するが、埋没する過程で付着した可能性もある。灯明皿等に使用した可能性もあるが不明である。

図90-3（Ph.105）は青銅製切羽である。長軸3.5㎝、短軸2.5㎝で、孔の長さ6㎜、幅は2.5㎜（刀子の大きさ）である。

鉄器

図90-10（Ph.103）はやりがんなで、長さ8㎝以上測る。

図90-11･12･13（Ph.103）は釘である。基部幅6～7㎜で3寸釘と推定できる。頭部幅は約1㎝で、幅は5～8㎜でT字形である。

図90-14･15･16（Ph.103）は2寸釘で、基部幅5㎜である。

図90-17は1寸半だが基部幅は5㎜である。

図90-9（Ph.103）は刀子と推定される。幅は1.5㎝で刃部は欠損する。

まとめ　上部が削平されたゴミ捨て穴等の可能性がある。鉄釘類及び青銅製の皿（盤）等多岐にわたる遺物が出土している。遺構の年代は新しいと推定したが、遺物の残存状況も良好で古段階の良好な遺物を含む。

20-SK（図22･43･44･45）

位置　1区の北側S20W10に位置する。北側は調査区外、上層は削平されているため詳細は不明である。

構造　掘り方の形状は不定形で、長軸約90㎝、短軸約20㎝以上で、深さ約45㎝、埋土は2層に分けられる。上層には焼土粒を含む。下層は暗褐色シルトでしまりがある。

遺物出土状況　数点の陶磁器及び瓦片の出土のみである。

まとめ　上部が削平されたゴミ捨て穴等の可能性がある。

20b（23）-SK（図22･43･53･54）

位置　1区の北側S20W10に位置する。北側は08-SKに壊されている。

構造　掘り方の形状は不定形で、長軸約90㎝、短軸約50㎝以上で、深さ約45㎝を測る。

遺物出土状況　遺物は出土していない。

まとめ　上部が削平されたゴミ捨て穴等の可能性がある。

17-SK（図22･43･46･47）

位置　1区の南東側のS20W5に位置する。18-SKの北側を壊している。

構造　掘り方は円形を呈すると推定される。長軸・短軸とも径約80㎝と推定され、断面は皿状を呈する。検出面からの深さは約30㎝である。埋土は褐色シルトである。

遺物出土状況　数点の陶磁器及び瓦片の出土のみである。

まとめ　17-SKが切っている18-SKからは古代の遺物が出土しているが、遺構の時期としては近世に下る可能性があることから、17-SKも同じ時期と思われる。

⑵　溝

10-SD（44-SX）（図22･43･50･51･90、Ph.62･105）

位置　1区の南側で東西に走る。南側の肩は調査区外に伸びる。西側・東側も調査区外へ溝は続いている。50-SK及び122-SK等を壊している。

構造　幅は1m程と推定できる。断面での深さは40㎝程と推定できる。底面の高さは、東西で差は明確でなく、どちら方向に排水できるか明確にすることができなかった。西側は124-SK及び54・55-SKが位置し、掘削されており平面プランを確認できなかったのも一因である。

また、東側も50-SK、53-SPが位置し、プランを明確にできなかった。東側・西側とも若干南側に屈曲して伸びていた可能性もある。

断面の形状は逆台形状で埋土は3層に分かれている。上層は炭混じりの灰褐色シルトで瓦を多く含む。下層には瓦の他陶磁器を多く含む。擂鉢も出土している。

遺物出土状況　Ph.40-1は芙蓉手の大皿である。

Ph.40-2は型押成形の鉢で、内面見込みに丁寧に染付で風景が描かれる。

Ph.40-4・14はあざみ等の花文で端反椀である。

Ph.40-5・6・10は広東椀である。Ph.40-14は端反椀の蓋と推定でき、Ph.40-4と対になると推定できる。

Ph.40-12は象嵌の急須である。濃緑色の釉薬がかかる。

小結　出土遺物の時期は多岐にわたるが、18世紀後半から19世紀にかけて機能した溝と推定できる。

貯蔵施設と他の空間を区画したものか。排水機能の痕跡は明確でなかった。

05b-SD（図22･43･44）

位置　1区の南側でS20W5に位置する。09-SKと17-SKを区画するような位置関係である。

構造　幅は30m程と推定できる。深さは25㎝程と推定できる。底面の高さは、南側がやや低い。

遺物出土状況　遺物は出土していない。

小結　柱穴を壊している状況であるので19世紀段階の区画のための溝と考えられる。土地利用が南北方向から5°程振れている状況が判明する。

⑶　柱穴や建物

54b-SP（図22･43･48･49）

位置　1区S20W10に位置する。調査区の南東隅である。

構造　平面形が長軸約80㎝、短軸60㎝の楕円形の掘り方を持ち、深さ60㎝のものが上層に、平面形は、長軸約60㎝、短軸約50㎝、深さ40㎝の柱穴が重複しているような断面構造である。

遺物出土状況　検出上面に桟瓦2個体分が出土している。

小結　10-SDとこの遺構の関係がつかめなかった。時期的には18世紀代の可能性が高い。

かなりしっかりした柱穴のため、その時期の主柱穴と推定したい。

他の建物

貯蔵穴やゴミ捨て穴等の遺構で柱穴は壊されている可能性が高く。建物を復元するのは困難である。

それでも、いくつかの柱穴を検出しているのを取り出したのが、図56・57である。

上面が削平されているので構造を検討するのは容易でないが、深さ30 ～ 40㎝の掘立柱構造のものが中心となる可能性が高い。

柱間距離は5尺から8尺程度と考えられる。

礎石構造のものは、石等が出土しているものもあり考えられなくもないが、セット関係になるようなピット群は明確でない。

ゴミ捨て穴等の位置や春木坂等との位置関係から母屋等の主たる建物はこの区画にはなかったと考えられる。

第8節　近代以降の建物等の調査

2区北側の調査区に黄褐色粘質土の整地層（包2層）を除去すると、ぐり石の入った溝状の遺構、及び、直径50㎝程のぐり石の入ったピット状の遺構を3区画検出した。

98-SB（図66･83、Ph.11･12･95）

位置　２区の中央からやや北側のN0W5に位置する。

構造　南北3m以上、東西3.6mの区画が10 ～ 15㎝のぐり石が入る溝に囲まれている区画の建物の前段階に存在したと考えられる建物である。

柱間距離約1.2mで、柱穴の堀り方は円形～隅丸方形、35 ～ 50㎝、深さは15㎝程である。南東隅の柱穴は40㎝とやや深い。掘立柱の建物と推定できる。北側の調査区外に伸びると考えられ、2間×2間以上の建物と推定できる。

建物の軸は、N-6°-Eである。

遺物出土状況　柱穴から瓦等が出土している。

小結　出土瓦から、後述する98b-SK・101-SB等より若干さかのぼる段階の遺物と考えられる。

98b-SB

位置　２区の中央からやや北側のN0W5に位置する。

構造　南北3m以上、東西3.6mの区画が10 ～ 15㎝のぐり石が入る溝に囲まれている。

構造は不明であるが、ぐり石の溝が布掘りの基礎と考えられると、5間×3間の建物と推定できる。

ぐり石の軸は、N-6°-Eである。

遺物出土状況　ぐり石内から瓦等が出土している。

小結　防空壕（130-SX）が埋まった段階で作られていることから戦後の建物の基礎と推定できる。

96-SB（図59）

位置　２区の中央からやや北側のS5W5に位置する。

構造　南北5.4m、東西7.2mの区画が10 ～ 15㎝のぐり石が入る溝に囲まれている。内部には1間×3間に柱列が重複して検出している。

構造は不明であるが、ぐり石の溝が布掘りの基礎と考えられると、5間×3間の建物と推定できる。

1間は約1.5mの五尺で北側の柱間距離は7尺である。

ぐり石のピットの深さは10㎝程度である。

建物の軸は、N-6°-Eである。

遺物出土状況　ぐり石内から瓦等が出土している。

小結　防空壕（130-SX）が埋まった段階で作られていることから戦後の建物の基礎と推定できる。

101-SB

位置　２区の中央からやや北側のN0W5に位置する。

構造　南北3m以上、東西4.5mの区画が10 ～ 15㎝のぐり石が入る溝に囲まれている。北側は調査区外、南側は96-SBに壊されており、不明である。内部には1間×2間に柱列を検出している。

南北の構造は不明であるが、ぐり石の溝が布掘りの基礎と考えると、3間×3間以上の建物の基礎と考えられる。

1間は約1.5m（五尺）で、東側の柱間距離は4尺から4尺半程でやや狭い。

ぐり石のピットの深さは10㎝程度である。

建物の軸は、N-6°-Eである。

遺物出土状況　ぐり石内等から瓦等が出土している。

小結　防空壕（130-SX）が埋まった段階で作られていることから戦後の建物の基礎と推定できる。

まとめ　２区の調査区北側に少なくとも2時期にわたり建物が建てられていたと考えられる。防空壕や攪乱からレンガも出土しているので、そうした素材を使った可能性がある。31-SXや井戸等はそうした関連施設の可能性もある。

第９節　立会調査

遠隔露場整備事業に伴い観測建物縮に伴い、旧第1庁舎から第2庁舎等5つの建物を解体するに伴い、立会を行った。

その結果、いくつかの遺構を確認するに至った。

別表でまとめる。(図10～15・70・83・84・92、Ph.69・71・96・110)

以下特出すべきものを詳述する。

⑴　1番の成果はA地点で奈良時代中葉の平瓦が出土した点である。偏行唐草文軒瓦（図70-2）である。外区上部に連珠文を施し、外区下部から側面にかけて面違鋸歯文、内区には偏行唐草文が施されている。土坑から出土しており、奈良時代の遺構が本調査区より北側に広がっていることが確認できた。

⑵　近世以降の土坑等の遺構が北側にも広がり、遺構がやはり重複していることが判明した。

ただ、今回確認できたものは本調査で確認できた18世紀以降の遺物が多く確認された。

⑶　SK07では唐津系の刷毛目甕が埋置された状況で確認できた。

⑷　板塀瓦がほぼ完形で採取できた。(図92、Ph.96)

第Ⅳ章　考古学的分析

第１節　古代の瓦について

古代の瓦については、軒丸瓦から見ると大きく３つの型式に分類できる。本来は様式を考えなければならないが、瓦は再利用が多く、時期を限定できる遺構も少ないため、広義の「型式」という用語を用いたい。また、瓦は再利用をする場合が多いという特徴を持つため「段階」という用語も控えておきたい。

１　伝大道寺跡Ⅰ型式

１つは、図72-１（Ph.65）の軒丸瓦の瓦当で、単弁の蓮華文である。中房は珠文が３個遺存している。間弁に珠文が位置するので、復原すると中央に珠文1、外側に珠文8、間弁8、単弁８の文様構成である。

中房の高さは6㎜と高く、間弁も中房まで入っており大野城等で出土している単弁蓮華文と共通する。ただ、弁の頂部に稜線が入らない。弁の高さも3㎜程度である。

すなわち、新しい要素と古い要素を持っていると考えられる。

熊本県で型式的に一番古い瓦は鞠智城出土瓦である。その次に位置づけられるのは、立願寺廃寺出土の瓦と考えられる。さらに、それと併行するか次の段階と考えられるのが、陣内廃寺出土単弁蓮華文瓦や渡鹿Ａ地点出土の単弁蓮華文瓦と考えられる。

型式的には立願寺廃寺のものに類似するが、先に述べたように、摩滅もあるが、弁の稜の表現等が緻密でない。中房の表現は段もあり古い要素を持つ。立願寺廃寺の間弁がつながっているのに対し、独立していることが異なる要素である。

厚さ1.3㎝程の丸瓦に接合していると考えられる。瓦当の裏面は指ナデ調整が明瞭に残る。この瓦当に接合する瓦は図81-５（Ph.80-6）の様な瓦と推定する。厚さ1.3㎝の丸瓦で幅2㎝程度に縦方向にナデているが、その前に曲線（横）方向削り（へらナデ?）している。

側面は凸面側にヘラ切りしている。

外区の形状は、黒色整地層出土の（Ph.73-６等）凹線状の３条の形式が推定される。

この瓦とセットになる軒平瓦は出土していないが、推定外区と共通する形式が想定される。

平瓦のうち、格子目タタキが残っている瓦は模骨痕が良好に遺存する。

大きく、斜格子目タタキと格子目タタキに分かれる。この遺跡では斜格子目タタキの瓦が多く、格子目タタキは少ない。平原瓦窯跡では後者が多いため、逆に後者の一部がこの型式に伴う可能性がある。〔黒褐色整地層出土格子目タタキ平瓦（図73-４・６等)〕

先に述べた図81-５以外に対応する丸瓦は、２区88-SK出土（図80-7、Ph.79-4）が考えられる。外面に格子目タタキが残存する。５本/3㎝の細かい格子である。側面には分割線の高さ約1㎝の部分は平滑で凸面側の部分は折りとられたままである。

また、111c（184)-SK出土（図81-6）の丸瓦は、凸面が丁寧にナデで仕上げらているが、部分的に平行タタキが残存する。側面は２面ヘラで切っており、一番広い側面は凹線状の痕跡が残存する事から古くさかのぼる可能性も考えられよう。

２　伝大道寺跡ⅡＡ型式

２つ目は、複弁の軒丸瓦である。図72-２･３･４である。複弁蓮華文瓦である。複弁部分はいずれも摩滅して高さは不明である。間弁の高さは3㎜程の高さがある。珠文は間弁と複弁の中央に配置されている。外区内側に面違鋸歯文を配置している。

瓦当部の厚みは1.3㎝と薄く、8㎜程の粘土を後ろから足して接合している様子がわかる。

中房の様子は不明であるが、2000年度の熊本市教育委員会伝大道寺跡遺跡群第１調査区で出土している軒丸瓦に類似すると考えられる。

外区の連珠が複弁の頂点と間弁の頂点に配置されていること､外区の内側の部分に面違鋸歯文を配置していること、複弁の形状の凹凸がやや低い可能性があることなど総合的に考えて、国分寺僧寺の創建期の瓦より古く、平原瓦窯跡の軒丸瓦よりやや新しい一群と考えられる。

対応する軒丸瓦は、立会調査の502-SK出土（図70-2、Ph.71-2)、２区163-SK出土（図71-4、Ph.71-3)、２区38-SK出土（図71-4、Ph.71-4）等が想定される。

凹面に模骨痕を残し、外区上部に連珠文、外区側面及び下部に面違鋸歯文を配置する。中央は偏行唐草文と推定される文様を配置するという共通点がある。唐草文の細部が異なり、同笵とは言えないが、唐草文の幅や高さ等も含めて同一型式と考えたい。老司系瓦の系譜を引くものと推定できる。

ただし、502-SKの出土瓦は、型式的には平原瓦窯跡より新しく、国分僧寺跡より古い型式と想定する。対応する平瓦は模骨痕を持つ（斜）格子目タタキの可能性がある。それは502-SKの平瓦の裏面はナデ消しているが、一部に斜格子ないし格子目タタキが遺存していることから伺える。格子目と凸面部の幅が2 ～ 3㎜とやや細い。

対応する丸瓦も模骨痕が見られると考えられる。

側面には折り取り痕跡を持つもの（図81-1、図82-1等）がその候補に挙げられるが、図79-1等模骨痕を持ち側面を面取りした瓦もその候補に挙げられよう。

3　伝大道寺跡ⅡＢ型式

平瓦で数量で多いのは、凸面縄目タタキのものである。薄手1.5㎝未満、1.8㎝以上で2㎝前後、2.5㎝前後のものに分けられる。数量では中くらいのものが多い。

模骨痕が明瞭に確認できるものは、ほとんどない。ⅡＡ型式まで縄目タタキの瓦がさかのぼる可能性もあるが、現在のところ、この型式以降と考える。側面にヘラで面取りをしているものが区別できる。軒丸瓦は凹面部分の側面を明瞭に面取りしているため、縄目タタキが残り、面取りしている平瓦で、この時期に含まれるものも多いと考えられる。（図77-2、図77-3、図74-3、図75-3等）

縄目タタキも縦位方向に整然としているものが多いと考えられる。

また、図72-8（Ph.71-6）は外区を凸線で表現した鋸歯文を持ち、瓦当と丸瓦の接合方法が異なるため、1型式の設定が必要と考える。1点のみであるため、仮にⅡＢ型式としておく。

『九州古瓦図録』の図版67、伝大道寺跡の1で簡略された複弁蓮花文がある。外区に梅花文を半裁した様な文様（唐草文が退化したものか?）が施されており、このことからこの型式前後の時期に併行するものと考えられる。（型式的にはⅡＣ型式と呼ばなくてはならないが。）

4　伝大道寺跡Ⅲ型式

この時期の軒丸瓦は図72-5（Ph.71-7）である。表面は摩滅しており、明瞭ではないが、単弁の蓮華文軒丸瓦である。外区に粘土の付け足しが周辺に付く。その粘土の付け足しの調整は簡易なものである。

『九州古瓦図録』の図版67、伝大道寺跡の2の文様が退化した可能性がある。

その瓦とセット関係になるのが、図71-7（Ph.71-5）である。半裁花文を内区に配置する。粘土を外区周縁に継ぎ足しており、先の軒丸瓦と共通する。また、接合しているナデの状況も共通する。

軒瓦とセットになる平瓦、丸瓦を断定するのは困難である。凸面は縄目タタキで、凹面は布目と考えられるが、特定できない。

Ⅱ型式の平瓦と分離しなければならないが、まだそこまでの分析ができていない。

ただ、凸面は斜位の縄目タタキが残存するものが、この型式に併行すると考えている。軒平瓦で顕著に見られないように面取りがないものも多いと考えられる。

肥後国分僧寺の唐草文が退化して、鳥足状になっている瓦も、顕著な縄目タタキが残存することから、この時期まで平瓦はⅡ型式の瓦の製作技法を踏襲していると推定する。

第２節　不明土製品について

土製品

164-SKから黒褐色整地層と接合する土製品が出土している。

特徴は厚さ1.4 ～ 1.5㎝の楕円形の土管状で、上に行くに従い径が小さくなる。底部は波状に切られている。側面やや正面よりに鰭状のものが付くと推定される。接合痕から鰭状のものは剥離している。

円筒（円錐）状の外面には指ナデによる縦方向の凹線状の文様を施す。背面は高さ約10㎝までは凹線状の文様が施されるが、それより上は縦方向の丁寧なナデ調整である。

時期的には9世紀以前と考えられ、黒色整地層等の破片と接合、厚みが1.4 ～ 1.5㎝程度であること、円筒から円錐状で鰭を持つこと、表面は外側に凹線ではあるが鰭の表現としてみることができること、これらの特徴から、鴟尾の可能性があると考えられる。法量的には高さから見て、30 ～ 35㎝と低く厳しい。鴟尾と考えるとミニチュアの可能性があるが、底部を波状に調整しており、下に続く破片が見つかれば、小形の鴟尾と考えられるであろう。

ただ、鰭の表現が縦方向であるので、かなり上部付近と思われるが、それが問題点となる。鰭の表現も凹線状で簡素で、類例がなく今後の課題であろう。

第３節　古代の遺構の変遷について

伝大道寺跡瓦Ⅰ型式の遺構を特定するのは難しい。ただ、分布は3区、2区北側に多く、1区の東側に瓦が分布する傾向にある。

黒色整地層から、格子目タタキの瓦が多く出土していることから、1区と2区の北側付近にこの時期の遺構が存在した可能性がある。

今回調査して出土した土器のうち最も古いものは、図63-16で、7世紀後半（太宰府ⅠＡ期）併行期と考えられる。2区北側で出土しており、Ⅰ型式の遺構が広がっている地域を傍証するものである。

第ⅡＡ型式の瓦も、軒瓦はⅠ型式のものとあまり分布は変わらない。ただ、1区からも出土しており広範囲にわたる。2区東側で検出したピットを柱穴と考えると、この時期の可能性もある。

この時期の土器は、図63-17･19･24･30等が該当する。ⅡＢ型式期は遺構の所在は不明であるが、土器型式で言えば、図63-19・23・25・26・28等があたり、『九州古

瓦図録』図版67の伝大道寺跡の1や先の瓦の時期は、肥後国分僧寺跡の創建期よりやや下ると考える。Ⅲ型式の時期は、出土した土師器の大半を占める時期で太宰府編年Ⅵ期併行期と考えられる。

163-SKはこの時期と推定できる。

黒色整地層も瓦の出土状況からこの時期かⅡB型式併行期に行われた事業と考えられる。

1区検出の17・18-SKも同様である。

第4節　近世の遺構の変遷について

大きく分けて4時期に区分される。①古い唐津系の陶器を伴う17世紀中葉～後葉の遺構、②唐津系の見込みが釉剥ぎされ、銅緑釉薬をかけた椀や皿で、佐賀県の嬉野の内野山窯系の特徴を持つ17世紀後半から18世紀前半、③くらわんか手と呼ばれる波佐見等で焼かれる肥前系の時期、④広東椀や端反椀を伴う時期、18世紀から19世紀にかけてのものである。

17世紀中葉から後葉（一部18世紀に入る）;A期（3区70・77-SK、2区170・169・172・175・209-SK)、17世紀後葉から18世紀中葉を中心とした時期;B期（3区　65-SK、2区150・201・97・204・135（古相）・111（中相)・38-SK)、C期は主に18世紀（一部19世紀）に入るか（2区106-SK（新相)、135-SK（新相）等)、D期は主に18世紀末から19世紀にかけての時期区分としては4時期に大別できる。圧倒的に多い時期は、3区と同様、D期である。

3区からつながる北側に17世紀代の遺物及び遺構が見られる。2区北側は17世紀代の貯蔵穴やゴミ捨て穴の区域である。

遺構としては、円形や隅丸方形の約1.5mや約1mの規模で、前者は深さ約70cmから1mである。後者は深さ約50cm以下のものも多い。

A期は3区及び2区北側に偏在し、1.5 ～ 2mの楕円形のプランで、深さ50 ～ 60cmのものが多い。

B期は2区東側に多く、1.5mの規模の楕円形プランで、深さ50 ～ 60cmのものが多い。

C期は深さ50 ～ 60cmのものが多いが、石組のものも含めて多様性がある。

貯蔵穴や廃棄土坑（ゴミ捨て穴）が多いと考えられる。柱穴は近代の遺構を除くと、貯蔵穴が希薄な部分に検出している。中央部に径20 ～ 30cm規模の柱穴の掘り方が約1.2m間隔に検出されたり、径50 ～ 60cm規模の柱穴の掘り方が約2.4m間隔に検出されたりしている。また、南側にも撹乱が多く、建物の復元までには至らないが、建物が存在した可能性がある。また、北西区域及び東側にもそうした可能性が示唆できる。

建物の時期は土坑が埋まった段階のものが多く、18世紀後半（古くとも）から19世紀にかけてが多いと推定できる。

ただ、貯蔵穴の各時期の分布を考えると、2区の中央部分にはA ～ Cの各時期の簡易な建物があった可能性も考える。

いずれにしても、D期は遺構の重複を考えると、少なくとも3時期以上に細分され、3mずつ程に漠然とした配置でゴミ捨て穴等があったと考えられる。また、建物の中心は東側か北側にあった可能性が高い。

建物の礎石となりうる石材も明確でない。出土石材はぐり石のほかは凝灰岩が多く、化粧材や排水に伴うものとして活用されたものであろうか。

第5節　近世の瓦（表5）

1　軒丸瓦（図83-3・4；瓦№26、27、39）

瓦№26、27、39は瓦当のみの残存である。どれも全体をナデで調整しており、27（図83-4）は丁寧にナデている。27（図83-4）は三巴文左巻、珠文10個が廻っている。巴の尾は次の巴頭と接することなく、徐々に細くなり、次の巴の3分の1のあたりで一条の突線を呈するようになる。26（図83-3）は三巴文右巻､珠文は残存6個、復元すると8個廻り、巴の尾は次の巴頭と接することなく徐々に細くなり、次の巴の3分の1を過ぎるあたりで接する。39は三巴文左巻、12個の珠文が廻る。巴の尾は次の巴頭と接することなく徐々に細くなり、次の巴の半分のあたりで一条の突線を呈するようになる。

2　軒平瓦（図84-1・2；瓦№19、25、28、30、33、38）

今回出土の軒平瓦はどれも全体をナデで調整している。瓦№19･25･28･33･38はコビキ痕が見られなかったが、30はコビキB（鉄線切痕）が確認された。瓦当では､19（図84-2）は中心飾りのほとんど残存していないのだが、おそらく宝珠文と思われ、その脇から唐草文が延び、下→上→下と展開する。25（図84-1）は十字円形中心飾りと唐草文が見られ、中心飾りと接せず下方から唐草文が左右に延び、下→下→下→上下と展開する。28は瓦当のほとんどを欠損しており、文様の詳細は不明であるが、唐草文と思われる。30は三巴文左巻と思われる中心飾りと唐草文である。唐草文は中心飾りの脇から延び、上→下と展開する。胴部凹面に印がある。33は三巴文右巻中心飾りとその脇から唐草文が延び、上→下→下と展開する。38は三巴文右巻中心飾りとその脇から唐草文が延びているが欠損が著しいため詳細は不明である。

3　丸瓦（瓦No.16、22、23、31、35、40、41）

丸瓦のほとんどが胴部凸面縦方向のヘラケズリのちナデ調整を施しており、凹面はコビキA（糸切痕）調整をしている。

瓦No.22（図85-3）は胴部凹面にクロスしている吊り紐跡が確認された。また、二方向からのコビキAを施し一部施していない箇所がある。そこはコビキ痕の部分より1㎜ほど高くなっており、ナデ消した跡は見られない。おそらくコビキAを施さずとも台から剥がれたものと考えられる。台から剥がした後、凹面全体をヘラで軽くナデたのであろう。玉縁は残存していないのだが、境目の所に竹管文が一カ所見られる。半分以上の欠損なのでいくつ施してあったのかは不明である。31、40はどちらとも胴部凹面にコビキAが見られ、凸面に梵字らしき印が施されている。

4　平瓦（図83-1・2、図84-4・6；瓦No.15、17、18、34、36、37）

胴部凹面では、瓦No.37はコビキBが見られ、出土した他の瓦では確認されなかった。瓦No.15・18は縦方向ヘラケズリのちナデ、他はナデ調整を施している。胴部凸面では、15・17・37は縦方向ヘラケズリのちナデで、37では棒状工具で削った痕跡が見られる。他はナデで調整している。17は凹面に「×」の印あり。

5　滴水瓦（図83-1・2；瓦No.20、21）

瓦No.20、21（図83-1・2）ともほとんど欠損しているため詳細は不明である。両者とも裏面をナデで調整している。20は桔梗文が中心に配置され、唐草文は桔梗文の脇から延び、上→下と展開する。21は梵字様円文のみの残存で他は欠損しているため、全体の文様は不明である。

6　桟瓦（瓦No.29、32）

瓦No.29はほぼ完形である。全長28.3㎝、幅29.5㎝、高さ5.8㎝を測る。胴部凹面（丸瓦凸面）は縦方向ヘラケズリのち縦方向ナデ、広狭端部は横方向ナデ、胴部凸面（丸瓦凹面）は不定方向ナデ調整を施す。瓦No.32は軒桟瓦で、軒丸の瓦当は三巴文、軒平では剣菱文中心飾りとその脇から退化した唐草文が延びる。上→上→上→下と展開する。

7　鬼瓦（瓦No.42、43）

瓦No.42は左上部のみ残存している。裏面はヘラケズリのち不定方向のナデ、瓦当の一部・周縁をナデで調整している。瓦当は大半を欠損しているため詳細は不明であるが、おそらく「金」という文字を型取っていたのではないかと思われる。瓦No.43は裏表ともナデ調整を施す。左側側縁には漆喰が付着している。瓦当は菊花文である。

8　板塀瓦（図92）

立会調査のD地点で板塀瓦のほぼ完形品が出土している。幅約34㎝である。端部から4㎝、孔間距離は18㎝である。智照院細川家墓所のST-3（尚房室（1727年没）万塔）墓のから出土しているものに類似するので18世紀前半頃のものか。

9　刻印瓦（Ph.90-3・5）

Ph.90-3・5は土山瓦師の刻印で、土山勘七（長久寺の過去帳より推定）と推定できる。同様のものが熊本城不開門櫓に現在使用されている。

＊肥後國誌の上益城郡鯰手永小池村の項に「瓦師土山村ニテ屋瓦等ツクル」の記事がある。18世紀初めには造瓦が始まっていたと推定されている。（『益城町史　通史編』1990による）

・小結

今回、近世瓦が多数出土したが、特徴のある28点を取り上げた。瓦の種類ごとに製作手法を中心に記述した。時期区分は陶磁器A～D期を採用する。

A期（17世紀中～後半）に属するものは15～18（図84-5）、21（図83-1）、22（図85-3）である。18（図84-4）、16（図85-4）は3区70-SK出土、21、15、22、17は3区77-SK出土である。

B期（17世紀後半～18世紀中頃）に属するものは、19(図84-2)、26である。26は2区134a-SK、98-SB Pit8出土、19は立会SK-07出土である。

C期（18世紀 ※一部19世紀含む）は25、28にあたる。25は2区159-SK出土、28は2区134b-SK出土である。

D期（18世紀後半～19世紀）は27、30～32、42にあたる。27は2区185-SK出土、42は2区130b-SK出土、32は2区218c-SK出土、30は1区15-SK出土、31は1区12-SK出土である。

近代は41、43にあたる。41は31-SX出土、43は96-SB Pit4出土である。

A期にあたる21、22は滴水瓦である。滴水瓦は李朝系瓦のため16世紀末から17世紀初頭に出現する。出現時期よりも時期が新しいため、使用期間が伺える良好な資料である。他15～18も遺構のA期に相当するのだが、調整手法やその他の特徴からA期と決め難い。

A期に属すると考えると滴水瓦の棟瓦、凹面コビキA（糸切り痕）を持ち側面を面取りし、凸面に丁寧に縦方向の最終調整を丁寧に施す丸瓦、凹面縦方向ヘラケズリのちナデ、他はナデ調整を施している。凸面は、15・17・37は縦方向ヘラケズリのちナデの丁寧な最終調整を持つ平瓦のセットが想定される。

B期に埋没した遺構から出土している26（図83-3）の軒丸瓦は文様の特徴、宝珠の数から、17世紀前半までさかのぼることができ、B期よりも古い。おそらく、長くとも18世紀中頃まで葺かれ､廃棄されたのであろう。19（図84-2）の軒平瓦は小片で軒部分の文様が半分以上欠損しているため、明確には言えないのだが、18世紀代と考えられ、B期の時期と合致する。板塀瓦（図92）等もこの時期に該当するならば、B期以前の屋敷の軒瓦及び塀等の意匠が推定できる。

埋没時期がC期にあたる遺構から25（図84-1）、28（Ph.89-1）は、両方とも軒平瓦である。28は軒部分の大半を欠損しているため、時期判断は難しいが、25（図84-1）は唐草文の特徴から17世紀後半～18世紀前半までさかのぼることができる。C期よりも若干下るのだが、使用期間を考える上で良好な資料と言えよう。

D期は27（図83-4）、42の三巴文と宝珠の特徴から18世紀後半以降と考えられる。32（Ph.89-5）の桟瓦は江戸時代中期から活発に製作されるようになるため、それ以降であろう。

全てを観察すると、瓦当の文様、調整の特徴から16世紀末から17世紀初頭からの瓦の出土が見られる。また、防空壕（130-SX）出土の瓦もあり、近代まで見られ時期幅が大きい。

それでも、17世紀中頃から18世紀後半まで、本瓦葺きの屋根瓦が想像できる資料は出土したと考えられるが、その時期の瓦の出土量は少ない。調査区では2区北側及び3区に17世紀から18世紀前半代の瓦が集中するのは、陶磁器や遺構だけではなく、瓦についても言える。

立会調査のSK-05やSK-07でも17世紀～18世紀前半代の瓦が出土していることからも、屋敷の中心は調査区の北側と考えてよいであろう。

今回、土坑からの出土が多く、建物に伴っていない。また、上記で述べたように、A～D期よりも時期をさかのぼる瓦が多く見られる。つまり、このことは、使用から廃棄されるまでの期間を想定するに難くない。このことを踏まえると、大体10～30年、長くて50年使用されていたと推測できる。瓦の製作年代から廃絶時期を伺う上で良好な資料と言えよう。

また、京町台地上にあり、熊本城下の武家屋敷として位置している。近世瓦の出土量や立地を考えると、熊本地方気象台旧敷地内は、絵図や古文書などの史料から、江戸時代の武家屋敷があったことは確実である。鬼瓦や滴水瓦も出土しており､それを裏付けるには十分な資料と言えよう。

（藤島）

第6節　土人形について

1　土人形とは

土を原料に作られる人形には、一般的に土(つち)人形と土(どろ)（泥）人形と呼ばれるものがある。

富田公夫氏（「庶民の祈りと山陰の土人形」1992『別冊太陽』）によると、“伏見人形などの大方の土(つち)人形は「泥をこね、型に入れ、素焼きにして胡粉を塗り、彩色する」この方法をとる。しかし、米子の土人形は焼かないで、土を乾かしその上に和紙を貼って固めてあるので泥人形といわれている”との一つの定義がある。

つまり、

粘土成形→自然乾燥→彩色

粘土成形→自然乾燥→素焼き→彩色

この2パターンから①が土(どろ)（泥）人形、②が土(つち)人形に分類ができる。そこで上記に照らし合わせると、本遺跡出土の人形は素焼きしてあることから土(つち)人形であると言える。

土人形の基本的な製作方法は、

① 表裏二枚の型の内側に、粘土の型離れをしやすいように雲母をまぶす。
② 粘土を押して型に埋め込む。
③ 表・裏の型を合わせ、しばらくして型抜きをする。
④ 合わせ目の余分な土を削り、自然乾燥させる。
⑤ 約800度の温度で素焼きし、膠で溶いた胡粉で下地塗りする。
⑥ 乾燥後、膠で溶いた顔料で彩色し完成。

土人形製造にあたり、型を作るためには原型となる人形を作る必要があり、これには彫刻の才と、最後の彩色で作品の良し悪しも決まるため、絵付の才も要する。このように専門性を有するため、大量生産の際には原型を専門に営むもの、抜き型や型屋もあったと言われている。また持ち帰った人形をもとに孫型を作ることもあったようで、同じような類の人形が各地に見受けられる原因はここにある。しかし各地で同じような型のものがあっても、その描彩はその土地の郷土色が反映されて変化している。

また、土と書いて「どろ」と読ませるのは、一説には彩色の際に泥絵具を使用していたことに由来しているようであり､このことから土(どろ)（泥）人形と呼ばれていることもある。本遺跡出土の土人形を考察するにあたり、出土土人形に関連する各地の人形製造について紹介したい。

全国の土人形の祖は、京都の伏見人形と言われ、江戸時代初期に伏見稲荷神社の参道で売られ始め、元禄期の頃本格的に製造されるようになった。その後、型を使って大量にしかも安価で作られたが、運搬等の費用がかさむため各地で似たものが作られるようになり、全国に広まっていったものと考えられている。九州では文化面的中心地であった博多を中心に伝播し、より地方色を強めながら各地に定

着していった。その土地の風俗・信仰と密接に関わりながら、後には主に子どもの遊び道具として作られてきたことから、郷土玩具・郷土人形と呼ばれることもある。

熊本では木葉猿と天草土人形が現在において確認されている。木葉猿は表裏の型で作る人形ではなく、手捏ねによる土人形と泥面子であるため上記の土人形とは異なる。

2　各地の土人形

博多人形は、宝暦末期（1760年代）頃、瓦師四代目正木宗七が火鉢や陶炉などの製作の傍ら創始。さらに文政年間（1818～30）彫刻の名手、中村放水軒に師事した中ノ子吉兵衛が陶業のかたわらその技法を生かした胡粉彩色の素焼き人形を創作し、今日の博多人形の基礎を築いたと言われている。正木宗七の宗七焼、小堀善左衛門の細工物人形は中ノ子の土俗玩具人形に間接的に影響を与えたようである。

津屋崎人形は、18世紀末に福岡県福津市津屋崎において、博多人形に倣い、卯七・半兵衛親子が土器つくりの傍ら作り始めたのが起こりと言われている。

弓野人形は、明治15年（1882）佐賀県武雄市西川登町弓野で博多人形師の原田亀次郎が作り始める。亀次郎はその後、江口家の婿養子に入り、江口人形店を開業する。

尾崎人形は、弘安の役（1281年）で捕虜となった元軍の兵士が、佐賀県神埼市尾崎で伝えたことが始まりと伝えられている。

古賀人形は、文禄年間に長崎県長崎市古賀で農業の傍ら小川小三郎が作ったのが始まりとされ、天和年間に孫の喜左衛門が肥後藩より土器製造の技術を買われて招かれた際、当地の人形製造を学び、以後本業にしたと言われている。

天草土人形は、享保年間に天草市本町で唐津藩出身の浪人、広田和平が作り始めたと言われている。四代目利八の頃最盛期を迎え、熊本や博多から技法を学び、下関まで商いを広げていたようだ。そして昭和27年、七代目元一の頃、戦後の経済状況の悪化により途絶えた。三代目政吉までは伏見人形の影響が強いが、四代目利八の頃から型として博多系のものが多く、津屋崎・弓野人形と共通するものが大部分を占め、天草にも弓野人形が多くもたらされており、弓野人形との関係は密接だったようだ。

3　熊本において

山村信榮氏（2008「九州各近世都市出土の素焼人形」）によると、“幕末段階において博多では、中ノ子家を中心にかなり多量の生産をしていたようであり、運上帳では「かた屋」の記述から、製造各段階で分業化があったようである。口伝では嘉永年間に肥後の職人を雇い入れて大型人形の制作を始めた”とされ、他国との技術交流があった様子が窺える。長崎との海上交易では、生人形作りに必要な諸材料が割と安価に求められたようであり、土人形作りの諸材料の中でも高価な絵具類も手に入ったのではないか。

熊本では、蓑田勝彦氏（1998「江戸後期熊本町における商品生産･流通の資料紹介」）によると、“永青文庫の「町在」の中にある史料に、文政9年（1862）の段階で新細工町や高麗町、新職人町での人形製造で生計を立てていた家は62軒278人とある。このうち新細工町は別の史料によれば80軒余とあるので、町内の約40%が人形製造に従事していたことになるようだ”というデータもあり、19世紀中ごろ以降の九州各地の城下町では活発な人形生産が行われていたことが想像される。

江戸時代以降、領国経済が発展した。城下町に集められた商工業者を中心に生産や陸上交通路、海上交易路などの流通過程が整備され、都市を中心に多くの消費生活者が出現し、博多の例からも各地の人形師が行き来している状況から、熊本に他地域の人形が入ってきている可能性は高い。

4　土人形の意味

土人形は製作者も消費者も、同じように願い、祈った人形である。時間と労力を惜しみなく投入し、富裕層が求めた贅沢品ではない。熊本においても人形製作にかかる最も高価な原料は絵具類であり、問屋による前貸しで何とか製作している様子が窺える(7)。にもかかわらず、土人形が求められていた事実は、人形に託した庶民の願いや祈り、望みのいかに切実なものであったかを物語っている(9)。

その後、時代の変遷に従い、製作される人形のモチーフが変化していく様子から、祈りや願いの内容・対象の変化が見てとれる。民間に様々な風習が広まるにつれその土地の風俗・年度行事などと相まって、信仰的なものより次第にいわゆる縁起物的な性格が強くなっていった。節句の贈り物や子どもの除厄、玩具としてなど、庶民の様々な祈りが寺社の縁起や信仰と結びついて、その地域のニーズに合ったモチーフのものが作られるようになった。

江戸の頃は願いが叶うと、祈願する側から寺社へ奉納する行為が一般的であったようであり、奉納用の人形店と玩具用の人形店があったのではないかとも云われている。

在地の粘土を使用する点、また材質が粘土であるため湿気に弱く、割れやすい。玩具として扱うには大変壊れやすく、彩色後焼成しないため、触ることで表面の彩色が剥げやすい。そのため日常的な商品として買い替えをするような側面も有するものであったのではなかろうか。

5　土人形製作

今回、現在も弓野人形の製作をしておられる、明治43年創業の江口人形店　4代目江口誠二氏に出土品を見て頂く機会を得た（平成24年11月23日）。

以下、江口氏のお話をまとめると以下の様である。

① 昔は仏像が殆どだったが、2代目の頃から現代風のものも作るようになった。
② 粘土は原型用・型用と人形用で異なる。
③ 弓野人形における型の基本は表裏の2つである。
④ 博多人形は3つ以上の型を組み合わせて作る場合もあり様々。
⑤ 人形に動きを付けると型の数が増える。
⑥ 原型の横に表型・裏型に分ける線を描いてあるものもある。
⑦ 型（現在は石膏使用）は使うにつれ角が取れてゆき、50回位で使えなくなる。
⑧ 粘土は、昔は近くの田んぼの下層の土を使用し、各地で胎土の違いがあったが、現在は他地域から取り寄せた土を混合しているので、胎土の違いが少ない。
　彩色は原色が多く、混色はあまりしない。

弓野人形は、現在節句など祝事用の贈答品としてつくることが殆どである。

出土品は全体的に小型であり、胎土も異なるため弓野人形ではないと思われ、津屋崎人形・尾崎人形・古賀人形の可能性が考えられる。博多人形はもっと精巧・綺麗であるからこれではない。

6　伝大道寺跡遺跡群の土人形について

伝大道寺跡出土の土人形は、彩色が残っているものはなく、彩色前の膠と混ぜた胡粉が確認できる程度である。また、彩色をしなかったのではないかと思われるものも含まれている。胎土は、褐色・灰白～浅黄橙色・褐色・黒褐色があり、殆どが灰白色から浅黄橙色を呈す。砂粒も細かく、天草土人形より粘性がある。厚みは全体的に4～5㎜程度であり、全体的に薄く印象を受ける。しかし全体的に同じ質感ではなく、やや砂質のものも若干ある。

出土品はどれも破片であり、全体像が把握できる主題には、座り猫（Ph.108-3, Ph.109-2）・俵担ぎ童子（Ph.109-7）・鳩笛（Ph.109-1）・達磨（(Ph.108-1）がある。残存している破片には、2俵の俵（俵乗り大黒か）、袴を着て馬らしき動物に乗っているもの、童子物2点、犬（頭部から胸部のみ）、鶏（頭部のみ）（Ph.108-6）、左膝を立てて座り左手に桃を持ったもの（頭部残存せず）（Ph.109-3）、巴文の太鼓（一部のみ）（Ph.109-6）などがあった。

一番大きな土人形は座り猫であり（Ph.109-2）、幅27㎝・高さ14㎝程度である。童子物のうち1点（Ph.109-5）は、全体像は不明だが、高さは恐らく15㎝程度と思われる。他は5㎝から10㎝前後のものであり、全体的に小型であった。

猫は人に幸運を運ぶものとして商家や接客業に喜ばれた。犬は主として小児の夜泣き止め、虫封じの願いとして求められ、さらに多産な性質から子授け・安産祈願に。馬はその勢いのよさと繁殖力の盛んなことから豊穣祈願に、鳩や鳩笛は小児の虫封じ、食物が胸につかえぬまじないとされている。特に鳩笛を口にすると土の中の精が小児の身体の中に入り体の虫を殺してしまうと言われていたようだ。また早くに弟妹が生まれると乳房の代わりにおしゃぶりとして与えられた。大黒様は農耕神を中心とした信仰の対象として喜ばれた。

7　まとめ

以上のことから考えると、出土土人形は江戸後期以降の頃か。

胎土から判断すると天草土人形と考えられるものはなかった。人形が流通するための地理的条件・交通手段や風習、ほかの出土遺物から、可能性として福岡県の博多人形・津屋崎人形、佐賀県の弓野人形・尾崎人形、長崎県の古賀人形が考えられる。製作主題から考えると、信仰の対象としての土人形ではなく、縁起物や節句物、魔除けなど、または玩具としての人形である可能性が高く、また大型ではなく小型の、男子の端午の節句ものと思われるものがある。よって、伝大道寺跡には当時、下級から中流階級層の男児のいる暮らしの中に所在した可能性が高い。

口伝では「熊本市の細工町付近は江戸時代には人形町といわれていた」そうである。また幕末から明治中期頃の天草土人形三代目政吉は、熊本方面に人形の修行に行ったとも言われているようである(17)。

今まで近世の土人形は特筆されることが殆どなかった。土人形は近世における熊本の人々の風習・文化・信仰を探る上で貴重な資料であると思われる。そして本遺跡以外の地域でも出土している可能性は大いに考えられ、これを機に改めて着目していく必要があり、更なる調査を必要とする資料である。今後の発掘成果及び新資料の発見に期待したい。

（坂本　千恵）

【協力者】

弓野人形　江口人形店　四代目当主江口誠二氏

【土人形関係参考文献】

⑴　富田公夫
1992「庶民の祈りと山陰の土人形」『別冊太陽』日本骨董紀行3　山陰・山陽・四国の骨董屋さん

⑵　「図説　江戸考古学県研究事典」
2001江戸遺跡研究会

⑶　牧野玩太郎・稲田年行
1969「郷土玩具 ③ 土」　読売新聞社

⑷　第10回特別展「九州の土人形-その歴史と世界-」
1991　大分市歴史資料館

⑸　「天草土人形里帰り特別展-奥村コレクションより-」
2002本渡市立歴史民俗資料館

⑹　山村信榮
2008　「九州各近世都市出土の素焼人形」
『関西近世考古学研究16-土人形が見た近世社会-』
関西近世考古学研究会

⑺　蓑田勝彦
1998「江戸後期熊本町における商品生産・流通の資料紹介」『年報熊本近世史』平成7年・8年合併号

⑻　足立孔　1982「全国郷土人形図鑑」

⑼　俵有作（編）1978　「日本の土人形」文化出版局

⑽　「竹とんぼ」II-5　　1972　日本郷土玩具の会

⑾　「竹とんぼ」II-4　　1972　日本郷土玩具の会

⑿　「郷玩文化」VOL.Ⅷ　No.13　通巻No.186　2008

⒀　「郷玩文化」VOL.Ⅷ　No.15　通巻No.188　2008

⒁　「郷玩文化」VOL.Ⅷ　No.16　通巻No.189　2008

⒂　「郷玩文化」VOL.Ⅸ　No.3　通巻No.194　2009

⒃　「郷玩文化」VOL.Ⅹ　No.5　通巻No.208　2011

⒄　奥村寛純
1982　「天草土人形」『郷土人形ギャラリー』

弓野人形　原型

尾崎人形（大黒　土型）

弓野人形（太鼓もち・鯛もち）

津屋崎人形（加藤清正　馬乗り）
第10回特別展「九州の土人形－その歴史と世界－」1991
大分歴史資料館より転載

第７節　その他の近世の多様な遺物について

１　陶器

特出されるのは、唐津系陶器である。

一番古く位置づけられるのは、胎土目が残るものである。175-SK出土の図68-4は三日月高台で梅花皮（かいらぎ）が残存する。97b-SK出土の図64-7は三日月高台の皿である。また、97-SK出土の図67-7（Ph.30-3）も胎土目が見込みに残る唐津系の大皿で三日月高台である。

次に位置づけられるのは、3区77-SK出土の溝縁皿の小皿［図64-6（Ph.22）、図64-5（Ph.23）、図64-7（Ph.25）］で砂目跡が付着する。また、77-SKからは黒釉の抹茶椀［図64-4（Ph.24-1）］も出土している。

3区70-SKでは図64-10（Ph.25）の同心円タタキが残る甕が出土しており、口縁部には胎土目の重ね焼痕がある。

2区172-SK出土の唐津系鉄絵緑彩草花文皿（図65-14、Ph.26）は貴重である。他にも図68-5（Ph.27）、図68-4（Ph.27）等の陶器の皿が出土している。唐津から武雄にかけての産地が想定される。

いずれも17世紀前葉から中葉である。また、1区ではあるが陶胎染付（図69-1、Ph.60）も出土している。

次は、内野山窯系と見られる見込み釉剥ぎの銅緑釉の椀・皿類である。2区38-SK出土の椀（図66-12、Ph.31）・（Ph.30-2）、2区135-SK出土の皿（図66-14、Ph.37）等に代表される。外面灰釉、内面は銅緑釉である。また、時期はやや上る可能性があるが、銅緑釉の水指等が出土している。

武雄系の二彩唐津は小片であるが、一定量出土している。（Ph.61-5、Ph.57-8）唐津系刷毛目陶器は図67-9（Ph.33）の皿等から始まり、花瓶（Ph.44-6）、甕（Ph.64-1）等がある。

また、18世紀後半以降には多彩な産地の陶磁器が流通している。

肥前系の他の窯でも焼かれているが、熊本市の松尾窯で焼いた陶磁器（Ph.41-2、Ph.49-6・7・8）、八代焼の急須（Ph.40-12）等が19世紀にかけて流通している。また小代焼の涼炉（Ph.42-6～9、Ph.46-11、Ph.54-5））や朝顔鉢（Ph.54-7・15、Ph.55-2）、椀（Ph.54-9、Ph.41-4、Ph.45-6等）、土瓶（Ph.53-9）がある。

水指も数点出土している。Ph.46-12や81-SK出土の図64-11（Ph.41）がある。時期は18世紀代と考えられるが、抹茶をたしなんでいたことがわかる。

２　磁器

初期の染付は少ない。図65-13（Ph.26）は型押しの皿で輪花状になっている。高台に砂目跡が残る。見込みに染付で草花文が描かれる。

また、芙蓉手の皿が出土している。（Ph.40-1）1点しか見られない。

17世紀後半から18世紀前半は、97c-SK等の磁器類がある。草花文や雨降り文等が描かれ、底部の裏に「大明年製」の銘がある。（図67-10、Ph.39）

18世紀後半以降のものが出土遺物の大多数である。丸形椀（Ph.47-2、Ph.53-6、Ph.40-8等）、筒型椀（Ph.44-9・10、Ph.60-5等）、広東椀（Ph.59-3・4、Ph.40-5・6・10等）、端反椀（Ph.55-14、Ph.61-3・4等）等、各時期のものが出土している。器種も多様化しており、皿（Ph.41-8、Ph.51-5等）、猪口（Ph.47-12）、お神酒徳利または花器（Ph.47-6）、仏飯具（Ph.45-10等）、鉢（Ph.51-2等）等が出土している。

また化粧道具の紅皿も10点以上出土している。（Ph.54-1・2、Ph.60-2、Ph.55-16・17等）また鬢付油を入れる油壺（Ph.46-19）等も出土している。

18世紀後半には、くらわんか手と呼ばれる波佐見等の製品が入っているが、19世紀になると2区91-SK出土（Ph.48-5～12等）のように、高台の釉溜まりが青みがかっている製品がある。

Ph.53-1は白磁の合子の蓋で、つまみが花文になっている。釉薬は青みがかっており、網田焼と考えられる。

これらから考えると、熊本の宇城地方網田から高浜にかけての製品が熊本城下周辺に流通していたことがわかる。（江浦　久志氏の指摘による。）

３　土器

灯明皿として使用されたと考えられる土師器の皿が多い。2区211-SKからは、径約11㎝（大）、径9㎝（中）、径8㎝（小）の3種類の皿が出土している。底部は糸切りで、底部調整は省略している。口縁端部はややつまみ上げているが、丸みを帯びる程度である。体部は丸みを帯びる。

2区38-SKからは、径9㎝、径8㎝の土師器の皿が出土しており、口縁部は斜め方向に直線的に伸びる。

これらから、2区211-SKから2区38-SKに変遷して行ったと考えられる。

また、2区106-SKからは、径6.5㎝で口縁端部がややつまみ上げられて、体部もやや丸みを帯びている。

径6.5㎝と大きさと外形は類似している形式だが、91-SKになると、底部が厚みを持ち、内面の傾斜が顕著になる。

瓦質土器は、2区154-SK等から炮烙（Ph63の3）、2区159-SKから十能（Ph.63-2）が出土している。2区111b-SKからは火鉢が出土している。

瓦質土器はいずれも18世紀後半以降の遺構に伴うものである。

4　碁石

3区70-SKからの出土(Ph.106-6～26)が多い。2.5㎝程度のものが多い。黒色の川原石を利用したと考えられる。江戸時代前期に碁をたしなんでいたことが伺える。

5　硯

Ph.106-1～5は硯である。そのうち、3・4は砥石に再利用されている。特にPh.106-3は隅に穿孔があり、携帯の砥石である。

また､菊花文が型押しされている染付の水滴も出土した。(Ph.58-6)

いずれも18世紀後半から19世紀にかけてのものである。

6　青銅製品

青銅製品で特出されるのは、柄鏡である。(図87-1、Ph.97) 圏線に梅と桜?桔梗?の文様が描かれている。70-SKからは小刀の鞘(図86-4)や菊の飾金具(図86-2)等が出土している。(Ph.97-2・3・4)

70-SKは17世紀代の遺物を含む。この時代の屋敷の身分を物語るものと思われる。85-SKから銅製金具（図89-1、Ph.98）も出土している。

51-SKとその周辺から簪(図90-6･7)が出土している。近接して、遺構の時期は新しいが、11-SKから小刀の切羽（図90-3）や皿状の製品（図90-4、Ph.105）が出土している。

2区から煙管類が出土しているが、時期的に18世紀後半以降であり、喫煙の習慣を物語るものであろう。

銅銭が出土しており、大半が寛永通宝である。しかし、77-SKからは｢紹聖元寶｣が出土している。(図91)これは、宋銭の銭文を持つ長崎貿易銭であろう。鋳造の期間は万治3(1660)年から貞享2(1685)年の間とされる。77-SKの埋没年代と合うと考えられる。

102-SDからは｢大観通寶｣が出土している。(Ph.98-3)で12世紀前半(1107年鋳造)の宋銭である。長崎貿易銭の可能性がある。

218b-SKから、欠損しているが、「天元通寶」もしくは｢天聖元寶｣とも読める銭貨が出土している。(Ph.98-6)前者だと中世（14世紀代）の民間鋳造銭の可能性がある。後者だと1023年頃鋳造の北宋銭である。

後者の銭文だと長崎貿易銭の可能性も高い。

3区N15W5から洪武通宝(1368年鋳造)も出土している。

7　鉄製品

釘が1区11-SK及び3区65・77-SK等から多く出土している。

長さは3寸釘と2寸釘に分けられる。どの遺構にも2種類の長さが出土している。頭部の形状がL字状のものと、T字状のものに分けられる。65-SK出土品はL字状の形態である。(Ph.101-下段)

使用形態として、直線的に遺存するものと屈曲するものに分けられる。40-SK出土（Ph.104-2）・77-SK出土の釘（図87-4、 Ph.100）は大形の鎹として、Ph.104-6（40-SK出土）等は小形の鎹として使用されていたと推定する。77-SKは先端だけ屈曲して出土している。(図87-6、Ph.100の下段)、板材等に打ってとび出た釘を折り曲げたのか、接合を強固にするためか、明確には判断しがたい。

変わった形態では壷金と呼ばれる、頂部に穿孔があるものがある。〔図86-8(Ph.99-8)、Ph.104-15〕(1区43-SK) 類例としては熊本県球磨郡あさぎり町所在灰塚遺跡のSB23他がある。中世以来である。用途としては、扉の開閉部にある引っ掛けの受け部分等に用いられたと推定できる。

また、図89-8（Ph.102）や11-SK出土のPh.103-2がある。

これらは片方が弧状になり、一方が折れて欠損しているが、折り返している形状である。箪笥等の引手の金具と推定される。

他に輪状の形態をしているものは、図89-12・13等がある。

(人形補足)

今回見つかった人形でまず注目されるのは灯芯押として使用されている高麗聖人の出土である。1600年代のもので春木氏の屋敷で使用されたものであり、佐賀県万才町遺跡、東京都東大構内遺跡･汐留遺跡等各地で出土している。肥前の製品である。

09-SKからは俵持ち等の人、馬乗り小姓や猫、土笛等多様なものが出土している。

泥面子は天保3年（1832）禁令が出ているように19世紀前葉以降急増し、19世紀中葉以降減少することを考えると09-SKも陶磁器からも言えるように19世紀前葉から中葉にかけてのものと言えよう。

168-SK等18世紀後半以降の資料が大半で民間信仰、田に関するものや虫封じ等の武士階級だけではないものが出土している。

今回の資料には、節句関係のものは出土していない。当時の信仰や遊びを考える上では貴重な資料群と考えられる。

産地については、天草土人形や木の葉猿等熊本県内には江戸後期以降土人形を制作した産地がある。天草土人形を見ると粘土の厚みが厚く同じ赤褐色にしては赤みが強い。

今回出土した資料を見るとPh.108-8･10、Ph.109も1･5･8等は粘土が精製してあり、白身を帯びる。

先に指摘したように型が残っている佐賀県神埼地方尾崎人形や弓野等の陶磁器の産地から作られたものが流通している可能性も考えられよう。

（亀田）

第Ⅴ章　まとめ

調査成果

最後に分析の項と重複するが、調査成果を少しまとめたい。

弥生時代

弥生時代後期の遺物が少数ながら出土している。この地は周辺で高い位置にある。2区北西側周辺に分布していることから、西側に竪穴建物数棟が存在したと思われる。

飛鳥～奈良時代

7世紀代の土器は数点しか出土していないが、7世紀後半から8世紀前半までの格子目タタキを凸面に持つ瓦は多数出土している。再利用の可能性はあるが、この時期に、建物が創建されたと考えたい。

それは鴟尾と思われる破片が出土したからである。類例が少なく、器形の復原は困難だが、鰭状のものがつき、縦方向の凹線があることから可能性を指摘したい。類例の形状を見ると鰭の位置と線の表現の対応が難しい。課題としたい。

残念ながら今回はその時期の建物を明確に検出できていないが、2区北側周辺に存在した可能性を考える。

瓦は単弁の蓮華文軒丸瓦や複弁蓮華文軒丸瓦の破片が数点出土している。軒平瓦は3点以上出土しているが、范型は異なっている。そればかりでなく、凸面斜格子目タタキが多量に出土している点である。

問題は蓮華文軒丸瓦と凸面方形の格子目タタキの時期が、7世紀代までさかのぼるかが課題である。今後の周辺の調査、特に北から北東側に位置する解体した用地から検出される埋蔵文化財の様子が注目される。

平安時代

2区北側に黒色整地層を検出し、163-SK（153a･b-SK）を検出した。

直接建物の痕跡は検出できていないが、その頃の建物の基礎を検出できたのではないかと考えられる。

軒平瓦及び軒丸瓦も9世紀代のものも1点ずつ出土している。

厳密には黒色整地層の年代を特定できていないため、奈良時代中葉から後葉にさかのぼる可能性もある。

掘立柱建物も3区や2区に存在した可能性が高い。建物の時期を決定するのが難しいが整地層の上に1棟、南東側に1棟、北側に1棟、立会調査で検出した黒色整地層もこの時期とすれば、さらに南東側に1棟、4棟以上はこの時期以前の建物が存在した可能性がある。

土器は甕類が少なく、杯類が多い。削平時に周辺に土器が捨てられた可能性もあるが、現在のところ、生活空間とは言いがたい状況である。

江戸時代前期

調査区の北側1区から2区の北側に遺構・遺物が集中する。土坑しか検出できず、屋敷は1区北側に存在する可能性が高い。

出土遺物は柄鏡、小刀の鞘や飾り金具等が出土しているし、芙蓉手の皿も出土している。瓦も丁寧な作りで本瓦葺きの瓦である。絵図では町奉行もした春木主税の屋敷の一画になっており、そのことが伺える。

また、防空壕内からではあるが、木瓜文の鳥衾（Ph.107-1）が出土しており、そのことを傍証するものである。

また、遺物包含層3層から鬼瓦が出土しており、丸に金の文字の一部とも考えられる破片が2区31-SX（近世後期～近代の貯蔵穴）からではあるが出土している。（Ph.94-1）これは春木氏の嫡家の当主が春木金大夫と名乗っていることが多かったからと言われており、春木氏の屋敷の一角を調査したことが伺える。

また、2区97b-SKでは道具瓦も出土しており、18世紀前後までは、屋根瓦を立派に葺いた建物が存在していたことが伺える。

その時期の土坑からは唐津系の胎土目の溝縁皿・青銅製柄鏡・銅製小刀の鞘や高麗聖人の形をした磁器の灯芯押の人形等が出土している。茶器や芙蓉手の皿も1点ではあるが出土しており、やや身分の高い武士階級の生活が垣間みられた。1区の北側を調査すれば、春木屋敷の建物等が解明される可能性がある。

江戸時代後期

江戸後期には明和7年（1770）の大火で屋敷の割替えがなされており、春木氏の屋敷は3筆に分けられている。（平野御借・浜治・不破）間口10間程度の小給人の屋敷となっている。やがて北隣も2屋敷となり、200国程度の下級家臣の敷地となったことが絵図等でわかるように出土遺物（陶磁器類）も、特に高級品などは出土していない。

19世紀には、南側に切米取屋敷や給人屋敷等があった区域であったようで、この時期以降の土坑は多数出土している。建物については柱穴がたくさん出土しているが、十分復原できなかった。茶を楽しむ土瓶や涼炉等の他､煙管､紅皿、土人形等も出土している。

火鉢、焙烙、十能等、鎌や硯や水滴、砥石等生活用品が多数出土した。

明和7年（1770）以降の南京町の絵図では明和の大火以降、春木屋敷は3分割され、当地は5区画に区画された

下級武士の屋敷に区画替えされている。

18世紀後半の遺構は19世紀以降のゴミ捨て穴や貯蔵穴に壊され必ずしも明確でないが、石組の貯蔵穴や貯蔵施設等が調査区の周りにあり、建物は調査区の中央にあった可能性がある。

18世紀後半から19世紀代は遺物が多様である。熊本県内では小代焼、八代焼、松尾焼、網田焼から天草高浜焼等がかなりの割合で流通していたことが判明した。

明治以降

1890年熊本地方気象台が開設される。現在の資料としては昭和40年代以前の図面から、不明であるが、防空壕の一角にレンガ基礎があったりすることから、そうしたものが建物の基礎の可能性がある。掘立柱建物や礫を敷き詰めて溝状の基礎がある建物の可能性がある。

（参考引用文献）

・島津義昭、鶴島利彦ほか『平原瓦窯址』（熊本県文化財調査報告書第40集）1980　熊本県教育委員会
・野田拓治ほか『興善寺Ⅰ・II』（熊本県文化財調査報告書第45集）1980　熊本県教育委員会
・鶴島利彦ほか『平原瓦窯址』（熊本県文化財調査報告書第40集）1980　熊本県教育委員会
・鶴島利彦ほか『肥後国分僧寺跡Ⅰ』（熊本県文化財調査報告書第56集）1982　熊本県教育委員会
・鶴島利彦「肥後における歴史時代研究の現状と課題」『交流の考古学』1991　肥後考古学会
・『新熊本市史　別編第1巻　絵図･地図　上　中世･近世』1993　熊本市
・『新熊本市史　資料編　第1巻　考古資料』1996　熊本市
・美濃口紀子『西海道と肥後国-出土品からみた古代のくまもと』（平成23年度企画展　九州新幹線全線開業記念事業）2011
・原田範昭「伝大道寺跡遺跡群第1次調査区」『熊本市文化財年報第4号』2001　熊本市教育委員会
・松村真紀子「伝大道寺跡遺跡群第2次調査区」『熊本市文化財年報第5号』2003　熊本市教育委員会
・網田龍生「奈良時代肥後の土器」『先史学・考古学論究』龍田考古会1994
・網田龍生「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究』X　中世土器研究会　1994
・山本信夫「北部九州の7～9世紀中頃の土器」古代土器研究会第1回シンポジュウム資料　奈良国立文化財研究所　1992
・「太宰府市史.」考古資料編　1999
・舟山良一「牛頸窯跡群出土須恵器」、中島恒次郎「年代推定のための手続き」九州土器研究会第11回シンポジウム資料　2000
・舟山良一・松本敏三・池田栄史『須恵器集成図録』第5巻　西日本編　1996
・九州歴史資料館編『九州古瓦図録』1981　柏書房
・奈良国立文化財研究所　飛鳥資料館『日本古代の鴟尾』1980
・矢部良明ほか『角川　日本陶磁大辞典』2002　角川書店
・大橋康二『年代別　蕎麦猪口大辞典』2009　講談社
・大橋康二『肥前陶磁』考古学ライブラリー55　ニューサイエンス社
・佐賀県立九州陶磁文化館『土の美　古唐津-肥前陶器のすべて』2008
・佐賀県立九州陶磁文化館『北海道から沖縄まで　国内出土の肥前陶磁　古唐津-伊万里の流通をさぐる』1994
・九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』2000
・熊本県立美術館『小代焼』2005
・八代市立博物館未来の森ミュージアム『八代焼－伝統の技と美』2000
・大橋康二・西田宏子他『古伊万里』別冊太陽　日本のこころ63　1988
・『熊本県の地名』日本歴史地名体系　平凡社　1985
・江戸遺跡研究会図説『江戸考古学研究事典』2001　柏書房
・山下義満『灰塚遺跡II』(熊本県文化財調査報告第197集)2001　熊本県教育委員会
・岡本真也『二本木遺跡群6』（熊本県文化財調査報告第274集）2012　熊本県教育委員会

【土人形関係参考文献】

(1) 富田公夫
1992「庶民の祈りと山陰の土人形」『別冊太陽』
日本骨董紀行3　山陰・山陽・中国の骨董屋さん
(2)「図説　江戸考古学研究事典」2001江戸遺跡研究会
(3) 牧野玩太郎・稲田年行
1969「郷土玩具 ③ 土」読売新聞社
(4) 第10回特別展「九州の土人形-その歴史と世界-」
1991　大分市歴史資料館
(5)「天草土人形里帰り特別展-奥村コレクションより-」
2002　本渡市立歴史民俗資料館
(6) 山村信榮　2008「九州各近世都市出土の素焼人形」『関西近世考古学研究16-土人形が見た近世社会-』
関西近世考古学研究会
(7) 蓑田勝彦
1998「江戸後期熊本町における商品生産・流通の資料紹介」『年報熊本近世史』平成7年・8年合併号
(8) 足立孔　1982「全国郷土人形図鑑」
(9) 俵有作（編）1978「日本の土人形」文化出版局
(10)「竹とんぼ」II-5　1972　日本郷土玩具の会
(11)「竹とんぼ」II-4　1972　日本郷土玩具の会
(12)「郷玩文化」VOL.Ⅷ　No.13　通巻No.186　2008
(13)「郷玩文化」VOL.Ⅷ　No.15　通巻No.188　2008
(14)「郷玩文化」VOL.Ⅷ　No.16　通巻No.189　2008
(15)「郷玩文化」VOL.Ⅸ　No.3　通巻No.194　2009
(16)「郷玩文化」VOL.X　No.5　通巻No.208　2011
(17) 奥村寛純　1982「天草土人形」
『郷土人形ギャラリー』第6号天草人形特集

表1 伝大道寺遺跡群2区遺構法量表　　表1-1

図版番号	遺構番号	遺構種類	グリット	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	平面形態	断面形状	出土遺物の有無	備　　考	図面番号
図29	164	-SX	N0.W5	70~	58	9	不定形	皿状	瓦・石がランダムに重なり合う。	東側・西側を撹乱に切られる。	②IH-9
図29	175	-SK	N0.W5	130~	130~	60	不定形	凹字状	布目瓦・石を多量出土	北東部を106-SKに切られ,西側を撹乱に壊される。	②IH-23
図29	209	-SK	N0.W5	260~	150~	60	不定形	凹字状	土器・布目瓦を含む	西側を撹乱に壊され、北～中央部にかけて175-SKに切られる。	②IH-9
図29	106	-SK	N0.W5	120	110	100	不定形	凹字状	凝灰岩が重なり合って出土	遺物出土状況図あり。	②IH-23
図29	153 a	-SK	N0.W5	135~	80~	30	方形	皿状	遺物ナシ	南側は撹乱に壊され,上層部は163-SKに切られる。	②IH-10･24
図29	163	-SK	N0.W5	140~	75~	25	方形	皿状	多量の遺物出土	南側は撹乱に壊される。	②IH-10･24
図29	153 b	-SK	N0.W5	80~	50~	30	不定形	皿状	少量の遺物出土	検出ラインが不明瞭	IH-24
図29	231	-SK	N0.W5	78	25~	8	方形	皿状	遺物ナシ	北側は調査区外	②IH-9
図29	104	-SK	N0.W5	90	75	34	不定形	凹字状	少量の遺物出土	南側の一部を162-SPに切られる。	②IH-9
図29	171	-SX	N0.W5	50~	62	34	方形	凹字状	遺物ナシ	西側は防空壕(130-SX)に切られる。	②IH-9
図29	131 b	-SK	N0.E0	100	32~	25	不定形	皿状	少量の遺物出土	北側は調査区外,東側は134b-SXに切られる。	②IH-13
図29	135	-SK	N0.E0	150~	130~	19	不定形	皿状	多量の遺物出土	北西側は134-SK,北側は129・153-SPに切られる。	⑥IH-13
図29	134 a	-SX	N0.E0	150	80~	50	不定形	凹字状	石積遺構.少量の遺物出土	北側は調査区外	IH-20
図29	134 b	-SK	N0.E0	130~	100~	30~	不定形	凹字状	石積遺構.多量の遺物出土	北側は調査区外、東側は134a-SKに切られる。	IH-20
図29	245	-SK	N0.E0	90~	50~	84	不定形	凹字状	少量の遺物出土	炭や地山ブロックを多く含む。西側は106・南側は175-Skに切られる。153b-SKと同一かも	IH-24
図29	129 a	-SK	N0.E0	97	52	17	不定形	皿状	20cmの礫あり。少量の遺物出土	東側は調査区外、北側は155-SPに切られる。	⑥IH-13
図35	168	-SK	S5.W5	190~	110	87	長方形	凹字状	少量の遺物出土	北西部と南側を撹乱(105)に壊される。	③IH-10
図35	201	-SK	S5.W5	80~	33~	17	方形	皿状	陶磁器出土	北西部を撹乱(105)に壊され、南側を193-SPに切られる。	③IH-10
図35	111c(184)	-SK	S5.E0	130	100	30	不定形	皿状	埋2層に瓦を含む		⑦IH-14
図35	111b(185)	-SK	S5.E0	175	119	110	隅丸方形	凹字状	上層から下層まで多量の遺物を含む	西側を111(184)-SKに切られる。	⑦IH-14
図35	226	-SK	S5.E0 S10.E0	85~	100	22	不定形	皿状	少量の遺物出土	北側を111b(185)-SK・上層部を189-SP他に切られる。	⑦IH-14
図35	173	-SK	S5.E0	75~	75	28	不定形	皿状	少量の遺物出土	北側を111b(185)-SK・111(184)-SKに切られる。	⑦IH-14
図35	172	-SK	S5.E0	50~	47	57	不定形	U字状	少量の遺物出土	北側を173-SKに切られる。	⑦IH-14
図35	211	-SK	S5.W5	170	120~	40	不定形	皿状	少量の遺物出土	東側を111(184)・173-SK他に切られる。	③IH-10
図35	227	-SK	S5.E0	55~	40~	－	不定形	－	少量の遺物出土	北側を173・111b(185)、東側を226-SKに切られる。	⑦IH-14
図35	228	-SK	S5.E0 S10.E0	158	135~	30	方形	皿状	少量の遺物出土	北側を211-SK,東側を244-SPに切られる。	③IH-10
図35	85 ①	-SK	S10.W5	145	130	30	不定形	皿状	瓦出土	85②-SKと一連の遺構か？	③IH-10
図35	85 ②	-SK	S10.W5	108~	115	110~	方形	U字状	瓦出土	北側を85①-SKに切られ,南側をコンクリート水路に壊される。85①と85②は一連の遺構か？	③IH-10
図35	85 b	-SK	S10.W5	160~	110~	13	方形	皿状	多量の遺物出土	東側を85①②-SK,南側をコンクリート水路に壊される。	③IH-10
図35	243	-SK	S5.E0	80~	25~	55	方形	凹字状	遺物ナシ	東側は調査区外、南側を240-SKに切られる。	⑦IH-14
図35	240	-SK	S10.E0	80~	25~	30	円形	凹字状	少量の遺物出土	東側は調査区外	⑦IH-14
図35	240 b	-SK	S10.E0	85~	25~	25	不定形	皿状	少量の遺物出土	東側は調査区外	⑦IH-14
図36	108	-SK	N0.W5	100	32~	9	方形	皿状	少量の遺物出土	南側は防空壕(130-SX)に切られる。	②IH-9
図36	150	-SK	N0.E0	78	63	45	不定形	U字状	少量の遺物出土	炭が混じる。	⑥IH-13
図36	129 b	-SK	N0.E0	105~	50~	14	不定形	皿状	遺物ナシ	東側は調査区外、南側は116-SKに切られる。	⑥IH-13
図36	116	-SK	N0.E0	92~	20~	5	不定形	皿状	土器・瓦・泥人形出土	焼土・スミ多く含む。東側は調査区外、南側は不明遺構に切られる。	⑥IH-13・⑦IH-14
図36	119	-SK	N0.E0 S5.E0	80	80	46	円形	U字状	少量の遺物出土	二段掘り	⑥IH-13･14
図36	110	-SK	S5.E0 S5.W5	75	72	12	不定形	皿状	土器・瓦・泥人形出土	南側を117-SPに切られる。	③IH-10・⑦IH-14
図36	210	-SX	S5.E0	82	63	50	楕円形	凹字状	遺物ナシ	北側を119-SKに切られる。	⑦IH-14
図36	97 b	-SK	S5.E0	153	107	53	不定形	凹字状	埋2層に多量の石を含む。土器も含む。	掘り間違いにより推定線で表す。	⑦IH-14
図36	222	-SK	S5.E0	132	65~	40	不定形	凹字状	埋3層に石を含む	北側を97b-SKに切られる。	⑦IH-14
図36	112	-SK	S5.E0	83	25~	36	方形	凹字状	少量の遺物出土	東側は調査区外	⑦IH-14
図36	145/146	-SK	S5.E0	110~	70	14	方形	凹字状	少量の遺物出土	東側は調査区外、南側は112-SKに切られる。	⑦IH-14
図36	107	-SK	S5.E0	89	60	－	楕円形	－	少量の遺物出土	上層を222-SKや202・148-SP他のPitに切られる。	⑦IH-14

表1-2

図版番号	遺構番号	遺構種類	グリット	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	平面形態	断面形状	出土遺物の有無	備　　考	図面番号
図37	235	-SX	N0.W5	65	56	30	円形	凹字状	少量の土器出土	99-SB-2(古代)	②IH-9
図37	214	-SK	N0.W10	87	56	36	不定形	凹字状	遺物ナシ	169-SKに切られる	②IH-9
図37	200	-SK	N0.W10	53	27-	26	円形	皿状	瓦少量出土	214-SKに切られる	②IH-9
図37	159	-SK	N0.W5 N0.W10	110	100	110	円形	凹字状	多量の遺物出土		②IH-9
図37	169	-SK	N0.W5	104-	105	23	不定形	凹字状	少量の遺物出土	西側を159-SK,東側は160-SKに切られる。一部170-SPに切られる。	②IH-9
図37	198	-SK	N0.W10	94	56-	34	不定形	凹字状	少量の遺物出土	西側は調査区外、東側は159-SKに切られる。	②IH-9
図37	161	-SK	N0.W10	44-	35-	38	不定形	凹字状	少量の遺物出土	西側は調査区外,198-SKと一連の遺構か？。	②IH-9
図37	165(158)	-SK	N0.W10	122	92	39	不定形	凹字状	少量の遺物出土	東側を170-SPに切られる。	②IH-9
図37	176	-SK	N0.W10	76	23-	12	不定形	皿状	遺物ナシ	東側は防空壕(130-SX)関連遺構に切られる。176-SPで記載	②IH-9
図37	160	-SK	N0.W5	120-	47-	41	不定形	皿状	少量の遺物出土	東側は防空壕(130-SX)、北側を212-SPに切られる。	②IH-9
図37	154	-SK	N0.W10	120	80-	47	円形	すり鉢状	紅皿出土	西側は調査区外	②IH-9
図37	157	-SK	N0.W10	104-	97	18	不定形	皿状	少量の遺物出土	西側を154-SKに切られる。	②IH-9
図37	225	-SK	N0.W5 N0.W10	100-	85	9	楕円形	皿状	遺物ナシ	北西部を159-SK,上層部を165・169-SKに切られる。	②IH-9
図37	216 a	-SK	N0.W5	53-	30-	27	不定形	皿状	多量の遺物出土	2区の最北にあり、ほとんど調査区外	②IH-9
図38	91	-SK	S5.W10	140	127	123	不定形	U字状	少量の遺物出土	南東側の一部を撹乱(88)に壊される。	③IH-10
図38	166	-SK	S5.W10	117	100	120	円形	U字状	多量の遺物出土	南東側を91-SKに切られる。	③IH-10
図38	166 b	-SK	S5.W10	60-	100-	125	隅丸方形	U字状	遺物ナシ	西側を166-SK・南側を91-SKに切られる。	③IH-10
図38	127	-SK	S5.W10	213	130	62	隅丸長方形	凹字状	埋2層に陶磁器を含む	南側を166b-SKや他の遺構に切られる。	③IH-10
図38	88 b	-SK	S5.W5 S5.W10	75	75	73	円形	U字状	多量の遺物出土	上層を撹乱(88)に壊される。	③IH-10
図38	90	-SK	S5.W10	63	37-	13	方形	皿状	土器・石出土	西側は調査区外	③IH-10
図38	85 c	-SK	S10.W10 S10.W5	290-	150-	10	長方形	－	遺物ナシ	東側を85-SK・中央部を85b-SK・北西部を88b-SK・85e-SKに切られ、南側はコンクリート水路に壊される。	③IH-10
図38	85 e	-SK	S10.W5	66	60	13	円形	皿状	瓦出土	Pitかも	③IH-10
図39	84	-SK	S10.W10	200	115-	115	方形	U字状	少量の遺物出土	西側は調査区外、中央をコンクリート水路に壊される。	④IH-11 ③IH-10
図39	39	-SK	S10.W10	110-	97-	102	円形	U字状	少量の遺物出土	西側は調査区外、北側を84-SKに切られる。	④IH-11
図39	28	-SX	S10.W10	95-	90-	10	不定形	皿状	遺物ナシ	85c-SK?の下層で検出。西側を39・84-SKに切られる。	④IH-11
図39	19 b	-SK	S10.W10	30-	27	17	楕円形	皿状	少量の遺物出土	北側を39-SKに切られる。Pit?	④IH-11
図39	71	-SK	S10.W10	100	72	16	楕円形	皿状	陶磁器出土	南側を74-SP?に切られる。	④IH-11
図39	31	-SX	S10.W5	187	157-	60	方形	U字状	石や少量の土器・瓦出土	北側の一辺をコンクリート水路に壊される。	④IH-11・21・22・28
図39	29	-SK	S10.W5	140	67-	9	不定形	皿状	遺物ナシ	南側を撹乱(80-SD)に壊される。	④IH-11
図39	32	-SK	S10.W5	40-	50	20	不定形	すり鉢状	少量の遺物出土	北側をコンクリート水路に交わされる。	④IH-11
図39	215	-SK	S10.W5	65	58	25	方形	皿状	遺物ナシ	南西部の一部を239-SP関連?の遺構に切られる。	④IH-11
図39	38	-SK	S10.W5	112	110	97	方形	凹字状	多量の遺物出土	北西角上層が31-SXに切られる。	④IH-11
図39	38 b	-SK	S10.W5	136	110-	50-	方形	凹字状	少量の遺物出土	北西角上層が31-SXに切られる。	④IH-11
図39	35	-SK	S10.W5	130	70-	100	方形	凹字状	多量の遺物出土	東側を遺構番号なしのSKに切られる。	④IH-11
図39	26	-SK	S10.W5	75-	55	7	方形	皿状	少量の遺物出土	北側を38-SKに切られる。	④IH-11
図39	37	-SE	S10.W5	186	160-	85-	方形	－	遺物ナシ	東側は調査区外	⑧IH-15
図36	130(防空壕)	撹乱	N0.W5 S5W5						少量の遺物出土		IH-9・10
図38	109	撹乱	S5.W5						少量の遺物出土		IH-10
図38	109b	撹乱	S5.W5						少量の遺物出土		IH-10
図35	105	撹乱	S5.W5						遺物ナシ		IH-10
図38	88	撹乱	S5.W5						多量の遺物出土		IH-10
図39	19	撹乱	S10.W10						遺物ナシ		IH-11

表2 伝大道寺跡遺跡群出土土器観察表

( )数値は復元値、～は残存値

表2-1

図版番号	枝番	区	グリット	遺構番号	遺構種類	出土層位(No.)	時代	器種	遺物種類	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(外面)	調整(内面)	焼成	備考	残存率	登録No.	実測番号	写真(Ph)No.
図60	1	2区	N0.W5	209	SK	埋3層	弥生	甕	弥生土器	口縁部	-	4.0~	-	長石・角閃石・黒色粒・赤色粒	外)にぶい黄橙10YR7/3. 橙5YR7/8 内)橙5YR6/8	ナデ	ナデ	良	全体的に器面摩耗の為調整不明瞭。 弥生後期後半か?	1/10以下	2448	131	Ph.15
図60	2	2区	N0.W5	2区	N0W5	-	弥生	甕	弥生土器	頸部~胴部	推定(15.0)	4.9~	-	雲母・角閃石・石英・長石	外・内)橙 5YR 7/6	縦方向ハケ目のち右下がり方向ハケ目	横ナデ、ナデ	良	弥生時代後期中葉から後葉と思われる。	1/4×1/4	2764	137	Ph.16
図60	3	2区	N0.E0	135	SK	埋1層	弥生	甕	弥生土器	頸部	-	4.5~	-	長石・角閃石	外)にぶ黄褐10YR5/3~にぶい黄褐10YR7/3 内)灰白2.5Y8/1~2.5Y8/2	ナデ	ナデ	良	器面摩耗の為、調整不明瞭。 弥生後期	1/10以下	2255	127	Ph.15
図60	4	2区	N0.W5	包4層	-	-	弥生	甕	弥生土器	頸部	-	7.0	-	長石・角閃石・雲母・赤色砂粒	外)浅黄橙 10YR 8/3 内)灰白10YR8/2~浅黄橙10YR8/3	横方向ナデ、横方向平行文タタキ	横方向ナデ、斜め方向ハケ目	良		1/10以下	2764	134	Ph.10
図60	5	2区	S10.W5	85b	SK	下層	弥生	甕	弥生土器	脚部	-	6.1~	-	長石・雲母・赤色酸化粒・黒曜石	外)にぶい黄橙10YR7/4 内)にぶい黄橙7.5YR7/3	ハケ目のち横ナデ、縦方向ハケ目のい横ナデ、指おさえ痕、ナデ'	ハケ目のちナデ、工具端部痕あり。	良		1/6×1/3	2065	51	Ph.10
図60	6	1区	S20.W10	11	SK	埋3層	弥生	甕	弥生土器	脚部	-	8.2	-	長石・石英・角閃石・雲母	外)橙7.5YR6/6 内)橙7.5YR7/6	横ナデ、縦方向ハケ目のちナデ	ナデ 外凹)右下がり・横方向ハケ目、砂付着	良	外表面の摩耗が著しい。	1/4×1/3	71	112	Ph.10
図60	7	2区	S5.W5	168	SK	埋1層	弥生	甕	弥生土器	脚部	-	4.35~	(13.0)	雲母・角閃石・長石	外)浅黄橙10YR8/4~にぶい橙7.5YR6/4 内)灰白10YR8/2~にぶい橙7.5YR7/4	ナデ	指頭圧痕 ナデ	良	内外面一部にスス付着。被熱により一部変色。 弥生後期後半~末	1/10以下	2410	133	Ph.15
図60	8	2区	N0W5	230	SP	埋1層	弥生	無頸壺	弥生土器	口縁部	-	3.8~	-	長石・石英	外)浅黄橙10YR8/3.灰黄褐10YR6/2~褐灰10YR4/1 内)浅黄橙10YR8/3	ナデのちタタキ	ナデ	良	外面スス付着。全体的に器面摩耗の為、調整不明瞭。 弥生後期後半か?	1/10以下	2635	133	Ph.15
図60	9	2区	N0W5	包4'層	-	-	弥生	壺	弥生土器	口縁部	-	4.4	-	長石・雲母・角閃石・赤色酸化粒	外)にぶい橙7.5YR6/4 内)にぶい黄橙10YR6/3	横ナデ、縦方向ハケ目のち横ナデ	横ナデ、ナデ、左上がり方向ハケ目のち横ナデ	良	内面の一部に煮炊き痕らしき変色が残る。	1/10以下	2764	135	Ph.15
図60	10	2区	S10.W5	35	SK	埋1層	弥生	壺	弥生土器	口縁部	-	4.7~	-	長石・角閃石	外)橙7.5YR7/6~橙7/5YR6/6 内)橙7.5YR7/6	ナデ	ナデのちハケ	良	全体的に器面剥離、摩耗の為調整不明瞭。 弥生終末~古墳初	1/10以下	2015	126	Ph.15
図60	11	2区	N0.W5	169	SK	埋1層	弥生	壺	弥生土器	口縁部	-	3.4~	-	長石・石英・角閃石・砂粒	外)灰白10YR8/2 内)浅黄橙7.5YR8/4	ナデ	ナデ	良	内面、器面剥離の為調整不明瞭。 外面、摩耗の為調整不明瞭。 弥生後期後半	1/10以下	2417	130	Ph.16
図60	12	2区	N0.E0	135	SK	埋1層	弥生	壺	弥生土器	口縁部	-	5.3~	-	長石・石英・角閃石・砂粒	外)灰白10YR8/2 内)灰白10YR8/2~灰白2.5Y8/1	ナデ	ナデのち指おさえ	良	一条突帯あり。全体的に器面摩耗の為調整不明瞭。 弥生後期前葉か?	1/10以下	2257	128	Ph.15
図60	13	2区	N0.W5	包4'層	-	-	弥生	壺	弥生土器	頸部	-	4.2	-	長石・赤色酸化粒	外・内)浅黄橙 7.5YR 8/4	横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ	良	一条突帯あり。全体的に器面摩耗の為調整不明瞭。 弥生時代終末~古墳時代初頭か?	1/10以下	2764	136	Ph.16
図60	14	2区	N0.W10	154	SK	埋1層	弥生	高坏	弥生土器	胴部	-	3.4~	-	長石・石英・雲母・赤色酸化粒	外)橙5Y6/6・黄灰2.5Y5/1 内)橙7.5YR7/6	横ナデ	横ナデ	良	残存が少なく、高坏の確証はない	1/3×1/8	2286	88	Ph.16
図60	15	2区	N0.W5	212	SP	pit群	弥生	高坏	弥生土器	肩部	-	4.3~	-	長石・角閃石・黒色粒	外)橙5YR7/6.褐灰10YR6/1~褐灰10YR5/1 内)橙2.5YR6/6.灰黄褐10YR5/2~にぶい黄褐7.5YR5/3	ナデのちヘラミガキ	ナデ	良	穿孔あり。被熱している。全体的に器面摩耗の為、調整不明瞭。 弥生後期末	1/10以下	2628	132	Ph.15
図61	1	3区	N15.W5	78	SP	埋1層	古代	高台付坏	土師器 黒色A類	底部~高台	-	1.4~	(9.4)	長石・赤色酸化粒・雲母	外)にぶい黄橙10YR7/4 内)褐灰10YR4/1	回転ナデ、貼付け高台、ナデ	回転ナデ、ナデ、黒色磨研	良	内黒(黒色土器A類)と思われるが、ミガキの跡は見えない。	1/3×1/4	5181	121	Ph.17
図61	2	3区	N15.W5	78	SP	埋2層下層	古代	坏	土師器	底部	-	1.3~	(7.8)	長石・石英・雲母	外・内)橙5YR6/6	横ナデ、ナデ	ナデ	良	残存率が少なく、詳細不明	1/3×1/5	5148	122	Ph.17
図61	3	3区	N15.W5	70	SK	埋2層	古代	高台付坏	土師器	底部~高台	8.5	2.4	5.3	長石・赤色酸化粒・雲母	外)灰5Y5/1 内)にぶい黄橙10YR7/3	回転ナデ、貼付け高台、ナデ	ナデ	良		1/4×1/2	5056	118	Ph.17
図61	4	3区	N15.W5	77	SK	埋4層	古代	皿	土師器	底部	-	0.9~		長石・赤色酸化粒・雲母	外・内)にぶい橙7.5YR7/4	回転ナデ、多方向ナデ	多方向ナデ	良		1/3×1/3	5144	120	Ph.17

表2-2

図版番号	枝番	区	グリット	遺構番号	遺構種類	出土層位(No.)	時代	器種	遺物種類	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(外面)	調整(内面)	焼成	備考	残存率	登録No.	実測番号	写真(Ph)No.
図61	5	3区	N15.W5	77	SK	埋1層	古代	皿	土師器	底部	-	1.3~	(6.8)	長石・石英・雲母	外・内)灰黄褐10YR5/2	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	良		1/2×1/6	5131	119	Ph.17
図61	6	3区	N15.W5	70	SK	埋2層	古代	皿	土師器	底部	-	1.1~	(6.2)	長石・石英・褐色粒	外)橙7.5YR7/6 内)にぶい橙7.5YR6/4	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	良		1/2×1/4	5075	117	Ph.17
図61	7	3区	N10.W5	68	SE	埋3層	古代	皿	土師器	底部	-	1.4~	(8.4)	長石・赤色酸化粒・雲母・褐色粒	外)にぶい黄橙10YR7/4 内)褐灰10YR4/1	横ナデ、ヘラ削り	回転ナデ、ナデ	良	残存率が少なく、詳細不明	1/2×1/8	5164	123	Ph.17
図61	8	3区	N15.W5	68	SE	埋4層	古代	壷	須恵器	胴部	-	7.2~	-	密)長石	外)灰5Y5/1 内)灰5Y6/1	格子目文タタキ	同心円文タタキ	良	残存率が少なく、詳細不明	1/8×1/8	5159	124	Ph.17
図62	9	2区	N0.W5	163	SK	埋1層	古代	坏	土師器	口縁~胴部	(11.8)	3.0~	-	赤色酸化粒・雲母	外)明黄橙10YR7/6 内)にぶい黄橙10YR7/4	回転ナデ	回転ナデ	良	黒く変色が見られるが、廃棄後のものか?	2/3×1/8	2379	69	Ph.17
図62	10	2区	N0.W5	163	SK	埋1層	古代	皿	土師器		-	2.3~	6.9	多量の長石と角閃石・石英	外)浅黄橙7.5YR8/4 内)にぶい橙7.5YR7/4	横ナデ、削り、ヘラ切り離しのちナデ	ナデ	良	外底面に棒状圧痕あり。内面全体にススや茶色に変色した部分がある。	1/2×3/4	2341	61	Ph.11
図62	11	2区	N0.W5	163	SK	埋1層	古代	皿	土師器	口縁部	(10.0)	(3.15)	(5.8)	赤色酸化粒・褐色粒	外・内)橙7.5YR6/6	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	良	図面上で復元	1/1×1/6	2379 2321	71	Ph.17
図62	12	2区	N0.W5	163	SK	-	古代	皿	土師器	口縁~底部	(11.0)	3.0	(7.3)	長石・角閃石	外)にぶい黄橙10YR7/4 内)にぶい黄橙10YR6/3	回転ナデ、ヘラ切り離しのちナデ	回転ナデ	良	内底面に漆付着? 図面上で復元。全体に変色が見られるが、廃棄後のものか?	1/1×1/3	2845	68	Ph.17
図62	13	2区	N0.W5	163	SK	埋1層	古代	皿	土師器	口縁~底部	(10.0弱)	3.2	7.2	多量の角閃石・長石	外)にぶい黄橙10YR7/4 内)にぶい黄橙7.5YR7/3	回転ナデ、強い回転ナデ、ヘラ切り離しのちナデ	回転ナデ、ナデ	良		4/5×2/3	2351	62	Ph.17
図62	14	2区	N0.W5	163	SK	埋1層	古代	皿	土師器	底部	-	1.3~	(6.6)	石英・角閃石・赤色酸化粒	外・内)にぶい黄橙10YR7/4	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	良		1/2×1/4	2379	70	Ph.11
図62	15	2区	N0.W5	164	SK	埋1層	古代	高台付坏	土師器	底部~高台	-	1.8~	(7.6)	赤色酸化粒・褐色粒	外・内)にぶい橙7.5YR7/4	回転ナデ,貼付け高台後ナデ、ナデ	ナデ	良	高台の欠損が著しい。	1/3×1/6	2387	79	Ph.17
図63	16	2区	N0.W5	213a	SP	-	古代	坏身	須恵器	口縁~胴部	(10.0)	3.0~	-	密)長石・雲母	外)灰5Y6/1 内)灰黄2.5Y6/2	回転ナデ	回転ナデ	良	受身部分に重ね焼き時の粘土溜りが残る。	2/3×1/6	2629	64	Ph.11
図63	17	2区	S5.W5	105	SE	カクラン	古代	坏蓋	須恵器	口縁~天井部	(16.2)	2.4~	-	長石・多量の砂	外)灰白2.5Y7/1 内)黄灰2.5Y6/1	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	良		1/2×1/8	2620	66	Ph.11
図63	18	2区	N0.E0	134	SK	埋1層	古代	坏	土師器	底部	-	2.0	(10.0)	密)長石	外)灰.5Y5/1 内)灰5Y6/1	回転ナデ	回転ナデ	良		1/2×1/8	2253	78	Ph.16
図63	19	2区	N0.W5	175	SK	埋1・2層	古代	高台付坏	須恵器	高台	-	1.4~	-	密)長石・雲母	外)灰N5/ 外凹)暗灰N3/ 内)灰7.5Y6/1	回転ナデ,貼付け高台	ナデ	良	三角形の高台である。	1/10以下	2328	73	Ph.17
図63	20	2区	N0.E5	104	SK	埋1層	古代	高台付坏	須恵器	底部~高台	-	1.4~	(10.8)	長石・褐色粒	外)灰N4/1 内)灰N6/	回転ナデ、ヘラ切り離しのち貼付け高台、ナデ	回転ナデ、ナデ	良		1/2×1/5	2137	67	Ph.11
図63	21	2区	N0.W10	28	SX	埋1・2層	古代	高台付坏	須恵器	底部~高台	-	1.2~	推定(9.2)	著赤・黒色粒・褐色粒	外)灰.5Y5/1内)灰5Y6/1	回転ナデ、ヘラ切り離し後ナデ、貼付け高台(欠損)、ヘラ記号あり	回転ナデ、ナデ	良	高台の先端部欠損	1/3×1/4	2579	80	Ph.16
図63	22	2区	N0.W5	175	SK	埋1・2層	古代	坏	須恵器	口縁部	-	2.0~	-	密)長石・雲母	外・内)灰白5Y7/1	回転ナデ	回転ナデ	良	器厚は薄く、口縁端部に面を持つ。	1/10以下	2328	72	Ph.17
図63	23	2区	N0.W10	159	SK	埋2層	古代	坏	須恵器	口縁部	-	2.3~	-	密)長石・褐色粒	外)灰.5Y5/1内)灰5Y6/1	回転ナデ	回転ナデ	良		1/2×1/8	2304	81	Ph.16
図63	24	2区	S5.E0	173	SP	埋土一括	古代	坏	須恵器	口縁~胴部	-	3.2~	-	長石・雲母・角閃石	外)灰5Y6/1・灰白5Y7/1 内)灰白5Y7/1	回転ナデ	回転ナデ	良		1/2×1/8	2666	86	Ph.16
図63	25	2区	S5.W5	211	SK	埋1層	古代	坏	土師器	口縁~底部	(13.5)	2.75	(9.0)	長石・赤色酸化粒	外)橙5YR7/6 内)橙7.5YR7/6	回転ナデ、回転ヘラ削り	回転ナデ	良		1/1×1/5	2453	74	Ph.17
図63	26	2区	N0.E0	表土	-	-	古代	皿	土師器	底部	-	0.9~	(7.2)	長石・雲母・褐色粒	外)にぶい橙7.5YR7/4 内)にぶい橙7.5YR6/4	回転ナデ、ナデ、粘土延ばし	回転ナデ	良		1/3×1/6	2774	89	Ph.17
図63	27	2区	N0.E0	106	SK	最下層	古代	高台付坏	土師器	底部~高台	-	1.9~	6.6	長石・石英・角閃石・赤色酸化粒・雲母	外・内)にぶい橙7.5YR7/4	貼付け高台、ナデ	ナデ	良	底面がデコボコである。	1/3×1/2	2152	58	Ph.10
図63	28	2区	S5.W10	91	SK	埋1層	古代	高台付坏	土師器	底部~高台	-	1.2~	推定6.0	長石・赤色酸化粒	外)にぶい黄橙10YR7/3 内)にぶい黄橙7.5YR6/3 顔)にぶい橙5YR6/4	回転ナデ、貼付け高台、横ナデ、ナデ	ナデ、赤色顔料塗布	良	赤色顔料土器	1/3×1/2	2112	55	Ph.10
図63	29	2区	N0.W10	158	SK	埋1層	古代	椀	土師器	底部~高台	-	1.3~	(6.6)	石英・長石	外)橙7.5YR7/6 内)にぶい黄橙10YR7/4	回転ナデ、切り離し後貼付け高台	回転ナデ	良		1/4×1/4	2295	77	Ph.17

表2-3

図版番号	枝番	区	グリット	遺構番号	遺構種類	出土層位(No.)	時代	器種	遺物種類	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(外面)	調整(内面)	焼成	備考	残存率	登録No.	実測番号	写真(Ph)No.
図63	30	2区	S5.W5	88	SK	埋1層	古代	坏	土師器	口縁~底部	8.7	2.9~	推定7.0	長石・雲母・角閃石・石英	外)浅黄橙7.5YR8/4 内)にぶい橙7.5YR7/3	回転ナデ、ナデ、横ナデ、高台欠損	回転ナデ、ナデ	良	高台部欠損後ナデた後再利用したかも知れない。	1/1×1/2	2080	52	Ph.10
図63	31	2区	S5.W5	103	SK	カクラン	古代	高台付坏	土師器	底部~高台	-	1.8~	(6.6)	長石・雲母・角閃石・褐色粒	外・内)にぶい橙7/5YR7/4	回転ナデ、ナデ、貼付け高台	回転ナデ、ナデ	良	とても雑なつくりである。	1/3×1/2	2698	65	Ph.11
図63	32	2区	N0.W10	91	SK	下層	古代(丹塗り)	椀	土師器	底部~高台	-	1.2~	-	長石・赤色酸化粒	外)にぶい橙7.5YR7/4 内)にぶい橙10YR7/3 顔)明赤褐2.5YR5/6	回転ナデ、ナデ、貼付け高台、赤色顔料添付	回転ナデ、赤色顔料添付	良	残存は少ないが、内底面と高台部外面に赤色顔料が見られる。	1/3×1/6	2119	82	Ph.16
図63	33	2区	N0.E0	106	SK	埋土一括	古代	皿	土師器	底部	-	1.5~	(8.6)	長石・角閃石・石英・赤色酸化粒	外・内)橙7.5YR7/6	ナデ	ナデ	良		1/3×1/3	2153	57	Ph.12
図63	34	2区	N0.E0	106	SK	最下層	古代	皿	土師器	底部	-	1.0~	-	長石・角閃石・褐色粒	外・内)にぶい黄橙10YR7/3	ナデ	ナデ	良		1/3×1/6	2152	83	Ph.10
図63	35	3区	S5.E0	173	SP	埋土一括	古代	皿	土師器	底部	-	1.1~	-	長石・角閃石・褐色粒	外・内)にぶい黄橙10YR6/3	ナデ	ナデ	良		1/2×1/6	2666	87	Ph.16
図63	36	2区	N0.E0	106	SK	埋土一括	古代	皿	土師器	底部	-	1.8~	(6.8)	長石・角閃石・雲母・赤色酸化粒	外・内)にぶい黄橙10YR7/3	回転ナデ、ナデ、回転ヘラ切り離し	回転ナデ	良		1/2×1/3	2153	56	Ph.10
図63	37	2区	N0.W10	161	SK	埋1層	古代	坏	土師器	底部	-	1.3~	(6.4)	長石・赤色酸化粒・角閃石	外)にぶい黄橙10YR7/4 内)にぶい橙7.5YR7/4	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	良	ワレ面が丁寧になでられたようである。	1/3×1/5	2389	75	Ph.16
図63	38	2区	N0.W10	161	SK	埋1層	古代	坏	土師器	底部	-	0.9~	(7.8)	石英・角閃石	外・内)にぶい黄橙10YR7/4	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	良		1/3×1/6	2389	76	Ph.17
図63	39	2区	S5.E0	148	SP	掘り方	古代	坏	土師器	胴部~底部	-	1.3~	(5.6)	長石・赤色酸化粒・多量の砂粒	外)にぶい黄橙10YR7/3 内)浅黄橙10YR8/3・にぶい橙7.5YR7/4	回転ナデ、ナデ	ナデ	良		1/3×1/4	2653	85	Ph.16
図63	40	2区	S5.W10	127	SK	埋土一括	古代	坏	土師器	底部	-	1.4~	6.2	長石・石英・赤色酸化粒・雲母	外)橙7.5YR7/6 内)にぶい橙7.5YR7/4	回転ナデ、ナデ	ナデ、強いナデ	良	全体にススの付着が残るが、廃棄後のものか?	1/2×1/2	2214	59	Ph.11
図63	41	2区	S5.W10	89b	SK	下層	古代	皿	土師器	底部	-	1.7~	5.5	長石・雲母	外)浅黄橙7.5YR8/4 内)褐灰10YR6/1	回転ナデ、ナデ	雑なナデ	良		1/2×1/3	2097	53	Ph.10
図63	42	2区	S5.W5	130b	SK	-	古代	坏	土師器	口縁~底部	(10.6)	4.95	(6.8)	角閃石・褐色粒・長石・赤色酸化粒・雲母	外・内)浅黄橙7.5YR8/4	回転ナデ、ナデ、指ナデ	回転ナデ、ナデ	良		1/1×1/4	2714	93	Ph.10
図63	43	2区	S5.E0	208	SK	下層	古代	坏	土師器	胴部~底部	-	2.5~	(6.6)	長石・雲母・赤色酸化粒	外)にぶい橙7.5YR7/4 内)橙7.5YR7/6	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	良	廃棄後の付着物(変色)により、詳細不明。	1/2×1/2	2440	63	Ph.13
図63	44	2区	S5.W5	105	SE	カクラン	古代	坏	土師器	胴部~底部	-	2.2~	(6.4)	長石・角閃石・雲母	外・内)にぶい黄橙10YR7/4	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	良	ススの付着が見られるが、廃棄後か?	1/2×1/4	2620	84	Ph.16
図63	45	2区	N0.E0	135	SK	埋1層	古代	坏	土師器	胴部~底部	-	2.0~	(6.4)	長石・赤色酸化粒・黒色粒	外・内)にぶい黄橙10YR7/4	横ナデ、ナデ	ナデ	良		1/2×1/6	2257	60	Ph.11
図63	46	2区	S5.W10	89b	SK	下層	古代	椀	土師器	胴部~高台	-	4.4~	(7.0)	長石・赤色酸化粒・褐色粒	外)にぶい橙7.5YR7/4 内)にぶい橙7.5YR6/4	回転ナデのちナデ、削りのちナデ、貼付け高台	ナデ	良	内底面が褐灰色(7.5YR4/1)に変色している。	2/3×1/3	2097	54	Ph.10
図64	1	3区	N15.W5	77 77 70	SK	埋2層 下層 下層トレ	近世	坏	土師器	口縁~胴部	(14.2)	2.6	-	長石・雲母	外・内)灰白2.5Y8/2・黄灰2.5Y6/1	回転ナデ	回転ナデ	良	焼成後、還元焔を削ったあとらしき痕跡がある。	1/2×1/2	5141 5135 5056	115	-
図64	2	3区	N15.W5	77	SK	埋2層	近世	皿	土師器	ほぼ完形	6.4	1.6	4.1	長石・雲母・石英・赤色酸化粒を多量含む	外・内)にぶい橙7.5YR7/6	回転ナデ、糸切り離し、ヘラ削り	回転ナデ	良	拓本貼付	ほぼ完形	5138	116	Ph.14
図64	3	3区	N15.W5	77	SK	埋2層	近世	皿	土師器	口縁~底部	-	2.8	(4.8)	長石・角閃石・黒色粒・赤色酸化粒	外)浅黄橙7.5YR8/3 内)にぶい橙7.5YR7/4	回転ナデ、糸切り離し、ヘラ削り、ナデ	回転ナデ、強い回転ナデ	良		1/1×1/5	5138	125	Ph.63
図64	4	3区	N15.W5	77	SK	埋3層	近世	抹茶椀	陶磁器	口縁~胴部	(11.2)	6.6~	(約6.0)	密(長石粒少量)	赤灰色(アメ釉)黒灰色(鉄釉)	回転ナデ、二度釉かけ	回転ナデ、施釉	良	外面に釉かけわけ(二度釉)のラインあり、小代焼か?	5/6×1/3	5141	2	Ph.24
図64	5	3区	N15.W5	77	SK	埋4層	近世	溝縁皿	陶磁器	口縁~高台	(13.6)	2.65	6.1	密	外)淡褐色釉)灰白色	削り出し高台(三日月高台)、回転ナデ、削りのちナデ	回転ナデ	良	唐津(肥前)系折縁皿、三日月高台。還元焼成だが、外表面は酸化焼成。内・外面に重ね焼き痕跡(砂目)あり。	1/1×1/4	5144	1	Ph.23
図64	6	3区	N15.E0	77	SK	埋2層 No.2	近世	溝縁皿	陶磁器	口縁~胴部	(13.0)	2.5	4.0	密(長石極少・黒色粒吹き出し)	淡茶灰色	回転ナデ、梅花皮(かいらぎ)あり。口縁下部に工具が強く当たる。施釉	回転ナデ、施釉	良	内・外面に重ね焼き痕跡(砂目)あり。	1/1×1/3	5013	3	Ph.22

表2-4

図版番号	枝番	区	グリット	遺構番号	遺構種類	出土層位(No.)	時代	器種	遺物種類	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(外面)	調整(内面)	焼成	備考	残存率	登録No.	実測番号	写真(Ph)No.
図64	7	3区	N15.W5	77	SK	埋2層 No.21	近世	溝縁皿	陶磁器	口縁~高台	12.9	2.5	4.0	密(微量の長石)唐津系	胎)灰5Y6/1 釉)にぶい黄2.5Y6/3~暗灰黄2.5Y5/2	回転ナデ、回転ヘラ削り、削り出し高台(三日月高台)、施釉	回転ナデ、施釉	良	三日月高台。内外面に重ね焼きの痕跡(砂目)あり。ちりめんじわあり。1640~1650年代か?	1/1×3/4	5103	8	Ph.25
図64	8	3区	N15.W5	70	SK	埋2層	近世	皿	土師器	口縁~底部	(10.0)	2.5	(5.4)	長石・角閃石・赤色酸化粒	外・内)にぶい橙7.5YR7/4	回転ナデ、糸切り離し、ヘラ削り	回転ナデ、ナデ	良	内底面に粘土紐痕?、沈線らしき跡あり。拓本貼付	1/1×1/3	5065	114	Ph.14
図64	9	3区	N15.W5	70	SK	埋2層	近世	皿	土師器	口縁~底部	8.5	2.4	5.3	雲母・長石・褐色粒・赤色酸化粒	外)にぶい黄橙10YR7/3 内)にぶい黄橙10YR7/4	回転ナデ、糸切り離し、ナデ	回転ナデ、強いナデ	良	拓本貼付	1/1×2/3	5065	113	Ph.14
図64	10	3区	N15.W5	70	SK	埋1層 下層トレ内 下層トレ内	近世	甕	陶磁器	口縁~胴部	(11.8)	14.0~	-	密)長石・黒色粒	釉)明緑灰・暗オリーブ ・オリーブ褐・灰白・緑灰	横ナデ、沈線・ナデ、施釉	ナデ、同心円文当て具のちナデ、施釉	良	重ね焼きの痕跡(胎土目の剥離)	4/5×1/3	5061 5064 5071	7	Ph.25
図64	11	3区	N15.W5	81	SK	埋土一括	近世	水差し	陶器	口縁~底部	10.6	11.1	13.8	少量の長石・多量の石英(唐津系)	外・内)明黄褐2.5Y7/7・にぶい黄2.5Y6/4・褐10YR4/4	回転ナデ、施釉	回転ナデ、指押さえ	良	唐津系	1/6×2/3	5150	11	Ph.41
図64	12	3区	N15.W5	81	SK	埋土一括	近世	椀	陶器	口縁~高台	(11.0)	6.5	(5.0)	多量の微細な黒色粒(京焼風)	胎)浅黄2.5Y7/3 釉)にぶい黄2.5Y6/4	回転ナデ、削り出し高台、縦方向ヘラ削り、鉄釉による染付け、施釉	回転ナデ、施釉	良	18世紀前半。鉄釉による染付け	1/1×1/3	5152	10	Ph.41
図65	1	2区	N0.E0	129	SK	埋土一括	近世	皿(穿孔)	土師器	口縁~底部	(9.0)	2.0	(5.3)	長石・角閃石・石英・褐色粒・赤色酸化粒	外)にぶい橙7.5YR7/4 内)にぶい橙7.5YR6/4	回転ナデ、糸切り離しのちナデ、穿孔	回転ナデ、ナデ、沈線(工具端部による強い回転ナデ)	良	拓本貼付	1/1×2/3	2217	95	Ph.12
図65	2	2区	N0.E0	129	SK	埋1層	近世	皿	土師器	口縁~底部	7.8	1.45	4.5	長石・雲母・石英・赤色酸化粒	外)浅黄橙7.5YR8/3 内)浅黄橙7.5YR8/4	回転ナデ、ナデ、糸切り離し	回転ナデ、ナデ	良	拓本貼付	1/1×4/5	2215	17	Ph.12
図65	3	2区	S5.E0	222	SK	埋1層	近世	皿	土師器	口縁~底部	11.7	2.7	6.1	雲母・長石・黒色粒	外・内)黄灰2.5Y4/1	回転ナデ、横ナデ、ナデ	回転ナデ、指ナデ、沈線	良		1/1×2/3	2500	19	Ph.13
図65	4	2区	S5.E0	222	SK	埋1層	近世	皿	土師器	口縁~底部	(10.6)	2.4	(6.4)	長石・雲母・黒色粒・赤色酸化粒	外)にぶい橙7.5YR7/4 内)にぶい黄橙10YR7/4	回転ナデ、ナデ、糸切り離し	回転ナデ、ナデ	良	拓本貼付	1/1×3/5	2500	14	Ph.13
図65	5	2区	S5.E0	149	SK	埋1層	近世	皿	土師器	口縁~底部	(8.2)	2.0	(4.4)	雲母・褐色粒・長石・赤色酸化粒	外・内)灰白10YR8/2	回転ナデのちナデ、ナデ、糸切り離し	回転ナデのちナデ	良	拓本貼付	1/1×1/3	2268	28	Ph.13
図65	6	2区	S5.E0	111	SK	埋1層	近世	皿	土師器	口縁~底部	(9.3)	2.55	4.2	雲母・長石・黒色粒・赤色酸化粒・石英	外・内)浅黄橙10YR8/3	回転ナデ、工具によるナデ、ナデ、糸切り離し、切り離し後未調整	回転ナデ、一定方向ナデ、指おさえ(ナデ)	良	拓本貼付	1/1×2/3	2171	18	Ph.12
図65	7	2区	S5.E0	111	SK	埋4層	近世	皿	土師器	口縁~底部	(9.0)	2.2	(6.5)	雲母・長石・角閃石・黒色粒	外)にぶい黄橙10YR7/2 内)にぶい黄橙10YR7/4	回転ナデ、ナデ、糸切り離し	回転ナデ、ナデ	良	拓本貼付	1/1×1/5	2176	20	Ph.12
図65	8	2区	S5.E0	111b	SK	埋2層	近世	皿	土師器	ほぼ完形	6.2	1.6	4.8	雲母・黒色粒・長石・赤色酸化粒・石英	外・内)橙5YR6/6	横ナデ、指ナデ、ナデ	横ナデ、指ナデ、横方向指ナデ	良	歪みあり。手捏ね。	1/1× 9/10	2178	13	Ph.12
図65	9	2区	S10.W5	85	SK	埋1層	近世	皿	土師器	胴部~底部	-	2.1~	(4.6)	赤色酸化粒・雲母・褐色粒	外・内)浅黄橙10YR8/3	回転ナデ、ナデ、糸切り離し	回転ナデ	良	拓本貼付	2/3×1/3	2059	101	Ph.11
図65	10	2区	S10.W5	85	SK	埋2層	近世	灯明皿	土師器	口縁~底部	(9.6)	1.9	(5.4)	長石・角閃石・黒色粒・赤色酸化粒	外・内)にぶい橙7.5YR7/4	回転ナデ、糸切り離し、ナデ	回転ナデ	良	口縁部内外面にスス付着	1/1×1/5	2050	30	Ph.11
図65	11	2区	N0.E0	150	SK	-	近世	皿	陶磁器	口縁~高台	(12.0)	3.5	4.5	密(長石極少・黒色粒)肥前系	外)灰白2.5YR7/1 銅緑釉)緑灰10GY6/1、灰白10Y1/7	削り出し高台、回転ナデ、ヘラ削り、施釉(二度)	回転ナデ、施釉(二度)、釉ハギ	良	内野山窯系(銅緑釉)、二度釉かけ	1/1×1/5	2273	4	Ph.33
図65	12	2区	S5.E0	172	SP	掘り方	近世	灯明皿	土師器	完形	9.1	2.6	4.1	雲母・黒色粒・長石・赤色酸化粒	外・内)灰白10YR8/2	回転ナデ、糸切り離し、工具ナデ	回転ナデ、指ナデ	良	口縁~胴部までスス付着。歪みあり。 拓本貼付	完形	2309	12	Ph.13
図65	13	2区	S5.E0	172b	SK	上層	近世	皿	青磁	口縁~高台	(14.0)	3.3	4.8	密)長石細粒	胎)灰白5Y7/1 釉)灰白N7/ 染)暗オリーブ灰5GY6/1	回転ナデのち施釉、削り出し高台のち施釉	回転ナデ、型押し、染付け、施釉	良	型成形、波佐見?	1/1×1/2	2311	42	Ph.26
図65	14	2区	S5.E0	172	SP	埋土上層	近世	大皿	陶磁器	口縁~高台	(23.2)	4.7	8.4	密	胎)灰7.5Y6/1 釉)灰白2.5GY8/1 鉄釉)黒褐2.5Y3/2 銅釉)オリーブ灰10Y4/2	回転ナデ、削り出し高台、施釉	回転ナデのち染付けのち施釉	良	内底面の5箇所に焼成時の砂目あり。 外面には釉たれによる文様あり。	1/1×1/2	2314 2315	33	Ph.26
図66	1	2区	S5.W5	211	SK	埋1層	近世	皿	土師器	口縁	(8.4)	2.0~	-	雲母・長石・褐色粒・角閃石	外)浅黄橙7.5YR8/6 内)橙7.5YR7/6	回転ナデ	回転ナデ	良		2/3×1/5	2457	23	Ph.13
図66	2	2区	S5.W5	211	SK	埋2層	近世	灯明皿	土師器	完形	9.0	2.8	4.8	長石・雲母・黒色粒	外)浅黄橙10YR8/3 内)浅黄橙10YR7/4	回転ナデ、ナデ、糸切り離し	回転ナデ、ナデ	良	口縁部内外面にスス付着。拓本貼付	完形	2459	15	Ph.13
図66	3	2区	S5.W5	211	SK	埋2層	近世	皿	土師器	口縁~底部	(11.2)	2.6	5.8	長石・雲母・黒色粒・赤色酸化粒	外・内)灰黄2.5Y7/2	回転ナデ、ナデ、糸切り離し	回転ナデ、ナデ	良	拓本貼付	1/1×1/5	2459	16	Ph.13

表2-5

図版番号	枝番	区	グリット	遺構番号	遺構種類	出土層位(No.)	時代	器種	遺物種類	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(外面)	調整(内面)	焼成	備考	残存率	登録No.	実測番号	写真(Ph)No.
図66	4	2区	S5.W5	211	SK	埋1層	近世	灯明皿	土師器	口縁~底部	(9.5)	2.45	(4.4)	長石・雲母・赤色酸化粒・褐色粒	外)橙5YR7/6 内)浅黄橙7.5YR8/4	回転ナデ、糸切り離し	回転ナデ	良	口縁部内外面にスス付着。拓本貼付	1/1×1/3	2457	105	Ph.13
図66	5	2区	S5.W5	211	SK	埋1層	近世	皿	土師器	底部	-	1.6~	4.7	雲母・長石・褐色粒・赤色酸化粒・石英	外)浅黄橙7.5YR8/4 内)浅黄橙7.5YR8/6	回転ナデ、糸切り離し、棒状圧痕あり。	ナデ	良		1/2×2/3	2453	22	Ph.14
図66	6	2区	S5.E0	184	SK	埋土一括	近世	灯明皿	土師器	口縁~底部	(9.1)	2.3	(5.4)	長石・褐色粒	外)灰黄2.5Y7/2 内)浅黄2.5Y7/3	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、指ナデ	良	全体にスス付着	1/1×1/5	2426	106	Ph.14
図66	7	2区	S5.E0	184	SK	埋土一括	近世	皿	土師器	胴部~底部	-	1.5~	4.2	赤色酸化粒・雲母・褐色粒・石英・長石	外)浅黄橙10YR8/3 内)灰白10YR8/2	回転ナデ、糸切り離し	回転ナデ	良		1/2×1/2	2426	107	Ph.14
図66	8	2区	S5.E0	184	SK	埋土一括	近世	擂鉢	瓦質土器	口縁部	-	6.0~	-	長石・赤色酸化粒・褐色粒	外)にぶい赤褐2.5YR5/4 内)灰赤2.5YR5/2	貼付け突帯、回転ナデ	回転ナデ、櫛描き擂目	良		1/4×1/8	2426	108	Ph.45
図66	9	2区	S10.W5	31	SK	埋2層	近世	皿	土師器	口縁~底部	(6.0)	1.1	(4.0)	長石・褐色粒	外・内)にぶい橙 7.5YR7/4	回転ナデ、糸切り離し	回転ナデ	良	拓本貼付	1/1×1/2	2006	Ph.29	Ph.11
図66	10	2区	S10.W5	38	SX	埋2層	近世	皿	土師器	口縁~底部	8.4	1.9	5.2	黒色・褐色粒・長石・雲母・赤色酸化粒	外・内)浅黄橙7.5YR8/3	回転ナデ、糸切り離し	回転ナデ	良	拓本貼付	1/1× 9/10	2611	99	Ph.13
図66	11	2区	S10.W5	38	SX	埋2層	近世	皿	土師器	口縁~底部	(8.8)	1.95	4.4	赤色酸化粒・褐色粒・角閃石・長石	外・内)にぶい橙 7.5YR7/4	回転ナデ、ナデ、糸切り離し	回転ナデ、ナデ	良	拓本貼付	1/1×1/2	2611	100	Ph.13
図66	12	2区	S10.W5	38	SK	埋1層 埋1・2層 埋3層	近世	椀	陶磁器	口縁~高台	11.2	6.35	4.4	密)長石細粒	胎)にぶい黄橙10YR7/3 釉)オリーブ灰10Y5/2 釉)暗青灰5B3/1・4/1	回転ナデのち二度釉(銅緑釉)、削り出し高台	回転ナデのち二度釉	良	肥前系	1/1×1/4	2026 2027 2032	44	Ph.31
図66	13	2区	N0.E0	135	SK	埋土一括	近世	皿	陶磁器	胴部~高台	(14.0)	2.3~	6.3	密)長石・黒色粒・赤色酸化粒	断)灰白10YR8/2 釉)灰オリーブ5Y6/2	削り出し高台、ケズリのちナデロクロナデ、施釉	回転ナデ、施釉、釉ハギ	良	高台削り出し時に工具の端部が強く入った痕跡あり。	4/5×2/3	2264	6	Ph.37
図66	14	2区	N0.E0	135	SK	埋1層 埋土一括	近世	皿	陶磁器	胴部~高台	-	3.9~	6.6	密)少量の褐色粒	胎)にぶい黄橙10YR7/2 外釉)浅黄5Y7/3 内釉)緑灰10GY5/1	回転ヘラ削りのち施釉(緑釉)、削り出し高台	回転ナデのちヘラ描き文のち施釉、釉ハギ	良	唐津系、1600年代1700年、内野山内底面の釉ハギ跡の目跡が残存。銅緑釉	1/2×3/4	2258 2262	43	Ph.37
図66	15	2区	S5.E0	114	SK	埋1層	近世	皿	土師器	口縁~底部	(5.8)	1.2	(3.4)	褐色粒・長石	外・内)浅黄橙7.5YR8/4	回転ナデ、糸切り離し	回転ナデ	良	全体にスス付着、拓本貼付	1/1×1/4	2197	97	Ph.12
図66	16	2区	S5.E0	114	SK	埋1層	近世	皿	土師器	口縁~底部	(11.8)	2.0	(5.8)	長石・赤色酸化粒・褐色粒	外)橙7.5YR7/6 内)にぶい橙7.5YR7/4	回転ナデ、回転ヘラ削り	回転ナデ	良	底部内外面に黒斑あり。	1/1×1/2	2197	98	Ph.12
図66	17	2区	S5.E0	207	SK	埋1層	近世	皿	土師器	口縁~底部	(8.8)	2.0	(4.3)	雲母・長石・褐色粒・石英	外)浅黄橙10YR8/4 内)にぶい黄橙10YR7/3	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	良		1/1×1/4	2438	90	Ph.13
図66	18	2区	S5.W5	216a	SK	埋1層	近世	灯明皿	土師器	口縁~底部	(6.4)	1.2	4.0	赤色酸化粒・長石・褐色粒・石英	外・内)にぶい橙5YR7/4	回転ナデ、ナデ、糸切り離し	回転ナデ、強い回転ナデ	良	口縁欠損部にスス付着、灯明皿と思われる。拓本貼付	1/1×2/3	2480	26	Ph.13
図66	19	2区	S5.W5 N0.W5	216a 177	SK SP	埋1層 -	近世	鉢	瓦質土器	ほぼ完形	47.0	47.6	19.5	密)長石	外・内)灰白2.5Y7/1 内いぶし)黒褐色 10YR3/1	横方向削りのち横ナデ、敲打された痕、貼付け突帯、横ナデ、横方向ナデ	横方向ナデ、指ナデ、	良	内外面に酸化鉄の付着が見られる。	1/1×6/7	2670	110	Ph.13
図66	20	2区	N0.E0	98	SB	P-7	近世	皿	土師器	ほぼ完形	7.1	2.45	4.9	長石・雲母・黒色粒・赤色酸化粒・石英	外・内)橙5YR7/6	横ナデ、ナデ、指ナデ	横ナデ、指ナデ	良		ほぼ完形	2544	94	Ph.12
図66	21	2区	N0.E0	98	SB	P-8	近世	皿	土師器	口縁~胴部	(12.0)	2.2~	-	長石・褐色粒・赤色酸化粒	外・内)にぶい橙 7.5YR7/3	回転ナデ、ヘラ削り	回転ナデ、ヘラミガキ(横方向暗文)?	良	内底面に黒斑あり。	2/3×1/6	2550	91	Ph.11
図66	22	2区	N0.E0	98	SB	P-8	近世	皿	土師器	口縁~底部	(6.2)	1.15	(4.8)	長石・褐色粒・赤色酸化粒	外)にぶい黄橙10YR6/4 内)にぶい橙7.5YR7/4	回転ナデ、糸切り離し	回転ナデ、工具端部によるナデ	良	拓本貼付	1/1×1/3	2550	92	Ph.12
図67	1	2区	S10.W10 S5.E0 N0.E0	39 97 116	SK	埋4層 埋1層 埋1層	近世	抹茶椀	陶磁器	口縁~高台	(10.9)	6.8	5.1	長石・黒色粒・赤色酸化粒・石英	胎)灰白10YR8/2 釉)浅黄2.5Y7/4 染)暗褐10YR3/4・黒褐10YR2/3・黒10YR2/1	回転ナデ、ナデ、削り出し高台、施釉、染付け	回転ナデ	良	口紅、内野山 1600年代中葉?	1/1×1/2	2041 2124 2199	21	Ph.41
図67	2	2区	S5.E0	97	SK	埋1層	近世	椀	陶磁器	口縁~胴部	(9.6)	6.0~	-	密	乳白色、染)藍色	回転ナデのち染付けのち施釉	回転ナデのち施釉	良		3/4×1/4	2125	39	Ph.39
図67	3	2区	S5.E0	97	SK	埋1層	近世	椀	陶磁器	口縁~胴部	(10.4)	4.3~	-	密	明青灰、染)藍色	回転ナデのち染付けのち施釉	回転ナデのち施釉	良		1/2×1/6	2125	40	Ph.39
図67	4	2区	S5.E0	97	SK	埋1層	近世	鉢	陶磁器	口縁~胴部	-	5.3~	-	密)長石・褐色粒	胎)灰5Y6/1 外釉)灰オリーブ7.5Y 6/2・内釉)灰7.5Y6/1	回転ナデのち施釉	回転ナデのち施釉	良	唐津系	1/2× 1/10	2124	37	Ph.31
図67	5	2区	S5.E0	97	SK	埋1層	近世	皿	土師器	口縁~底部	(12.3)	2.4	(6.0)	長石・黒色粒・褐色粒	外・内)灰白2.5Y7/1	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ、沈線(工具端部による強い回転ナデ)	良	外面の一部に黒斑あり。	1/1×1/5	2125	104	Ph.12

表2-6

図版番号	枝番	区	グリット	遺構番号	遺構種類	出土層位(No.)	時代	器種	遺物種類	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(外面)	調整(内面)	焼成	備考	残存率	登録No.	実測番号	写真(Ph)No.
図67	6	2区	S5.E0	97	SK	埋1層	近世	香炉	青磁	胴部~脚部	-	4.9~	約9cm	多量の雲母・褐色粒	内)灰白2.5Y8/2 釉)明緑灰10GY7/1 鉄釉)橙2.5YR6/6	回転ナデ、貼付け三脚、ナデ、貼付け円形浮文、施釉	回転ナデ	良	伊万里、波佐見? 一脚欠損、円形浮文が三箇所に残存するが、等間隔ではない。	1/3×3/4	2124	38	Ph.39
図67	7	2区	N0.E0	97b	SK	-	近世	皿	陶磁器	底部	-	1.8~	4.7	長石・褐色粒	外・内)にぶい橙5YR6/4 釉)灰白2.5Y8/1	回転ナデ、回転ヘラ削り、削り出し高台(ちりめんじわあり)	回転ナデのち施釉	良	内底面の5箇所に焼成時の胎土目あり。	1/2×1/2	2127	34	Ph.30
図67	8	2区	S5.E0	97c	SK	埋3層	近世	皿	陶磁器	底部	-	1.7~	4.5	密)褐色粒	胎)黄灰2.5Y7/2 釉)灰白2.5Y7/1	回転ナデのち施釉、削り出し高台のち施釉	回転ナデのち施釉	良	内底面に三箇所、高台部に三箇所、重ね焼きの為の砂目あり。	1/3×1/2	2133	41	Ph.31
図67	9	2区	S5.E0	97	SK	埋1層	近世	大皿	陶磁器	胴部~高台	-	4.2~	(9.5)	密	胎)灰7.5Y6/1 釉)灰7.5Y6/1・4/1 釉)オリーブ灰10Y5/2	回転ナデのち施釉	ハケ目のち施釉、釉ハギに夜文様、ヘラ後釉による文様、染付け	良	鉄釉・鉛釉	2/3×1/5	2127	36	Ph.33
図67	10	2区	N0.W5	97c	SK	埋3層	近世	椀	陶磁器	口縁~高台	(8.8)	4.65	3.6	密)褐色粒	釉)灰白N8/ 染)暗青灰10G3/1	回転ナデ、染付け(もみじ文?・雨降り文?のち施釉	回転ナデのち施釉	良	伊万里焼	1/1×1/3	2133	45	Ph.39
図67	11	2区	S5.E0	97	SK	埋1層	近世	大皿	陶磁器	口縁~高台	(33.0)	8.7	9.1	密)長石細粒・褐色粒	胎)灰5Y6/1 釉)灰白7.5Y7/1・ オリーブ黒5Y3/2・ オリーブ灰10Y4/2	回転ナデのち施釉、回転ヘラ削り、削り出し高台	回転ナデのちヘラ描文のち施釉	良	高台部に胎土目あり。	1/1×1/3	2125	35	Ph.39
図68	1	2区	N0.W5	106	SK	埋1層	近世	皿	土師器	口縁~底部	(6.5)	1.1	4.6	長石・褐色粒・赤色酸化粒	外)浅黄橙7.5YR8/4 内)にぶい橙7.5YR7/4	回転ナデ、糸切り離し	回転ナデ、強いナデ	良	拓本貼付	1/1×1/2	2144	96	Ph.10
図68	2	2区	N0.E0	134b	SK	埋1層	近世	灯明皿	土師器	口縁~底部	5.9	1.2	2.8	雲母・長石・黒色粒・赤色酸化粒	外・内)にぶい橙7.5YR7/4	回転ナデ、ナデ、糸切り離し	回転ナデ、強いナデ	良	口縁部内外面にスス付着。 拓本貼付	1/1×7/8	2253	24	Ph.12
図68	3	2区	N0.E0	134b	SK	埋1層	近世	皿	土師器	口縁~底部	(5.6)	1.2	3.5	長石・褐色粒・赤色酸化粒	外・内)浅黄橙7.5YR8/4	回転ナデ、ナデ、糸切り離し	回転ナデ、強いナデ	良	拓本貼付	1/1×1/3	2253	25	Ph.12
図68	4	2区	N0.W5 N0.W5 N0.W5	175 175 包含層	SK SK	埋1・2層 埋1・2層 包Ⅲ層	近世	皿	陶磁器	ほぼ完形	9.8	3.3	4.1	密)多量の長石粒・黒色粒・赤色酸化粒	胎)にぶい赤褐4/3 釉)オリーブ灰10YR6/2	回転ナデ、削り出し高台(三日月高台)、回転ヘラ削り、施釉	回転ナデ、施釉	良	唐津・古唐津、1600年代。 三日月高台、ちりめんじわあり。	1/1×3/4	2327 2328 2746	5	Ph.27
図68	5	2区	N0.W5	175	SK	埋1層	近世	皿	陶磁器	胴部~高台	-	4.5~	(9.0)	密)長石・黒色粒 ニ彩唐津系	胎)にぶい赤褐5/3 釉)灰黄褐10YR4/2, オリーブ褐2.5Y4/3	回転ナデ、回転ヘラ削り、削り出し高台、施釉	回転ナデ、施釉	良	ニ彩唐津系	2/3×1/6	2323	9	Ph.27
図68	6	2区	N0.E0	209	SK	埋1層 No.1	近世	灯明皿	土師器	完形	9.2	2.9	3.9	長石・雲母・褐色粒	外)橙7.5YR7/6 内)橙7.5YR6/6	回転ナデのちナデ、削りのちナデ、糸切り離し	回転ナデ、ナデ	良	口縁部にスス付着。拓本貼付	完形	2441	50	Ph.14
図68	7	2区	N0.W5	209	SK	埋3層	近世	大皿	陶磁器	口縁部	-	5.6~	-	長石・褐色粒	胎)橙7.5YR6/6 釉)灰黄褐10YR6/2 染)暗オリーブ灰2.5GY3/1	回転ナデのち施釉	回転ナデのち施釉、緑釉による横線文様	良	残存が少なく反転復元はできないが、直径30cm以上はあるかも。胎土目	1/2×1/10	2448	47	Ph.29
図68	8	2区	N0.W5	209	SK	埋3層	近世	皿	陶磁器	口縁~底部	(13.4)	3.0	(3.8)	密)長石細粒	外)にぶい赤褐2.5YR5/3 釉)暗灰黄2.5Y5/2	回転ナデ、回転ヘラ削り、削り出し底部、施釉	回転ナデのち施釉	良	内底面に重ね焼きの為の胎土目あり。	1/1×1/6	2448	46	Ph.29
図68	9	2区	N0.E0 S5.W5	209 105	SK	埋2層 下層	近世	大皿	陶磁器	胴底部	-	5.5~	-	長石・雲母・褐色粒	外)にぶい赤褐5YR5/4 釉)黄灰2.5Y6/1	回転ナデ、釉たれあり	回転ナデのち施釉	良	唐津系	1/3×1/6	2445 2152	49	Ph.18
図68	10	2区	N0.W5	209	SK	埋土一括	近世	椀	陶磁器	胴底部	-	3.0~	-	密	胎)黄灰2.5Y6/1 釉)灰白10Y7/1 染)オリーブ灰10Y4/2	回転ナデのち染付け(陶胎染付け)のち施釉	回転ナデ	良	1600年代終わり頃カ?	1/2×1/6	2450	48	Ph.29
図68	11	2区	S5.W10	91	SK	下層	近世	皿	土師器	口縁~底部	(7.3)	1.1	(4.0)	赤色酸化粒・雲母・長石	外・内)にぶい橙7.5YR7/4	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、強いナデ	良		1/1×1/3	2123	102	Ph.11
図68	12	2区	S5.W10	91	SK	下層	近世	皿	土師器	胴部~底部	-	0.6~	(4.0)	雲母・赤色酸化粒・長石・褐色粒	外)橙7.5YR7/6 内)橙5YR7/6	回転ナデ、糸切り離しのちナデ	回転ナデ	良	拓本貼付	1/2×1/3	2123	103	
図68	13	2区	S5.W10	91	SK	埋1層	近世	灯明皿	土師器	完形	6.2	1.25	3.8	長石・赤色酸化粒・褐色粒	外・内)にぶい橙7.5YR7/4	回転ナデ、糸切り離し	回転ナデ、ナデ	良	口縁部にスス付着。拓本貼付	完形	2112	27	Ph.12
図68	14	2区	S5.W10	91	SK	埋土上層	近世	皿	土師器	口縁~底部	(5.9)	0.95	2.8	赤色酸化粒・長石・褐色粒	外・内)橙5YR7/6	回転ナデ、糸切り離し、ナデ	回転ナデ	良	拓本貼付	1/1×1/2	2105	31	Ph.11
図68	15	2区	S5.W10	91	SK	埋土上層	近世	皿	土師器	口縁~底部	(5.7)	0.95	(3.8)	赤色酸化粒・長石・褐色粒	外)にぶい橙5YR7/4 内)橙5YR7/6	回転ナデ、糸切り離し	回転ナデ	良	拓本貼付	1/1×1/3	2105	32	Ph.12
図69	1	1区	S20.W10	11	SK	埋2層	近世	皿	陶磁器	胴部~高台	-	4.8~	7.6	密)長石細粒	外・内)灰白5Y6/1 釉)灰7.5YR6/1 染)青灰5B5/1	回転ナデ、削り出し高台、施釉	回転ナデ、染付け、施釉、釉ハギ	良	釉ハギの部分全体に砂付着させ、重ね焼きシ、その際釉かけ部分(約5ミリ幅)にまで砂が付着している。	2/3×3/4	81	111	Ph.60

表3 伝大道寺跡遺跡群出土瓦観察表

平瓦(表)=凹面,平瓦(裏)=凸面、丸瓦(表)=凸面、丸瓦(裏)=凹面

表3-1

図番号	枝版号	区	グリット	出土地点	層位	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	残存高(cm)	平均厚(cm)	胎土	色調(表)	色調(裏)	調整(表)	調整(裏)	備考	実測番号	登録No.	写真番号
70	1	2区	N0.W5	黒色製地層(164-SK)	包4層	土製品(鴟尾か)	17.3	14.5	-	1.0~1.7	長石・石英・角閃石・黒色粒	にぶい橙 5YR 6/4	にぶい橙 5YR 7/4	全体的に強い縦方向のナデ	横方向ナデ	形式的には法輪寺のような鴟尾の小型品ではないか?	100	2767	Ph.71
70	2	立会	-	-	-	軒平瓦	14.3	19.5	9.8	軒先4.6 平瓦2.5	長石・黒色粒・雲母・角閃石	灰 7.5Y 6/1	灰 7.5Y 6/1	布目	格子目タタキ、ケズリ	偏行唐草文、面違鋸歯文、珠文	23	7000	Ph.71
71	3	2区	N0.W5	163-SK	-	軒平瓦	12.5	12.6	7.9	軒先5.3 平瓦2.5	長石・赤色酸化粒	黄灰 2.5Y 5/1	黄灰 2.5Y 5/1	ナデ	縄目タタキ、ケズリ	偏行唐草文、面違鋸歯文、珠文、布目(桶板痕あり)	19	2801	Ph.71
71	4	2区	S10.W5	38-SK	埋2層	軒平瓦	16.3	12.1	8.8	軒先5.0 平瓦2.0	長石・黒色粒	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	布目(桶板痕あり)	ケズリ	偏行唐草文、面違鋸歯文、珠文、(桶巻造り)	18	2028	Ph.73
71	5	1区	S20.W10	11-SK	埋3層	軒平瓦	4.2	7.5	2.7	-	長石・角閃石・雲母・褐色粒	浅黄橙 10YR 8/4	浅黄橙 10YR 8/4	ナデ	ナデ	偏行唐草文、珠文(剥離)	29	70	Ph.65
71	6	2区	N0.E0	247-SK	埋土一括	軒平瓦	3.7	6.0	2.9	軒先2.9	長石・石英・雲母・赤色酸化粒	浅黄橙 7.5YR 8/6	浅黄橙 7.5YR 8/6	ナデ	ナデ	偏行唐草文、珠文	34	2522	Ph.71
71	7	3区	N15.W5	77-SK	埋1層	軒平瓦	7.3	12.3	8.3	軒先5.0 平瓦2.0	長石・黒色粒・石コロ	黄灰 2.5Y 6/2	黄灰 2.5Y 5/1	ナデ	横ナデ	花弁文、鋸歯文面違い?ナデ	22	5201	Ph.71
72	1	3区	N15.E0	65-SK	埋3層	軒丸瓦	14.3	10.1	3.5	-	長石・石英・角閃石・雲母・黒色粒	浅黄橙 10YR 8/3	にぶい黄橙 10YR 7/4	ナデ	布目	珠文、単弁蓮華文	24	5200	Ph.65
72	2	2区	S5.E0	112-SK	埋1層	軒丸瓦	7.3	6.5	3.8	-	長石・石英	黄灰 2.5Y 5/1	灰 N 4/	ナデ	ナデ	珠文、複弁蓮華文?	25	2800	Ph.65
72	3	2区	N0.W5	175-SK	埋1層	軒丸瓦	8.1	6.0	3.5	-	長石・雲母・黒色粒	灰白 5Y 7/1	黄灰 2.5Y 6/1	ナデ	ヘラナデ	珠文、面違鋸歯文、花弁?	26	2802	Ph.65
72	4	2区	S5.W5	133-SP	-	軒丸瓦	6.3	6.3	3.0	-	長石・雲母	黄灰 2.5Y 5/1	黄灰 2.5Y 5/1	ナデ	-	円形浮文、面違鋸歯文、複弁蓮華文?	27	2802	Ph.65
72	5	2区	N0.W5	104-SK(カクラン)	埋1層	軒丸瓦	9.4	8.3	6.3	-	長石・石英・雲母・角閃石	にぶい黄橙 10YR 7/2	にぶい黄橙 10YR 7/2	ナデ	ナデ	花弁文	33	2135	Ph.71
72	6	2区	N0.W5	104-SK(カクラン)	-	軒丸瓦?	2.7	6.3	1.6	-	長石・角閃石・砂粒	灰 N 5/	灰 N 5/	-	-	珠文他	21	2138	Ph.65
72	7	2区	N0.W5	106-SK	埋3層	軒丸瓦?	5.0	7.7	2.8	-	長石・黒曜石・雲母	灰黄 2.5Y 6/2	灰黄 2.5Y 6/1	布目	ヘラケズリ	四角形押型文	20	2150	Ph.71
72	8	2区	S10.W5	37-SE	埋2層	軒丸瓦?	8.1	6.7	2.5	-	長石・角閃石	灰 N 5/	灰 N 5/	布目、ヘラケズリ	ヘラケズリ	鋸歯文	35	2618	Ph.71
72	9	2区	N0.W5	163-SK	埋1層	丸瓦	7.5	8.0	2.5	-	長石・石英・石コロ	灰黄褐 10YR 5/2	にぶい黄橙 10YR 6/3	ナデ	布目	No.1取上げ	38	2337	Ph.75
72	10	2区	S5.E0	111c-SK	埋1層	軒丸瓦?	4.6	4.6	1.8	-	長石・雲母・赤色酸化粒	灰 5Y 5/1	灰 5Y 6/1	ナデ、線刻文字	格子目タタキ		28	2184	Ph.65
73	1	2区	N0.W10	黒褐色整地層	包4'層	軒丸瓦?	2.5	5.2	4.0	-	長石	にぶい黄橙 7.5YR 7/4・暗灰 N3/	-	横ナデ	横ナデ		9	2758	Ph.72
73	2	2区	N0.W10	黒褐色整地層	包4'層	丸瓦	9.3	7.7	6.9	1.6	長石・石英・雲母・角閃石	浅黄 2.5Y 7/3	浅黄 2.5Y 7/3	縄目タタキのちナデ	布目		7	2758	Ph.72
73	3	2区	N0.W10	黒褐色整地層	包4'層	平瓦	9.9	10.8	2.2	1.8	長石・石英・角閃石	にぶい橙 7.5YR 7/4	にぶい橙 7.5YR 7/4	布目	格子目タタキのちナデ		5	2758	Ph.72
73	4	2区	N0.W10	黒褐色整地層	包4'層	平瓦	7.4	5.8	1.9	1.6	長石・石英・褐色粒	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	布目	格子目タタキのちナデ、ヘラ切り		8	2758	Ph.72
73	5	2区	N0.W5	黒褐色整地層	包4'層	平瓦	10.0	9.0	1.9	1.6	長石・角閃石・黒色粒	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	布目	格子目タタキのちナデ、ヘラ切り		10	2758	Ph.72
73	6	2区	N0.W5	黒褐色整地層	-	平瓦	10.5	8.5	4.3	1.9	長石・石英・角閃石	灰 N 4/	灰 N 6/	布目	格子目タタキ痕、ヘラ切り?		15	2790	Ph.72
73	7	2区	N0.W10	黒褐色整地層	包4'層	平瓦	15.3	13.9	4.1	1.5~2.0	長石・石英・角閃石	灰白 2.5Y 7/1・黄灰 2.5Y 5/1	黄灰 2.5Y 6/1	布目、ヘラ切り	縄目タタキ、ヘラ切り		3	2789	Ph.74
73	8	2区	N0.W10	黒褐色整地層	包4'層	平瓦	13.2	13.0	3.1	1.4	長石・石英・雲母・角閃石・赤色酸化粒	黄灰 2.5Y 6/1・黄灰 2.5Y 7/3	黄灰 2.5Y 6/1,黄灰 2.5Y 7/3	布目、ヘラ切り	縄目タタキ、ヘラ切り		4	2758	Ph.74
73	9	2区	N0.W10	黒褐色整地層	包4'層	平瓦	14.0	11.5	3.9	2.2	長石・黒色石	灰黄褐10YR 4/2・にぶい赤褐 5YR 5/4	黄灰 2.5Y 5/1	布目	縦方向縄目タタキ、ヘラ切り		6	2758	Ph.74
73	10	2区	N0.W5	黒褐色整地層	包4'層	熨斗瓦?	7.8	7.1	2.0	2.0	長石・石英・褐色粒	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	布目	縄目タタキ		11	2758	Ph.74
74	1	2区	N0.W10	黒色整地層	包4層	丸瓦	12.7	7.4	8.2	1.1	石英・長石細粒・雲母・角閃石・赤色酸化粒	にぶい黄橙 10YR 7/2	にぶい黄橙 10YR 7/3	縦方向縄目タタキ、縄目タタキのちケズリ	布目、ヘラ切り		1	2759	Ph.73
74	2	2区	N0.W10	黒色整地層	包4層	丸瓦	14.3	7.6	4.8	1.2	石英・長石を多く含む	黄灰 2.5Y 6/1	黄灰 2.5Y 5/1	縄目タタキのちナデ、縄目タタキのちケズリ	布目、ヘラ切り		2	2759	-

表3-2

図番号	枝版号	区	グリット	出土地点	層位	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	残存高(cm)	平均厚(cm)	胎土	色調(表)	色調(裏)	調整(表)	調整(裏)	備考	実測番号	登録No.	写真番号
74	3	2区	N0.W5	黒色整地層	-	平瓦	21.6	16.6	5.3	2.3	長石･石英･雲母･黒色粒	灰 N 5/	灰 N 5/	布目、ヘラ切り	縄目タタキ、ヘラ切り		12	2790	Ph.74
74	4	2区	N0.W5	黒色整地層	-	丸瓦	6.0	6.6	2.0	1.8	長石･石英･砂粒	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	縄目タタキ痕	布目痕、ヘラ切り		14	2790	-
74	5	2区	N0.W5	黒色整地層	-	平瓦	9.8	13.7	304.0	2.3	長石･雲母･角閃石･赤色酸化粒	黄灰 2.5Y 7/2	黄灰 2.5Y 7/2	布目	縄目タタキ、ヘラ切り		13	2790	Ph.74
74	6	2区	N0.W10	黒色粘質土	3'･4'層	平瓦	10.2	9.1	5.8	2.8	長石･石英･角閃石･黒色粒･赤色酸化粒	黄灰 2.5Y 5/1	黄灰 2.5Y 5/1	布目	縄目タタキ、ヘラ切り		16	2757	-
75	1	2区	S5.E0	184-SK	埋土一括	平瓦	20.0	22.9	6.2	2.0	長石･雲母･褐色粒･赤色酸化粒	灰白 5Y 7/2	灰白 5Y 7/1	布目	格子目タタキ		57	2426	Ph.83
75	2	2区	N0.W5	209-SK	埋1層	平瓦	16.9	15.5	6.2	2.0	長石･雲母	にぶい褐 7.5YR 5/3	灰黄褐 10YR 6/2	布目、ケズリのちナデ	縄目タタキ		51	2443	Ph.77
75	3	2区	N0.W5	163-SK	埋1層	平瓦	13.0	9.0	6.4	2.7	長石･角閃石･黒色粒	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/2	布目	縄目タタキ	No.29取上げ	37	2364	Ph.75
75	4	2区	N0.W5	163-SK	埋土一括	平瓦	7.9	5.1	2.5	2.5	長石･雲母･石英･石コロ	黄灰 2.5Y 6/1	黄灰 2.5Y 5/1	布目	縄目タタキ		42	2379	Ph.75
75	5	2区	N0.W5	163-SK	埋1層	平瓦	7.0	10.1	2.4	1.7	長石･石英･雲母･角閃石	灰白 2.5Y 8/2	灰黄 2.5Y7/2	布目	縄目タタキ	No.34取上げ	39	2369	Ph.75
76	1	2区	S5.E0	112-SK	埋1層	平瓦	7.8	10.3	2.7	2.1	赤色酸化粒･長石･褐色粒	にぶい黄橙 10YR 7/3	灰黄 2.5Y 7/2	布目痕	格子目タタキ		68	2185	Ph.84
76	2	2区	N0.E0	203-SP	埋1層	平瓦	6.0	8.0	2.1	2.0	長石･雲母･赤色酸化粒･黒色粒	黄灰 2.5Y 6/1	黄灰 2.5Y 6/1	布目	格子目タタキ		54	2626	Ph.83
76	3	2区	N0.W5	175-SK	埋1層	平瓦	4.0	4.7	4.5	2.7	長石･褐色粒	灰 7.5Y 6/1	灰 7.5Y 6/1	布目、ヘラケズリ	格子目タタキ		96	2372	-
76	4	2区	N0.W5	175-SK	埋1層		6.0	6.1	2.2	1.5	長石･雲母･褐色粒	灰白 5Y 7/1	灰白 5Y 7/1	布目、ヘラケズリ	格子目タタキのちナデ		89	2326	-
76	5	2区	N5.E0	111-SK	埋4層	平瓦	10.0	15.1	3.9	2.5	角閃石･長石･褐色粒	黄灰 2.5Y 6/1	黄灰 2.5Y 6/1	布目	格子目タタキ		52	2176	Ph.83
76	6	2区	N0.W5	175-SK	埋1層	平瓦	16.1	16.8	5.8	2.1	長石･雲母･褐色粒	にぶい黄橙 10YR 5/4	にぶい黄橙 10YR 545	布目、ヘラケズリ	縄目タタキ	No.1取上げ	48	2324	Ph.80
76	7	2区	N0.E0	106-SK	-	丸瓦	8.8	7.0	6.3	2.0	多量の赤色酸化粒･角閃石･褐色粒	浅黄橙 7.5YR 8/4	浅黄橙 7.5YR 8/4	布目痕、ヘラケズリ	格子目タタキ		80	2140	Ph.80
77	1	2区	N0.W5	209-SK	埋1層	平瓦	11.3	13.6	4.1	1.9	長石･雲母･黒色粒	灰オリーブ 7.5Y 6/2	灰 7.5Y 6/1	布目、ケズリ	縄目タタキ		62	2444	Ph.77
77	2	2区	N0.W5	209-SK	埋1層	平瓦	7.5	6.0	4.5	2.0	長石･褐色粒･角閃石	灰白 2.5Y 7/1	灰黄褐 10YR 6/2	布目、ヘラケズリ	縄目タタキ		86	2444	-
77	3	2区	N0.W5	209-SK	埋1層	平瓦	17.0	13.0	4.5	2.0	長石･角閃石･石英	灰 N 5/	灰 N 6/	布目、ヘラケズリ	縄目タタキ、ケズリ		61	2443	Ph.77
77	4	2区	N0.W5	209-SK	埋1層	平瓦	17.0	12.4	4.0	2.1	長石･黒色粒･赤色酸化粒	灰 5Y 5/1	灰 5Y 4/1	布目、ヘラケズリ	縄目タタキ、ケズリ		60	2815	Ph.78
77	5	2区	N0.W5	209-SK	埋1層	平瓦	7.8	10.5	5.6	2.5	角閃石･長石･褐色粒	浅黄 2.5Y 8/3	浅黄 2.5Y 8/4	布目、ヘラケズリ	縄目タタキ		79	2444	-
77	6	2区	N0.E0	209-SK	埋1層	平瓦	7.4	10.2	4.5	1.5~2.4	長石･雲母･黒色粒	灰 N 4/	灰 5Y 5/1	布目、ヘラ切りのちナデ	ヘラケズリ		59	2442	Ph.77
78	1	1区	S20.W5	18-SK	埋3層	平瓦	10.7	13.6	6.5	2.1	長石･赤色酸化粒･褐色粒･雲母	黄灰 2.5Y 4/1	黄灰 2.5Y 4/1	布目のちナデ	格子目タタキ	No.1取上げ	45	132	Ph.85
78	2	1区	S20.W5	18-SK	埋3層下層	平瓦	7.4	9.7	2.5	1.9	長石･赤色酸化粒･褐色粒	にぶい黄橙 10YR 7/4	にぶい黄橙 10YR 7/4	布目、ナデ	格子目タタキ		75	130	Ph.86
78	3	1区	S20.W5	18-SK	埋2層	平瓦	9.4	16.5	6.9	-	長石･褐色粒	にぶい黄橙 10YR 7/2	浅黄橙 10YR 8/4	布目のちナデ	格子目タタキのちナデ		30	128	Ph.85
78	4	1区	S20.W5	18-SK	埋3層	平瓦	6.0	10.5	5.5	1.9	長石･褐色粒	浅黄橙 10YR 8/4	浅黄橙 10YR 8/4	布目、ヘラケズリ	格子目タタキ		84	177	Ph.86
78	5	1区	S20.W5	18-SK	埋3層	平瓦	8.0	5.5	4.7	2.3	長石･赤色酸化粒･褐色粒	灰白 7.5Y 7/1	灰白 7.5Y 7/1	布目、ヘラケズリ	格子目タタキ		82	130	Ph.86
78	6	1区	S20.W5	18-SK	埋3層	熨斗瓦?	6.8	4.2	1.5	-	長石	黄灰 2.5Y 6/1	灰 5Y 4/1	布目	縄目タタキ		31	128	Ph.85
79	1	2区	N0.W5	163-SK	埋1層	丸瓦	15.8	8.5	8.2	2.0	長石･赤色酸化粒･雲母･褐色粒	浅黄橙 7.5YR 8/4	橙 5YR 6/6	タタキのちナデ	布目、ケズリ		36	2365	Ph.75
79	2	2区	N0.W5	163-SK	埋1層	丸瓦	19.0	9.4	8.5	2.2	長石･角閃石･黒色粒･雲母	灰白 N 7/	灰白 N 7/	格子目タタキのちナデ	布目	No.6取上げ	40	2342	Ph.75
79	3	2区	S5.E0	112-SK	埋1層	丸瓦	7.8	10.2	3.2	1.6	褐色粒･赤色酸化粒･角閃石･長石	灰黄 2.5Y 7/2	灰黄 2.5Y 8/2	縄目タタキ	布目		72	2188	Ph.84

表3-3

図番号	枝版号	区	グリット	出土地点	層位	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	残存高(cm)	平均厚(cm)	胎土	色調(表)	色調(裏)	調整(表)	調整(裏)	備考	実測番号	登録No.	写真番号
79	4	2区	S5.E0	112-SK	埋1層	丸瓦	11.6	6.8	5.4	1.8	褐色粒・赤色酸化粒・雲母	灰白 5Y 8/1	灰白 5Y 8/1	縄目タタキ	布目、ヘラ切り		71	2185	Ph.84
79	5	2区	N0.W5	175-SK	埋1層	丸瓦	11.0	6.7	1.9	1.2	石英・角閃石・長石・赤色酸化粒・雲母・黒色粒	灰白 7.5Y 8/1	灰白 10Y 7/1	縄目タタキ痕	布目		50	2325	Ph.80
79	6	2区	S5.E0	112-SK	埋1層	丸瓦	5.3	6.3	4.6	1.3	長石・角閃石	灰 N 5/	灰 N 6/	ナデ	布目、ヘラ切り		70	2188	Ph.84
79	7	2区	S5.E0	112-SK	埋1層	丸瓦	3.5	8.3	7.9	2.7	長石・石英・雲母・角閃石・褐色粒	黄灰 2.5Y 8/1	黄灰 2.5Y 8/1	ナデ	剥離の為不明		43	2185	Ph.75
79	8	2区	N0.E0	206-SK	埋1層	丸瓦	7.8	10.6	2.6	1.5	角閃石・長石・褐色粒・赤色酸化粒	にぶい黄橙 10YR 7/2	にぶい黄橙 10YR 7/2	摩耗の為調整不明	摩耗の為調整不明		77	2442	
79	9	2区	S5.E0	112-SK	埋1層	丸瓦	10.3	9.7	4.3	2.0	長石・雲母・角閃石	灰黄 2.5Y 7/2	灰黄 2.5Y 7/2	ナデ	布目		69	2188	Ph.84
79	10	2区	N0.W5	163-SK	埋1層	丸瓦	7.8	5.8	2.4	1.4	長石・雲母・石英	橙 5YR 7/6	橙 5YR 7/6	横ナデ、沈線	布目		41	2846	Ph.75
80	1	2区	N0.W5	209-SK	埋1層	丸瓦	11.3	7.4	7.5	1.5~2.3	長石・石英	褐灰 10YR 6/1	灰黄褐 10YR 6/2	横ナデ	布目、ヘラケズリ		66	2444	Ph.77
80	2	2区	N0.W5	209-SK	埋1層	丸瓦	8.8	10.6	7.2	1.6~3.0	長石・角閃石・石コロ	灰 N 5/	灰 5Y 4/1	ケズリ、横ナデ	布目		46	2444	Ph.78
80	3	2区	N0.W5	209-SK	埋2層	丸瓦	14.3	12.7	8.6	2.0	長石・石英・黒色粒	にぶい黄橙 10YR 7/3	にぶい黄橙 10YR 7/4	ナデ、ヘラ切り	布目		49	2446	Ph.78
80	4	2区	N0.W5	209-SK	埋1層	丸瓦	6.3	10.0	7.1	1.8	雲母・褐色粒・長石・赤色酸化粒	灰白 5Y 7/2	灰黄 2.5Y 7/2	縄目タタキ	布目		74	2444	Ph.77
80	5	2区	N0.W5	209-SK	埋1層	丸瓦	8.5	5.4	2.7	2.0	長石・角閃石・石英・石コロ	橙 5YR 7/6	橙 5YR 7/6	ナデ	布目		92	2443	-
80	6	2区	N0.W5	209-SK	埋1層	丸瓦	5.0	5.2	4.3	1.0	長石・黒色粒	灰 5Y 6/1	灰 5Y 6/1	ヘラケズリのち横ナデ	布目、ヘラケズリ		67	2445	Ph.77
80	7	2区	S5.W5	88-SK	埋3層	丸瓦	16.7	6.1	7.0	1.9	長石・雲母・黒色粒	オリーブ灰 2.5GY 5/1	灰 7.5Y 4/1	格子目タタキ	布目、ヘラ切り		65	2085	Ph.79
81	1	2区	S5.W5	218c-SK	埋3層	丸瓦	12.6	10.1	6.9	1.8~3.4	長石・雲母・褐色粒	灰 7.5Y 6/1	黄灰 2.5Y 6/1	横ナデ	布目		44	2497	Ph.79
81	2	2区	S5.W5	85b-SK	埋1層	丸瓦	7.8	7.8	4.7	1.5~2.0	長石・石英・角閃石・赤色酸化粒	灰黄褐 10YR 6/2	灰黄褐 10YR 6/2	横ナデ、ヘラケズリ	布目		58	2056	Ph.79
81	3	2区	S5.E0	97b-SK	埋2層	丸瓦	8.9	7.8	6.6	2.0~2.7	長石・石英・雲母	灰 N 5/	灰 N 4/	横ナデ	布目		55	2128	Ph.79
81	4	2区	N0.W5	175-SK	埋1層	丸瓦	10.3	5.9	7.0	2.0	長石・石英・雲母・黒色粒	橙 2.5YR 6/6	にぶい橙 7.5YR 6/4	ナデ、ヘラケズリ	布目、ヘラケズリ		64	2325	Ph.80
81	5	2区	S10.W5	86-SK	埋1層	丸瓦	13.1	6.8	6.4	1.7	長石・石英・雲母・角閃石・石コロ	にぶい黄橙 10YR 6/3	灰黄褐 10YR 6/2	縄目タタキのちナデ	布目、ヘラ切り		56	2075	Ph.79
81	6	2区	S5.E0	184-SK	埋3層	丸瓦	10.0	8.3	9.5	2.2	長石・石英・黒色粒	赤灰 2.5YR 5/1	褐灰 7.5YR5/1	ナデ、ヘラケズリ	布目ヘラ、ケズリ		47	2425	Ph.79
82	1	1区	S20.W!0	11-SK	埋3層	丸瓦	16.5	11.5	7.8	2.0	長石・雲母・石英・角閃石	橙 7.5YR 7/6	橙 7.5YR 6/6	ナデ	ケズリ、布目		95	70	Ph.87
82	2	1区	S20.W10	12-SK	下層	丸瓦	16.8	10.7	7.4	2.0	長石・石英・雲母	灰 5Y 6/1	灰 5Y 6/1	縄目タタキとハケ目がかすかに残る。ナデ	布目		63	99	Ph.87
82	3	1区	S20.W5	18-SK	埋3層下層	丸瓦?	8.3	4.7	1.6	-	蜜(長石)	灰白 10YR 8/1	灰白 10YR 8/2	布目	ナデ、沈線		32	134	Ph.85
83	1	3区	N15.W5	77-SK	埋1層	滴水瓦(瓦当のみ)	7.8	6.7	3.4	2.0	長石・褐色粒	灰 N 4/	灰 N 4/	ナデ	多方向ヘラケズリのちナデ	梵字様円文 瓦№21	88	5132	Ph.96
83	2	立会	断面J	SK-05	下層	滴水瓦(瓦当のみ)	9.4	7.7	3.7	1.5~3.4	長石・角閃石・褐色粒	灰 5Y 6/1	灰 5Y 5/1	-	ナデ	桔梗文、唐草文 瓦№20	87	7024	Ph.96
83	3	2区	N0.E0	134a-SK 98-SB_P8	埋1層	軒丸瓦(瓦当のみ)	直径15.3	-	-	2.5	長石	褐灰 7.5YR 5/1	褐灰 7.5YR 6/1	ナデ	ナデ	三巴文、珠文(8個復元)、丸瓦欠損、接着強化のための深い刻みが見られる。 瓦№26	76	2222 2550	Ph.95
83	4	2区	S5.E0	185-SK	下層	軒丸瓦(瓦当のみ)	直径16.4	-	-	2.3	長石・石英・雲母	暗灰 N 3/	暗灰 N 3/	ナデ	ナデ	三巴文、珠文(10個) 瓦№27	73	2814	Ph.95
84	1	2区	N0.E0	159-SK	埋2層	軒平瓦	4.5	15.0	8.8	平2.2 軒幅4.0	長石・褐色粒・雲母	灰 N 5/	灰 N 5/	横方向ナデ	横方向ナデ	十字円形中心飾り、唐草文 瓦№25	78	2304	Ph.89
84	2	立会	断面D	SK-07	-	軒平瓦	9.5	9.0	6.8	平2.1 軒幅4.1	長石・褐色粒・石英・石コロ	灰 7.5Y 5/1	灰 7.5Y 4/1	縦方向ナデのち横方向ナデ	不定方向ナデのち横方向ナデ	唐草文、円形浮文 瓦№19	85	7033	Ph.96
84	3	3区	N15.W5	70-SK	埋3層	平瓦	12.0	9.3	2.6	2.0	長石・雲母・褐色粒	灰 5Y 5/1	灰 5Y 6/1	横方向ヘラケズリのちナデ	多方向ヘラケズリのちナデ		94	5068	Ph.70

表3-4

図番号	枝版号	区	グリット	出土地点	層位	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	残存高(cm)	平均厚(cm)	胎土	色調(表)	色調(裏)	調整(表)	調整(裏)	備考	実測番号	登録No.	写真番号
84	4	3区	N15.W5	70-SK	埋3層	平瓦	12.2	8.9	3.0	2.0	長石･褐色粒	灰白 2.5Y 7/1	灰白 2.5Y 7/1	縦方向ヘラケズリのち縦方向ナデ､広端部横方向ナデ	縦方向ナデ	瓦№18	93	5068	Ph.70
84	5	3区	N15.W5	77-SK	埋2層	平瓦	9.5	7.8	2.0	1.4	長石･雲母･褐色粒	黄灰 2.5Y 6/1	灰 N 5/1	縦方向ヘラケズリのち縦方向ナデ	縦方向ヘラケズリのちナデ	瓦№15	91	5091	Ph.69
84	6	3区	立会	-	-	平瓦	32.2	15.3	6.6	2.8	長石･褐色粒	灰 N 5/	灰黄 2.5Y 7/2	平行文タタキのちナデ､ヘラケズリのちナデ	平行文タタキのちナデ､ヘラケズリのちナデ	瓦№37	17	5000	Ph.69
85	1	2区	S5.W5	211-SK	埋1層	丸瓦	11.5	7.1	3.4	2.0	長石･石英･雲母	灰 10Y 5/1	灰 5Y 6/1	ナデ	ヘラ切りのちナデ､布目		53	2458	Ph.79
85	2	3区	N10.W5	包含層3層	-	丸瓦	15.8	8.1	6.9	2.4	長石･雲母･黒色粒	灰 N 4/	暗灰黄 2.5Y5/2	縦方向ナデ	コビキA(糸切痕)	瓦№23	83	5173	Ph.70
85	3	3区	N15.W5	77-SK	埋1層	丸瓦	19.3	11.3	7.1	2.2	長石･雲母･黒色粒	黒 5Y 2/1･灰5Y 6/1	灰 5Y 4/1	縦方向ナデ	二方向のコビキA(糸切痕) 吊り紐痕? ヘラケズリ	玉縁との接合部付近に竹管文1つあり。裏に交差した縄目痕あり。 №40取上げ､瓦№22	81	5120	Ph.96
85	4	3区	N15.W5	70-SK	埋1層	丸瓦	12.0	10.0	7.5	2.9	長石･雲母･褐色粒	にぶい黄橙 10YR 6/3	にぶい黄橙 10YR 5/2	縦方向のヘラナデのちナデ消し	コビキA(糸切痕)	瓦№16	90	5078	Ph.70
92	1	立会	境界部分	SK-07	埋1層	板塀瓦	48.0	28.0	4.9	2.0	黄褐色粘質･ 混暗褐色土	青灰 5B 5/1	青灰 5B 5/1	ケズリのち丁寧なナデ	ケズリのち丁寧なナデ	2箇所の穿孔あり｡穿孔の中に鉄釘らしき遺物残存	97	7039	Ph.96-5

		区	グリット	出土地点	層位	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	残存高(cm)	平均厚(cm)	胎土	色調(表)	色調(裏)	調整(表)	調整(裏)	備考	瓦番号	登録No.	写真番号
-	-	2区	S5W5	130b-SK	-	軒丸瓦 (瓦当のみ)	13.4	13.8	3.3	2.1	赤色酸化粒･長石･ 雲母･黒色粒	オリーブ黒 10Y 3/1	オリーブ黒 10Y 3/1	ナデ	不定方向ナデ	三巴文､珠文(12個)	42	2709	Ph.94-3
-	-	1区	S20W10	15-SK	埋1層	軒平瓦	23.4	14.3	7.9	2	長石･黒色粒	灰 N 4/	灰 N 4/	丁寧な不定方向ナデのち広端部横方向ナデ	コビキB(鉄線切痕)のち不定方向ナデのち棒状工具ケズリ	三巴文､唐草文､胴部凹面に印あり。	30	120	Ph.95-2
-	-	2区	S5W10	表土	-	軒平瓦	5.6	16.9	7.9	2	長石･褐色粒	灰 5Y 4/1	灰 5Y 4/1	横方向ナデ､縦方向ナデ	瓦当接合部横方向ナデ	三巴文中心飾り､唐草文	33	2099	Ph.91-4
-	-	2区	N0E0	134b-SK	南カタ	軒平瓦	16.8	10.8	4	2.2	長石･褐色粒	灰 5Y 6/1	灰 5Y 6/1	縦方向ナデのち広端部横方向ナデ	縦方向ナデのち瓦当接合部横方向ナデ	唐草文か	28	2226	Ph.89-1
-	-	2区	N0W5	表土	-	軒平瓦	15.5	14.4	4.9	2.1	長石･褐色粒	オリーブ黒 7.5Y 3/1	灰 7.5Y 4/1	不定方向ナデ	不定方向ナデ､瓦当接合部横方向ナデ	三巴文中心飾り､唐草文	38	2771	Ph.89-4
-	-	1区	S20W5	12-SK	埋1層	丸瓦	24.6	12.6	8.8	1.8	雲母･長石･褐色粒	灰 N 4/	灰 N 4/	縦方向ヘラケズリのち縦方向ナデ､玉縁横方向ナデ	コビキA(糸切痕)	胴部凸面に印あり。	31	89	Ph.95-1
-	-	2区	N0W10	包含層	3層	丸瓦	9.3	11.6	9	2.2	長石･黒色粒	灰 7.5Y 5/1	灰 7.5Y 5/1	ナデ､玉縁横法ナデ	コビキA(糸切痕)		39	2741	Ph.94-2
-	-	2区	S5E0	表土	-	丸瓦	12.8	9.4	8.6	1.9	長石･黒色粒･ 赤色酸化粒	灰 7.5Y 5/1	灰 N 5/	縦方向ヘラケズリのち縦方向ナデ､玉縁横方向ナデ	コビキA(糸切痕)	胴部凸面に印あり。	40	2779	Ph.94-4
-	-	3区	N15E0	65-SK	埋2層	丸瓦	16.9	6.9	8.4	2.5	長石･褐色粒･雲母	灰 5Y 5/1	灰 5Y 6/1	縦方向ヘラケズリのち横方向ナデ	コビキA(糸切痕)､狭端部ナデ		35	5005	Ph.96-2
-	-	3区	N15E0	65-SK	埋2層	平瓦	21.1	11.7	5.8	2.4	長石･褐色粒	灰 7.5Y 4/1	灰 7.5Y 4/1	不定方向ナデ	不定方向ナデ		36	5004	Ph.96-1
-	-	3区	N15W5	65-SK	埋2層	平瓦	19.7	12.6	3.8	2	長石･褐色粒	灰白 5Y 7/2	灰白 5Y 7/2	横方向ナデのち縦方向ナデ	平行タタキのちナデ消し		34	5008	Ph.69-2
-	-	3区	N15W5	77-SK	埋1層	平瓦	12.3	6.6	3.6	2.1	長石･石英	灰白 5Y 7/1~灰 N 5/	灰 5Y(6/1)~暗灰 N(3/)	縦方向ナデ､横方向ナデ	縦方向ヘラケズリのち縦方向ナデ	表に×の印あり。	17	5133	Ph.69-4
-	-	2区	S5W5	218c-SK	埋2層	桟瓦	14	18.7	7.4	2.3	長石･黒色粒･褐色粒	灰 N 5/	灰 N 5/	軒丸→縦方向ヘラケズリのち横方向ヘラケズリのち縦方向ナデのち横方向ナデ 軒平→縦方向ヘラケズリのち縦方向ナデのち横方向ナデ	軒丸→縦方向ヘラケズリのち縦方向ナデ 軒平→不定方向ナデ､瓦等接合部横方向ナデ	軒丸→三巴文 軒平→剣菱文?､唐草文	32	2495	Ph.89-5
-	-	2区	N10W5	撹乱	-	桟瓦	28.3	29.5	5.8	2.1	雲母･褐色粒･ 赤色酸化粒	灰 N 4/	にぶい橙 7.5YR 6/4	縦方向ヘラケズリのち縦方向ナデ､広狭端部横方向ナデ	不定方向ナデ		29	2756	Ph.89-6
-	-	2区	S10W5	31-SX	-	鬼瓦	14.2	12.9	4.7	2.7	長石･黒色粒	灰 7.5Y 4/1	灰 7.5Y 5/1	周縁･瓦当ナデ	ヘラケズリのち不定方向ナデ	「金」か。	41	2609	Ph.94-1
-	-	2区	S5W5	96-SB－4	埋1層	鬼瓦?	11.8	14.2	7.6	2	雲母･褐色粒	灰 N 4/	灰 N 4/	周縁ナデ､胴部縦方向ヘラケズリのち横方向ナデ	瓦当裏面･接合部横方向ナデ､胴部ナデ	菊花文｡左側縁漆喰付着。	43	2540	-

表4 伝大道寺跡遺跡群出土金属製品観察表

表4-1

図番号	枝番	区	グリット	出土地点	層位	器種	全体残存長(cm)	本体残存幅(mm)	本体残存厚(mm)	頭部幅(mm)	頭部厚(mm)	備考	鉄器処理No.	写真No.
図86	2	3区	N15.W5	70-SK	埋2層	銅製品	直径1.5	1弱	-	穿孔径1.5	-	金鍍金が残る。外からの穿孔が中央にある。	107	Ph.97
図86	3	3区	N15.W5	81-SK	埋土一括	青銅製雁首	6.3	4.5~1.0	1弱	-	-	キセル吸口)青銅製煙管)	106	Ph.97
図86	4	3区	N15.W5	70-SK	埋2層	銅製刀子?小刀?	10.0	14.0~16.0	9.0~10.0	-	先端6.0	木の皮が残存、表面に巻いてあった可能性あり。	102	Ph.97
図86	5	3区	N15.W5	70-SK	埋2層	鉄製刀子	11.9	最大16.0	3.0~4.2	-	-	柄部欠損。77-SKとの切り合い部分から出土。	52	Ph.99
図86	6	3区	N15.W5	70-SK	埋2層	鉄製刀子①	8.4	最大12.0	3.0~4.0	-	-	①+②=推定復元長16.2cm位か	71	Ph.100
図86		3区	N15.W5	70-SK	埋2層	鉄製刀子②	2.8	最大9.0	2.0	-	-		71	
図86	7	3区	N15.W5	70-SK	埋2層	鉄製槍鉋	6.7	刃部13.0	刃部厚4.0	柄部幅10.0	柄部厚5.0	刃部先端部欠損	63	Ph.99
図86	8	3区	N15.W5	70-SK	トレンチ内	鉄杭?	4.8	4.5~7.5	4.5~7.5	12.0	穿孔径4.0~2.0	頭部に穿孔あり	67	Ph.99
図86	9	3区	N15.W5	70-SK	埋2層	鉄釘	8.8	3.5~5.5	3.5~4.5	8.5	3.0	先端部欠損	53	Ph.99
図86	10	3区	N15.W5	70-SK	埋2層	鉄釘	4.1	2.5~5.0	2.5~3.0	7.0	3.0	先端部欠損	53	Ph.99
図86	11	3区	N15.W5	70-SK	埋2層	鉄釘	7.0	3.5~7.5	3.5~5.0	9.0	5.0	先端部欠損	53	Ph.99
図86	12	3区	N15.W5	70-SK	下層トレンチ内	鉄釘	4.6	3.5~4.5	2.5~4.0	8.0	4.0	先端部欠損	72	Ph.99
図86	13	3区	N15.W5	70-SK	埋2層	鉄釘	4.6	1.5	^3.0	1.4~3.0	2.5	先端部欠損	53	Ph.99
図86	14	3区	N15.W5	70-SK	埋2層	鉄釘	4.3	5.0~6.0	3.0	-	-	頭部・先端部欠損。77-SKとの切り合い部分から出土。	71	-
図86	15	3区	N15.W5	70-SK	埋2層	板状鉄製品	5.6	7.5	4.5	-	-		53	Ph.99
図86	16	3区	N15.W5	70-SK	埋2層	鉄製楔?釘?	6.4	2.5~6.0	2.5~4.5	-	-	先端部欠損	53	Ph.99
図86	17	3区	N15.W5	70-SK	埋2層	板状鉄製品	3.4	6.5	3.8	-	-		53	Ph.99
図86	18	3区	N15.W5	70-SK	下層トレンチ内	?	5.2	5.5~8.5	4.5~5.0	-	-	溶接らしき箇所が2か所見られる。	60	Ph.99
図87	1	3区	N15.W5	70-SK	埋1層	青銅製柄鏡	14.6(柄部7.8)	鏡部径67.0	鏡部厚3.0~4.0	柄部幅12.0~13.0	柄部厚2.0~4.0	鏡の部分はやや凸面鏡。裏面には、桔梗と梅の模様が施されている。	101	Ph.97
図87	2	3区	N15.W5	77-SK	-	鉄釘	3.9	4.5~5.5	5.0	9.5	5.5	詳細な形状不明	54	Ph.100
図87	3	3区	N15.W5	77-SK	-	鉄釘	5.5~	3.0~4.5	3.0~5.0	-	-	鉄器No.54②+54③=推定9.8cm以上か	54	Ph.100
図87	4	3区	N15.W5	77-SK	埋3層	鉄釘	8.3~	5.0~7.0	2.5~6.5	-	-	頭部欠損、先端部は打ち込みによる屈曲か、46度位に捻じれている。鏃に使用されたと考えられる。	55	Ph.100
図87	5	3区	N15.W5	77-SK	埋2層	鉄釘	6.3~	4.5~6.0	4.0~4.5	10.0	3.5	先端部欠損か、錆膨れか?　　先端部屈曲	57	Ph.100
図87	6	3区	N15.W5	77-SK	埋3層	鉄釘	6.2~	5.0~6.0	4.5~5.5	-	-	頭部欠損、先端部は打ち込みによる屈曲か。	55	Ph.100
図87	7	3区	N15.W5	77-SK	埋3層	鉄釘	6.0	3.0~5.8	4.0~5.0	-	-	頭部欠損、先端部は打ち込みによる屈曲か、45度位に捻じれている。鏃に使用されたと考えられる。図87-6と同一	-	-
図87	8	3区	N15.W5	77-SK	-	鉄釘	3.7~	3.0~4.0	2.5~4.0	9.0	3.5	頭部は扁平、先端は一部欠損・屈曲し少し捻じれている。	54	Ph.100

表4-2

図番号	枝番	区	グリット	出土地点	層位	器種	全体残存長(cm)	本体残存幅(mm)	本体残存厚(mm)	頭部幅(mm)	頭部厚(mm)	備考	鉄器処理No.	写真No.
図87	9	3区	N15.W5	77-SK	埋1層	鉄釘	4.1~	3.0~6.0	3.0~5.0	11.0	4.0	先端部欠損	70	Ph.100
図87	10	3区	N15.W5	77-SK	埋1層	鉄釘	2.0~	2.0~3.0	3.5	-	-	頭部・先端部欠損	70	Ph.100
図87	11	3区	N15.W5	77-SK	埋3層	鉄釘	2.0	5.0~7.0	3.5	10.0	3.0	先端部欠損	55	Ph.100
図87	12	3区	N15.W5	77-SK	埋3層	鉄釘	3.2	5.0~6.0	4.0	-	-	頭部・先端部欠損	55	Ph.100
図87	13	3区	N15.W5	77-SK	埋3層	鉄釘	4.7	4.0~7.0	4.8~5.8	-	-	頭部・先端部欠損	55	-
図87	14	3区	N15.W5	77-SK	埋2層	鉄釘	4.0	3.5~5.0	2.0~3.0	-	-	先端部は面取りか、へこみか？　一部木質の痕跡がある。	57	Ph.100
図87	15	3区	N15.W5	77-SK	埋2層	鉄釘	2.4	1.5~2.5	1.5	-	-	針状釘か？	57	-
図88	1	3区	N15.E5	65-SK	トレンチ内	鉄製蝶番？軸受？	2.8	2.0	3.5~5.0	-	-	門扉や箪笥の蝶番か軸受か。大変もろく鋳造品か鍛造の折り返しかが不明。	58	Ph.100
図88	2	3区	N15.E0	65-SK	埋2層	鉄釘	6.2	3.0~6.0	6.0	12.0	3.5	先端部欠損	62	Ph.101
図88	3	3区	N15.E0	65-SK	埋2層	鉄釘	7.7	2.5~4.0	3.0~5.0	11.0	3.0	先端部欠損	62	Ph.101
図88	4	3区	N15.E0	65-SK	-	鉄釘	5.2	3.0~5.0	7.0	12.0	8.5	先端部欠損	74	Ph.101
図88	5	3区	N15.E0	66-SK	埋2層	鉄釘	3.6+1.8	3.8~4.0	3.5~5.0	11.0	4.0	頭部付近と先端部付近を合体復元	64	Ph.100
図88	6	3区	N15.E0	65-SK	-	鉄釘	3.5	4.0	3.5~4.0	9.0	3.5		62	Ph.101
図88	7	3区	N15.E0	66-SK	埋2層	鉄釘	3.5	4.0~4.5	4.0	10.0			69	Ph.100
図88	8	3区	N15.E0	65-SK	-	鉄釘	3.6	5.0	5.0	11.0	4.0	先端部欠損	62	Ph.101
図88	9	3区	N15.E5	65-SK	トレンチ内	鉄釘	5.2	6.5~10.0	5.0	12.5	-	先端部欠損、頭部打ち込み	58	Ph.100
図88	10	3区	N15.E0	65-SK	埋1・2層	鉄釘	8.3	2.8~6.0	4.0~5.8	8.2	-	頭部は、たたいて変形か？、前？欠損か？　先端部欠損	56	Ph.101
図88	11	3区	N15.E0	65-SK	-	鉄釘	5.2	2.5~3.5	3.0~3.5	6.5~	-	頭部・先端部欠損	62	Ph.101
図88	12	3区	N15.E0	65-SK	-	鉄釘	3.2	2.0~4.0	2.0~3.5	-	-	頭部・先端部欠損	62	Ph.101
図88	13	3区	N15.E5	65-SK	トレンチ内	鉄釘	4.1	3.5~5.5	3.0~4.5	-	-	頭部・先端部欠損	58	Ph.100
図88	14	3区	N15.E0	65-SK	埋1層	鉄鎌	24.0~	刃部幅42.0	3.0	基部幅10.0~28.0	基部厚4.0		75	Ph.99
図89	1	2区	S10.W5	85-SK	埋2層	銅製金具(紡錘車？)	直径5.0	-	1.0	-	-	中央に円形、両サイドに扇状の孔がある。	78	Ph.98
図89	2	2区	S5.W5	216-SK	埋1層	青銅製キセル	8.1	最大径9.0	-	吸口6.0			76	Ph.98
図89	3	2区	S5.E0	111-SK	埋1層	青銅製キセル	7.2~	最大径10.0	-	吸口4.0以下			77	-
図89	4	2区	S5.W10	包2c層	-	青銅製キセル	5.6	11.0	1.0	火口径12.0	-	火口が屈曲している。	79	Ph.98
図89	5	2区	N0.W5	225-SK	埋土一括	銅製留鎖	2.6	1.5	1.0	-	-		84	Ph.98
図89	6	2区	S5.W10	90b-SK	埋1層	袋状鉄製鋤先か？	6.0	3.6	1.0	-	-	積具とも思われる。	49	Ph.102

表4-3

図番号	枝番	区	グリット	出土地点	層位	器種	全体残存長(cm)	本体残存幅(mm)	本体残存厚(mm)	頭部幅(mm)	頭部厚(mm)	備考	鉄器処理No.	写真No.
図89	7	2区	N0.E0	134b-SK	上層	鉄製鋤	4.5~	4.5	4.0	-	-		22	Ph.98
図89	8	2区	S5.E0	表土	-	鉄製飾金具(箪笥上部)	4.0~	33.0~	2.0	-	-	折り返し部分あり。一部欠損		Ph.102
図89	9	2区	S5.E0	表土	-	刀子	4.4~	20.0	2.5	-	-	一部欠損		Ph.102
図89	10	2区	N0.E0	134a-SK	埋1層	槍鉋?	6.5	1.4	3.5	-	-	先端部欠損	21	Ph.101
図89	11	2区	S5.E0	表土	-	鉄?	2.7	2.0~10.0	5.0	13.0	6.0			Ph.102
図89	12	2区	S5.E0	包2層	-	鉄?	4.0	20.0	4.0	-	-	一部欠損	26	Ph.102
図89	13	2区	S5.E0	包2層	-	鉄製品	4.0	4.5	9.5	12.5	2.0	一部欠損	73	Ph.102
図89	14	2区	S10.W5	31-SX	埋2層下層	鉄製包丁か?	16.8	1.9~4.7	1.0~2.0	-	-	炭化物が付着、焼けたのか?	20	Ph.101
図90	1	1区	S20.E0	11・12-SK	埋土一括	不定形銅版	5.4	42.0	1.0	-	-		87	Ph.103
図90	2	1区	S20.W5	44-SK(10-SD)	埋2層	銅製飾金具	5.9	3.2	1.0	-	-		97	Ph.103
図90	3	1区	S20.W10	11-SK	トレンチ内	銅製切羽	4.0	2.6	1.0	-	-	刀子の切羽?	95	Ph.103
図90	4	1区	S20.W10	11-SK	埋2層	銅製灯明皿?	口径9.3	器高9.5	底径9.5	-	-	鋳造品であるが、薄いため使用によって変形? 内底面に木質?がみられる。	98	Ph.103
図90	5	1区	S20.W10	12-SK	-	青銅製キセル	5.3	最大幅14.0	1.0	吸口4.0	-	少し楕円形	96	Ph.103
図90	6	1区	S20.W5	51-SK	埋土上層	青銅製かんざし	6.9	径2.0	-	-	-	断面は隅丸方形、円形,頭部・先端部欠損	94	Ph.103
図90	7	1区	S20.W5	51-SK	埋土上層	青銅製かんざし	7.5	径2.0	-	-	-	断面は隅丸方形、円形,頭部・先端部欠損	94	Ph.103
図90	8	1区	S20.W5	16-SK	埋1層	青銅製かんざし	6.8~	径1.0~2.0	-	3.0	1.5	全長約9.6cm,円形	88	Ph.103
図90	9	1区	S20.W10	11-SK	埋2層	鉄製刀子	6.1	刃部幅13.0	刃部厚3.0	柄部幅3.0~9.0	柄部厚2.0		32	Ph.103
図90	10	1区	S20.W10	11-SK	トレンチ内	鉄製槍鉋	8.0	1.8	2.0~3.0	-	-	先端部欠損	45	Ph.103
図90	11	1区	S20.W10	11-SK	埋3層	鉄釘	7.3	6.5~7.0	5.5~6.5	12.0	4.0	先端部欠損	16	Ph.103
図90	12	1区	S20.W10	11-SK	埋3層	鉄釘	7.7~	4.5^5.0	4.0~4.8	15.0	4.0	先端部欠損	40	Ph.103
図90	13	1区	S20.W10	11-SK	トレンチ内	鉄釘	6.9	4.7~5.0	5.2~6.0	11.5	7.0	先端部欠損	45	Ph.103
図90	14	1区	S20.W10	11-SK	埋3層	鉄釘	7.0~	1.0~4.0	1.0~4.0	9.0	3.0	全長7.8cm	40	Ph.103
図90	15	1区	S20.W10	11-SK	トレンチ内	鉄釘	6.4~	2.5~4.0	2.5~4.6	6.0~4.0~	4.0	頭部・先端部欠損	45	Ph.103
図90	16	1区	S20.W10	11-SK	埋2層	鉄釘	4.7~	2.5~4.5	3.0~4.5	10.0	3.0	先端部欠損	32	Ph.103
図90	17	1区	S20.W10	11-SK	トレンチ内	鉄釘	3.8~	1.5~4.5	1.5~4.0	10.5	2.5	先端部欠損	45	Ph.103
図90	18	1区	S20.W10	11-SK	埋2層	鉄釘	4.5	2.5~4.0	2.8~4.9	-	-	頭部・先端部欠損	32	Ph.103

表5 古代瓦の重量、枚数表

3区

遺構	重量(g)			枚数		
	丸瓦	格子目タタキ	縄目タタキ	丸瓦	格子目タタキ	縄目タタキ
SK	2,300	3,600	8,200	0.79	0.68	1.73
SE	1,200	570	3,000	0.41	0.11	0.63
SP	150		390	0.05		0.08
トレンチ	200			0.07		
包含層	330		150	0.11		0.03
撹乱	135	430	535	0.05	0.08	0.11
表土	210	320		0.07	0.06	

2区

遺構･グリッド	重量 (g)			枚数		
	丸瓦	格子目タタキ	縄目タタキ	丸瓦	格子目タタキ	縄目タタキ
SB	230	120	890	0.08	0.02	0.19
SE			140			0.03
SD			1,110			0.23
SP	1,740	1,650	3,785	0.6	0.31	0.8
SX	2,000	1,050	3,400	0.69	0.2	0.72
包含層	1,450	1,280	5,670	0.5	0.24	1.19
撹乱	2,565	1,460	5,950	0.88	0.28	1.25
表土	1,000	1,040	3,620	0.34	0.2	0.76
表採	1,300	180	3,470	0.45	0.03	0.73
N0E0	4,540	2,790	12,365	1.57	0.53	2.6
N0W5	2,545	2,920	5,355	0.88	0.55	1.13
N0W10	2,560	2,410	4,500	0.88	0.45	0.95
N5W10		3,300	5,000		0.62	1.05
S0W5	675	635	1,500	0.23	0.12	0.32
S5W0	490	555	2,440	0.17	0.1	0.51
S5W5	7,500	5,235	19,160	2.59	0.99	4.03
S5W5		20			0.004	
S5W10	2,535	910	11,215	0.87	0.17	2.36
S5W10	5,600	5,460	18,210	1.93	1.03	3.83
S10W5	5,900	4,920	16,085	2.03	0.93	3.39
S10W10		90	340		0.017	0.07
S15W5		180	340		0.03	0.07
S5E0	8,460	12,310	12,620	2.92	2.32	2.66
S10E0	110		160	0.04		0.03
S10E10			430			0.09

1区

遺構	重量 (g)			枚数		
	丸瓦	縄目タタキ	縄目タタキ	丸瓦	格子目タタキ	縄目タタキ
17-SK	140	395	580	0.05	0.07	0.12
17･18-SK	200	870	640	0.69	0.16	0.13
18-SK	1,120	6,700	890	0.39	1.26	0.19
SK	7,440	5,840	12,330	2.57	1.1	2.6
SD	230	395	580	0.08	0.07	0.12
SP		170	40		0.03	0.008
SX	885	1,060	1,700	0.31	0.2	0.36
整地層	740	650	935	0.26	0.12	0.2
トレンチ		470	50		0.09	0.011
包含層		110	50		0.02	0.011
撹乱	515	1,180	1,715	0.18	0.22	0.36
表土			40			0.008

○立会

遺構	重量 (g)			枚数		
	丸瓦	縄目タタキ	縄目タタキ	丸瓦	格子目タタキ	縄目タタキ
04-SK		115	30		0.02	0.006
05-SK	80	330	150	0.028	0.06	0.03
07-SK		60			0.011	
10-SK			140			0.03
14-SK		120			0.02	
71-SK			170			0.04
501-SK			550			0.12
502-SK	440	475	610	0.15	0.09	0.13
21-SP	50			0.017		
包含層	100		70	0.03		0.015
撹乱	300			0.1		
表採			345			0.07

※古代瓦の格子目･縄目タタキの重量は、平瓦のみの重さである。
※瓦の1枚重量は、丸瓦は興善寺、平瓦は国分寺を参考にした。
○丸瓦→2.9kg
○平瓦→格子目タタキ　5.3kg　縄目タタキ　4.75kg

表5-1

3区

遺構	遺構(g)	枚数		
		平＋丸	平瓦	丸瓦
65-SK	11,140	1.89	3.23	4.55
70-SK	7,100	1.2	2.06	2.9
77-SK	12,300	2.08	3.57	5.02
78-SK	70	0.012	0.02	0.029
81-SK	250	0.04	0.07	0.1
151-SK	210	0.04	0.06	0.09
57-SX	370	0.06	0.11	0.15
67-SX	290	0.05	0.08	0.12
包含層	510	0.09	0.15	0.21
表土	190	0.03	0.06	0.08

2区

遺構	遺構(g)	枚数		
		平＋丸	平瓦	丸瓦
31-SK	270	0.05	0.08	0.11
32-SK	100	0.02	0.03	0.04
35-SK	5,900	1	1.71	2.41
38-SK	400	0.07	0.12	0.16
39-SK	2,300	0.39	0.67	0.94
84-SK	10,400	1.76	3.01	4.24
85-SK	7,400	1.25	2.14	3.02
85b-SK	143,650	24.35	41.64	58.63
85e-SK	550	0.09	0.16	0.22
86-SK	16,100	2.73	4.67	6.57
88-SK	20,000	3.39	5.8	8.16
88b-SK	3,480	0.59	1.01	1.42
89b-SK	4,100	0.69	1.19	1.67
90-SK	670	0.11	0.19	0.27
90b-SK	50	0.008	0.014	0.02
91-SK	4,500	0.76	1.3	1.84
97-SK	100	0.02	0.03	0.04
97b-SK	85	0.014	0.024	0.035
97c-SK	520	0.09	0.15	0.21
104-SK	600	0.1	0.17	0.24
106-SK	480	0.08	0.14	0.2
107-SK	450	0.08	0.13	0.18
109-SK	790	0.13	0.23	0.32
109b-SK	70	0.012	0.02	0.029
110-SK	620	0.11	0.18	0.25
111-SK	700	0.12	0.2	0.29
111b-SK	1,800	0.31	0.52	0.73
111c-SK	500	0.08	0.14	0.2
113-SK	1,400	0.24	0.41	0.57
113b-SK	170	0.03	0.05	0.07
114-SK	170	0.03	0.05	0.07
115-SK	165	0.03	0.05	0.07
127-SK	3,400	0.58	0.99	1.39
129-SK	155	0.03	0.04	0.06
134a-SK	1,650	0.28	0.48	0.67
134b-SK	1,400	0.24	0.41	0.57
134b-SK	400	0.07	0.12	0.16
135-SK	1,400	0.24	0.41	0.57
145-SK	35	0.006	0.01	0.014
146-SK	10	0.002	0.003	0.004
149-SK	130	0.02	0.04	0.05
150-SK	700	0.12	0.2	0.29
154-SK	800	0.14	0.23	0.33
157-SK	220	0.04	0.06	0.09
158-SK	630	0.11	0.18	0.26
159-SK	1,500	0.25	0.43	0.61
160-SK	320	0.05	0.09	0.13
161-SK	50	0.008	0.014	0.02
164-SK	1,490	0.25	0.43	0.61
166-SK	5,800	0.98	1.68	2.37
169-SK	1,035	0.18	0.3	0.42
183-SK	60	0.01	0.017	0.024
184-SK	440	0.07	0.13	0.18
185-SK	450	0.08	0.13	0.18
197-SK	180	0.03	0.05	0.07
198-SK	75	0.013	0.022	0.031

表5 近世瓦の重量、枚数表2

表5-2

2区

遺構	遺構(g)	枚数		
		平＋丸	平瓦	丸瓦
201-SK	20	0.003	0.006	0.008
204-SK	470	0.08	0.14	0.19
209-SK	5	0.0008	0.001	0.002
211-SK	1,000	0.17	0.29	0.41
216-SK	7,500	1.27	2.17	3.06
218-SK	290	0.05	0.08	0.12
218b-SK	1,500	0.25	0.43	0.61
218c-SK	3,000	0.51	0.87	1.22
222-SK	120	0.02	0.03	0.05
225-SK	40	0.006	0.012	0.016
226-SK	360	0.06	0.1	0.15
227-SK	70	0.012	0.02	0.029
228-SK	70	0.012	0.02	0.029
229-SK	420	0.07	0.12	0.17
236-SK	30	0.005	0.009	0.012
247-SK	800	0.14	0.23	0.33
102-SD	70	0.012	0.02	0.029
33-SP	190	0.03	0.06	0.08
34-SP	160	0.03	0.05	0.07
72-SP	510	0.09	0.15	0.21
137-SP	420	0.07	0.12	0.17
148-SP	210	0.04	0.06	0.09
155-SP	320	0.05	0.09	0.13
156-SP	65	0.011	0.019	0.027
162-SP	455	0.08	0.13	0.19
173-SP	110	0.02	0.03	0.04
176-SP	25	0.004	0.007	0.01
179-SP	100	0.02	0.03	0.04
189-SP	25	0.004	0.007	0.01
190-SP	50	0.008	0.014	0.02
191-SP	70	0.012	0.02	0.029
192-SP	30	0.005	0.009	0.012
194-SP	45	0.008	0.013	0.018
195-SP	50	0.008	0.014	0.02
202-SP	35	0.006	0.01	0.014
206-SP	80	0.014	0.023	0.033
212-SP	160	0.03	0.05	0.07
213-SP	95	0.016	0.027	0.039
231-SP	60	0.01	0.017	0.024
232-SP	140	0.02	0.04	0.06
238-SP	170	0.03	0.05	0.07
1001-SP	555	0.09	0.16	0.23
102-SD	70	0.012	0.02	0.029
19-SX	?			
27-SX	240	0.04	0.07	0.1
28-SX	85	0.014	0.025	0.035
31-SX	1,800	0.31	0.52	0.73
95-SX	60	0.01	0.017	0.024
210-SX	25	0.004	0.007	0.01
表土	25,300	4.29	7.33	10.33
表採	610	0.1	0.18	0.25

1区

遺構	遺構(g)	枚数		
		平＋丸	平瓦	丸瓦
01-SK	1,400	0.24	0.41	0.57
02-SK	1,500	0.25	0.43	0.61
03-SK	2,000	0.34	0.58	0.82
04-SK	16,100	2.73	4.67	6.57
05-SK	4,600	0.78	1.33	1.88
06-SK	2,700	0.46	0.78	1.1
07-SK	1,100	0.19	0.32	0.45
09-SK	3,900	0.66	1.13	1.59
11-SK	12,600	2,14	3.65	5.14
11,12-SK	30	0.005	0.009	0.012
12-SK	10,500	1.78	3.04	4.29
12,13-SK	600	0.1	0.17	0.24
13b-SK	860	0.15	0.25	0.35
14-SK	160	0.03	0.05	0.07
15-SK	3,200	0.54	0.93	1.31

1区

遺構	遺構(g)	枚数		
		平＋丸	平瓦	丸瓦
16-SK	155	0.03	0.04	0.06
17-SK	130	0.02	0.04	0.05
17,18-SK	135	0.02	0.04	0.06
18-SK	500	0.08	0.14	0.2
20-SK	170	0.03	0.05	0.07
21-SK	30	0.005	0.009	0.012
22-SK	445	0.08	0.13	0.18
30-SK	3,500	0.59	1.01	1.43
40-SK	760	0.13	0.22	0.31
40a-SK	11,800	2	3.42	4.82
40b-SK	1,230	0.21	0.36	0.5
41-SK	450	0.08	0.13	0.18
42-SK	590	0.1	0.17	0.24
43-SK	1,040	0.18	0.3	0.42
46-SK	75	0.013	0.022	0.031
49-SK	1,100	0.19	0.32	0.45
50-SK	3,500	0.59	1.01	1.43
51-SK	220	0.04	0.06	0.09
52-SK	4,500	0.76	1.3	1.84
53-SK	50	0.008	0.014	0.02
54-SK	3,500	0.59	1.01	1.43
54,55-SK	1,400	0.24	0.41	0.57
56-SK	30	0.005	0.009	0.012
59-SK	70	0.012	0.02	0.029
63-SK	5	0.001	0.001	0.002
03-SD	2,100	0.36	0.61	0.86
04-SD	1,500	0.25	0.43	0.61
10-SD	6,000	1.02	1.74	2.45
47-SD	290	0.05	0.08	0.12
01-SX	630	0.11	0.18	0.26
03-SX	8,200	1.39	2.38	3.35
28-SX	600	0.1	0.17	0.24
44-SX	8,500	1.44	2.46	3.47
SP	500	0.08	0.14	0.2
整地層	13,900	2.36	4.03	5.67
包含層	2,000	0.34	0.58	0.82
一括トレ	630	0.11	0.18	0.26
表土	4,400	0.75	1.28	1.8

立会

遺構	遺構(g)	枚数		
		平＋丸	平瓦	丸瓦
01-SK	160	0.03	0.05	0.07
02,03-SK	1,075	0.18	0.31	0.44
04-SK	6,700	1.14	1.94	2.73
05-SK	6,700	1.14	1.94	2.73
07-SK	9,130	1.55	2.65	3.73
08-SK	275	0.05	0.08	0.11
11-SK	85	0.014	0.025	0.035
14-SK	15	0.003	0.004	0.006
31-SK	1,700	0.29	0.49	0.69
32-SK	50	0.008	0.014	0.02
34-SK	450	0.08	0.13	0.18
35-SK	240	0.04	0.07	0.1
36-SK	2,500	0.42	0.72	1.02
61-SK	660	0.11	0.19	0.27
73-SK	140	0.02	0.04	0.06
91-SK	540	0.09	0.16	0.22
101-SK	110	0.02	0.03	0.04
503-SK	940	0.16	0.27	0.38
整地層	220	0.04	0.06	0.09
一括	3,600	0.61	1.04	1.47
包含層	14,100	2.39	4.09	5.76
撹乱	13,100	2.22	3.8	5.35
表採	1,400	0.24	0.41	0.57
カ-ドなし	430	0.07	0.12	0.18

※瓦の重量は平山瓦窯跡を参考にした。
○平瓦の１枚の重量→3.45kg
○丸瓦の１枚の重量→2.45kg

図面・写真図版

図1　伝大道寺跡遺跡群周辺遺跡分布図(古代・近世)

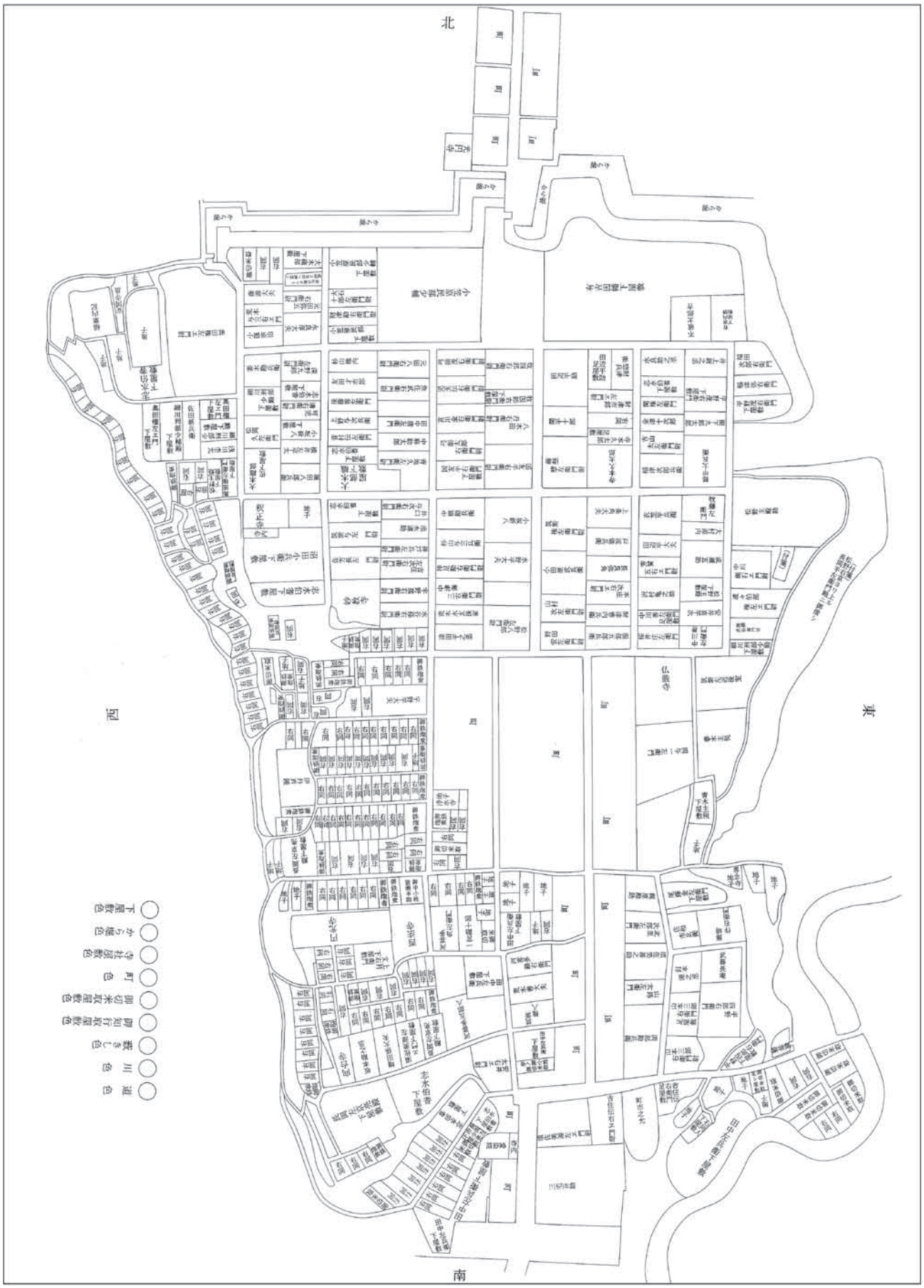
図１．付表

熊本県（43）熊本市（201）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	備　　考
068	徳王	徳王町　清水町山室ほか	縄文～平安	縄文後期、弥生内行花文鏡出土
083	亀井遺跡群	清水町亀井	縄文～中世	城は現光照寺内。板碑天文２年銘
201	羽山遺跡群	花園町柿原字羽山		
203	柿原遺跡群	花園町柿原字柿原	縄文～中世	柿原城鹿子木寂心居城
204	柿原馬の木	花園町	縄文～中世	
211	本妙寺北	花園町４丁目	古墳～中世	
218	石神原	島崎町３丁目	弥生～平安	
219	千原台遺跡群	島崎町３丁目ほか	縄文～平安	
220	迎田	島崎町	縄文～平安	
221	北島遺跡群	池田町４丁目	弥生～中世	
230	池田町（池田小学校）	池田町１丁目	弥生～平安	池田小学校庭甕棺群
232	一ノ谷	清水町津浦字中寄	古墳～平安	
234	舟場	清水町津浦	縄文～中世	
235	舟場山古墳	清水町津浦字船場	古墳	円墳、石棺
238	京町台遺跡群	京町	弥生～中世	
240	京町２丁目	京町２丁目	縄文～近世	
241	**伝大道寺跡遺跡群**	京町２丁目	縄文～近世	伝大道寺跡を含む
243	安元元年笠塔婆塔身	坪井４丁目	古代	県重要文化財、本光寺
	安元元年笠塔婆	坪井４丁目	古代	市指定建造物
245	藤園中学校校庭	千葉城町	弥生～平安	甕棺群あり
246	熊本城跡遺跡群	古城、古京、千葉城町	古墳～近世	
247	熊本城跡	古城・古京町・千葉城町	近世	国指定重要文化財・国指定特別史跡、加藤清正慶長 12 年
248	旧細川刑部邸	三の丸・古京町	近世	県指定重要文化財
249	新馬借	新町３丁目	古墳～平安	須恵器
254	古町（旧唐人町）	唐人町、古町ほか	弥生～明治	
255	戸坂	戸坂町	弥生～平安	甕棺群
264	石塘（白川橋）	二本木１・２丁目	弥生～中世	
265	二本木遺跡群	二本木１・２丁目ほか	弥生～中世	二本木国府推定地
269	古閑前	清水町亀井	縄文～中世	旧石器
270	清水町谷口	清水町万石	旧石器～平安	県調査あり
272	松崎遺跡群	清水町松崎	弥生～平安	
274	室園	清水町室園	縄文～中世	
277	小峰	黒髪町小峰	縄文～平安	
278	黒髪町遺跡群	黒髪町坪井	縄文～中世	一帯に甕棺墓群
280	子飼	子飼町	縄文～中世	
281	大江白川	大江１丁目	縄文～平安	甕棺
282	新屋敷	新屋敷町	弥生～中世	弥生環濠、弥生前期土器、輸入陶磁器
283	大江遺跡群	大江３丁目	縄文～明治	
285	本庄（熊大病院敷地）	本荘２丁目	古墳～平安	熊大埋文調査室調査
287	本山城跡（本庄城跡）	本山町城の本	弥生～中世	元弘年間に詫麻宗直
288	世安池田	世安町池田	弥生～中世	輸入陶磁器など
290	出水国府跡	九品寺、国府、国府本町	弥生～中世	
470	池田八幡放牛地蔵	京町	近世	享保 10 年
471	往生院境内石造物	池田町	中世・近世	豪潮宝篋印塔・放牛地蔵
472	採釣園跡	坪井４丁目	近世	
473	長岡監物屋敷跡	坪井４丁目	近世	
478	円光寺跡	京町１丁目	近世	藤崎宮社家代々墓あり
479	釈将寺跡	京町２丁目	近世	
480	報恩禅寺境内石造物	坪井３丁目	中世	豪潮宝篋印塔・坪井の跡
481	お薬園跡	薬園町	近世	藩主重賢開園
483	新町古寺跡・高麗門跡	新町３丁目	近世	
484	古往生院跡	古鍛冶屋町	近世	阿弥陀堂石主、六地蔵、十三塔、五輪塔
485	板屋町・細工町寺院群	板屋町、細工町	近世	
486	願行寺跡	横手町	近世	
487	横手町寺院群	横手町	近世	
534	七軒町	七軒町	縄文～中世	
535	一夜塘	小幡町	近世	
536	上河原	黒髪町	縄文～古代	
539	北島五輪塔群	池田町	中世	石造物
540	出町土居跡	京町	近世	
541	光明寺跡	呉服町万２丁目ほか	近世	
544	熊本駅前の石塘	春日町	近世	
545	花畑館跡	花畑町	近世	
548	熊本平野条里跡		古代・中世	

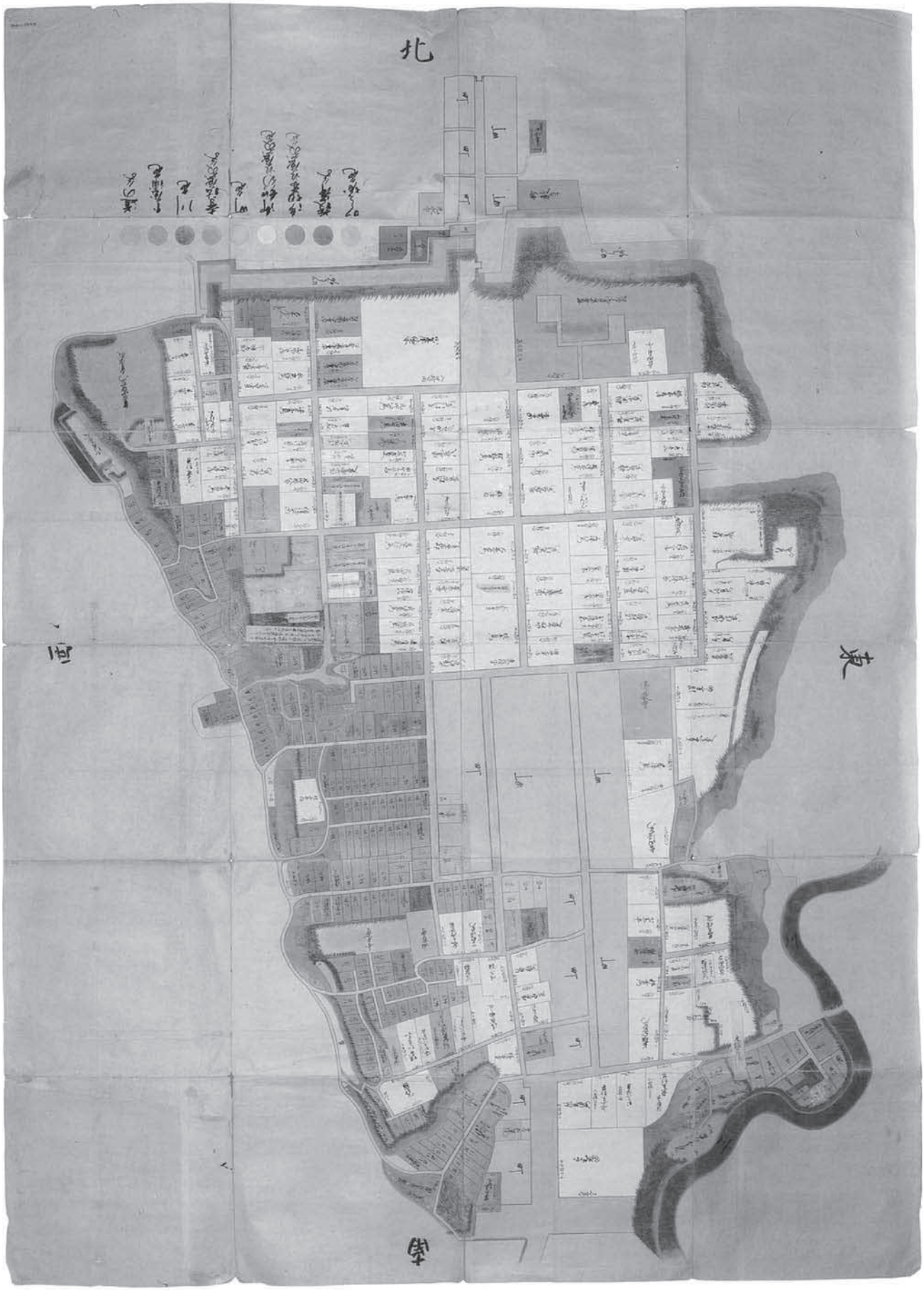
Pl.3　京町之絵図

（『新熊本市史　別編第1巻　絵図・地図 上 中世・近世(1993)』「57　京町之絵図」より転載）

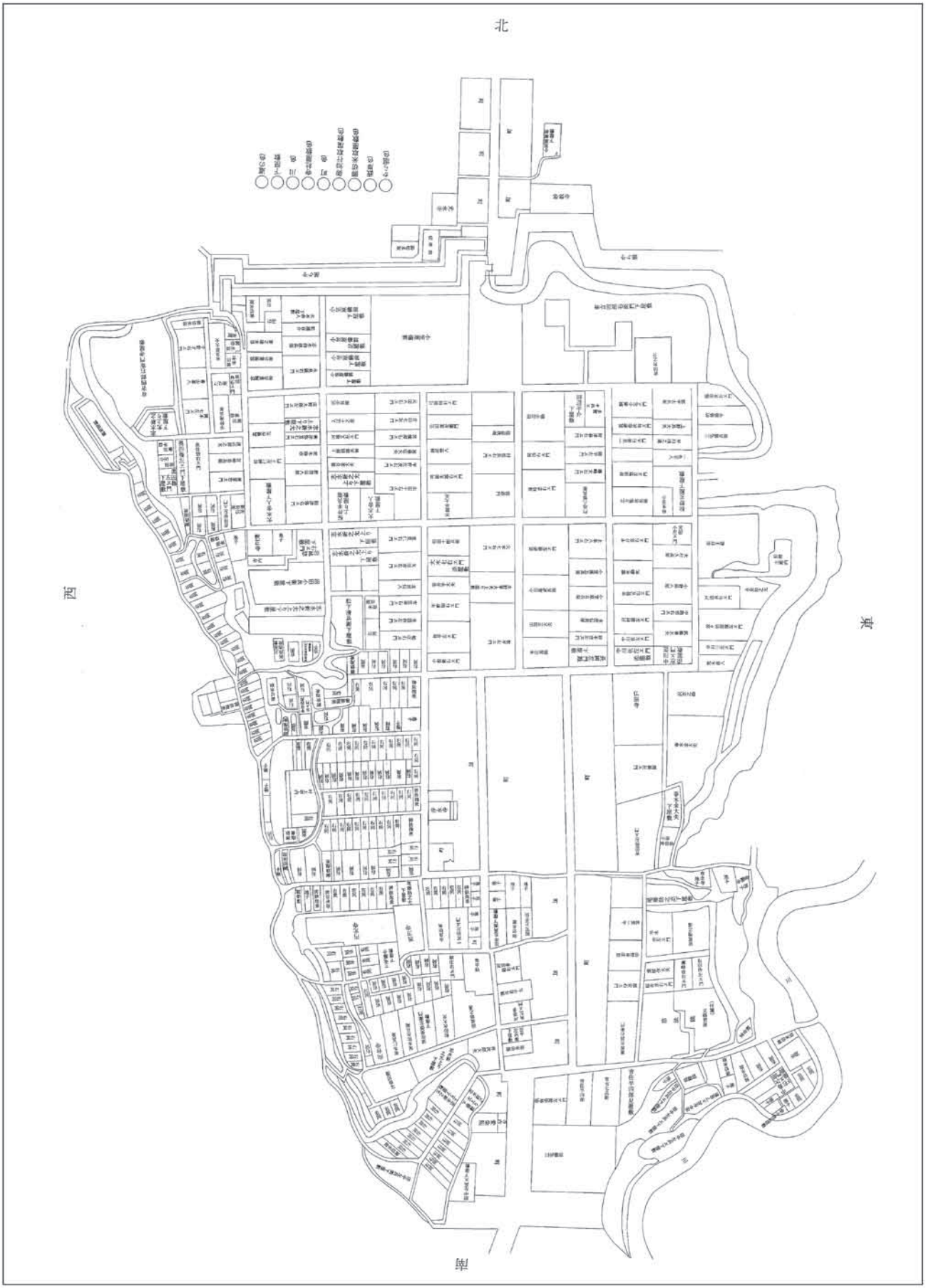


（『新熊本市史　別編第1巻　絵図・地図 上 中世・近世(1993)』「57　京町之絵図」より転載）

Pl.5　京町之絵図

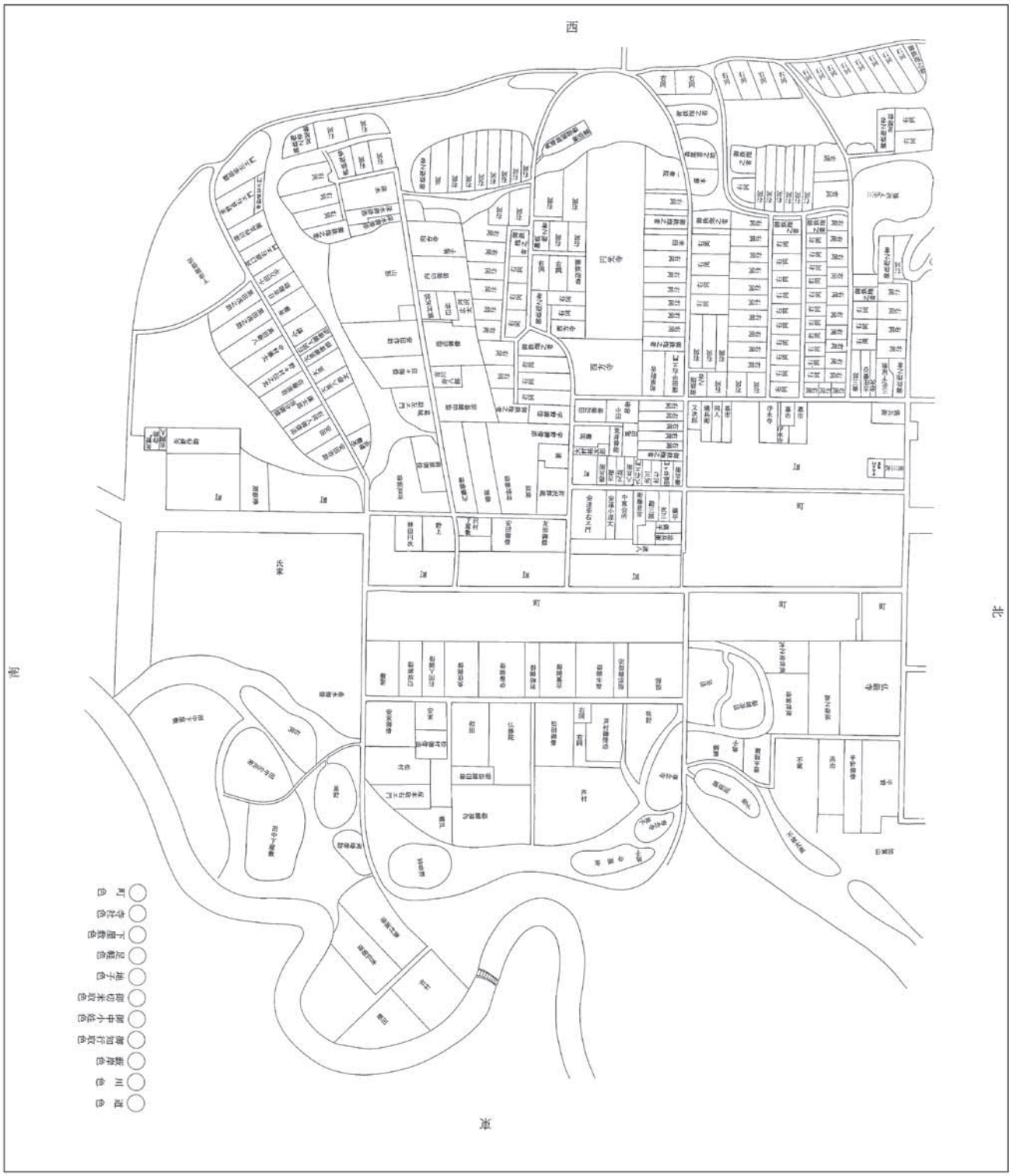


（『新熊本市史　別編第1巻　絵図・地図 上 中世・近世(1993)』「58　京町之絵図」より転載）



（『新熊本市史　別編第1巻　絵図・地図 上 中世・近世(1993)』「58　京町之絵図」より転載）

（『新熊本市史　別編第1巻　絵図・地図 上 中世・近世(1993)』「59　南京町」より転載）



（『新熊本市史　別編第1巻　絵図・地図 上 中世・近世(1993)』「59　南京町」より転載）

57　京町之絵図

京町之絵図
寛文六年（一六六六）以前（推定）
熊本県立図書館
一三―二四七
京町の絵図
一七〇×二四〇

範囲は今の京町一、二丁目・京町本町・出町である。新堀口から豊前街道を北進して京町構口から出京町までを描いている。京町一丁目・二丁目は街道に沿った町人の町で、裏は東側は知行取屋敷、西は鉄砲衆・切米取の小さな屋敷である。ここは道が南北に走り屋敷への出入は南または北から入る。京町本丁から北は知行取屋敷町である。本町の東は柳川小路、西は宇土小路である。武家屋敷町は道も広く整然と区画されており、南北に通る道路に面して東または西に入口を持つ屋敷が三～六軒ずつ配置されている。出京町との境は空堀を回らし、京町構口には家老有吉内膳下屋敷と備頭小笠原民部少輔下屋敷を配して北の備えとしている。作製時期を図面には「寛文前後」と記すが、有吉内膳貞之は寛文六年（一六六六）大蔵と改めており、小笠原民部少輔長之は寛文九年（一六六九）に隠居しているので、寛文六年以前と言うべきである。しかし享保十四年（一七二九）まで観音坂中途にあった仙勝院が記されていないなど疑問点もある。この絵図には張り紙が多いのでもともとの制作時期を見ることは困難である（『肥後国誌』、永青文庫蔵『先祖附』）。

（松本寿三郎）

58　京町之絵図

京町之絵図
元禄七、八年（一六九四、九五）（推定）
熊本県立図書館
一三―二四九
京町の絵図
二四一×一七三

内容・概況は一三―二四七「京町之絵図」に同じ、京町の区画を特長づける土居・崖脚部分の藪の表現に特色がある。観音坂中途の南側に享保十四年（一七二九）類焼するまであった仙勝院と向側に慈法院が記されている。また宇土小路の西にあった妙教寺は延宝五年ころ（一六七七）龍崩と呼ばれる大崩落によって崩れて、出京町東裏に移っている。作製時期は絵図中の仙勝院向屋敷の張紙に「元禄前後」とあるが、知行取のうち出田十右衛門・加藤庄大夫・北垣伝八・安井平大夫・岡本七左衛門・原彦右衛門らの家督相続の時期から見て、元禄七・八年（一六九四、九五）と推定される（『肥後国誌』、永青文庫蔵『先祖附』）。

（松本寿三郎）

59　南京町

南京町
明和七年（一七七〇）以降（推定）
熊本県立図書館
一三―二六三
南京町の絵図
九七×一一一

範囲は京町一丁目と二丁目である。明和七年（一七七〇）の大火で京町・新堀・岩立・龍迫谷が残らず焼失したあと屋敷の割り替えがなされた。一三―二四九「京町之絵図」にある観音坂北手の慈法院殿屋敷跡（のち溝口蔵人屋敷）は大火後溝口三伍が古城に移ったあと四分割され、その北西部五九六坪を賜って移ったほか、観音坂下東側の切米取屋敷は知行取屋敷となった。また岩立の光台寺の向屋敷はかつて志水伯耆・長岡左京亮の下屋敷であったが、知行取・切米取屋敷四カ所に分割され、また北西端は龍崩の一角でかつての鉄砲衆組屋敷から三宅下屋敷に取り替っている。町筋のすぐ裏の知行取屋敷は苗字のみで実名が記されないため作製時期を図面では「文政三年」と記しているが時期が確定しにくい。明和七年（一七七〇）の大火以降と推定するほかない。（『肥後国誌』）

（松本寿三郎）

（『新熊本市史　別編　絵図・地図上』（一九九三）より転載）

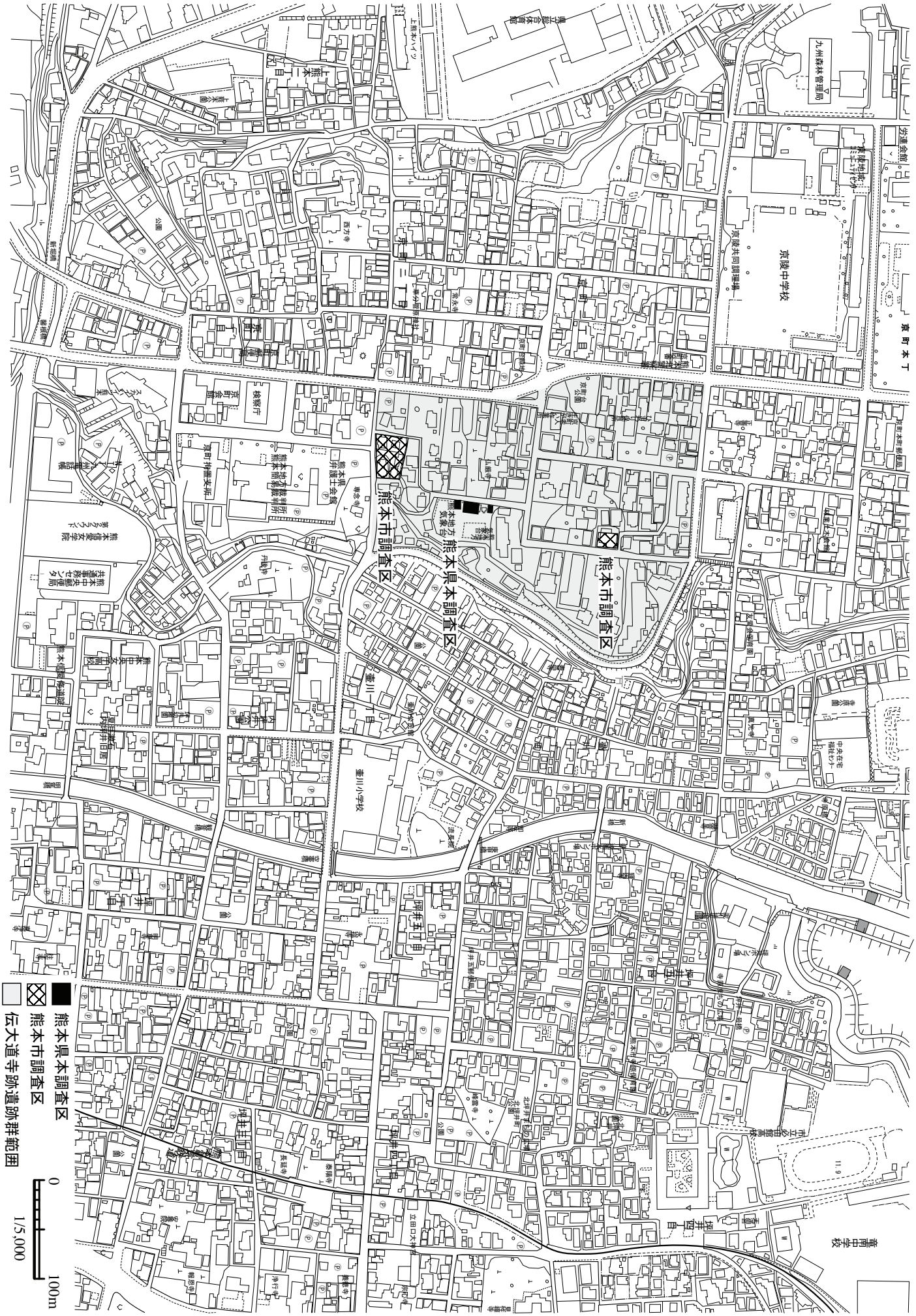


図8 伝大道寺跡遺跡群及び調査区位置図(1/5,000)

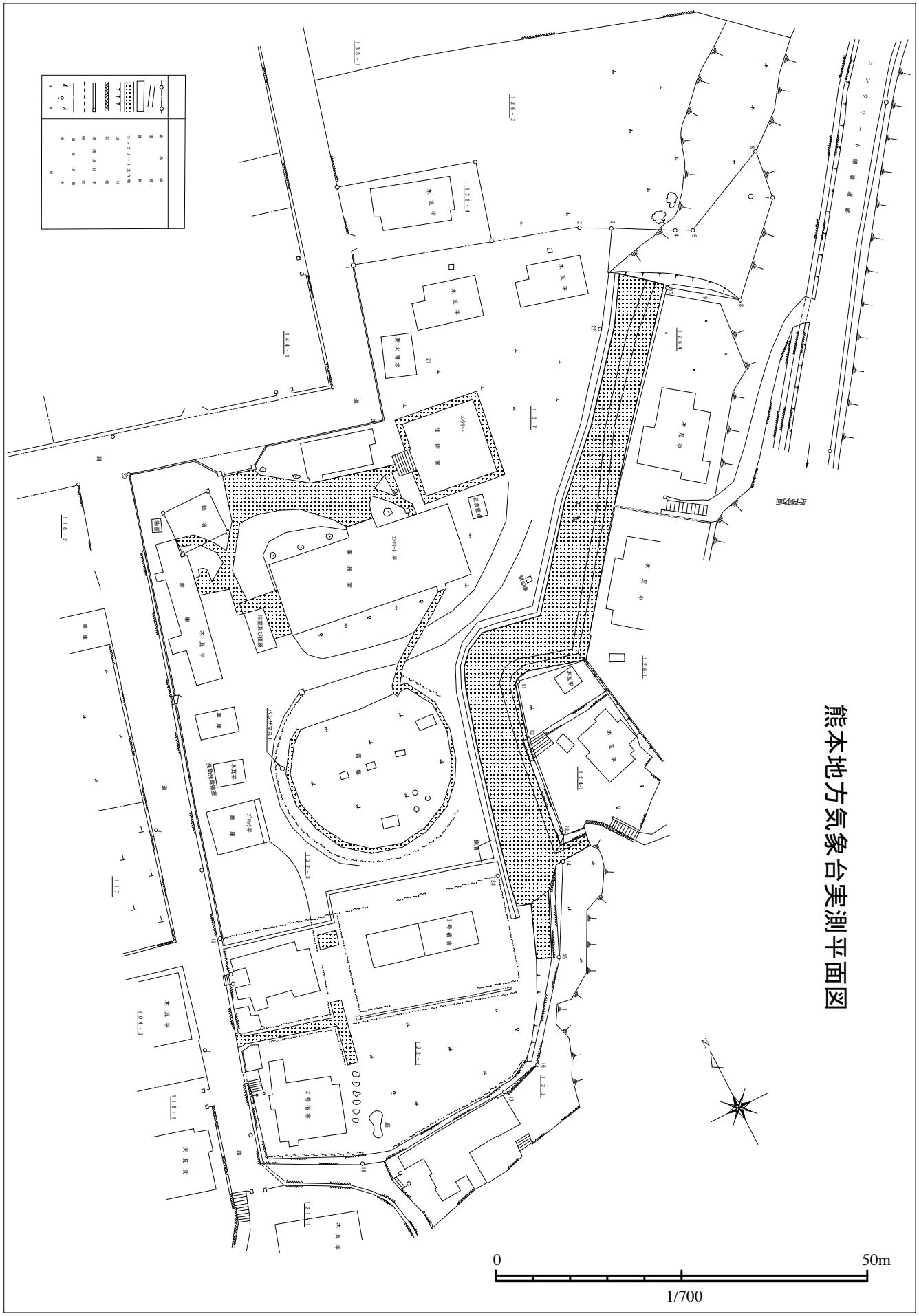


図9 熊本地方気象台実測平面図(旧庁舎《昭和41年》)描写(1/700)

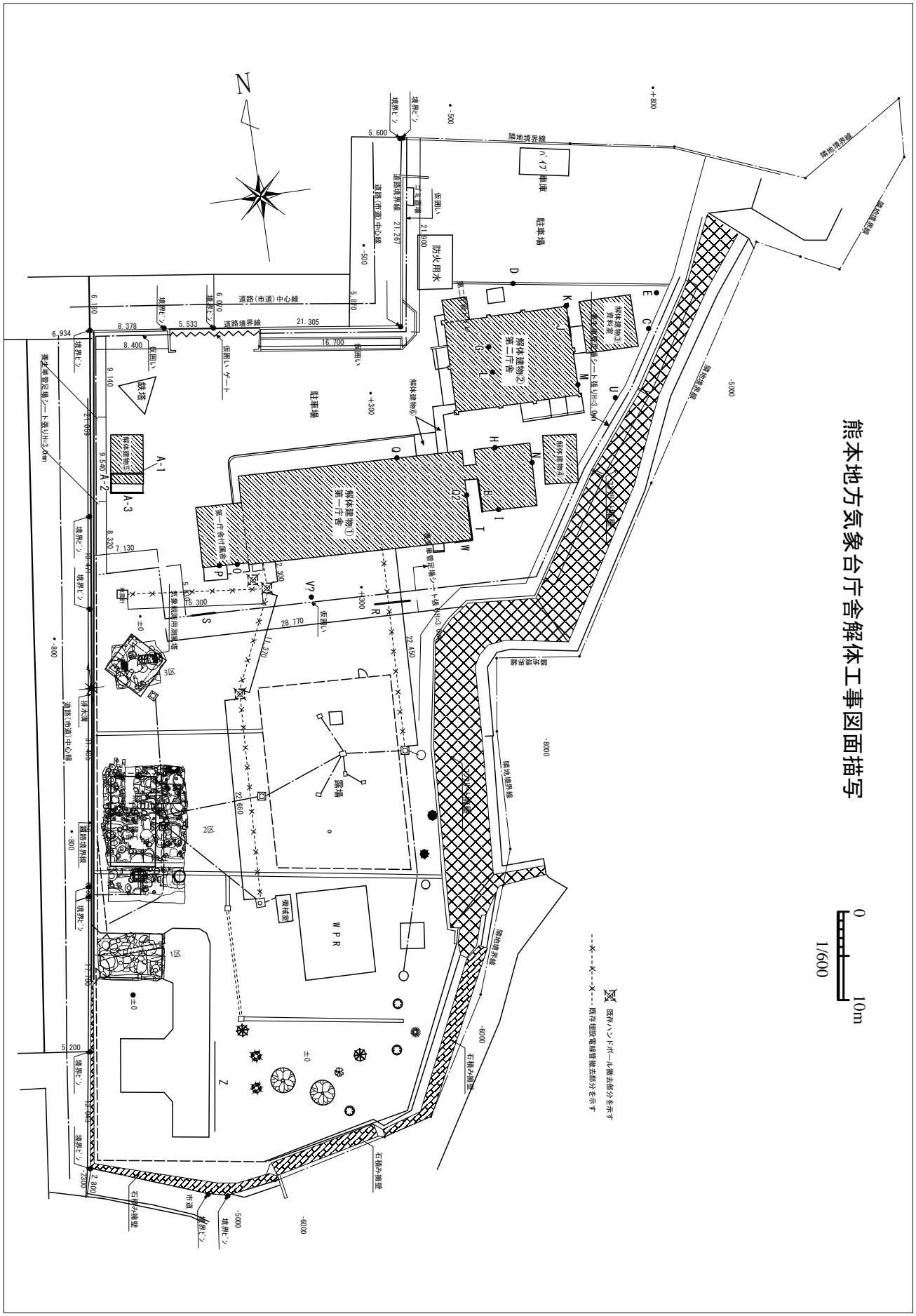


図10 熊本管区気象台敷地建物配置図(1/600)
(遠隔露道整備事業前)

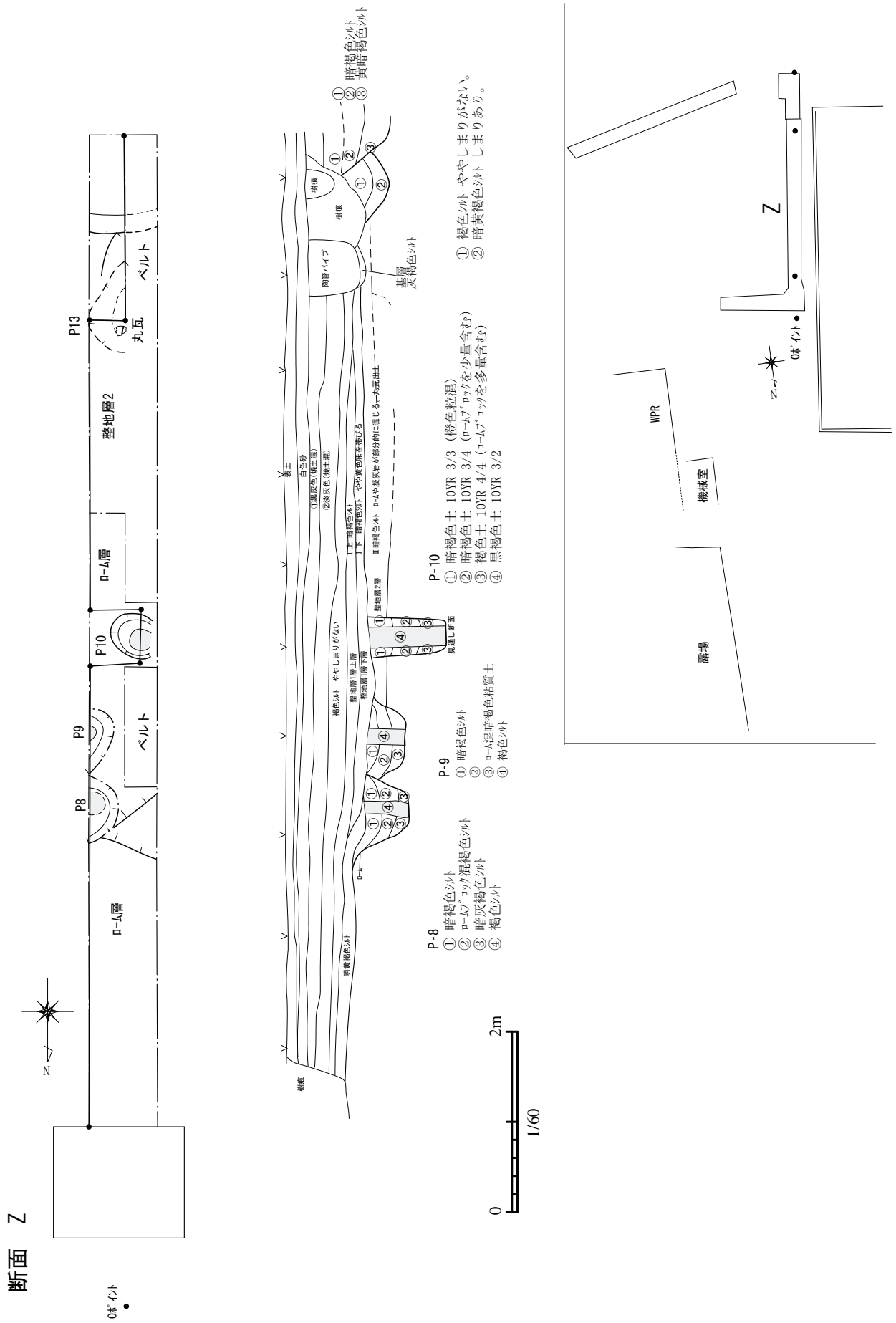


図11 熊本地方気象台庁舎解体に伴う立会掘削時断面図1(1/60)

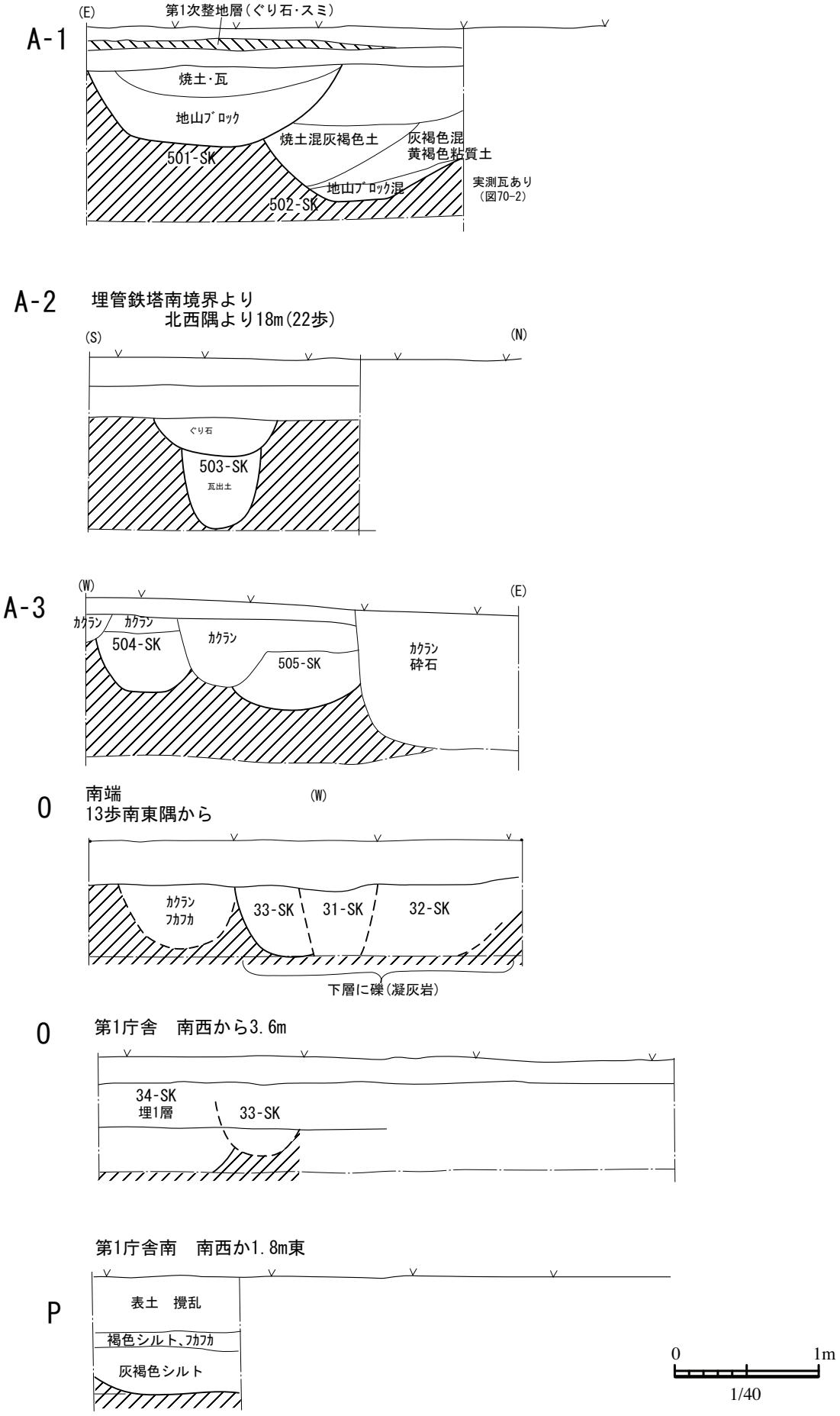
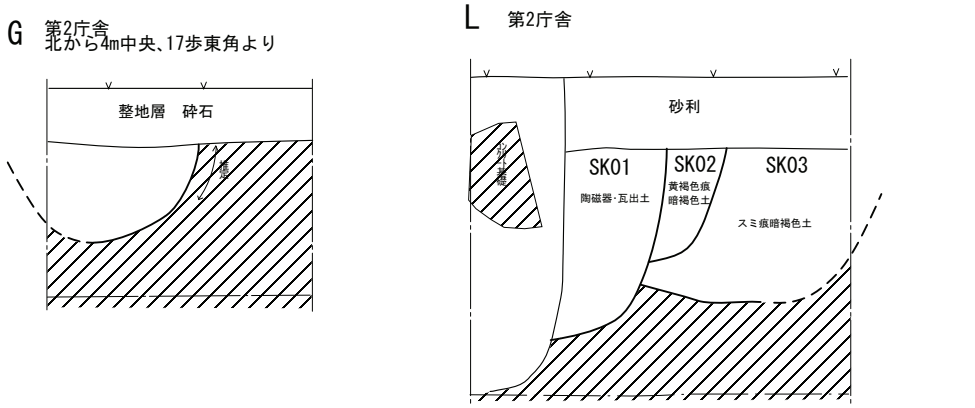
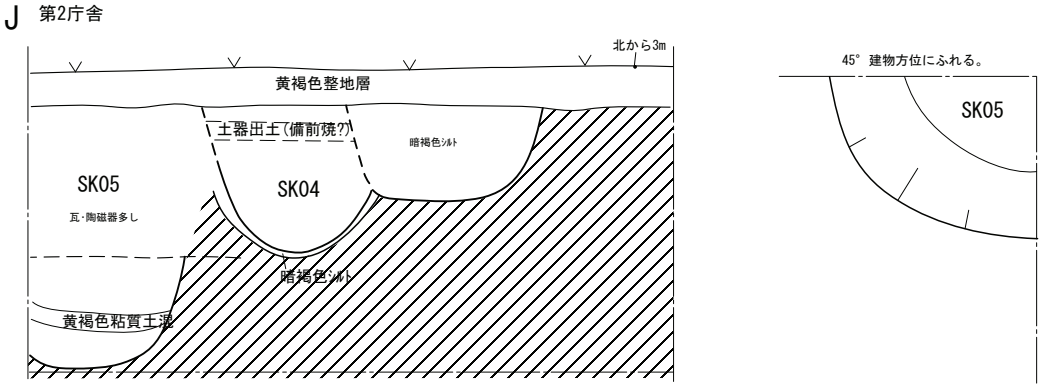
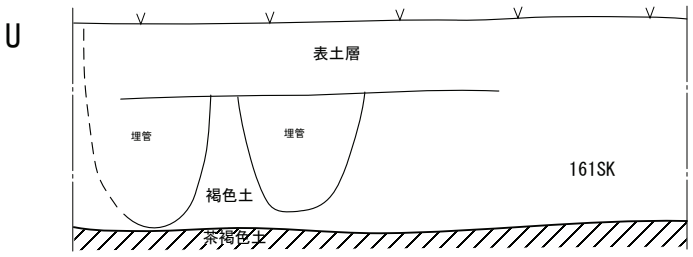


図12 熊本地方気象台庁舎解体に伴う立会掘削時断面図2(1/40)







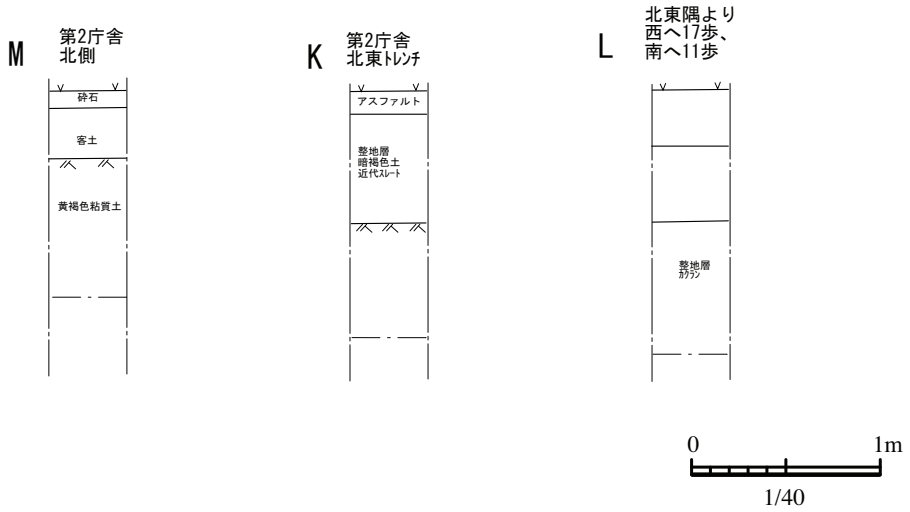
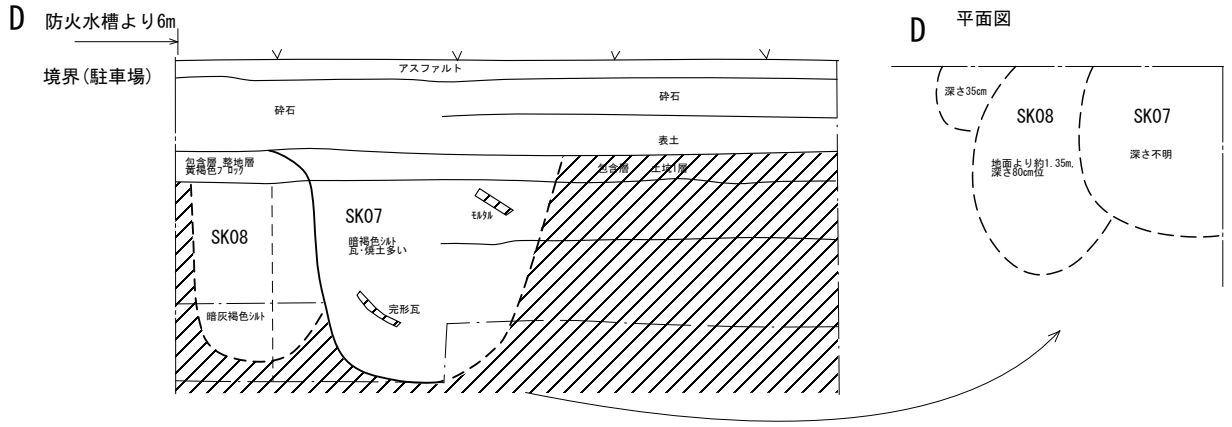
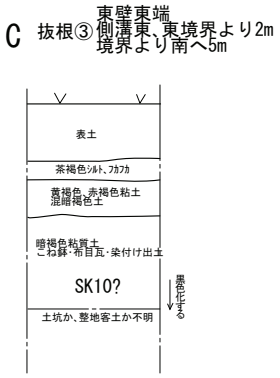
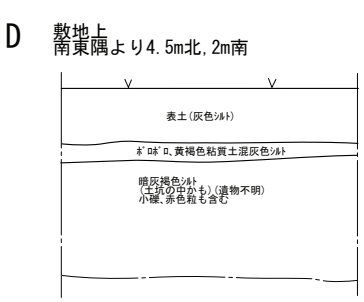
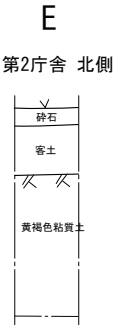


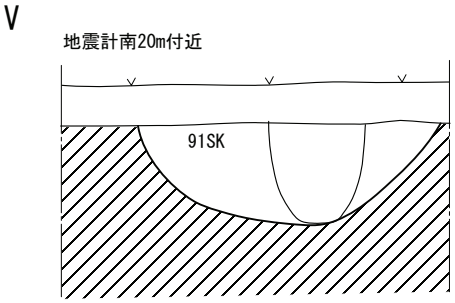
図13 熊本地方気象台庁舎解体に伴う立会掘削時断面図3(1/40)

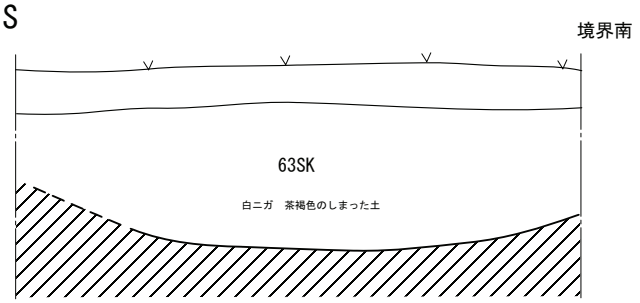












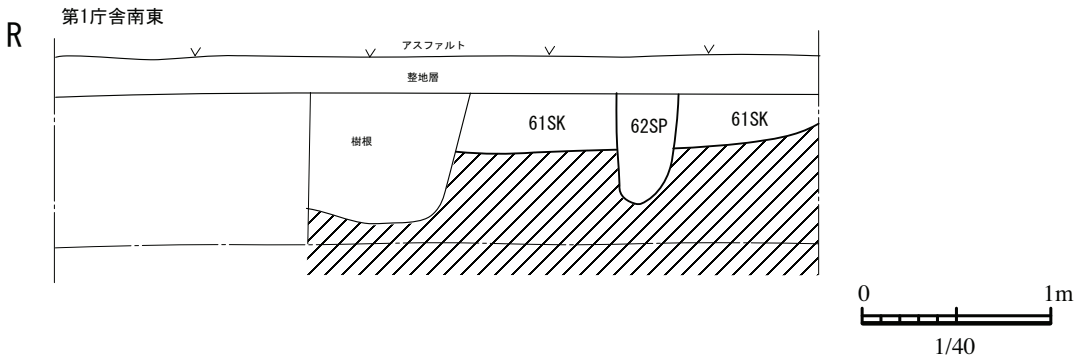


図14 熊本地方気象台庁舎解体に伴う立会掘削時断面図4(1/40)

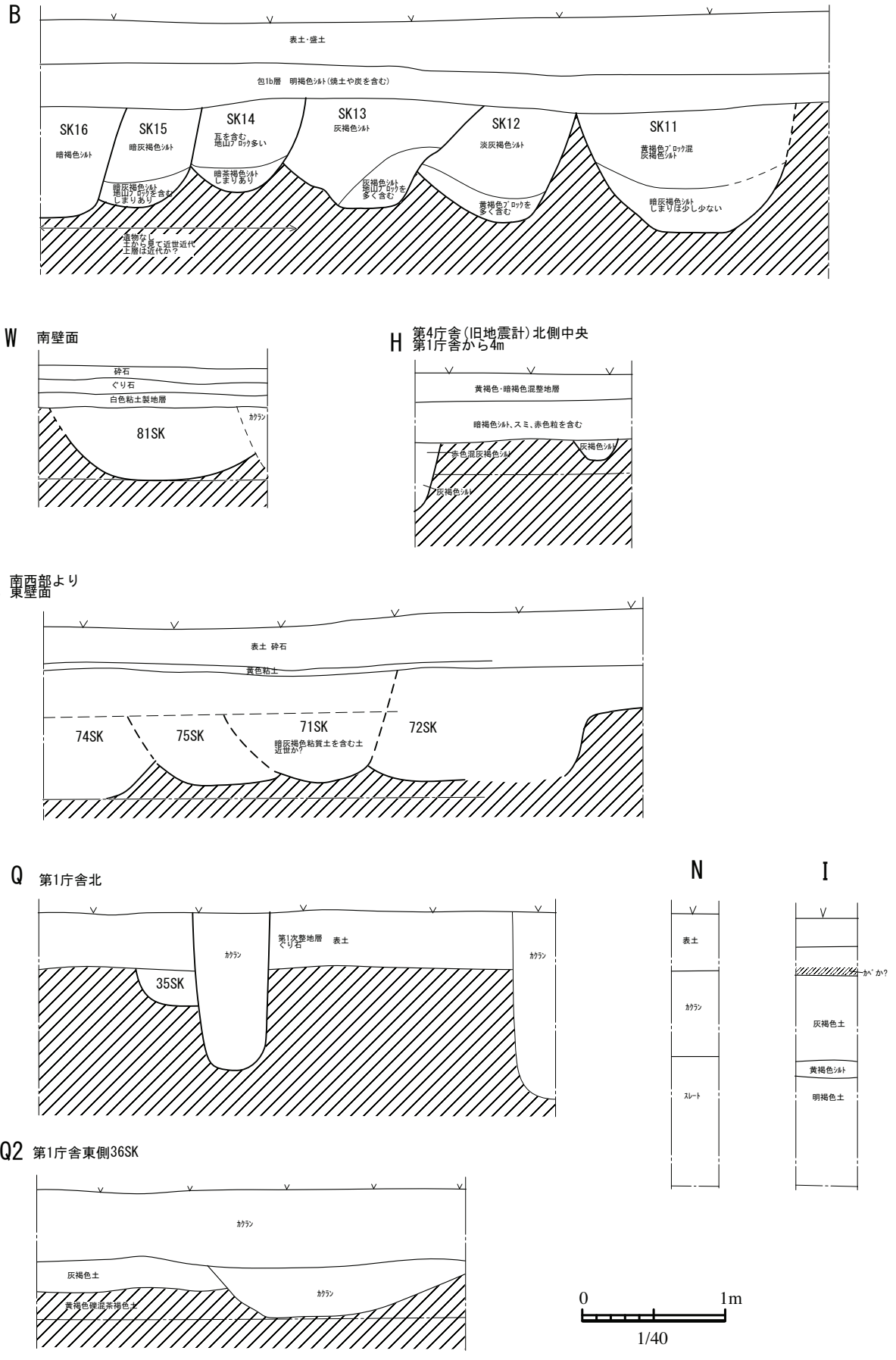


図15 熊本地方気象台庁舎解体に伴う立会掘削時断面図5(1/40)

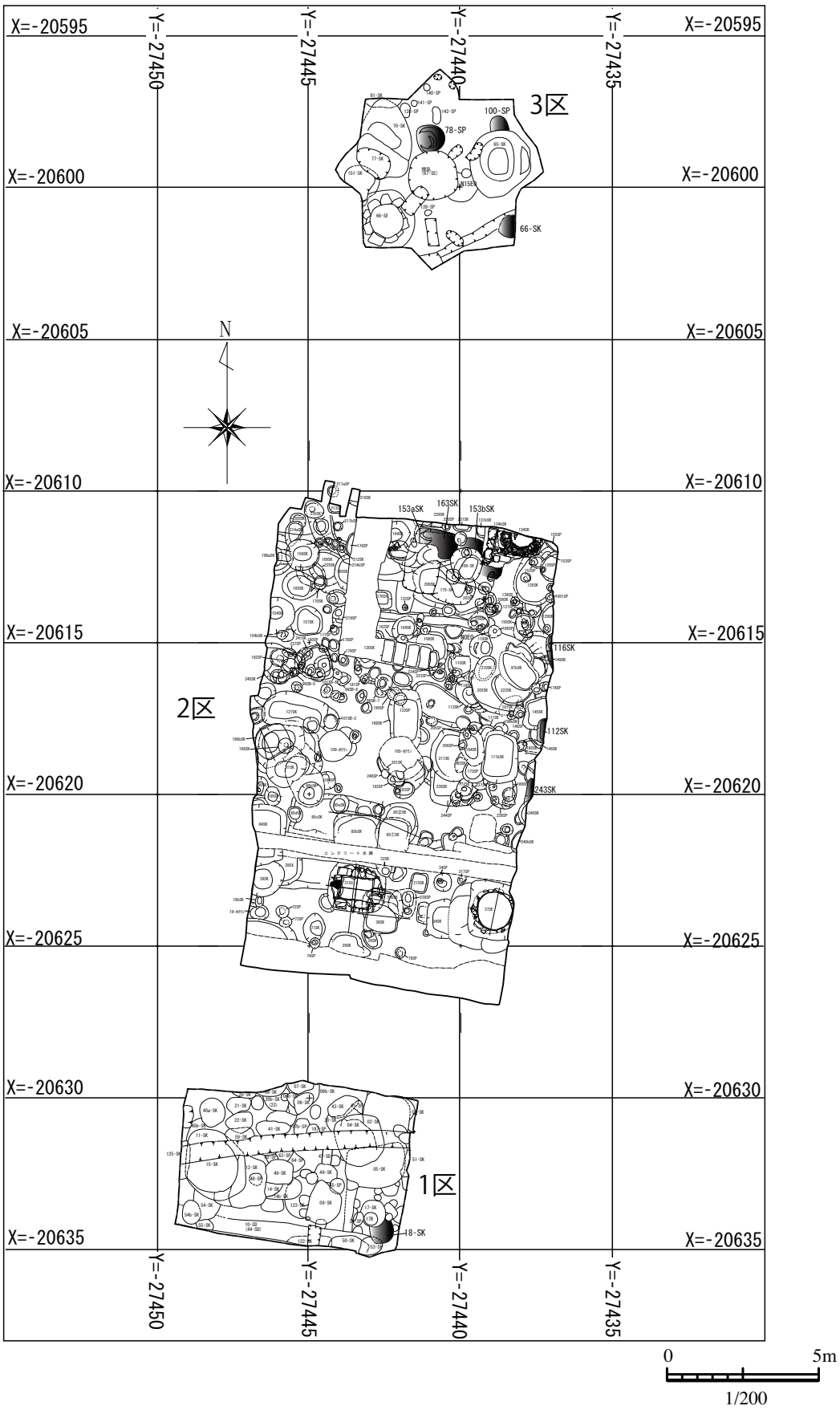


図16 伝大道寺跡遺跡群全調査区古代遺構配置図

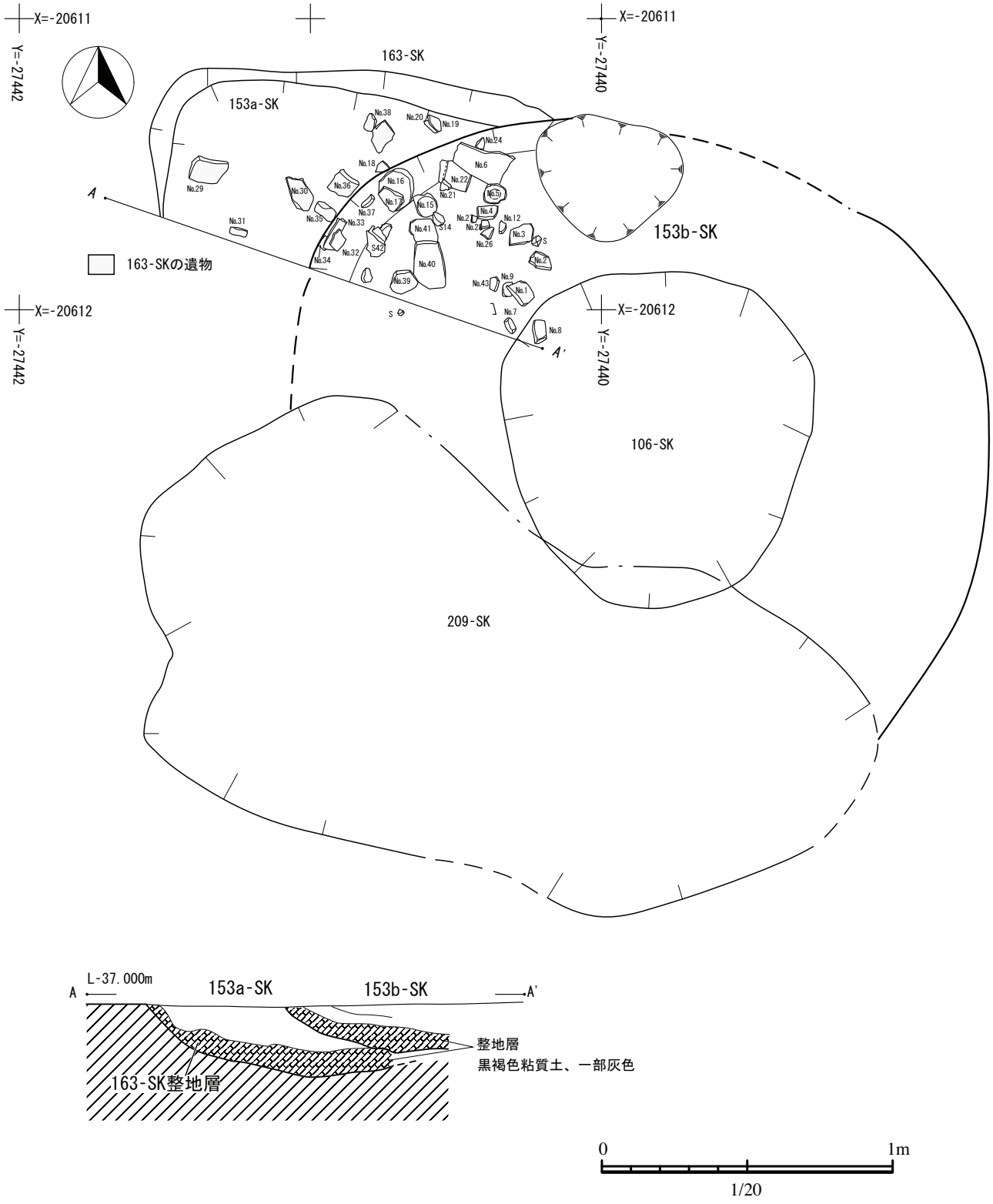
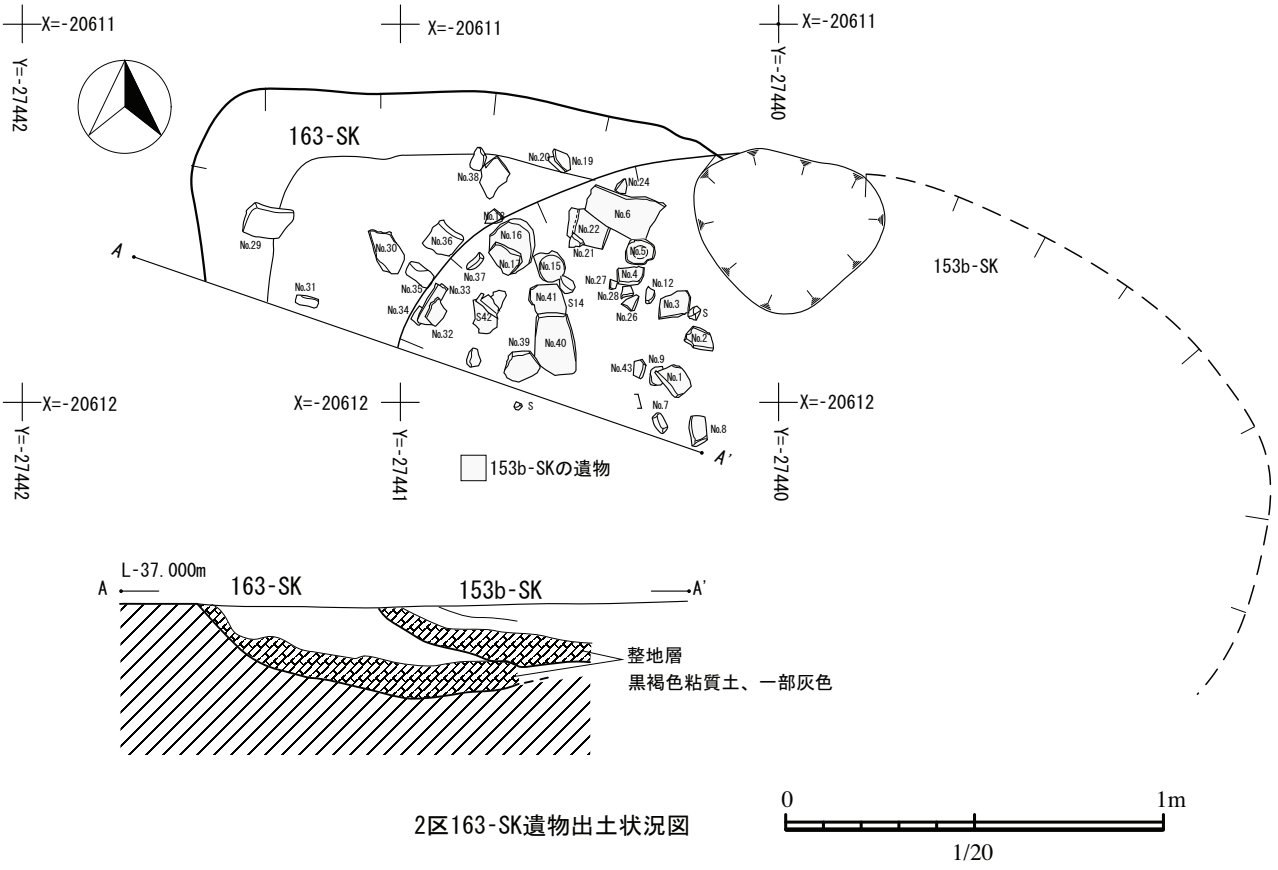


図17 2区153a-SK 遺物出土状況図(1/20)



2区163-SK遺物出土状況図

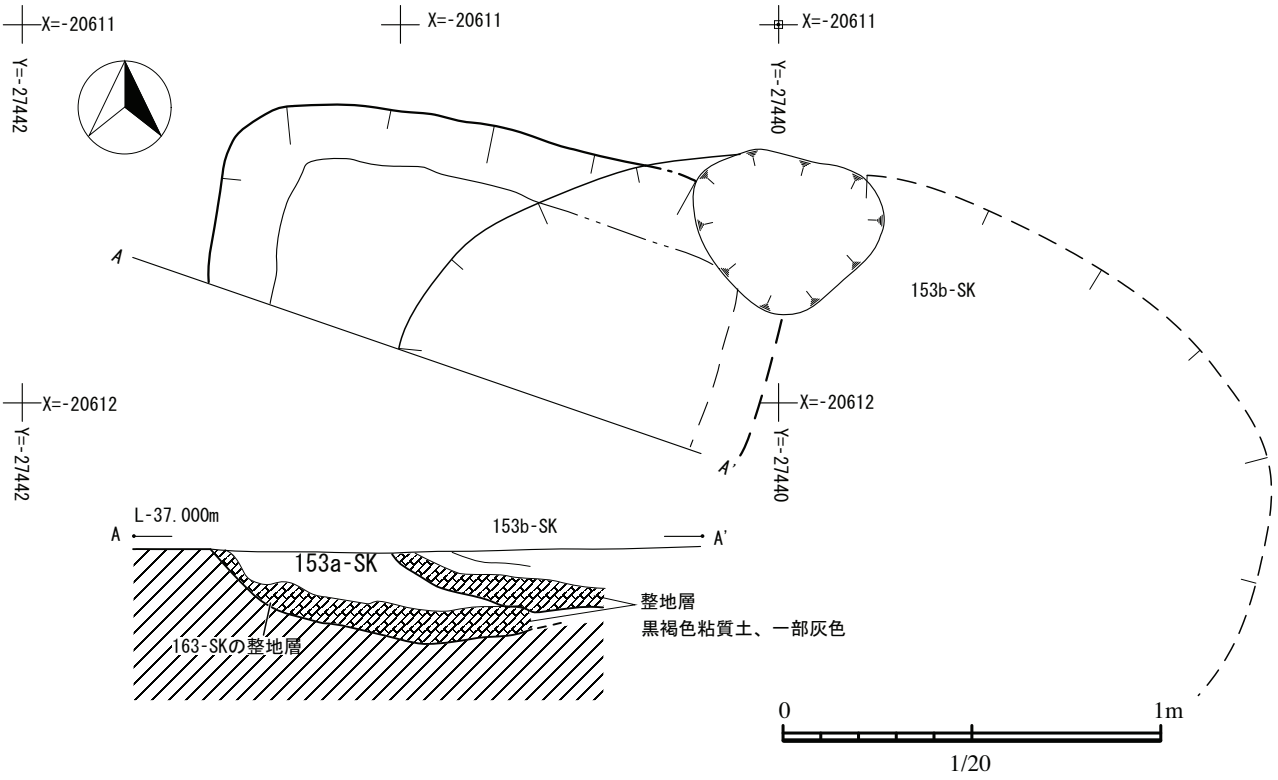
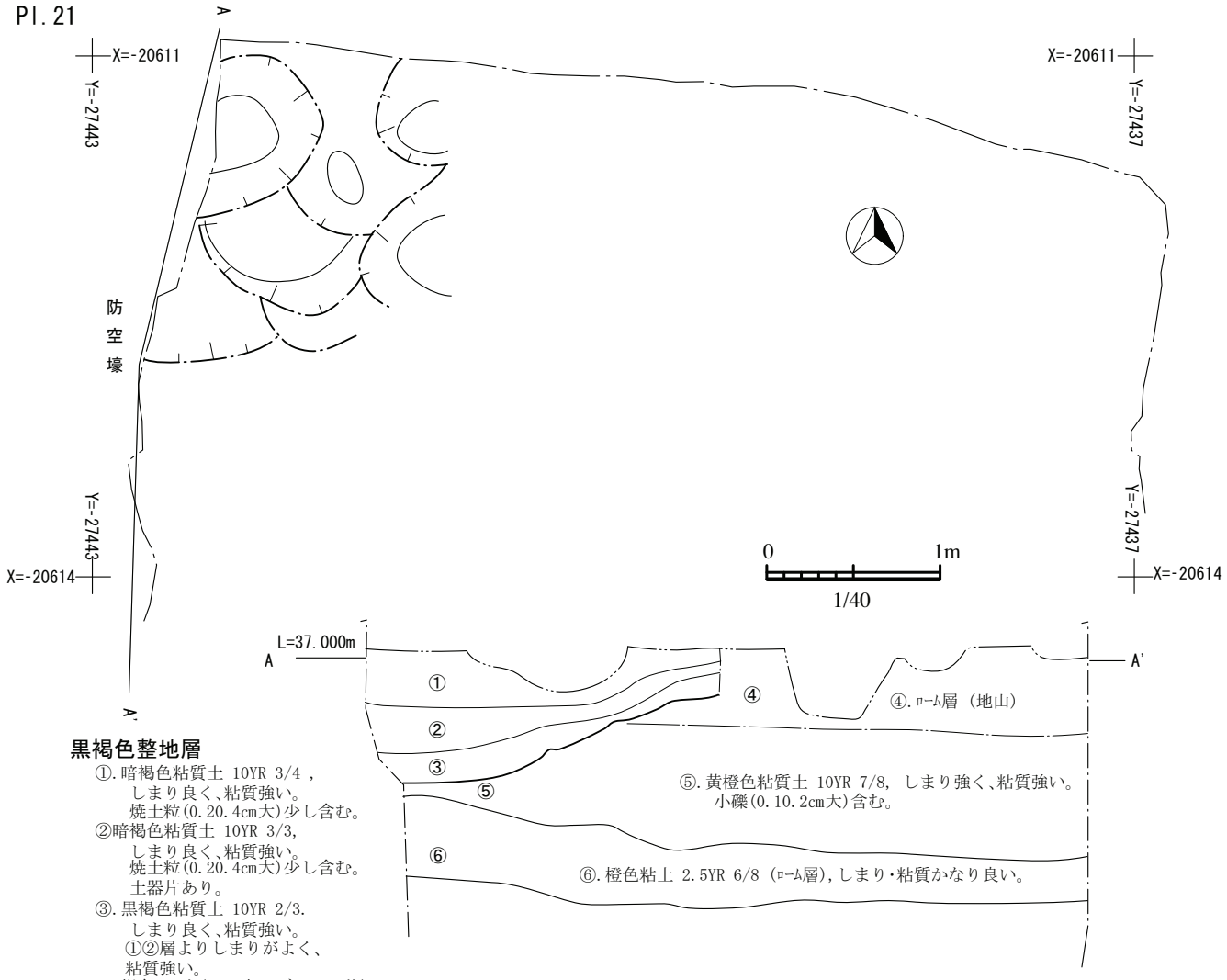


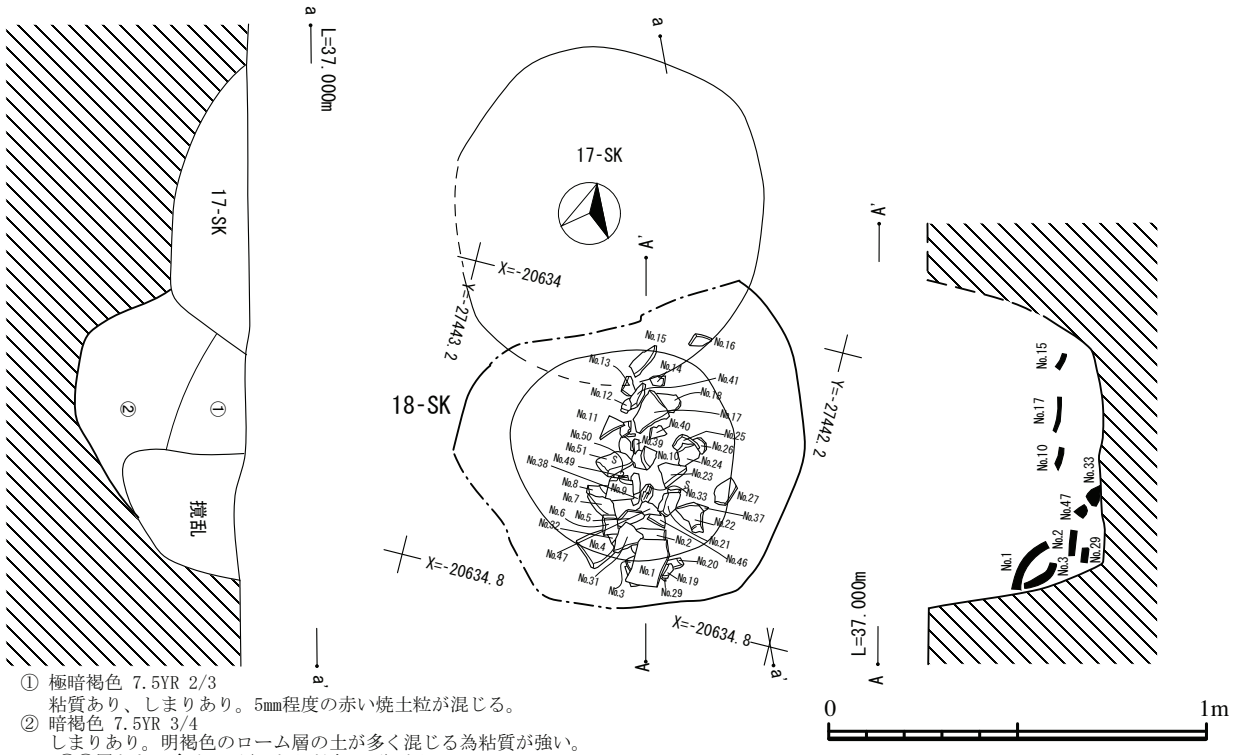
図18 2区163-SK遺物出土状況図、153b-SK検出状況図(1/20)



黒褐色整地層

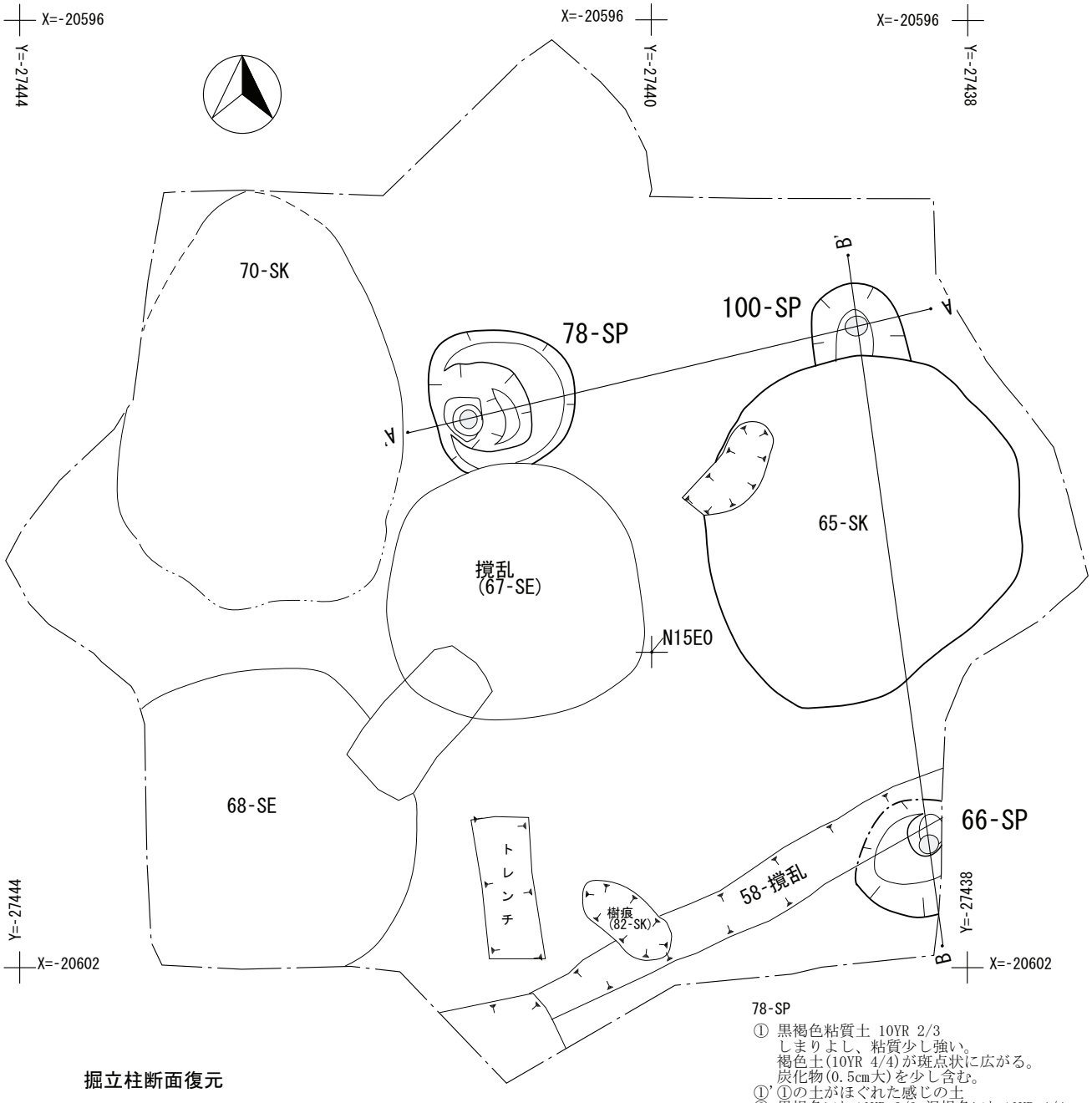
①.暗褐色粘質土 10YR 3/4 ,
しまり良く、粘質強い。
焼土粒(0.20.4cm大)少し含む。
②暗褐色粘質土 10YR 3/3,
しまり良く、粘質強い。
焼土粒(0.20.4cm大)少し含む。
土器片あり。
③.黒褐色粘質土 10YR 2/3.
しまり良く、粘質強い。
①②層よりしまりがよく、
粘質強い。
褐色ローム土(10cm大のブロック状)
が少し混在。

図19 2区(NO.W5)下層検出遺構平面図及び黒褐色整地層断面図(1/40)



① 極暗褐色 7.5YR 2/3
粘質あり、しまりあり。5mm程度の赤い焼土粒が混じる。
② 暗褐色 7.5YR 3/4
しまりあり。明褐色のローム層の土が多く混じる為粘質が強い。
①②層ともに多くの瓦(ほとんど布目瓦)が入る。
特に②層下面に多い。炭少量はいる。

図20 1区18-SK 遺物出土状況図(1/20)



78-SP
① 黒褐色粘質土 10YR 2/3
しまりよし、粘質少し強い。
褐色土(10YR 4/4)が斑点状に広がる。
炭化物(0.5cm大)を少し含む。
①' ①の土がほぐれた感じの土
② 黒褐色ｼﾙﾄ 10YR 2/3 混褐色ｼﾙﾄ 10YR 4/4
しまり・粘性あり。
③ 黒褐色ｼﾙﾄ 10YR 2/2 しまり・粘性あり。
④ ①混褐色ﾛｰﾑ しまり少し弱い、粘性あり。

66-SP
① 黒褐色粘質土 10YR 3/2と
黄褐色ｼﾙﾄ(ﾛｰﾑ)10YR5/6が混在
しまりよし、粘性少し強い。
①' ①④混在
② 暗褐色ｼﾙﾄ10YR 3/3と
黄褐色ｼﾙﾄ(ﾛｰﾑ)10YR5/6が混在
しまり・粘性あり。
③ ②の土よりしまりが弱く、全体的にボサボサ。
④ 暗褐色ｼﾙﾄ 10YR 3/3 しまり・粘性あり。

掘立柱断面復元

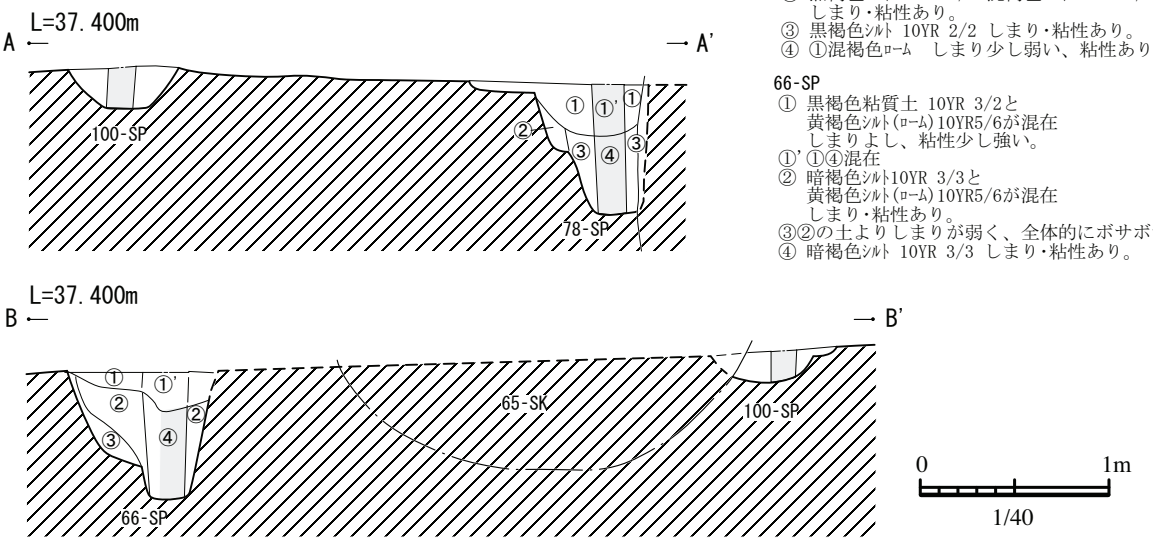


図21 3区古代～中世(78-SP・66-SK・100-SP)遺構平面・断面図(1/40)

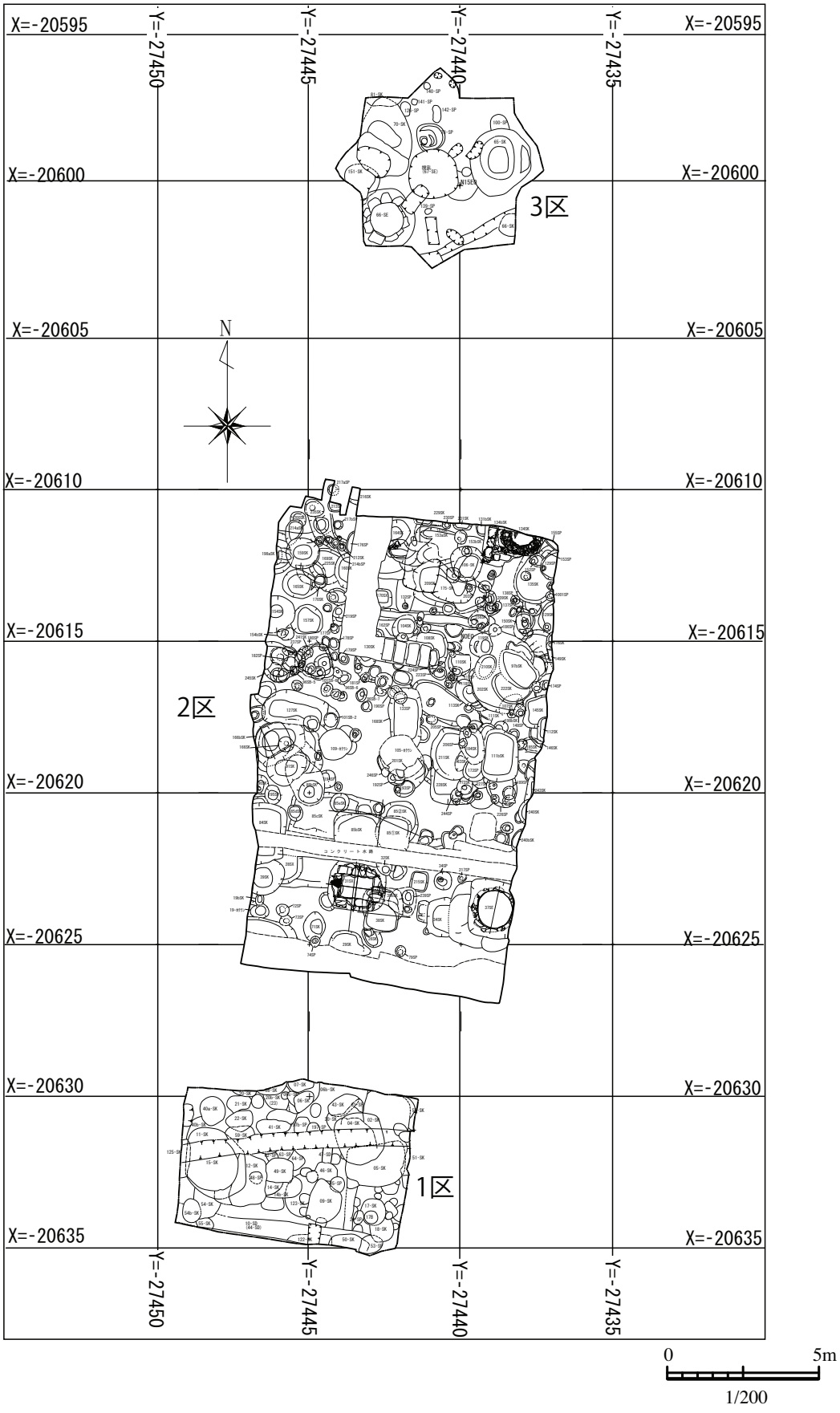
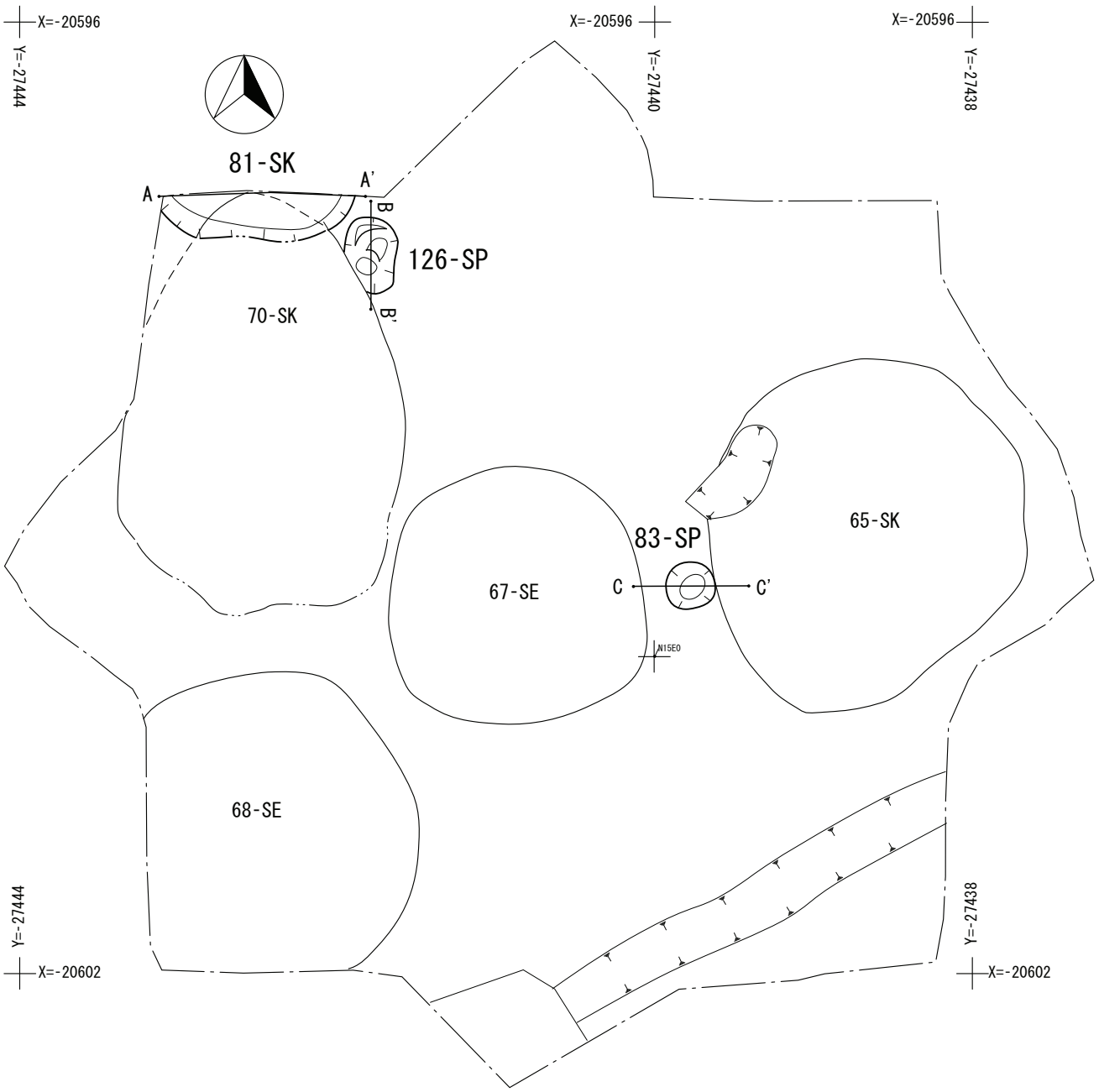
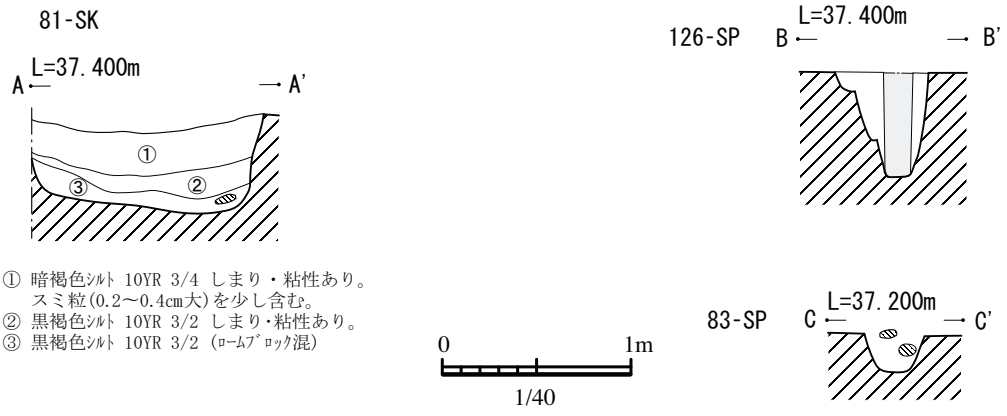


図22 伝大道寺跡遺跡群全調査区近世遺構配置図





① 暗褐色ｼﾙﾄ 10YR 3/4 しまり・粘性あり。
スミ粒(0.2～0.4cm大)を少し含む。
② 黒褐色ｼﾙﾄ 10YR 3/2 しまり・粘性あり。
③ 黒褐色ｼﾙﾄ 10YR 3/2 (ﾛｰﾑﾌﾞﾛｯｸ混)

0 1m
1/40

図23 3区81-SK・83-SP・126-SP 平面・断面図(1/40)

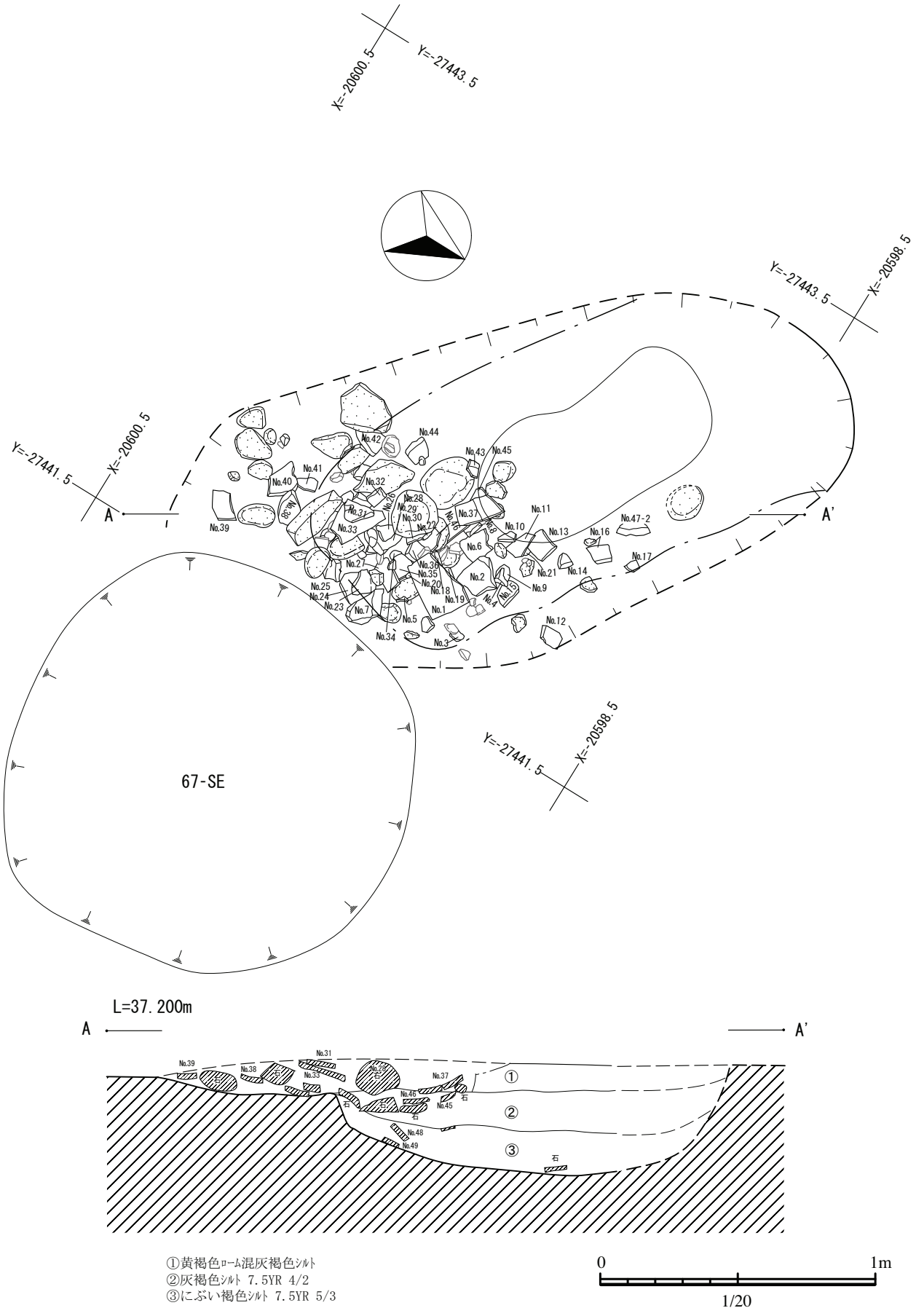
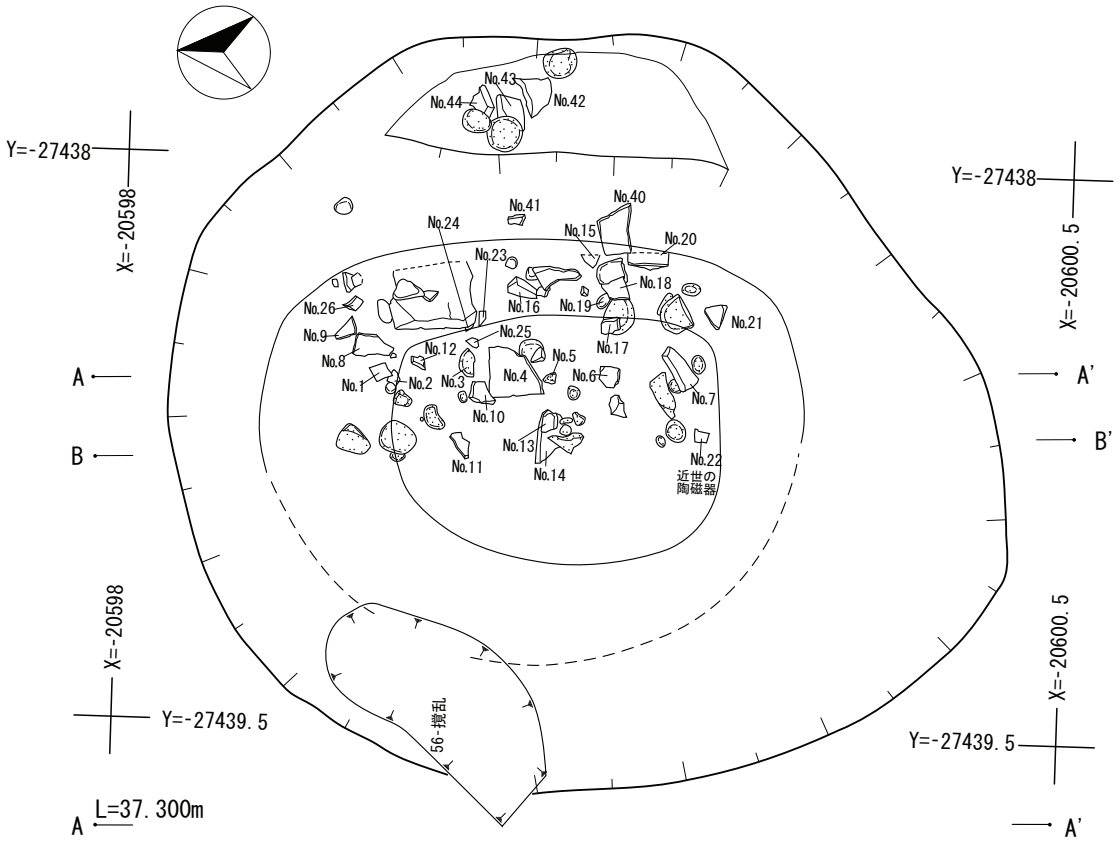
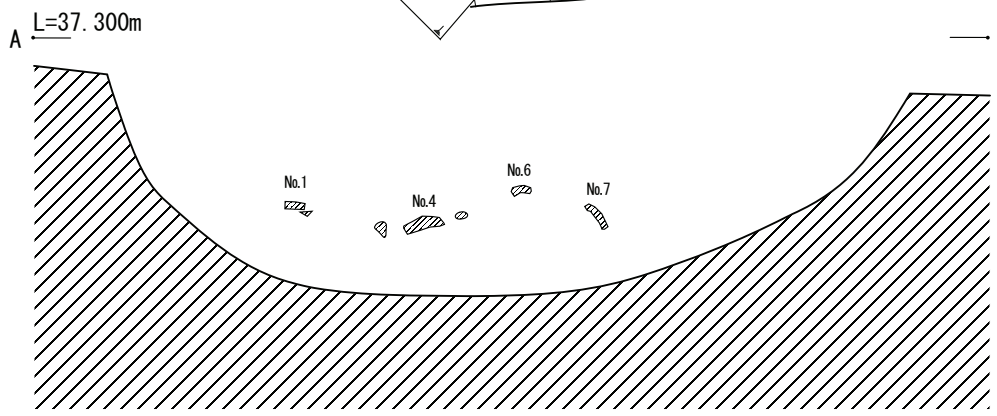
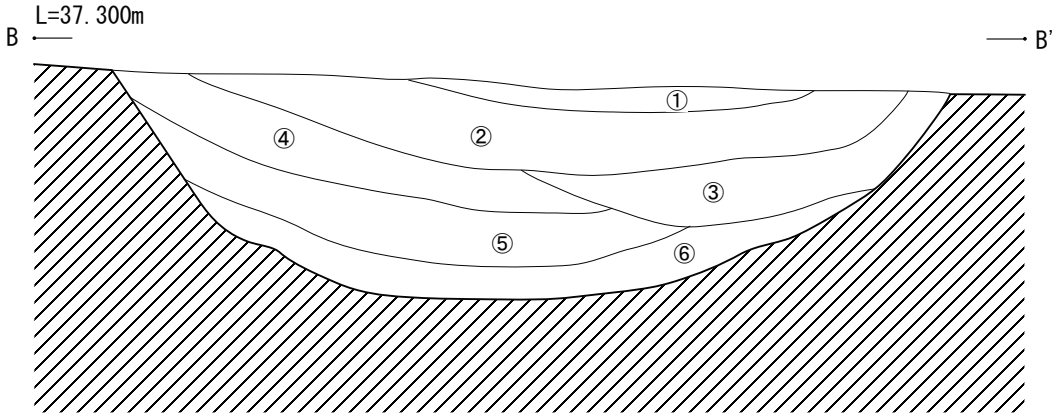


図24 3区77-SK 遺物出土状況平面・断面図(1/20)



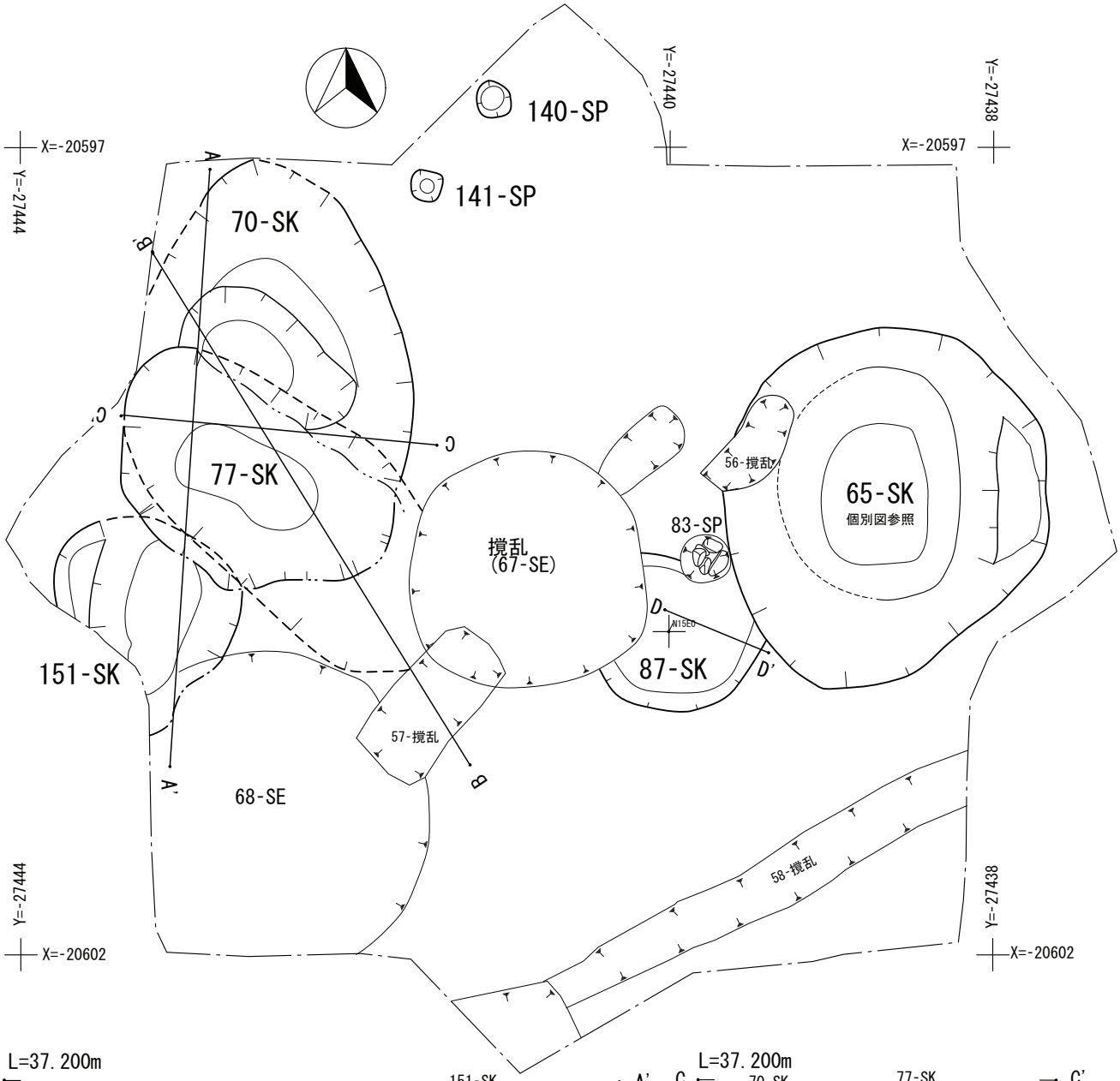


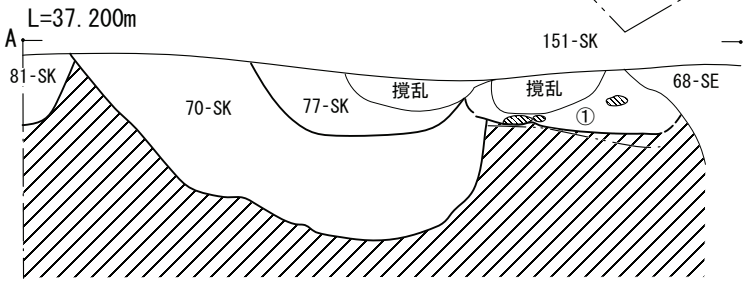


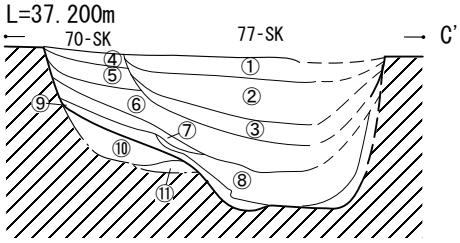
① 10YR 3/3 暗褐色シルト、しまりあり、粘性あり
10YR 4/6 褐色粘土ﾌﾞﾛｯｸ(0.5～4.0cm大)を全体に混在(3%)
小礫(0.5～1.5cm大を少し含む。(1%)
② 10YR 2/2 黒褐色シルト、しまりあり、粘性あり
小礫(0.5～1.51cm大)を少し含む。(1%)
褐色粒(0.2cm大)を少し含む。(1%)
③ 10YR 3/3 暗褐色シルト、しまりあり(少しﾎﾞｻﾎﾞｻ)、粘性あり
褐色土少し混在。
④ 10YR 2/3 暗褐色シルト、しまりあり、粘性あり
小礫(1.0～2.0cm大)を少し含む。
⑤ ④と同じ
礫(1.0～5.0cm大)全体に広がる(3%)
⑥ 10YR 4/4 褐色シルトと10YR 3/3 暗褐色シルトが混在
(6 : 4)
しまりあり、粘性少しあり

0 1m
1/20

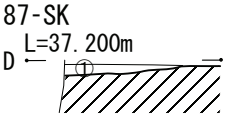
図25 3区65-SK 遺物出土状況平面・断面図(1/20)



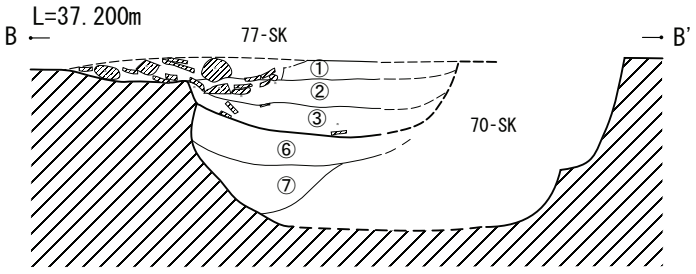




151-SK ① 暗褐色ｼﾙﾄ 10YR 3/3 しまり良く、粘性強い。
地山のﾛｰﾑ層土が斑点状に入る。



87-SK ① 黒褐色ｼﾙﾄ 10YR 3/2
しまりあり、粘性少しあり。

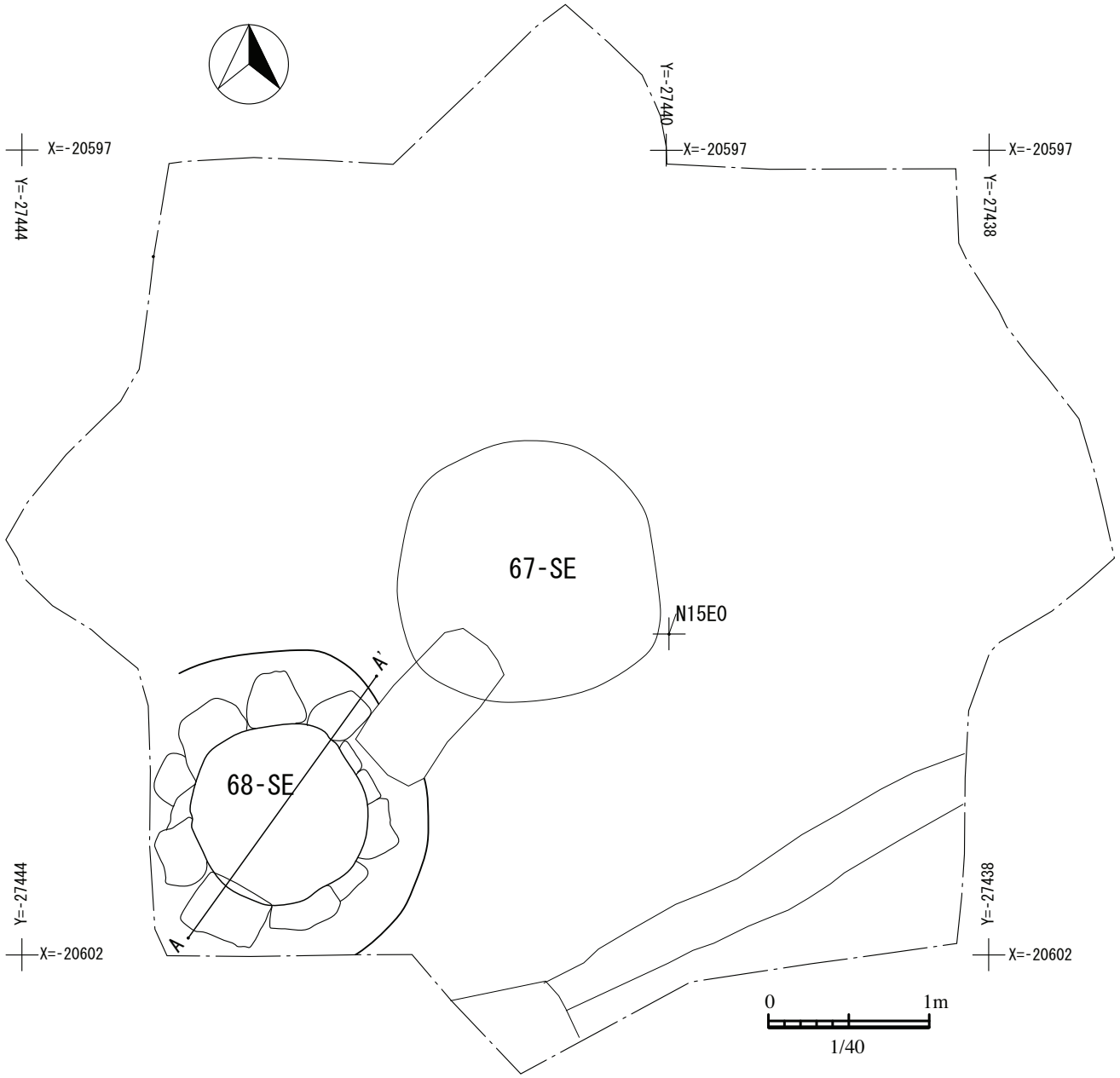


70-SK ④
⑤
⑥ にぶい褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 5/3
⑦ 黒褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 3/1
⑧ 黒褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 3/2
⑨ ﾛｰﾑ層ﾌﾞﾛｯｸ土混褐灰色ｼﾙﾄ
⑩ 灰褐色ｼﾙﾄ（にぶい褐色ﾌﾞﾛｯｸ7.5YR 4/3混）
⑪ 明褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 5/6
（にぶい褐色ﾌﾞﾛｯｸ7.5YR 4/3混）
⑩⑪はPitの可能性

77-SK ① 黄褐色ﾛｰﾑ混灰褐色ｼﾙﾄ 硬くしまる。
② 黄褐色ﾛｰﾑ混灰褐色ｼﾙ
③ 灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2

0 1m
1/40

図26 3区近世遺構平面･断面図(1/40)



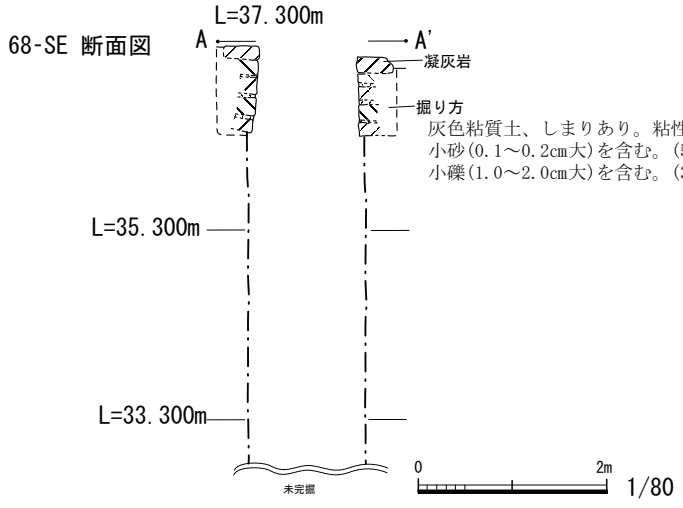


図27 3区68-SE･67-SE 平面(1/40)･断面図(1/80)

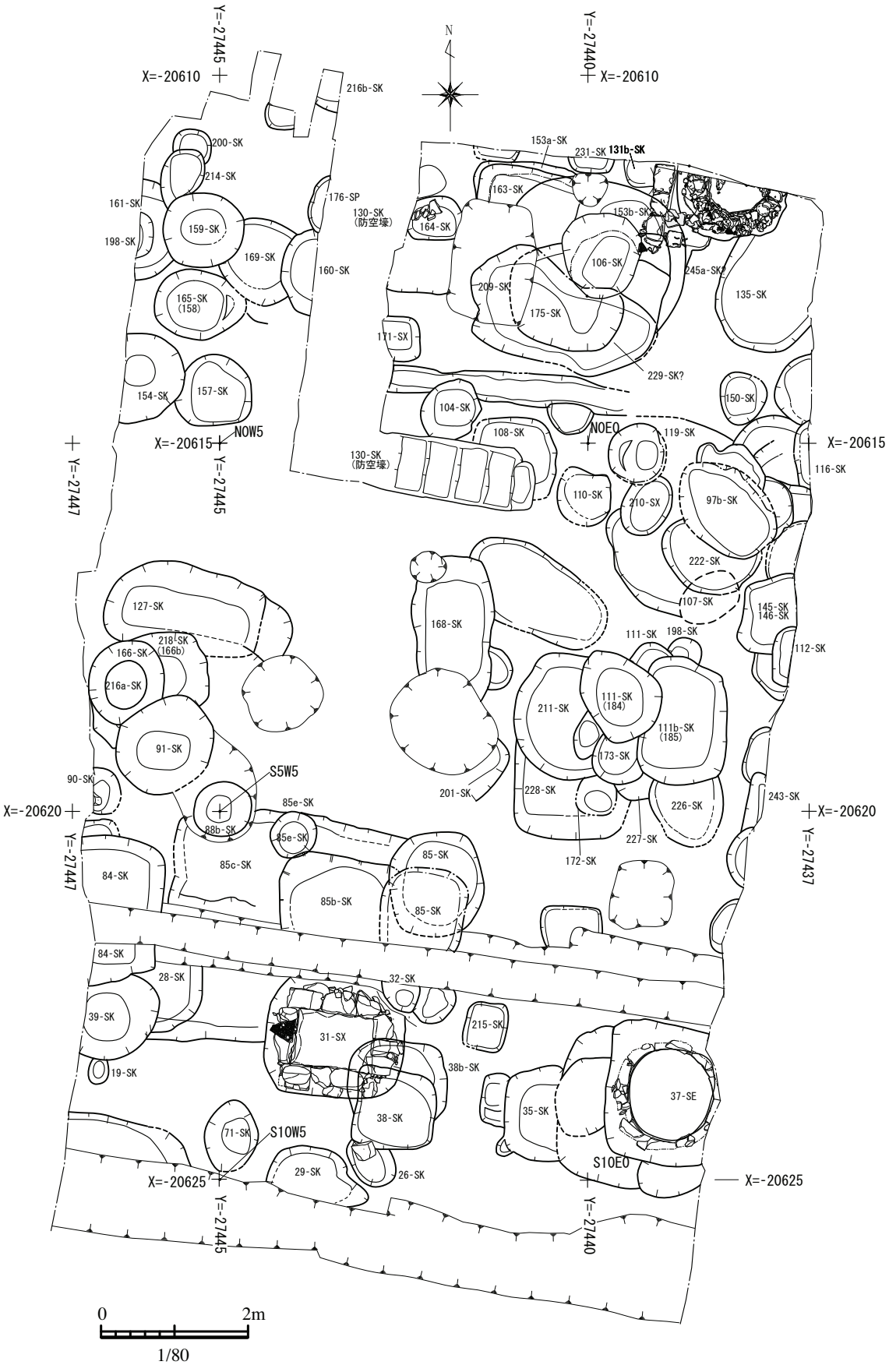
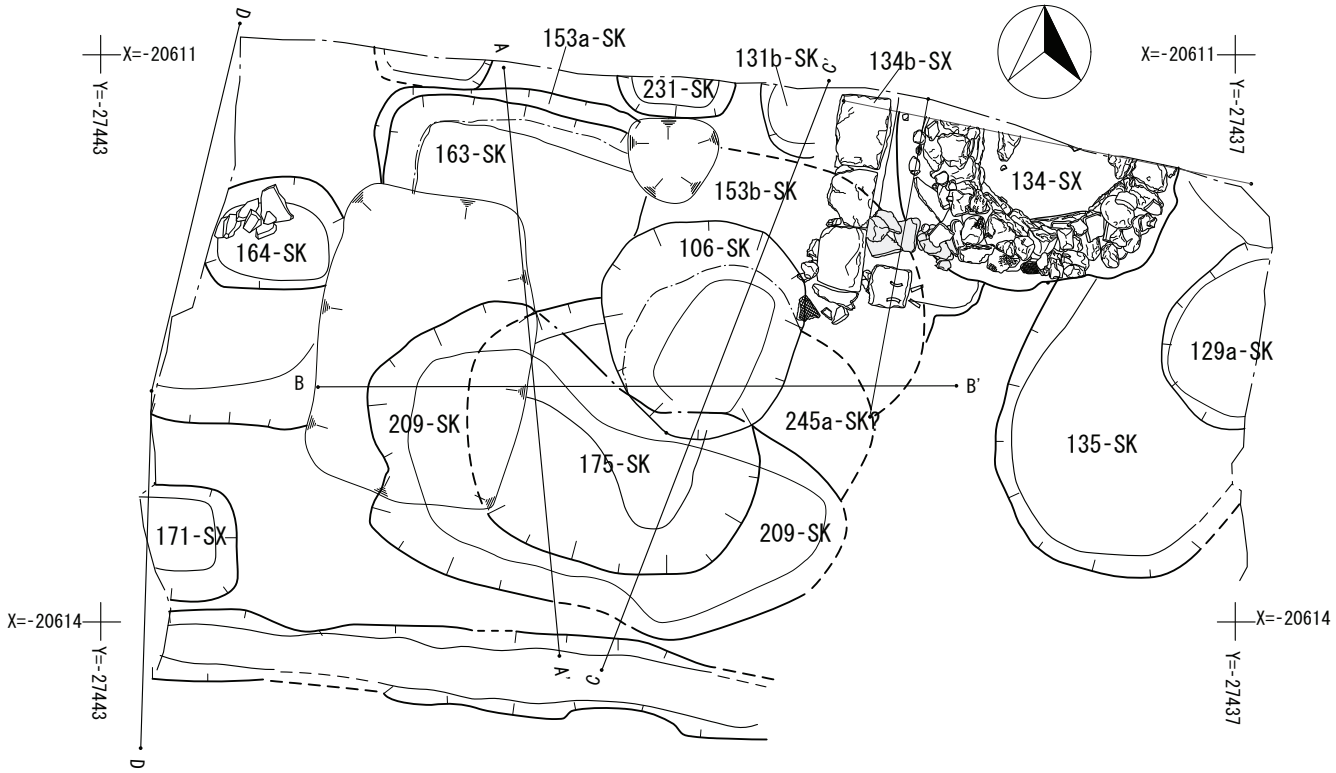
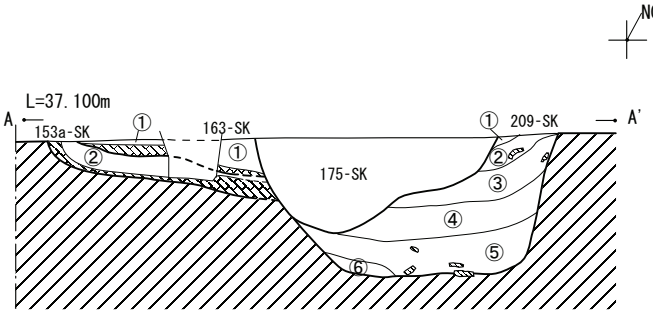
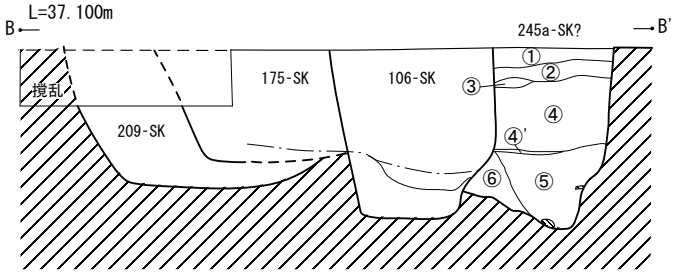


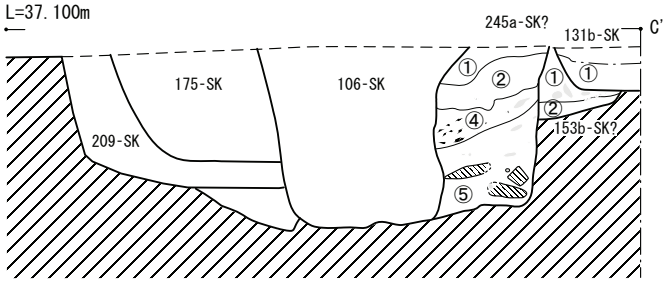
図28 2区SK及びSX検出状況平面図(1/80)

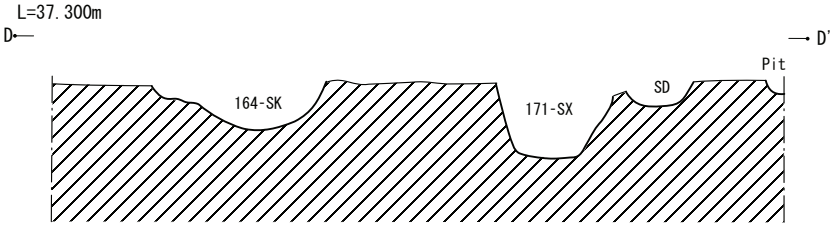




163-SK ① 暗褐色土
整地層-黒褐色粘質土一部灰色
153a-SK ② 灰褐色粘質土混暗褐色ｼﾙﾄ
整地層-黒褐色粘質土一部灰色
209-SK ① 黄褐色ﾛｰﾑ混灰褐色ｼﾙﾄ(やや暗褐色)
②
③ にぶい褐色ｼﾙﾄ混灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2
④ 灰褐色ｼﾙﾄ混暗褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 3/2
⑤ 灰褐色混暗褐色粘質土、瓦混入
⑥ 黄褐色ﾛｰﾑ混暗褐色粘質土
106-SK
175-SK
個別ﾚｲｱｳﾄのﾍﾟｰｼﾞを参照







245a-SK
① 灰褐色ｼﾙﾄ
② ﾛｰﾑ灰褐色ｼﾙﾄ
③ ﾛｰﾑﾌﾞﾛｯｸ
④ 褐灰色ｼﾙﾄ混灰褐色ｼﾙﾄ(ﾛｰﾑﾌﾞﾛｯｸ混)
④'
⑤ 灰褐色ｼﾙﾄ
⑥ 灰褐色ｼﾙﾄ混1cm位のﾛｰﾑﾌﾞﾛｯｸ
地山ﾌﾞﾛｯｸ　スミ

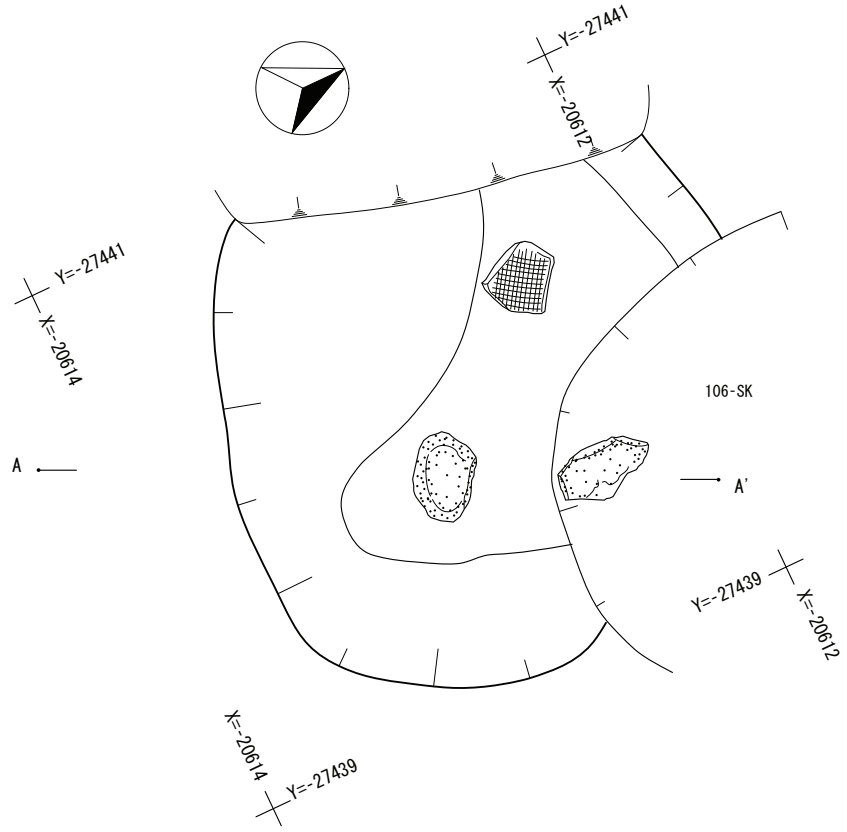
131b-SK
① 灰褐色ｼﾙﾄ(褐色ｼﾙﾄ),鉄分混

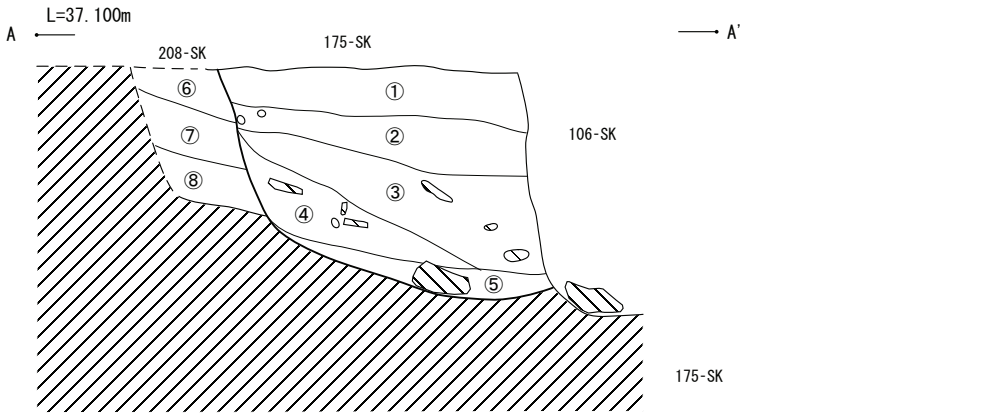
153b-SK
① 灰褐色ｼﾙﾄ,下部に地山ﾌﾞﾛｯｸ
② 黄褐色粘質土

164-SK
171-SK
土色注記なし

0　1m
1/40

図29 2区(NO.E0)(NO.W5)検出土坑平面・断面図(1/40)



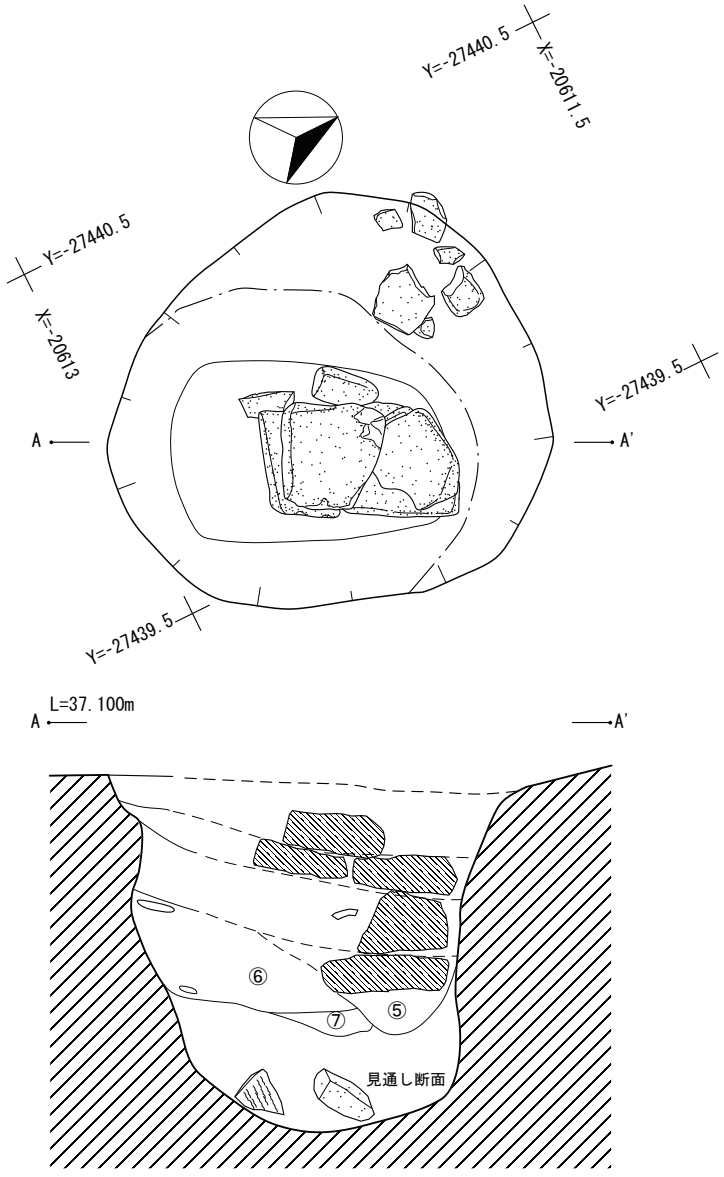


175-SK
① 黄褐色ﾛｰﾑ混褐灰色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/3
② 褐灰色ｼﾙﾄ混灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 7/2
ﾛｰﾑﾌﾞﾛｯｸ2～3cm大含む
③ ﾛｰﾑ混灰褐色ｼﾙﾄ,瓦・石混
④ 黄色ﾛｰﾑと暗褐色ｼﾙﾄ混
⑤ 暗褐色ｼﾙﾄ、粘質強い。遺物を多く含む。

208-SK
⑥ にぶい褐色 7.5YR 4/3
⑦ 暗褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 3/3
⑧ ﾛｰﾑ混上の層のﾌﾞﾛｯｸ含む

0 1m
1/20

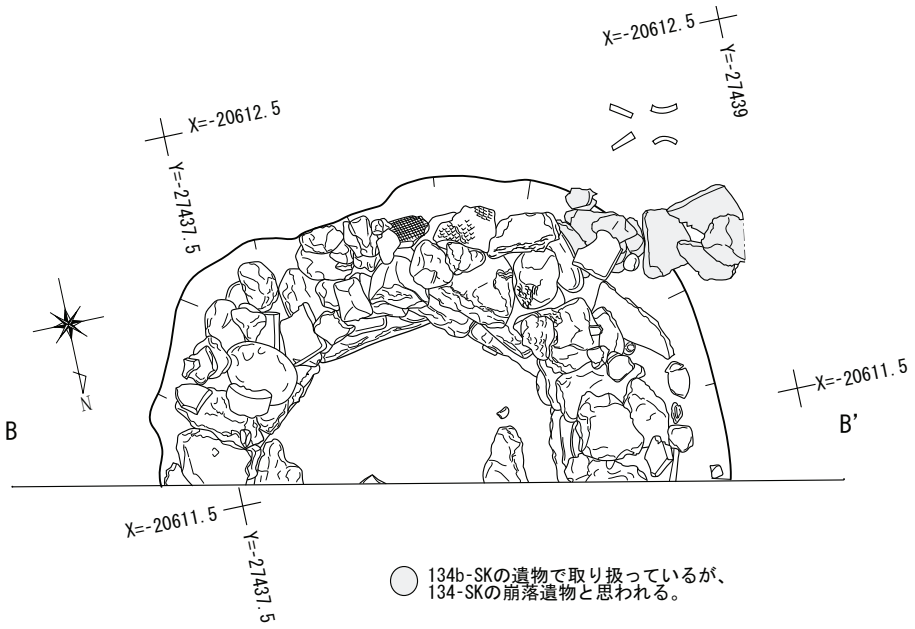
図30 2区175-SK 遺物出土状況平面･断面図(1/20)

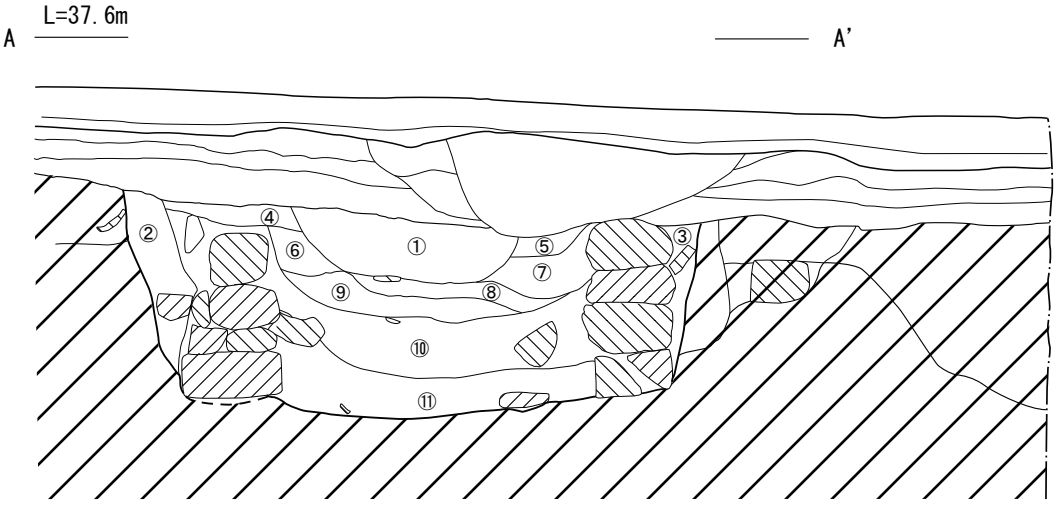


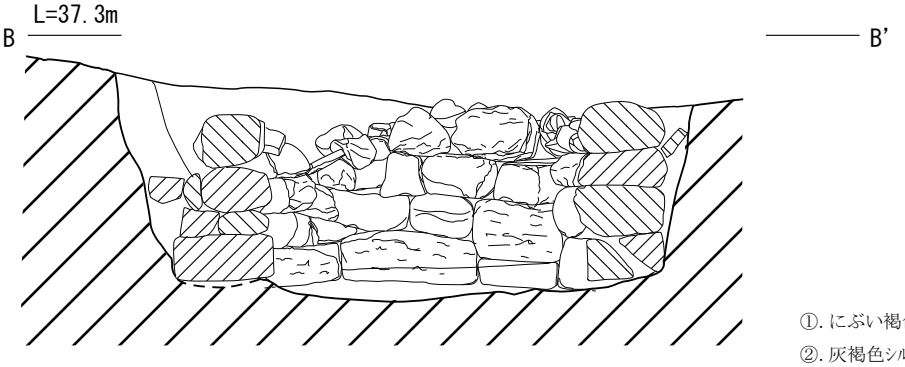
⑤ 黄褐色層 ｽﾐ混灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2
⑥ 灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2 やや灰色帯びる。
⑦ 黒褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 3/2 やや粘質
黒灰色が入る、横の層が流れて下に堆積

0 1m
1/20

図31 2区106-SK遺物出土状況平面･断面図(1/20)

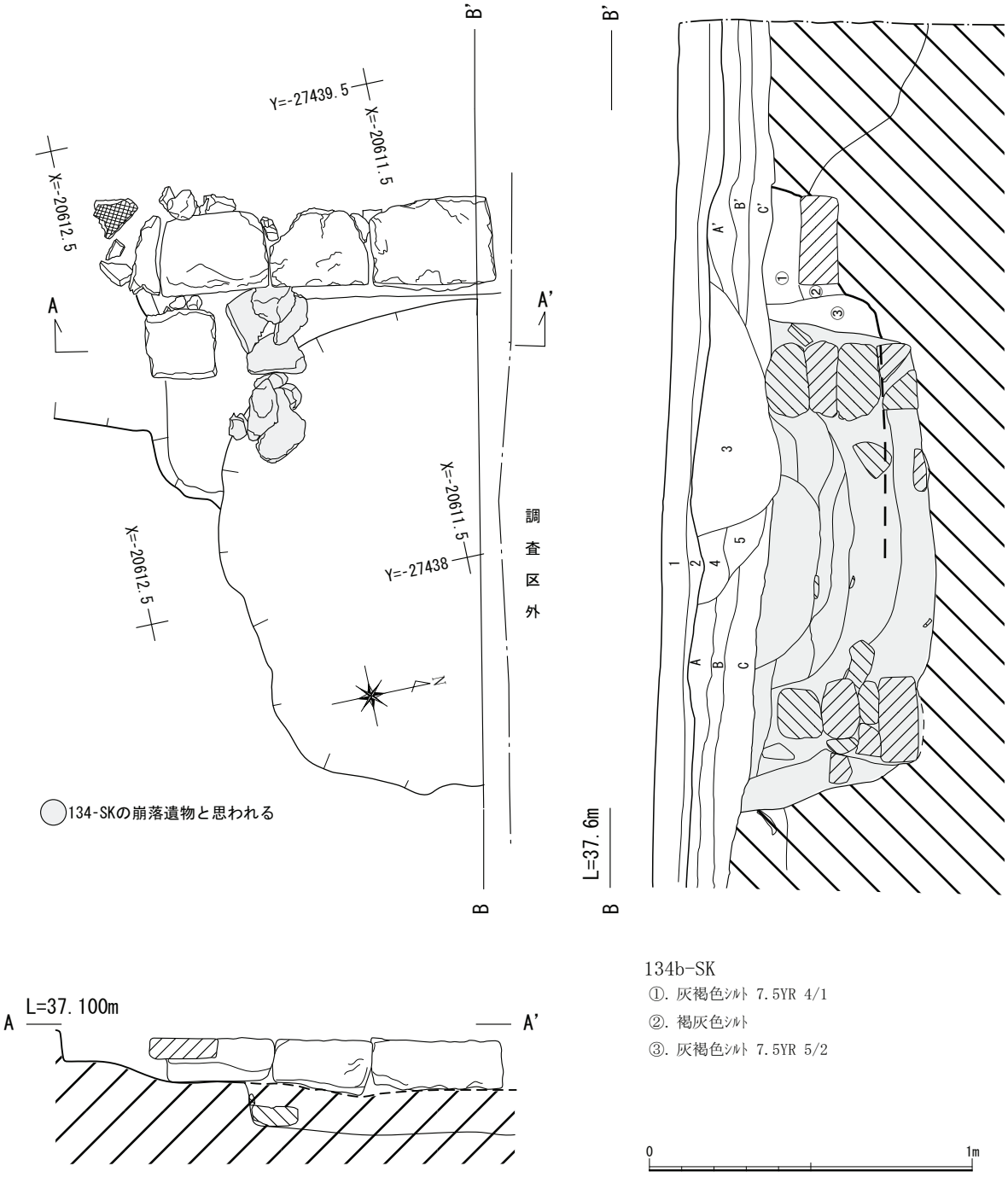






①. にぶい褐色シルト
②. 灰褐色シルト、ロームﾌﾞﾛｯｸ(5 cm大) 混じり
③. 黄色混灰褐色シルト
④. にぶい褐色シルト
⑤. 黄褐色シルト、ローム混じり
⑥. 黄褐色ローム層混灰褐色シルト
⑦. 灰褐色シルト 7.5YR 4/2,ローム混
⑧.ロームﾌﾞﾛｯｸ(1~3 cm) 混灰褐色シルト
⑨.ロームﾌﾞﾛｯｸ(5 cm大) 混黒褐色シルト
⑩. 灰褐色シルト(粘質土)、ﾎﾟｿﾎﾟｿ
⑪. 黒褐色シルト 7.5YR 2/3

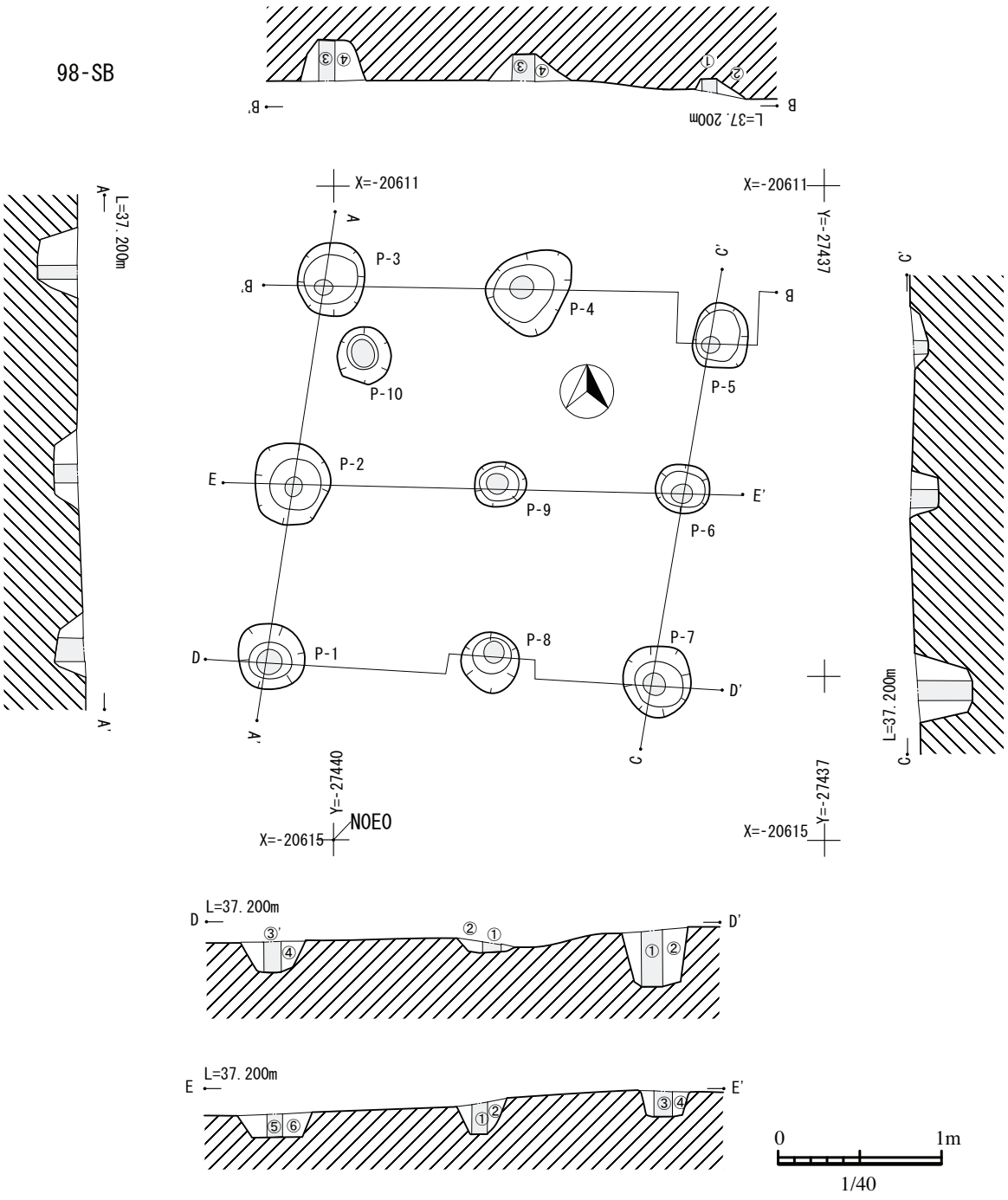
図32 2区134a-SK 遺物出土状況平面・断面図(1/20)



1. 表土（黒灰色土）
2. 砕石
3. 砕石を含む褐灰色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/1
4. 淡褐灰色ｼﾙﾄ 7.5YR 6/1
5. 焼土混褐灰色ｼﾙﾄ 7.5YR 5/2

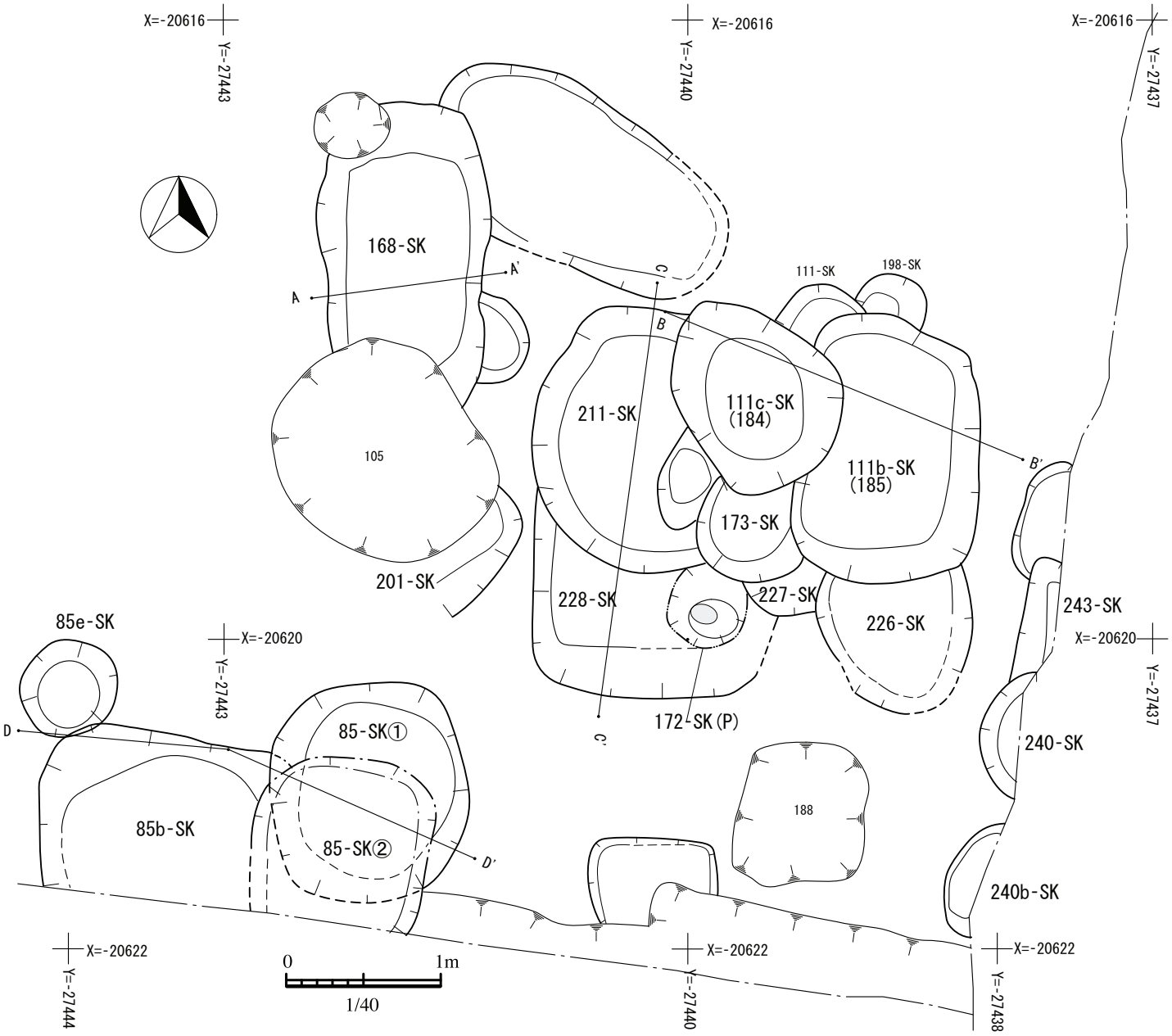
A. 灰褐色ｼﾙﾄ, 焼土を若干含む
B. 褐灰色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2 焼土混
C. 焼土層、褐灰色ｼﾙﾄ

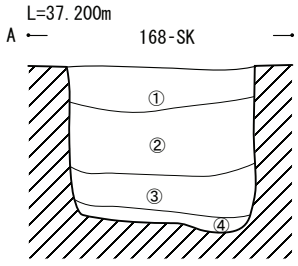
図33 2区134ｂ-SK遺物出土状況平面・断面図(1/20)



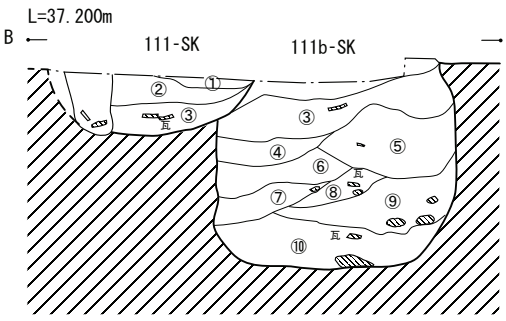
① 灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2 スミ､焼土混
② にぶい褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 5/3 スミ､焼土混
③ 褐灰色ｼﾙﾄ､焼土混
④ 灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2
⑤ 黒褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 3/1
⑥ 黒褐色ｼﾙﾄ混ﾛｰﾑ層
③’褐灰色ｼﾙﾄ混多量のスミ
P-10(136-SP)にかなり多く焼土が混入

図34 2区掘立柱建物(98-SB)平面･断面図(1/40)



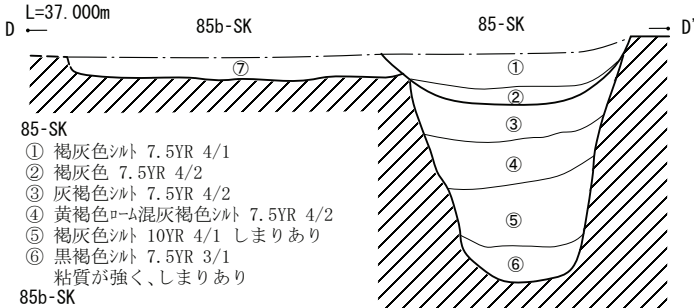


168-SK
① 褐灰色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/1
鉄分あり
② 黄褐色ﾛｰﾑ混褐灰色ｼﾙﾄ
③ 灰褐色粘質土
④ 褐灰色ｼﾙﾄ(やや粘質)



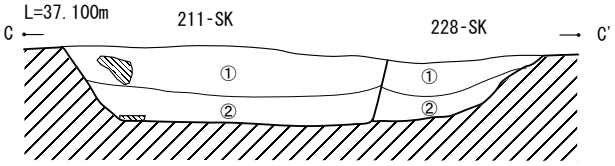
111-SK
① 褐灰色ｼﾙﾄ、
焼土･炭を多く含む
② ﾛｰﾑ混褐灰色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/1
③ 灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2

111b-SK
①
②
③ 褐灰色ﾌﾞﾛｯｸ粘質土 7.5YR 4/1
④ ﾛｰﾑ層に③層混じる
⑤ 褐灰色ｼﾙﾄ
⑥ ﾛｰﾑ層のﾌﾞﾛｯｸの割合が多い
⑦
⑧ 褐灰色ﾌﾞﾛｯｸ粘土、ﾛｰﾑ少し
⑨ 褐灰色粘質土、ﾛｰﾑ･ﾌﾞﾛｯｸ混
⑩ 褐灰色ｼﾙﾄ層、下層やや粘質



85-SK
① 褐灰色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/1
② 褐灰色 7.5YR 4/2
③ 灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2
④ 黄褐色ﾛｰﾑ混灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2
⑤ 褐灰色ｼﾙﾄ 10YR 4/1 しまりあり
⑥ 黒褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 3/1
粘質が強く、しまりあり

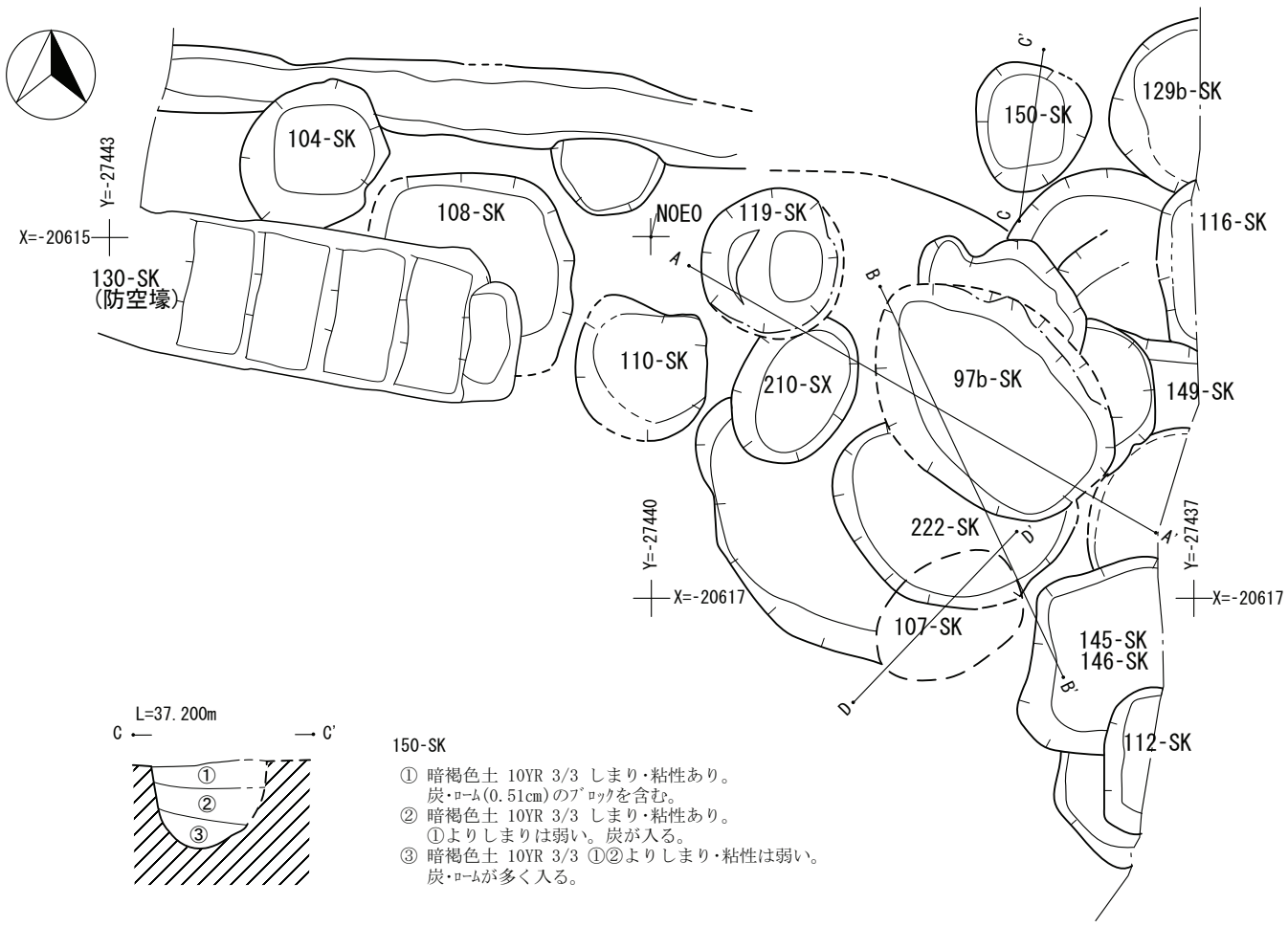
85b-SK
① 黒褐色ｼﾙﾄ(灰色おびる)



211-SK ① 黒褐色 10YR 3/1 110cm大の炭、焼土、ﾛｰﾑ粒が大量入る。
② 暗褐色 10YR 3/4 ﾛｰﾑ粒が大量入る。

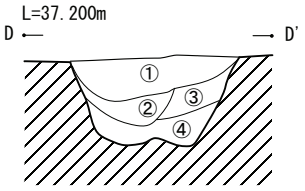
228-SK ① 黒褐色 10YR 2/3 焼土･炭粒が少量入る。
② 暗褐色 10YR 3/3 焼土･ﾛｰﾑ粒が少量入る。

図35 2区168･111c(184)･111b(185)･211･228･172･85b･85-SK 平面･断面図(1/40)



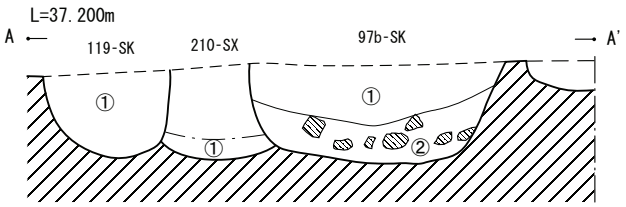
150-SK

① 暗褐色土 10YR 3/3 しまり・粘性あり。
炭・ローム(0.51cm)のブロックを含む。
② 暗褐色土 10YR 3/3 しまり・粘性あり。
①よりしまりは弱い。炭が入る。
③ 暗褐色土 10YR 3/3 ①②よりしまり・粘性は弱い。
炭・ロームが多く入る。



107-SK

① にぶい褐色シルト 7.5YR 5/3
② 灰褐色シルト 7.5YR 5/2 炭・ローム層混
③ 灰褐色シルト 7.5YR 5/2 凝灰岩の灰色に近い
④ ③に鉄分を多く含む



119-SK

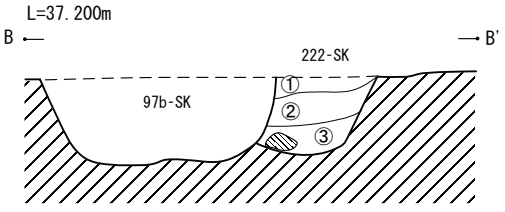
① 灰褐色シルト 7.5YR 4/2

210-SX

① 褐灰色シルト
② 灰褐色シルトよりやや暗い粘質土

97b-SK

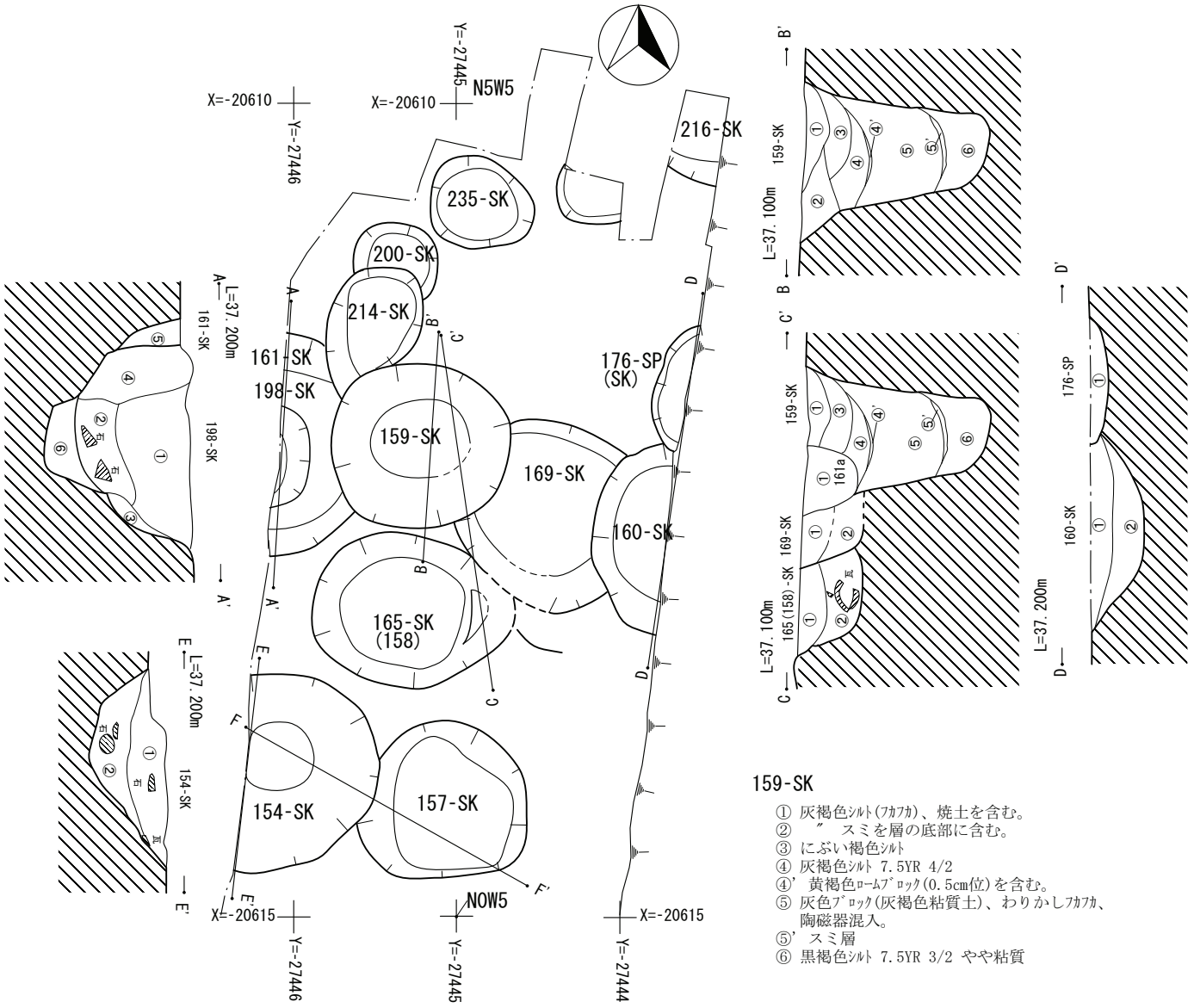
① 褐灰色シルト 7.5YR 4/1
② 灰褐色シルト 7.5YR 4/1 やや粘質



222-SK

① 褐灰色シルト 7.5YR 4/1
② 灰褐色シルト 7.5YR 4/2
③ 褐灰色シルト 7.5YR 4/4

図36 2区97b・119・222・107・150 他-SK・210-SX 平面・断面図(1/40)



198-SK
① 褐灰色ｼﾙﾄ混黄色ﾛｰﾑ(23cm)
② 灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/1
③ 灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2
ほとんどﾛｰﾑﾌﾞﾛｯｸ(23cm)
④ 灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2
ﾛｰﾑﾌﾞﾛｯｸ(23cm)混
161-SK⑤ 灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2
198-SKの下層
⑥ 黄褐色ﾛｰﾑ 7.5YR 4/1 やや粘質

154-SK
① 褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/3
② 黒褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 3/2

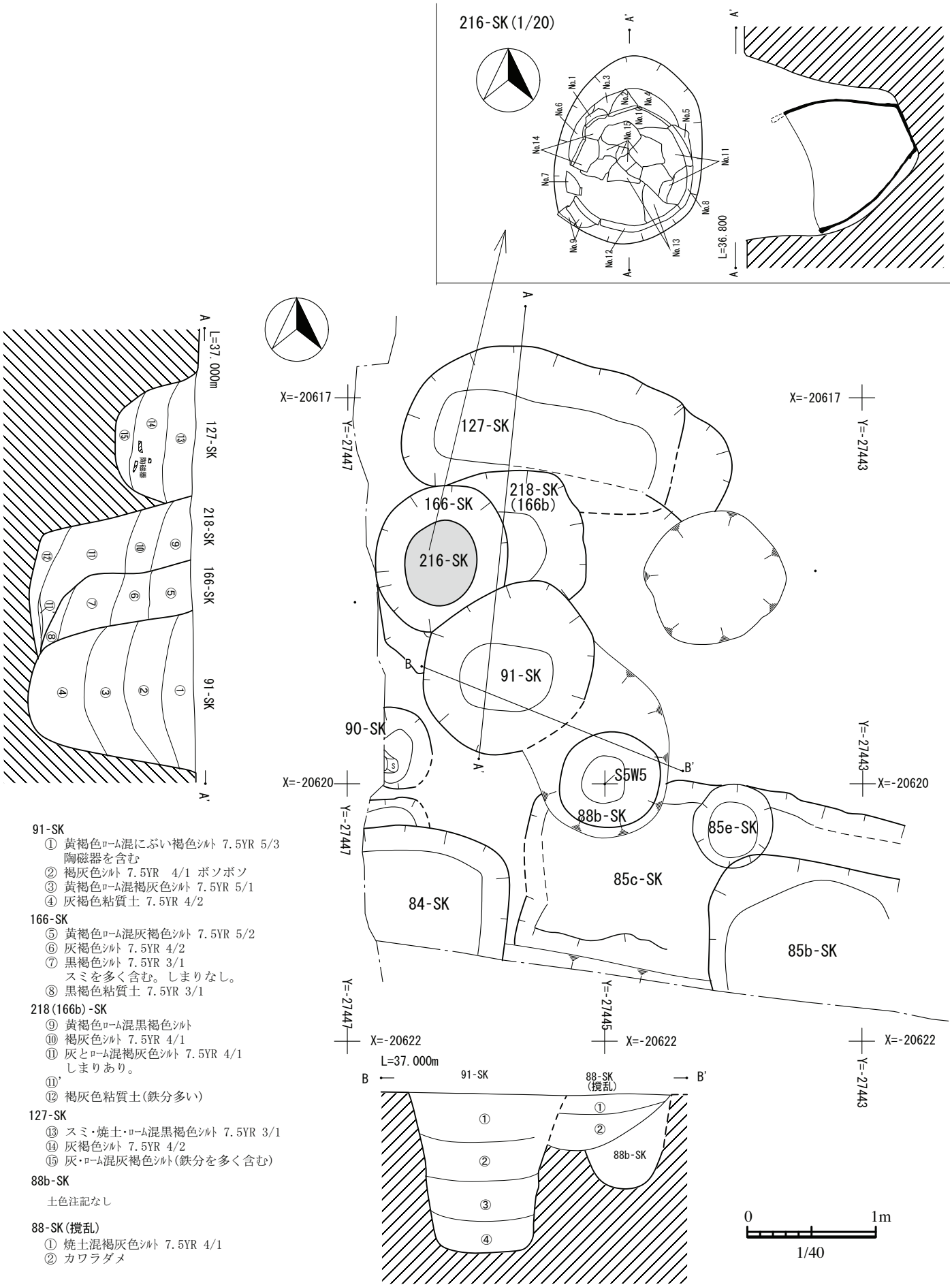
154b-SK
③ 灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2
④ 灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 3/2 ややしまる。

157-SK
① 黄褐色ｼﾙﾄ混灰褐色ｼﾙﾄ
② 灰褐色粘質土(水が溜まる)

176-SP
① 褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/1

160-SK
① 焼土混褐灰色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/1
② 灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2

図37 2区198･154･157･159･165(158)･169･160-SK･176-SP 平面･断面図(1/40)



91-SK
① 黄褐色ローム混にぶい褐色シルト 7.5YR 5/3
陶磁器を含む
② 褐灰色シルト 7.5YR 4/1 ボソボソ
③ 黄褐色ローム混褐灰色シルト 7.5YR 5/1
④ 灰褐色粘質土 7.5YR 4/2

166-SK
⑤ 黄褐色ローム混灰褐色シルト 7.5YR 5/2
⑥ 灰褐色シルト 7.5YR 4/2
⑦ 黒褐色シルト 7.5YR 3/1
スミを多く含む。しまりなし。
⑧ 黒褐色粘質土 7.5YR 3/1

218(166b)-SK
⑨ 黄褐色ローム混黒褐色シルト
⑩ 褐灰色シルト 7.5YR 4/1
⑪ 灰とローム混褐灰色シルト 7.5YR 4/1
しまりあり。
⑪'
⑫ 褐灰色粘質土(鉄分多い)

127-SK
⑬ スミ・焼土・ローム混黒褐色シルト 7.5YR 3/1
⑭ 灰褐色シルト 7.5YR 4/2
⑮ 灰・ローム混灰褐色シルト(鉄分を多く含む)

88b-SK
土色注記なし

88-SK(撹乱)
① 焼土混褐灰色シルト 7.5YR 4/1
② カワラダメ

図38 2区216・127・218(166b)・166・91・88b・90・84・85(b・c・e)-SK平面・断面図(1/20)(1/40)

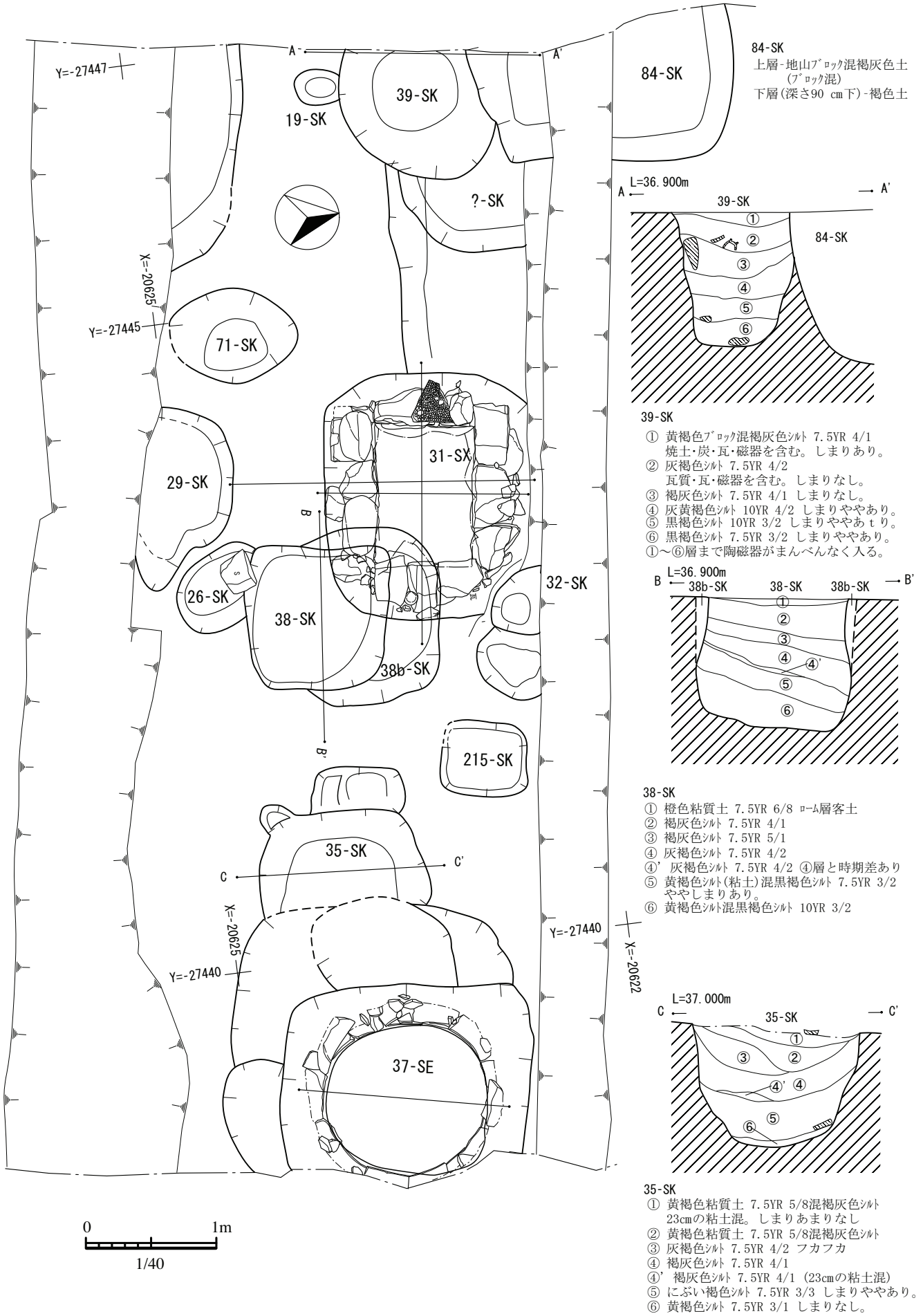


図39 2区39･38･38b･35-SK他 平面･断面図(1/40)

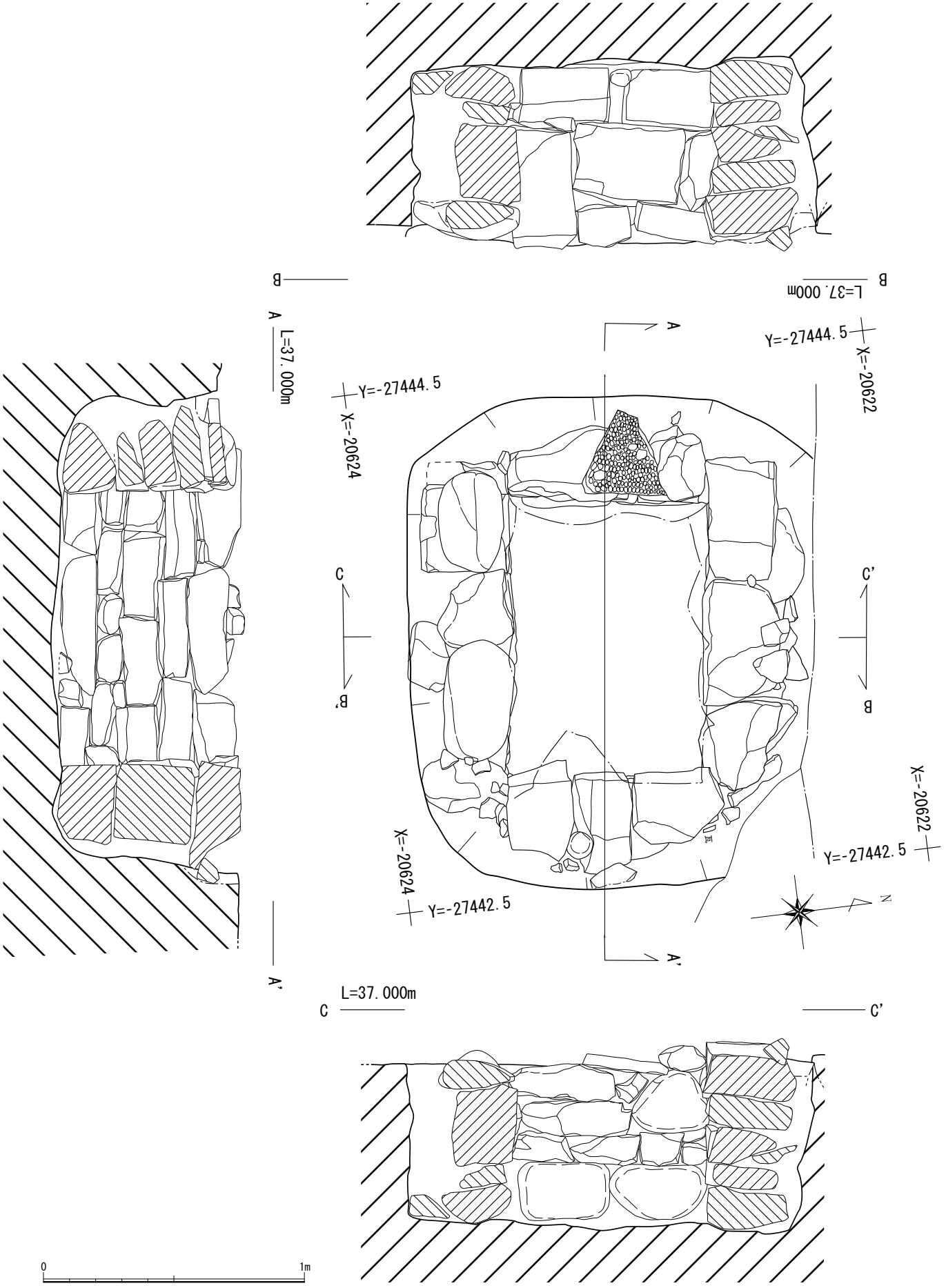


図40 2区31-SX 平面・断面図(1/20)

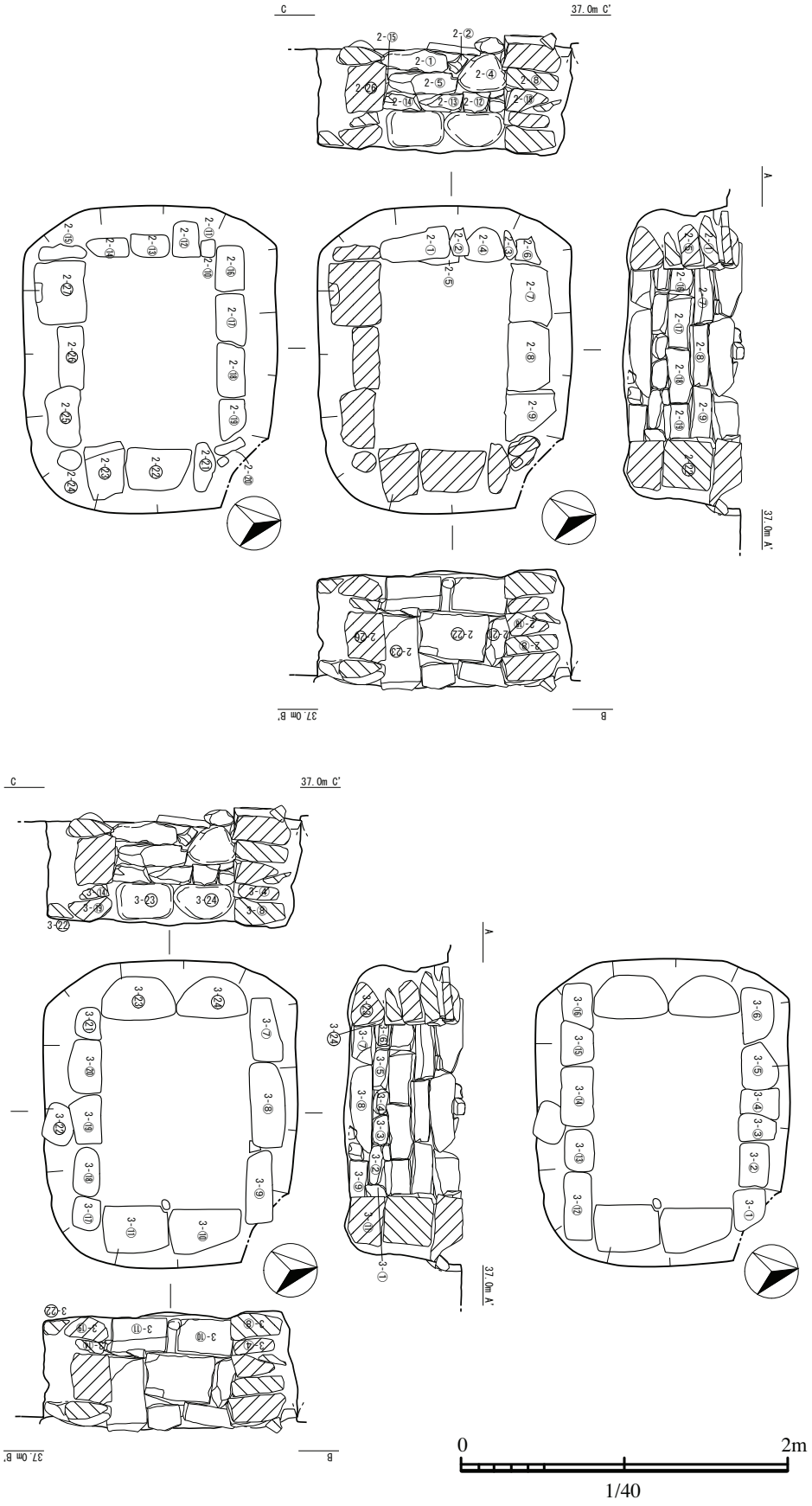


図41 2区31-SX石組展開図(1/40)

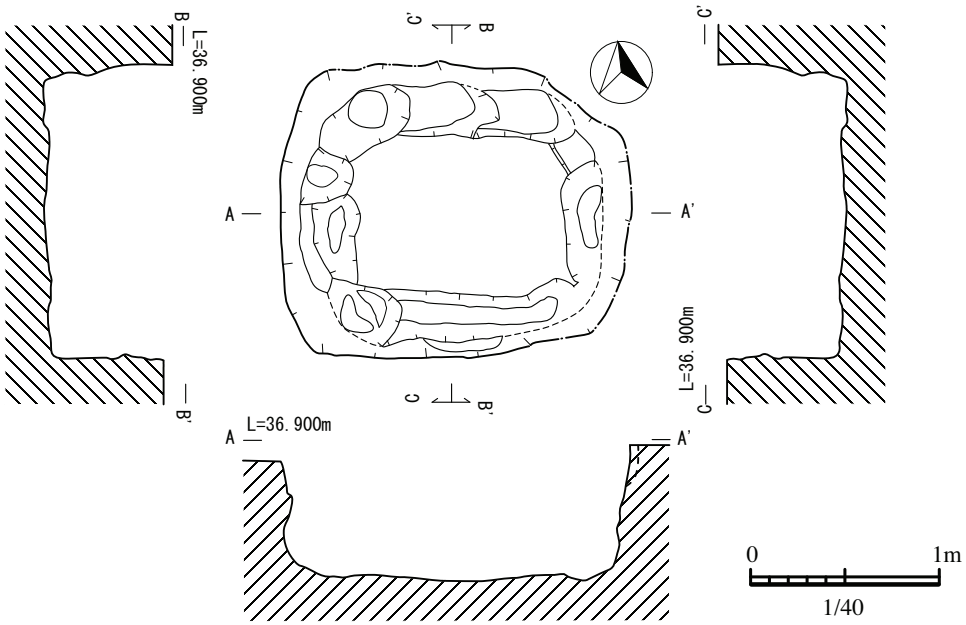


図42 2区31-SX 完掘状況(1/40)

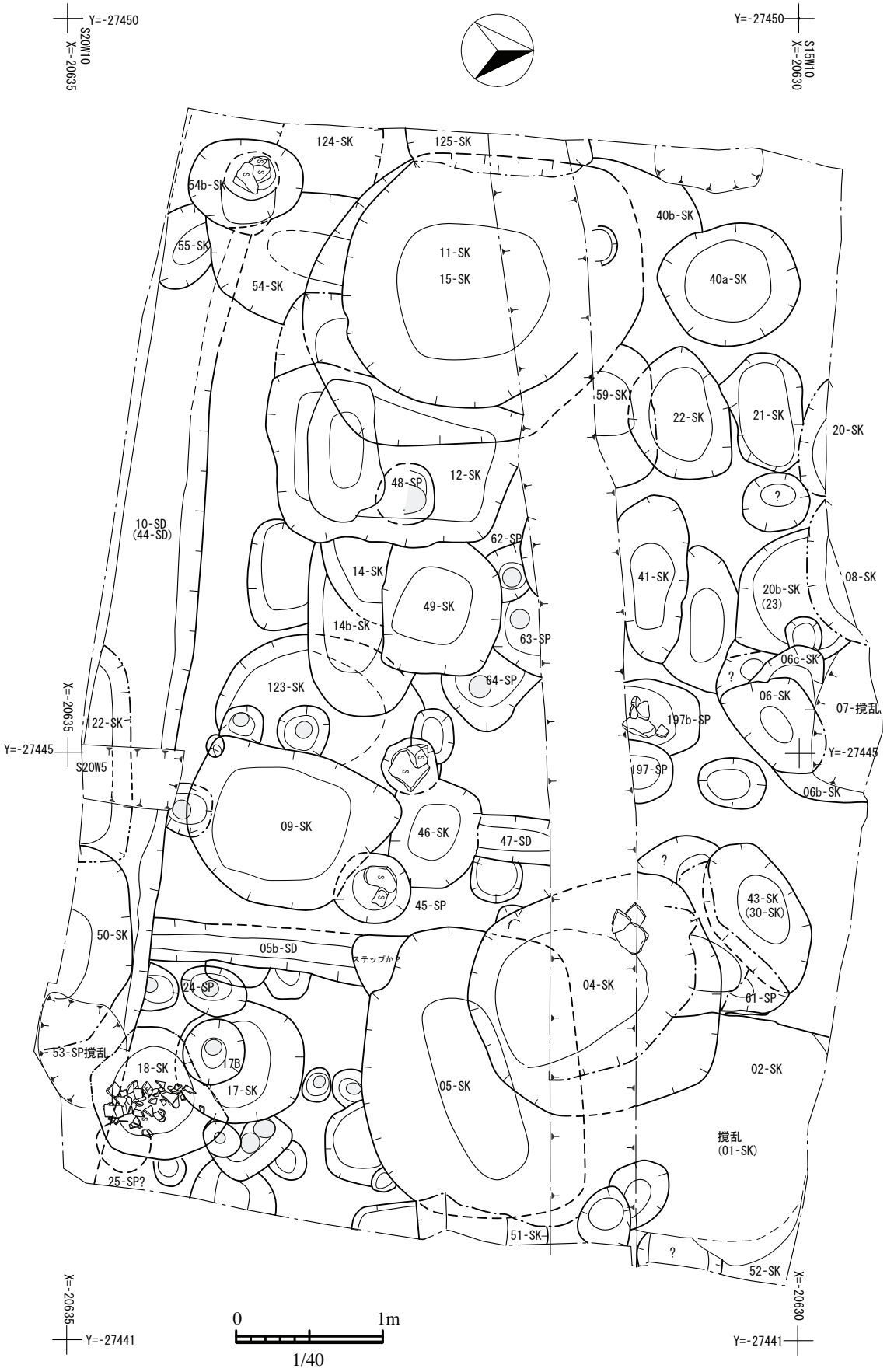


図43 1区遺構配置図(1/40)

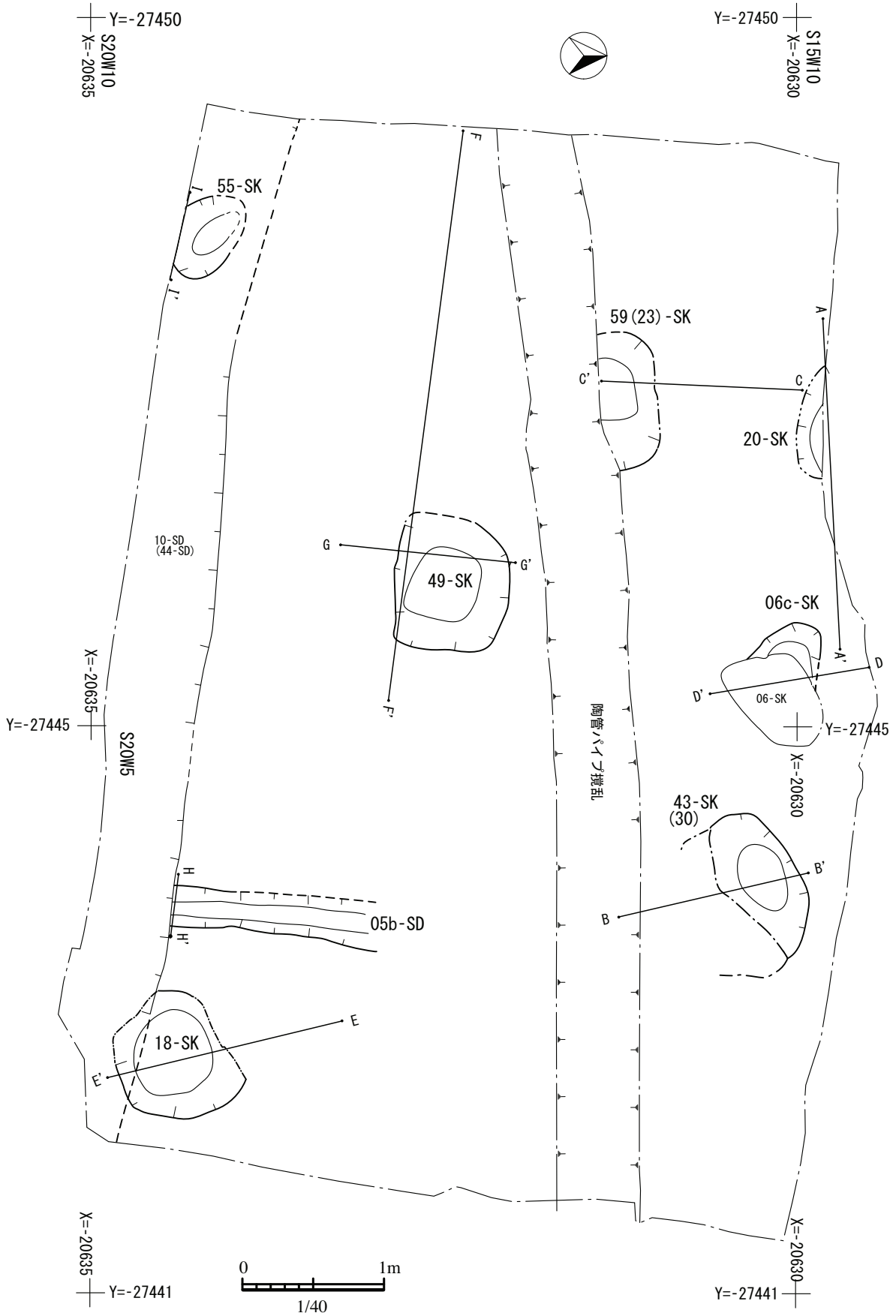
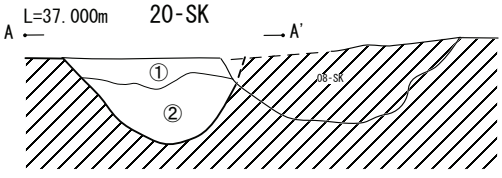
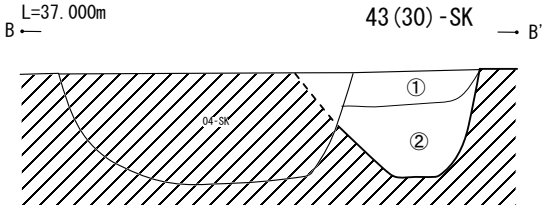


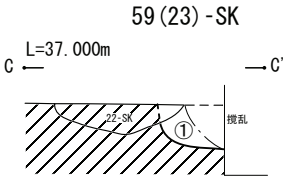
図44 1区18・55・49・59(23)・20・06c・43(30)-SK、05b-SD平面図(1/40)



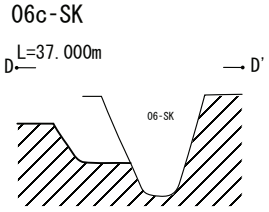
20-SK
① 暗褐色ｼﾙﾄ 10YR 3/2 しまりあり、粘性少しある。
焼土粒(0.5cm大)を少し含む。
② 暗褐色ｼﾙﾄ 10YR 3/4 しまり･粘性あり。



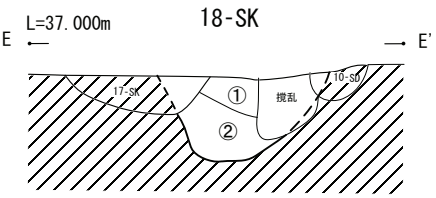
43(30)-SK
① 灰褐色ｼﾙﾄ
② 黒褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 3/2



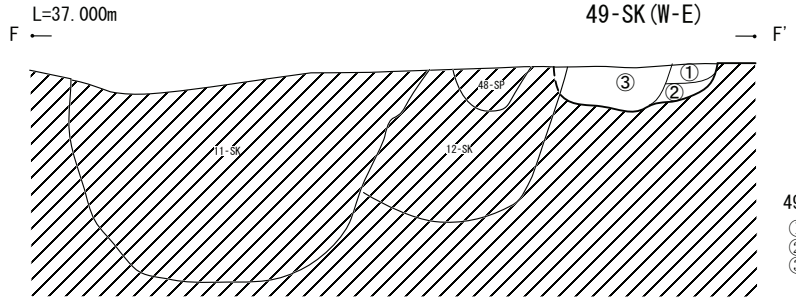
59(23)-SK
① 褐灰色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/1

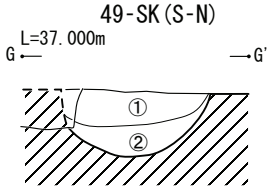


06c-SK
平面図ﾚﾍﾞﾙにより復元の為
土色注記なし

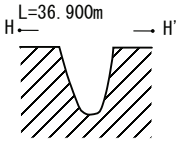


18-SK
① 極暗褐色粘質土 7.5YR 2/3 しまりあり。
0.5cm大の焼土粒が混じる。
② 暗褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 3/4 粘性･しまりあり。
明褐色のﾛｰﾑ層土が多く混じる為粘質が強い。
①②層共に多くの瓦(ほとんど布目)、
少量の炭が混じる。

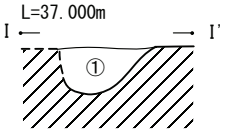




49-SK
① 灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/1
② 黒褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 3/1
③ 暗褐色ｼﾙﾄ 10YR 3/3 しまりあり、
粘性なし。褐色土粒(0.2cm大)を少し含む。



平面図ﾚﾍﾞﾙにより復元の為
土色注記なし



55-SK
① 灰黄褐色ｼﾙﾄ(ﾌﾞﾛｯｸ土) 7.5YR 4/2
スミ混入多い。

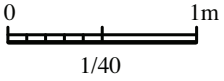


図45 1区 20･43(30)･59(23)･06c･18･49･55-SK､05b-SD断面図(1/40)

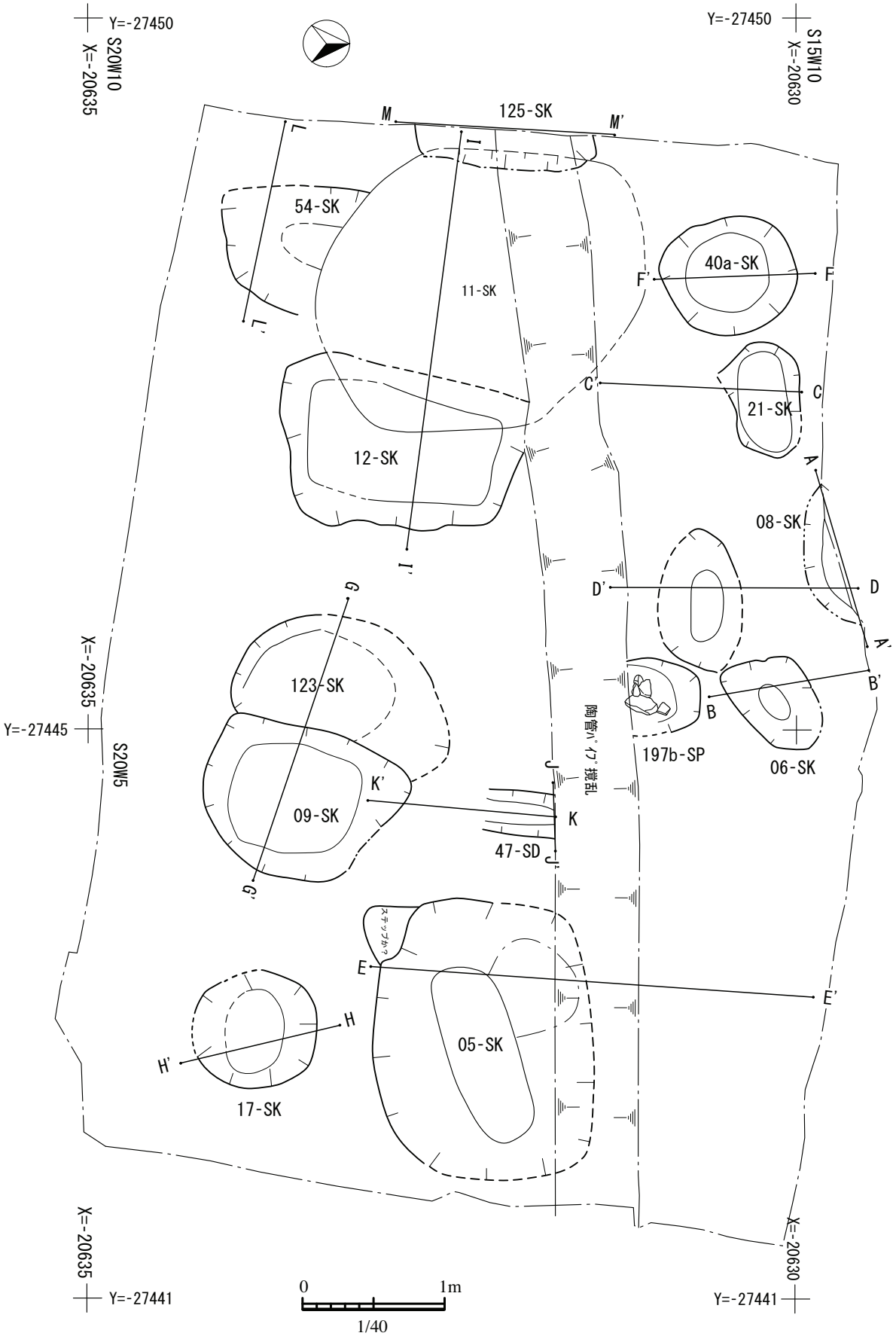
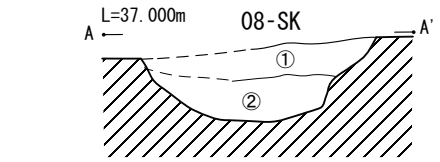
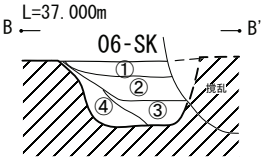


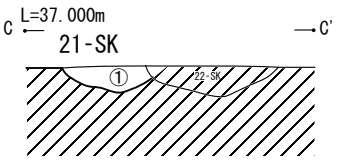
図46 1区17･05･09･123･12･54･06･08･21･40a･125-SK、47-SD、197b-SP平面図(1/40)



08-SK
① 黒褐色ｼﾙﾄ 10YR 3/2 しまり･粘性あり。
焼土粒(0.20.4cm大),炭化物(0.2cm大)を少量含む。
② 黒褐色ｼﾙﾄ 10YR 2/2 しまり･粘性あり。

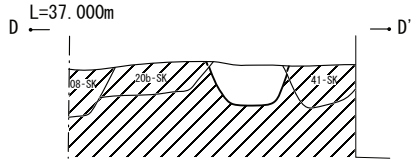


06-SK
① にぶい褐色 7.5YR 6/3 混灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 5/2
ボサボサでしまりなし。
② 褐灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 5/1 ややしまりあり。
③ 褐灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/1 ややしまりなし。
④ 黄褐色粘質ﾌﾞﾛｯｸ(33cm大)混褐灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/1

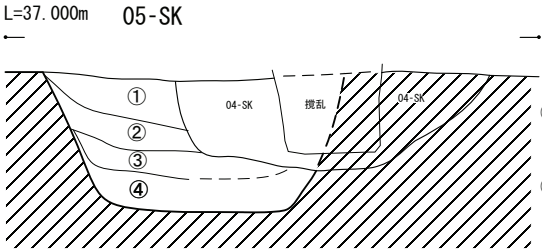


21-SK
① 灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 5/2

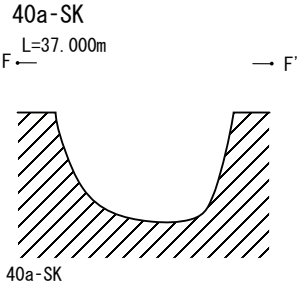
20-SKと41-SKの間の名ﾅｼ遺構



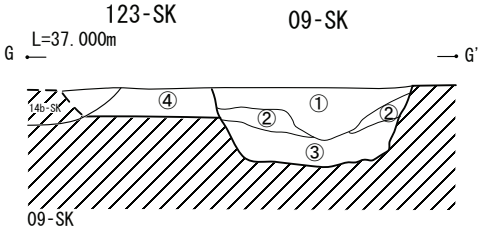
平面図ﾚﾍﾞﾙより復元の為
土層注記なし。



05-SK
① にぶい黄褐色ｼﾙﾄ 10YR 4/3
しまりあり、粘性なし。
下部に明褐色土粒(0.2cm大)
が広がる。
② 黒褐色粘質土 10YR 3/2
しまりよし、粘性強い。
上部に明褐色土粒(0.2cm大)
が広がる。

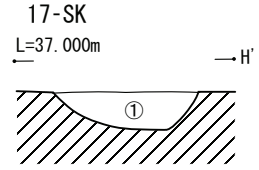


40a-SK

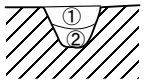


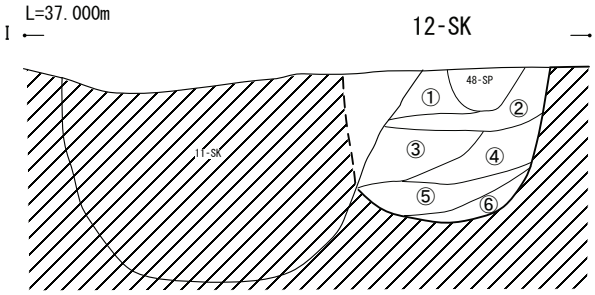
09-SK
① 暗褐色土 10YR 3/3 しまり･粘性あり。
磁器･瓦･スミ片が混じる。
② 黒褐色土 10YR 3/2 しまり･粘性あり。
①層より粘性つよい。下部に瓦･磁器･石が集中
③ 黒褐色土 10YR 3/2 しまり･粘性あり。
①②層より弱い。

123-SK 平面図ﾚﾍﾞﾙより復元の為土層注記なし。

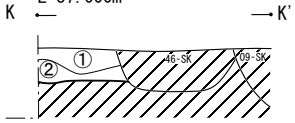


17-SK
① 褐色土 7.5YR 4/6
混黒褐色土 10YR 3/2
しまり･粘性あり。

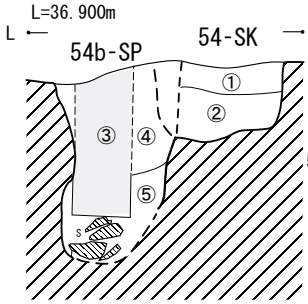




12-SK
① 暗褐色ｼﾙﾄ 10YR 3/3
しまり･粘性あり。黄褐色土混
② 黒褐色ｼﾙﾄ 10YR 3/2
しまり･粘性あり。
③ 灰黄褐色ｼﾙﾄ 10YR 4/2
しまり弱く、粘性あり。
礫(512cm大),瓦を含む。
④ 灰黄褐色ｼﾙﾄ 10YR 4/2
混赤褐色土(鉄分?)が全体に広がる。
⑤ 黒色ｼﾙﾄ 10YR 3/2
しまり弱く、粘性あり。
赤褐色土(鉄分?)が全体に広がる。
⑥ ⑤層よりしまりが弱い。

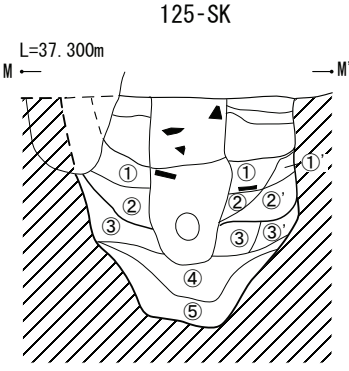


47-SD
① ﾛｰﾑ混褐灰色ｼﾙﾄ
② 褐灰色ｼﾙﾄ しまりあり。



54-SK
① 黄褐色ﾛｰﾑ混灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 5/2
② 灰黄褐色ｼﾙﾄ 10YR 4/2

54b-SP
③ 灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/1
④ 褐灰色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2
⑤ 黄褐色ｼﾙﾄ混灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/3



125-SK
① 黒褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 3/2
しまりあり。
①'
② 暗褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 1/3
ﾌﾞﾛｯｸ土を少し含む。
②'
③ 暗褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 1/3
ﾛｰﾑ層のﾌﾞﾛｯｸ混
③'
④ 暗褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 3/3
ﾛｰﾑ層のﾌﾞﾛｯｸ混
⑤

0 1m
1/40

図47 1区 08･06･21･05･40ａ･123･09･17･12･54･125-SK,47-SD,54b-SP 断面図(1/40)

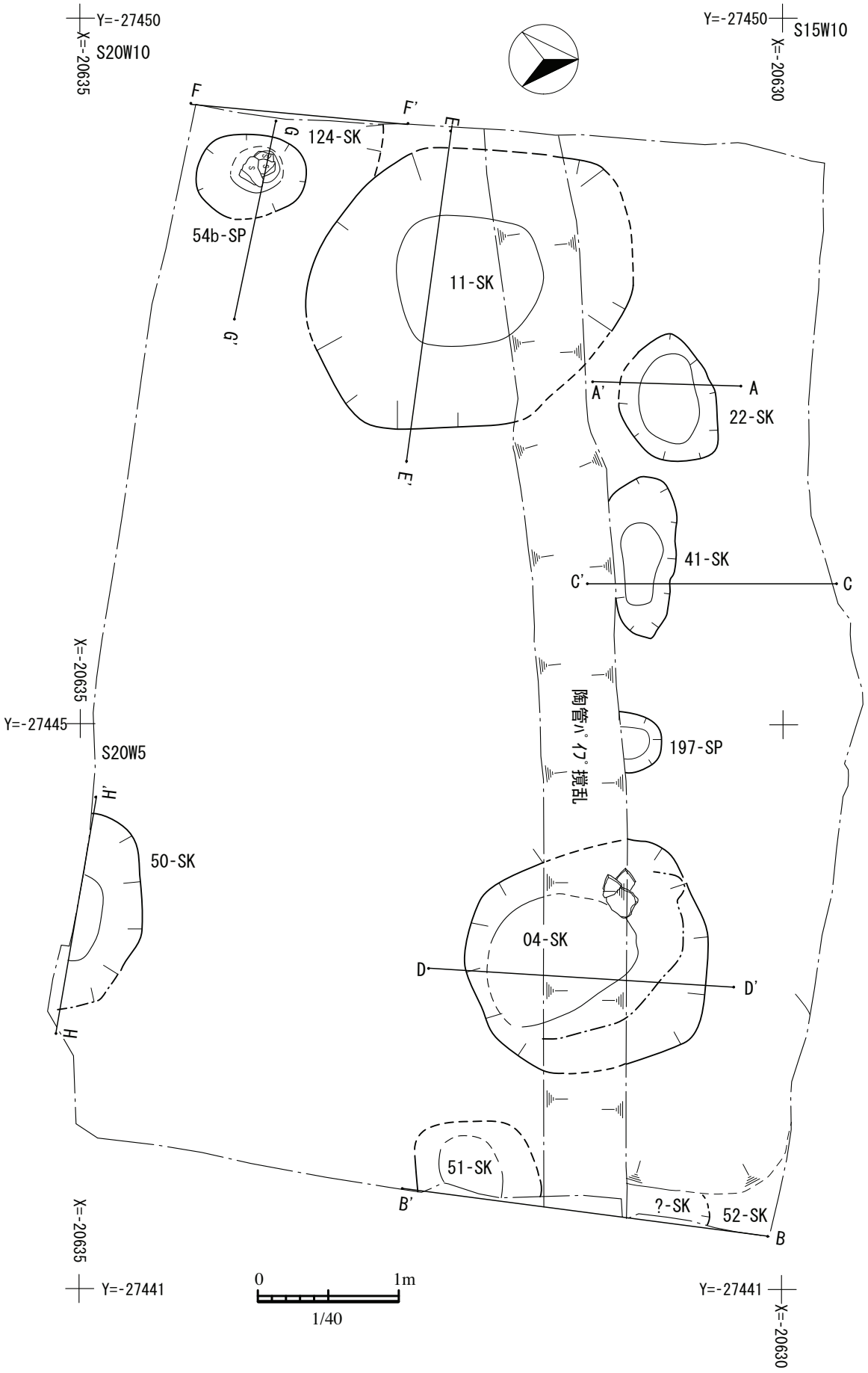
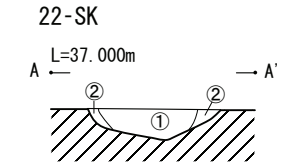
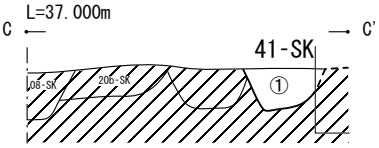


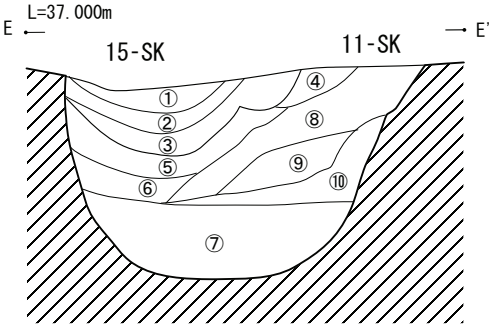
図48 1区 22･52･51･41･04･11･124･50-SK,54b･197-SP平面図(1/40)



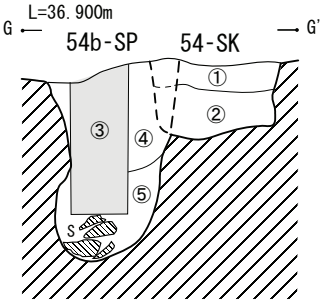
22-SK
① 灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2
② 黄褐色ｼﾙﾄ混灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2



41-SK
平面図ﾚﾍﾞﾙより復元の為
土色注記なし

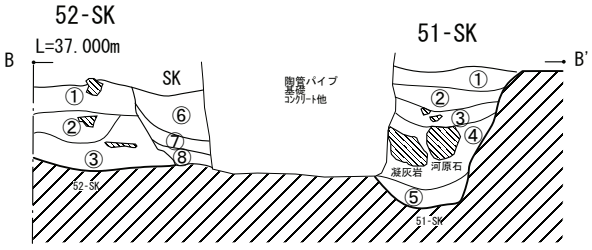


15-SK ① にぶい黄褐色ｼﾙﾄ 10YR 4/3 硬くしまる。
焼土粒(0.2cm大)が全体に広がる。
② 黒褐色ｼﾙﾄ 10YR 3/2 しまり少し弱く、粘性はある。
炭化物ﾌﾞﾛｯｸ(0.5～3.0cm大)を少し含む。
真黒に焼けた土器が出土。
③ 黒褐色ｼﾙﾄ 10YR 3/2 しまり･粘性あり。
焼土粒(0.2cm大)を少し含む。
11-SK ④ 黒褐色ｼﾙﾄ 10YR 3/2 しまりあり、粘性なし。
⑤ 黒褐色ｼﾙﾄ 10YR 2/2 しまり弱い、粘性あり。
炭化物(0.4～1.0cm大)少し含む。
⑥ 黒褐色ｼﾙﾄ 10YR 2/2 しまり弱い、粘性あり。
粘質土ﾌﾞﾛｯｸ混在。
⑦ 黒褐色粘質土 10YR 3/2 しまりあり、粘性強い。
褐色土ﾌﾞﾛｯｸ(4.0～6.0cm大)含む。
⑧ 黒褐色ｼﾙﾄ 10YR 2/2 しまり弱い、粘性あり。
貝殻（あさり?)が上層との境目に捨てられている。
炭化物粒(1cm大) を少し含む。
礫(2.0～5.0cm大)を下層との境目に多く含む。
⑨ 黒褐色粘質土 10YR 3/2 しまりあり、粘性強い。
炭化物粒(0.5～1cm大) を少し含む。
貝殻（あさり?)少し含む。
⑩ 黒褐色ｼﾙﾄ 10YR 3/2 しまり弱い(ボロボロ)、粘性あり。
貝殻(あさり、蛤)少し含む。



54b-SP
③ 灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/1
④ 褐灰色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2
⑤ 黄褐色ｼﾙﾄ混灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/3

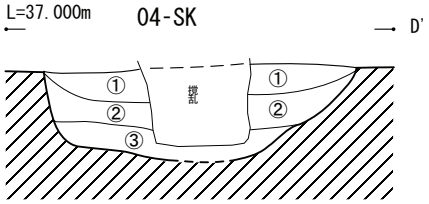
54-SK
① 黄褐色ﾛｰﾑ混灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 5/2
② 灰黄褐色ｼﾙﾄ 10YR 4/2



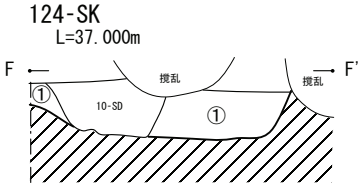
52-SK
① 灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2
②
③

SK
⑥ 灰褐色土
⑦ ﾛｰﾑ土
⑧

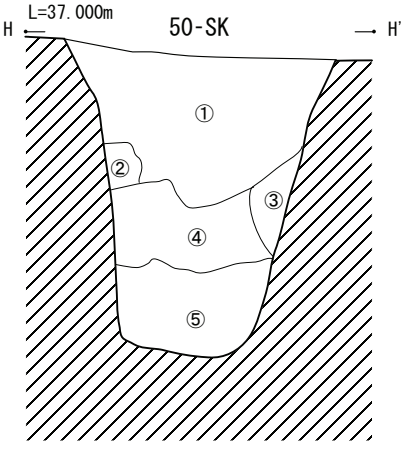
51-SK
① ﾛｰﾑ混灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2
② 凝灰岩崩れ混黒褐色土
③ 褐色ｼﾙﾄ混赤色礫(焼土?) 7.5YR 4/2
④ スミ混灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2
⑤ 黒褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 3/2



04-SK
① 灰黄褐色ｼﾙﾄ 10YR 4/2 しまりあり、粘性なし。
黄褐色土ﾌﾞﾛｯｸ(0.5～3.0cm大)が全体に広がり
、炭化物粒(0.4cm大)を少量含む。
② 黒褐色ｼﾙﾄ 10YR 3/2 しまり少し弱く、粘性なし。
黄褐色土粒(0.2cm大)を少し
赤褐色鉄分粒(0.1cm大)を少量含む。
③ 黒褐色ｼﾙﾄ 10YR 3/2 しまり･粘性あり。
赤褐色鉄分(0.1cm大)が全体に広がる。



124-SK
① 土色注記なし



50-SK
① 褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/3 黄褐色ﾛｰﾑ混
② 褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2
③ 褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2
④ 灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2
⑤ 暗褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 3/3

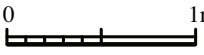


図49 1区22･52･51･41･04･11･124･54･50-SK,54b-SP断面図(1/40)

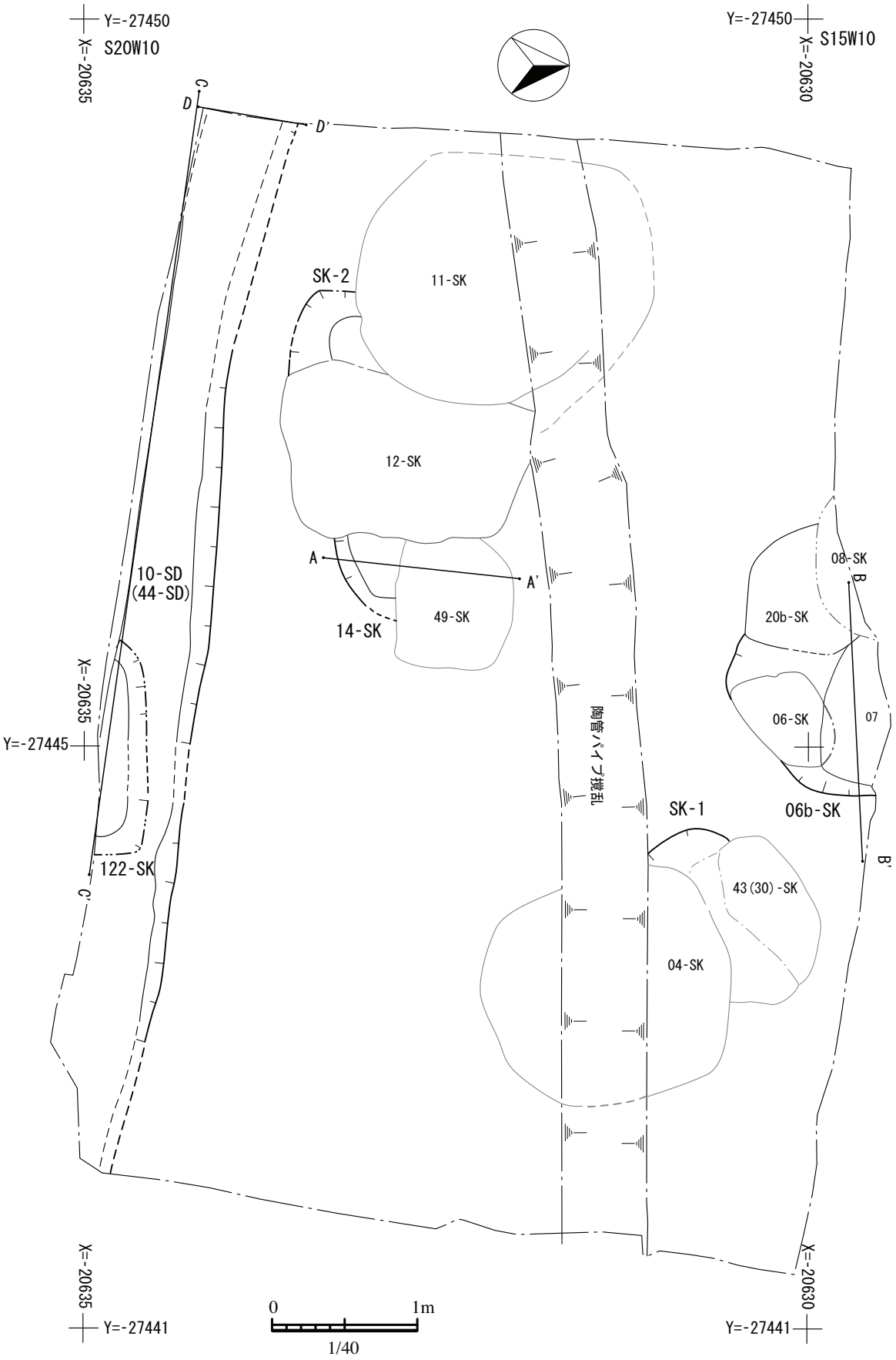


図50 1区14・06b・122-SK,10(44)-SD,その他平面図(1/40)

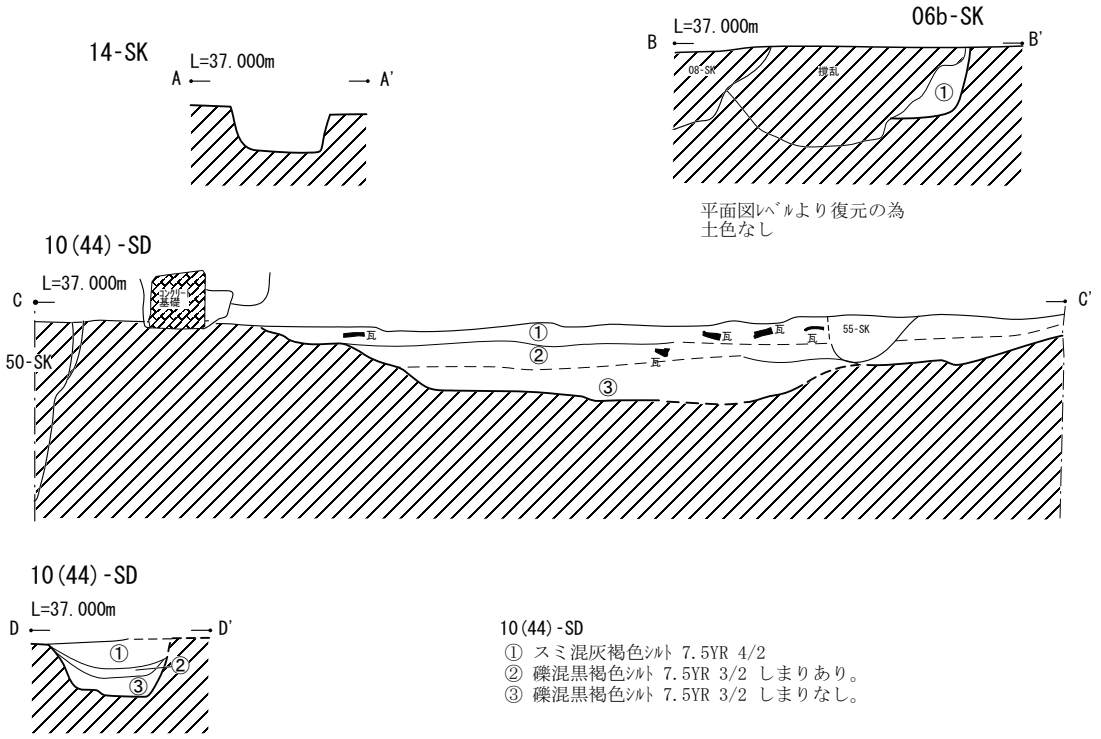
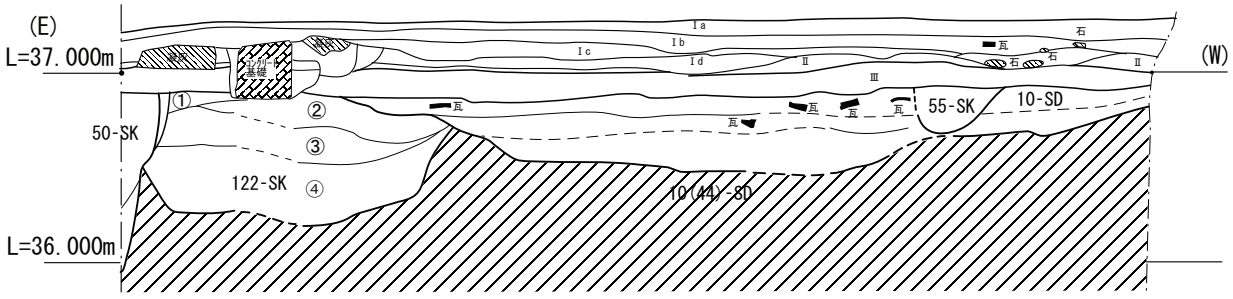


図51 1区14-SK･06b-SK･10(44)-SD断面図(1/40)

1区 南壁土層断面図



122-SK ① 黒褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 3/2 しまりあり。
② 暗褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 3/1 ﾛｰﾑﾌﾞﾛｯｸを少量含む。
③ 暗褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 3/1 ﾛｰﾑﾌﾞﾛｯｸ混
④ 暗褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 3/3 ﾛｰﾑﾌﾞﾛｯｸ(1cm位)を多量含む。

Ⅰa-橙色 7.5YR 7/6
Ⅰb-灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2
Ⅰc-灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 6/2(7.5YR 6/6 ﾛｰﾑ混)
Ⅰd-にぶい褐色ｼﾙﾄ
Ⅱ-黄褐色ﾛｰﾑ混明褐色粘質土 7.5YR 5/6
Ⅲ-褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2 赤色礫混(焼土?)

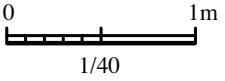


図52 1区122-SK､南壁断面図(1/40)

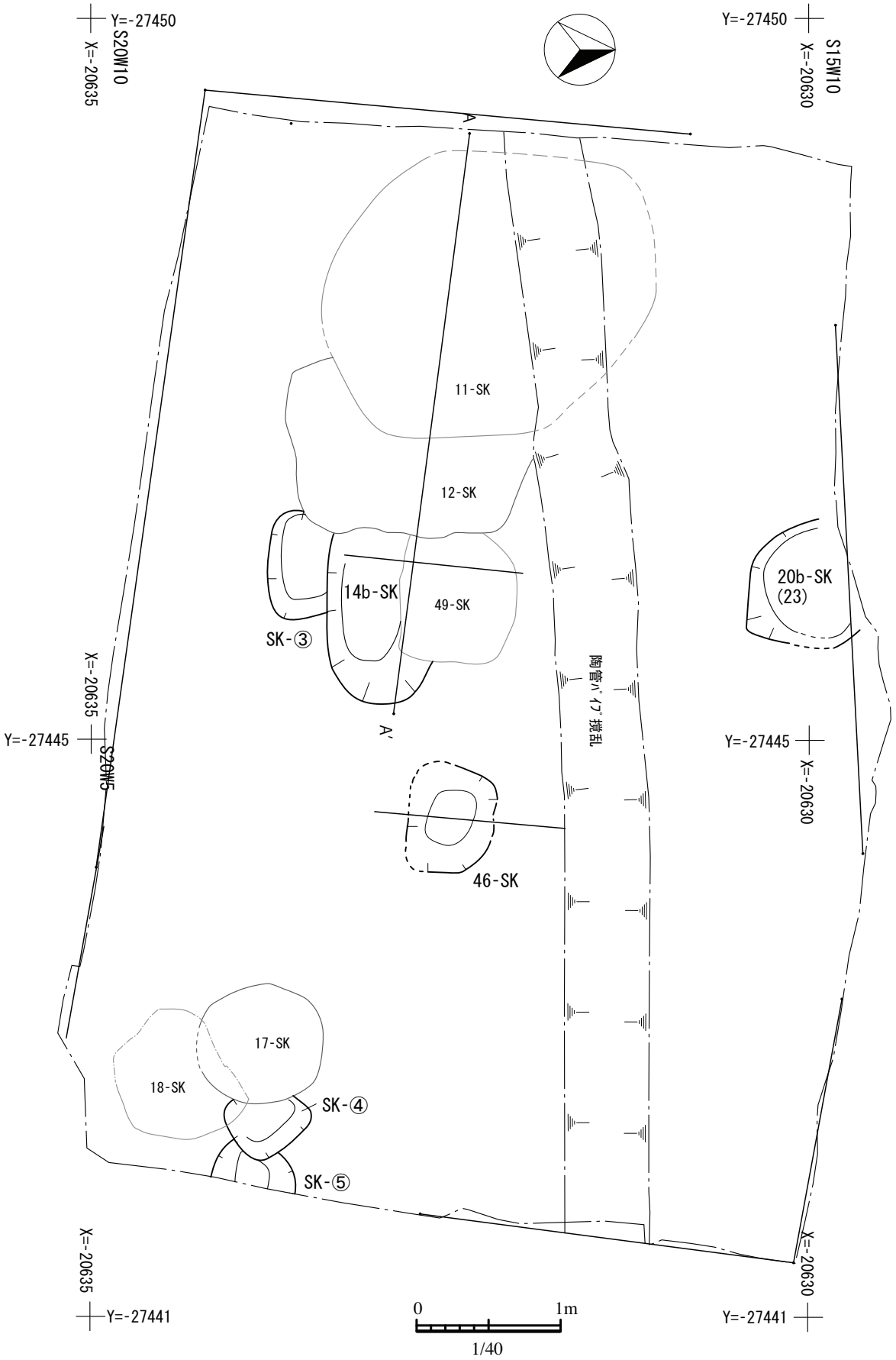


図53 1区14b-SK・20b(23)-SK・46-SK,その他SK平面図(1/40)

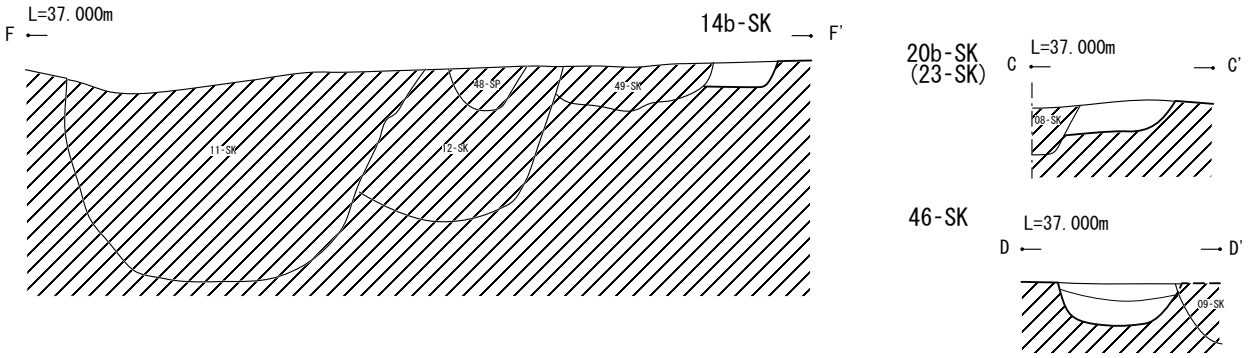
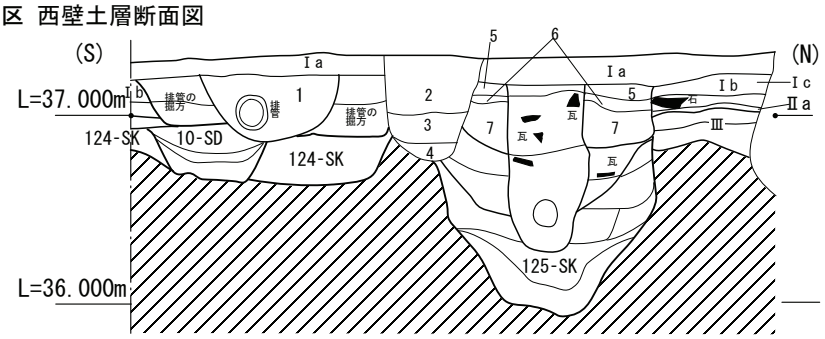


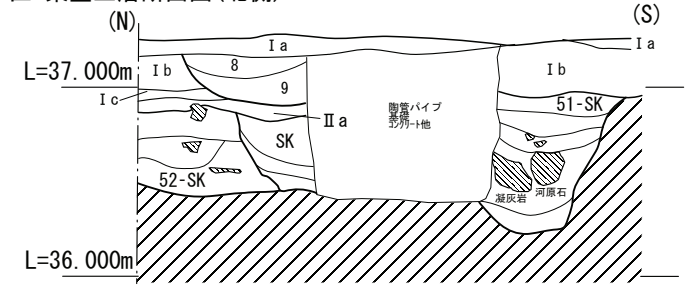
図54 1区14b-SK･20b(23)-SK･46-SK断面図(1/40)

1区 西壁土層断面図



1区 西壁土層断面図
Ⅰa層-橙色 7.5YR 7/6
Ⅰb層-灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2
Ⅰc層-灰色土
Ⅱa層-黄褐色ﾛｰﾑ混明褐色粘質土 7.5YR 5/6
Ⅲ層-褐色ｼﾙﾄ、7.5YR 4/2,赤色礫(焼土も)混
1.灰黄褐色ｼﾙﾄ
2.山砂
3.淡茶褐色土
4.砕石(灰色)
5.ﾌｶﾌｶの灰黄褐色土
6.ﾌｶﾌｶの灰褐色土
7.
遺構埋土に関しては、個別ﾚｲｱｳﾄに記載

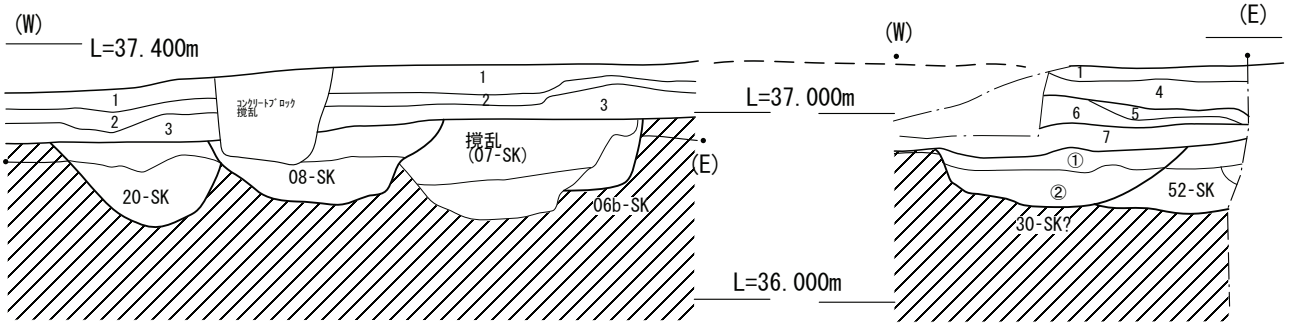
1区 東壁土層断面図(北側)



1区 東壁土層断面図(北側)
Ⅰa層-橙色 7.5YR 7/6
Ⅰb層-灰褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 4/2
Ⅰc層-灰色土
Ⅱa層-黄褐色ﾛｰﾑ混明褐色粘質土 7.5YR 5/6
8.ﾛｰﾑ混スミ層
9.暗茶褐色ｼﾙﾄ
遺構埋土に関しては、個別ﾚｲｱｳﾄに記載

1区 北壁土層断面図(西側)

1区 北壁土層断面図(東側)



1区 北壁土層断面図
1.表土-山砂
2.床土-明赤褐色土 5YR 5/6
3.暗褐色ｼﾙﾄ 10YR 3/3,しまりあり、粘性少しあり、
焼土粒(0.2cm大)少し含む。
4.整地層Ⅰ
6.整地層Ⅱ-黒褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 3/2
7.整地層Ⅲ

30-SK?
①にぶいj褐色ｼﾙﾄ 7.5YR 5/3
②灰褐色土(鉄分)7.5YR 5/2
その他遺構埋土に関しては、個別ﾚｲｱｳﾄに記載

0 1m
1/40

図55 1区西壁面･東壁面･北壁面断面図(1/40)

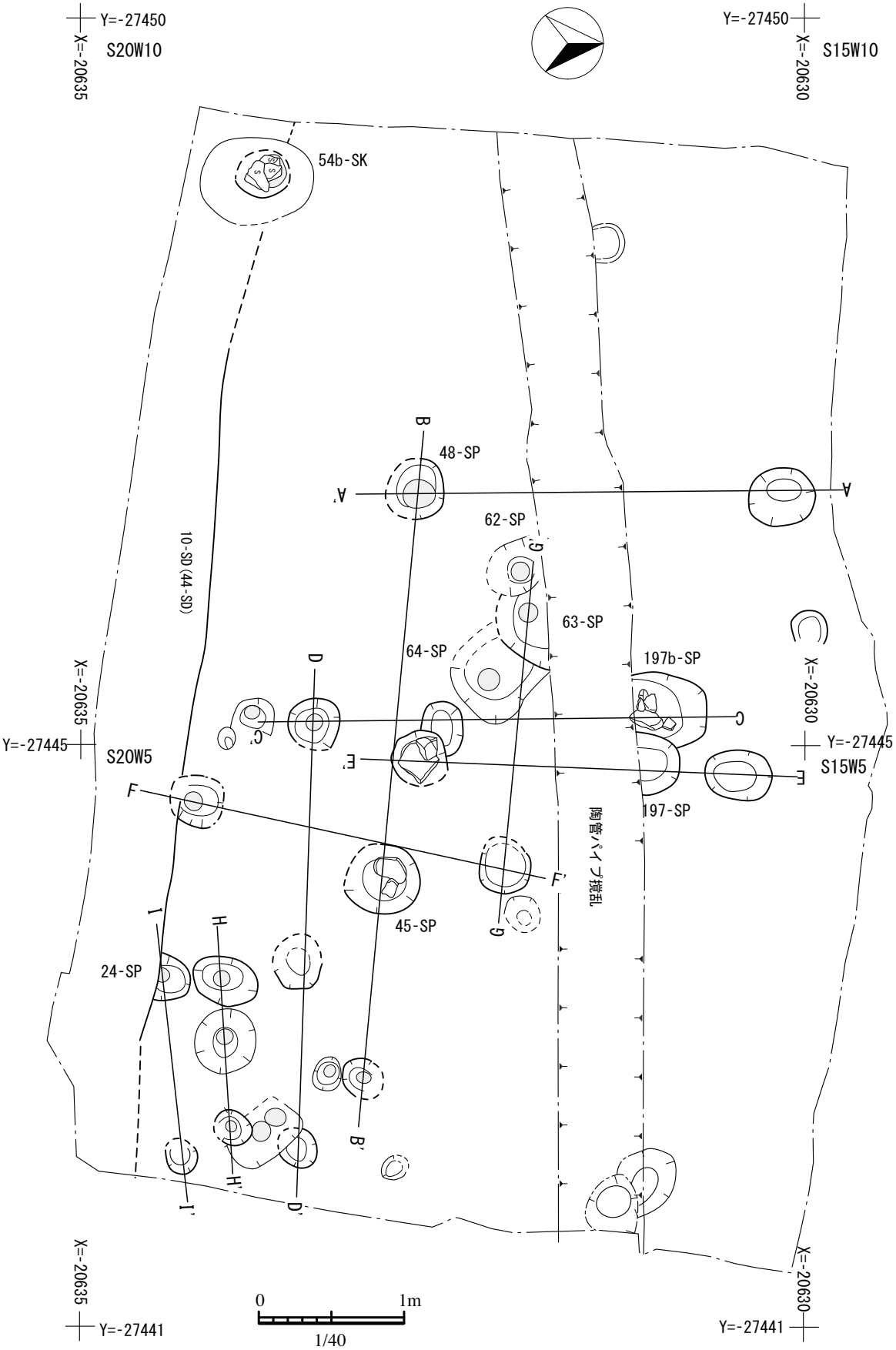


図56 1区Pit群(掘立柱建物)検出状況平面図(1/40)

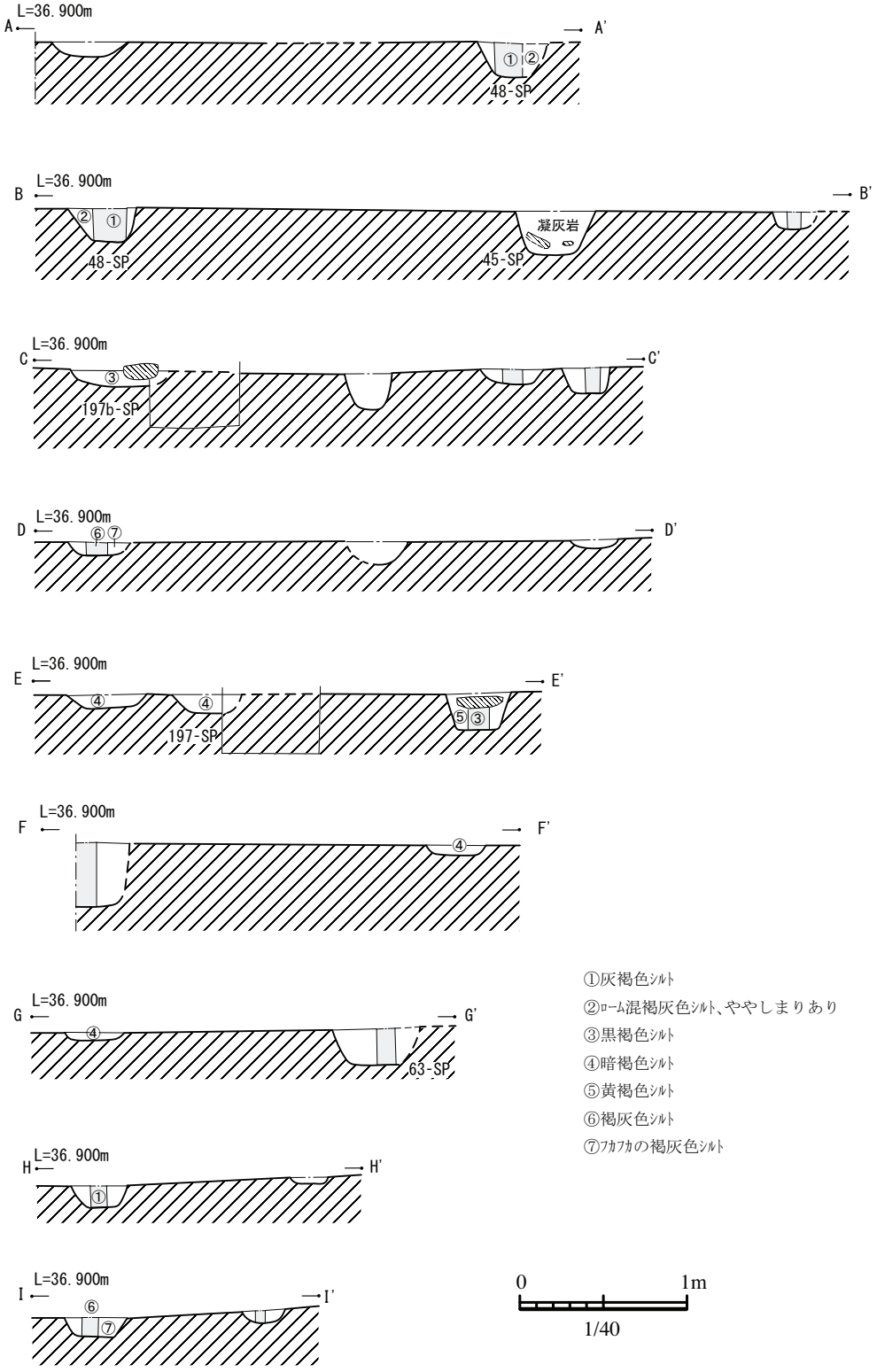


図57 1区Pit群(掘立柱建物)断面図(1/40)

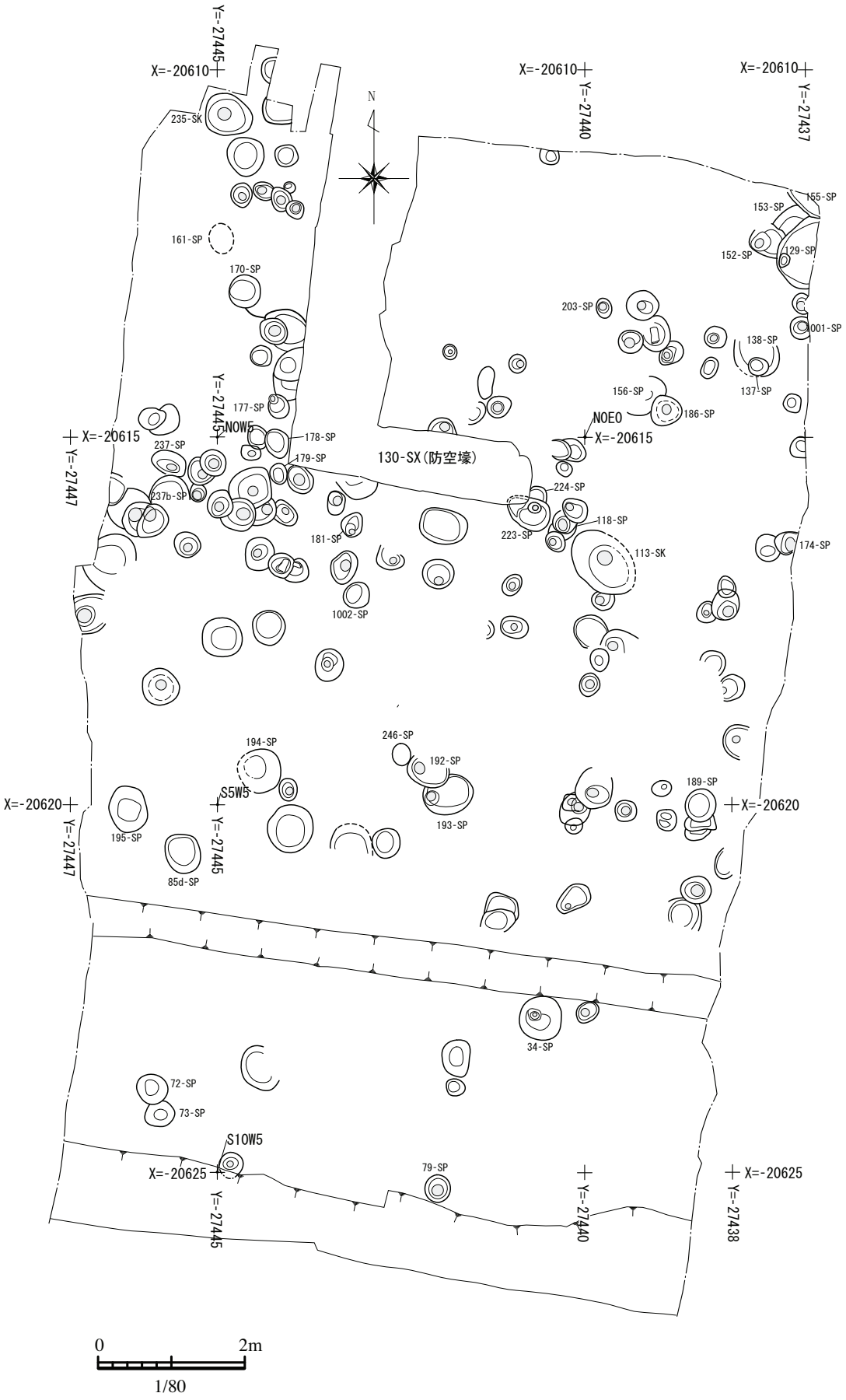


図58 2区Pit検出状況平面図(1/80)

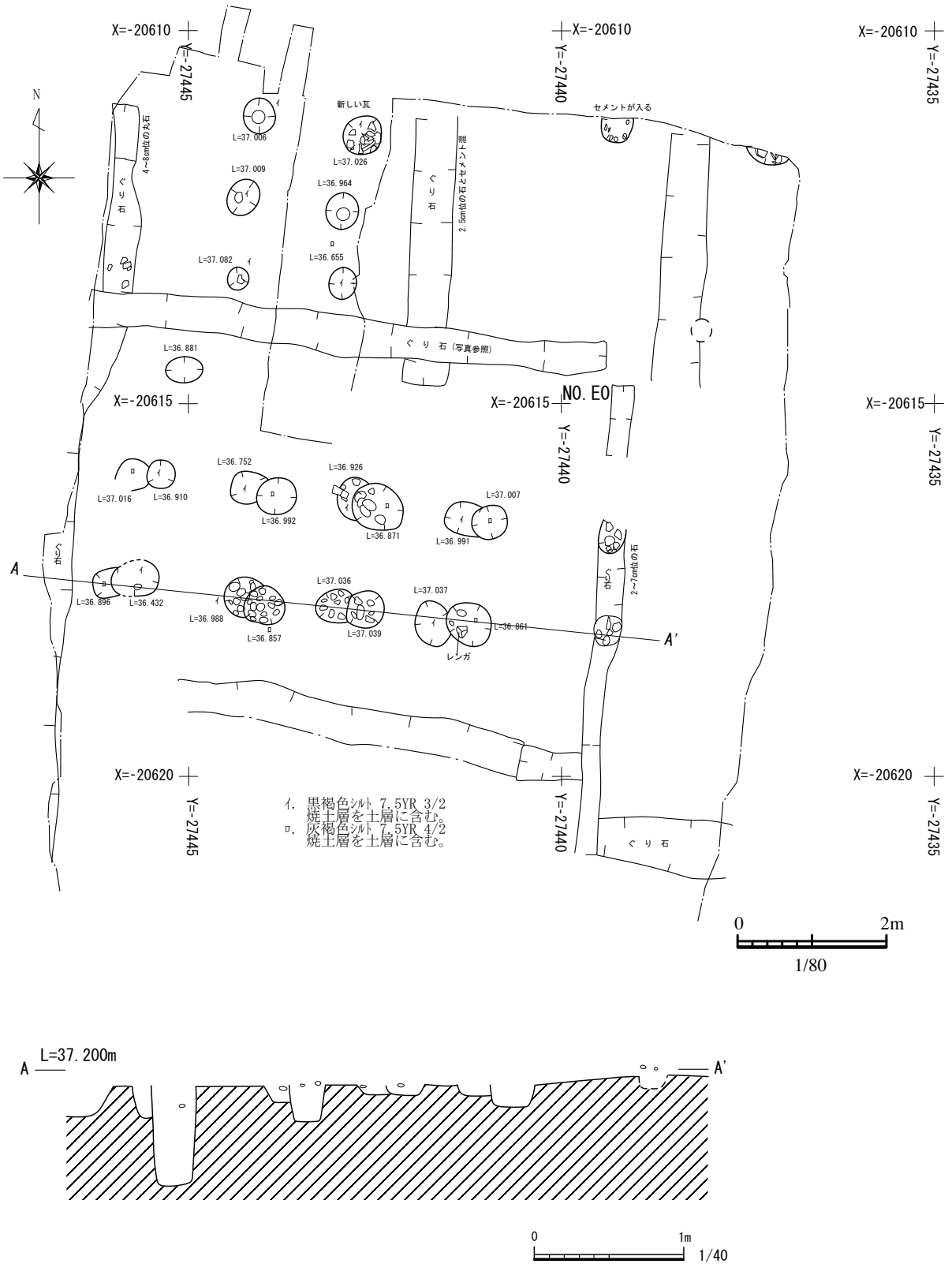


図59 2区ぐり石出土状況(1/80)及び、掘立柱建物(96-SB)断面図(1/40)

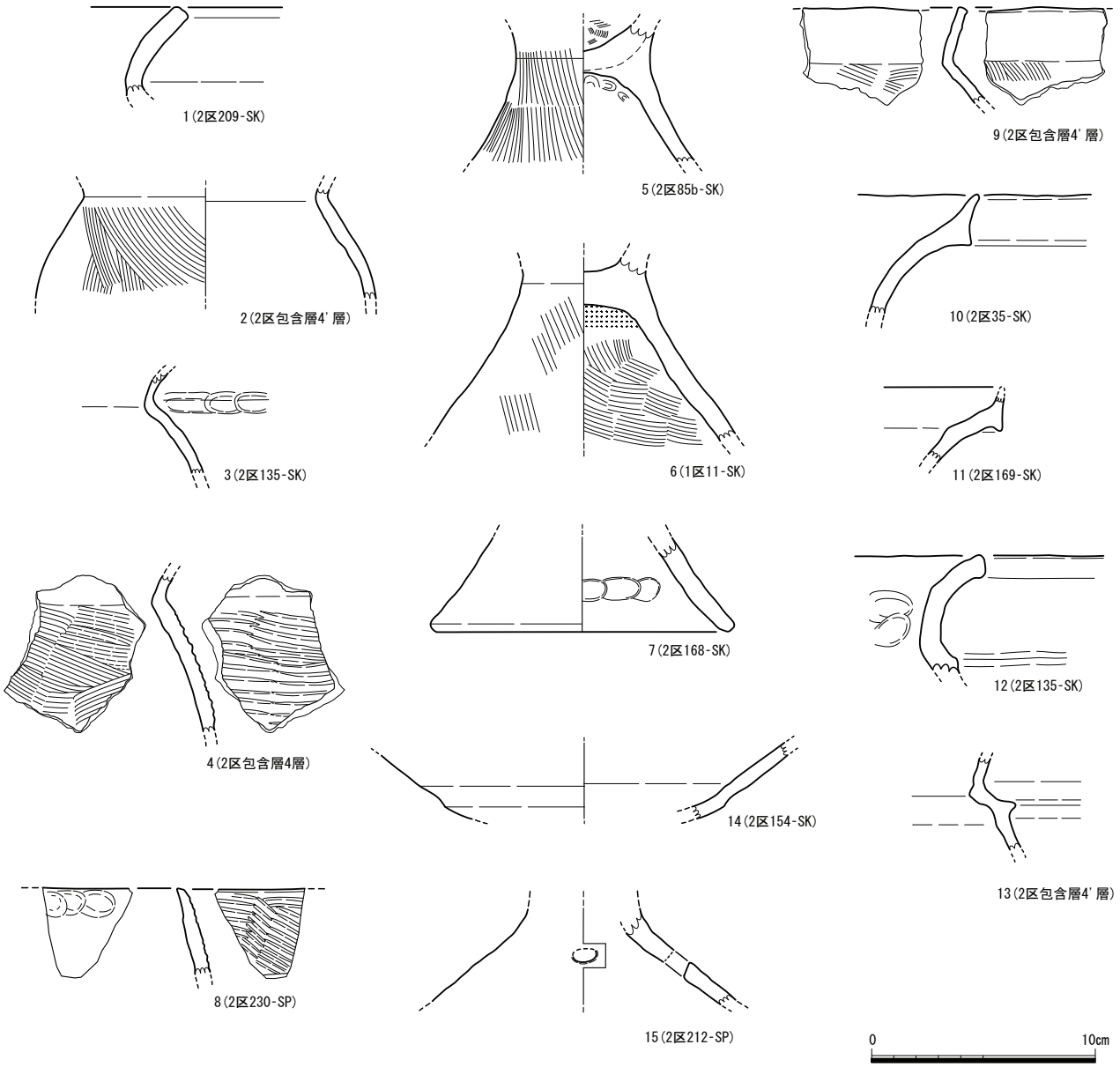


図60 1区･2区出土弥生土器実測図(1/3)

3区柱穴出土土器

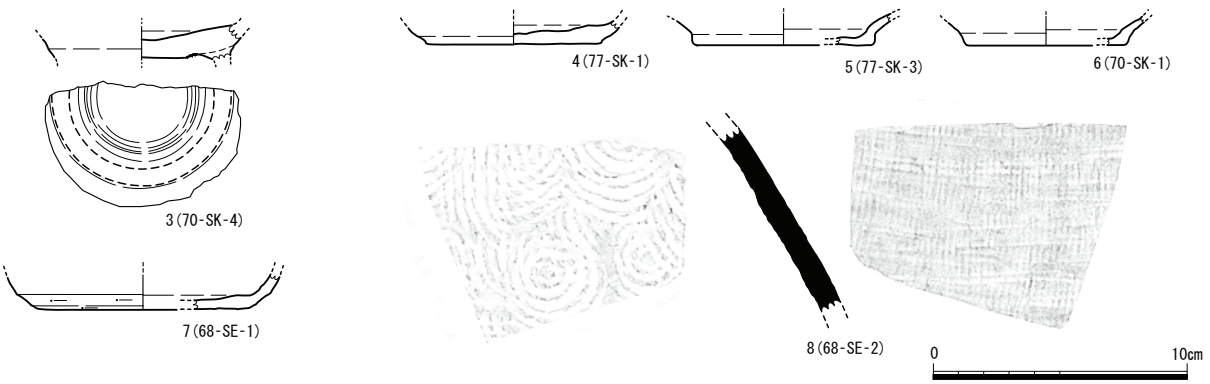


図61 3区近世以降の遺構出土土器実測図 (1/3)

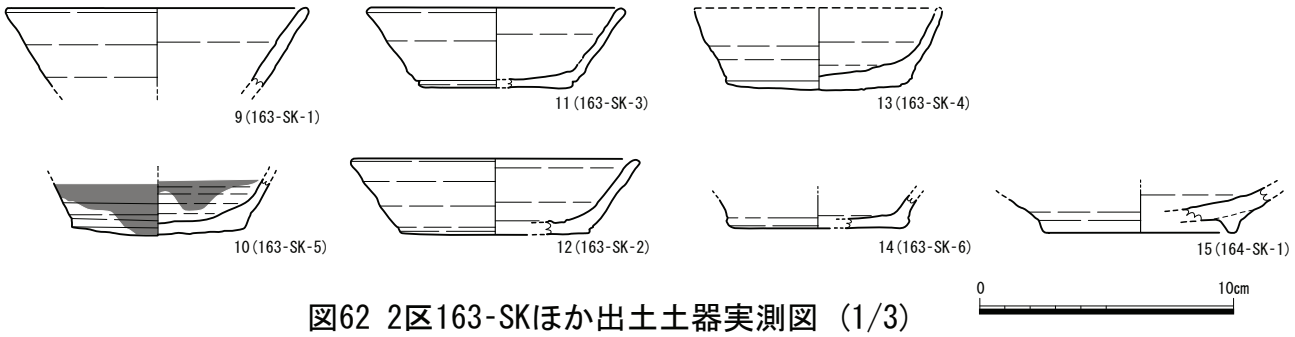


図62 2区163-SKほか出土土器実測図 (1/3)

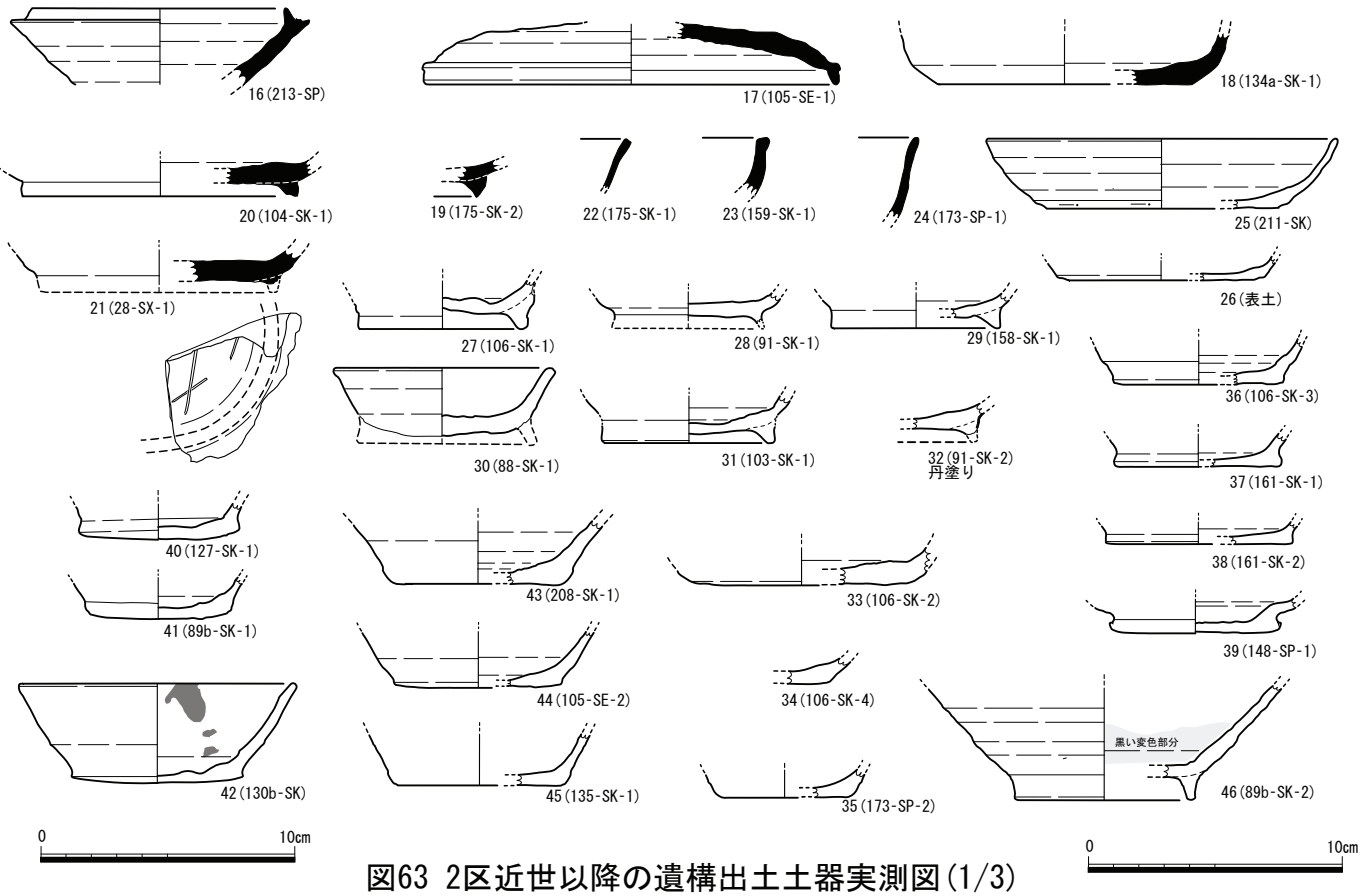


図63 2区近世以降の遺構出土土器実測図(1/3)

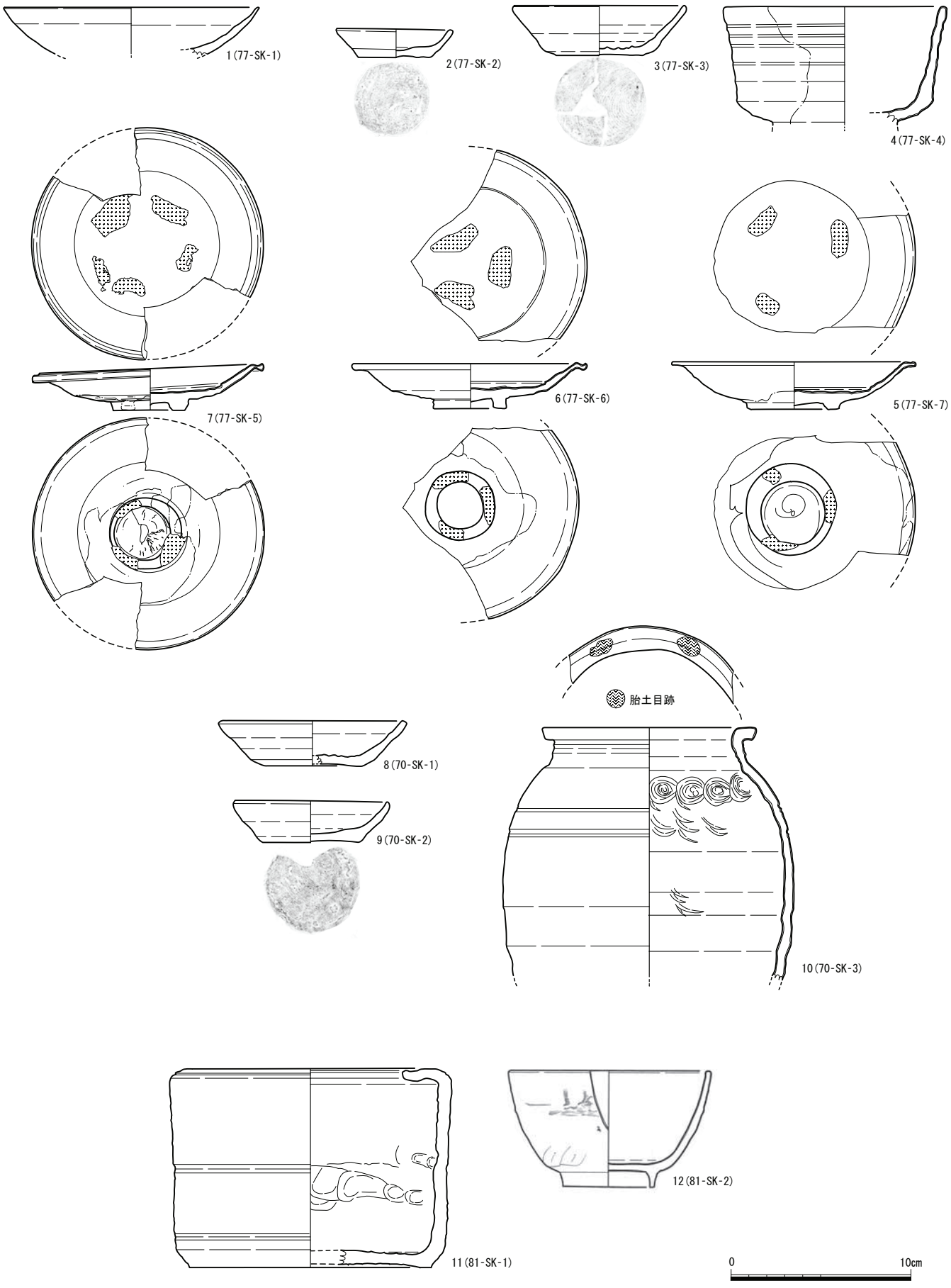


図64 3区77-SK・70-SK・81-SK出土遺物実測図(1/3)

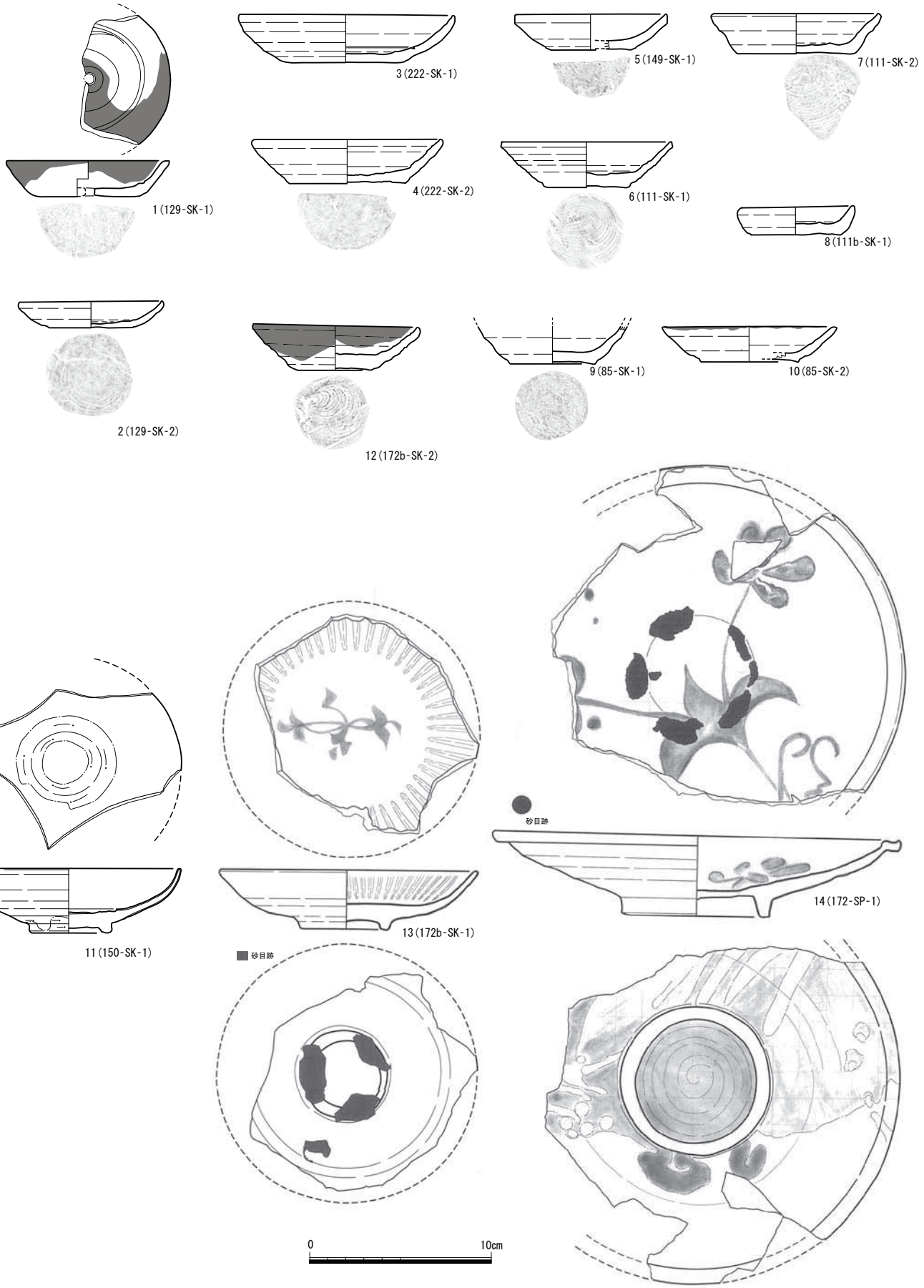


図65 2区出土遺物実測図1(1/3)

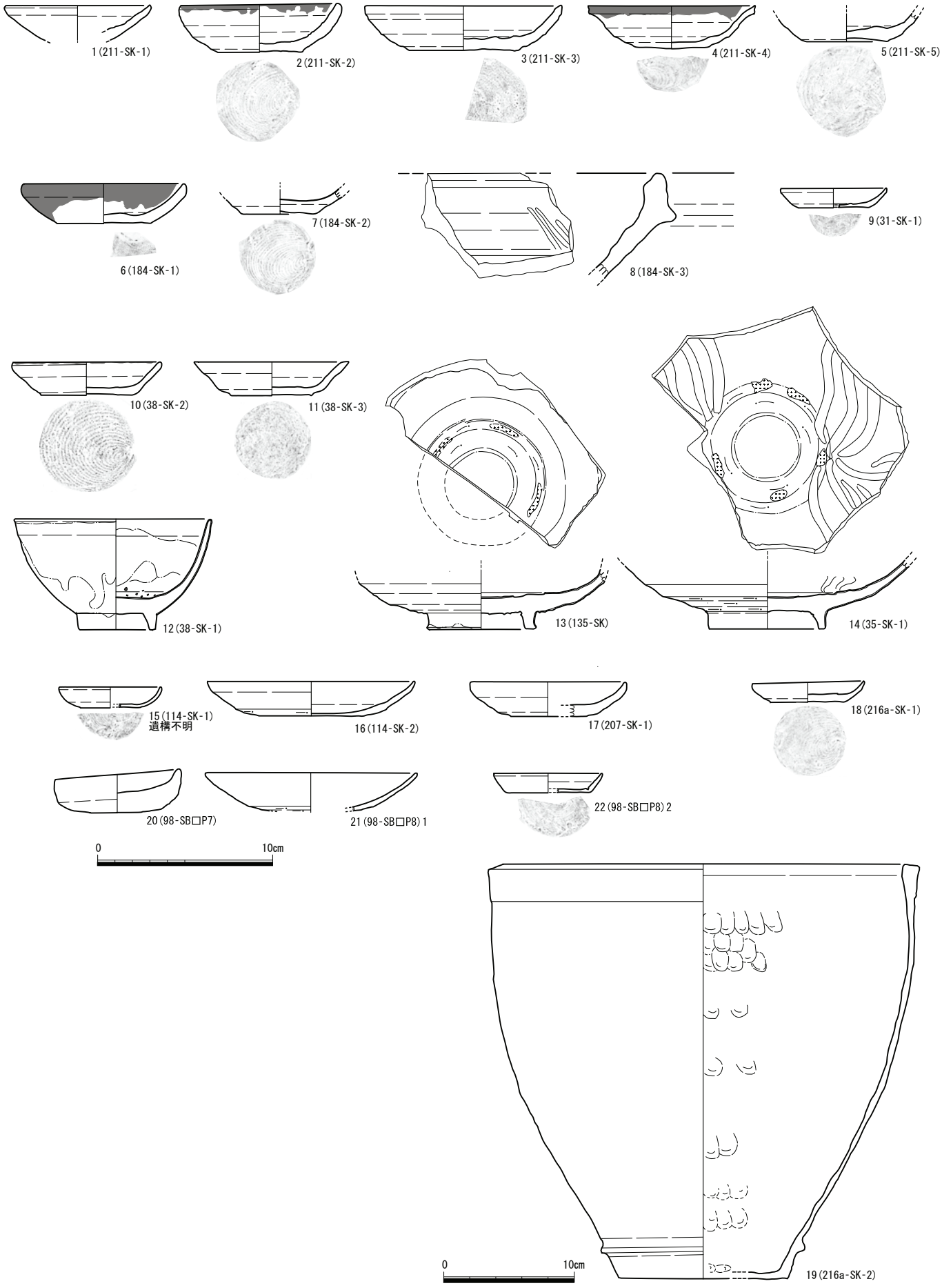


図66 2区出土遺物実測図2(1/3)(1/8)

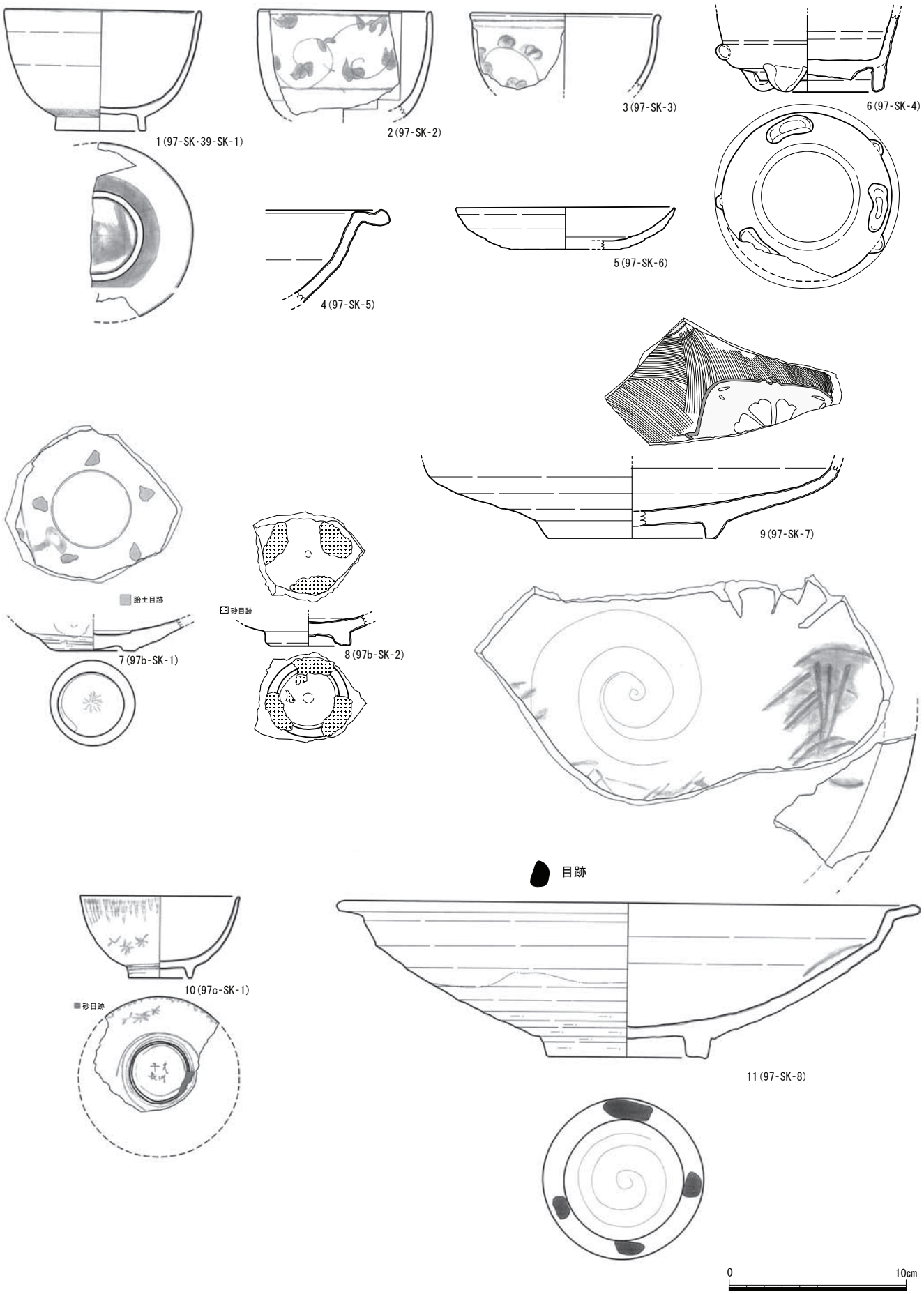


図67 2区出土遺物実測図3(1/3)

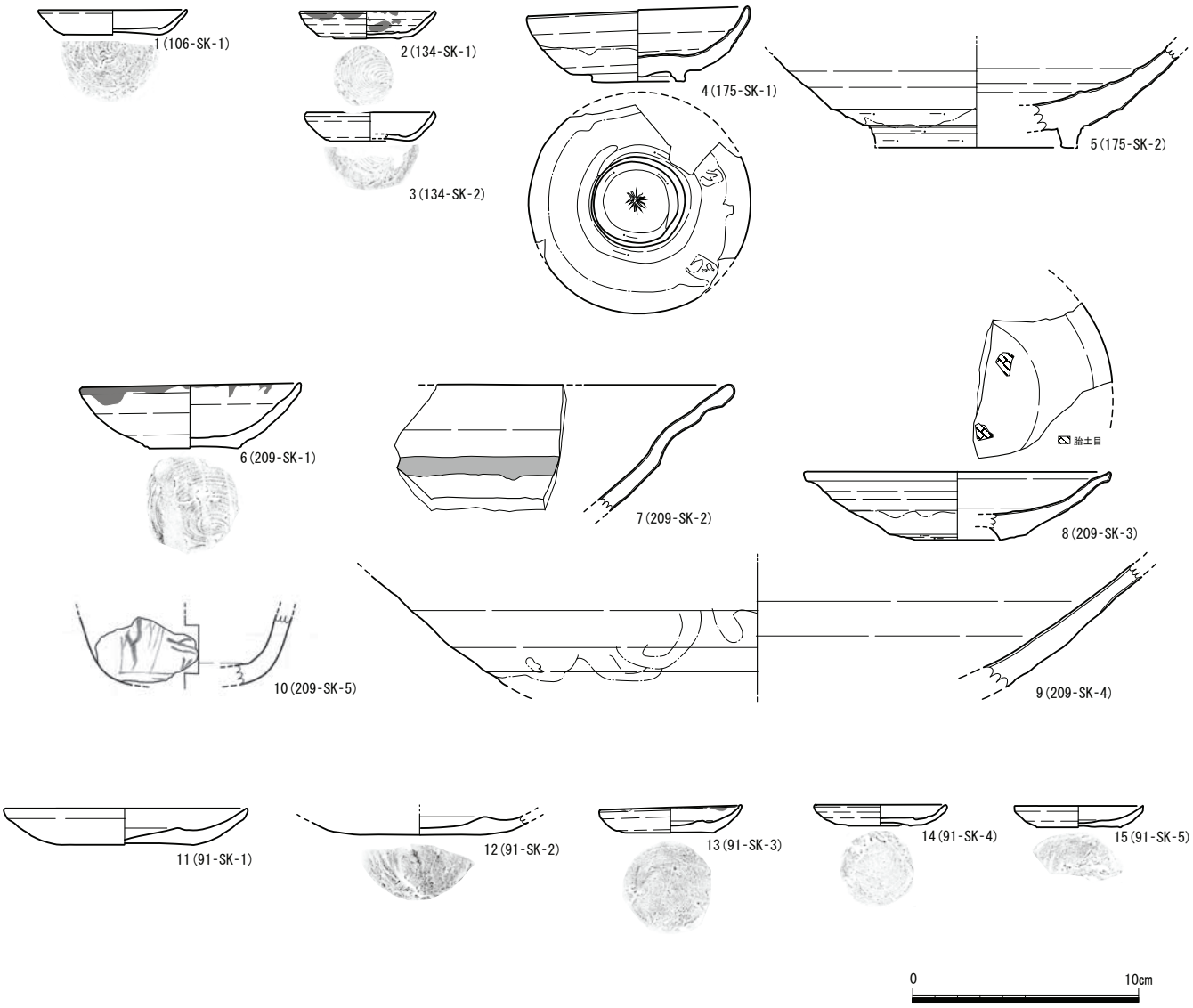


図68 2区出土遺物実測図4(1/3)

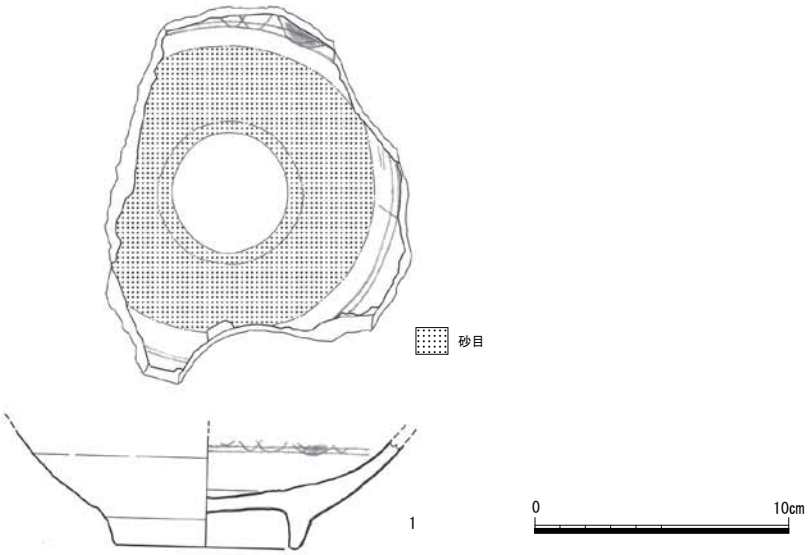
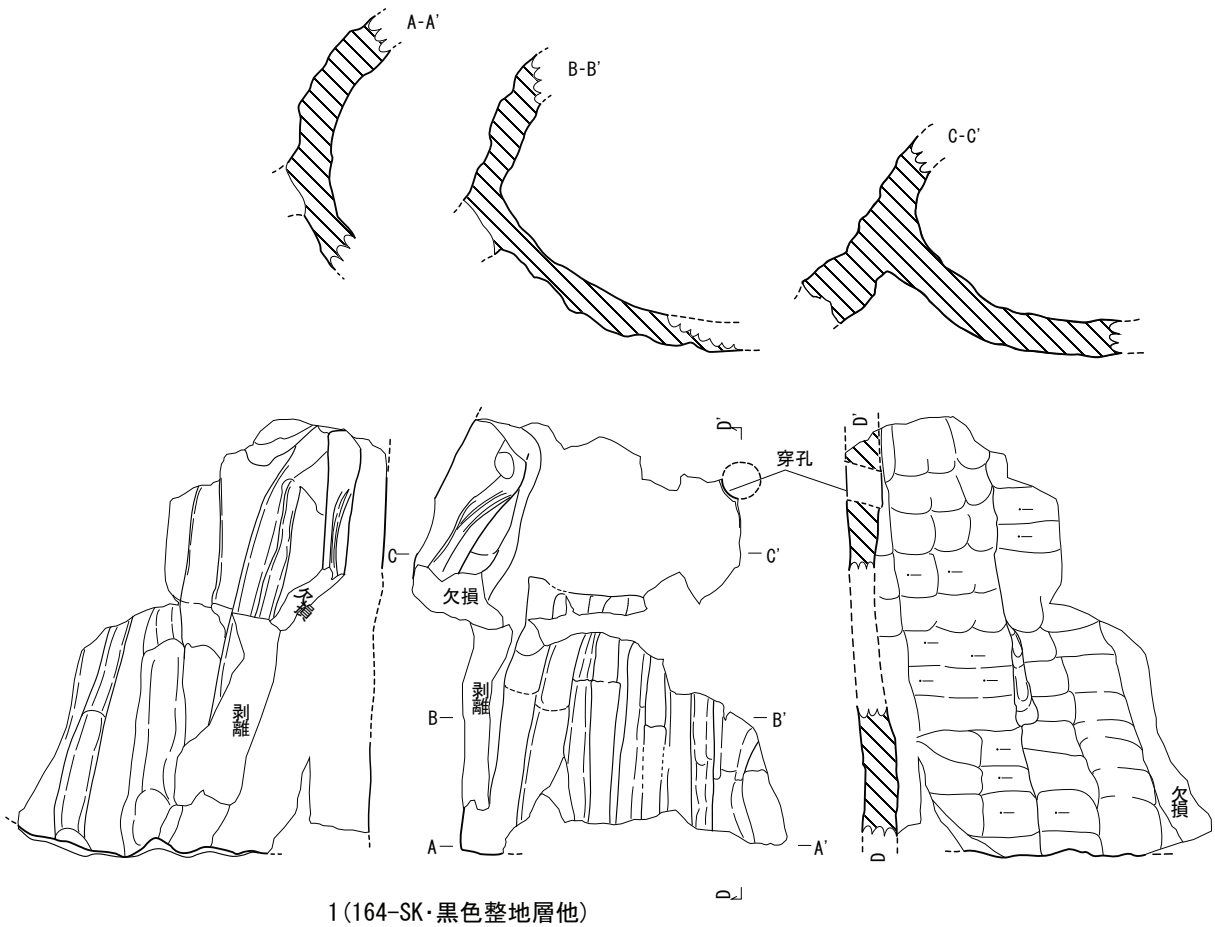


図69 1区11-SK 出土遺物実測図(1/3)



1(164-SK･黒色整地層他)

2(立会502-SK)

図70 伝大道寺跡遺跡群出土土製品(鴟尾か)及び軒平瓦実測図(1/3)

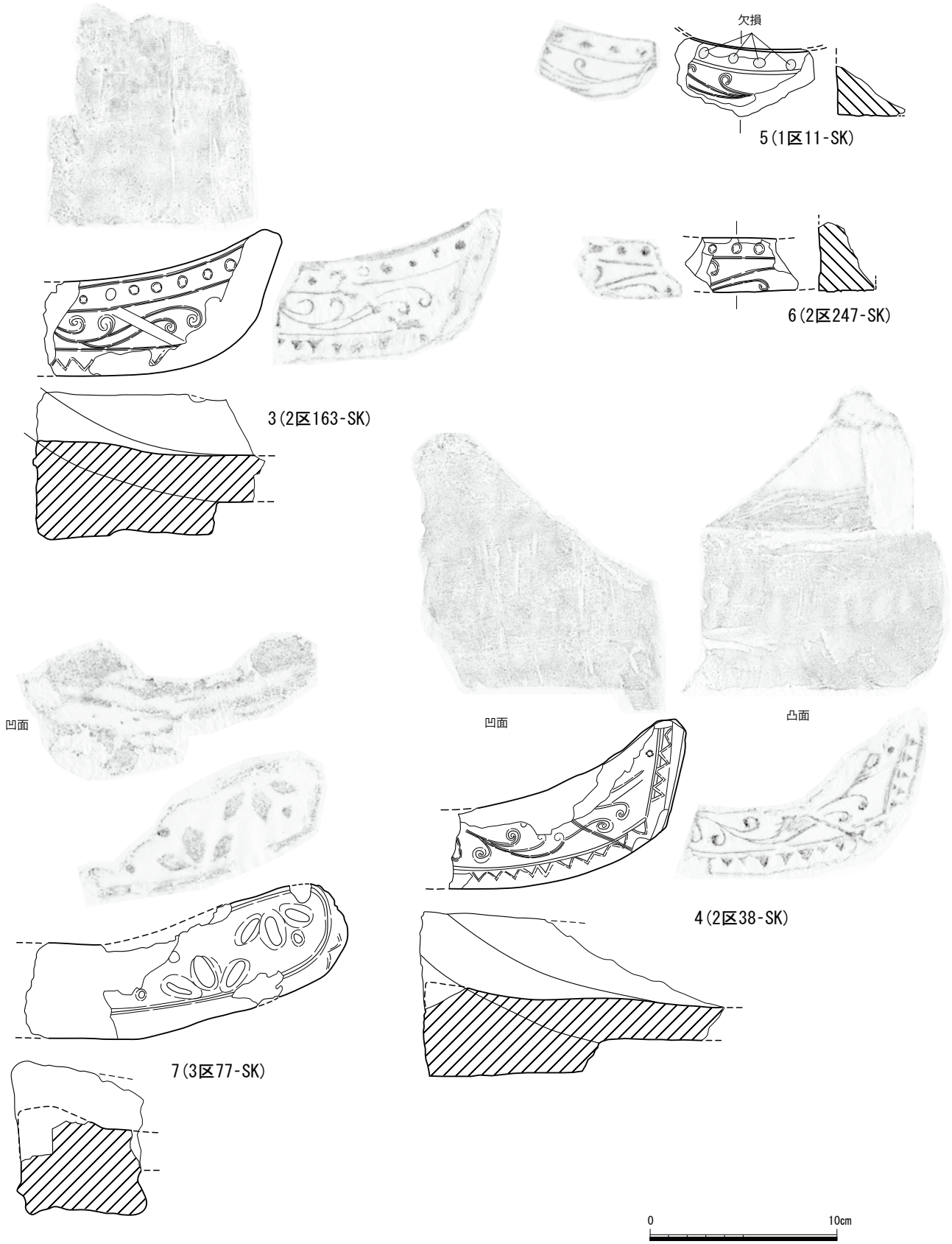


図71 伝大道寺跡遺跡群出土軒平瓦実測図(1/3)

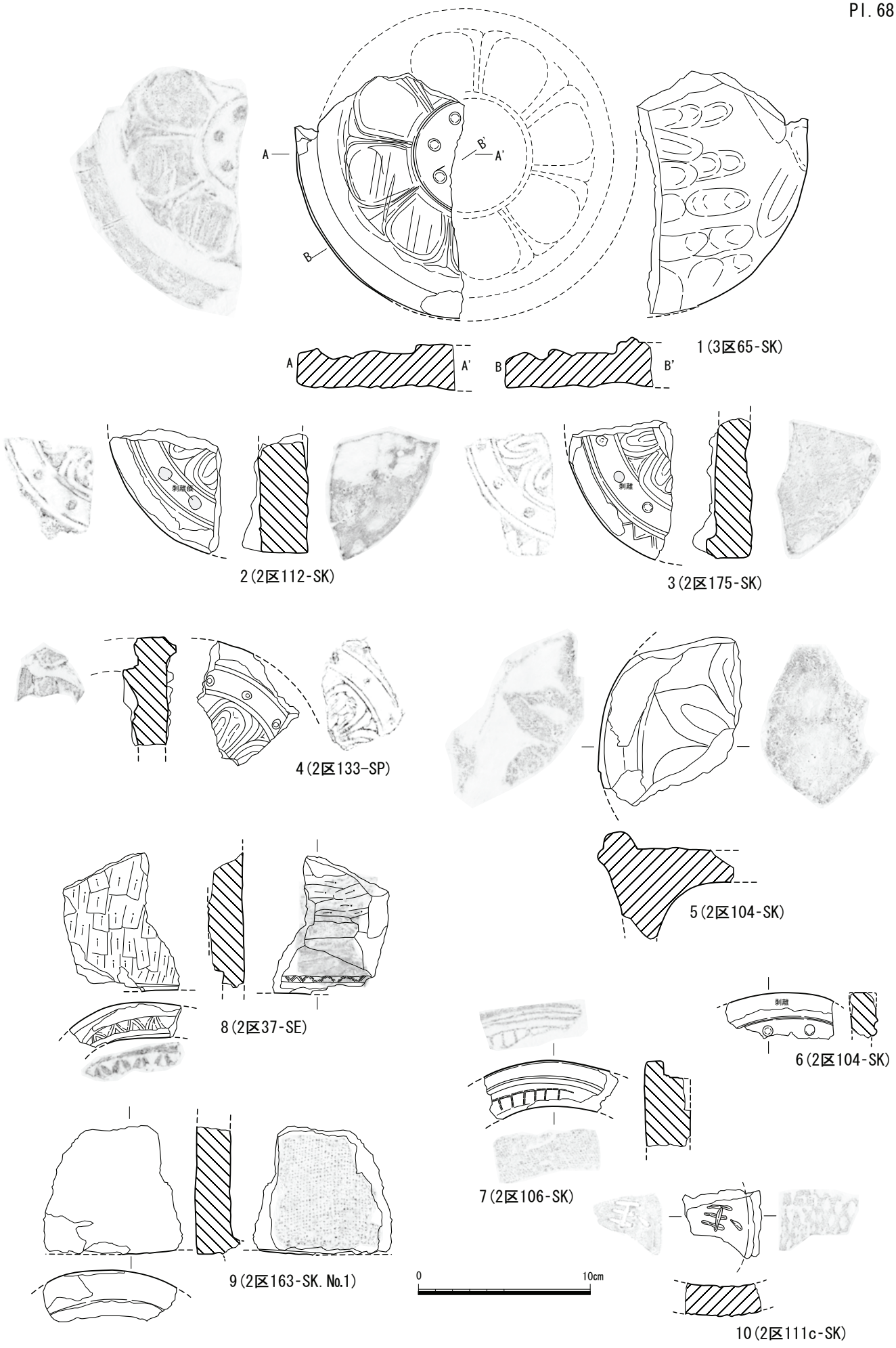


図72 3区・2区出土軒丸瓦実測図(1/3)

Pl.69

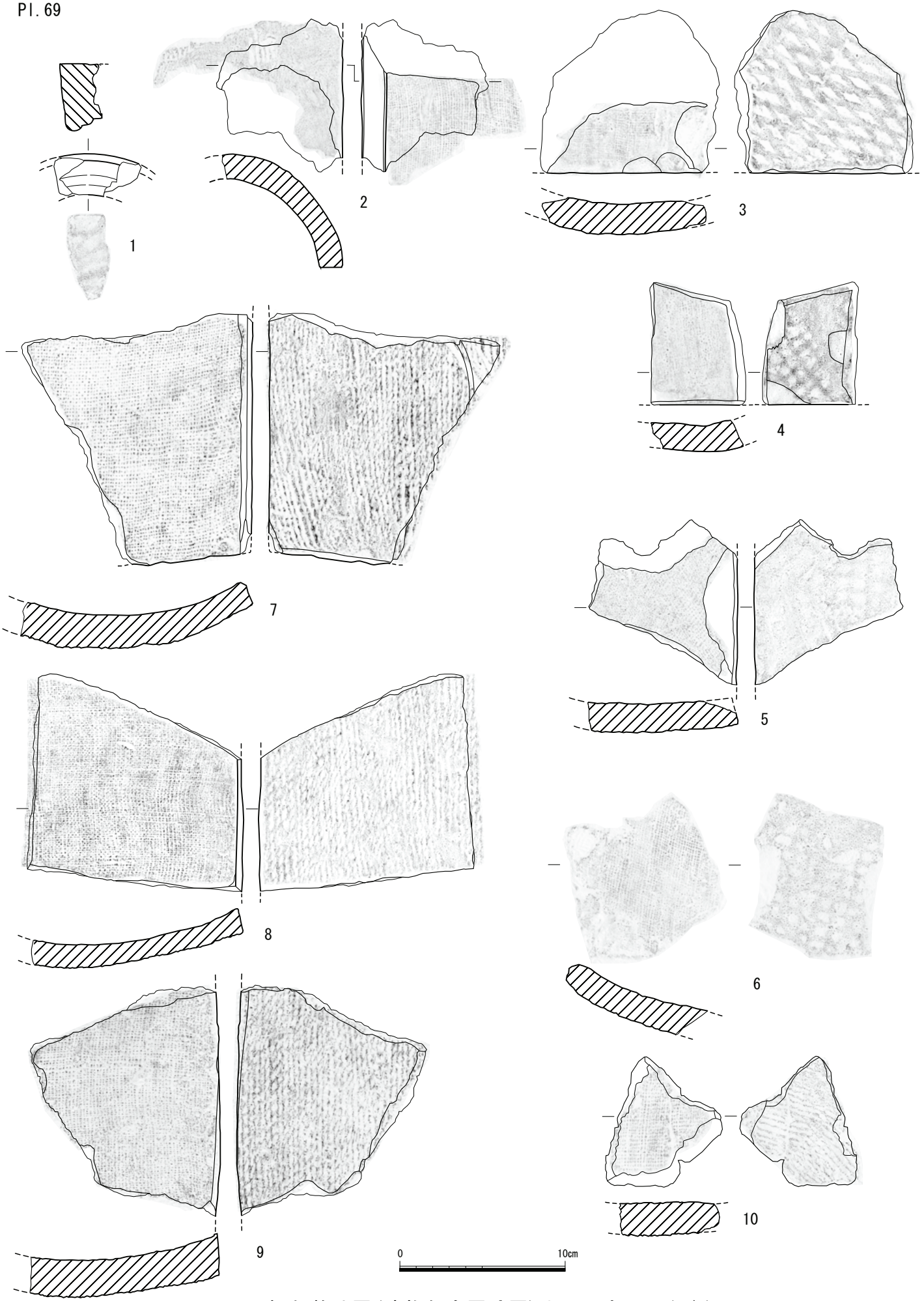


図73 2区黒褐色整地層(遺物包含層4'層)出土瓦実測図(1/3)

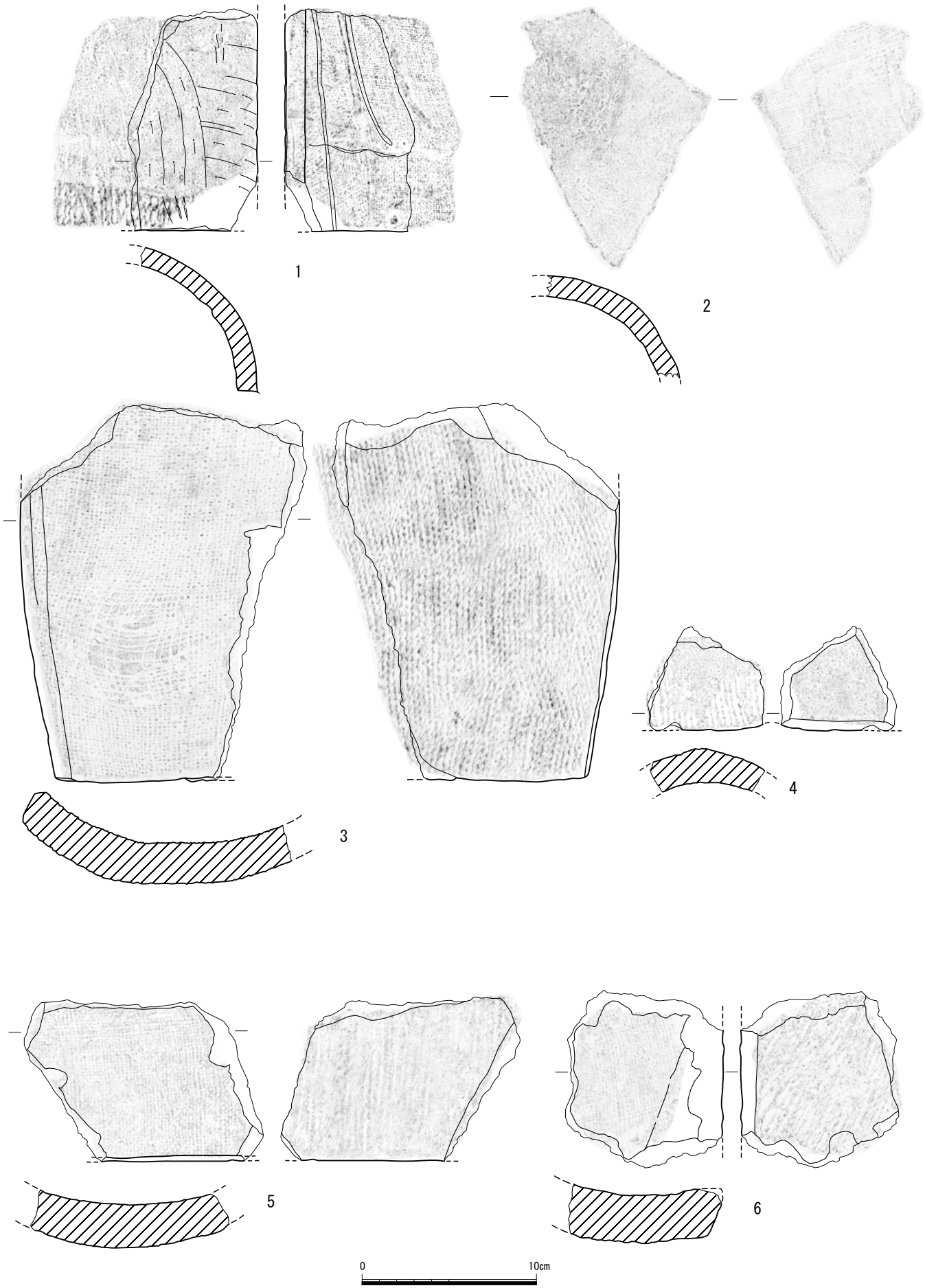


図74 2区黒色整地層(遺物包含層4層)出土瓦実測図(1/3)

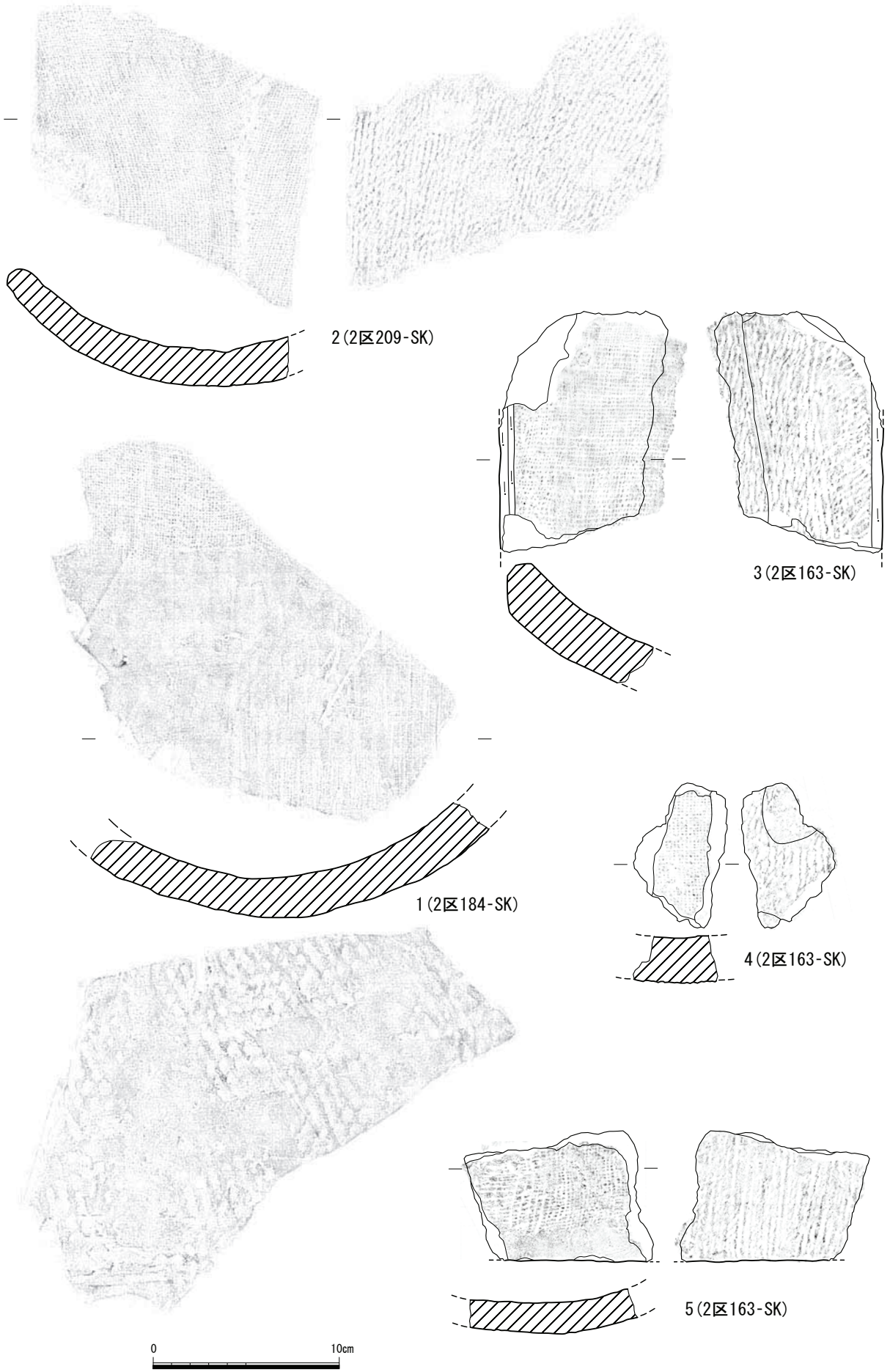


図75 2区163-SK・209-SK・184-SK出土平瓦実測図(1/3)

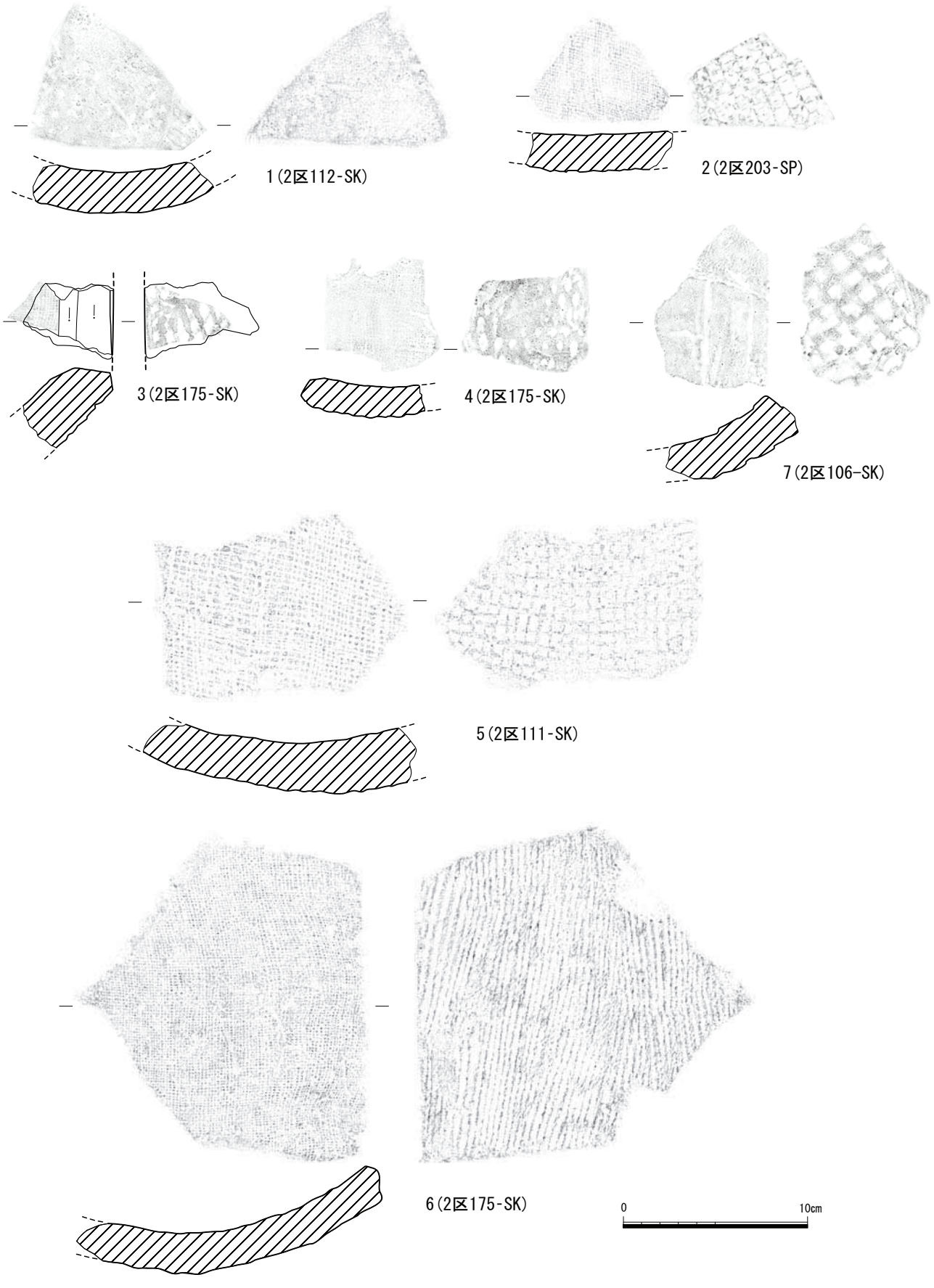


図76 2区112-SK・111-SK・175-SK・106-SK・203-SP出土平瓦実測図(1/3)

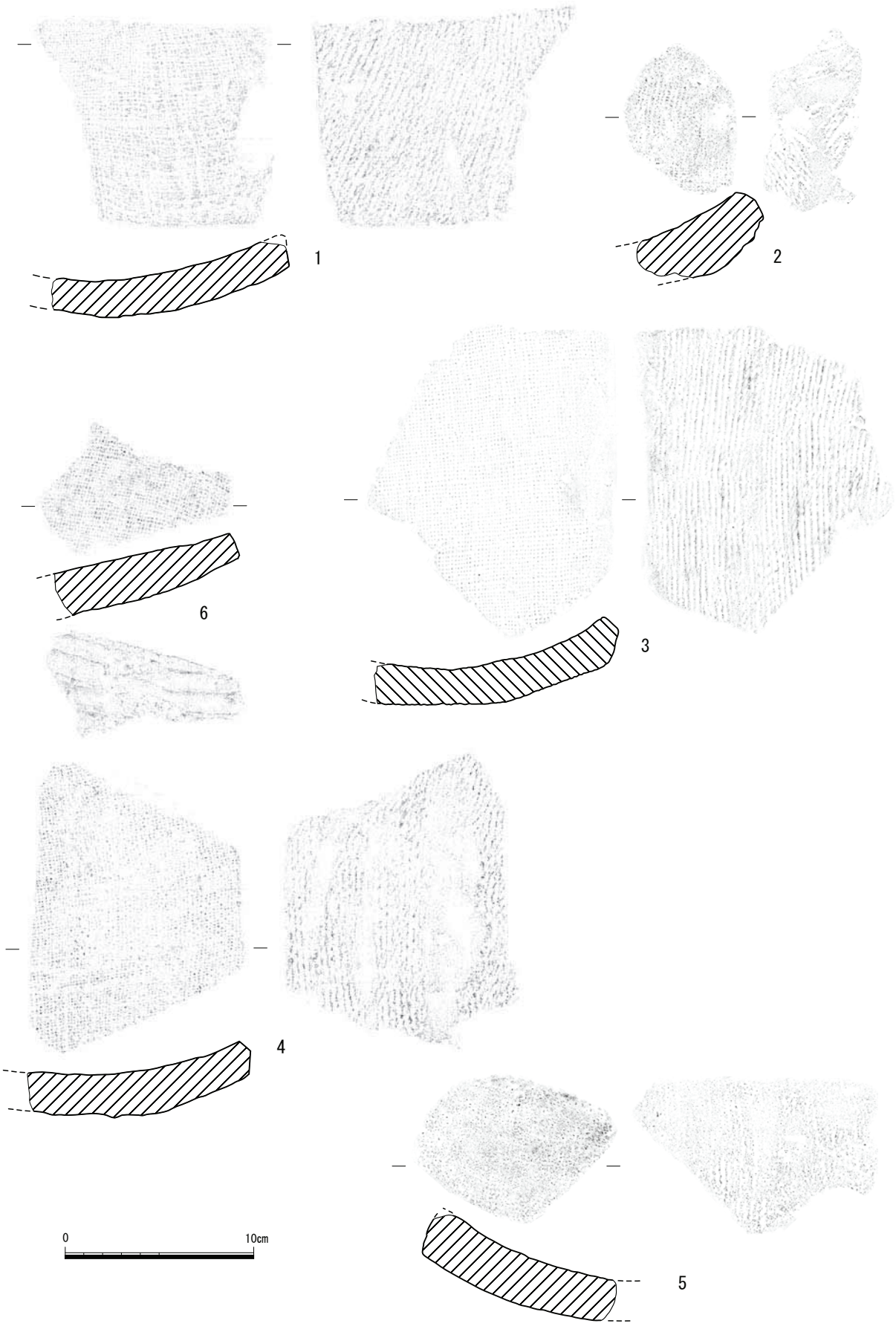


図77 2区209-SK出土平瓦実測図(1/3)

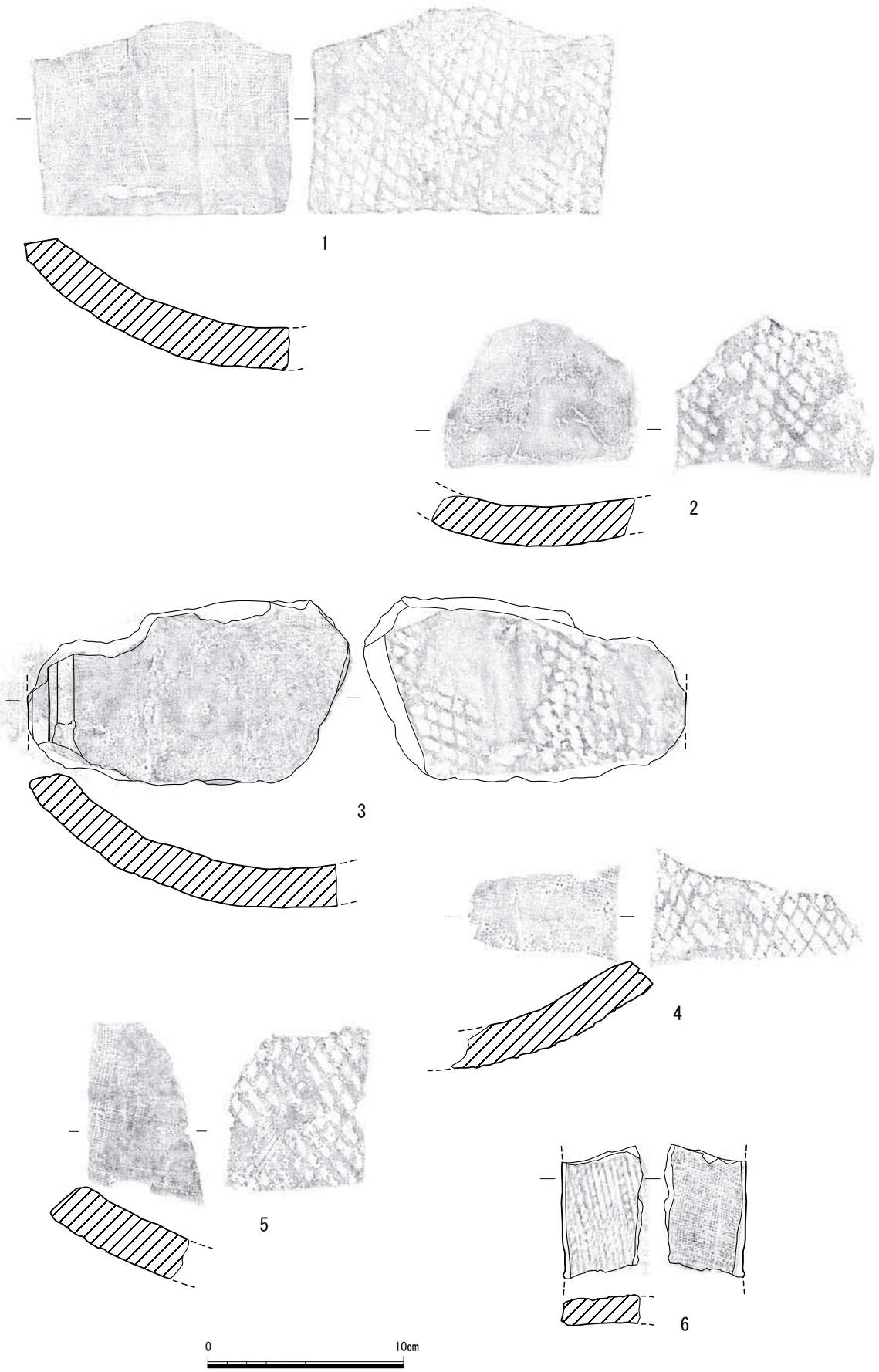


図78 1区18-SK出土平瓦･熨斗瓦実測図(1/3)

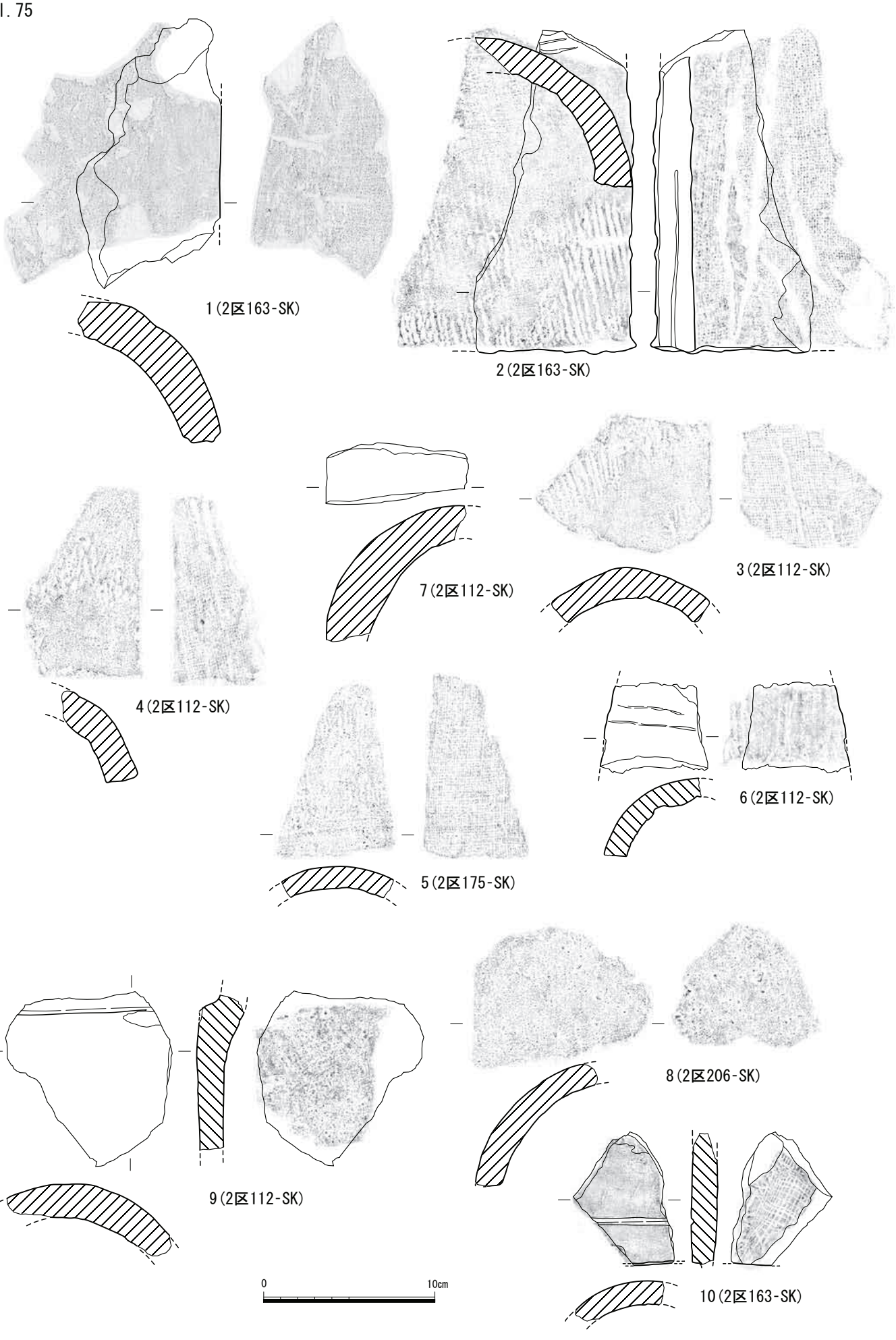


図79 2区163・206・175・112-SK出土丸瓦実測図2(1/3)

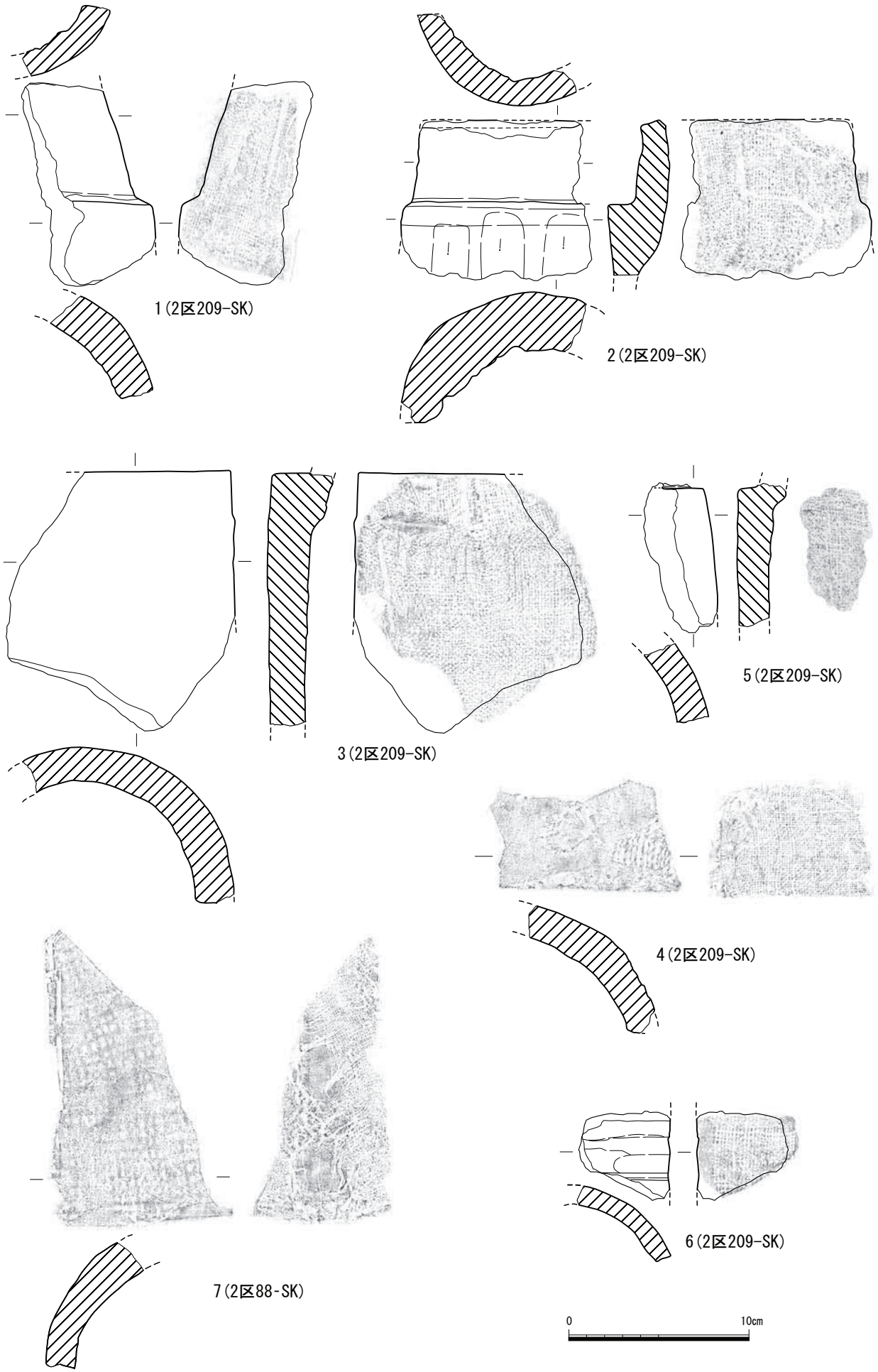


図80 2区209-SK・88-SK出土丸瓦実測図(1/3)

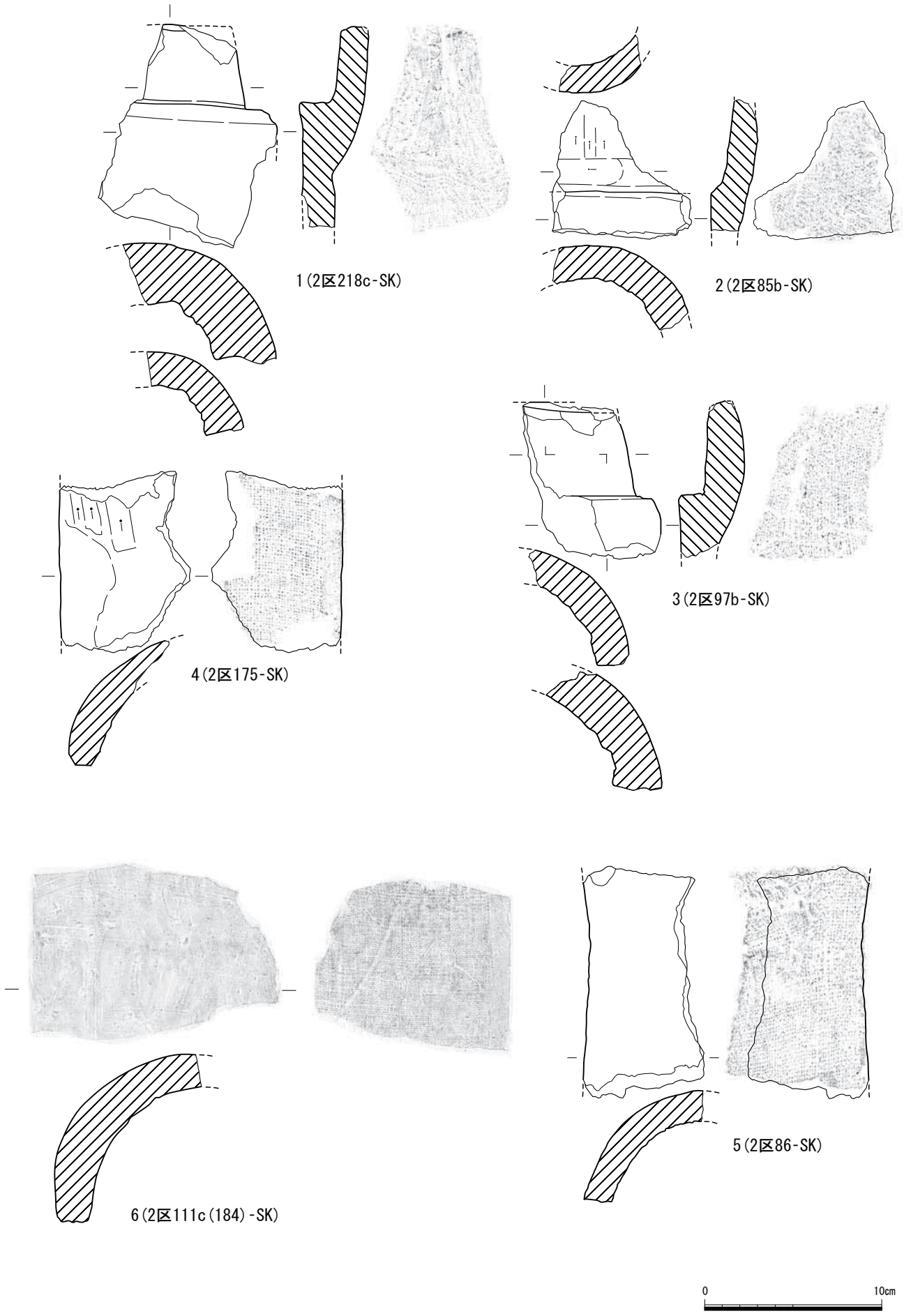


図81 2区218c・85b・97b・175・86・184-SK出土丸瓦実測図1(1/3)

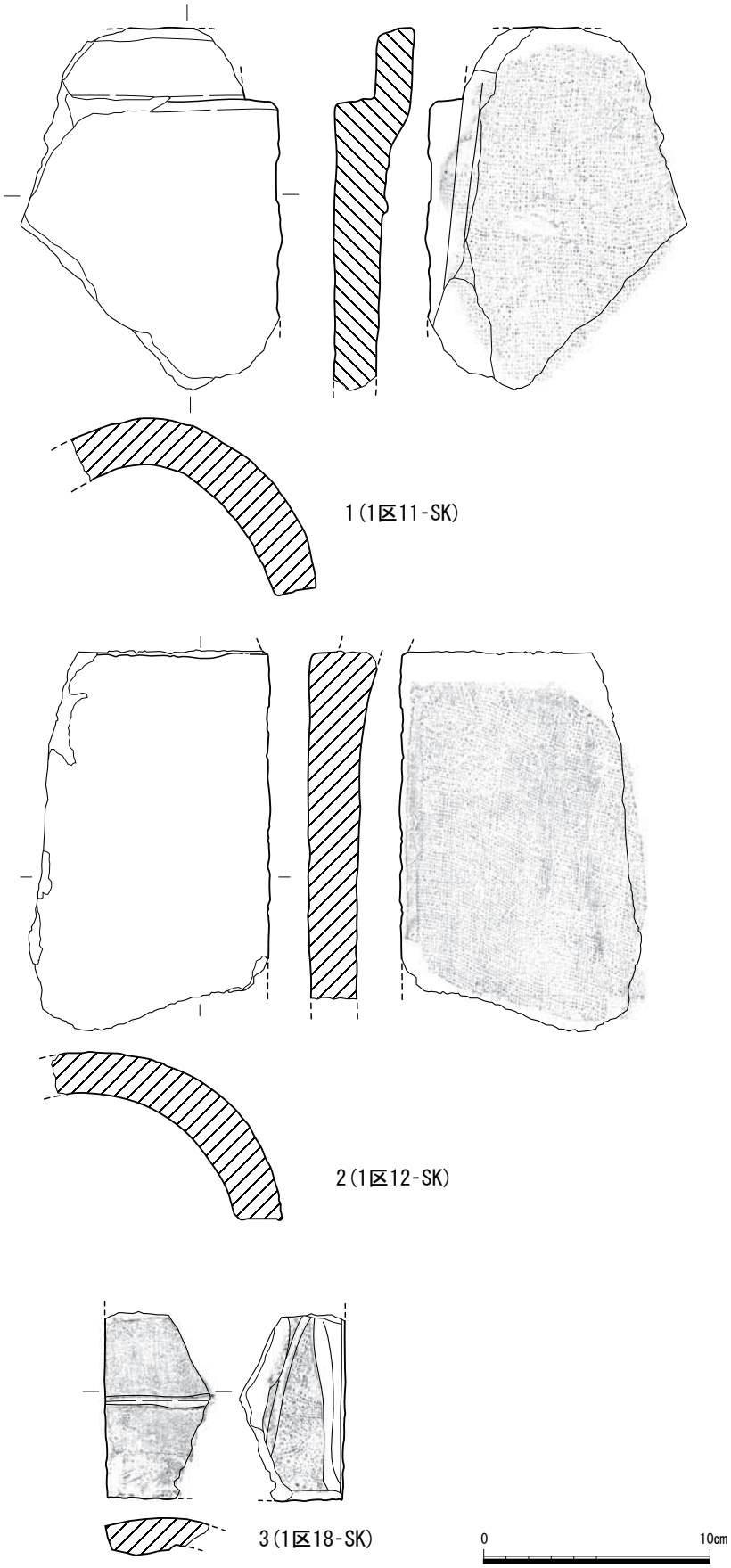
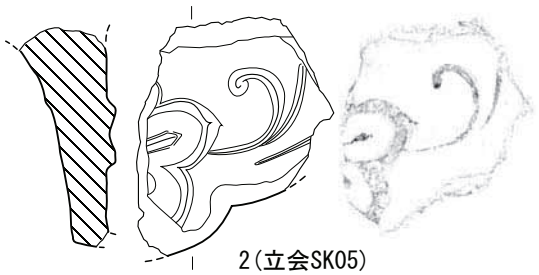
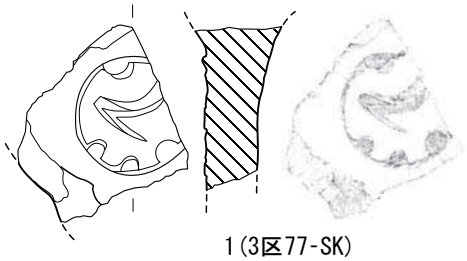


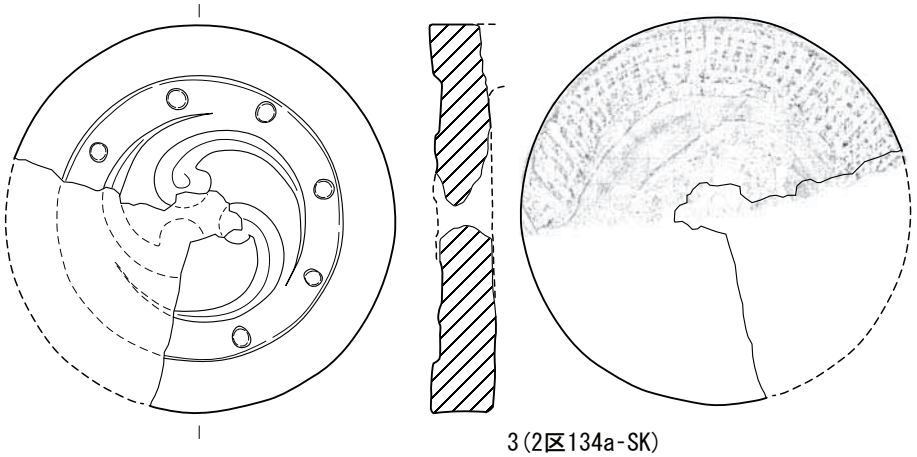
図82 1区11-SK･12-SK･18-SK出土丸瓦実測図(1/3)



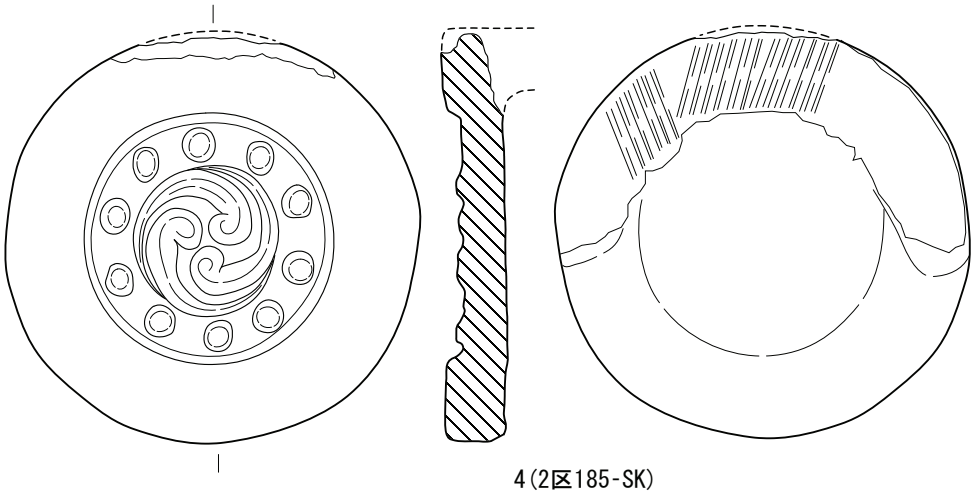
2(立会SK05)
瓦No.20



1(3区77-SK)
瓦No.21



3(2区134a-SK)
瓦No.26



4(2区185-SK)
瓦No.27

0 10cm

図83 3区77-SK・立会(05-SK)出土滴水瓦・
2区185・134a-SK出土軒丸瓦実測図(1/3)

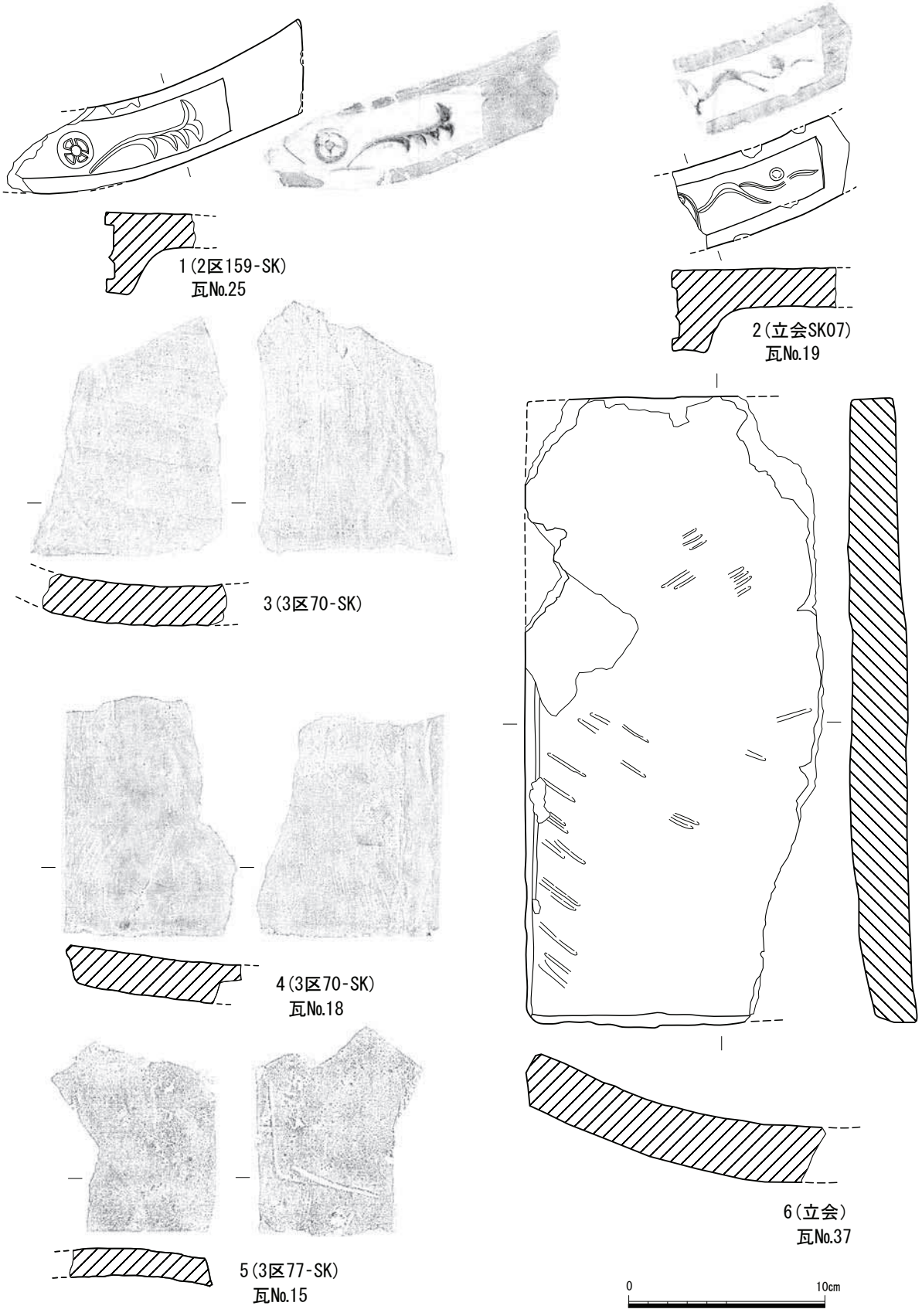


図84 2区159-SK・立会(SK07)出土軒平瓦・
3区70(平瓦)・77-SK(熨斗瓦)・立会出土平瓦実測図(1/3)

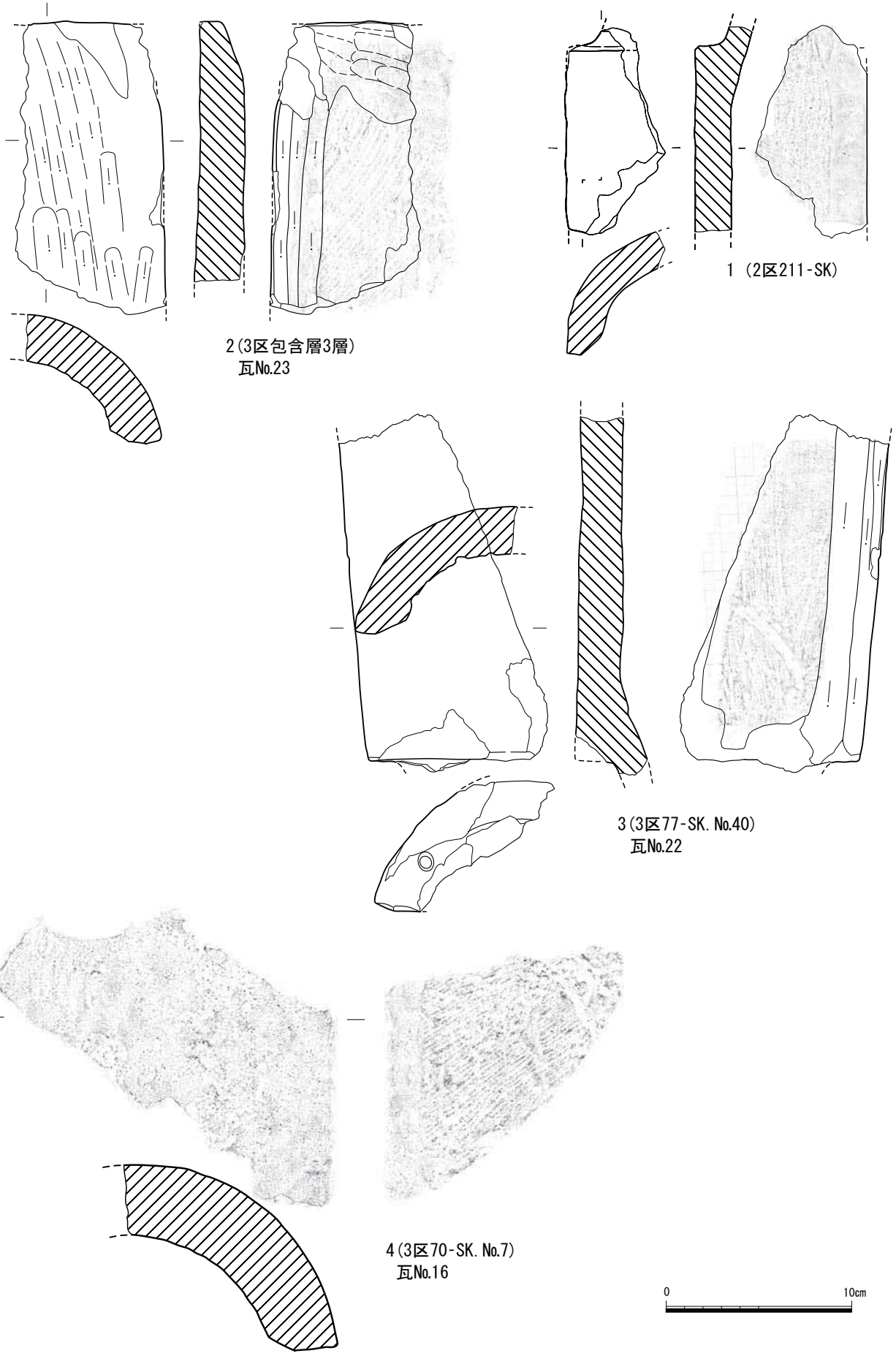


図85 2区(211-SK)・3区(包含層3層・70-SK)出土丸瓦、3区(77-SK)出土軒丸瓦実測図(1/3)

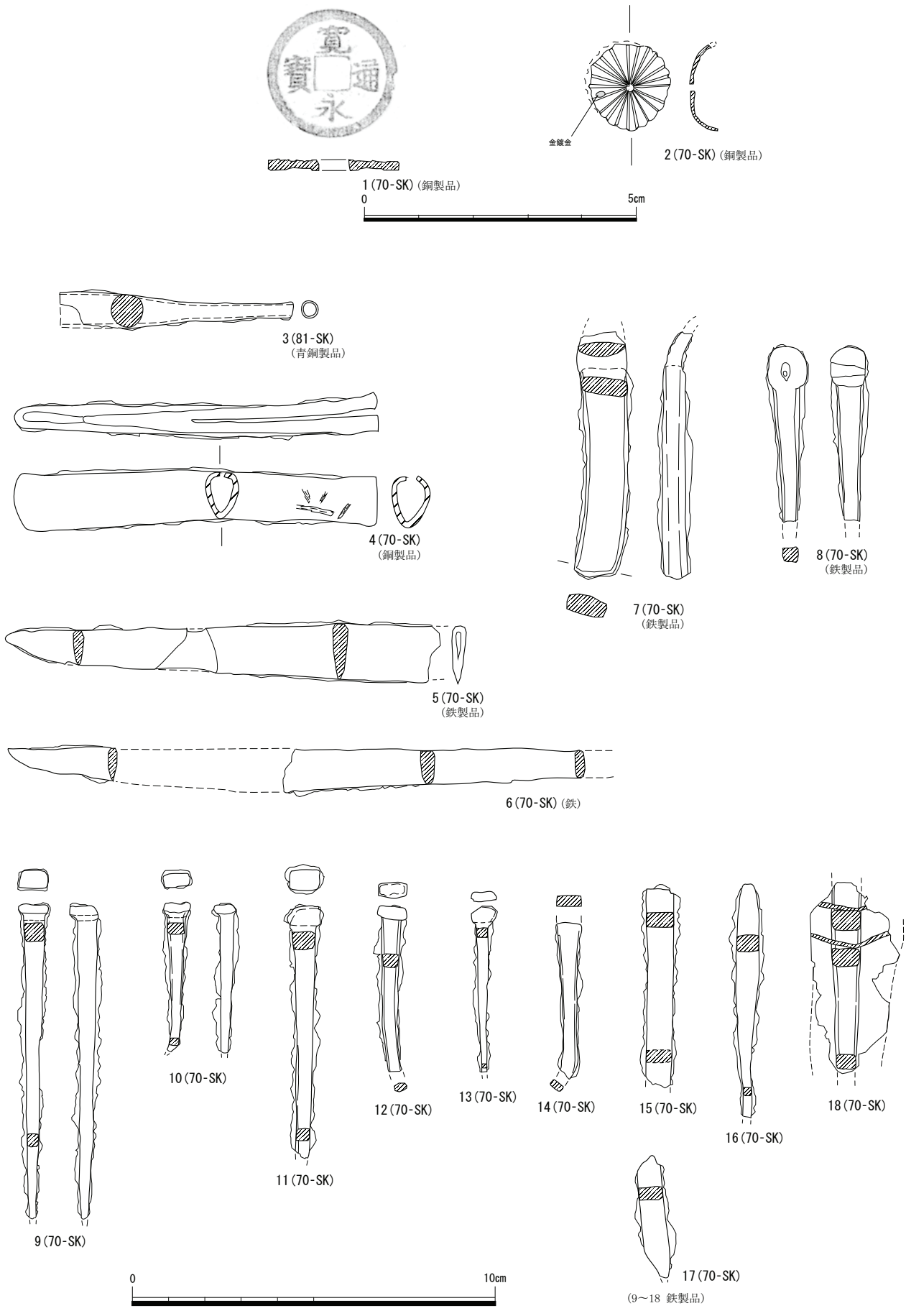
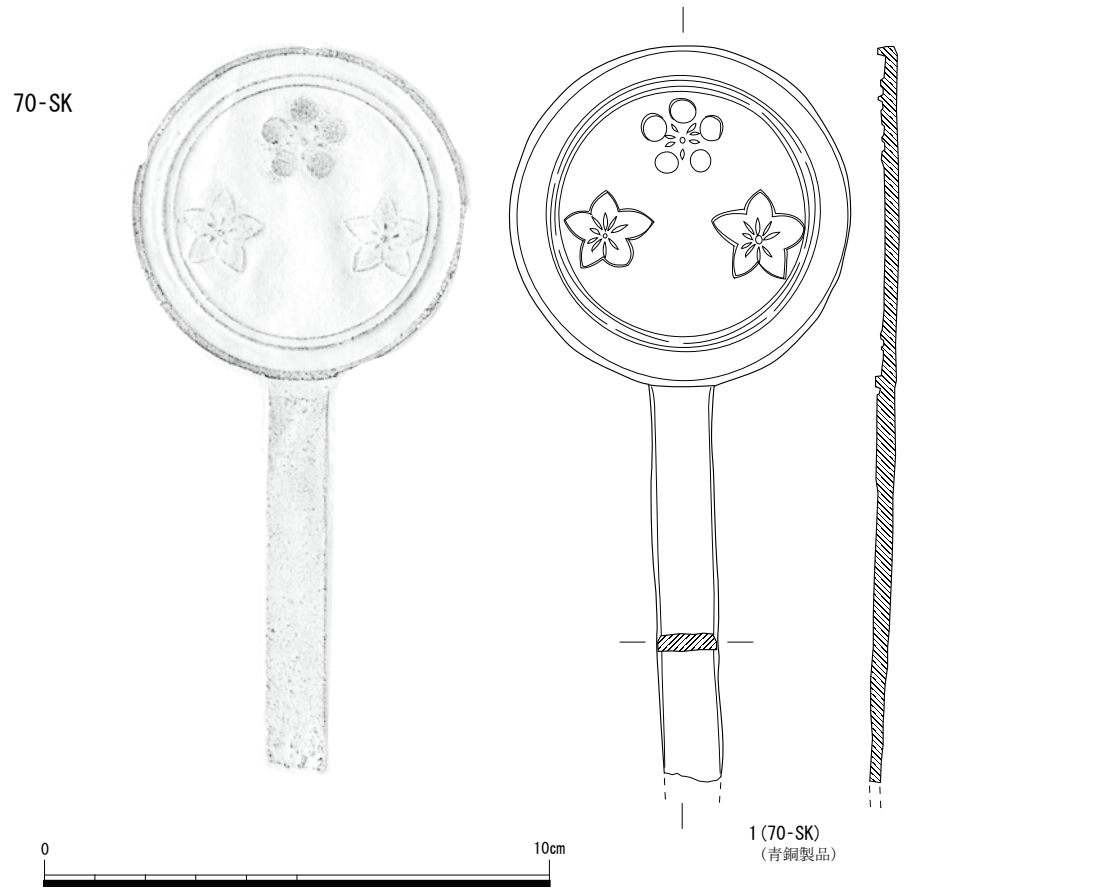


図86 3区70-SK出土銅製品・鉄製品実測図(2/3)(1/1)



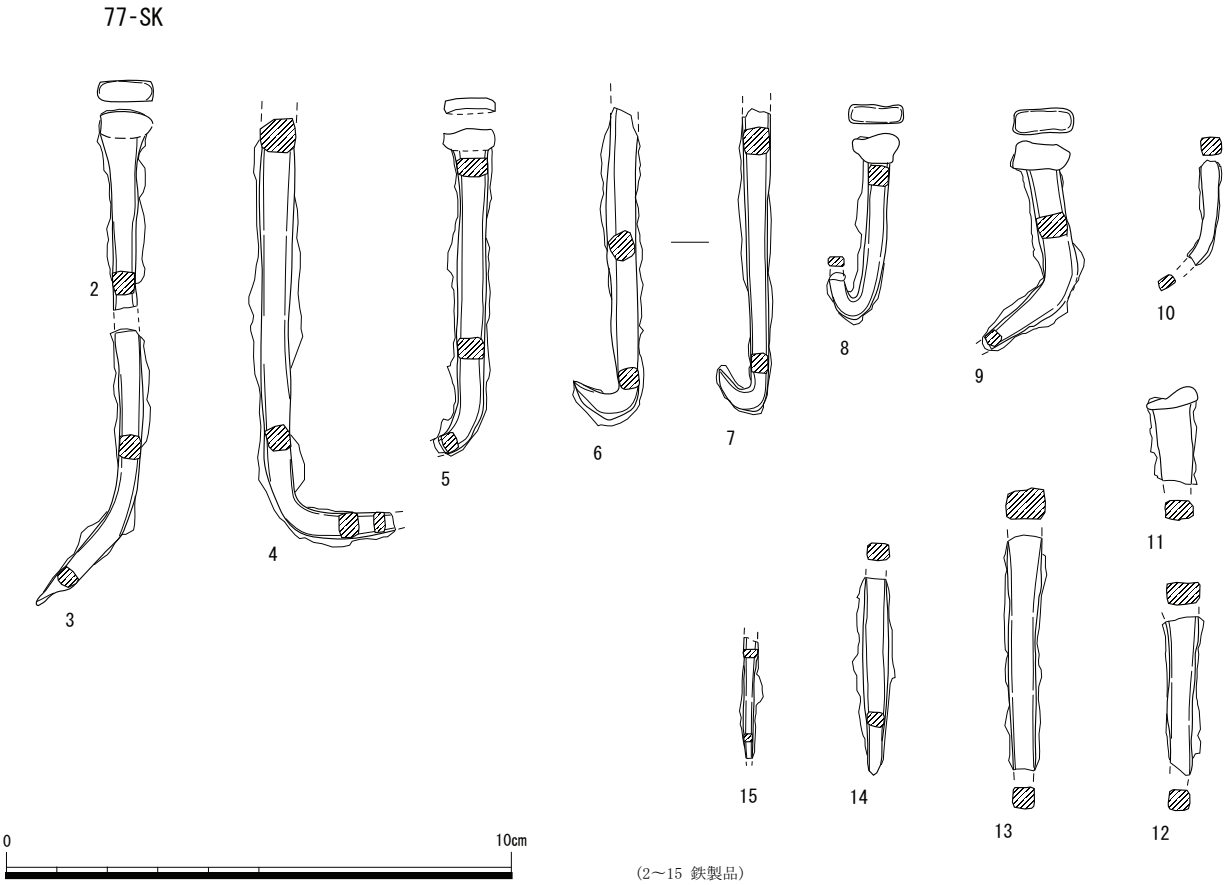


図87 3区70-SK(青銅製柄鏡)・77-SK(鉄釘)実測図(2/3)

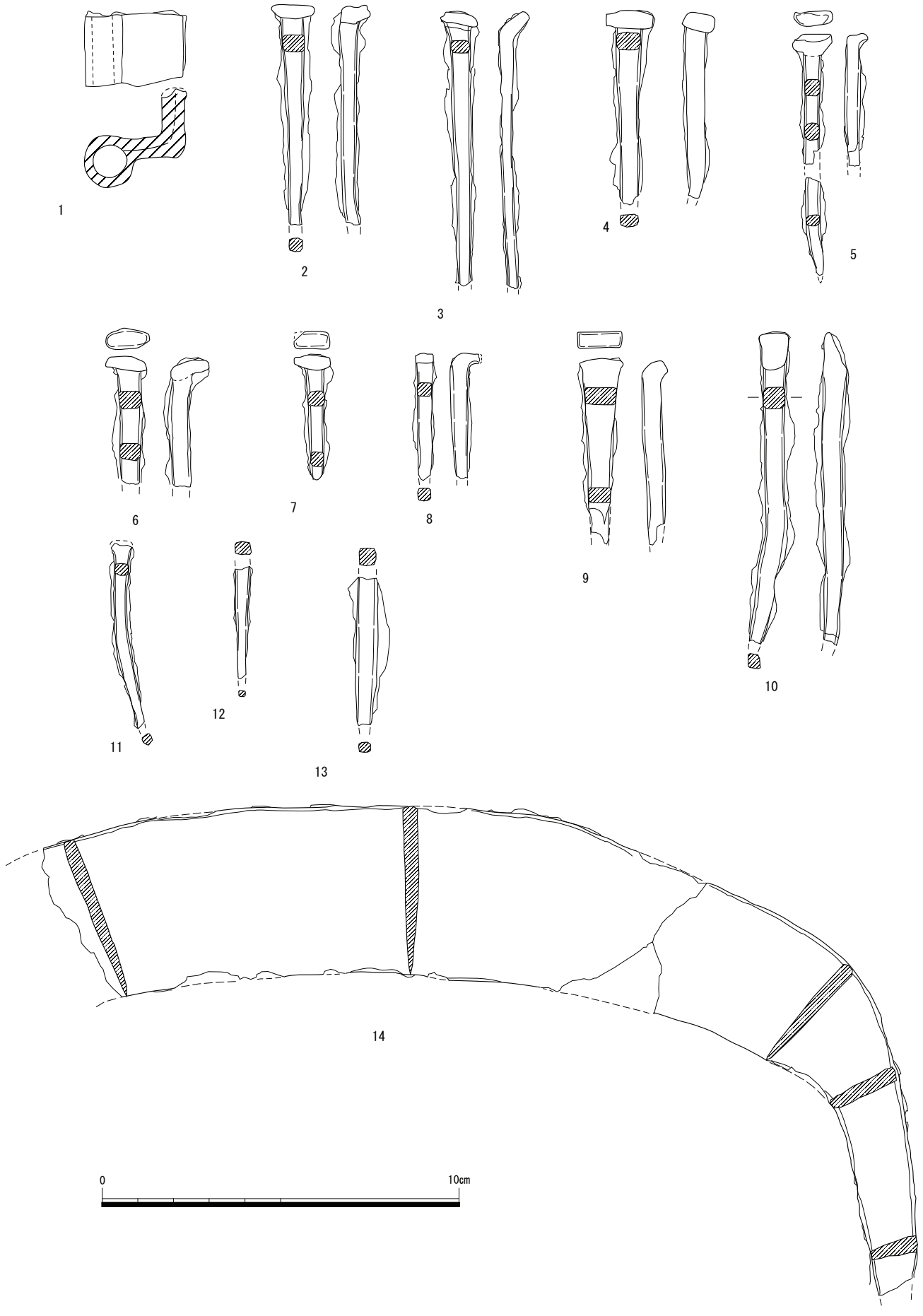


図88 3区65-SK出土鉄製品実測図(2/3)

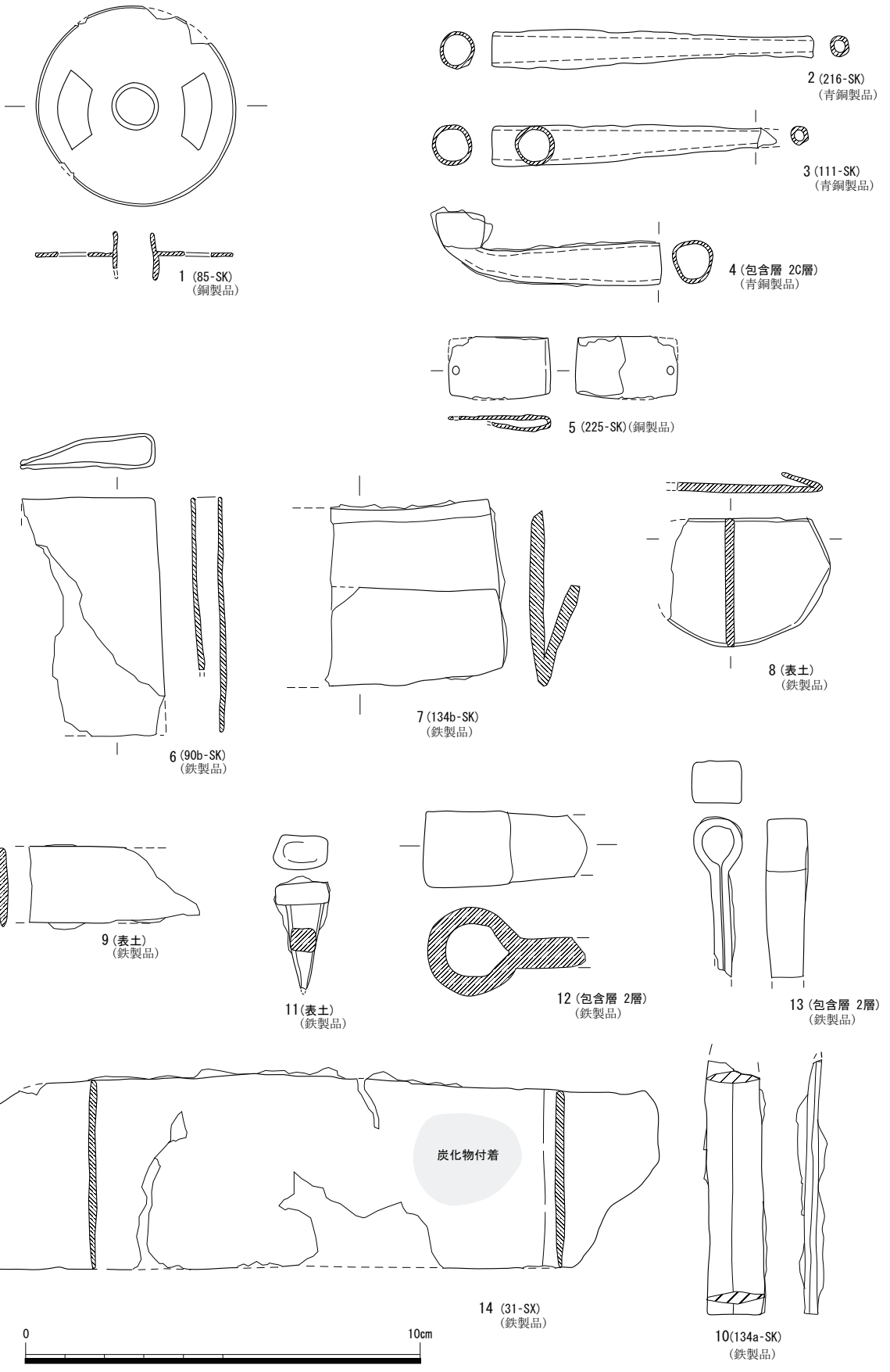


図89 2区出土銅製品及び鉄製品実測図(2/3)

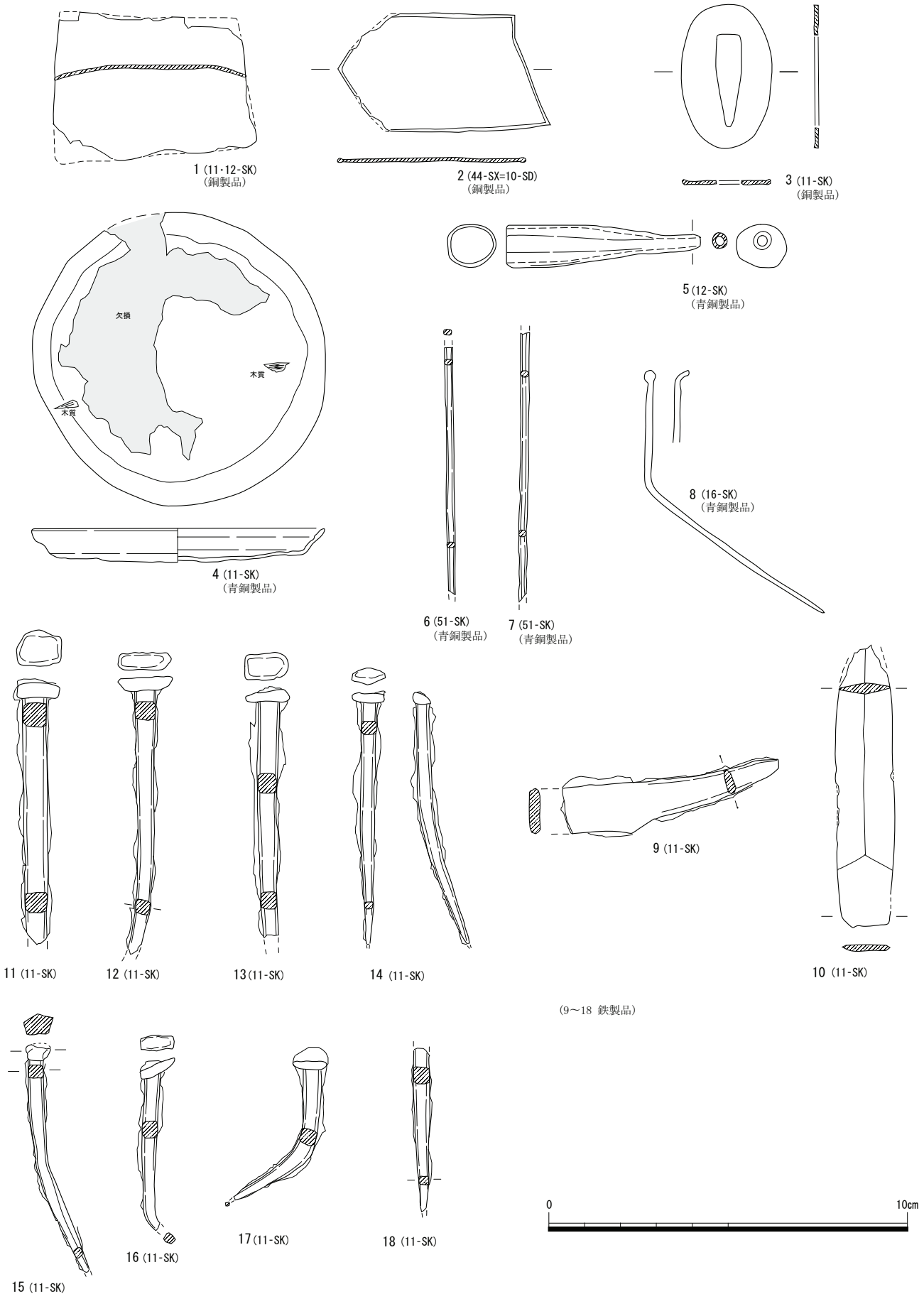


図90 1区出土鉄製品･青銅製品･銅製品実測図(2/3)

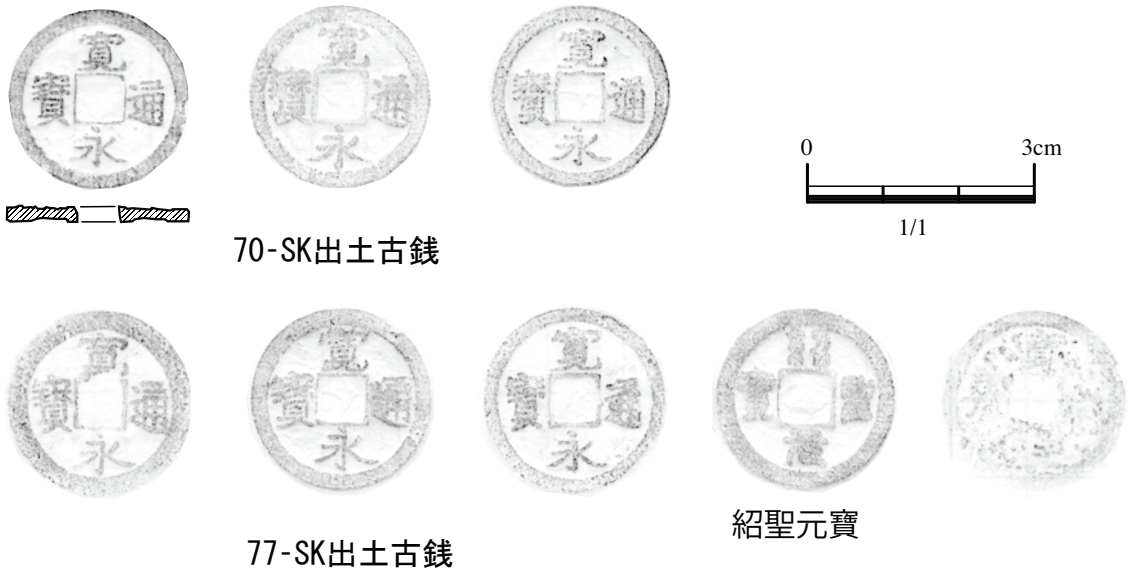


図91 3区70-SK･77-SK出土古銭拓本(1/1)

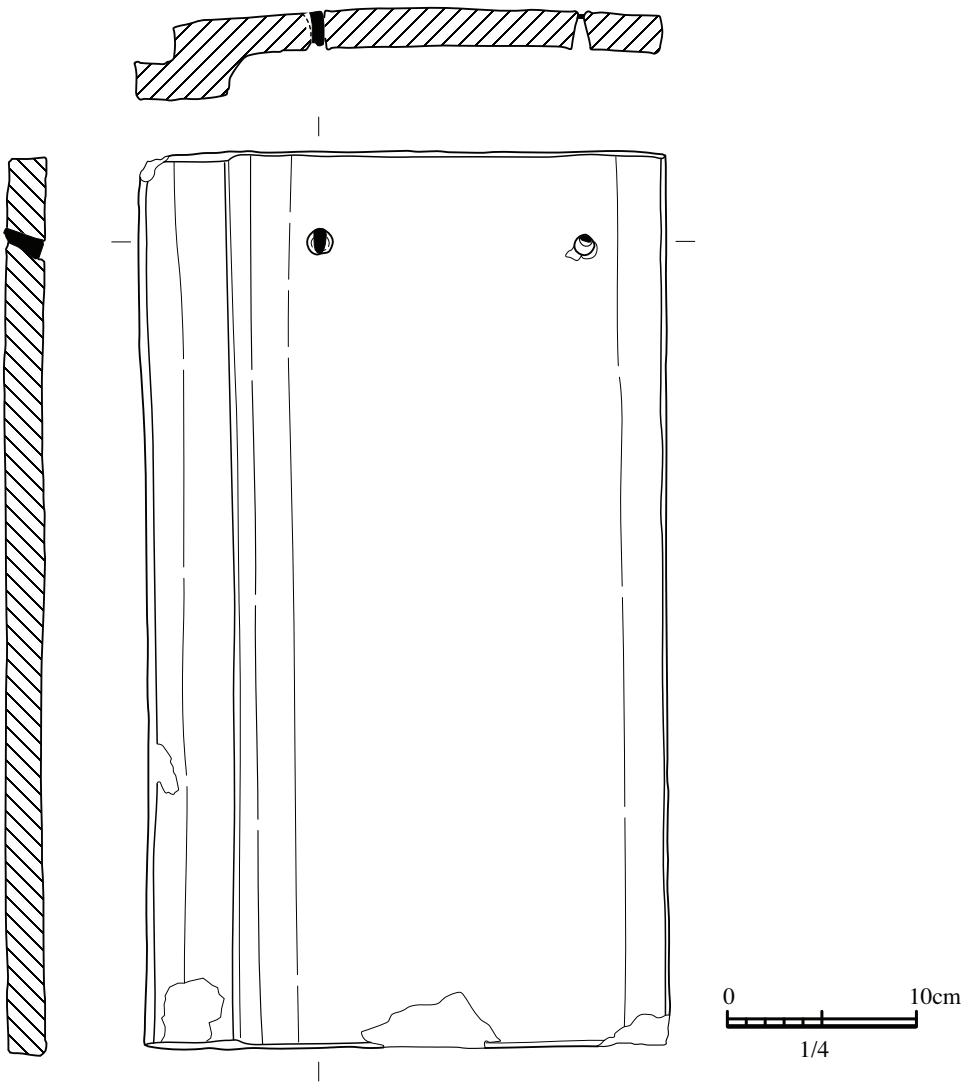


図92 立会い(SK05)出土板塀瓦実測図(1/4)

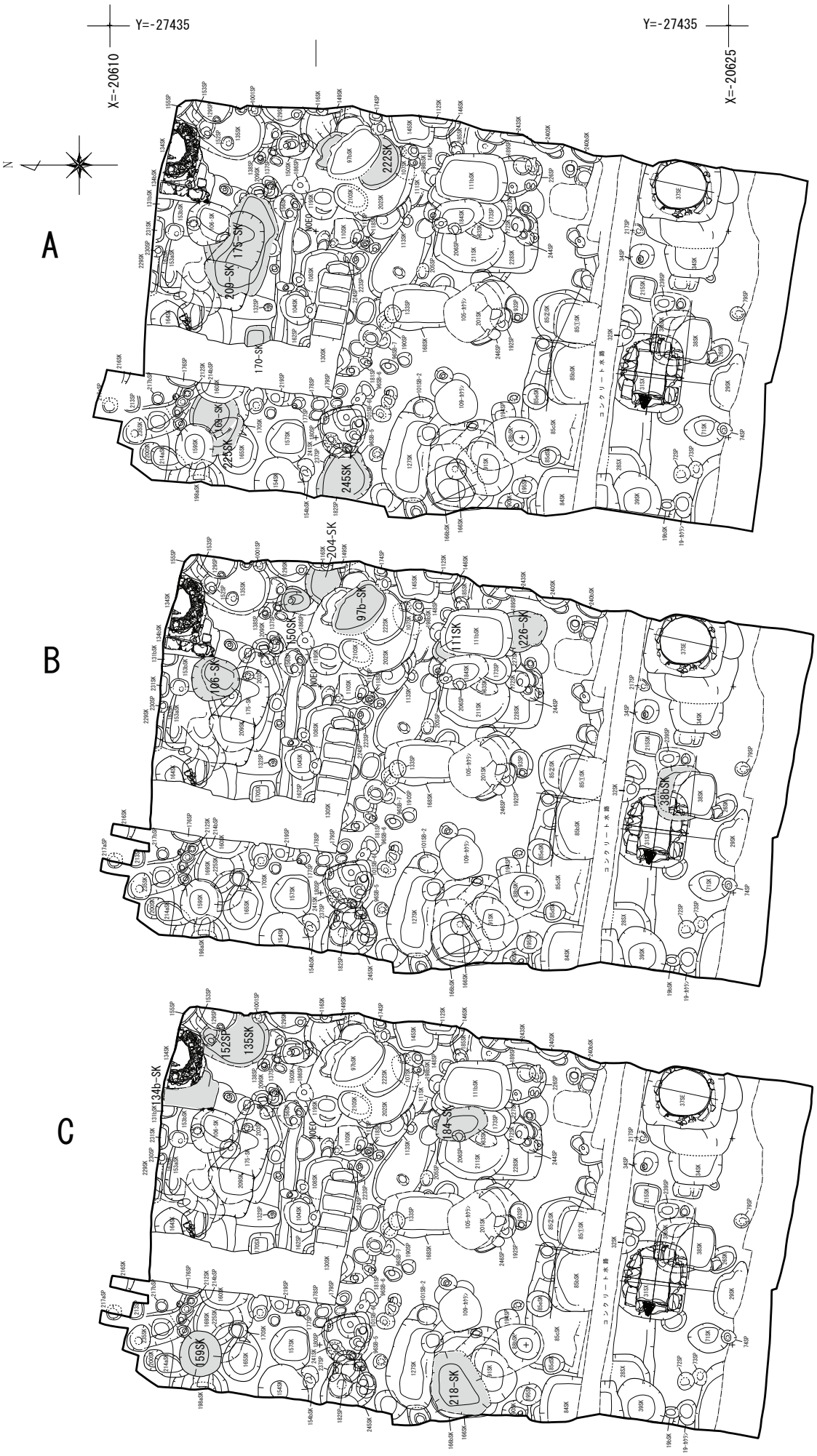


図93 2区近世遺構変遷図

Pl.89

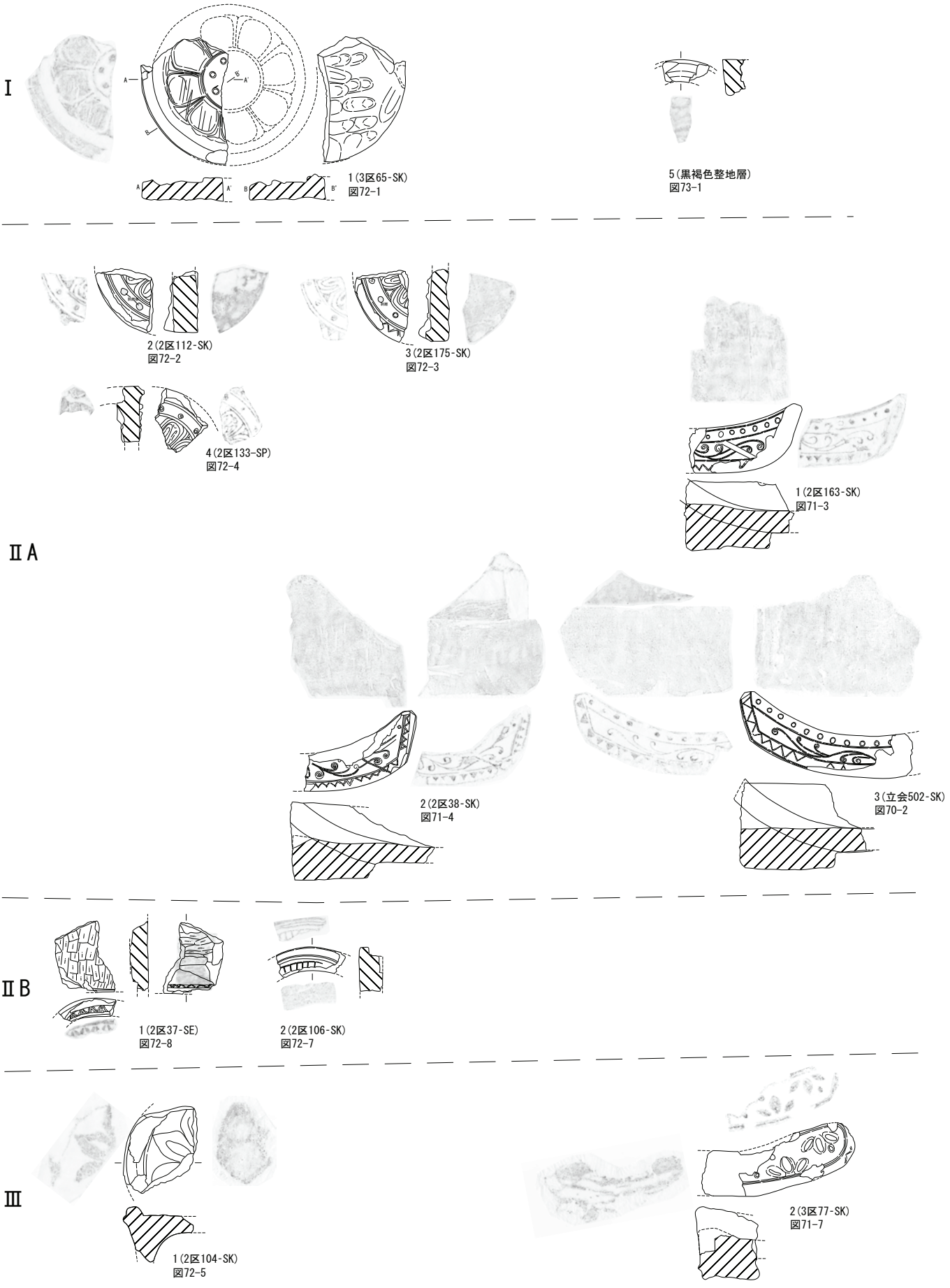


図94 伝大道寺跡遺跡群出土軒丸瓦・軒平瓦型式変遷図(案)

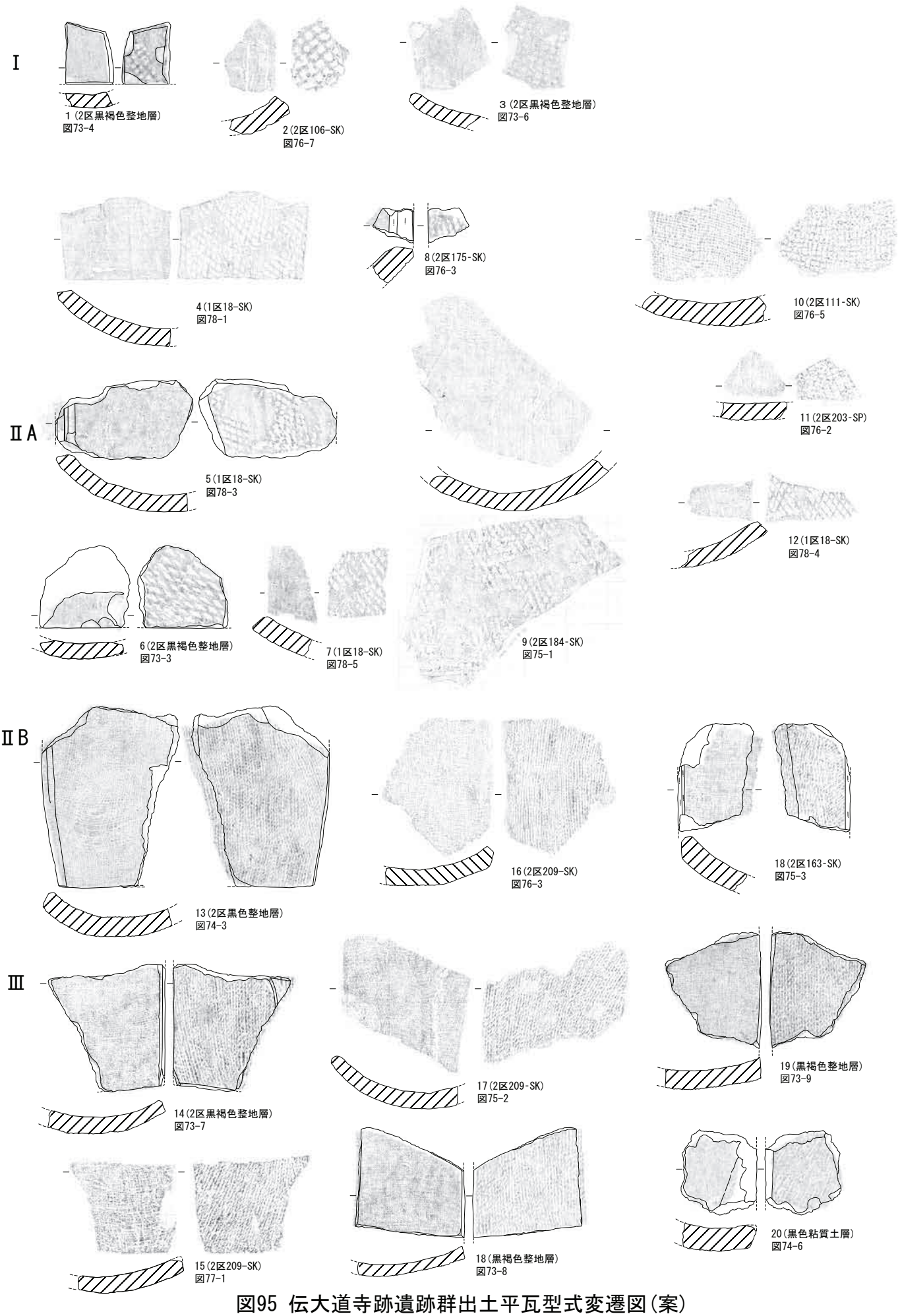


図95 伝大道寺跡遺跡群出土平瓦型式変遷図(案)

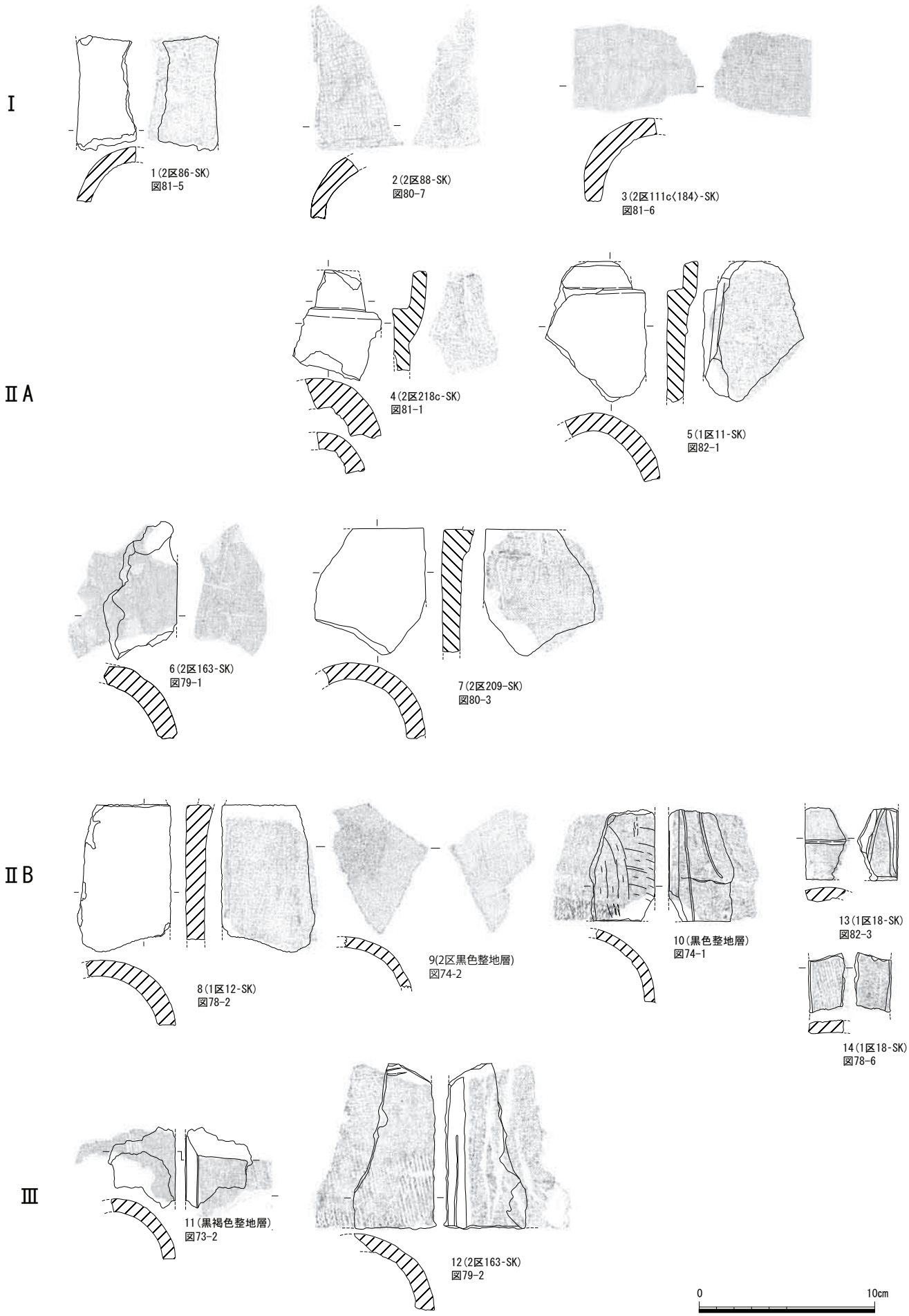


図96 伝大道寺跡遺跡群出土丸瓦·熨斗瓦型式変遷図(案)

図面・写真図版

1. 全景（東から）

2. B 期 65-SK 遺物出土状況 （北西から）

3. 68-SE（北から）

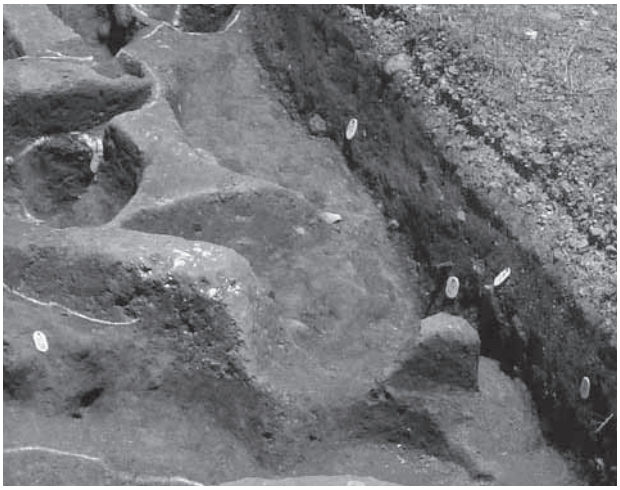
4. B 期 65-SK 完掘状況 （北西から）

5. A 期 70・77-SK 遺物出土状況（北東から）

２区遺構検出状況１

1. 全景（南から）

2. 112-SK（南から）



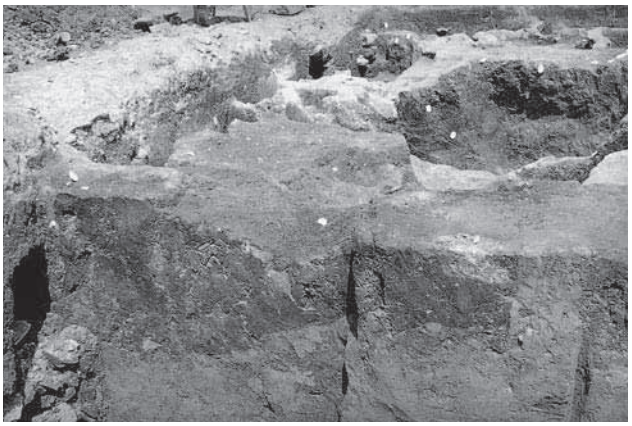
3. 116-SK（南から）

4. 153・163-SK 遺物出土状況（南から）

5. 163-SK　完掘状況（南から）

1. 北側黒色整地層全景（北東から）

2. 黒色整地層 包含層４層（北西から）

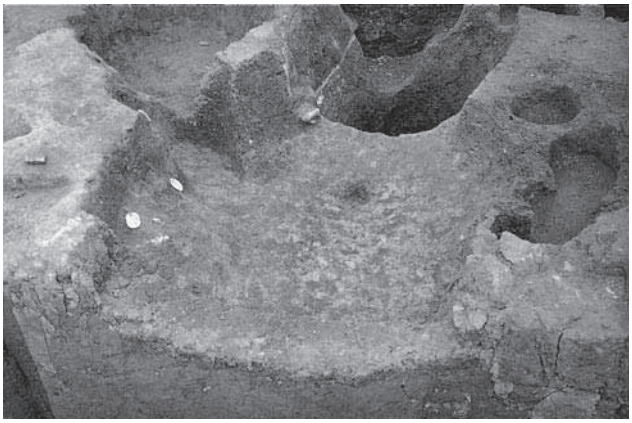


3. 黒色整地層断面（西から）

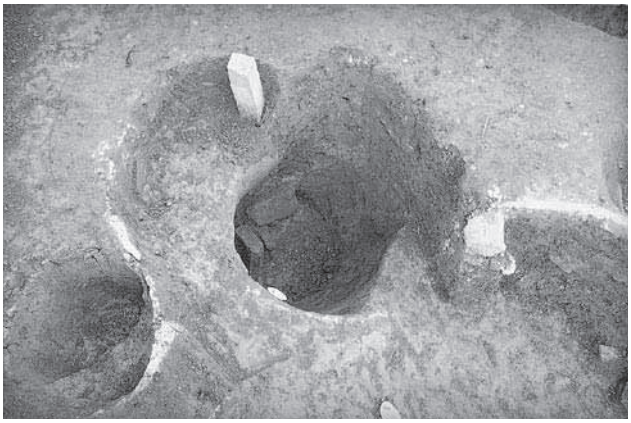
4. 243-SK　完掘状況（南から）

5. 153b-SK（北東から）

２区遺構検出状況３



1. A 期 169-SK　完掘状況（東から）

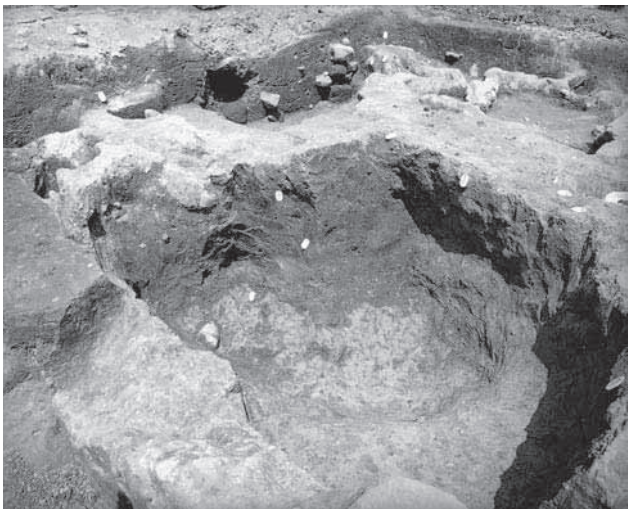


2. A 期 172-SK　遺物出土状況（北から）

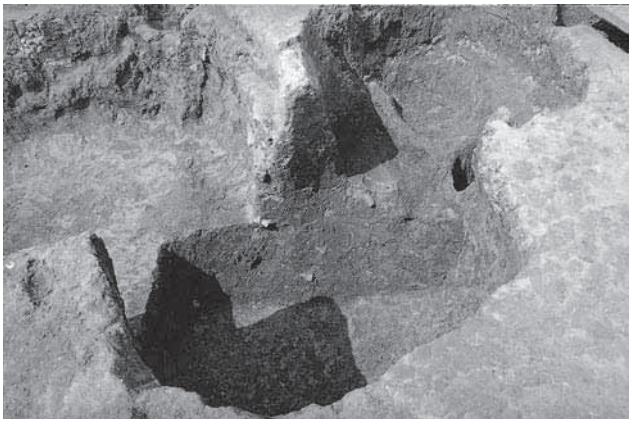
3. A 期 175-SK　完掘状況（北から）

4.　A 期 209-SK　完掘状況（南から）

5. A・C 期 106・130b-SK　石出土状況（南から）



6. A・C 期 106・229-SK　完掘状況（南西から）



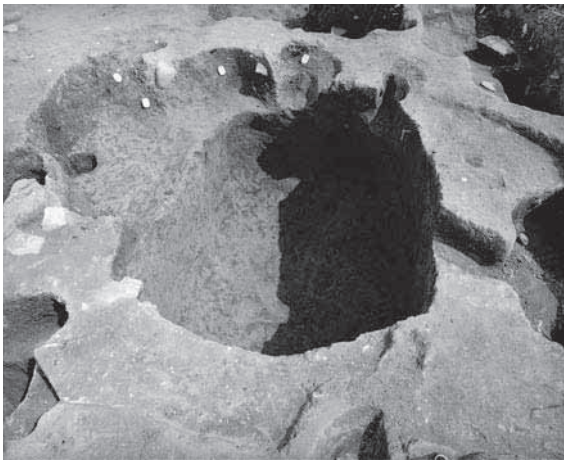
7. B 期 38-SK　完掘状況（南西から）

8. 26-SK　石出土状況（南から）

1. 84-SK　礎石・瓦検出状況（南西から）

2. 91-SK　完掘状況（東から）

3. 107-SK　完掘状況（北から）

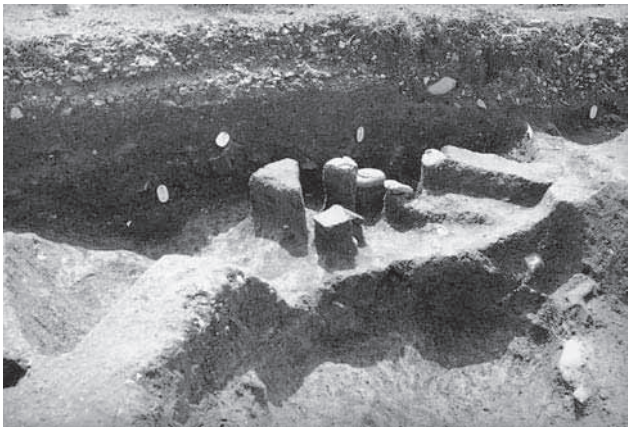


4. 111b-SK　完掘状況（南から）

5. 113-SK　下層出土遺物検出状況（北東から）

6. 134a-SK　石組検出状況（南西から）

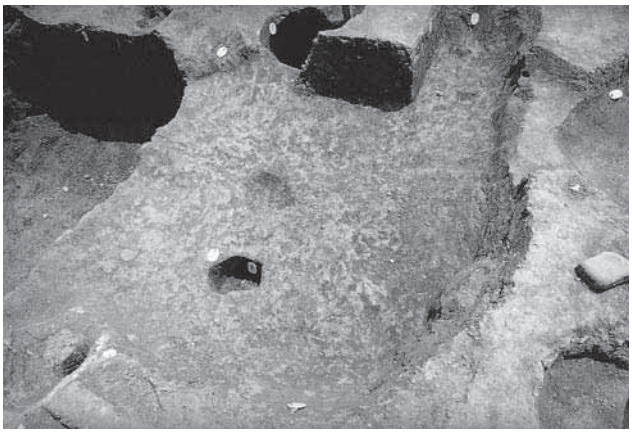
7. 134b-SK　石組検出状況（南から）



8. 149-SK 埋１層遺物出土状況（西から）

1. 161-SK　完掘状況（北から）

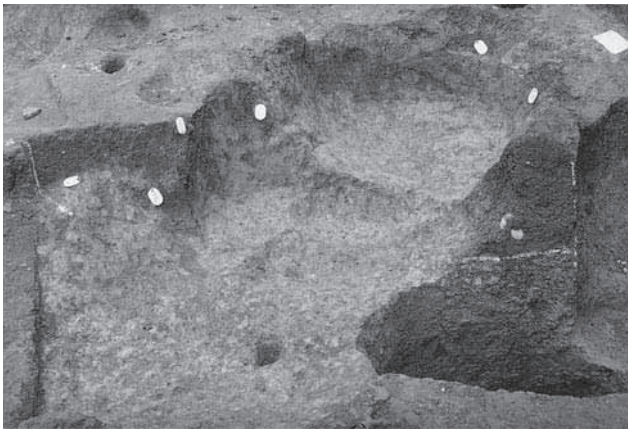
2. 184-SK　完掘状況（北から）



3. 211-SK　完掘状況（北から）

4. 216a-SK 遺物出土状況（南西から）

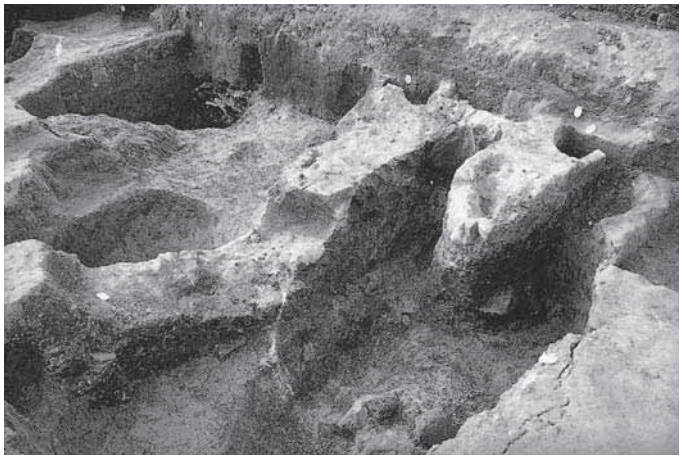
5. 218c-SK　完掘状況（西から）



6. 225-SK　完掘状況（北から）

7. 240-SK　完掘状況（南から）

8. 241・245-SK　完掘状況（西から）



1. 黒褐色整地層 247-SK 完掘状況（南から）

2. 37-SE　井戸石組検出状況（東から）

3. 31-SX　完掘状況（南から）

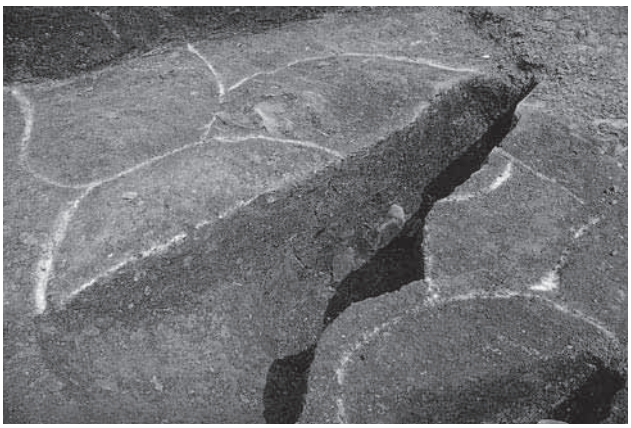
4. 31-SX 石組取り上げ状況（北東から）

5. 96・98-SB（ぐり石の溝を伴う建物）検出状況（東から）

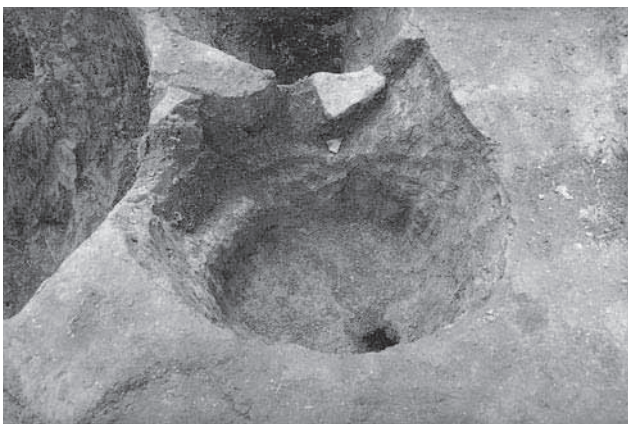
1区遺構検出状況1

1. 1区4層上面完掘状況（11・12-SK他）（南西から）

2. 18-SK　布目瓦出土状況（北から）



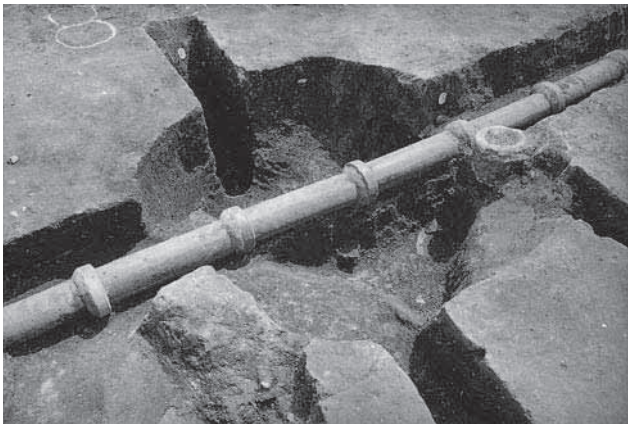
3. 17・18-SK土層断面（西から）



4. 40a-SK　完掘状況（東から）

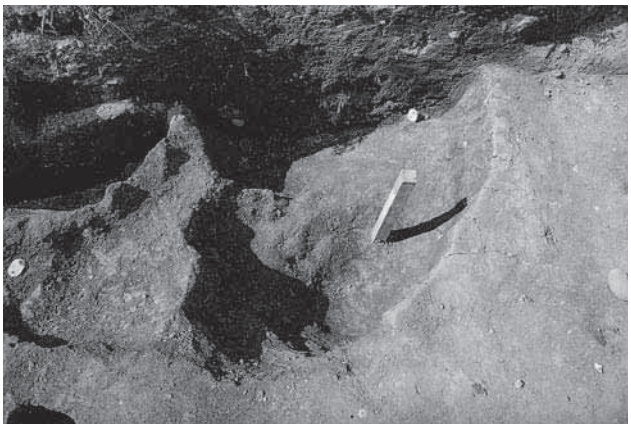
5. 54-SK　完掘状況（南東から）

1. 54b-SP　完掘状況（南から）



2. 04-SK　完掘状況（北東から）

3. 05-SK　完掘状況（西から）

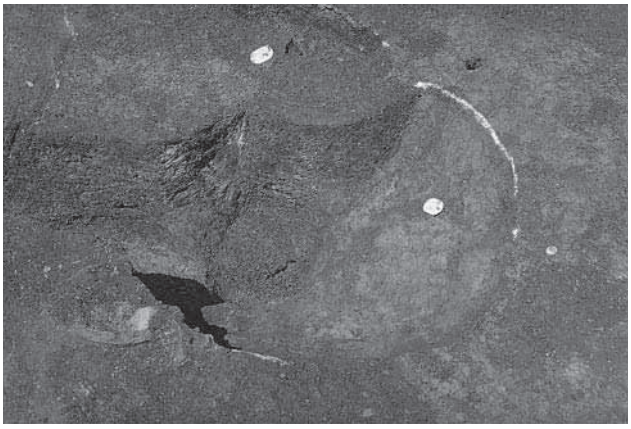


4. 06-SK　完掘状況（南から）

5. 08・20-SK 土層断面（南から）

6. 09-SK　遺物出土状況（北から）

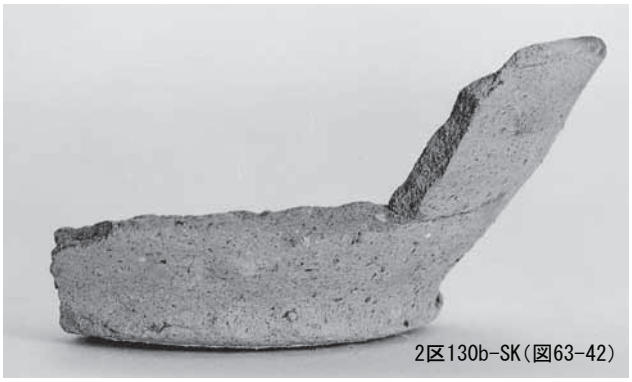
7. 11-SK　完掘状況（東から）



8. 17-SK　完掘状況（東から）

1区11-SK(図60-5)

2区85b-SK(図60-4)

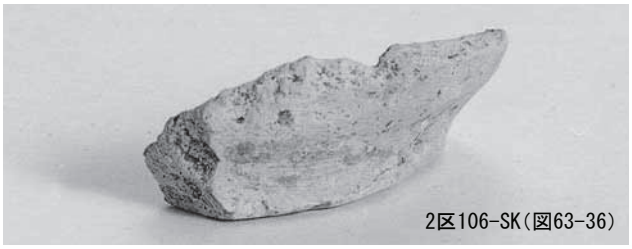

2区130b-SK(図63-42)

2区88-SK(図63-30)

2区89b-SK(図63-46)

2区89b-SK(図63-41)

2区91-SK(図63-27)

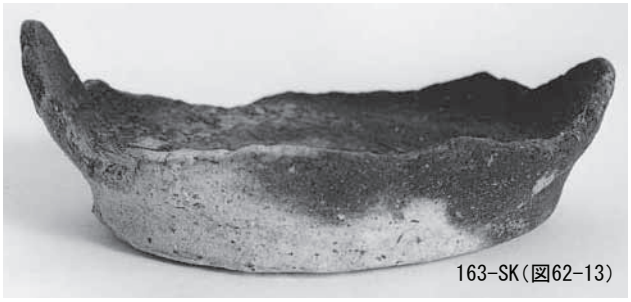

2区106-SK(図63-36)

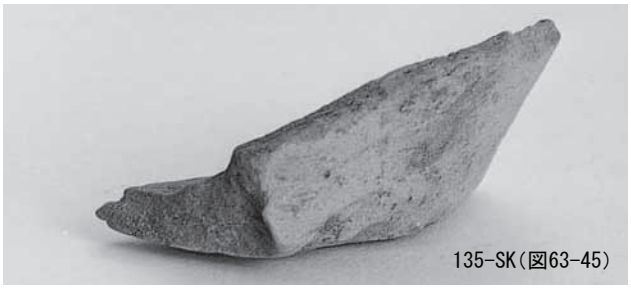
2区106-SK(図63-26)

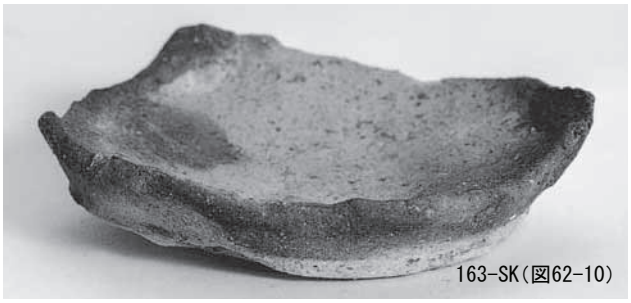
2区106-SK(図68-1)

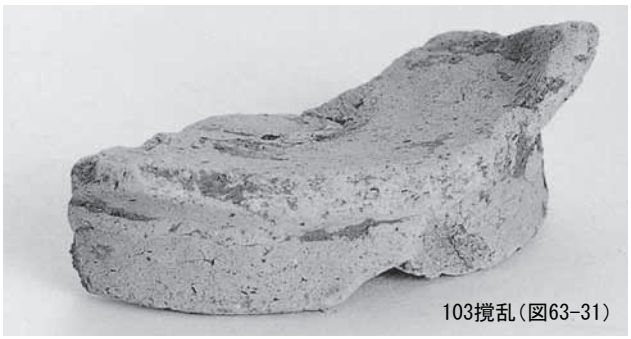
127-SK(図63-40)

104-SK(図63-20)


163-SK(図62-13)


135-SK(図63-45)


163-SK(図62-10)

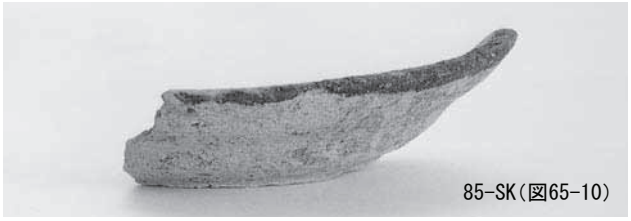

103撹乱(図63-31)

105-SE(図63-17)

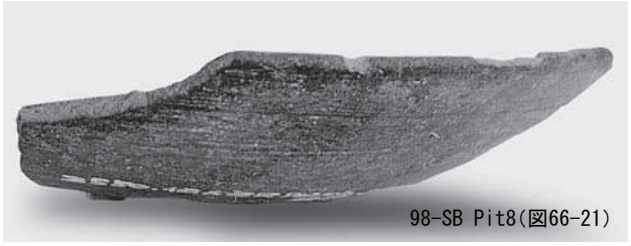
213-SP(図63-16)

168-SK(1)

31-SK(図66-9)


85-SK(図65-10)

85-SK(図65-9)


98-SB Pit8(図66-21)

91-SK(図68-11)

91-SK(図68-14)

2区出土遺物2

91-SK(図68-13)

91-SK(図68-15)

106-SK(図63-33)

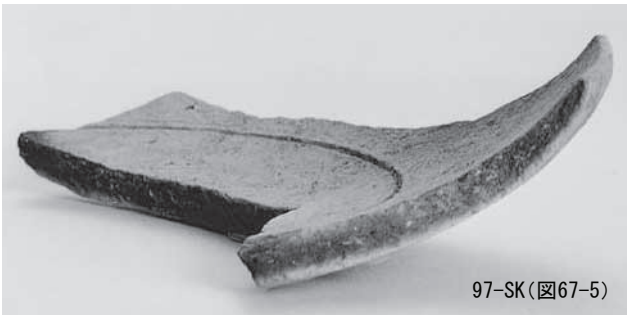
111-SK(図65-6)

111b-SK(図65-8)

114-SK(図66-16)

129-SK(図65-2)

134b-SK(図68-2)


97-SK(図67-5)

98-SB(図66-22)

98-SB(図66-20)

111-SK(図65-7)

114-SK(図66-15)

129-SK(図65-1)

134b-SK(図68-3)

149-SK(図65-5)

211-SK(図66-3)

208-SK(図63-43)

177・216a-SK
68-SE
(図66-19)

38-SX(図66-11)

172-SK(図65-12)

207-SK(図66-17)

211-SK(図66-4)

211-SK(図66-2)

216a-SK(図66-18)

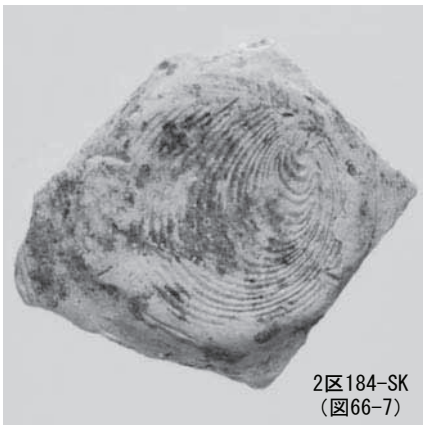
222-SK図65-3)

222-SK(図65-4)

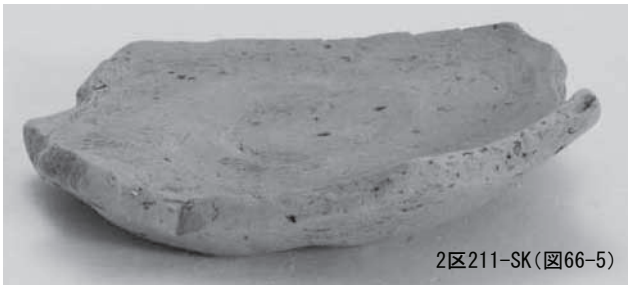
38-SX(図66-10)

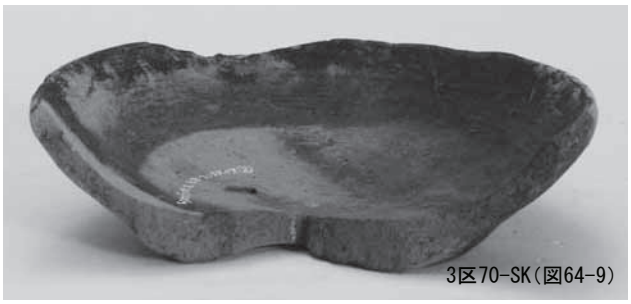
2・3区出土遺物4

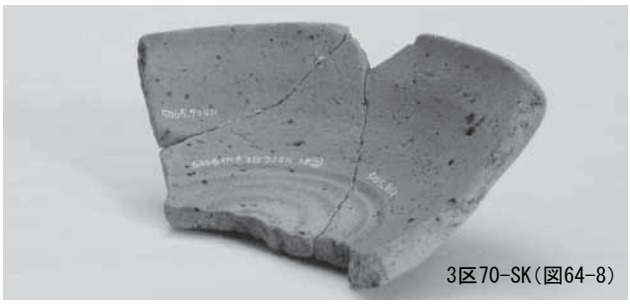
2区184-SK（図66-6）


2区184-SK
（図66-7）

2区209-SK（図68-6）

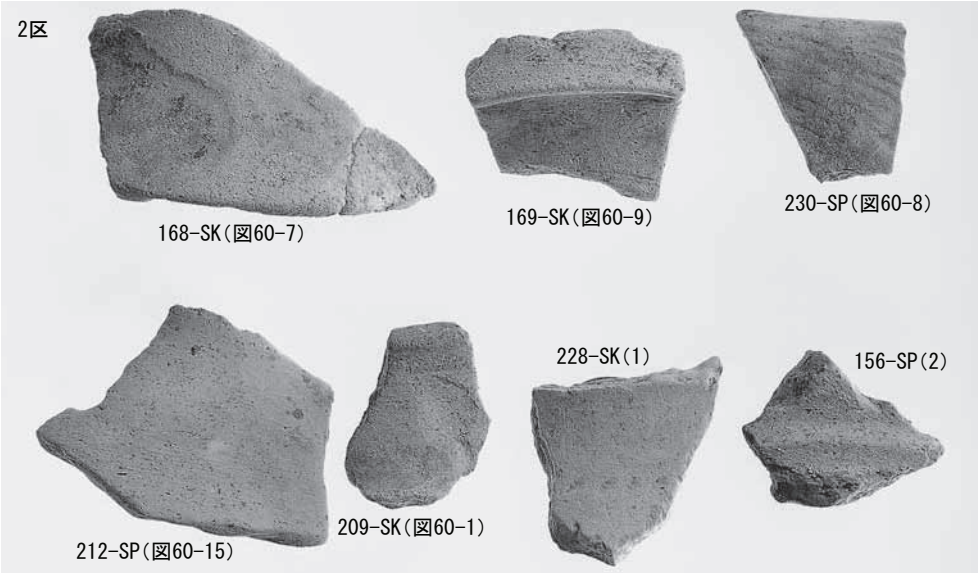

2区211-SK（図66-5）

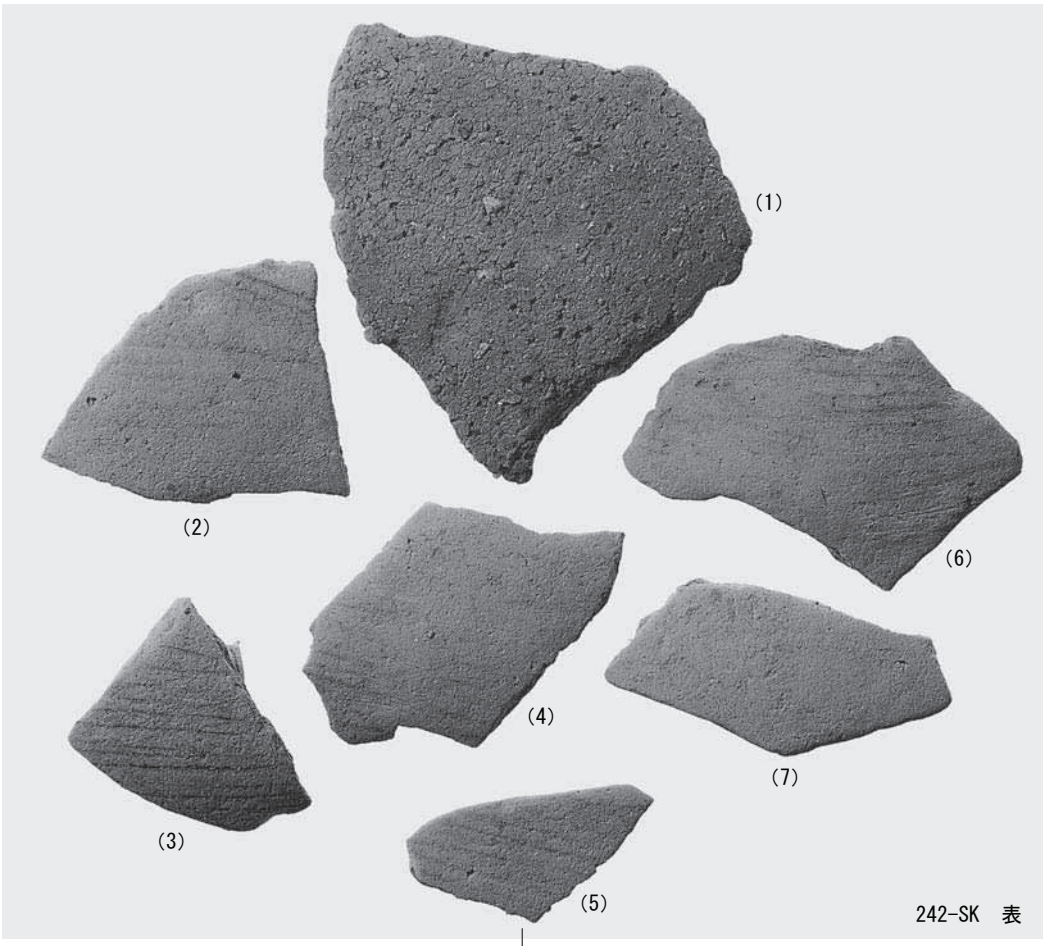

3区70-SK（図64-9）


3区70-SK（図64-8）

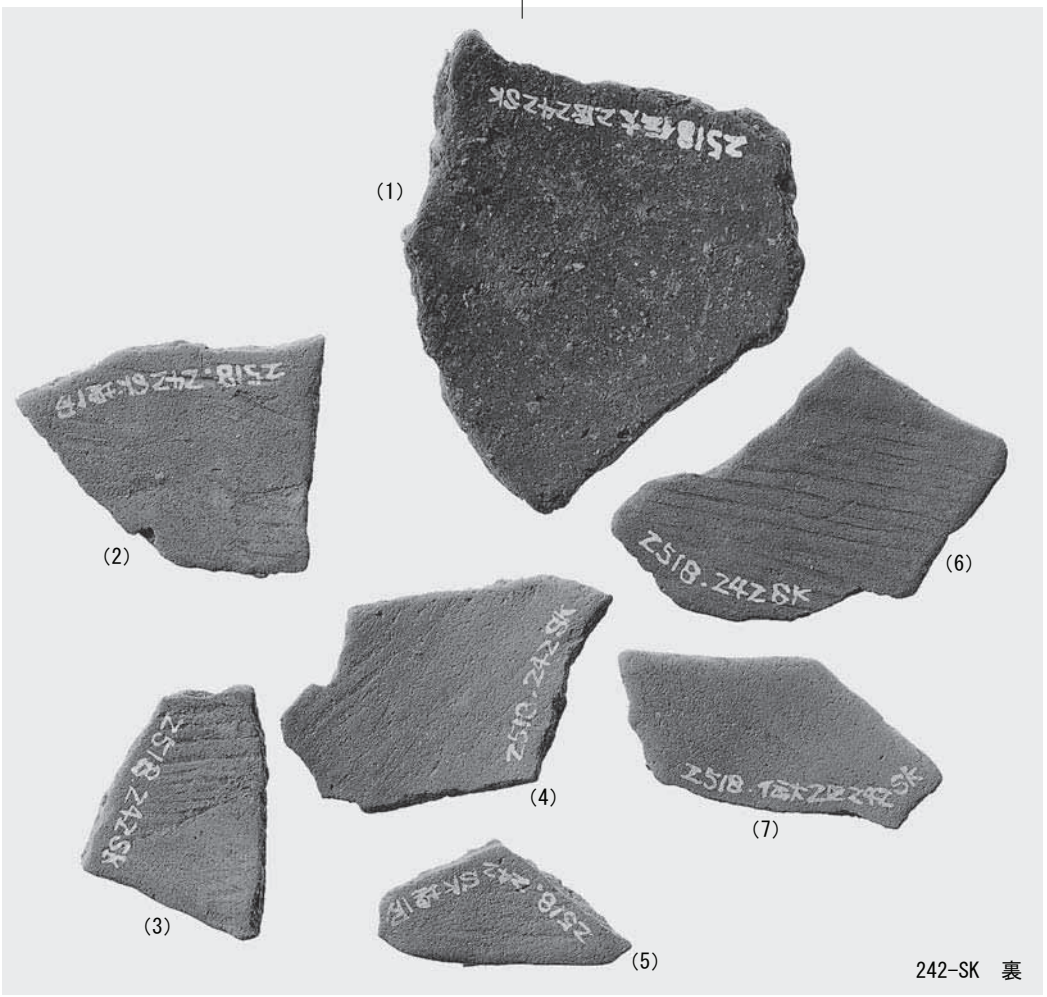
3区77-SK（図64-2）

3区77-SK（図64-3）





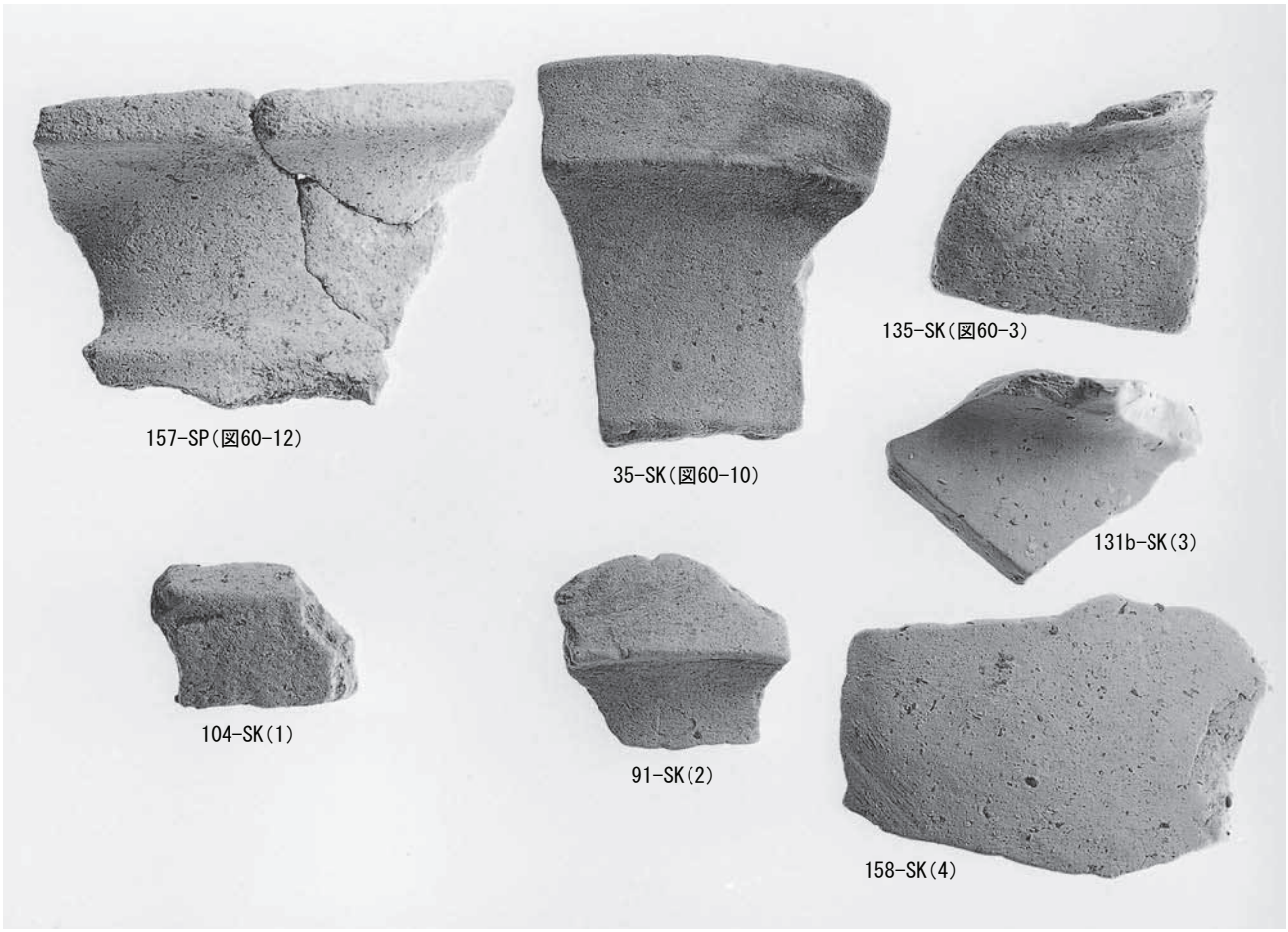
242-SK　表

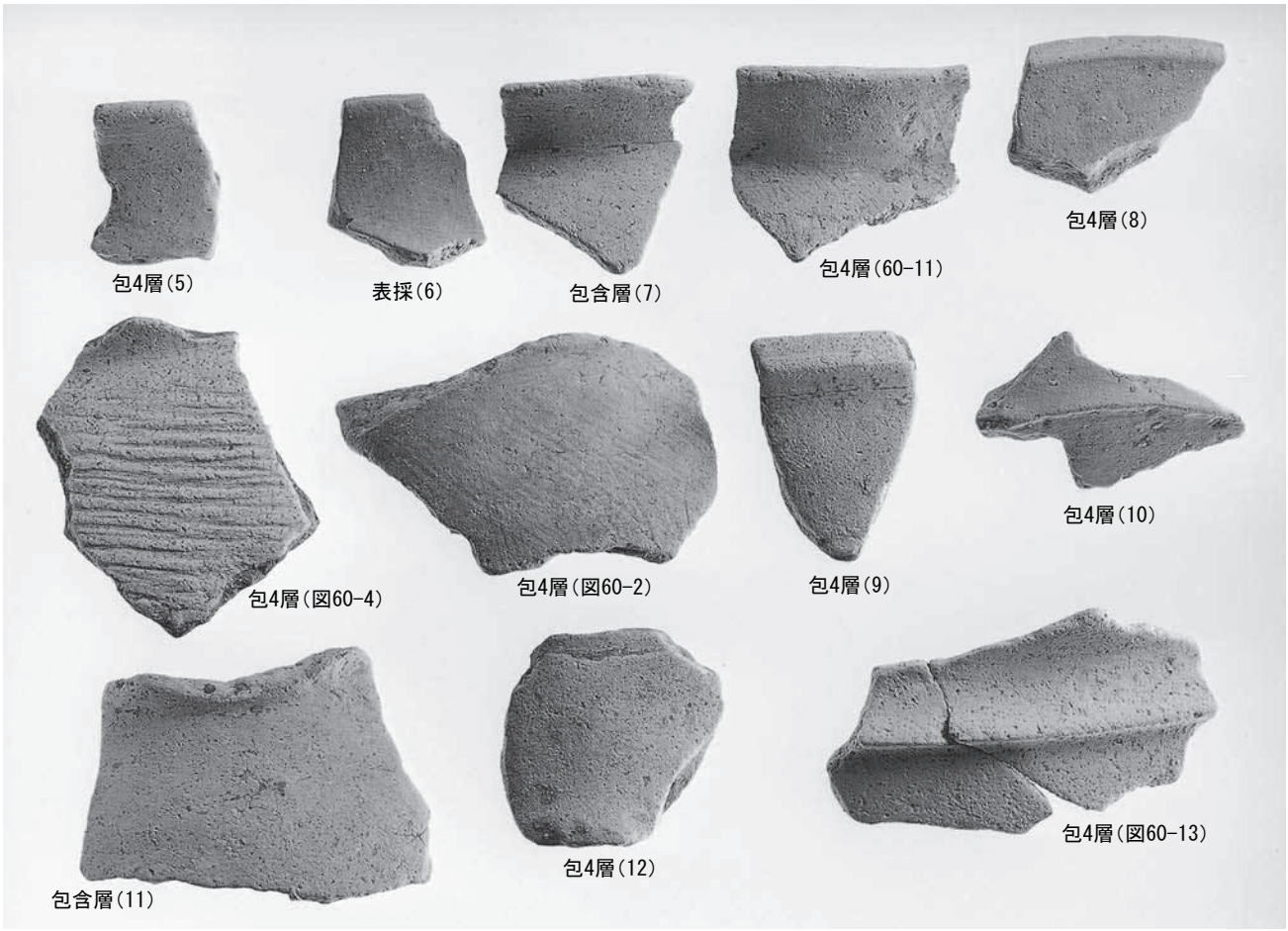


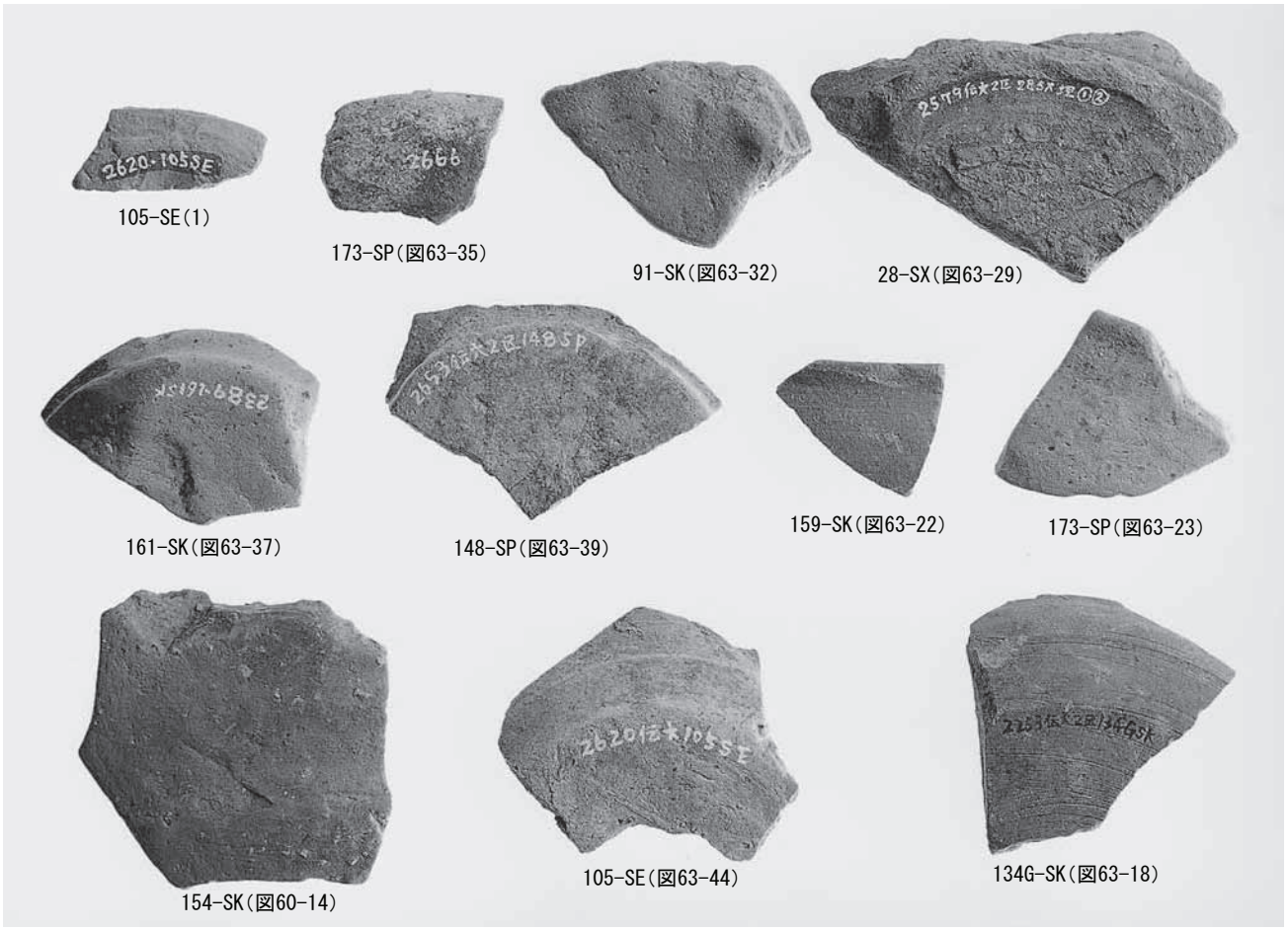
242-SK　裏

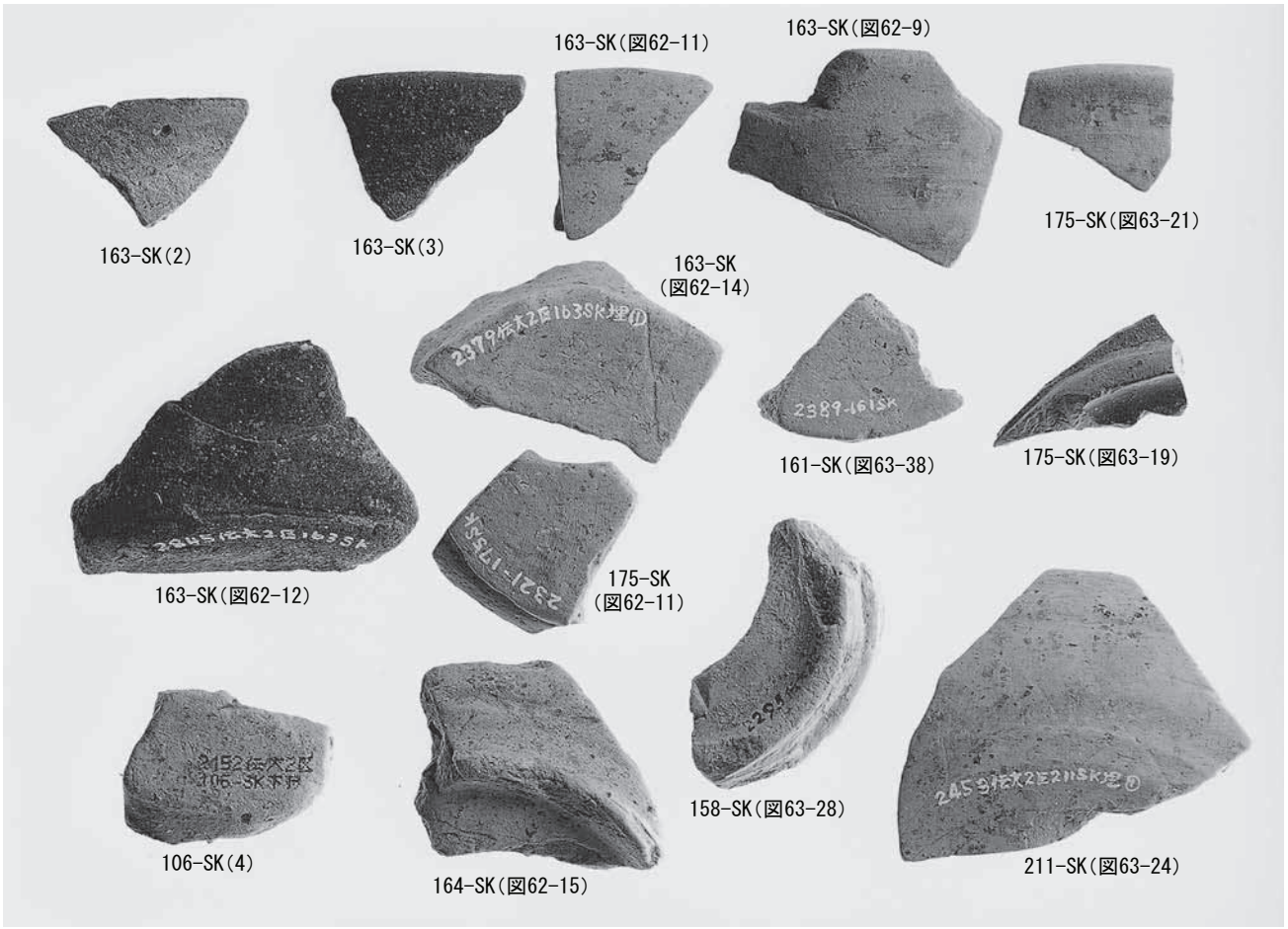
Ph. 16

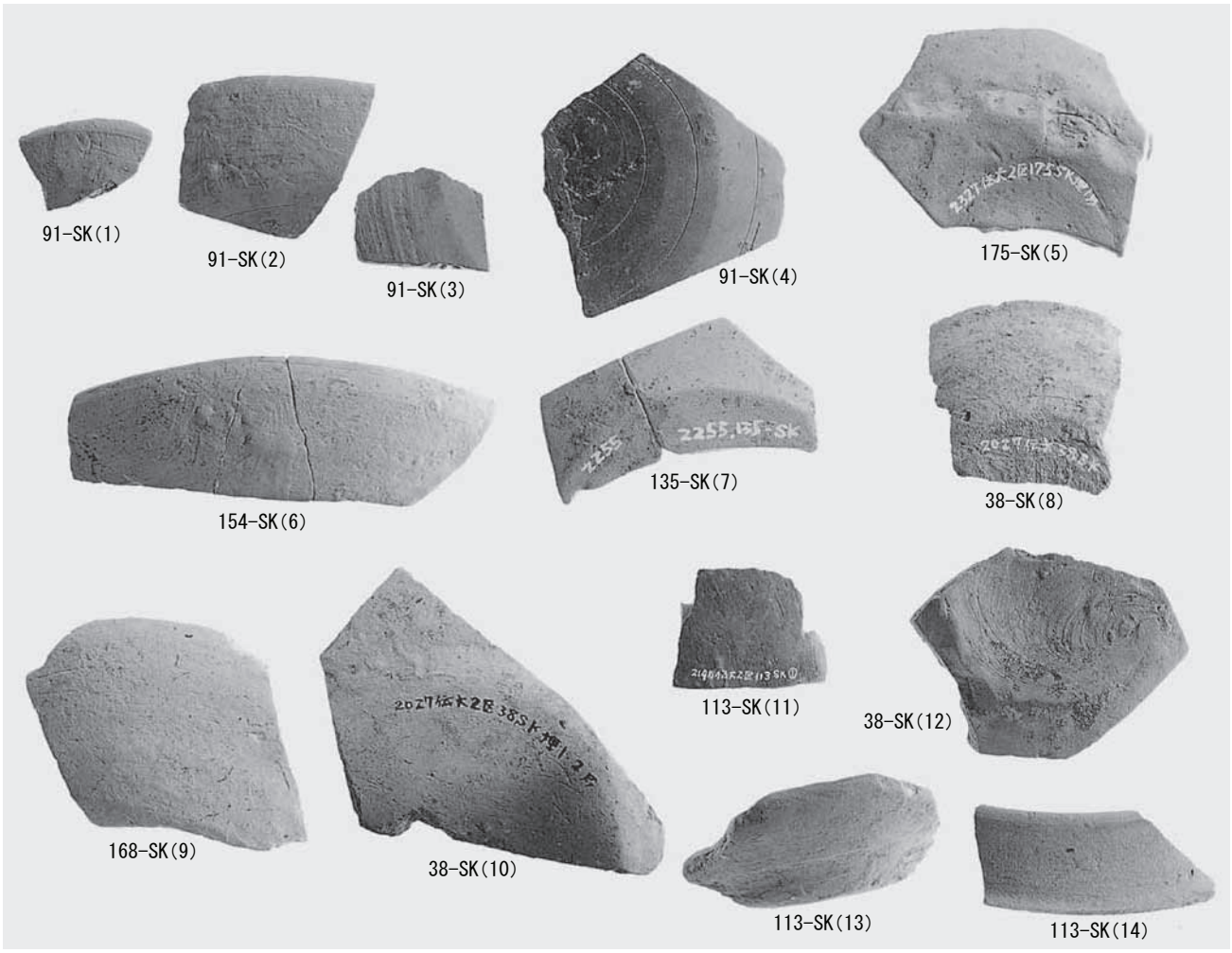
2区出土遺物6






105-SE(1)
173-SP(図63-35)
91-SK(図63-32)
28-SX(図63-29)
161-SK(図63-37)
148-SP(図63-39)
159-SK(図63-22)
173-SP(図63-23)
154-SK(図60-14)
105-SE(図63-44)
134G-SK(図63-18)


163-SK(図62-11)
163-SK(図62-9)
163-SK(2)
163-SK(3)
175-SK(図63-21)
163-SK
(図62-14)
161-SK(図63-38)
175-SK(図63-19)
163-SK(図62-12)
175-SK
(図62-11)
158-SK(図63-28)
106-SK(4)
164-SK(図62-15)
211-SK(図63-24)



91-SK(1)

91-SK(2)

91-SK(3)

91-SK(4)

175-SK(5)

154-SK(6)

135-SK(7)

38-SK(8)

168-SK(9)

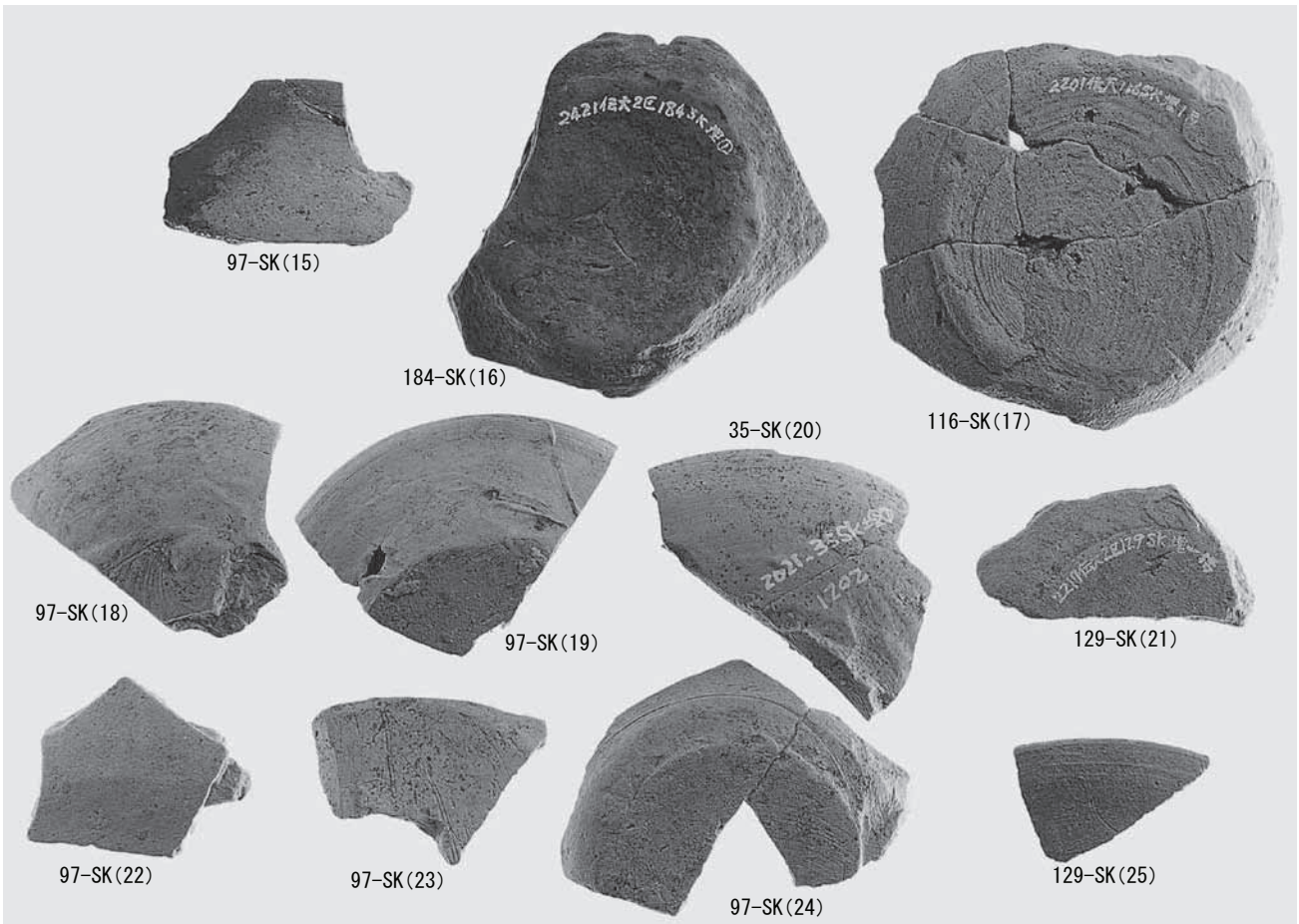
38-SK(10)

113-SK(11)

38-SK(12)

113-SK(13)

113-SK(14)



97-SK(15)

184-SK(16)

116-SK(17)

35-SK(20)

97-SK(18)

97-SK(19)

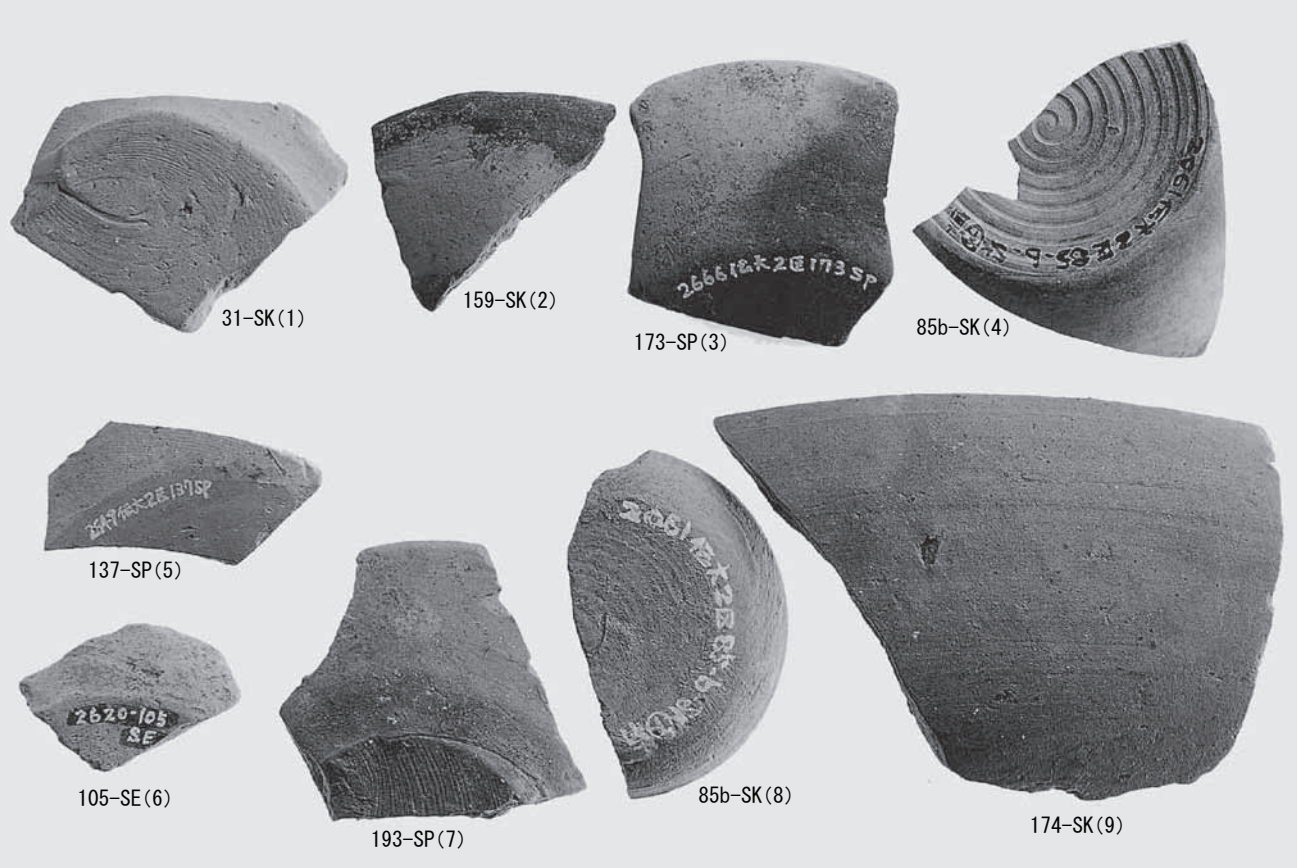
129-SK(21)

97-SK(22)

97-SK(23)

97-SK(24)

129-SK(25)



31-SK(1)

159-SK(2)

173-SP(3)

85b-SK(4)

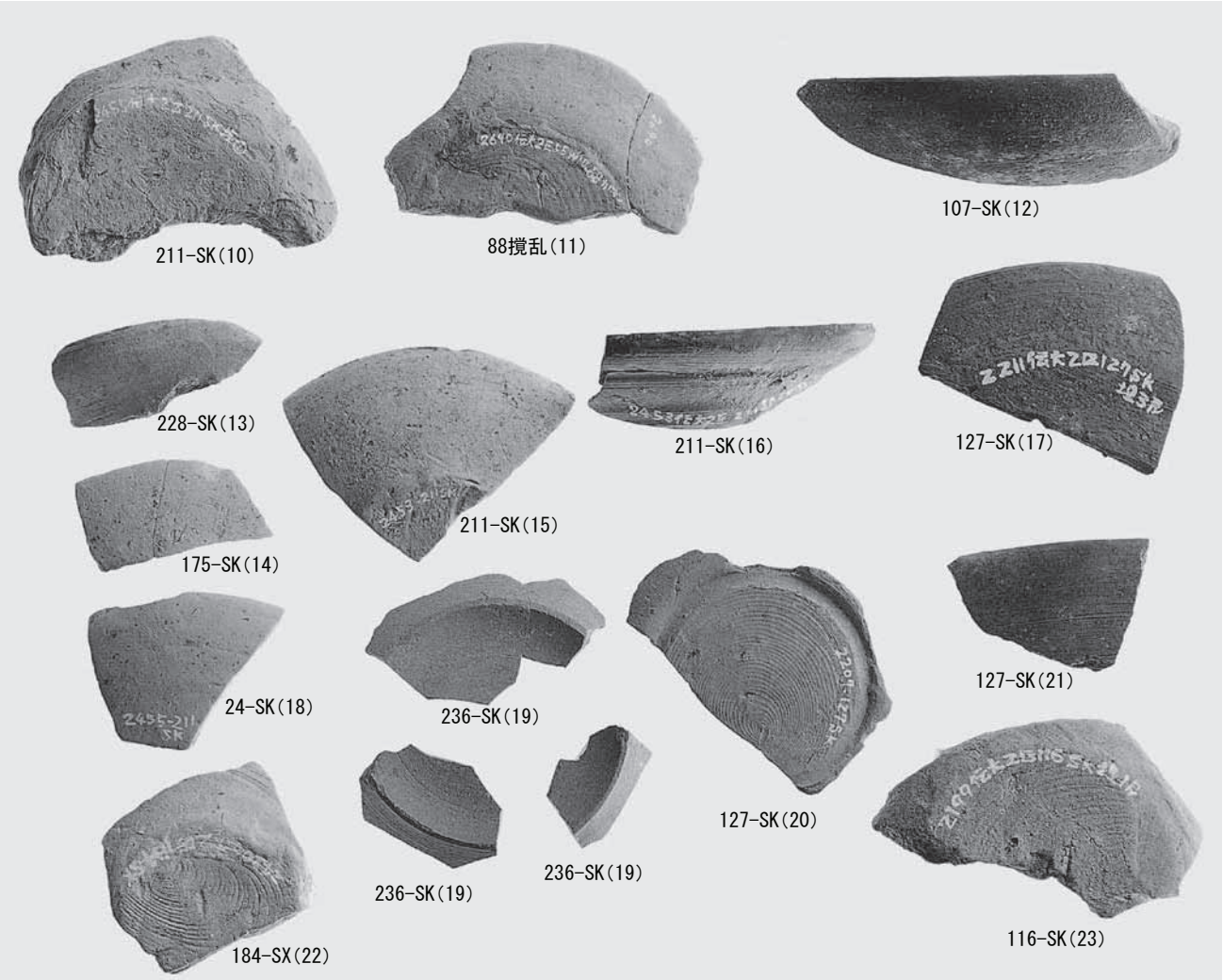
137-SP(5)

105-SE(6)

193-SP(7)

85b-SK(8)

174-SK(9)



211-SK(10)

88撹乱(11)

107-SK(12)

228-SK(13)

175-SK(14)

211-SK(15)

211-SK(16)

127-SK(17)

24-SK(18)

236-SK(19)

127-SK(20)

127-SK(21)

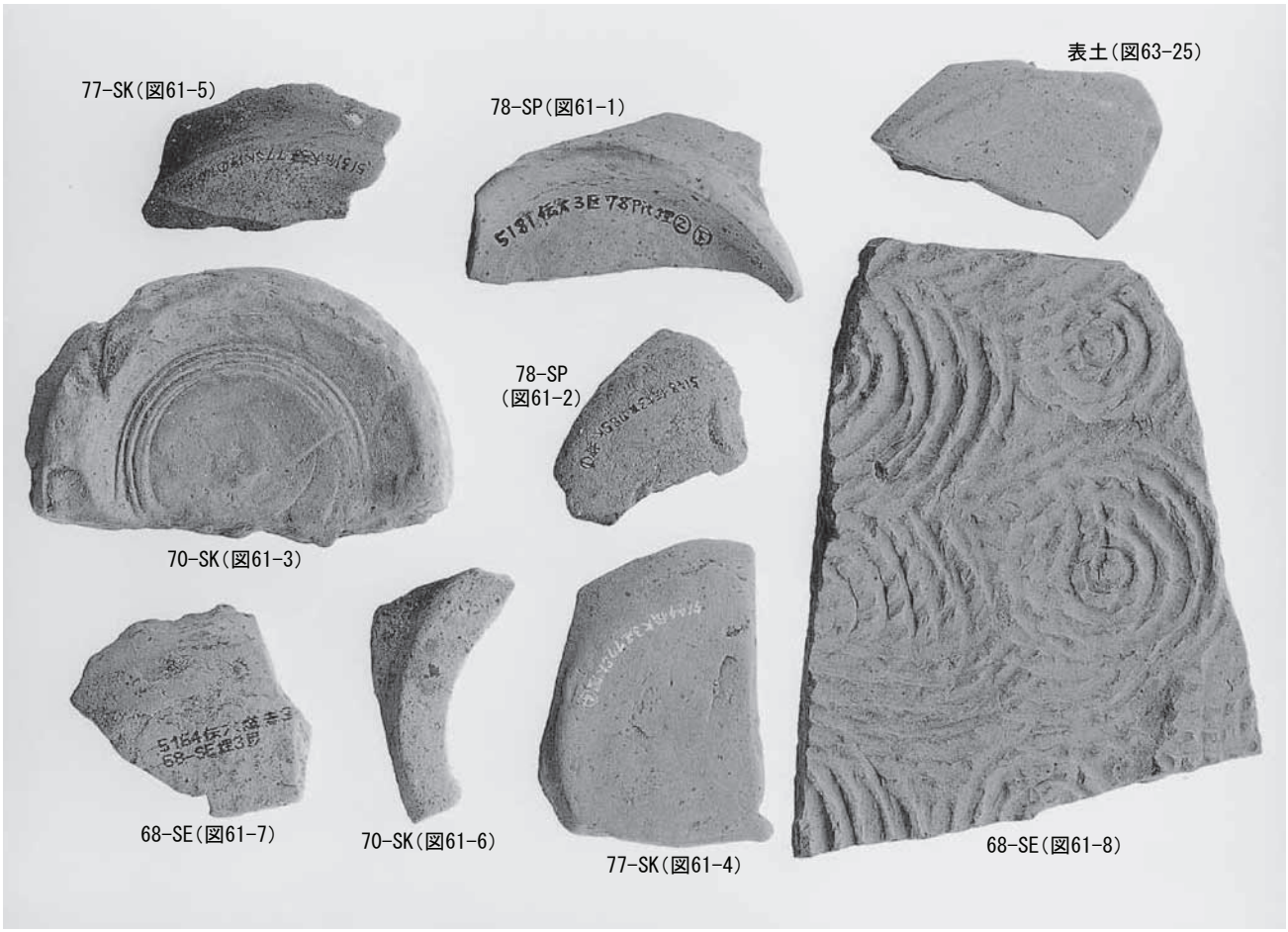
184-SX(22)

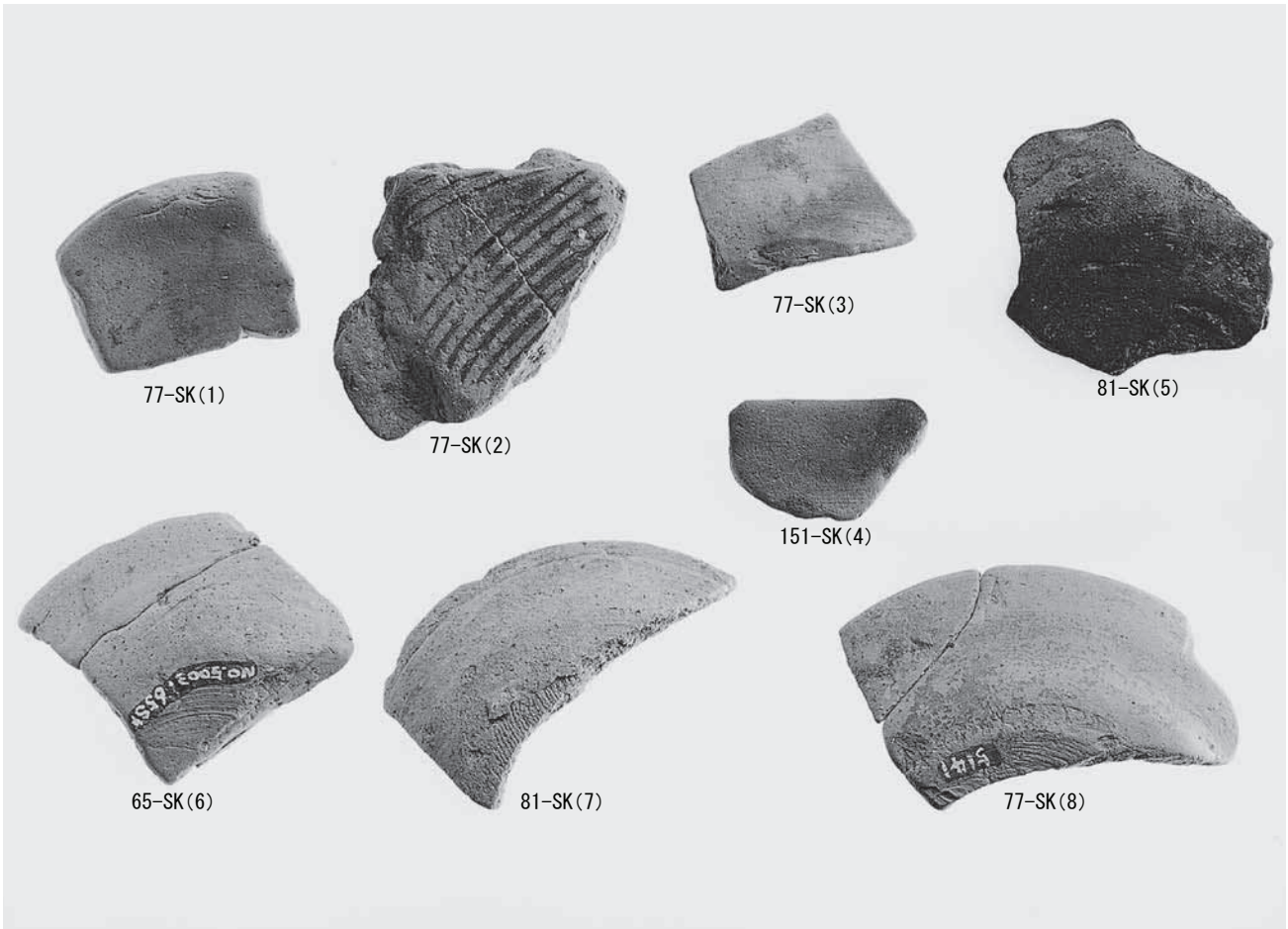
236-SK(19)

236-SK(19)

116-SK(23)

3区出土遺物


77-SK(図61-5)
78-SP(図61-1)
表土(図63-25)
78-SP
(図61-2)
70-SK(図61-3)
68-SE(図61-7)
70-SK(図61-6)
77-SK(図61-4)
68-SE(図61-8)

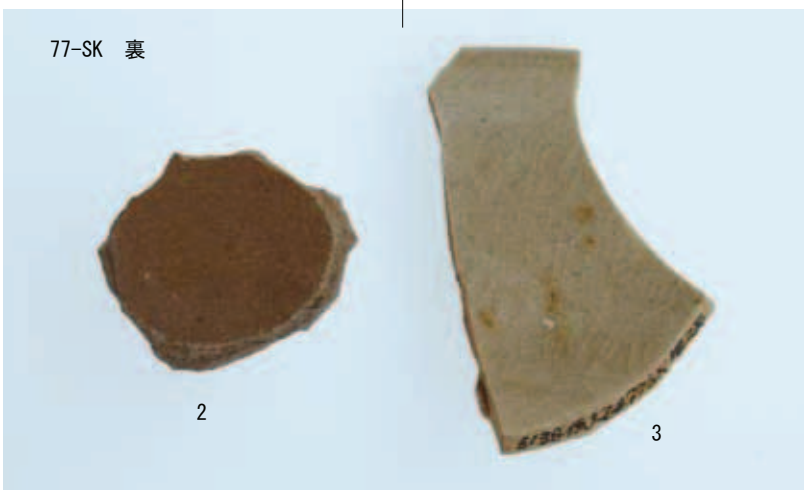

77-SK(1)
77-SK(2)
77-SK(3)
81-SK(5)
151-SK(4)
65-SK(6)
81-SK(7)
77-SK(8)

A期3区出土陶磁器1

70-SK(1)

70-SK(1)

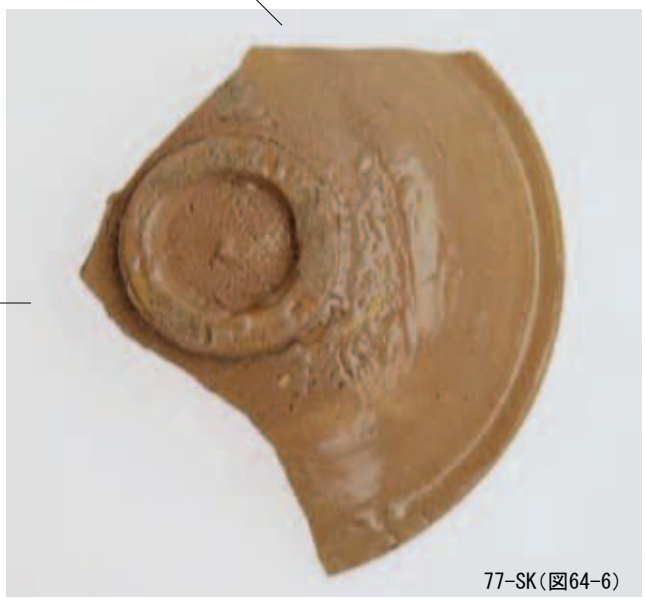
70-SK(1)



A期3区出土陶磁器2

77-SK(図64-6)

77-SK(図64-6)

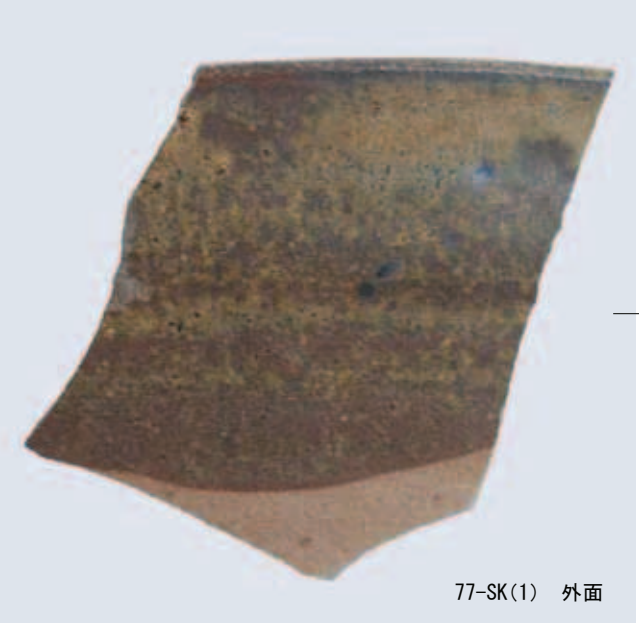


77-SK(図64-6)

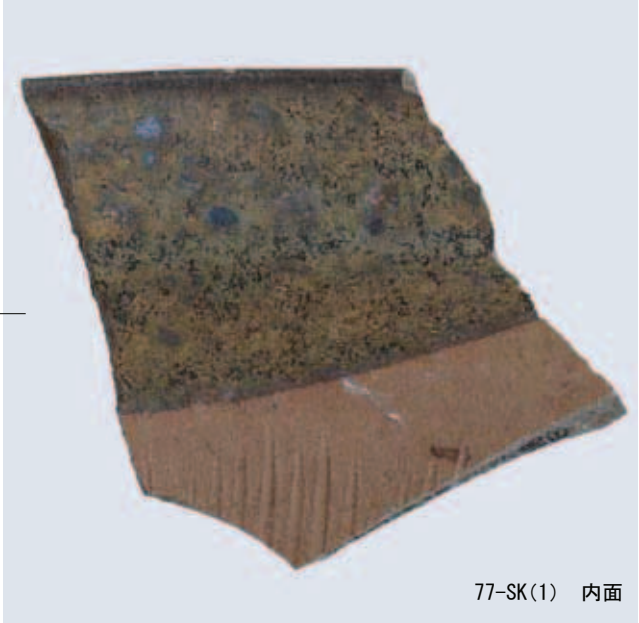
77-SK(1)

77-SK(1)

77-SK(1)



77-SK(1)　外面



77-SK(1)　内面

77-SK(図64-5)

77-SK(図64-5)

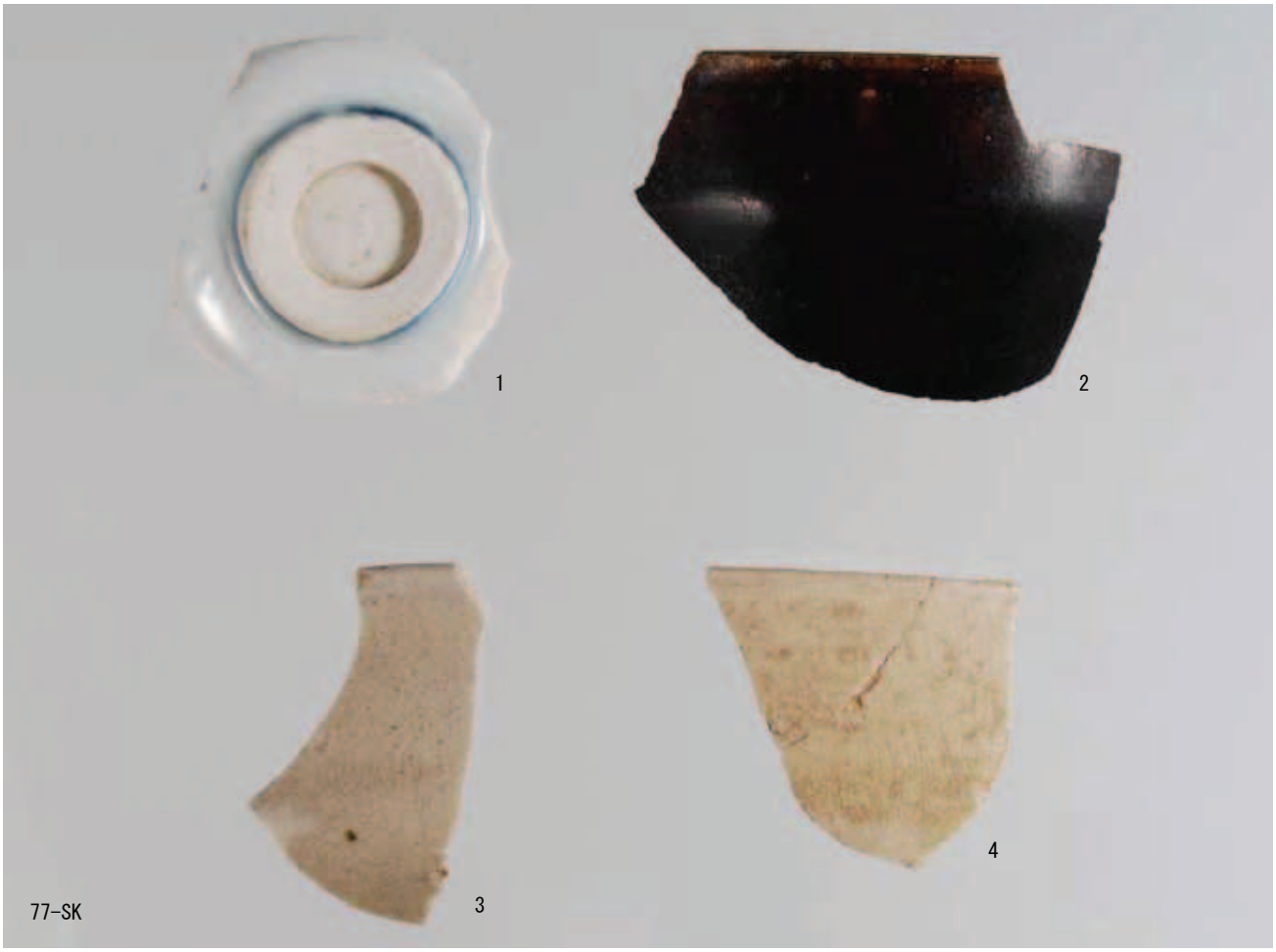
77-SK(図64-5)

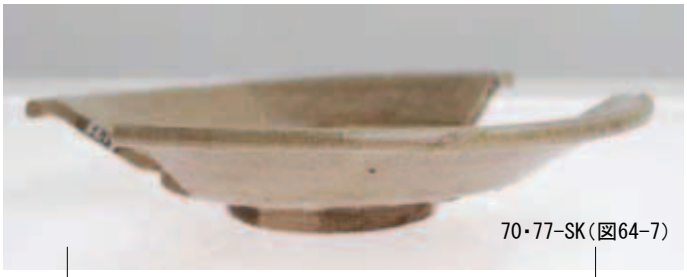
Ph. 24

A期3区出土陶磁器4

77-SK(図64-4)　外面

77-SK(図64-4)　内面





70・77-SK(図64-7)

70・77-SK図(64-7)

70・77-SK(図64-7)

70-SK(図64-10)　外面

70-SK(図64-10)　内面

Ph. 26

A期2区出土陶磁器1

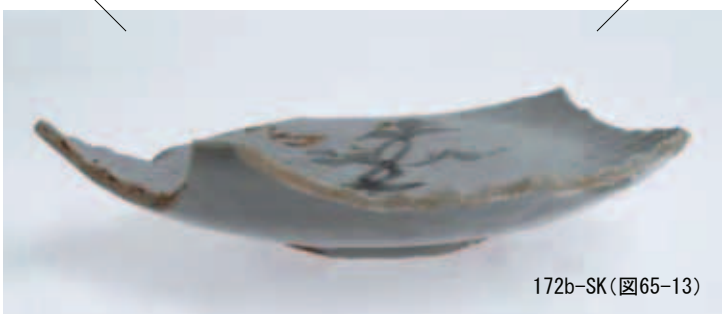
172-SK(図65-14)

172-SK(図65-14)

172-SK(図65-14)

172b-SK(図65-13)

172b-SK(図65-13)


172b-SK(図65-13)

175-SK(図68-5)

175-SK(図68-5)

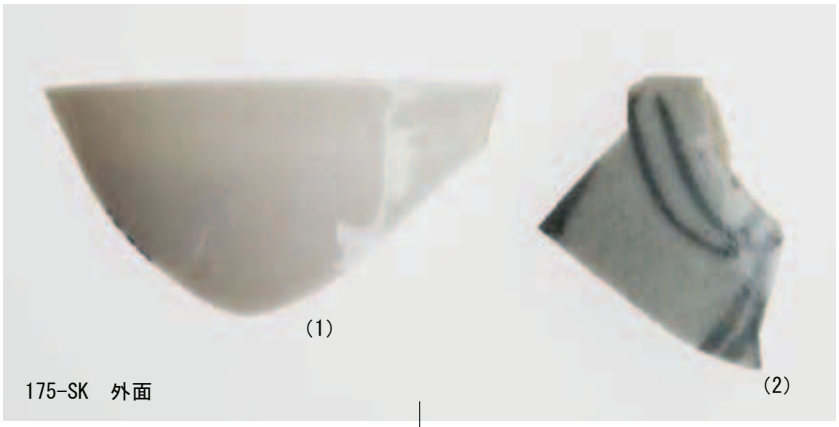
175-SK(図68-5)

175-SK(図68-4)

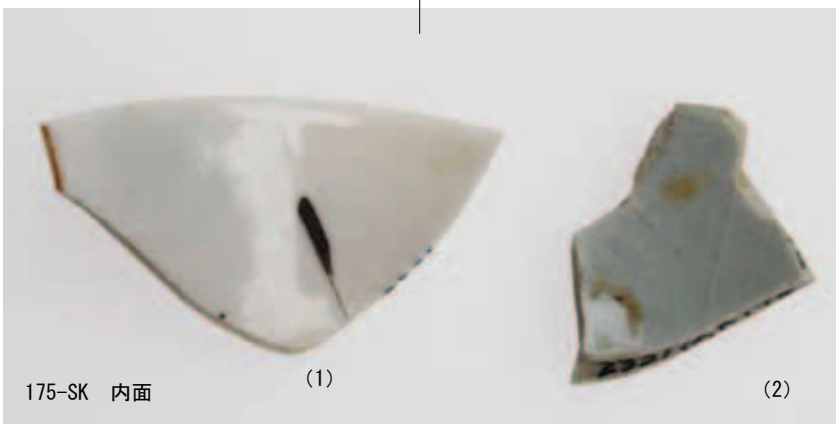
175-SK(図68-4)

175-SK(図68-4)

A期2区出土陶磁器3



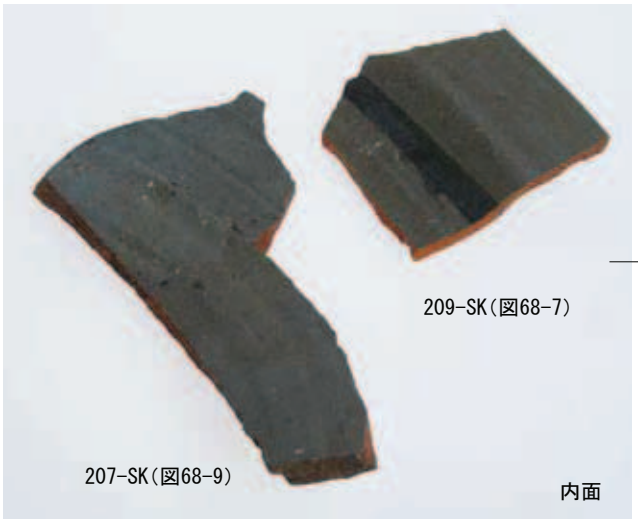
175-SK　外面



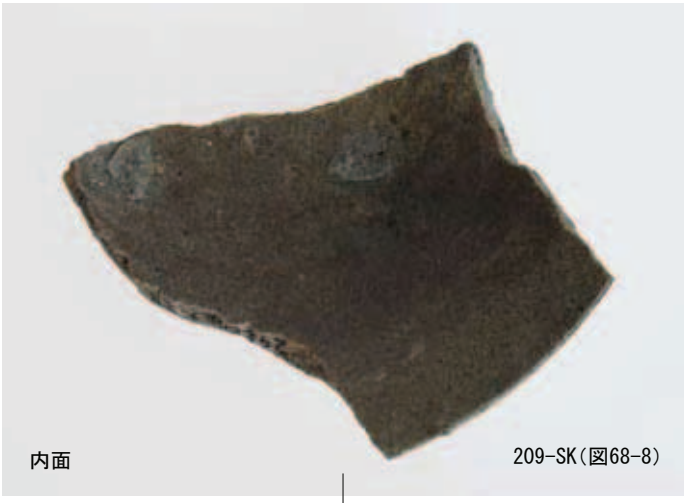
175-SK　内面

175-SK(3)　外面

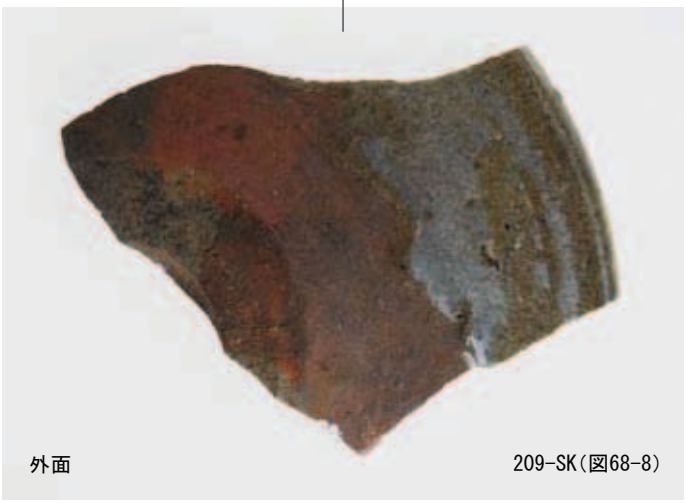
175-SK(3)　内面

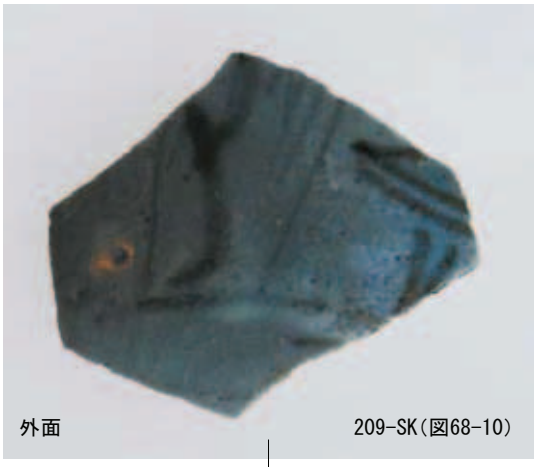

209-SK（図68-7）
207-SK（図68-9）
内面

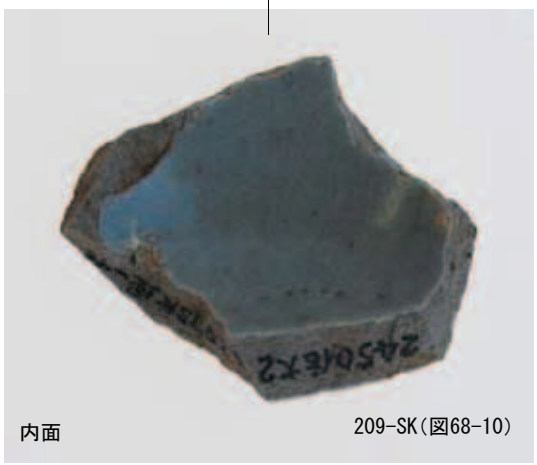
209-SK（図68-7）
207-SK（図68-9）
外面


内面
209-SK（図68-8）

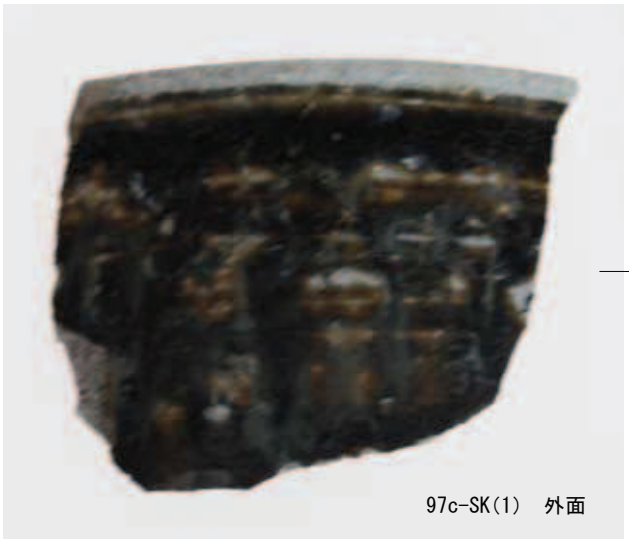
立面
209-SK（図68-8）


外面
209-SK（図68-8）

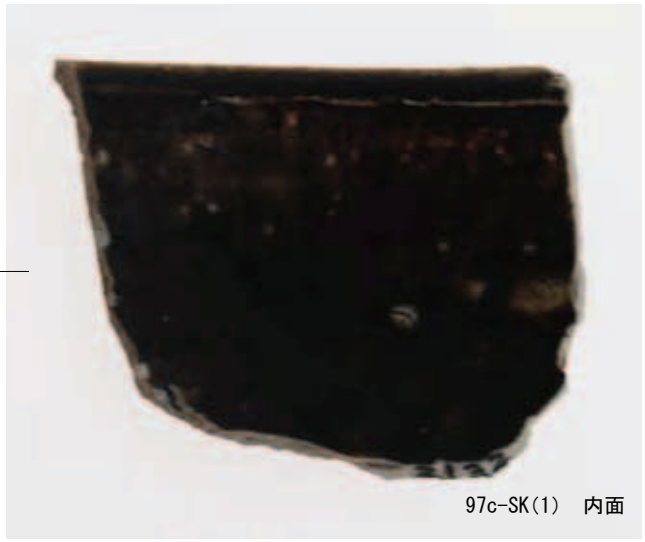

外面
209-SK（図68-10）


内面
209-SK（図68-10）

B期2区出土陶磁器1



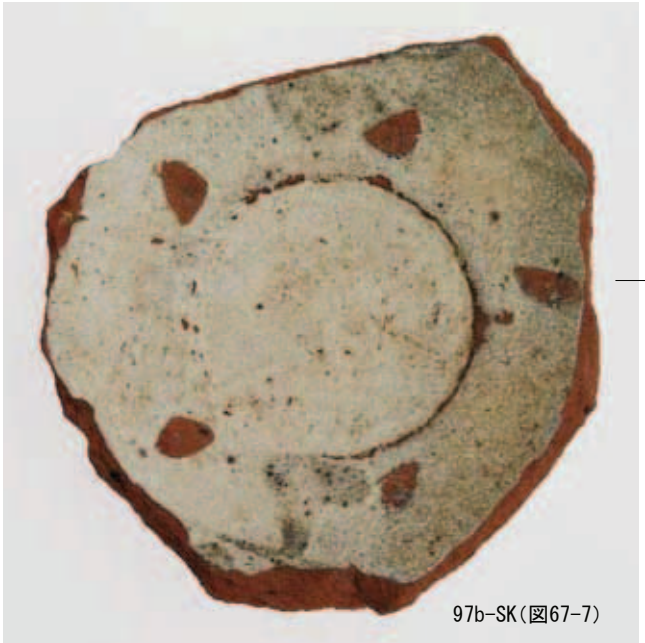
97c-SK(1)　外面



97c-SK(1)　内面

38-SK(2)

97b-SK(図67-7)

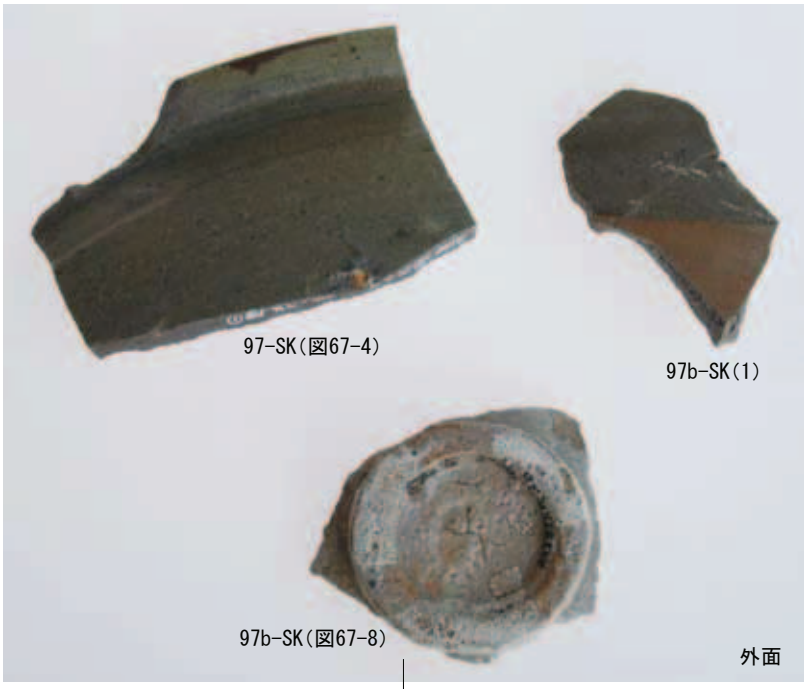


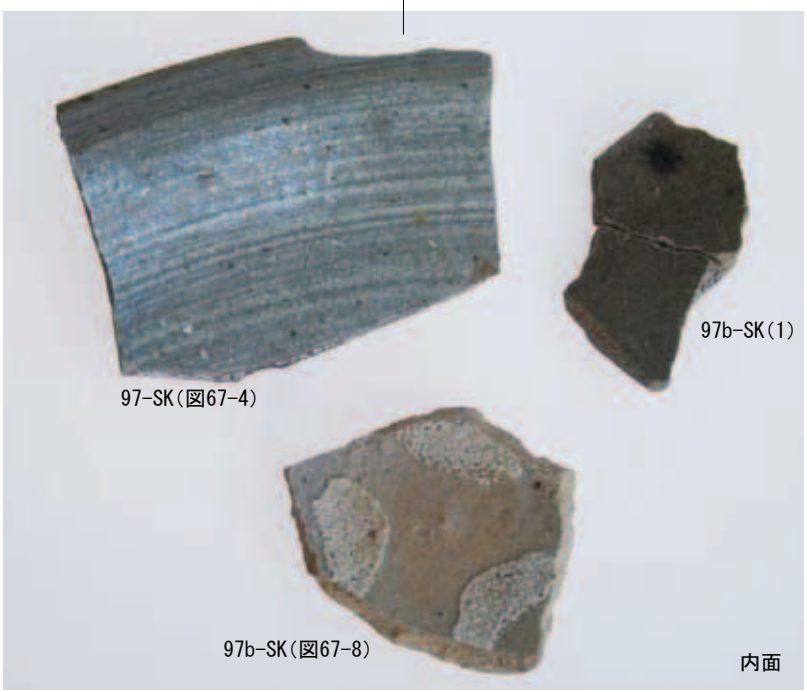
97b-SK(図67-7)

97b-SK(図67-7)

38-SK(図66-12)

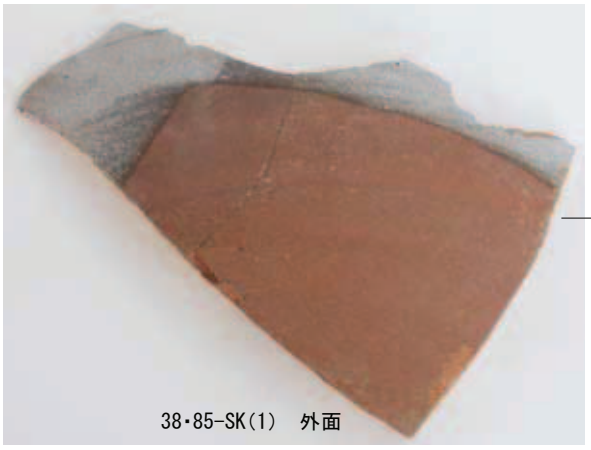
38-SK(図66-12)





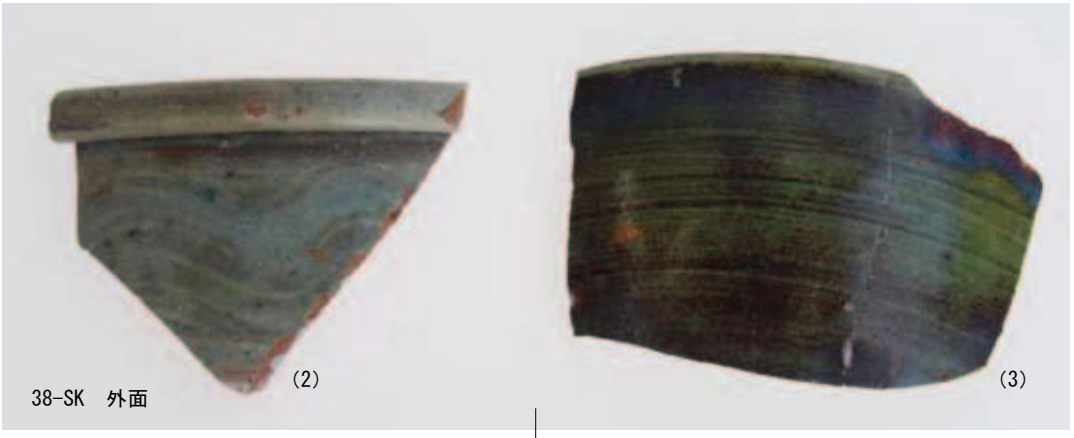
Ph. 32

B期2区出土陶磁器3



38･85-SK(1)　外面

38･85-SK(1)　内面



38-SK　外面

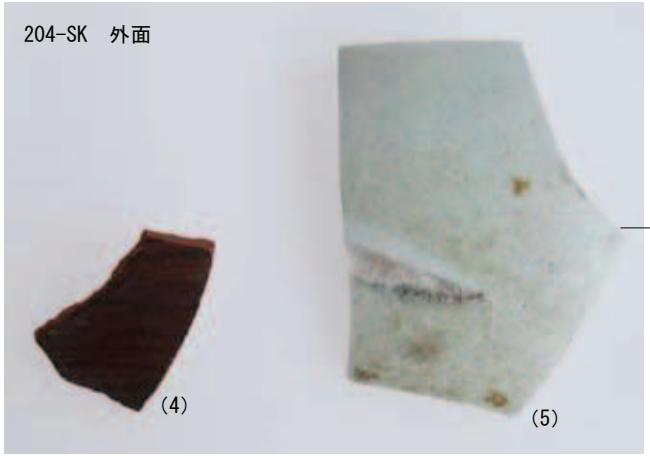
(2)

(3)

38-SK　内面

(2)

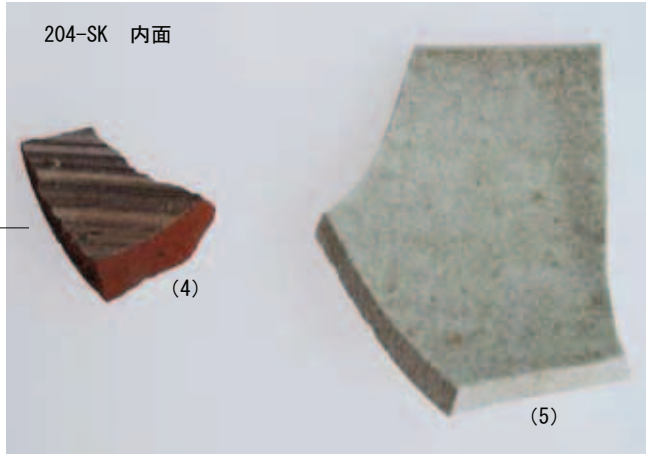
(3)



204-SK　外面

(4)

(5)

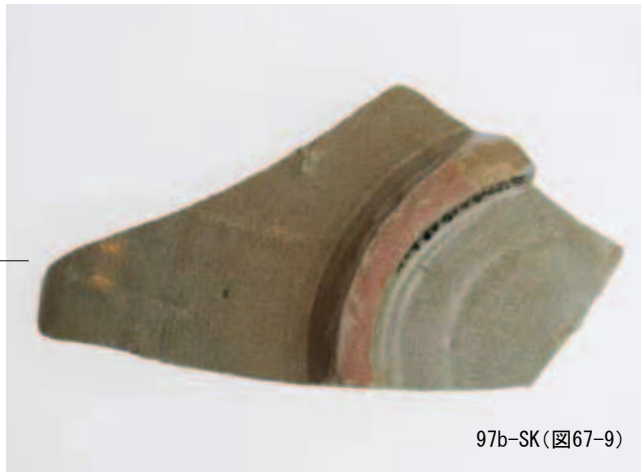


204-SK　内面

(4)

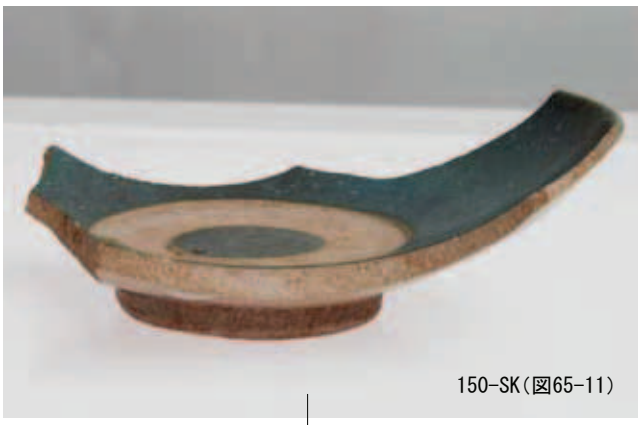
(5)

97b-SK(図67-9)

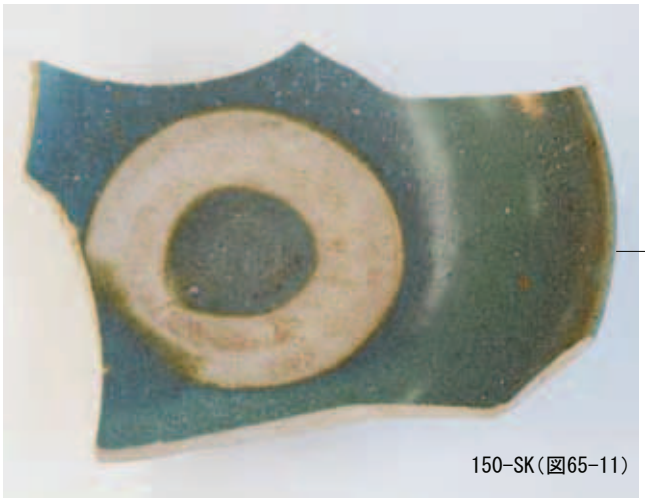


97b-SK(図67-9)

97b-SK(図67-9)

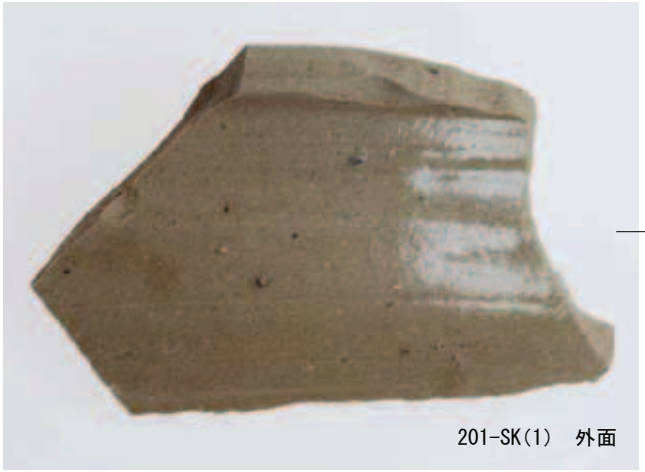


150-SK(図65-11)

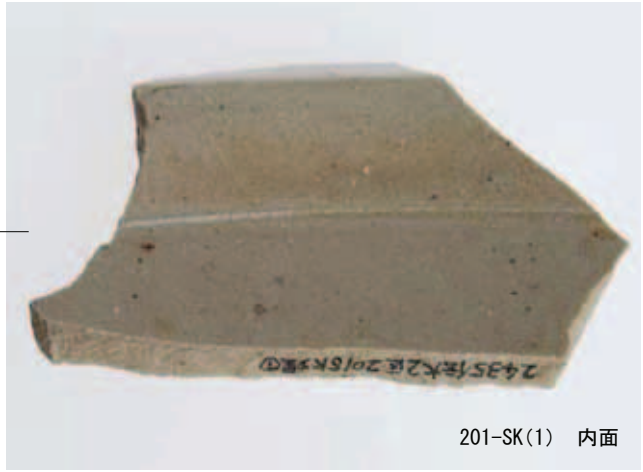


150-SK(図65-11)

150-SK(図65-11)



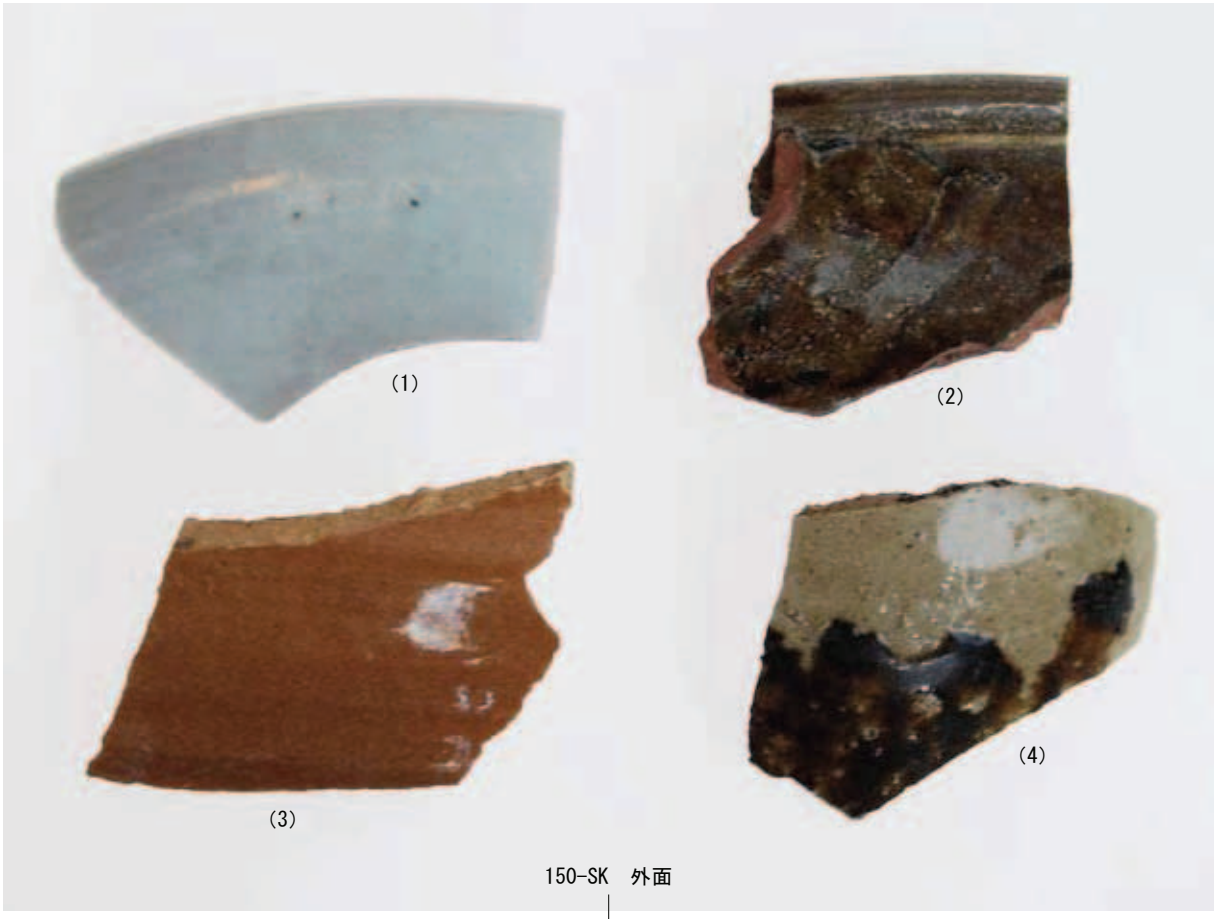
201-SK(1)　外面



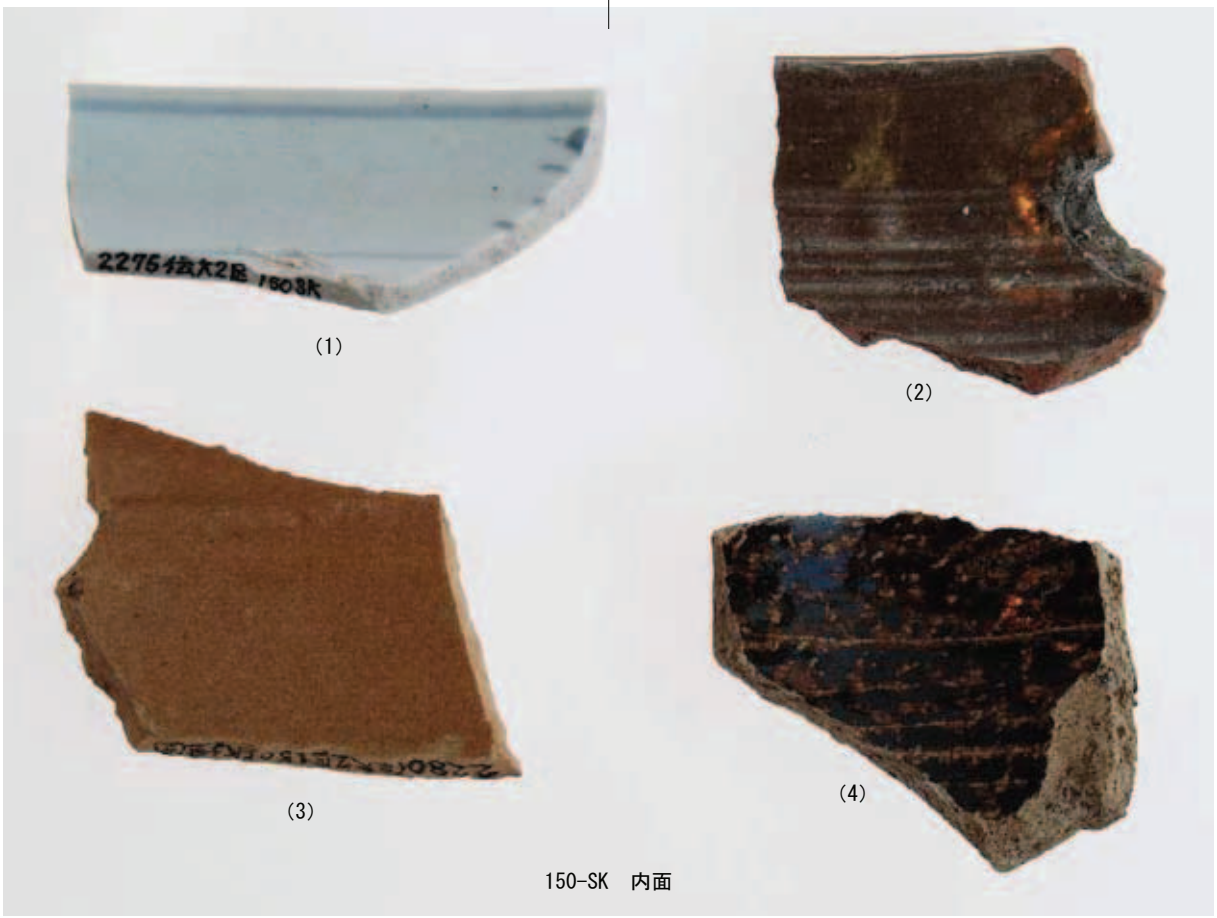
201-SK(1)　内面

Ph. 34

B期2区出土陶磁器5

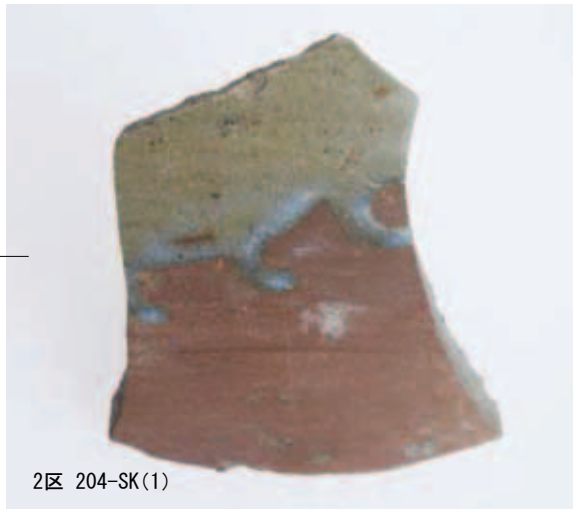


150-SK　外面

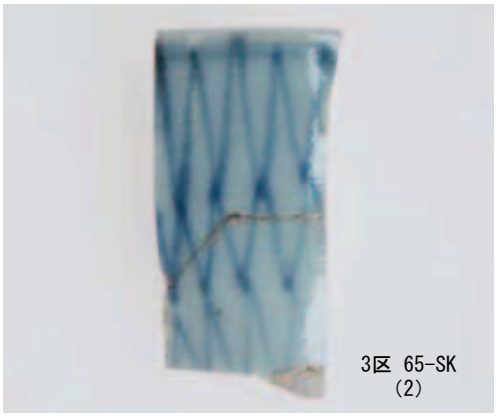


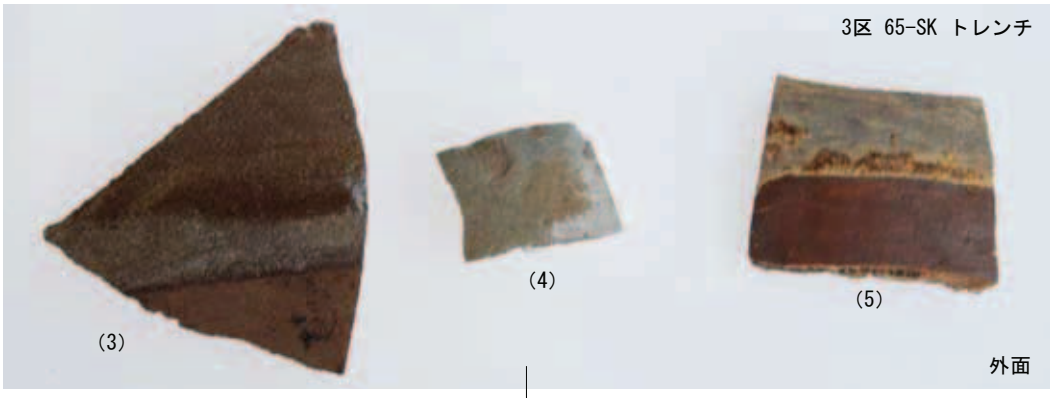
150-SK　内面

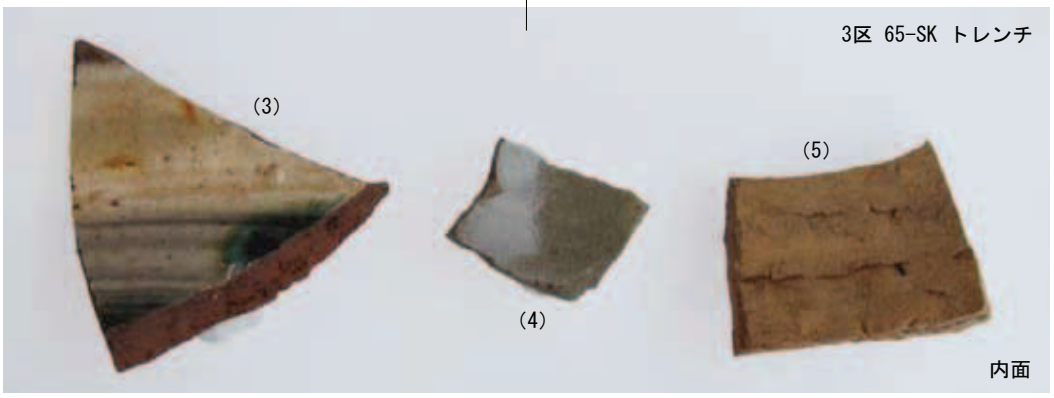
2区 204-SK(1)


2区 204-SK(1)

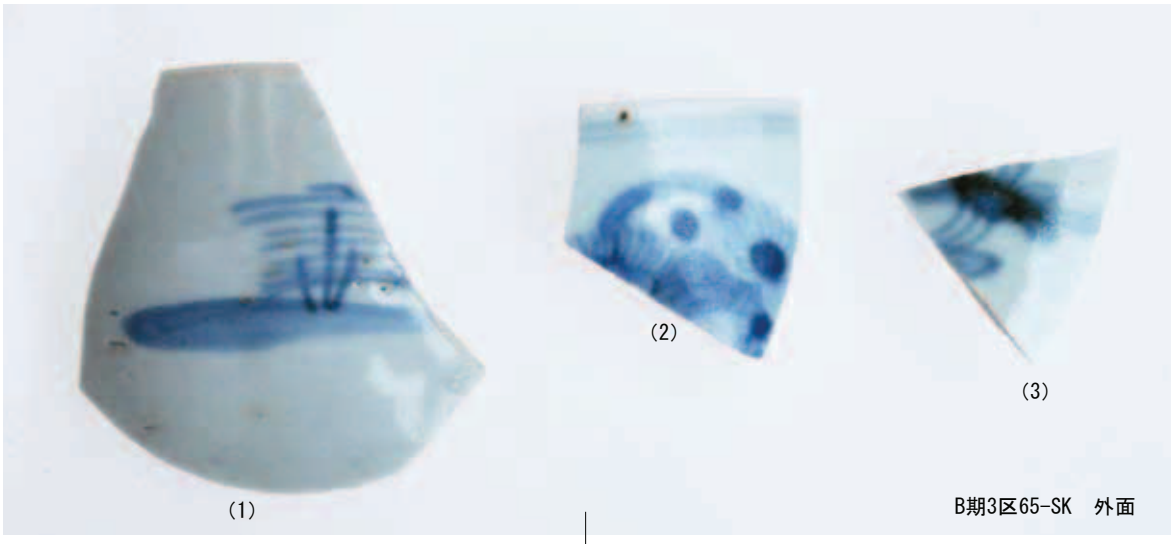
2区 204-SK(1)


3区 65-SK
(2)





B・C期2・3区出土陶磁器

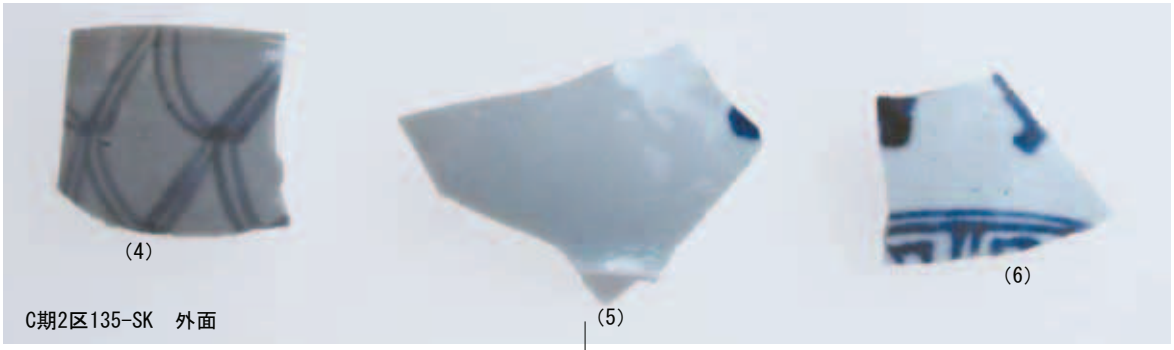


(1)　(2)　(3)

B期3区65-SK　外面

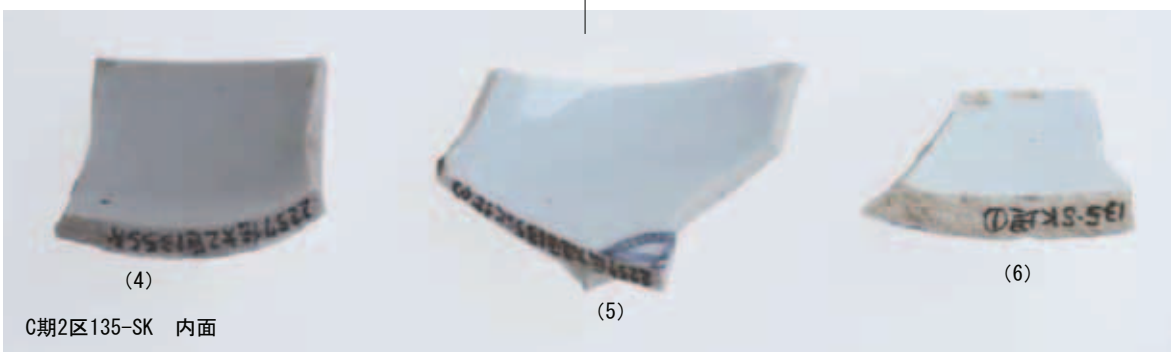
(1)　(2)　(3)

B期3区65-SK　内面



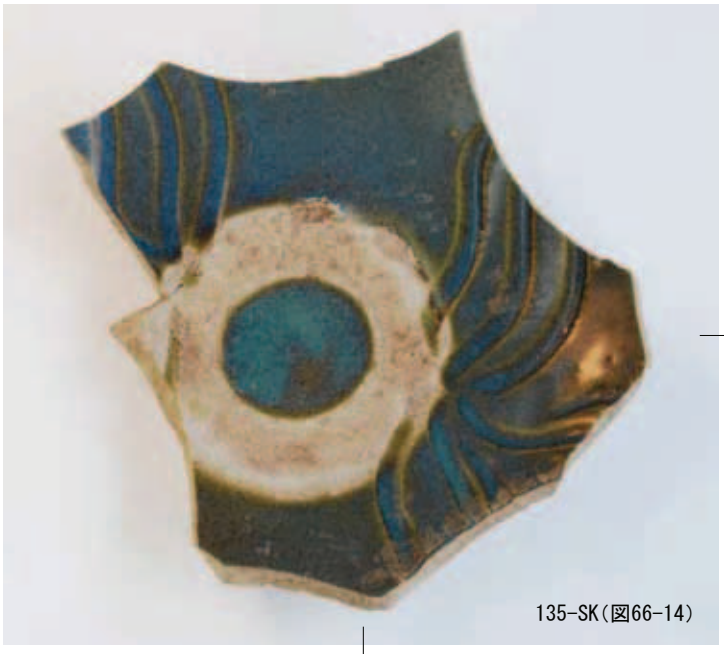
(4)　(5)　(6)

C期2区135-SK　外面



(4)　(5)　(6)

C期2区135-SK　内面



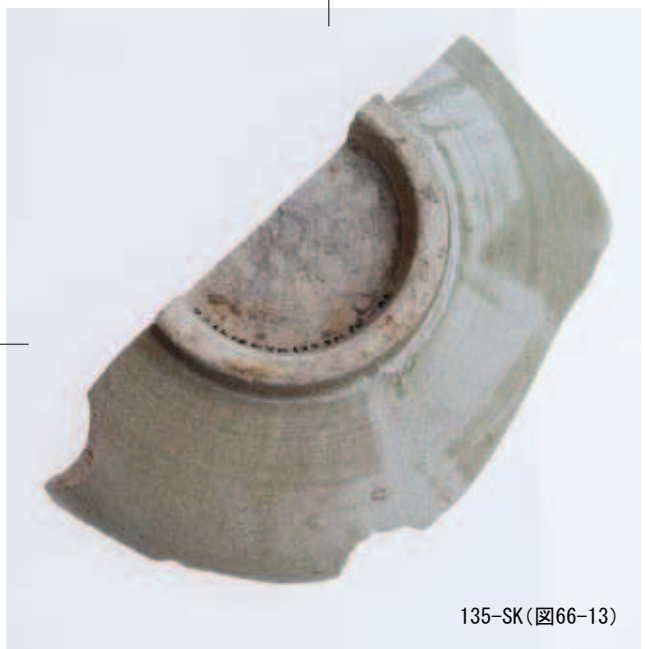
135-SK(図66-14)

135-SK(図66-14)

135-SK(図66-14)

135-SK(図66-13)

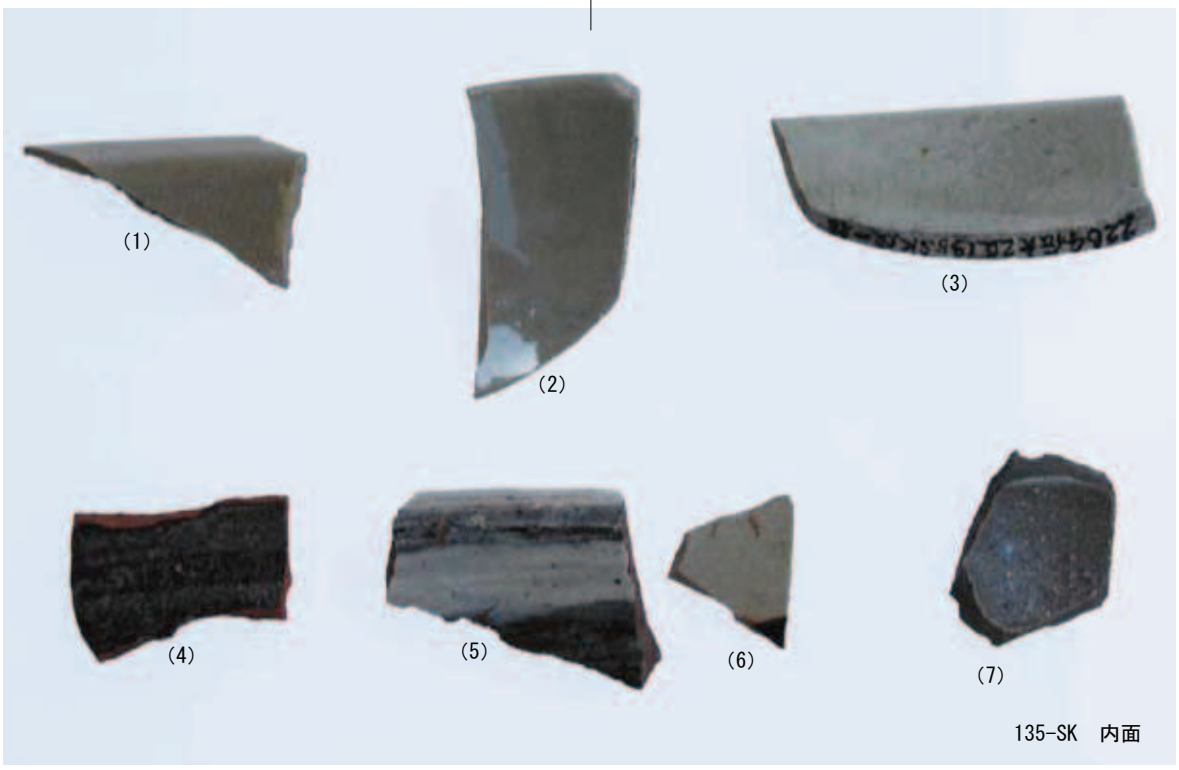
135-SK(図66-13)



135-SK(図66-13)

C期2区出土陶磁器2

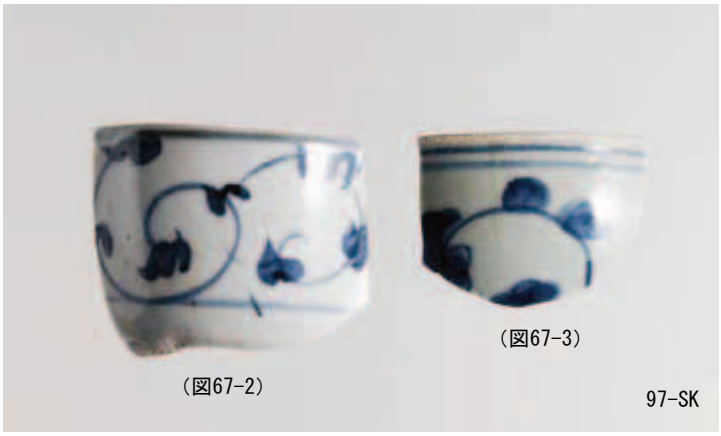
135-SK　外面



135-SK　内面

135-SK(8)　外面

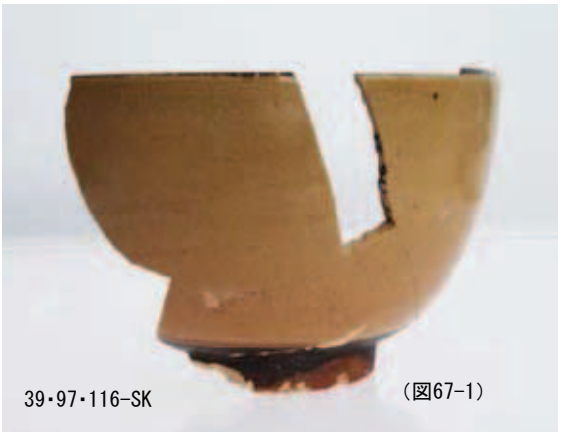
135-SK(8)　内面



（図67-2）

（図67-3）

97-SK



39・97・116-SK

（図67-1）

97c-SK（図67-10）

97-SK（図67-6）

97-SK（図67-10）

97-SK（図67-11）

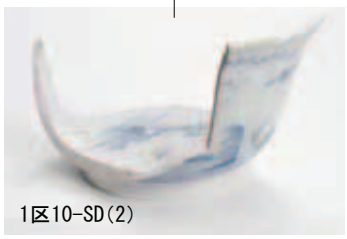
97-SK（図67-11）

97-SK（図67-11）

1区10-SD(1)

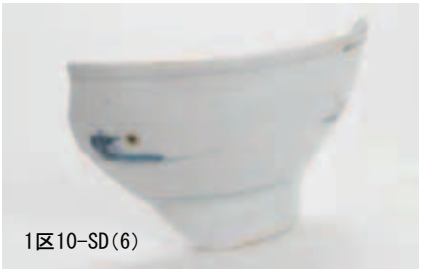
(1)

(2)

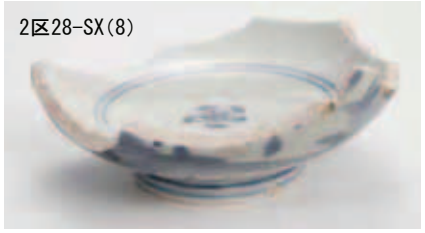

1区10-SD(2)

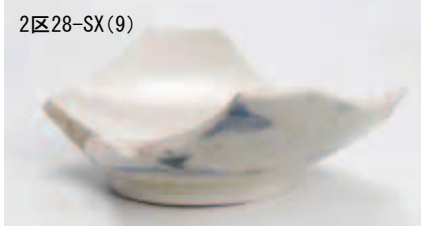
1区10-SD(4)

1区10-SD(5)


1区10-SD(6)

1区10-SD(7)


2区28-SX(8)


2区28-SX(9)

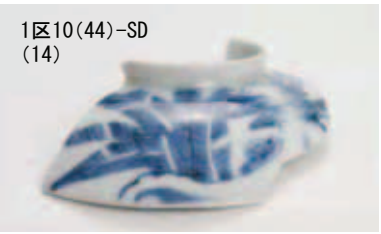
1区10(44)-SD(10)

1区10(44)-SD(11)

1区10-SD(4)

(13)

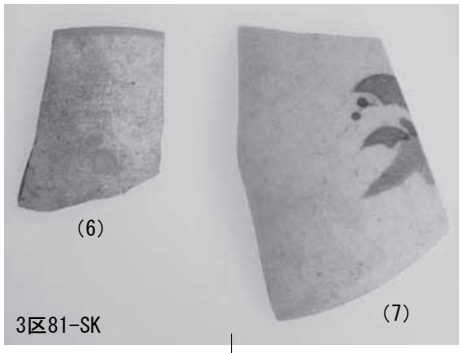
1区10(44)-SD(13)

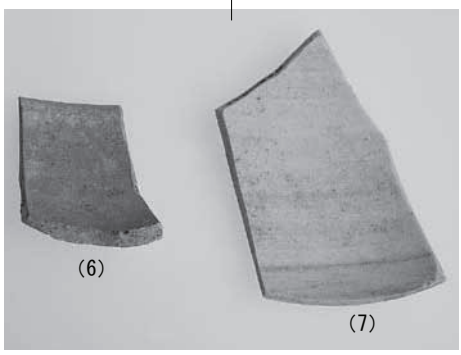

1区10(44)-SD
(14)

1区10(44)-SD(12)

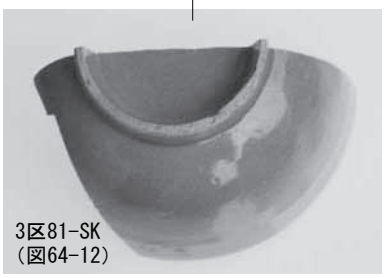
3区81-SK(図64-11)

3区81-SK(図64-11)

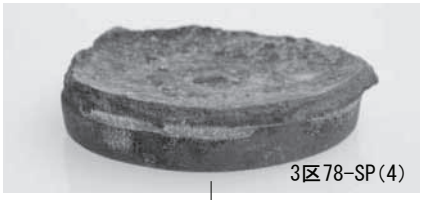

(6)
(7)
3区81-SK

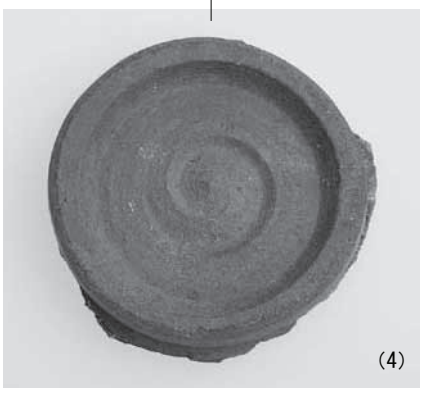

(6)
(7)

3区81-SK(図64-12)


3区81-SK
(図64-12)

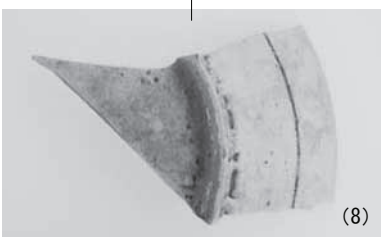
3区81-SK(5)


3区78-SP(4)

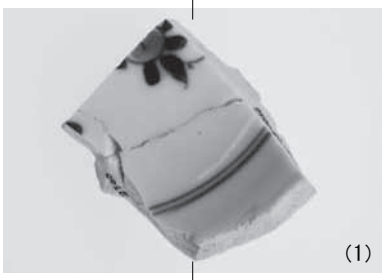

(4)

3区81-SK(8)

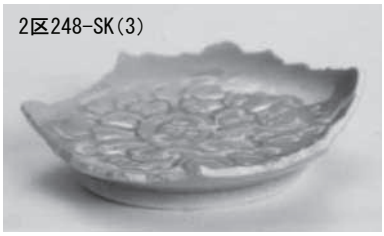
(8)

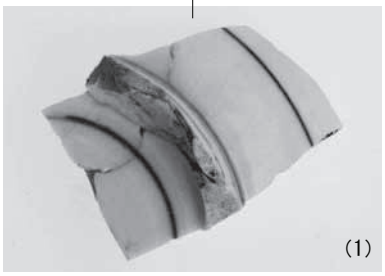

(8)

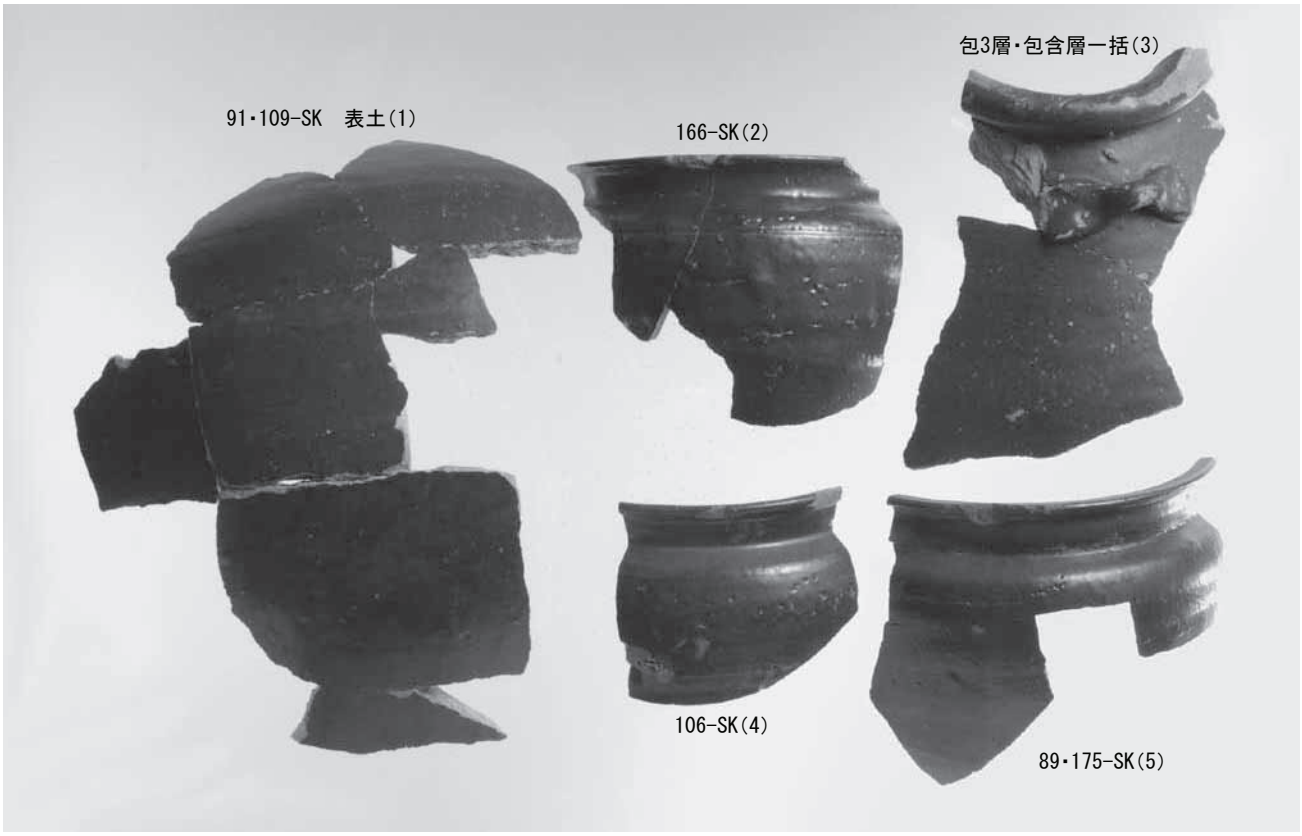
2区222-SK(1)

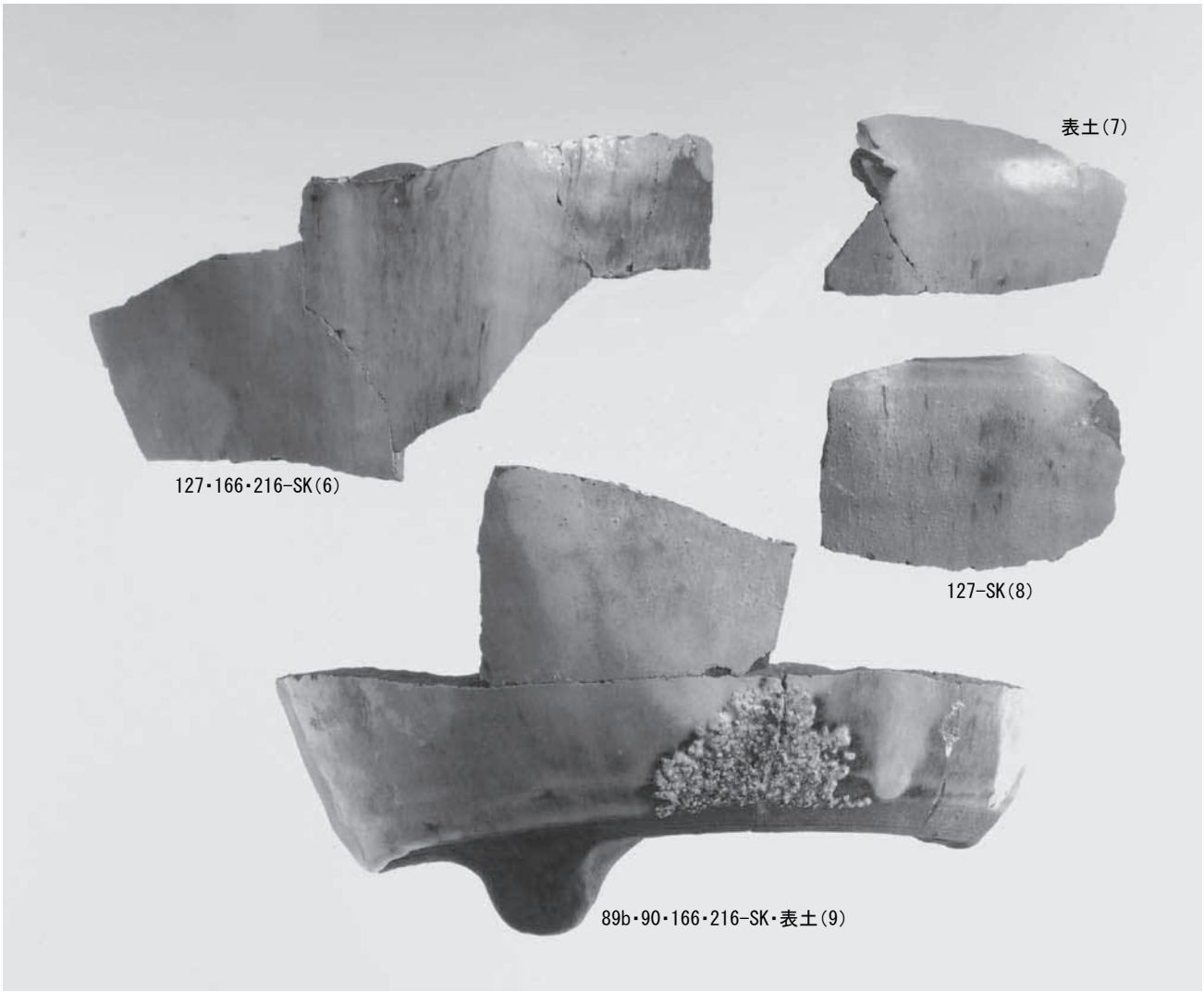

(1)

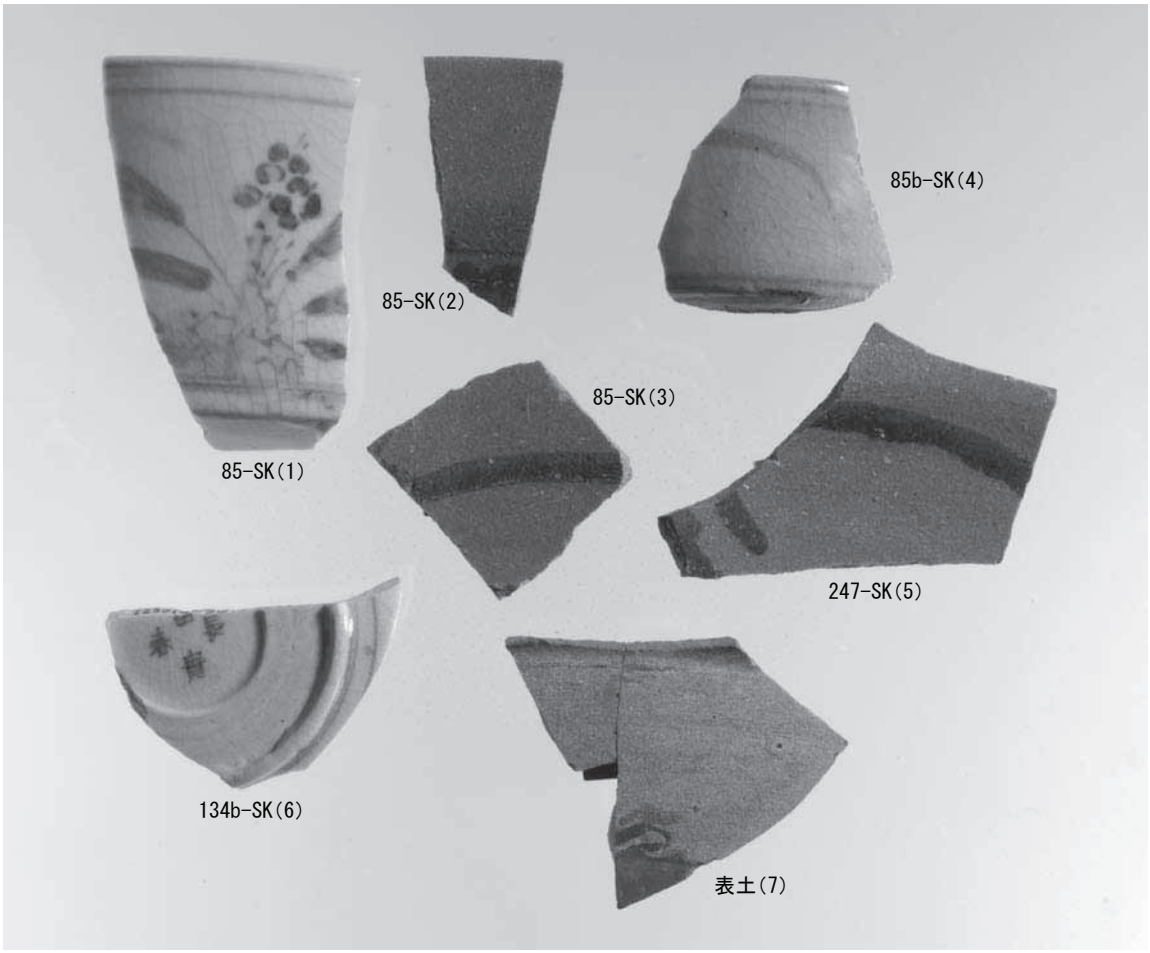
2区248-SK(2)

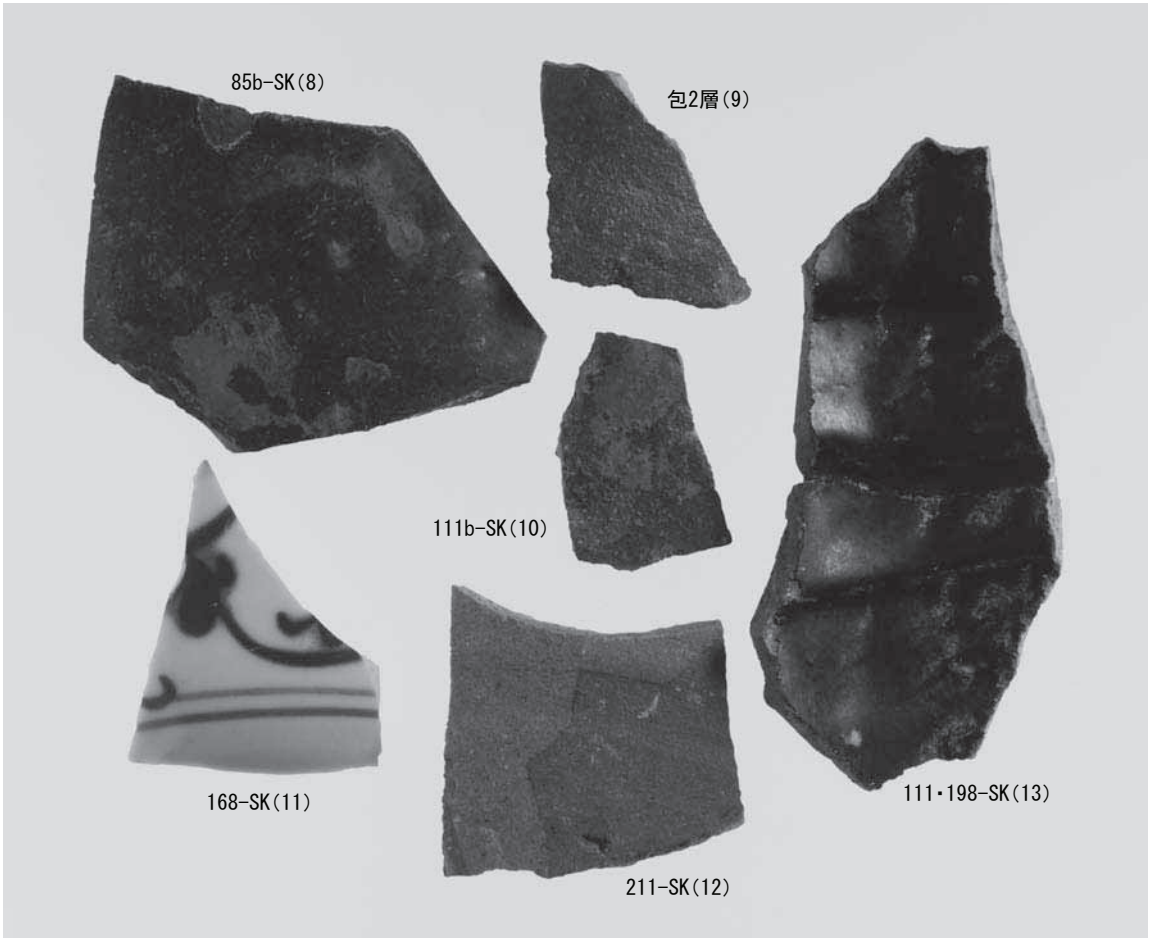

2区248-SK(3)


(1)

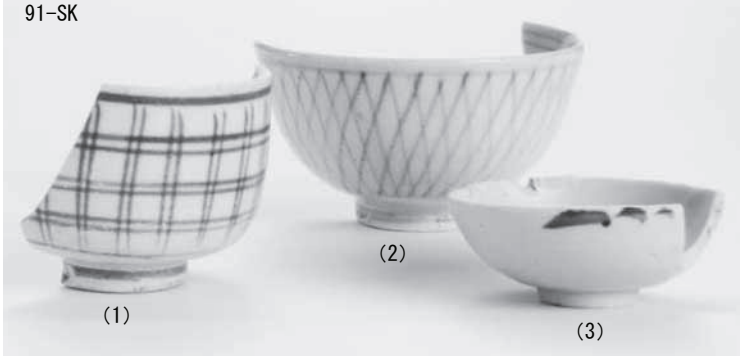

91・109-SK　表土(1)
166-SK(2)
包3層・包含層一括(3)
106-SK(4)
89・175-SK(5)


表土(7)
127・166・216-SK(6)
127-SK(8)
89b・90・166・216-SK・表土(9)


85-SK(1)
85-SK(2)
85b-SK(4)
85-SK(3)
247-SK(5)
134b-SK(6)
表土(7)


85b-SK(8)
包2層(9)
111b-SK(10)
168-SK(11)
211-SK(12)
111・198-SK(13)

91-SK

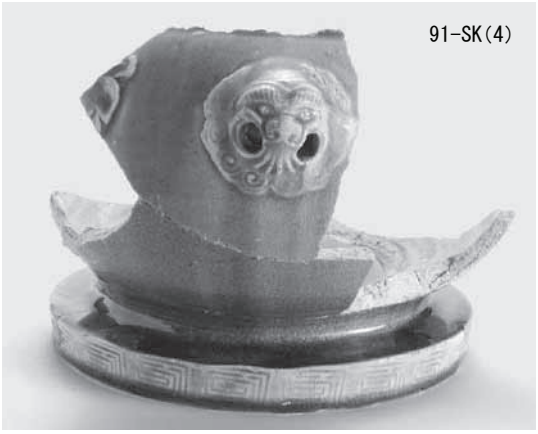


(1)

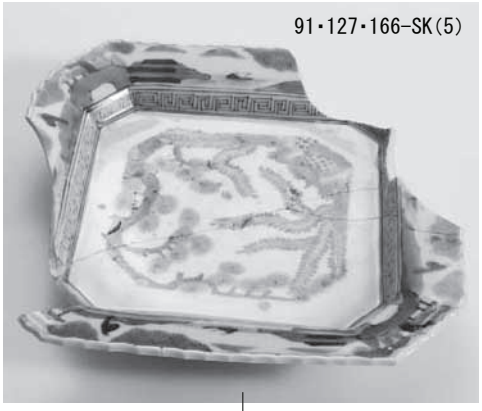
(2)

(3)

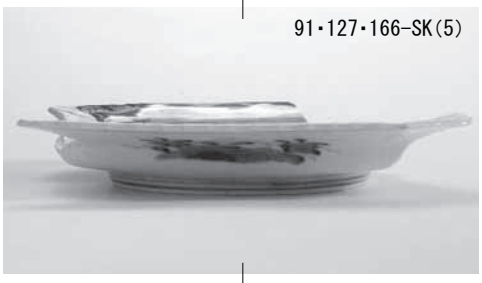
91-SK(4)



91・127・166-SK(5)



91・127・166-SK(5)



91・127・166-SK(5)

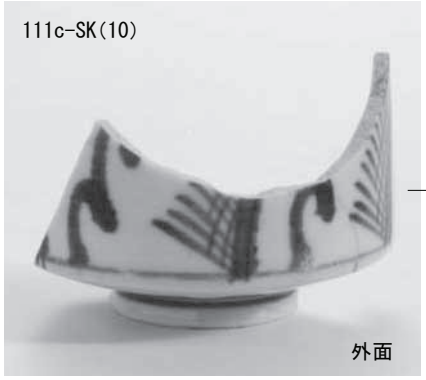
91-SK(6)

104-SK(7)

91・166-SK(8)

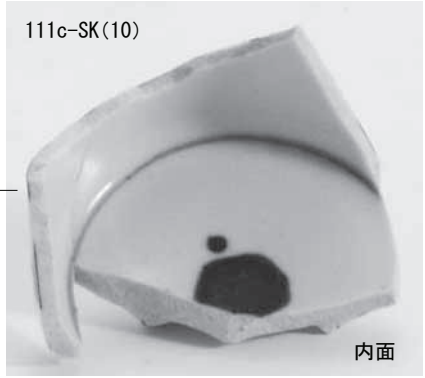
114-SK(9)

111c-SK(10)



外面

111c-SK(10)



内面

166-SK(1)

166-SK(2)

166・194-SK(3)

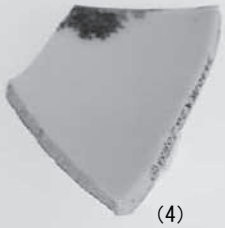
外面

184-SK(図66-8)

内面

184-SK(図66-8)

208-SK

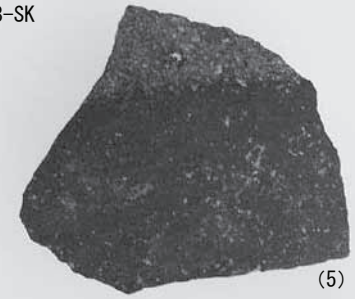


(4)

(5)

208-SK

(4)



(5)

218b-SK

(6)

(7)

218b-SK

(8)

(9)

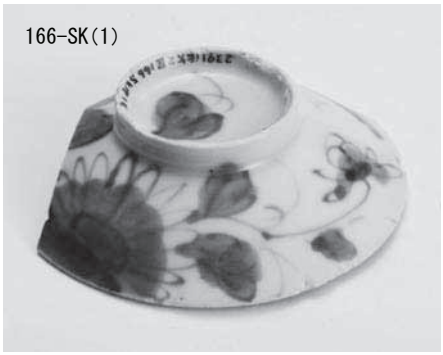
218b-SK(10)

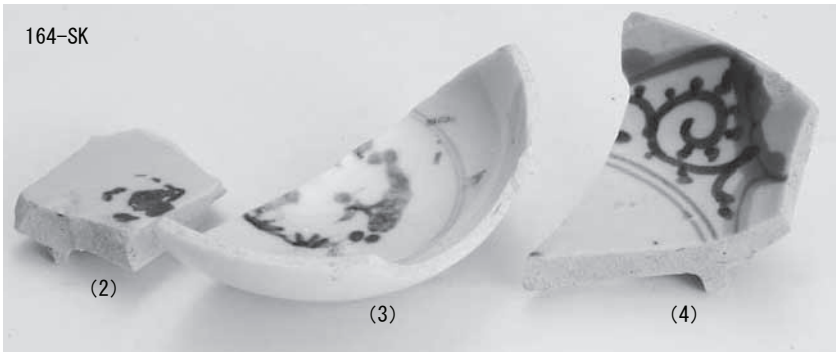
218b-SK

(11)

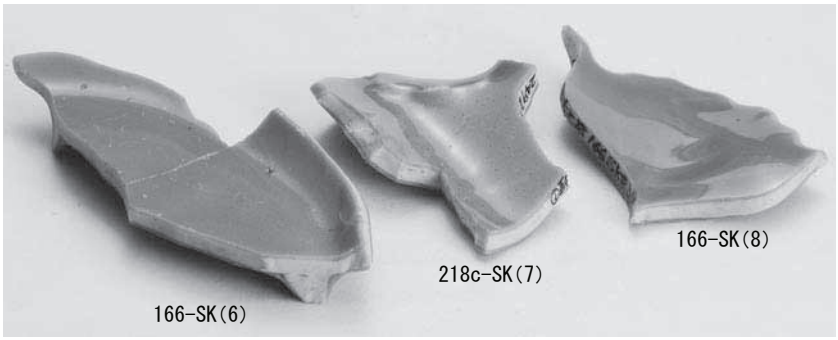
(12)

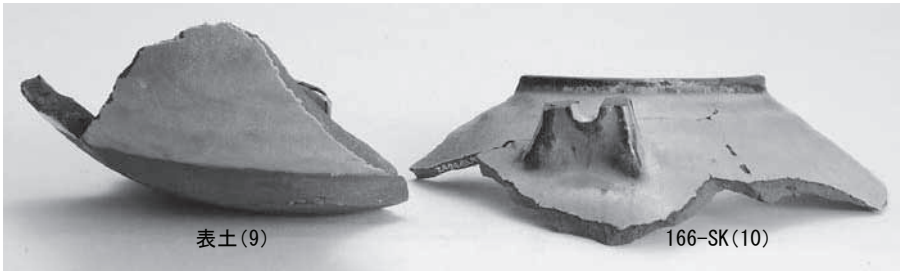
(13)


166-SK(1)


164-SK
(2)
(3)
(4)

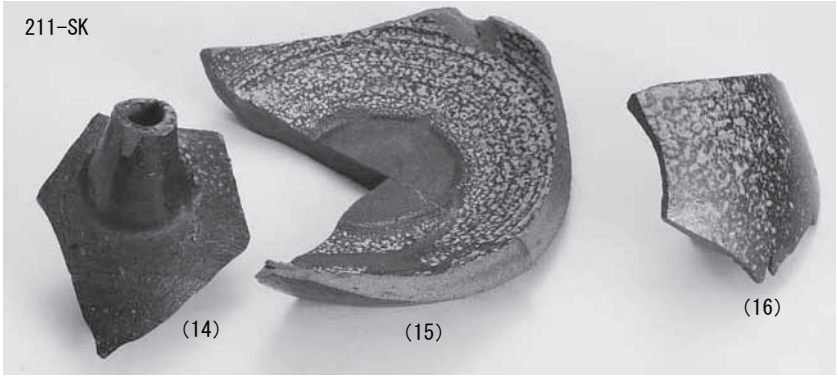
165(158)-SK(5)


166-SK(6)
218c-SK(7)
166-SK(8)


表土(9)
166-SK(10)

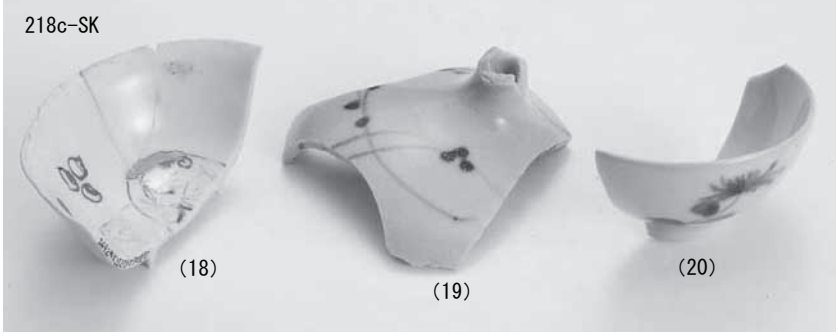
168-SK(11)

111b(185)-SK(12)


211-SK
(14)
(15)
(16)

211-SK(13)

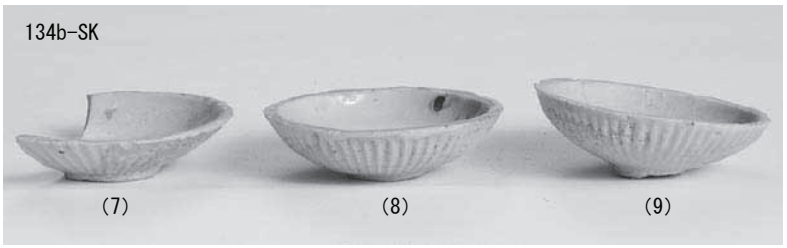
211-SK(17)


218c-SK
(18)
(19)
(20)

134b-SK(1)

134b-SK(2)

134b-SK(6)

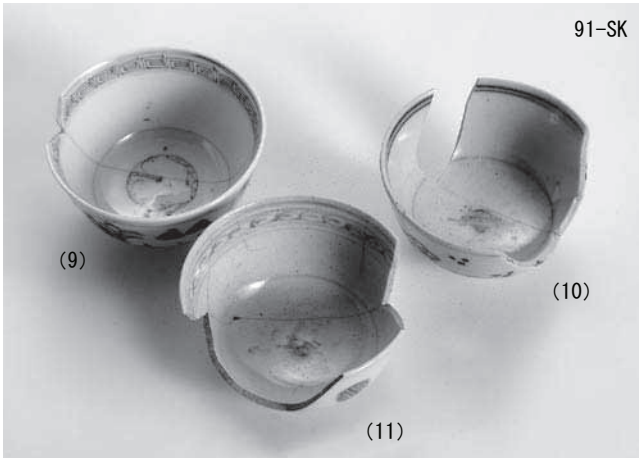


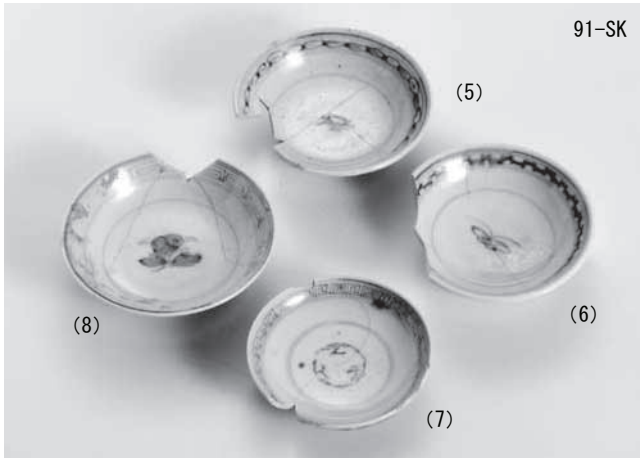
159-SK(12)

159-SK(15)

91-SK
(1)
(2)

91-SK
(3)
(4)

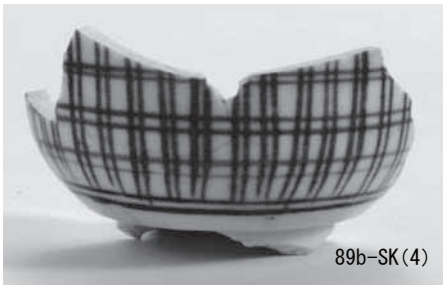

91-SK
(9)
(10)
(11)


91-SK
(5)
(6)
(7)
(8)

91-SK
(12)
(9)
(10)
(11)
(6)
(7)
(8)
(5)

88b-SK(1)
88・88b・166-SK(2)

(3)


89b-SK(4)

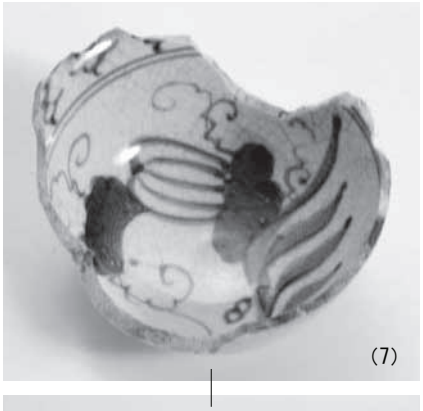
89b・166-SK(3)

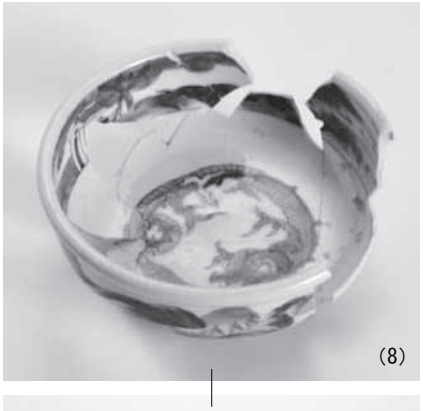
(5)

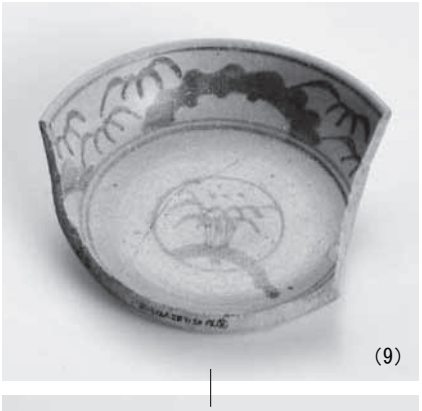
(6)

91-SK(5)

91-SK(6)


(7)


(8)


(9)

91-SK(7)

91-SK(8)

91-SK(9)

2区出土陶磁器9

29-SK (1)

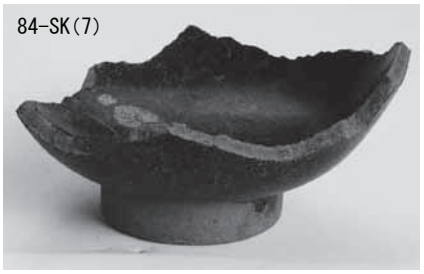
39-SK (2)

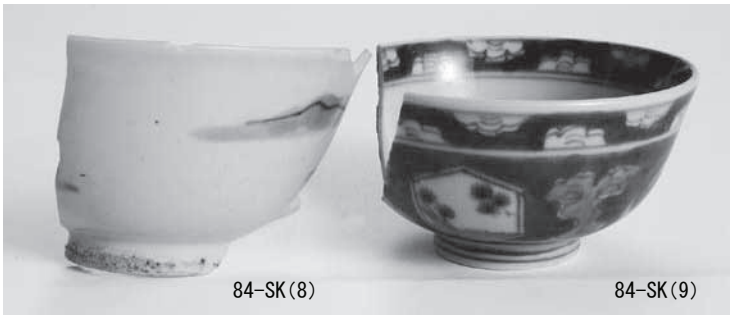
39-SK (3)

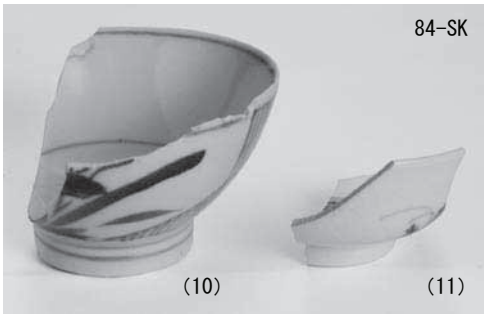
39-SK (4)

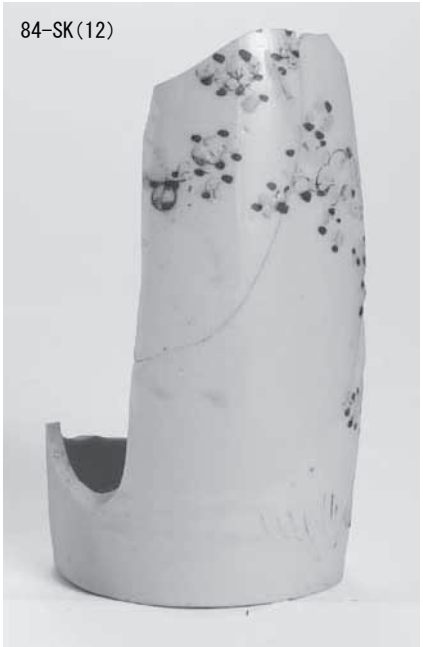
39-SK (5)

39-SK 整地層 (6)


84-SK(7)

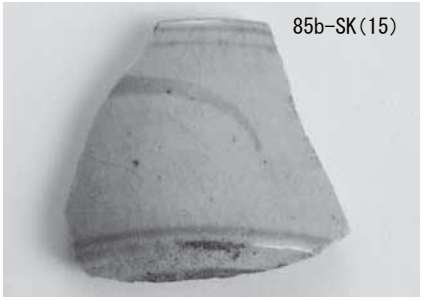

84-SK(8) 84-SK(9)


84-SK (10) (11)


84-SK(12)

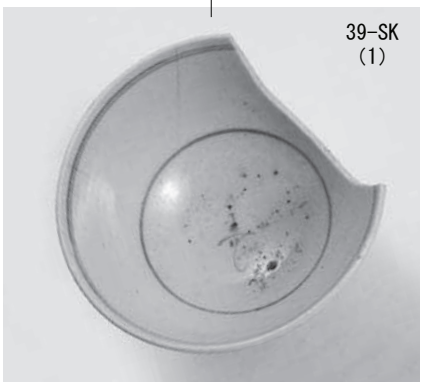
84-SK(13)

84-SK(14)

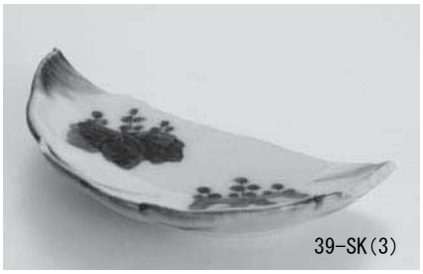

85b-SK(15)

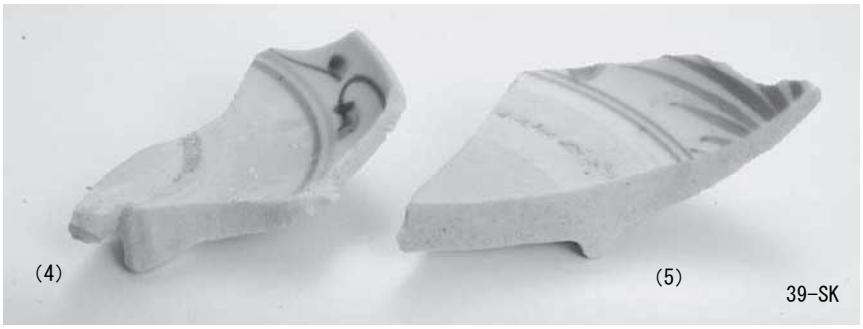
84-SK(16)

39-SK
(1)


39-SK
(1)

39-SK(2)

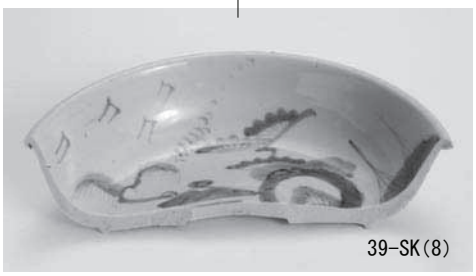

39-SK(3)


(4)
(5)
39-SK

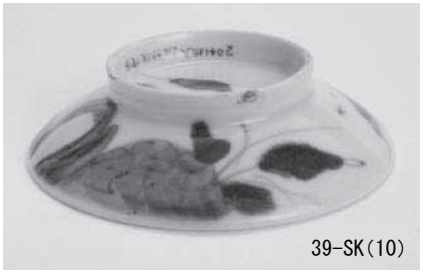
39-SK(6)

39-SK(7)

39-SK(8)


39-SK(8)

39-SK(9)

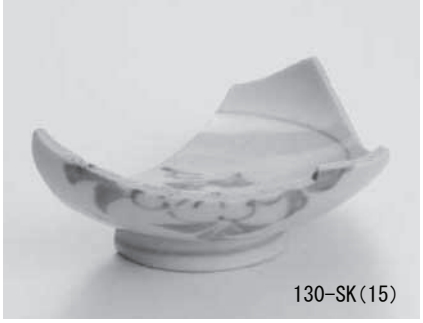

39-SK(10)

39-SK(11)

39-SK(12)

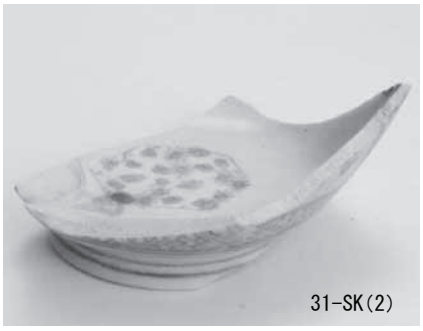
39-SK(13)

39-SK(14)


130-SK(15)

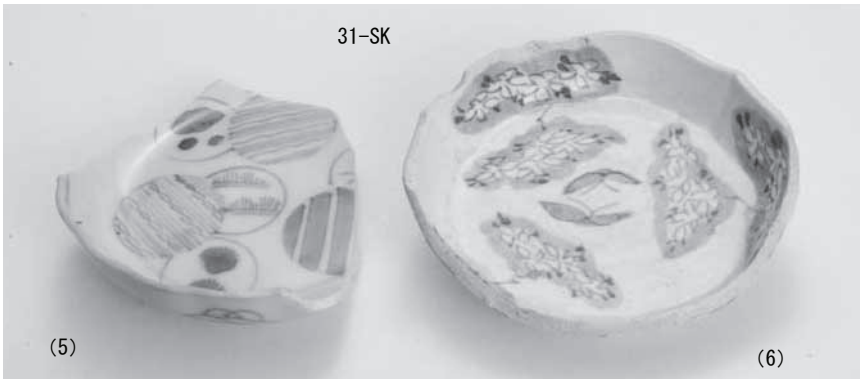
2区出土陶磁器11

31-SK(1)


31-SK(2)

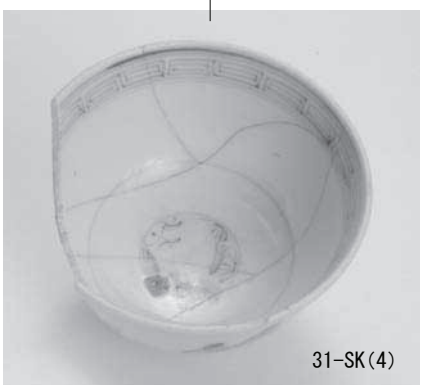
31-SK(3)

31-SK(4)


31-SK

(5)

(6)


31-SK(4)

31-SK(7)

31-SK(8)

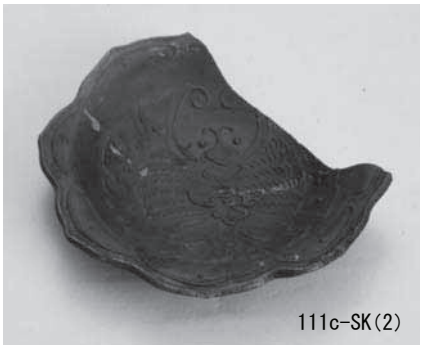
31-SK(9)

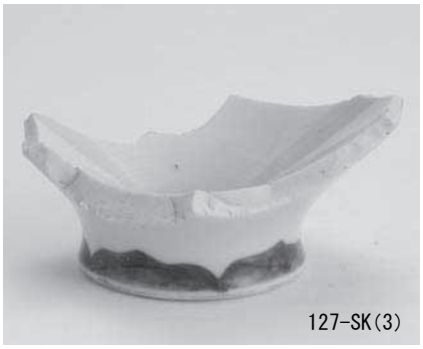
39-SK(11)

31-SK(10)

31-SK(10)

111・150-SK(1)


111c-SK(2)

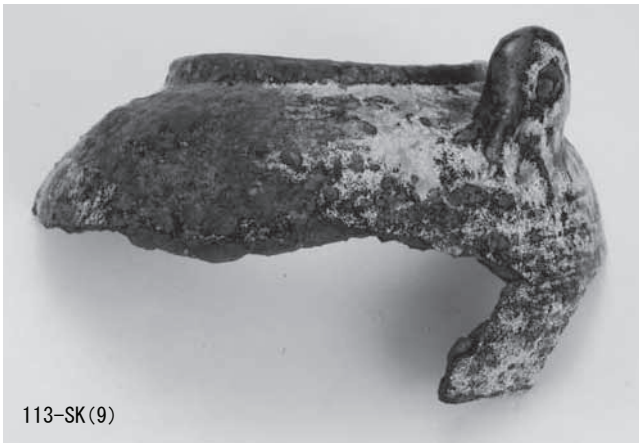

127-SK(3)

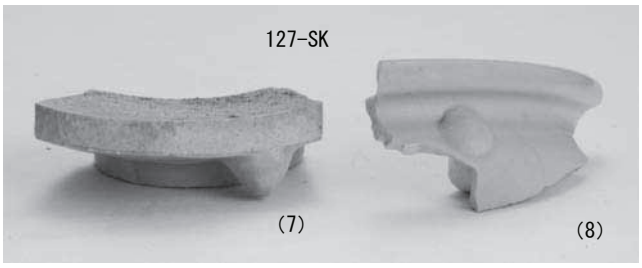
127-SK(4)

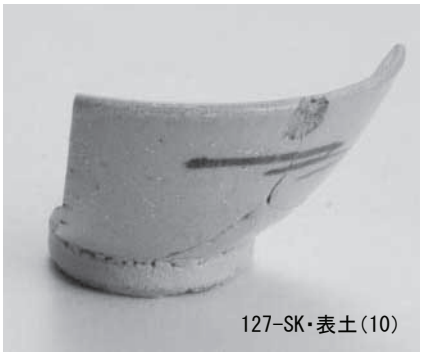
127-SK(4)

127-SK(5)

127-SK(6)

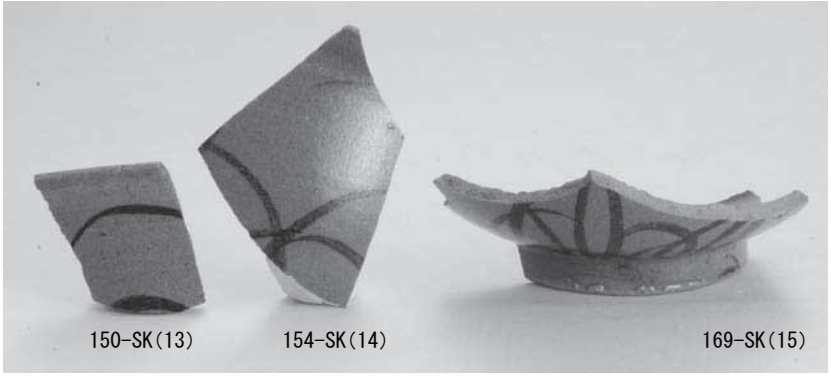

113-SK(9)


127-SK
(7)
(8)


127-SK・表土(10)

134b-SK(11)

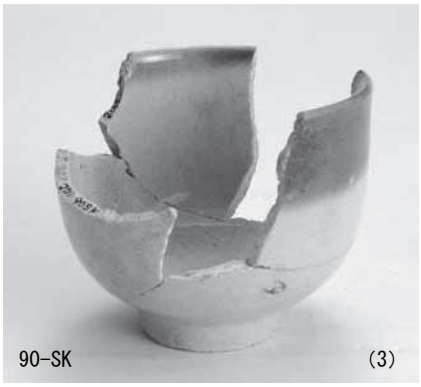
159-SK(12)
(1区 15-SK)


150-SK(13)
154-SK(14)
169-SK(15)

159-SK(16)

包含層(1)

85b-SK (2)

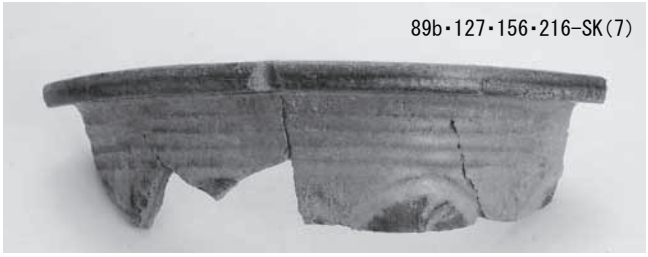


90-SK (3)

90-SK(4)

89・127-SK(5)

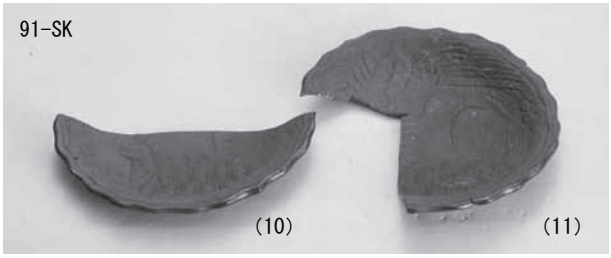
89b・127-SK(6)



89b・127・156・216-SK(7)

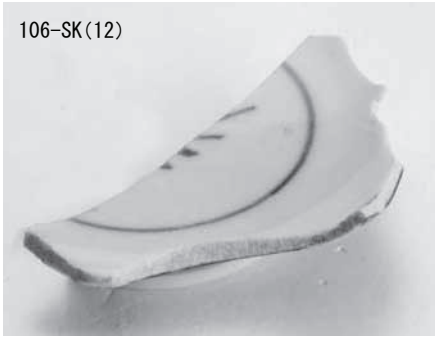
91-SK(8)

218c-SK(9)



91-SK

(10) (11)



106-SK(12)

106-SK(13)

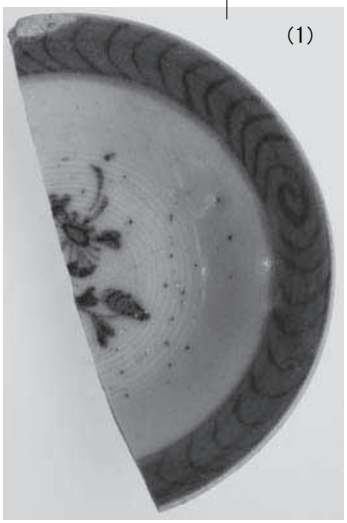
111-SK(14)

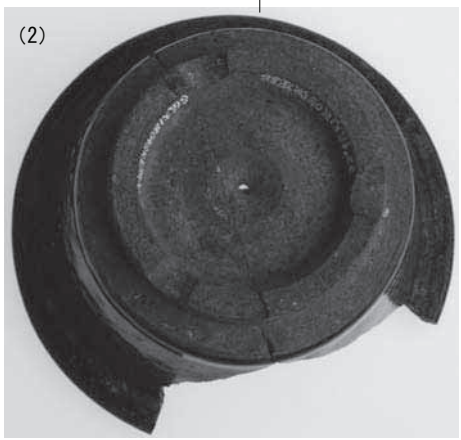
111-SK(15)

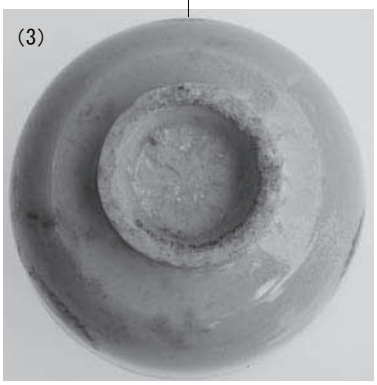
04-SK(1)

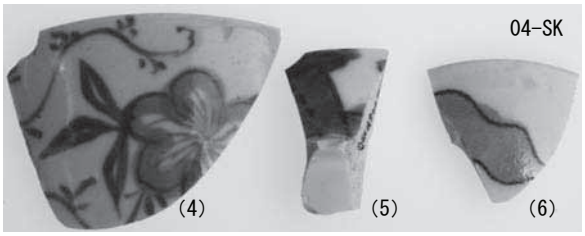
04-SK(2)

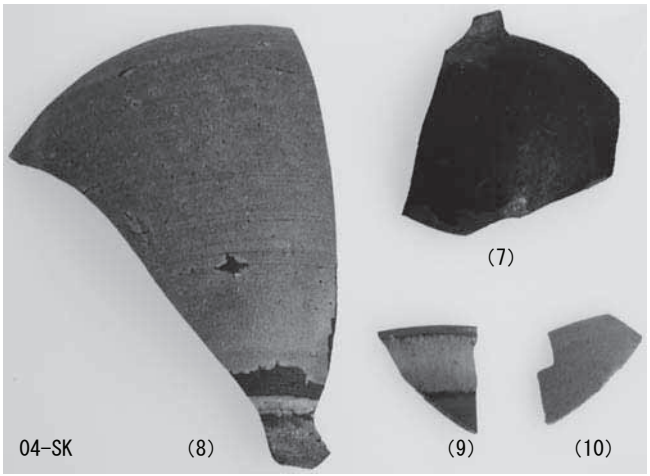
04-SK(3)

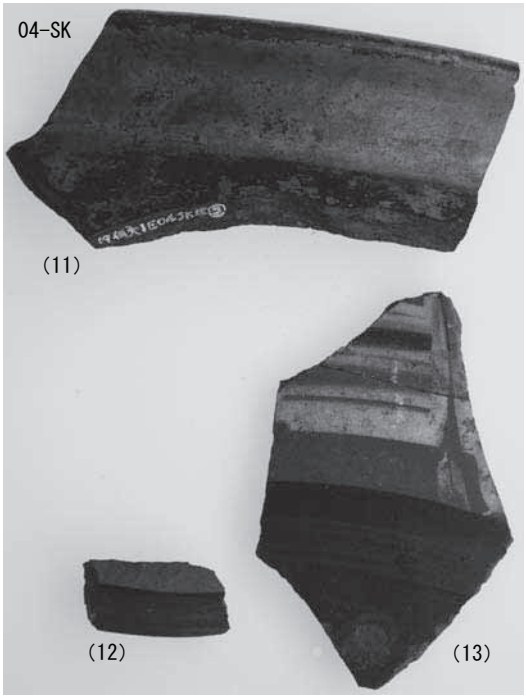

(1)

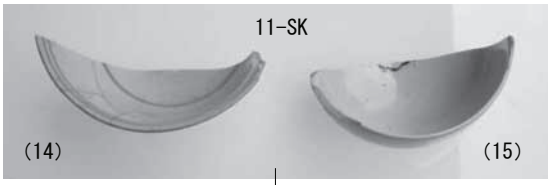

(2)

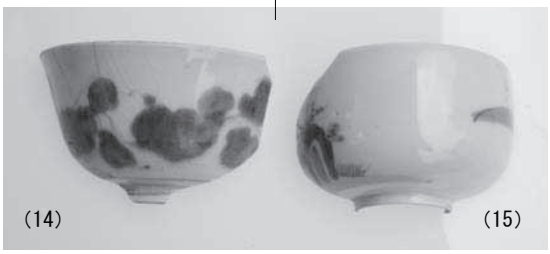

(3)

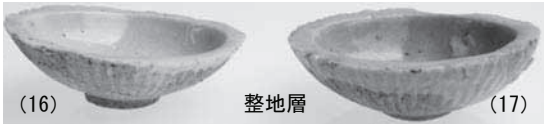

04-SK
(4)
(5)
(6)


(7)
04-SK
(8)
(9)
(10)


04-SK
(11)
(12)
(13)

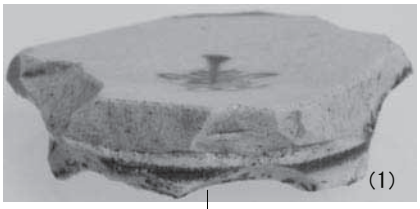

11-SK
(14)
(15)

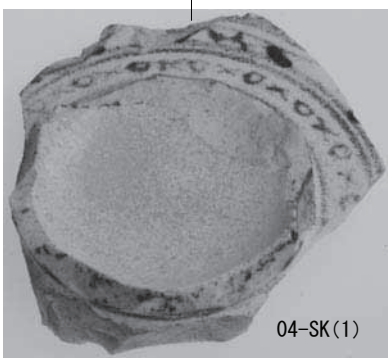

(14)
(15)


(16)
整地層
(17)

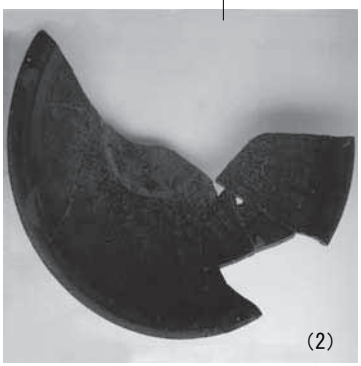
Ph. 56

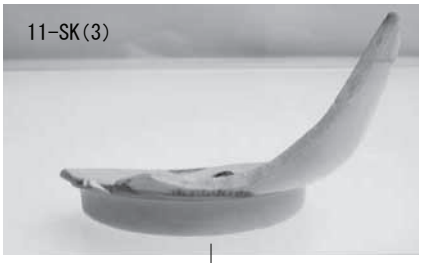
1区出土陶磁器2

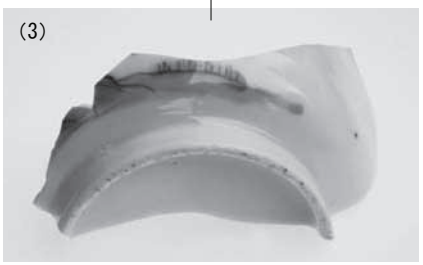

(1)

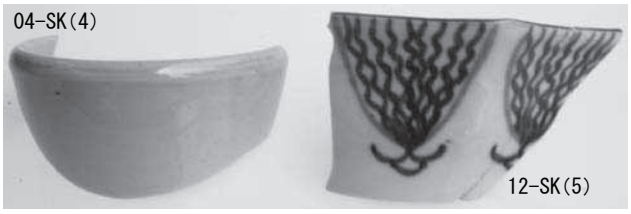

04-SK(1)

04-SK(2)

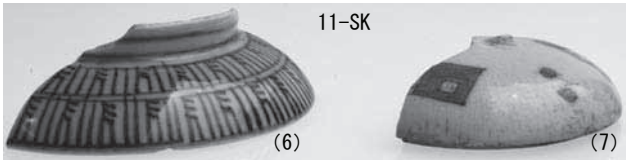

(2)


11-SK(3)


(3)

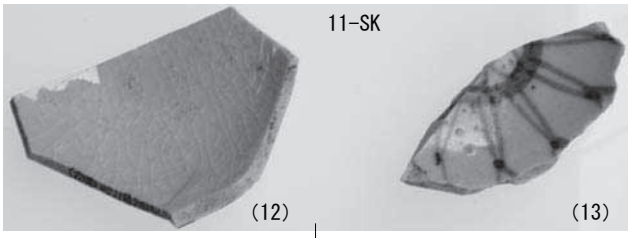

04-SK(4)

12-SK(5)


11-SK

(6)

(7)

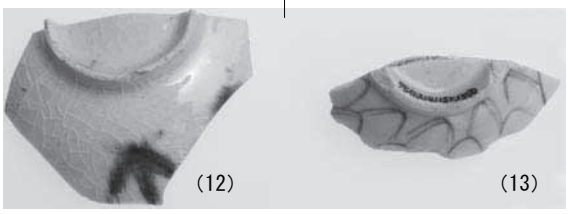

11-SK

(12)

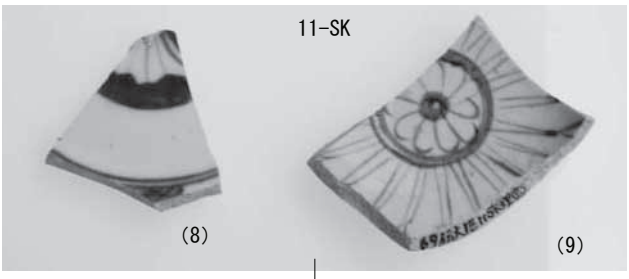
(13)

(12)

(13)


(12)

(13)

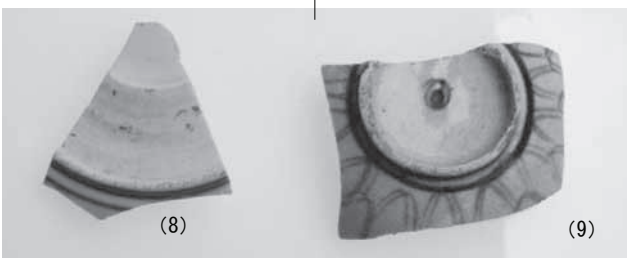

11-SK

(8)

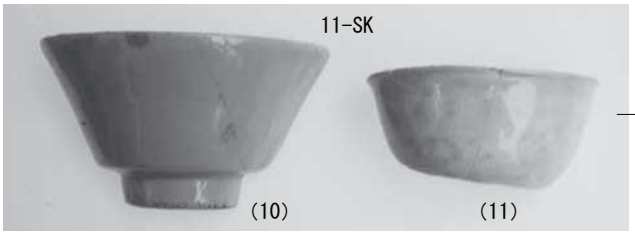
(9)

(8)

(9)

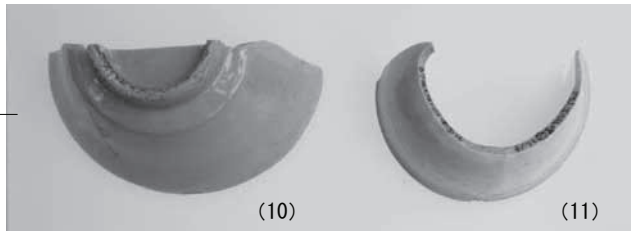

(8)

(9)

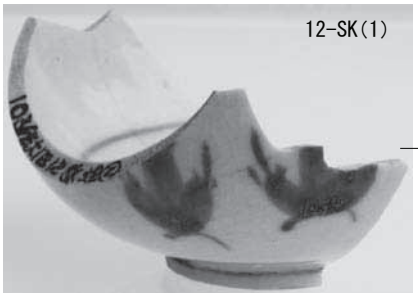

11-SK

(10)

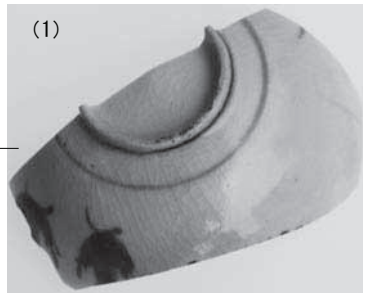
(11)

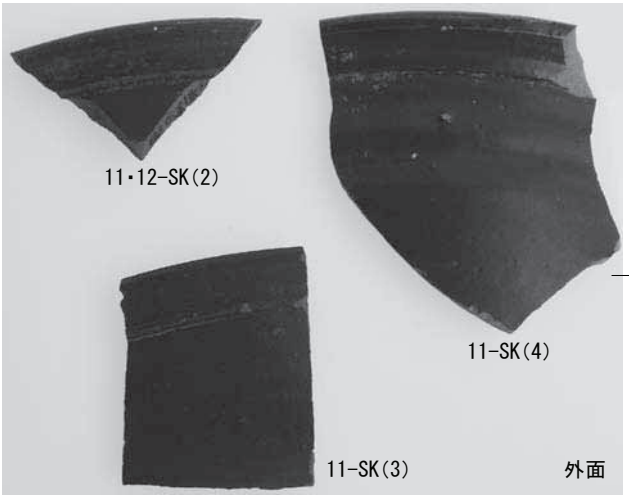

(10)

(11)


12-SK(1)

(1)

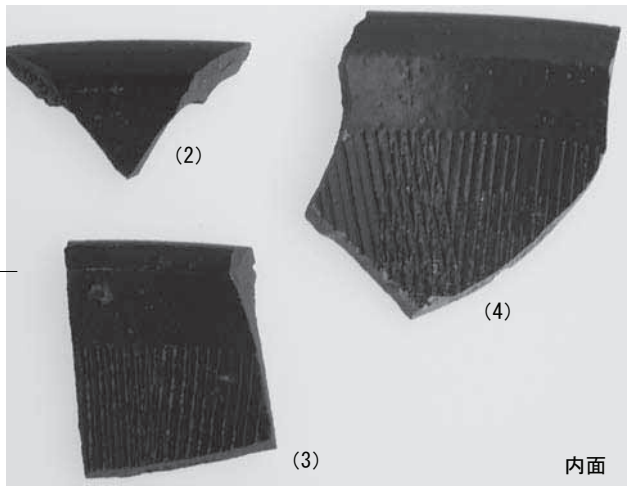

(1)


11・12-SK(2)

11-SK(4)

11-SK(3)

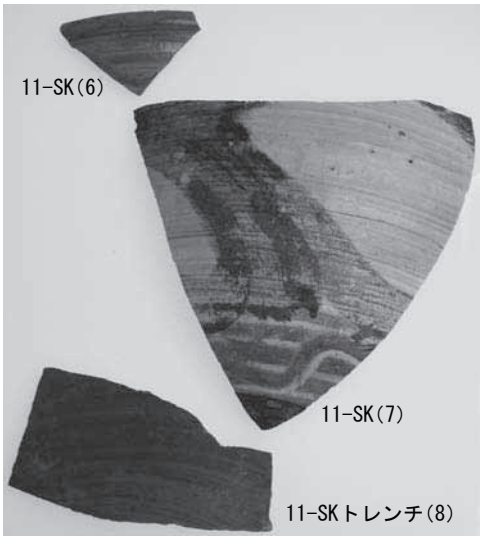
外面


(2)

(4)

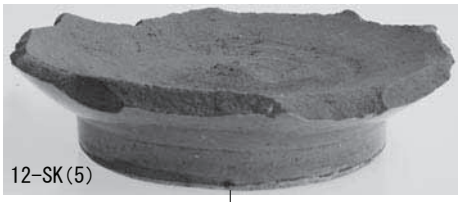
(3)

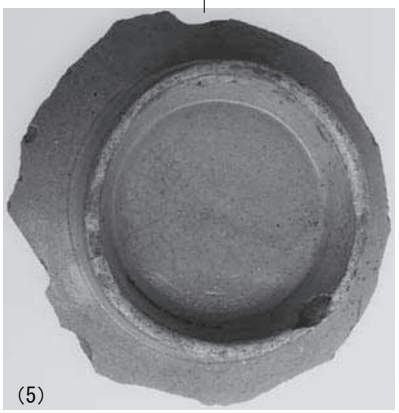
内面


11-SK(6)

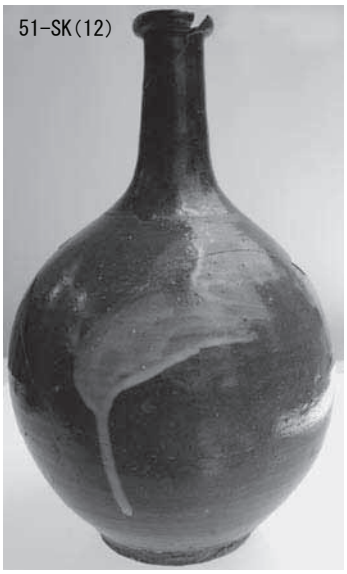
11-SK(7)

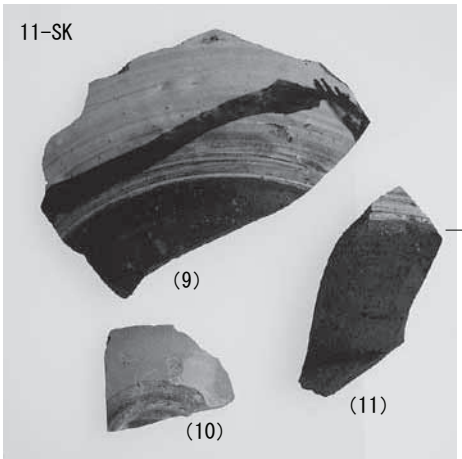
11-SKトレンチ(8)


12-SK(5)


(5)

51-SK(13)

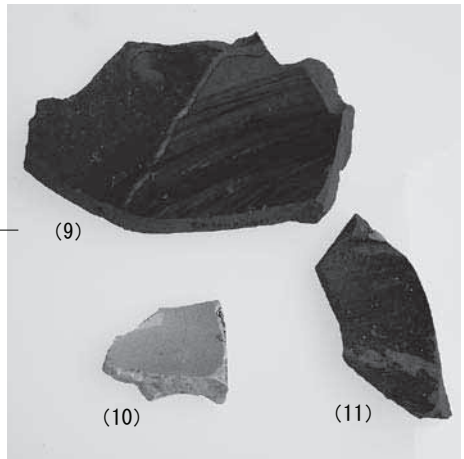

51-SK(12)


11-SK

(9)

(11)

(10)


(9)

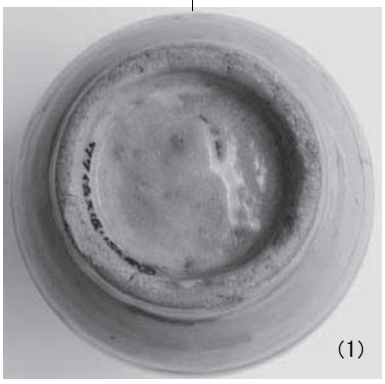
(10)

(11)

Ph. 58

1区出土陶磁器4

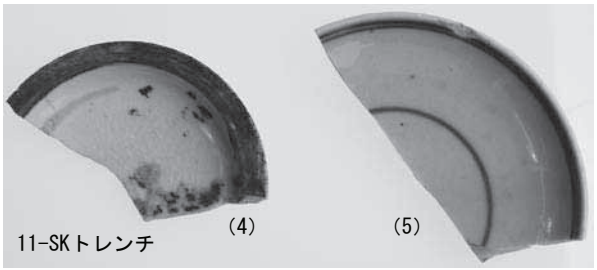
11-SK(1)

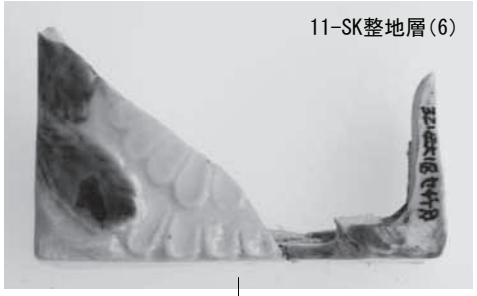

(1)

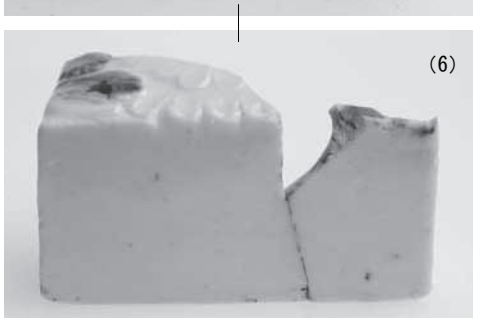
11-SK(2)

(2)

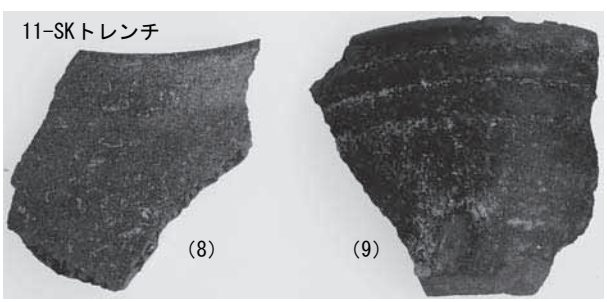
11-SK(3)

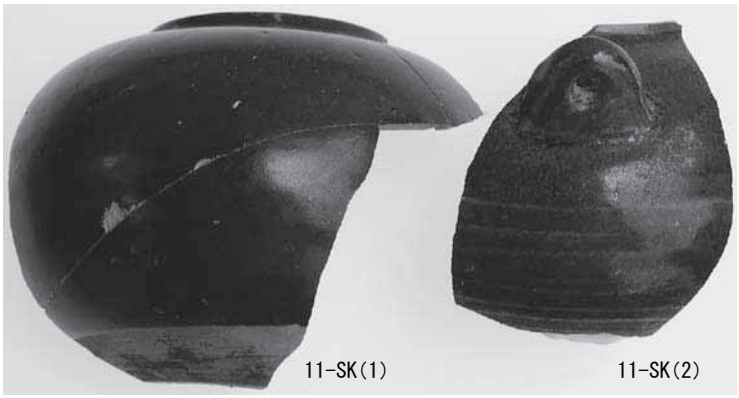

11-SKトレンチ (4) (5)

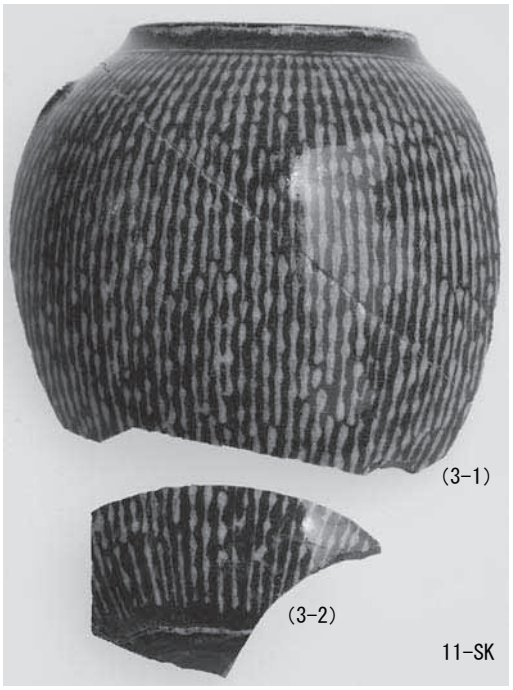

11-SK整地層(6)

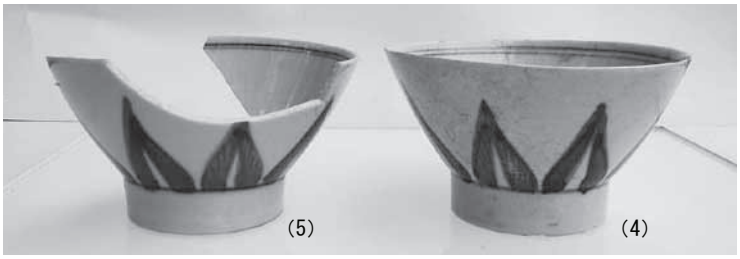

(6)

11-SKトレンチ(7)

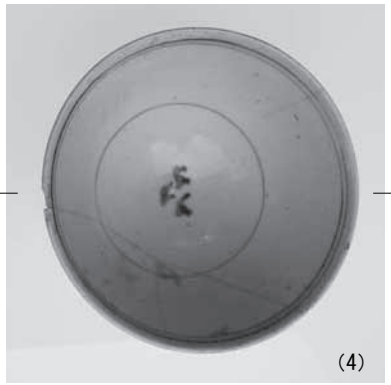

11-SKトレンチ (8) (9)

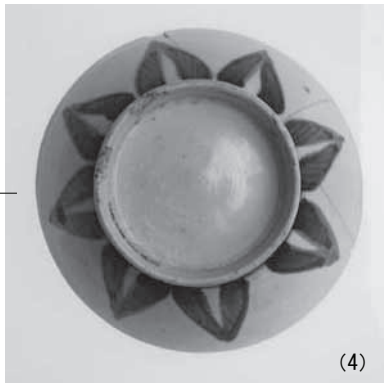

11-SK(1)
11-SK(2)


(3-1)
(3-2)
11-SK

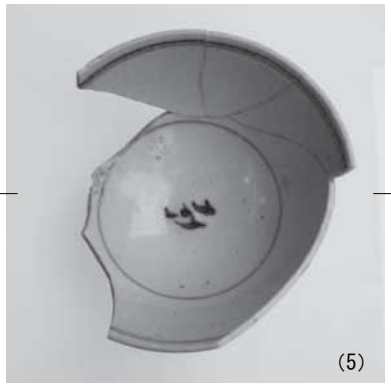

(5)
(4)

11-SK(4)


(4)


(4)

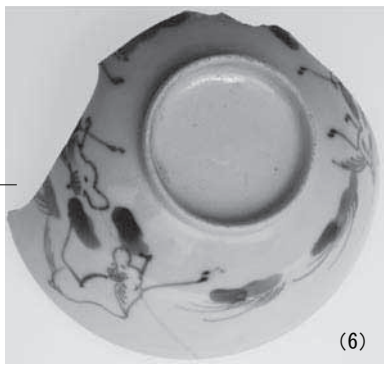
11-SK(5)

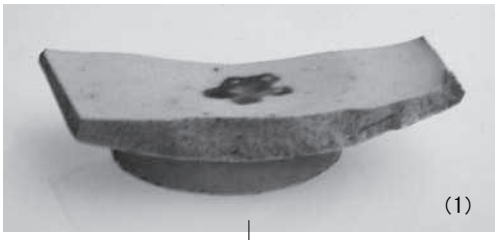

(5)

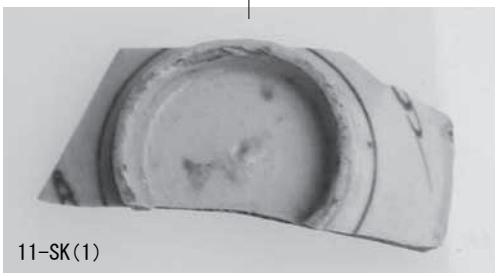
(5)

11-SK(6)

(6)

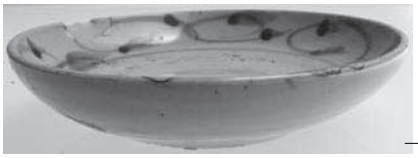

(6)

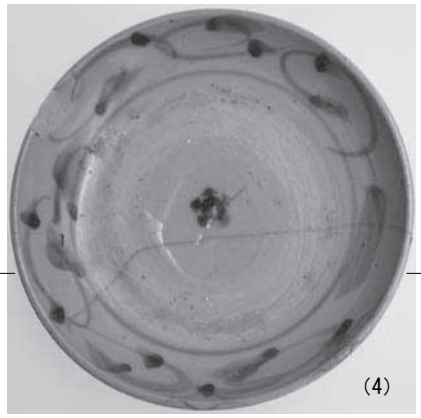

(1)

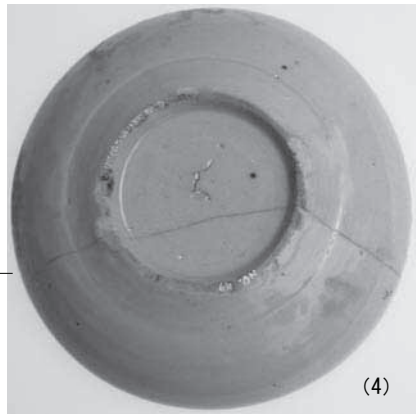

11-SK(1)

11-SK(2)

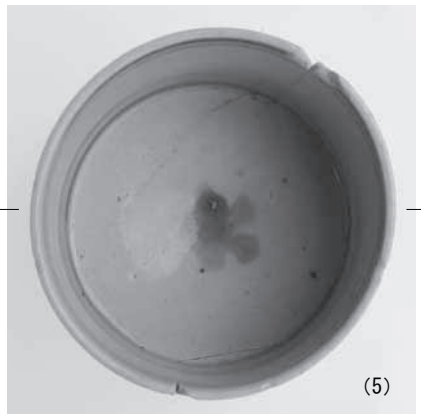
11-SK(3)

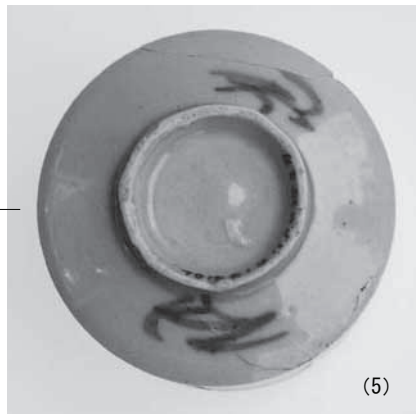

11-SK(4)


(4)

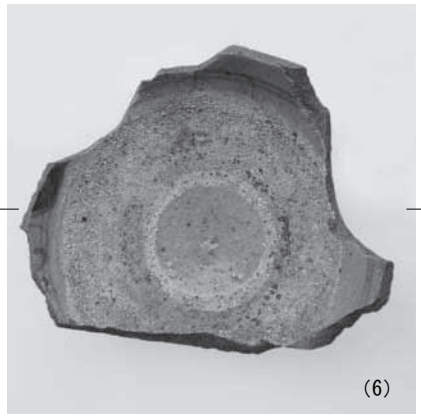

(4)

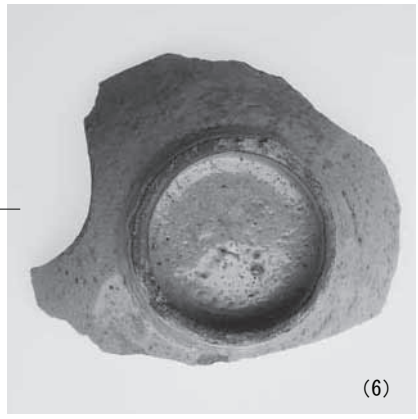
11-SK(5)

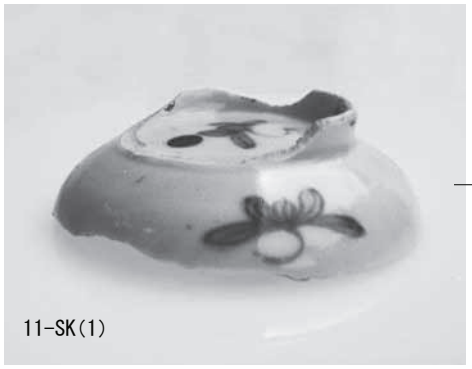

(5)

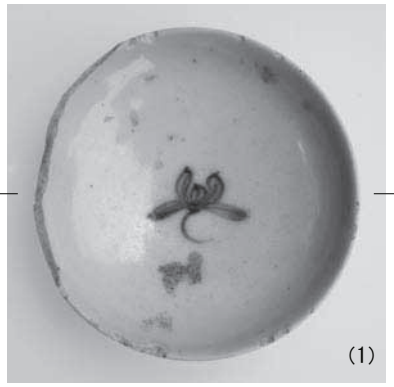

(5)

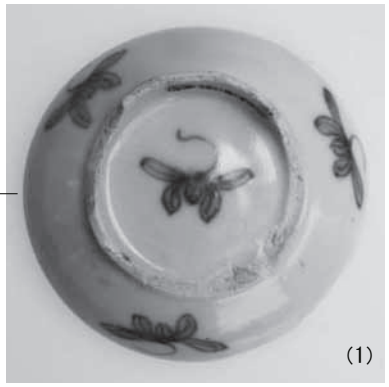
11-SK(6)

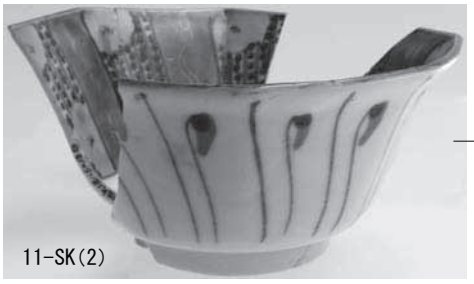

(6)

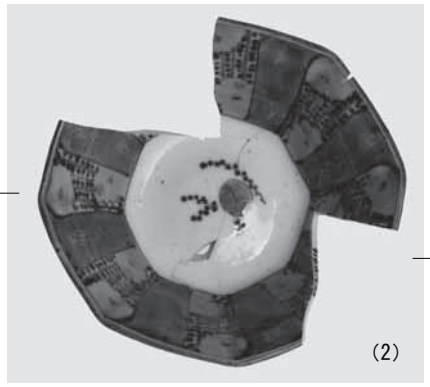

(6)

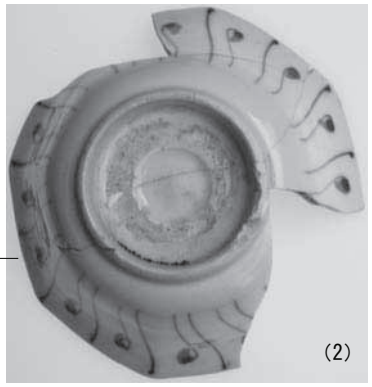

11-SK(1)

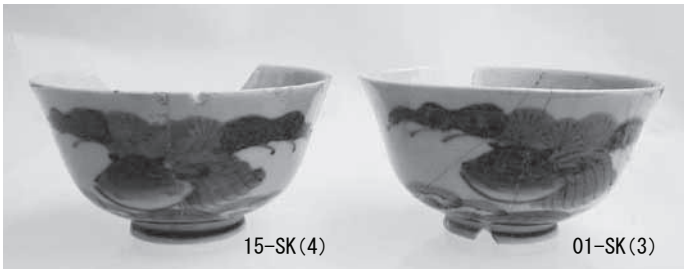

(1)


(1)

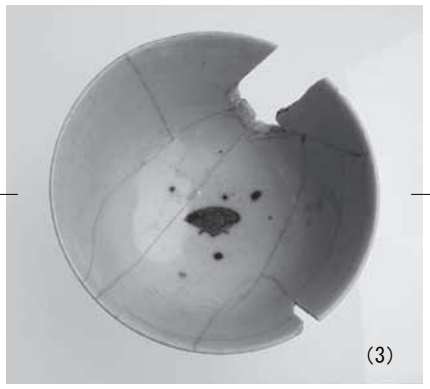

11-SK(2)

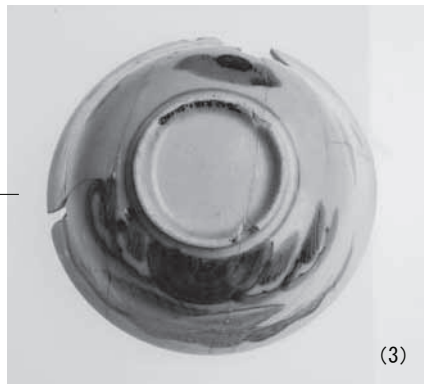

(2)

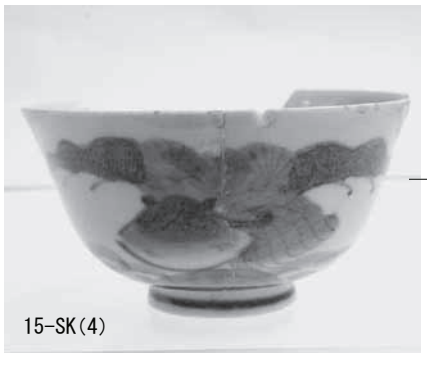

(2)

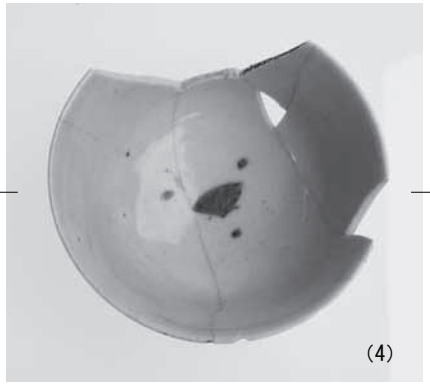

15-SK(4)　01-SK(3)

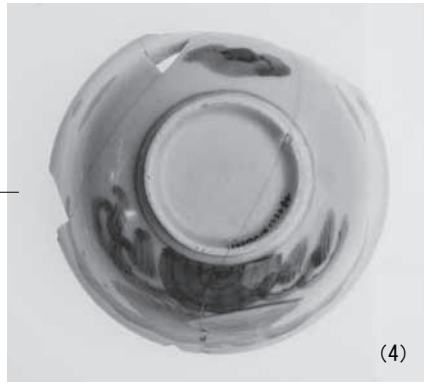
01-SK(3)


(3)


(3)


15-SK(4)

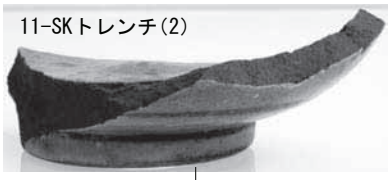

(4)


(4)

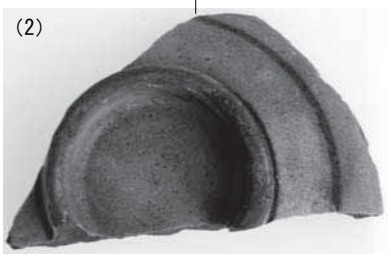
1区出土陶磁器8

11-SKトレンチ(1)

(1)



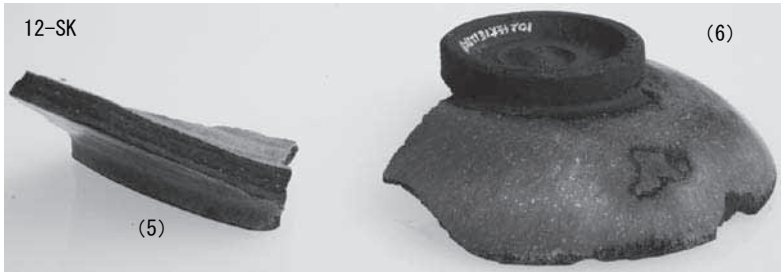
11-SKトレンチ(2)



(2)

12-SK(3)

12-SK(4)

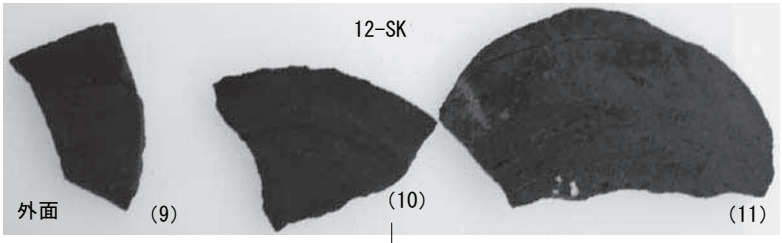


12-SK

(5)

(6)

12-SK(7)



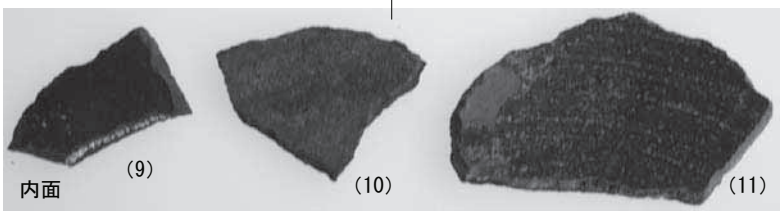
12-SK

外面

(9)

(10)

(11)



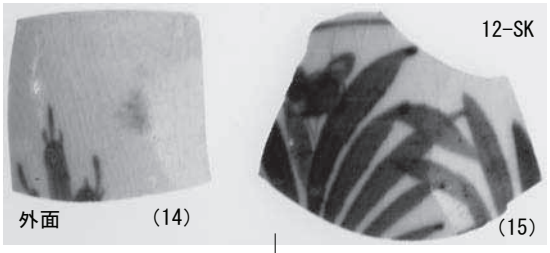
内面

(9)

(10)

(11)

12-SK(8)

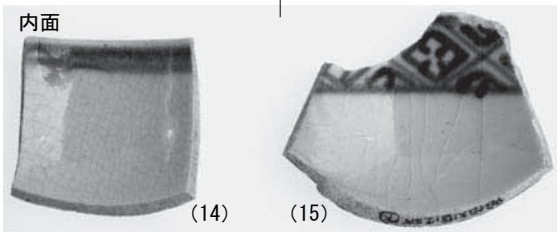


12-SK

外面

(14)

(15)



内面

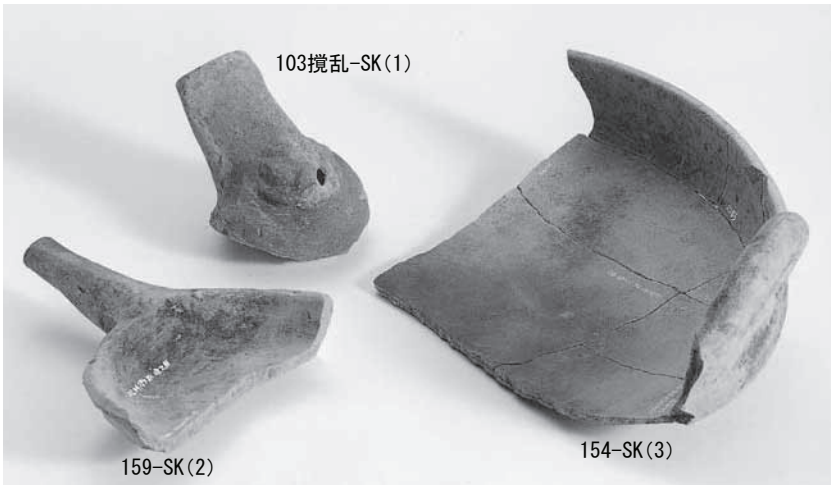
(14)

(15)

12-SK

(12)

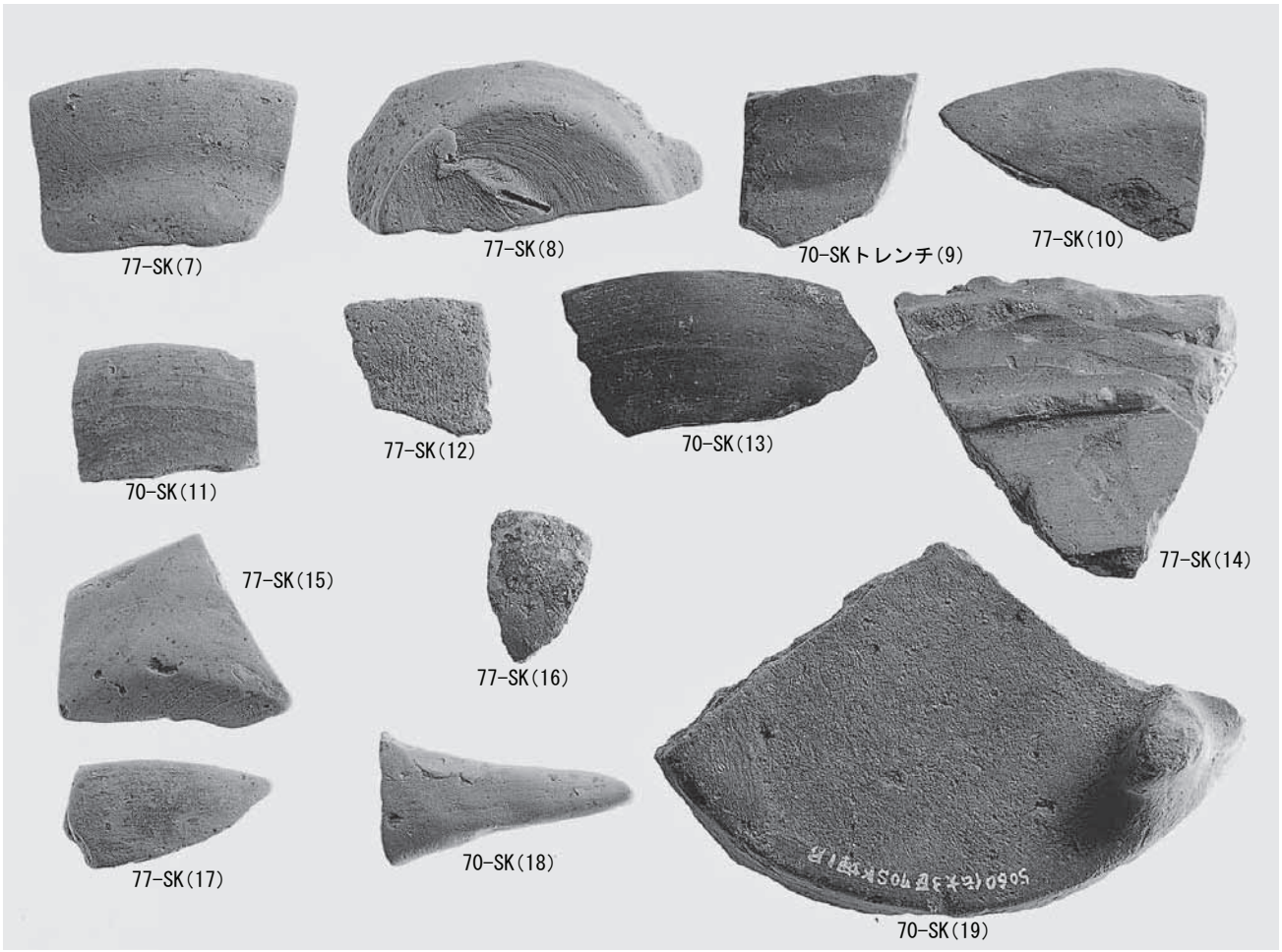
(13)


103撹乱-SK(1)
159-SK(2)
154-SK(3)

12-SK(4)

111・111b・111c・-SK(5)

111・111b・185・186-SK(6)

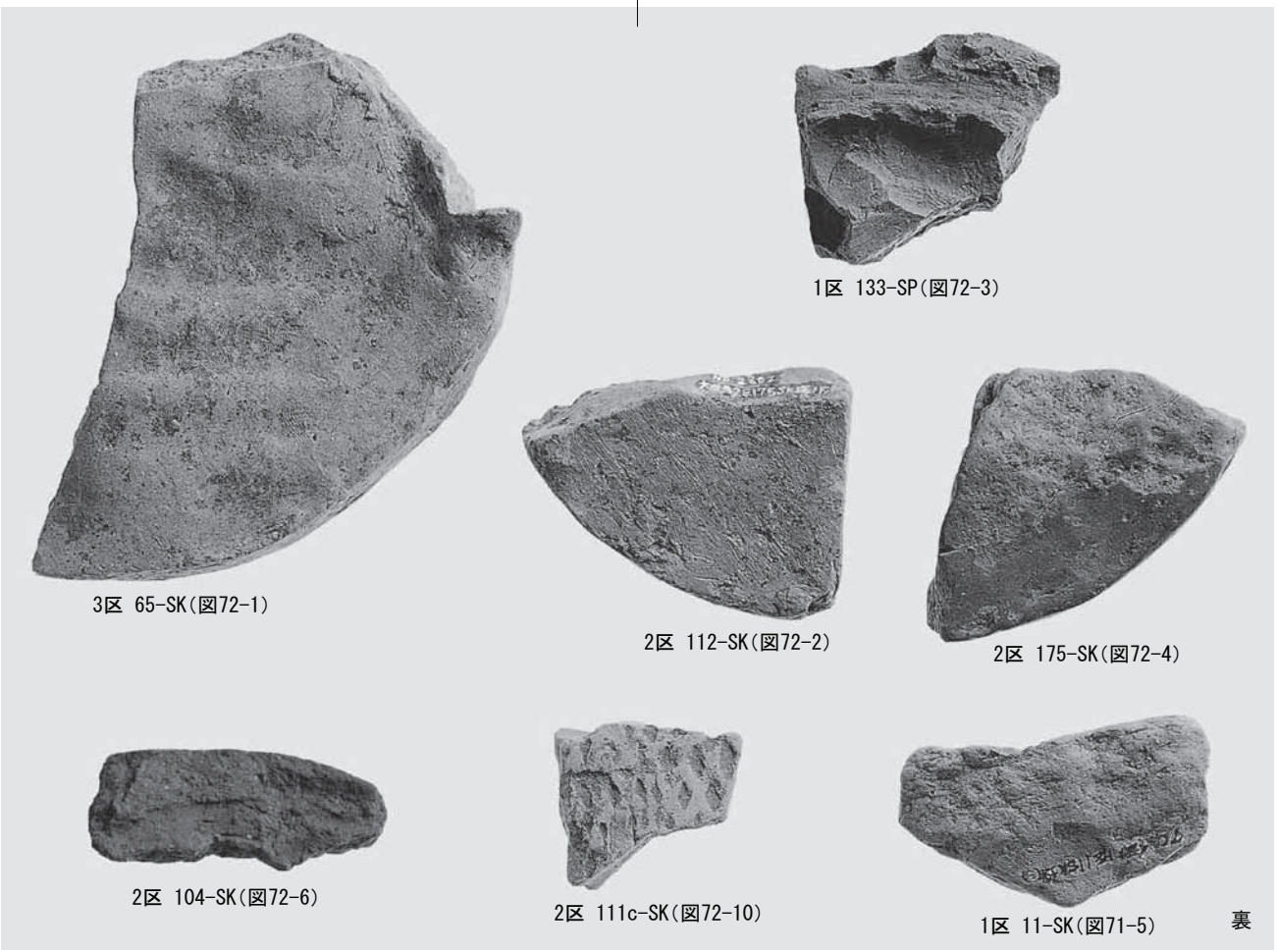

77-SK(7)
77-SK(8)
70-SKトレンチ(9)
77-SK(10)
70-SK(11)
77-SK(12)
70-SK(13)
77-SK(14)
77-SK(15)
77-SK(16)
77-SK(17)
70-SK(18)
70-SK(19)

SK-04(1)外面

SK-04(1)内面

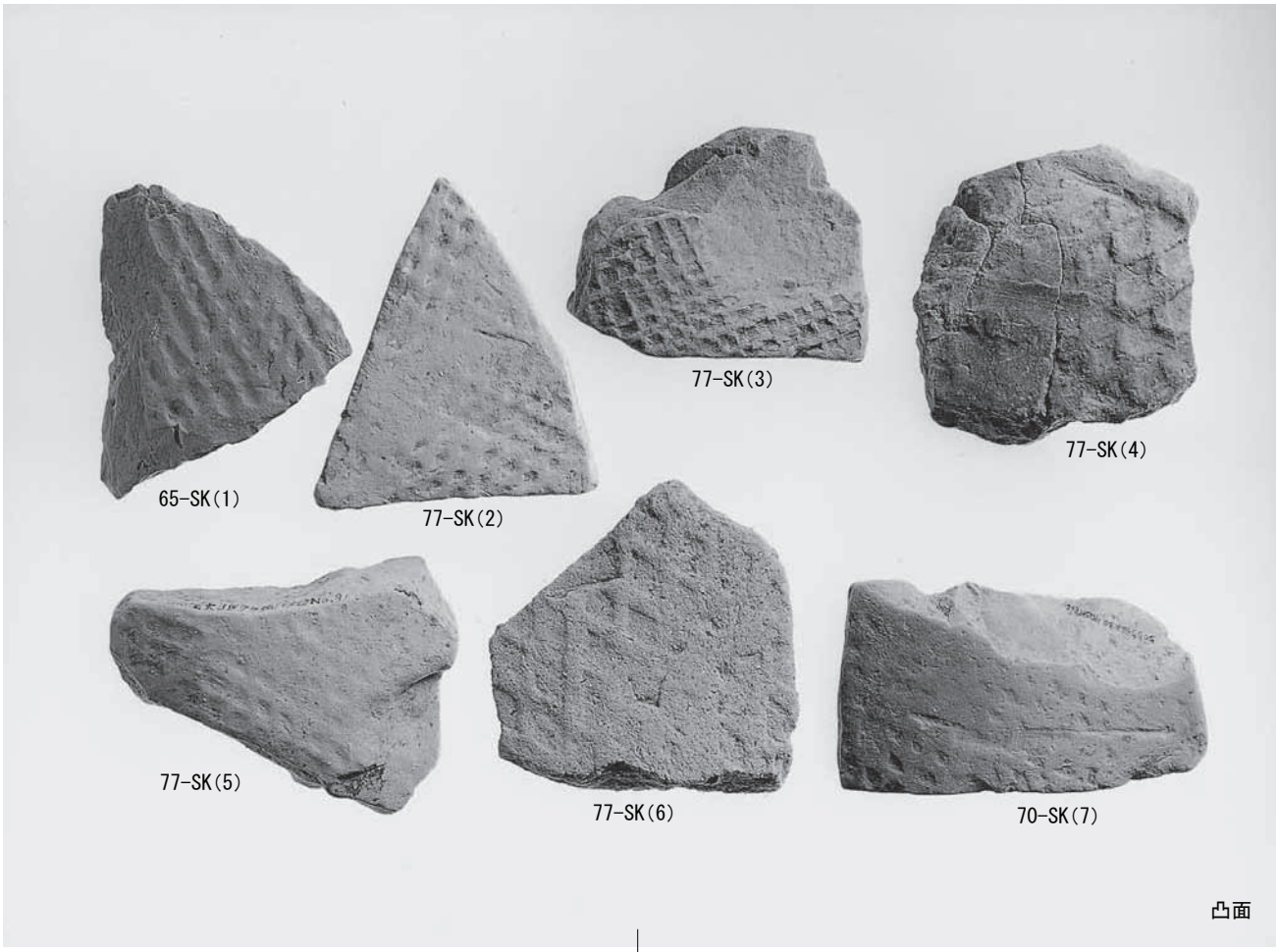
1区 133-SP(図72-3)
3区 65-SK(図72-1)
2区 112-SK(図72-2)
2区 175-SK(図72-4)
2区 104-SK(図72-6)
2区 111c-SK(図72-10)
1区 11-SK(図71-5)

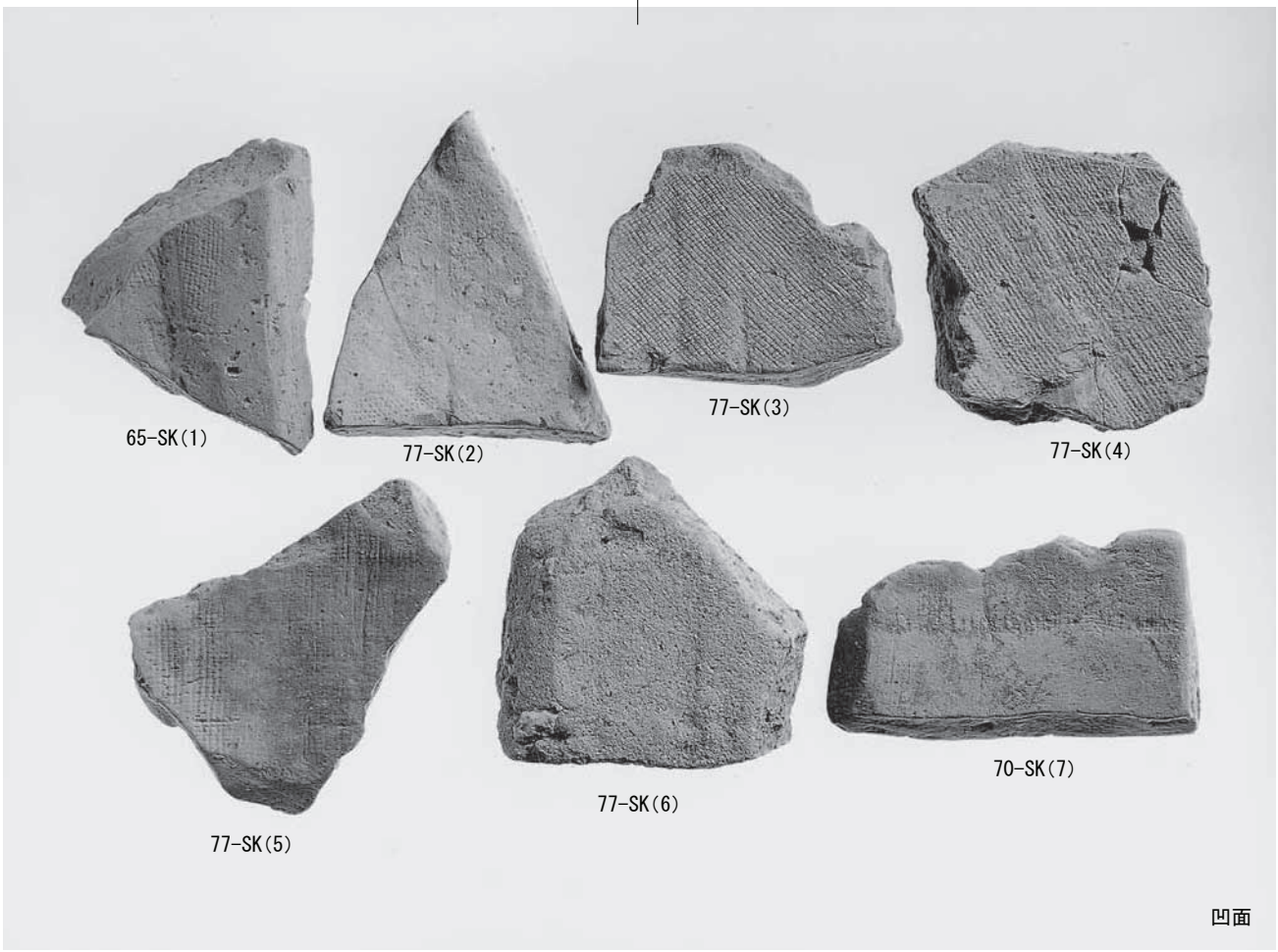
表

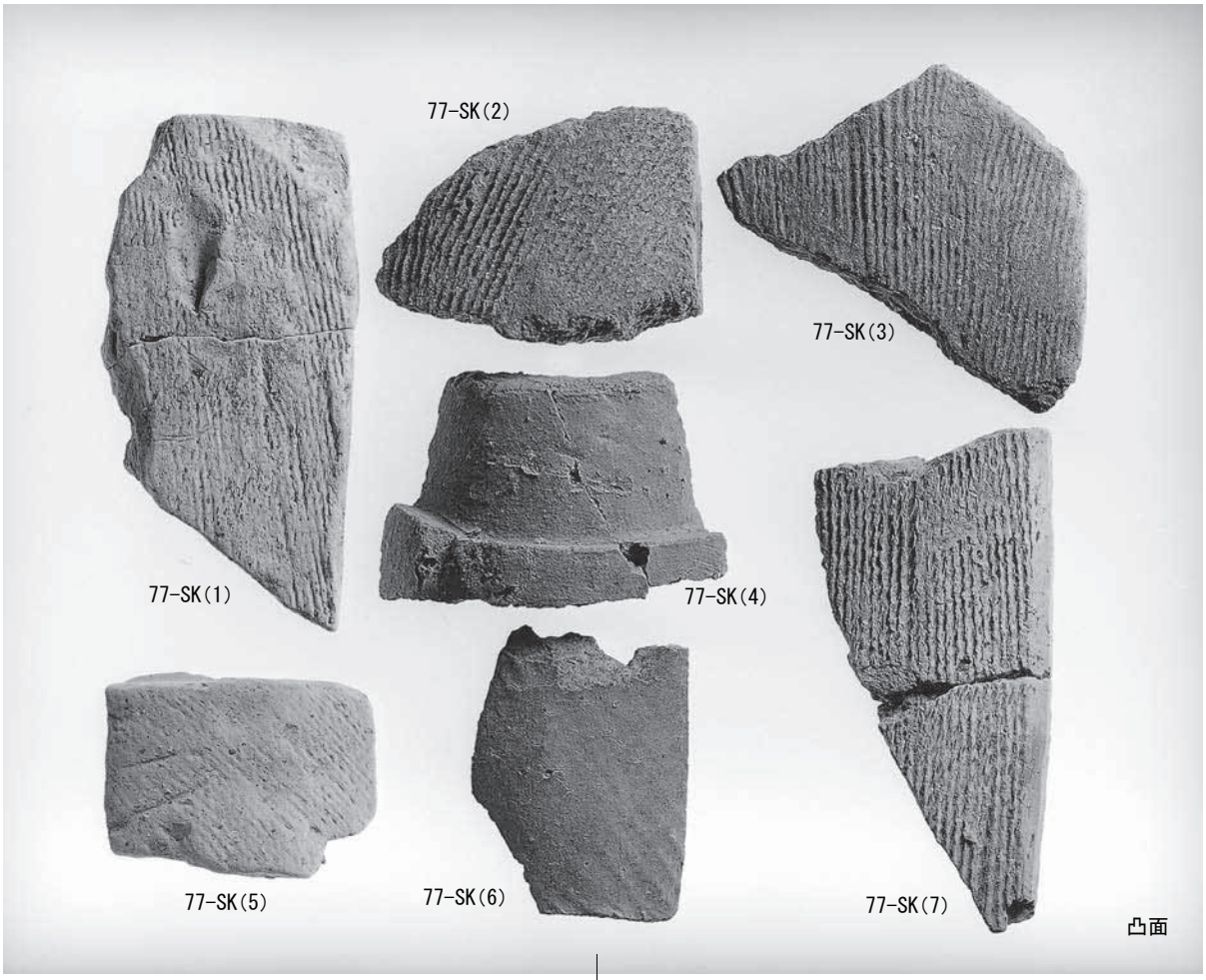

1区 133-SP(図72-3)
3区 65-SK(図72-1)
2区 112-SK(図72-2)
2区 175-SK(図72-4)
2区 104-SK(図72-6)
2区 111c-SK(図72-10)
1区 11-SK(図71-5)

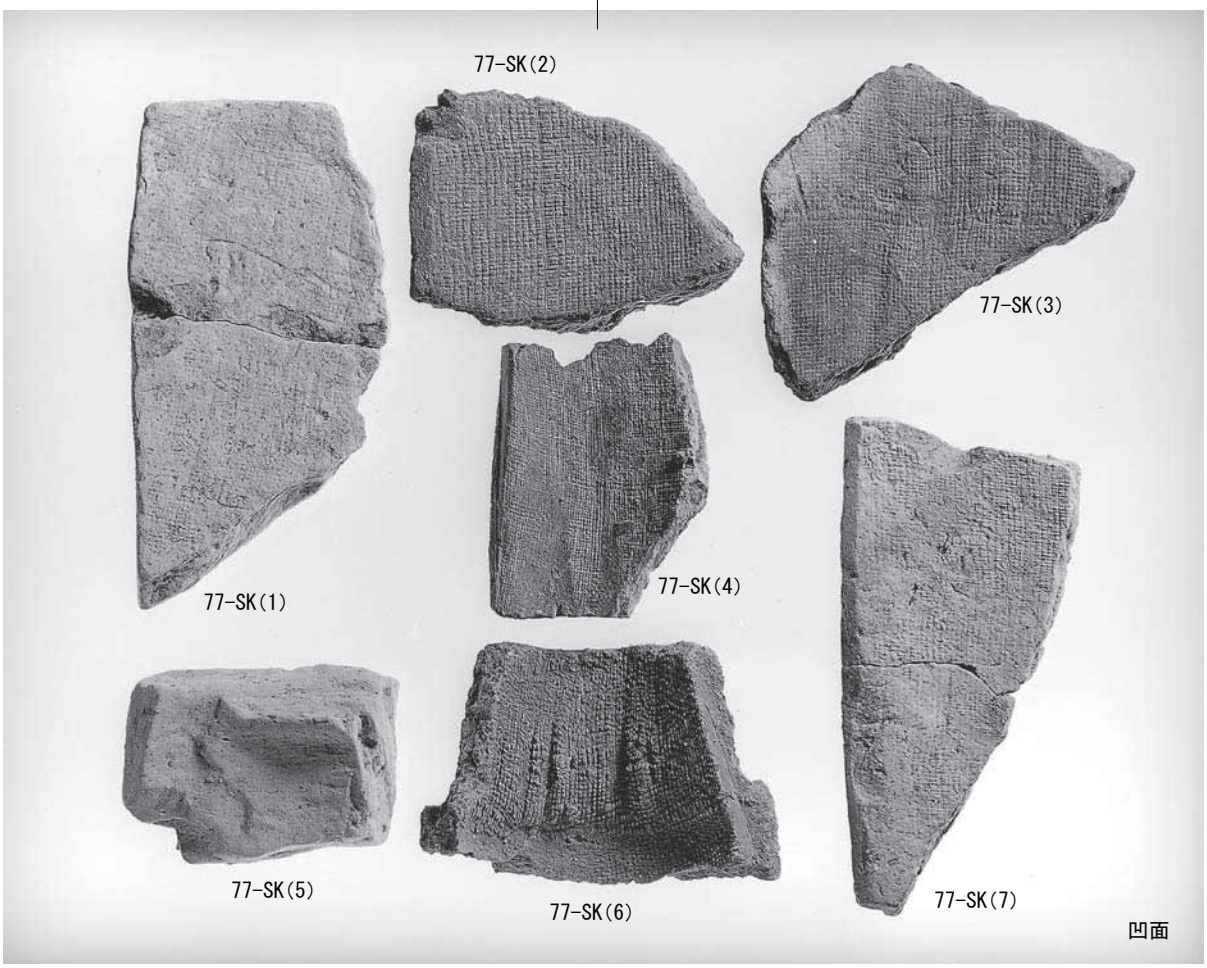
裏

3区出土瓦1

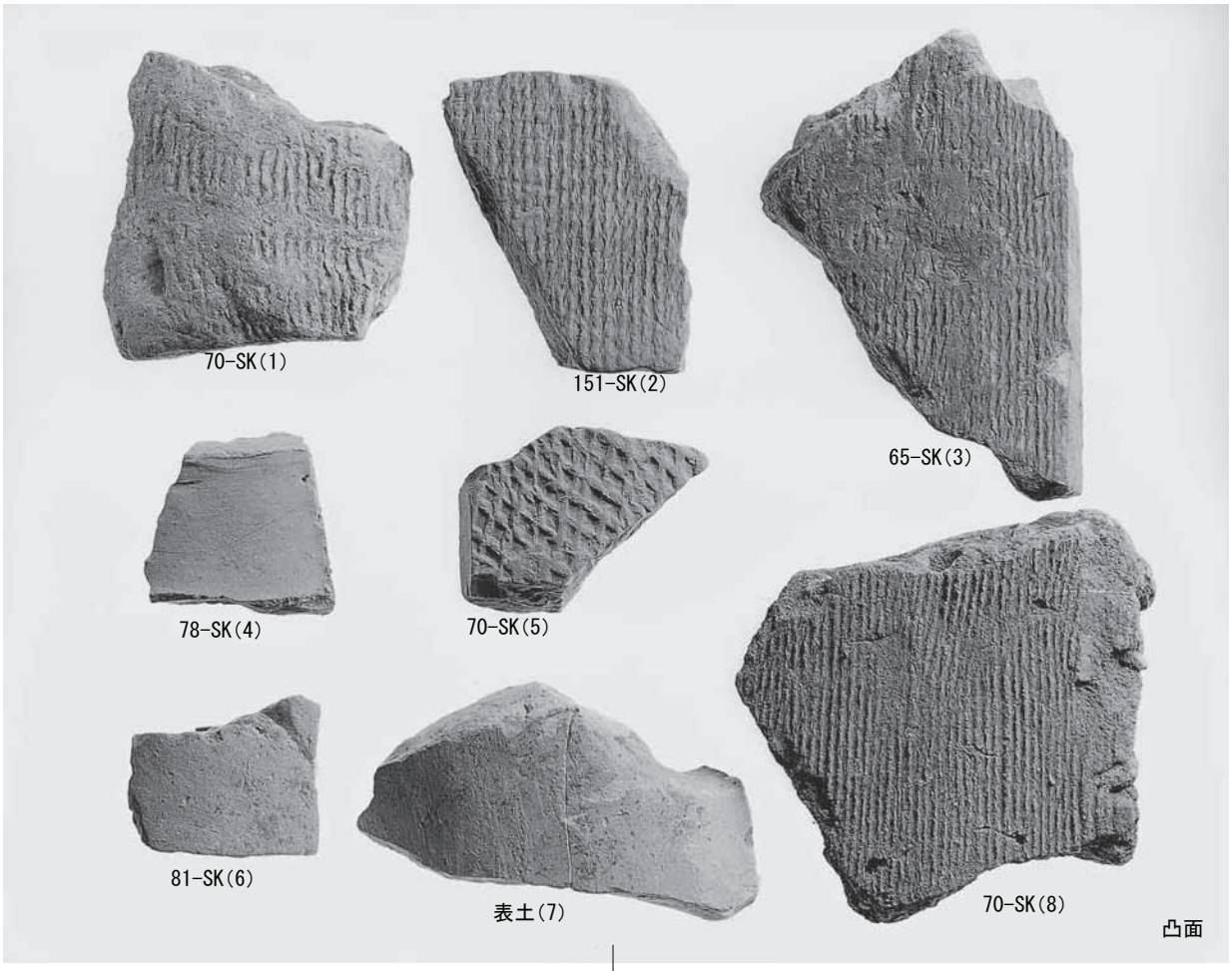

65-SK(1)
77-SK(2)
77-SK(3)
77-SK(4)
77-SK(5)
77-SK(6)
70-SK(7)
凸面

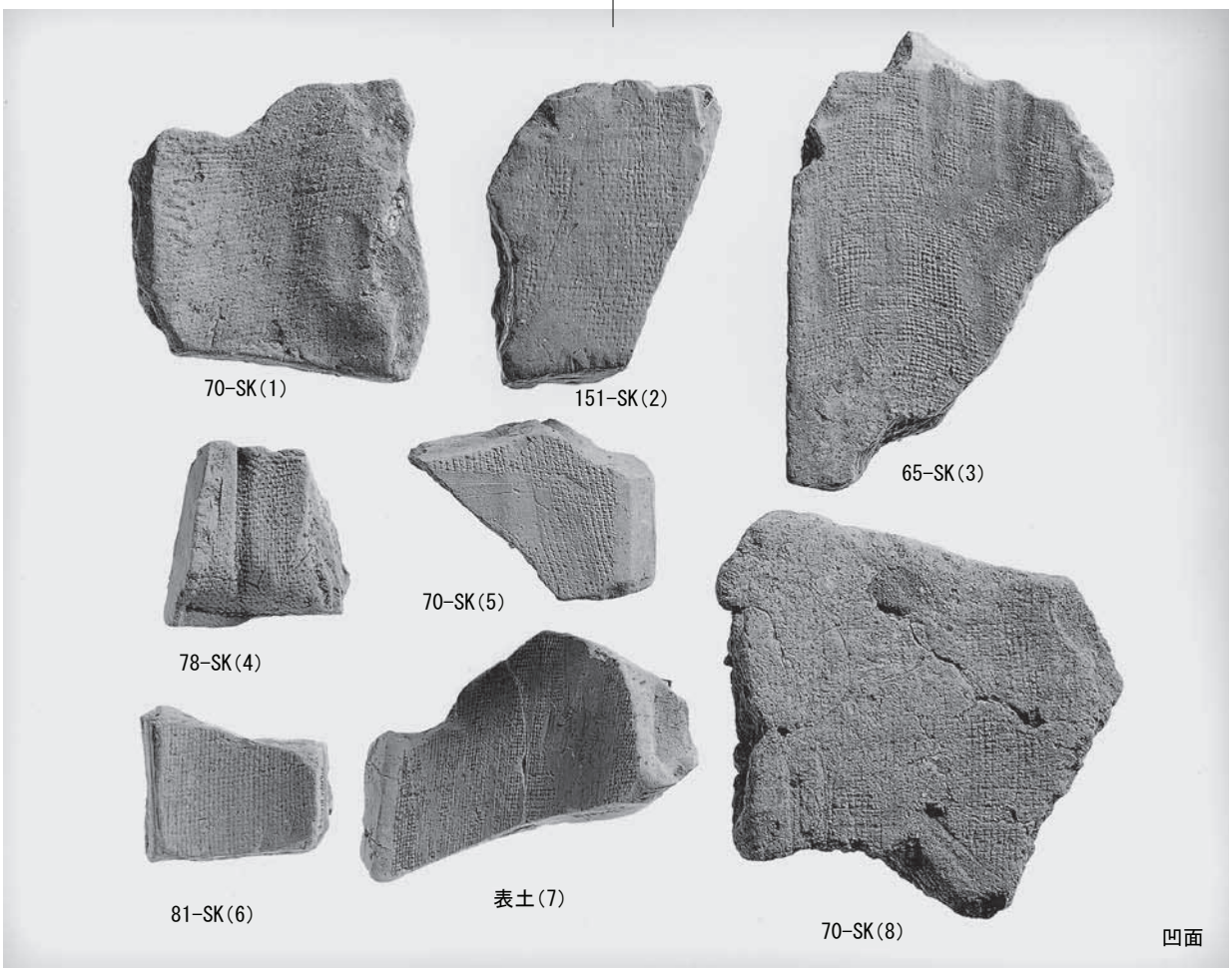

65-SK(1)
77-SK(2)
77-SK(3)
77-SK(4)
77-SK(5)
77-SK(6)
70-SK(7)
凹面

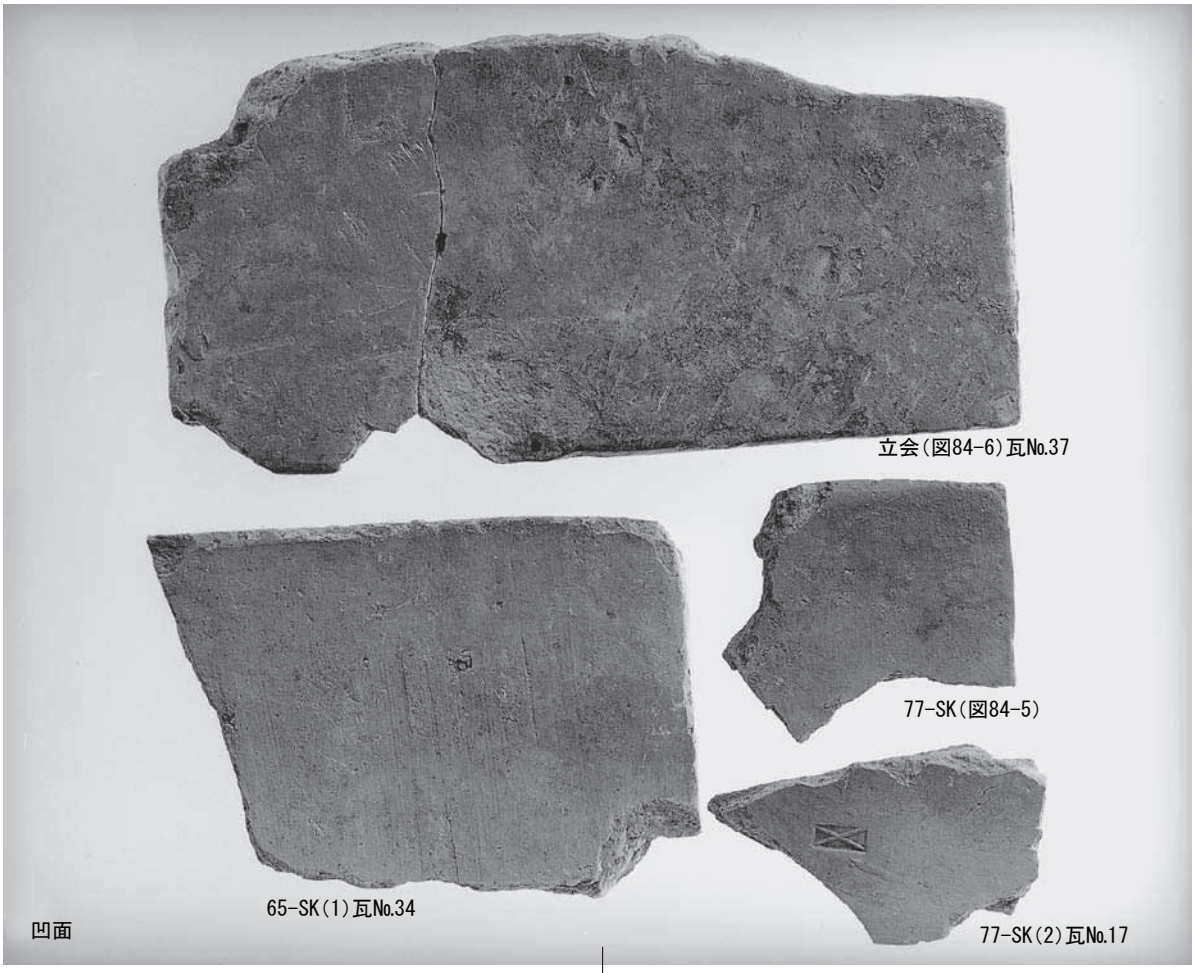

77-SK(2)
77-SK(3)
77-SK(1)
77-SK(4)
77-SK(5)
77-SK(6)
77-SK(7)
凸面


77-SK(2)
77-SK(3)
77-SK(1)
77-SK(4)
77-SK(5)
77-SK(6)
77-SK(7)
凹面

3区出土瓦3

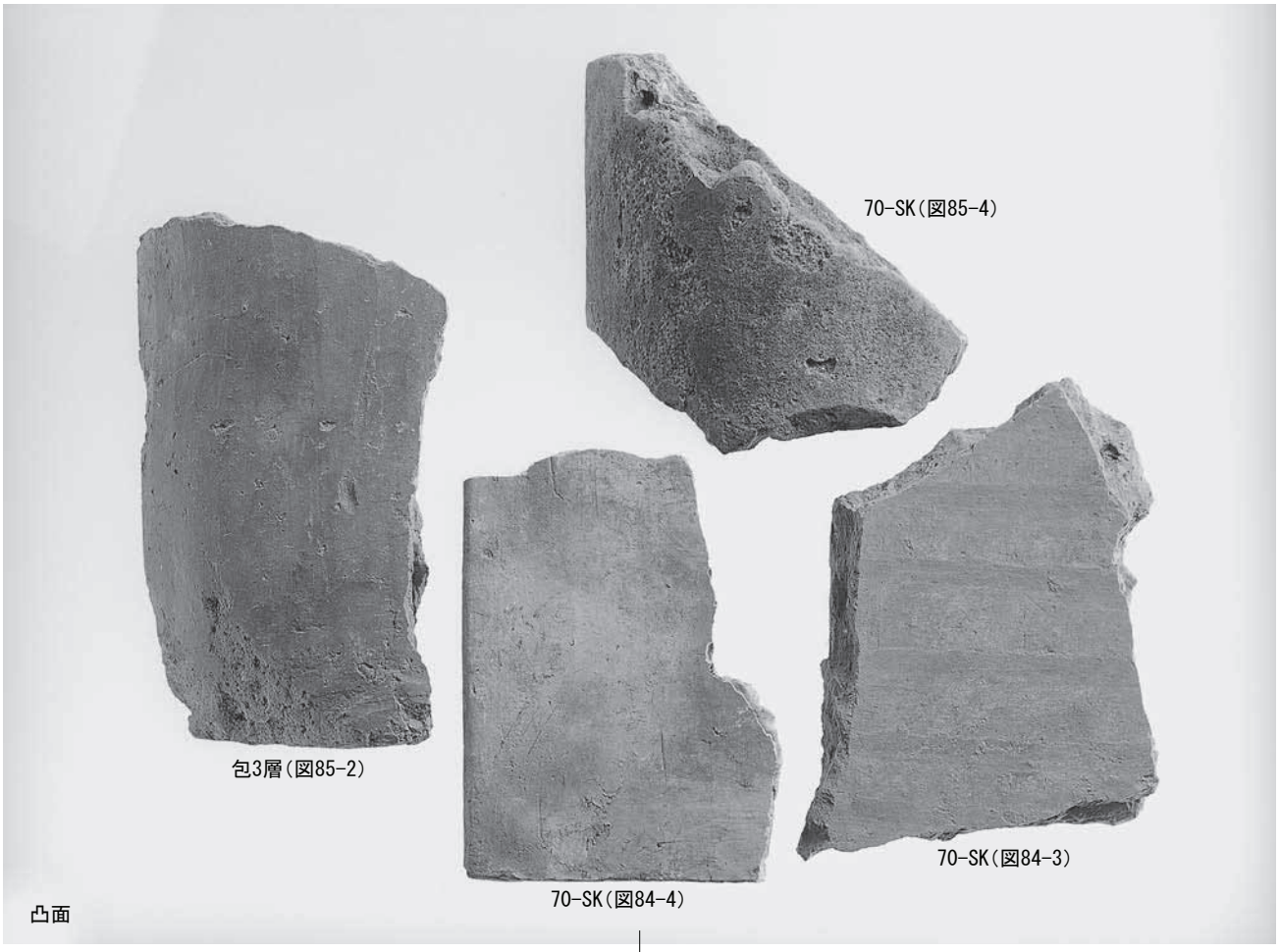

70-SK(1)
151-SK(2)
65-SK(3)
78-SK(4)
70-SK(5)
81-SK(6)
表土(7)
70-SK(8)
凸面

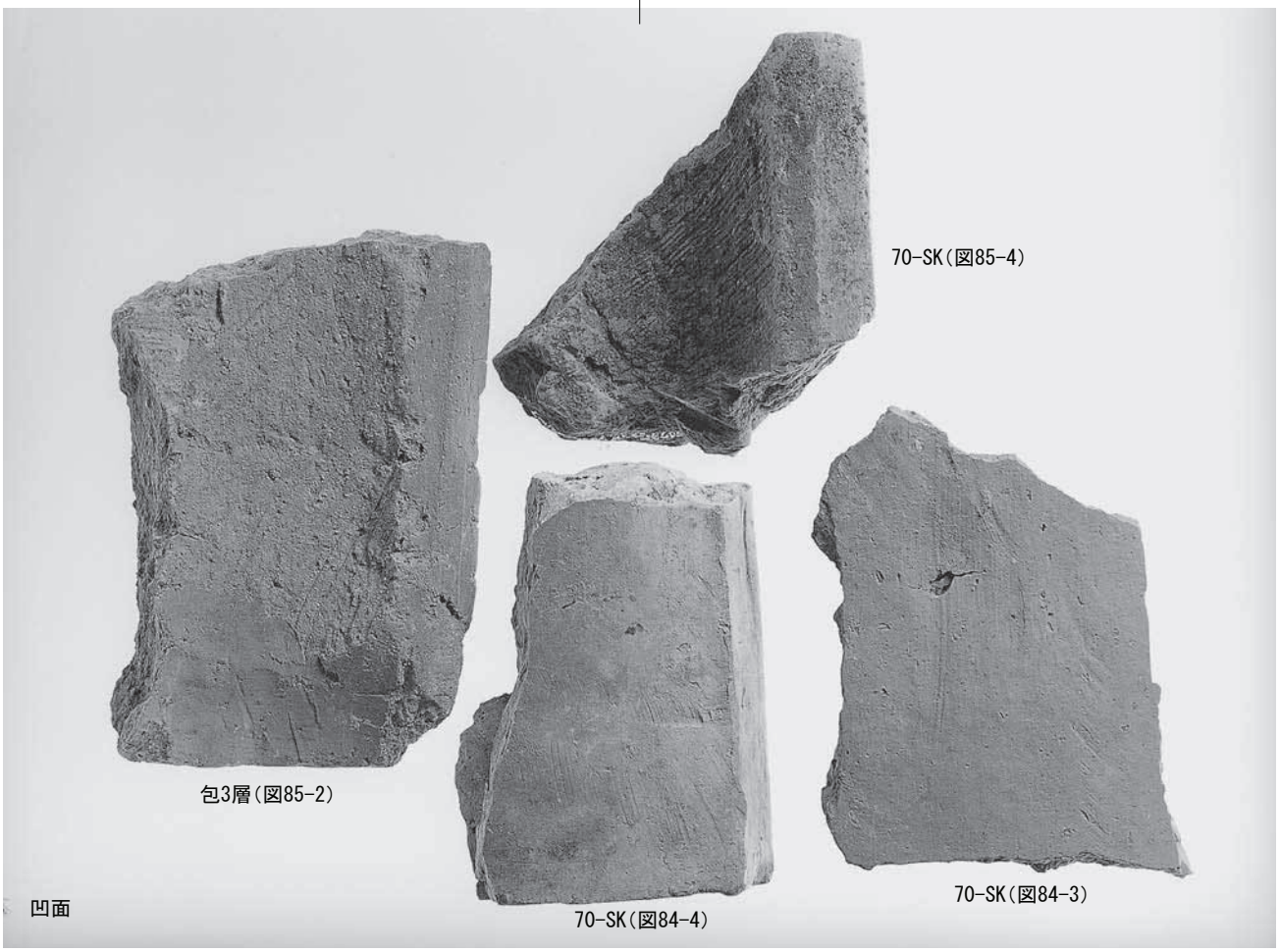

70-SK(1)
151-SK(2)
65-SK(3)
70-SK(5)
78-SK(4)
81-SK(6)
表土(7)
70-SK(8)
凹面


立会(図84-6)瓦No.37
77-SK(図84-5)
65-SK(1)瓦No.34
77-SK(2)瓦No.17
凹面

立会(図84-6)瓦No.37
77-SK(図84-5)
77-SK(2)瓦No.17
65-SK(1)瓦No.34
凸面

3区出土瓦5


70-SK(図85-4)
包3層(図85-2)
70-SK(図84-4)
70-SK(図84-3)
凸面


70-SK(図85-4)
包3層(図85-2)
70-SK(図84-4)
70-SK(図84-3)
凹面

2区 37-SE(図72-8)

2区 185-SK(1)

2区 163-SK(図71-3)

立会 502-SK(図70-2)

3区 77-SK(図71-7)

2区 38-SK(図71-4)

2区 106-SK(図72-7)

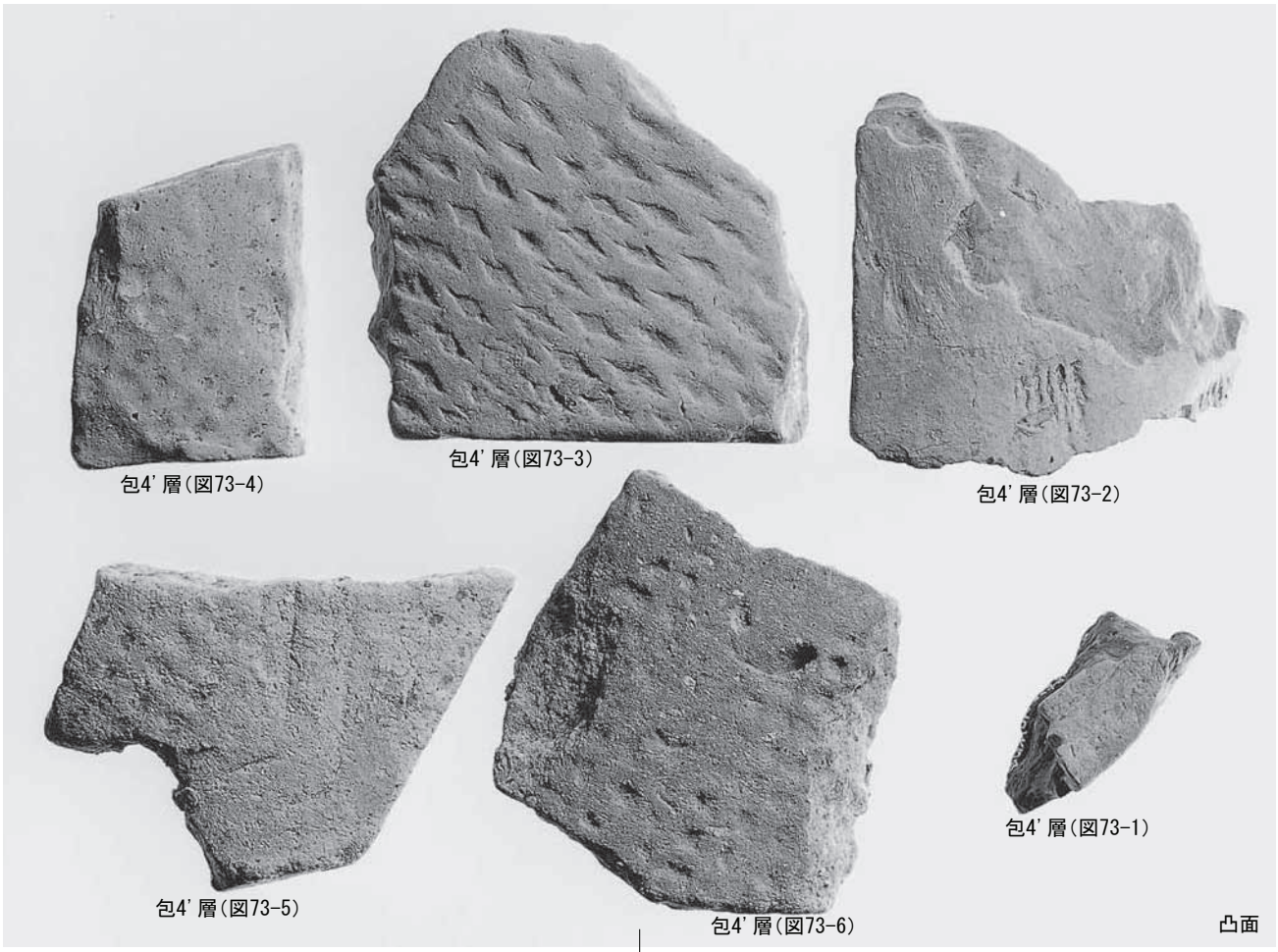
2区 104-SK(図72-5)

2区 247-SK(図71-6)

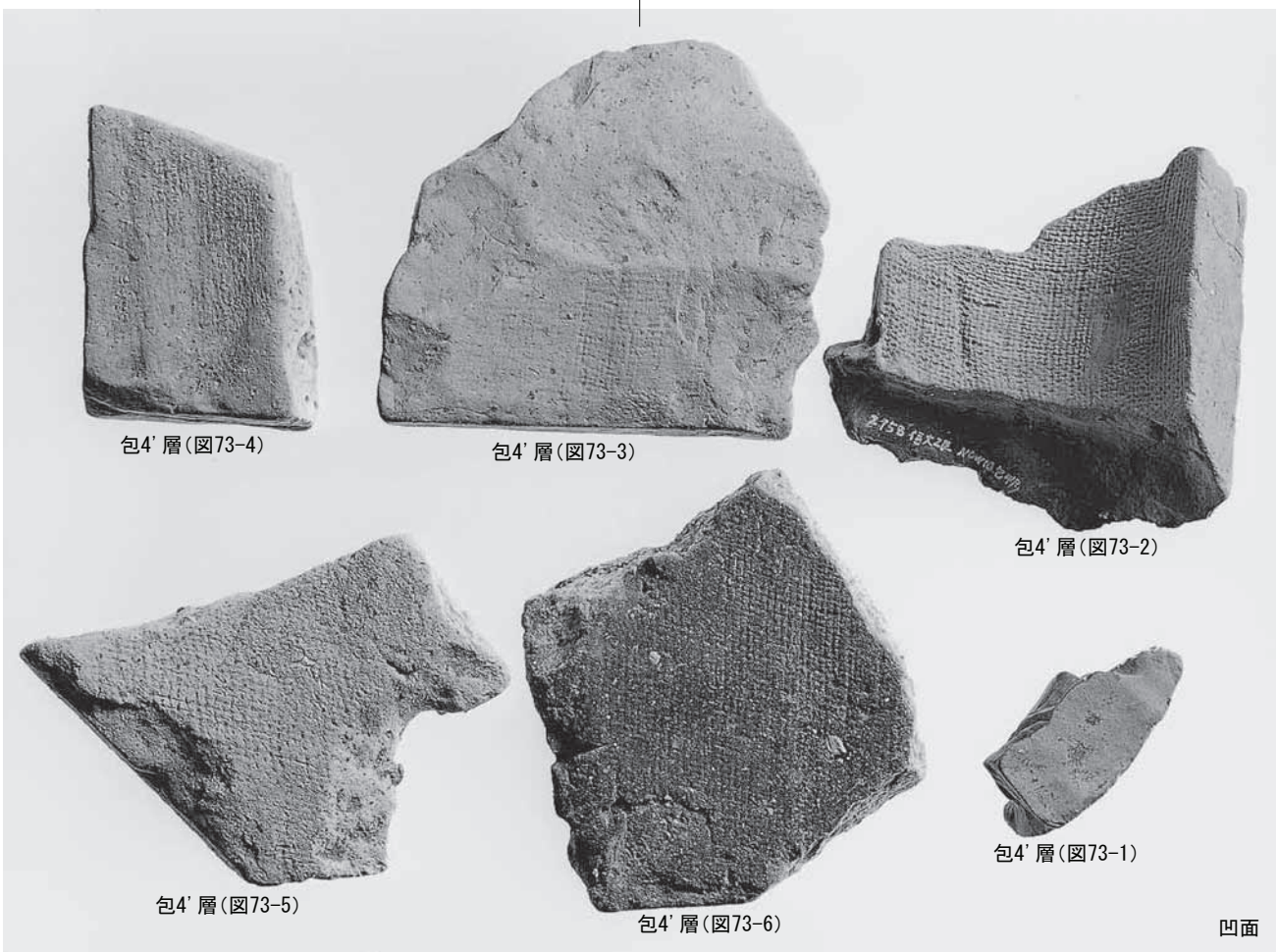
2区 164-SK・包含層(図70-1)

2区 164-SK・包含層(図70-1)

2区出土瓦1

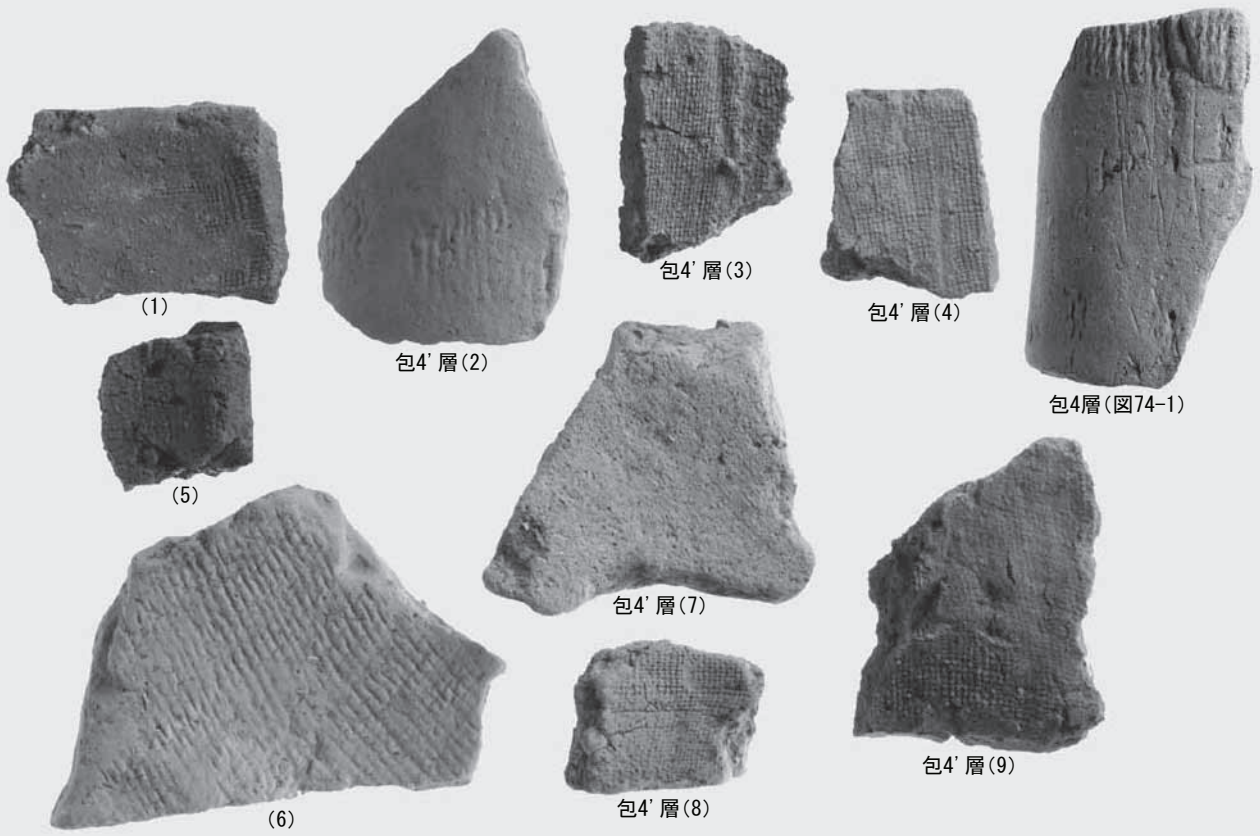


包4'層(図73-4)
包4'層(図73-3)
包4'層(図73-2)
包4'層(図73-5)
包4'層(図73-6)
包4'層(図73-1)
凸面



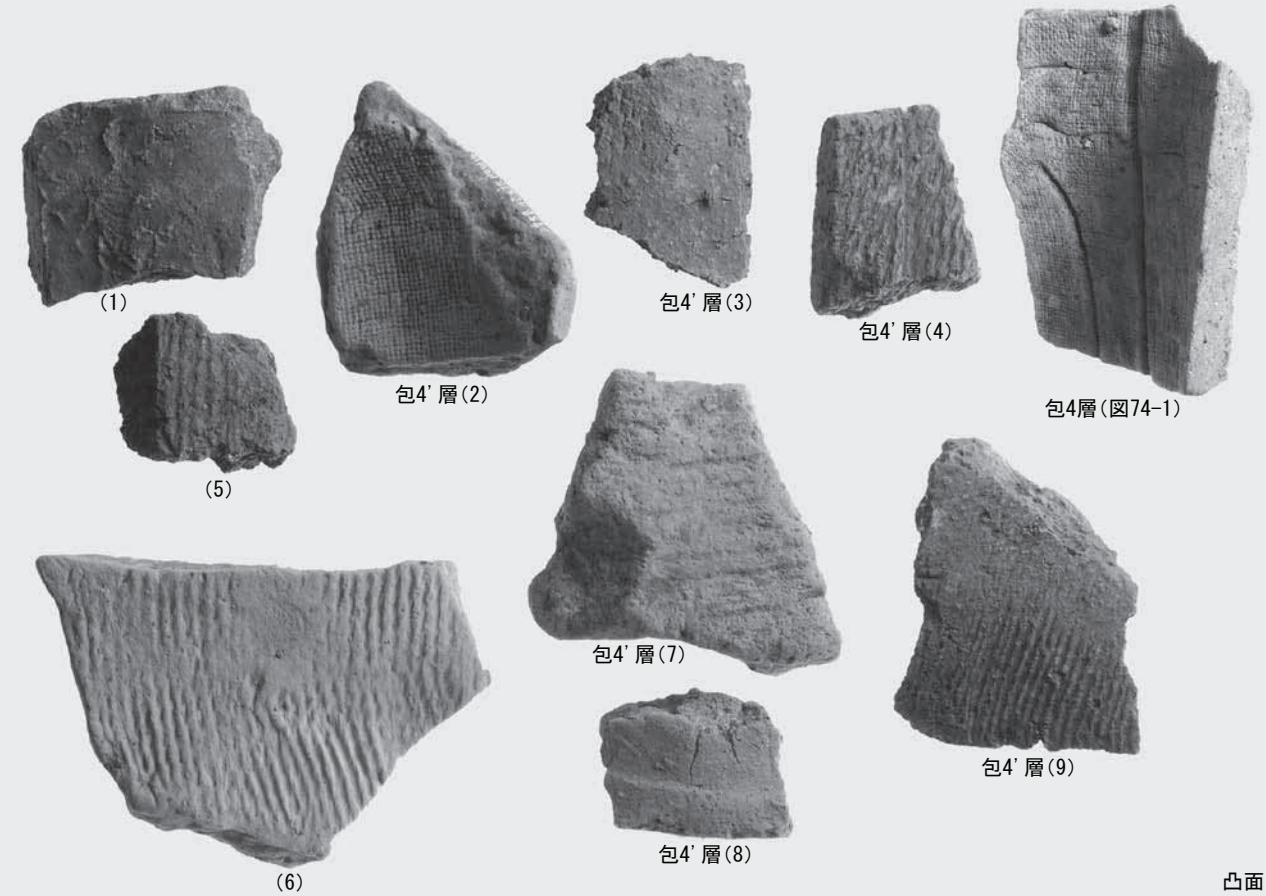
包4'層(図73-4)
包4'層(図73-3)
包4'層(図73-2)
包4'層(図73-5)
包4'層(図73-6)
包4'層(図73-1)
凹面

黒色整地層



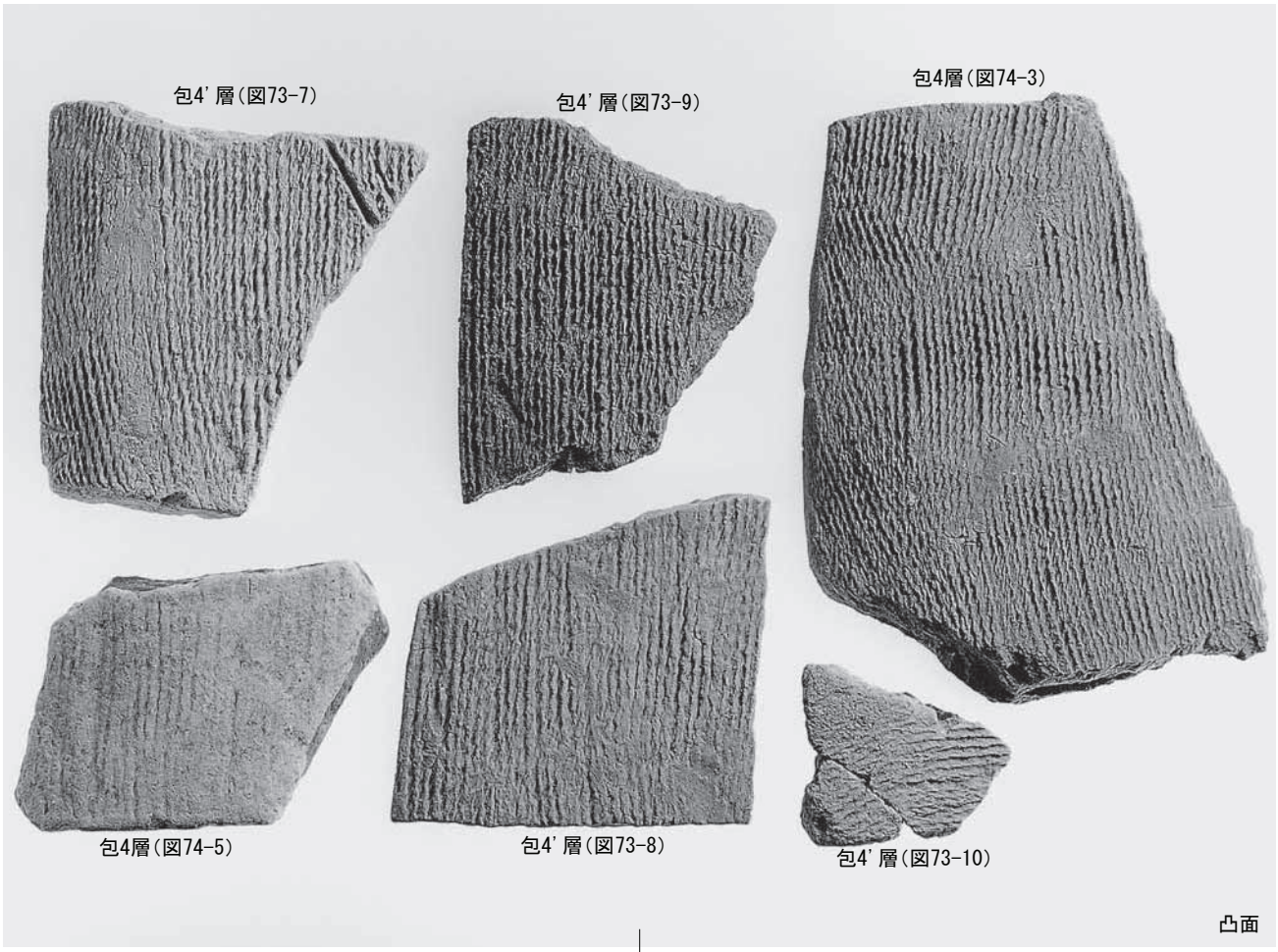
凸面

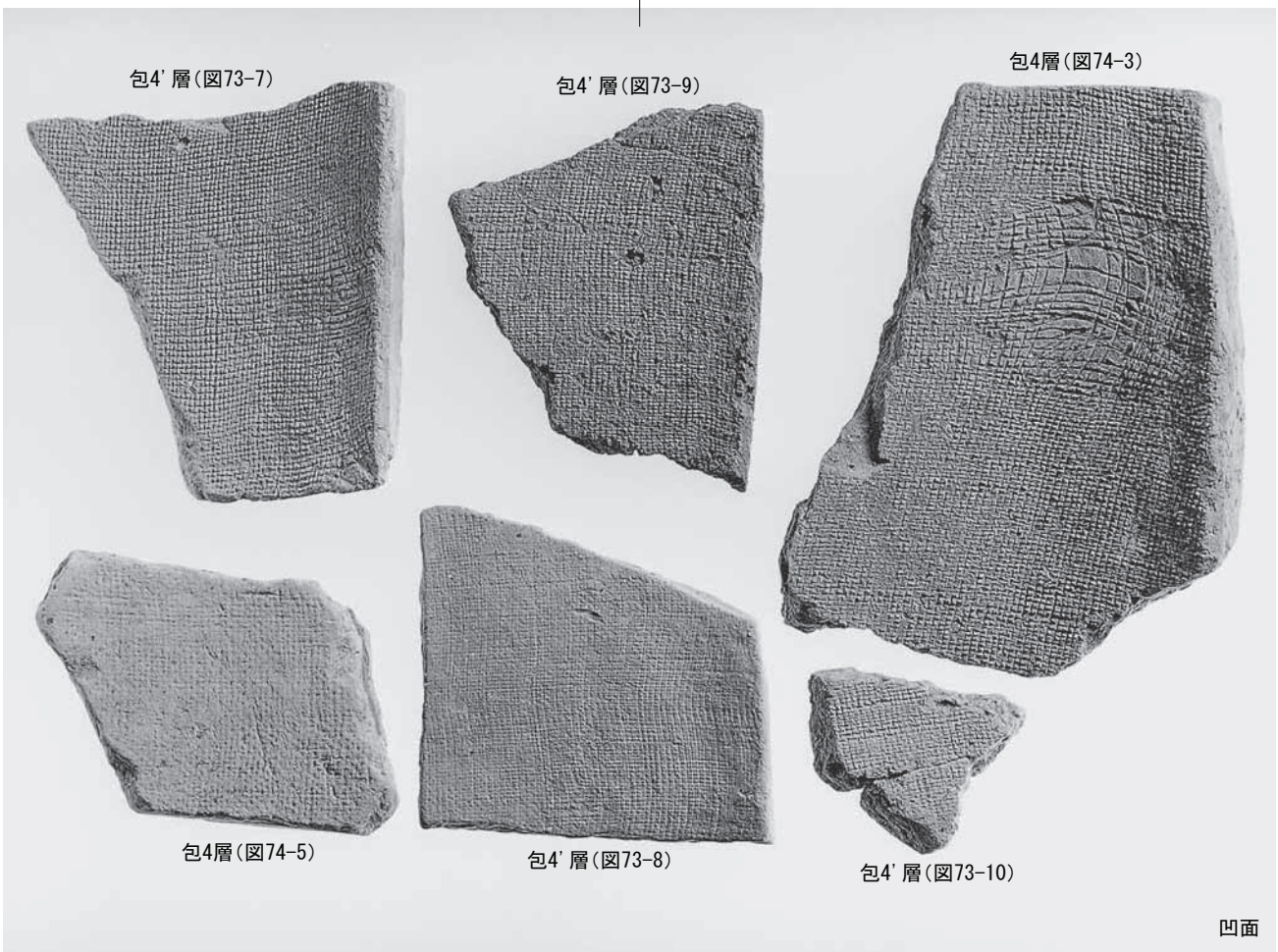
黒色整地層

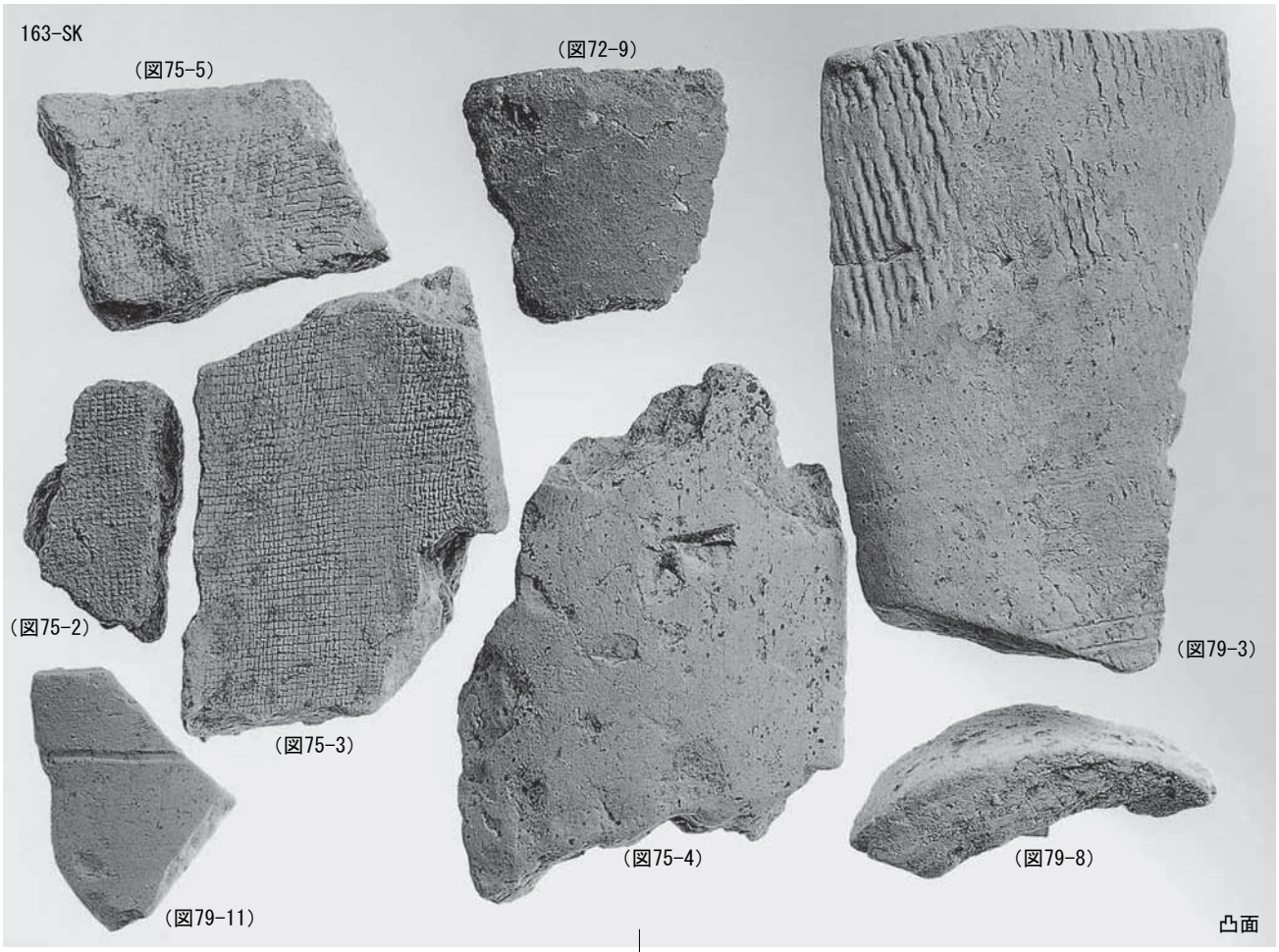


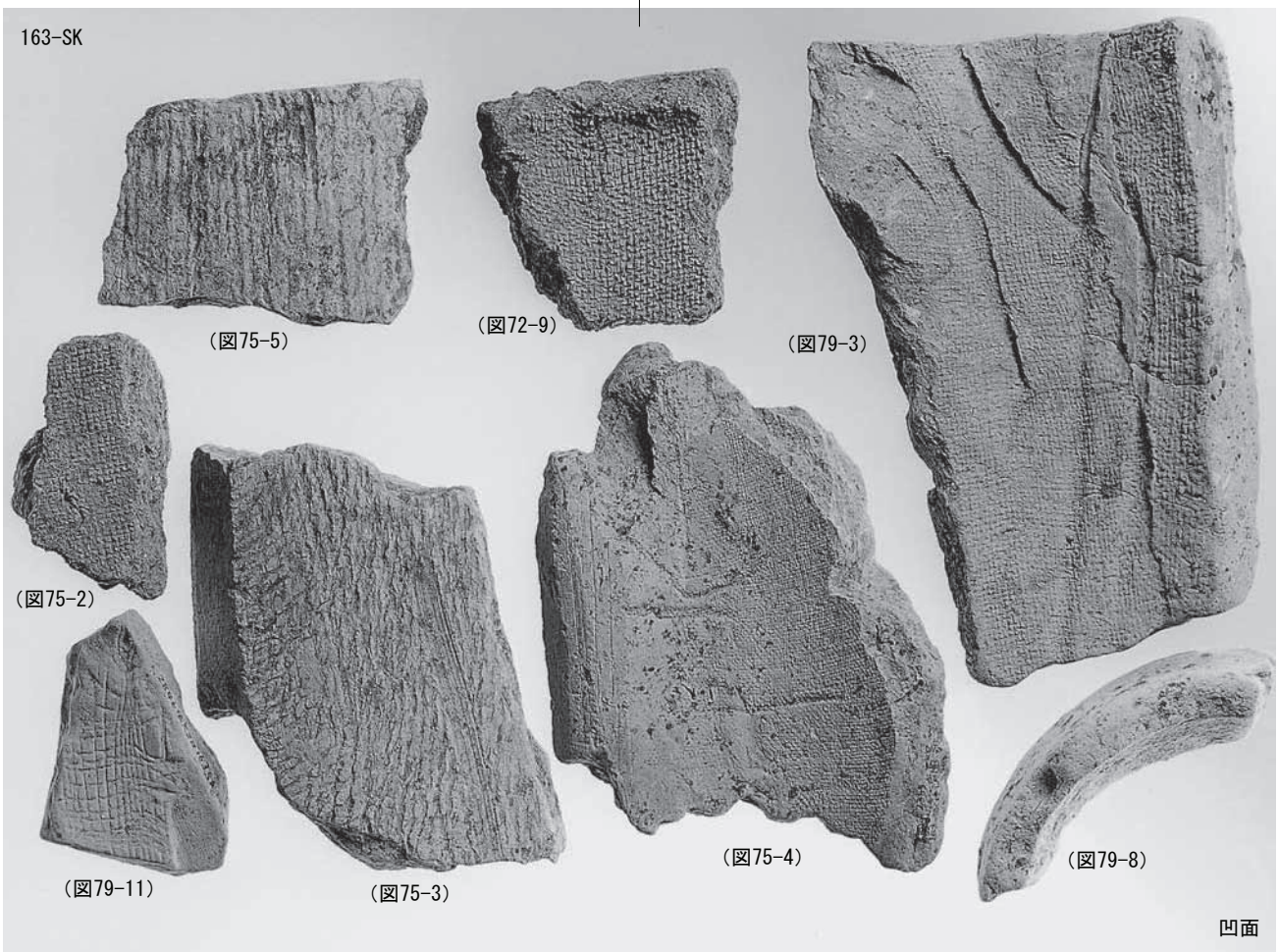
凸面

2区出土瓦3

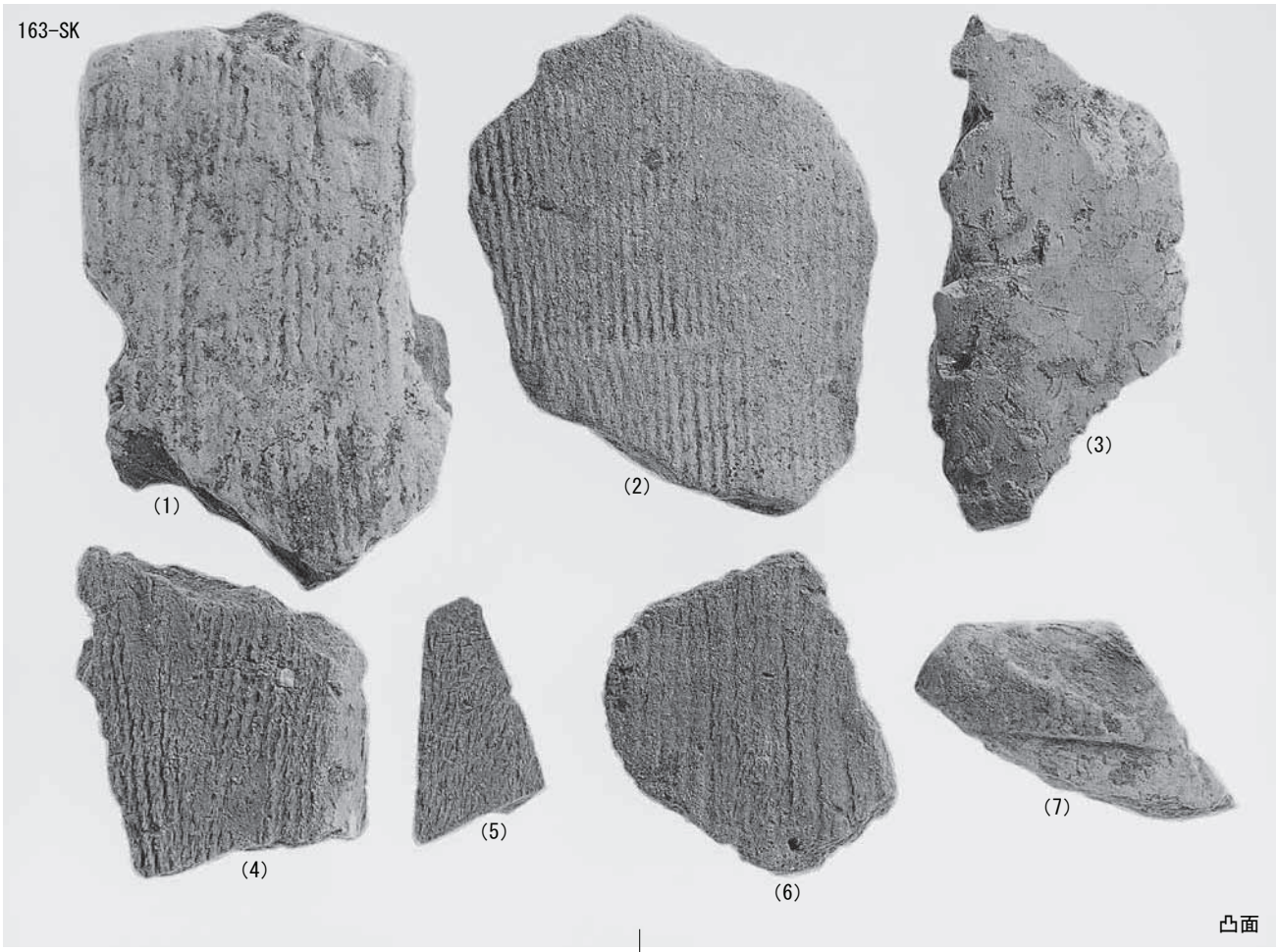

包4'層(図73-7)
包4'層(図73-9)
包4層(図74-3)
包4層(図74-5)
包4'層(図73-8)
包4'層(図73-10)
凸面

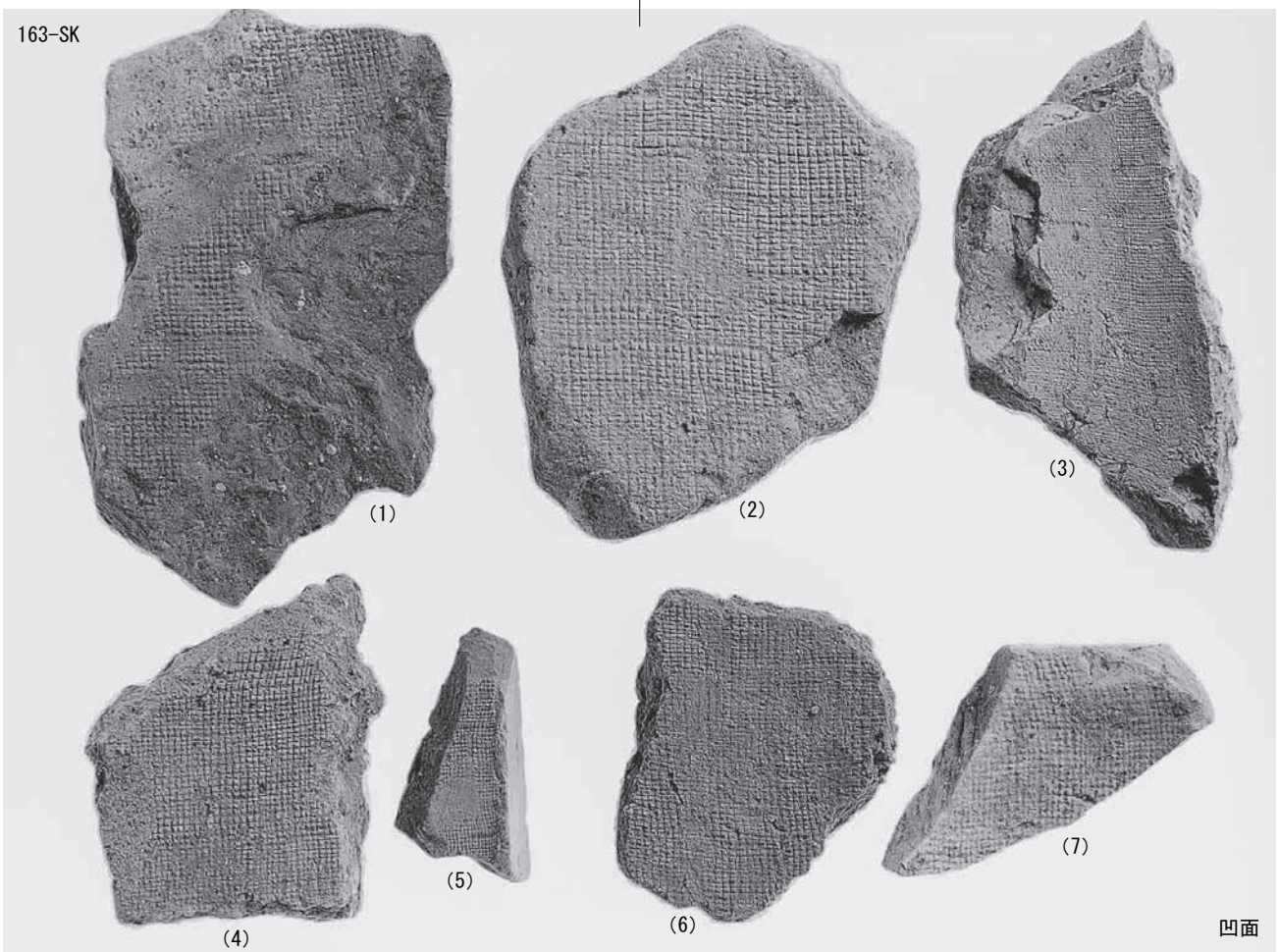

包4'層(図73-7)
包4'層(図73-9)
包4層(図74-3)
包4層(図74-5)
包4'層(図73-8)
包4'層(図73-10)
凹面

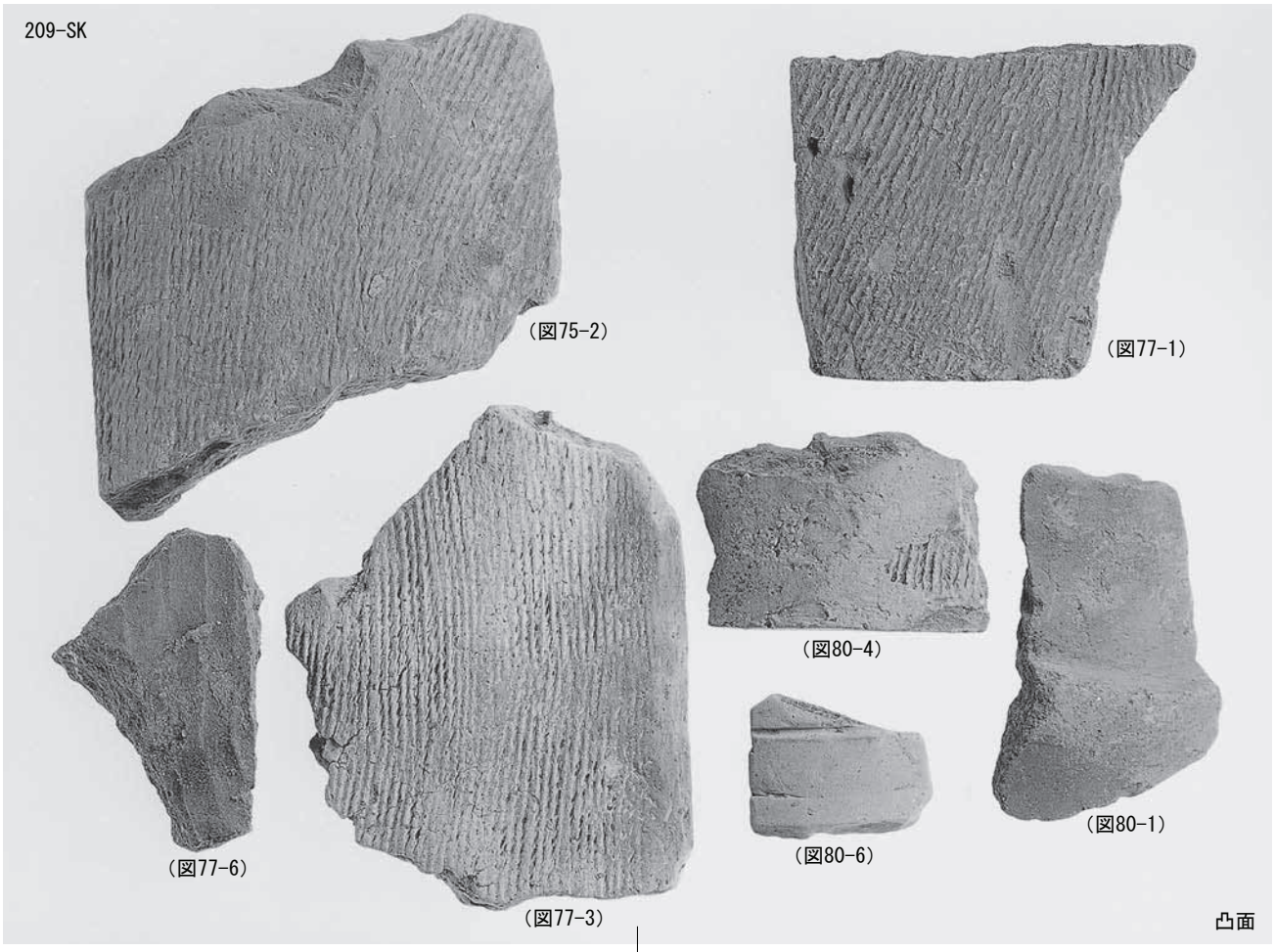

163-SK
（図75-5）
（図72-9）
（図75-2）
（図75-3）
（図75-4）
（図79-3）
（図79-8）
（図79-11）
凸面

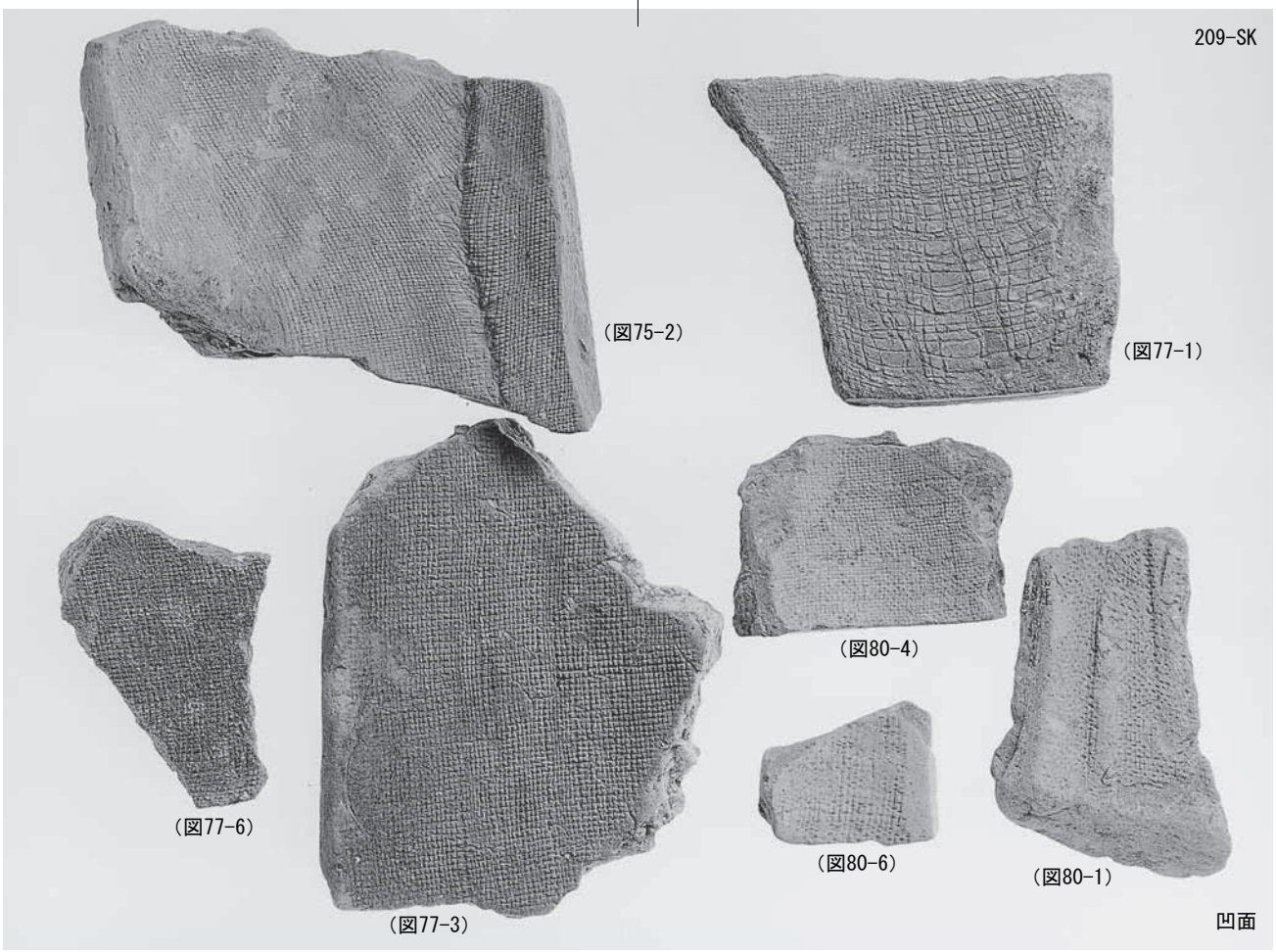

163-SK
（図75-5）
（図72-9）
（図79-3）
（図75-2）
（図75-4）
（図79-8）
（図79-11）
（図75-3）
凹面

2区出土瓦5



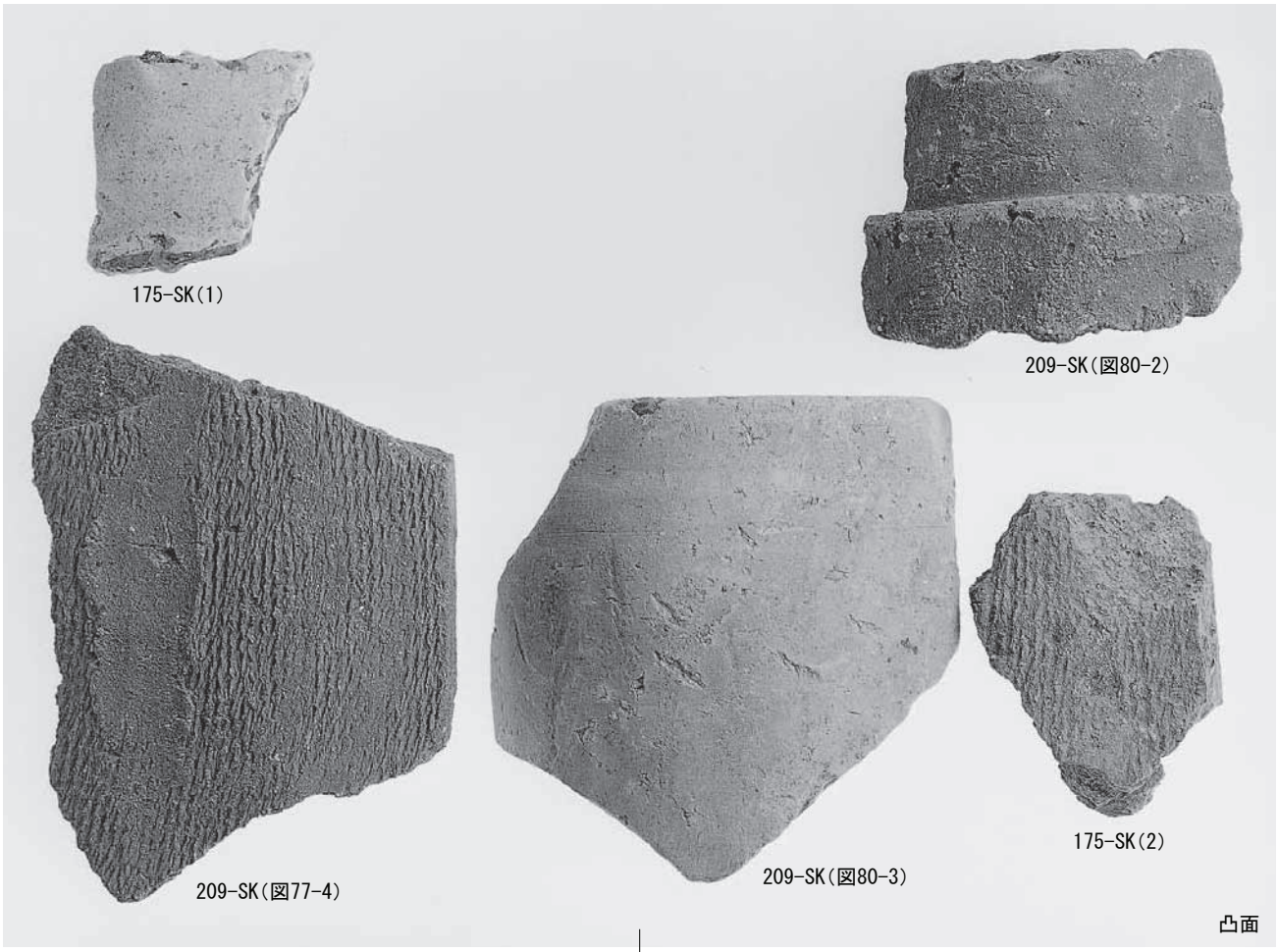


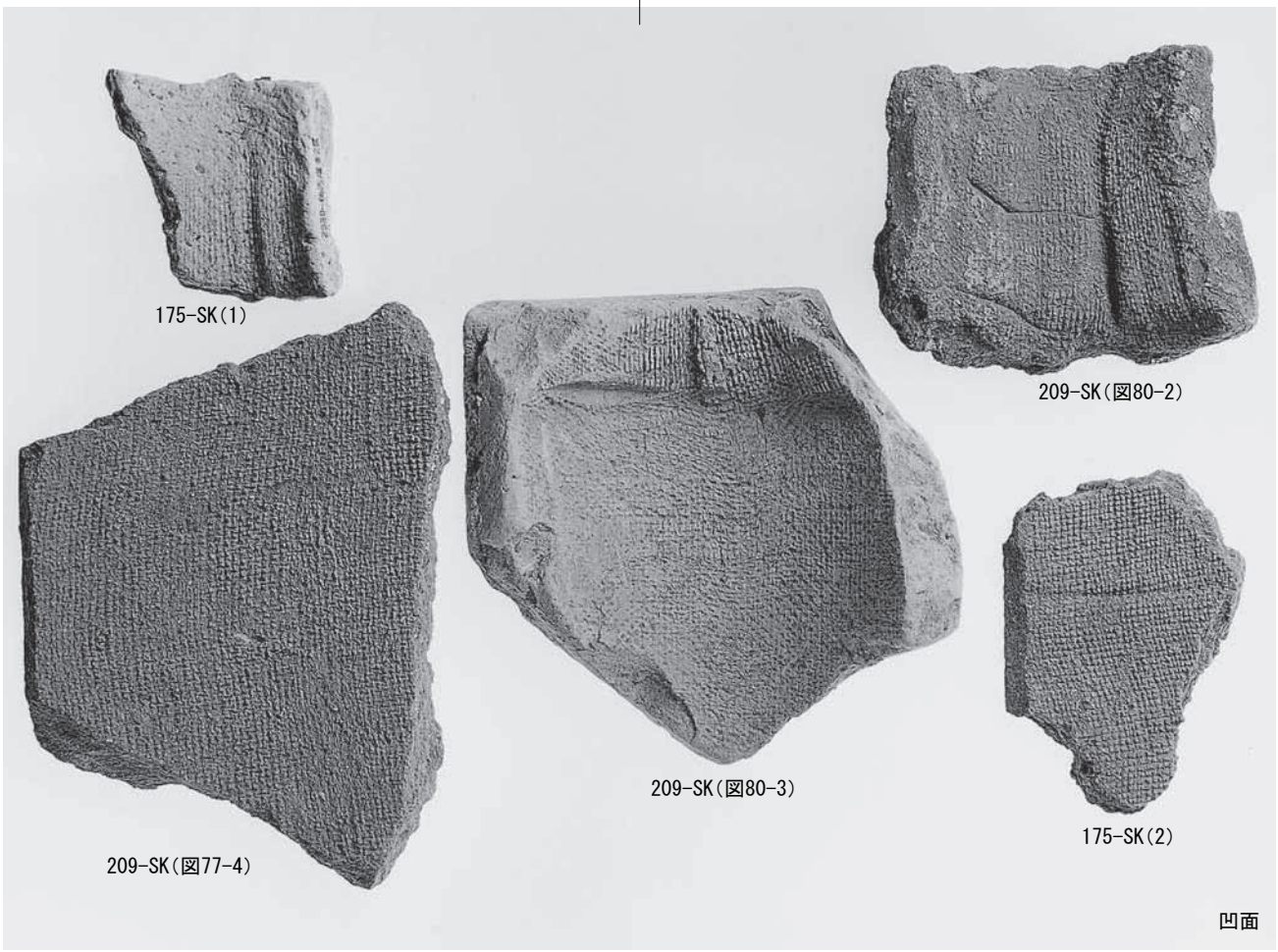

209-SK
(図75-2)
(図77-1)
(図77-6)
(図77-3)
(図80-4)
(図80-6)
(図80-1)
凸面

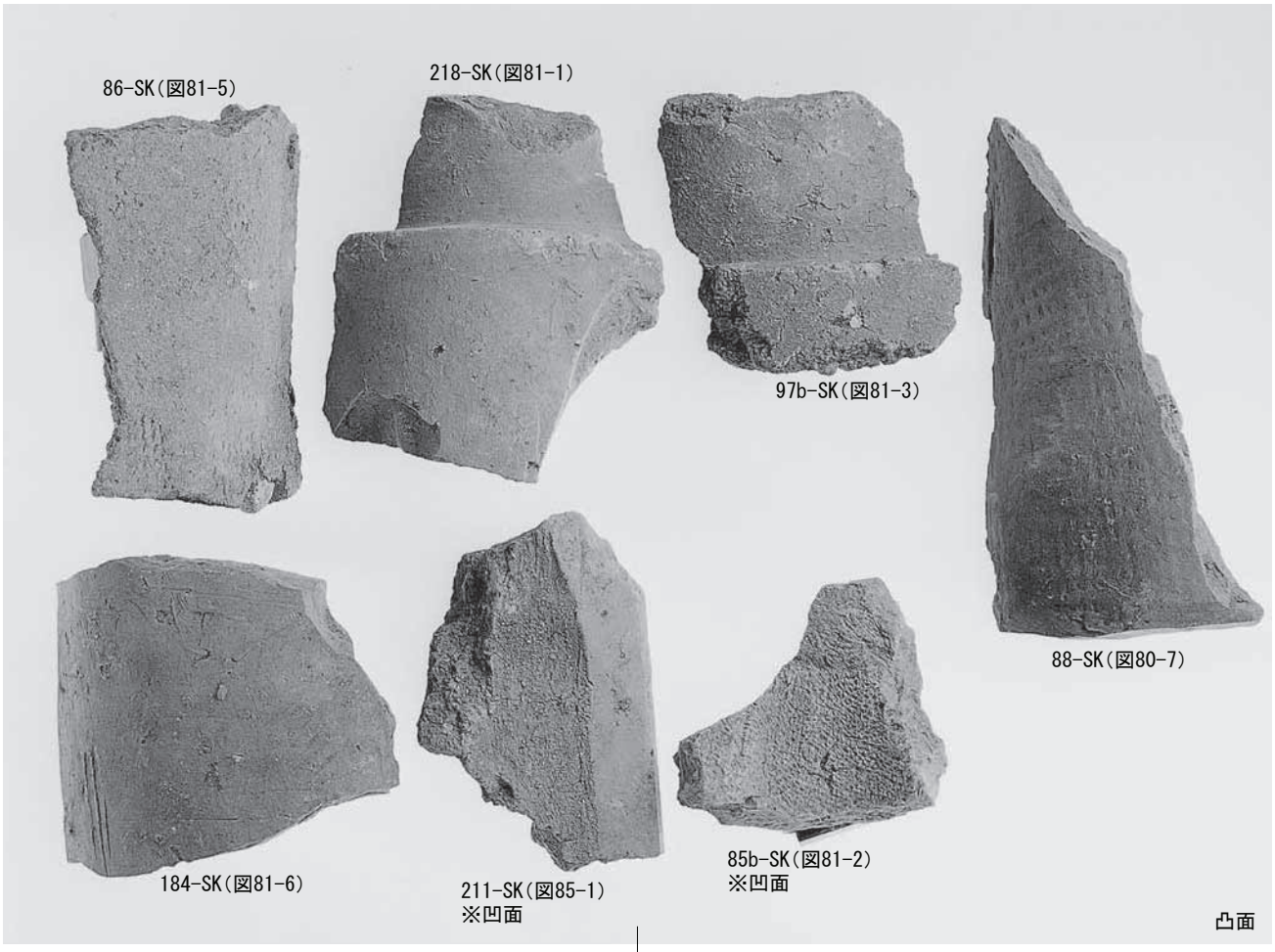

209-SK
(図75-2)
(図77-1)
(図77-6)
(図77-3)
(図80-4)
(図80-6)
(図80-1)
凹面

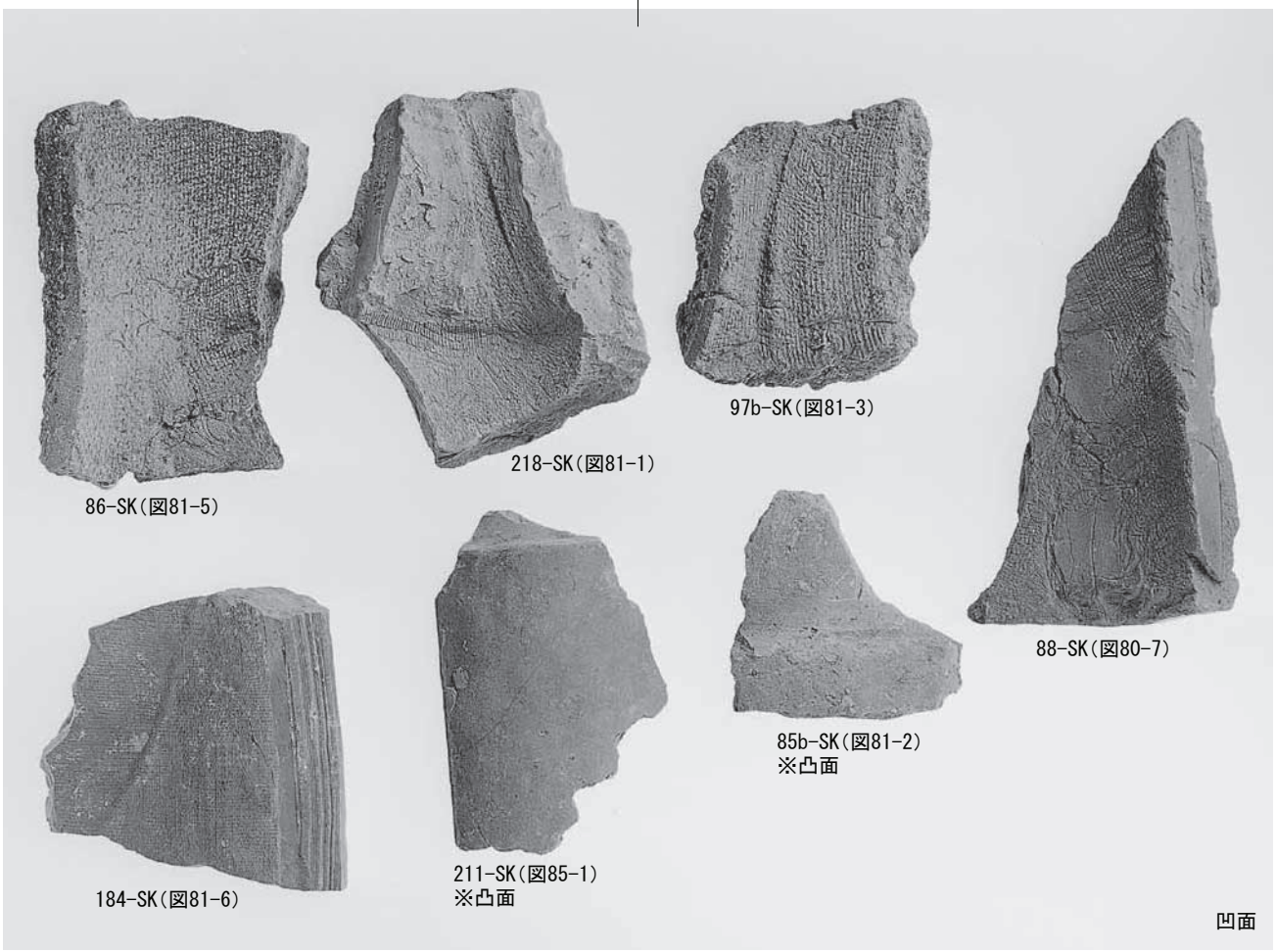
Ph. 78

2区出土瓦7

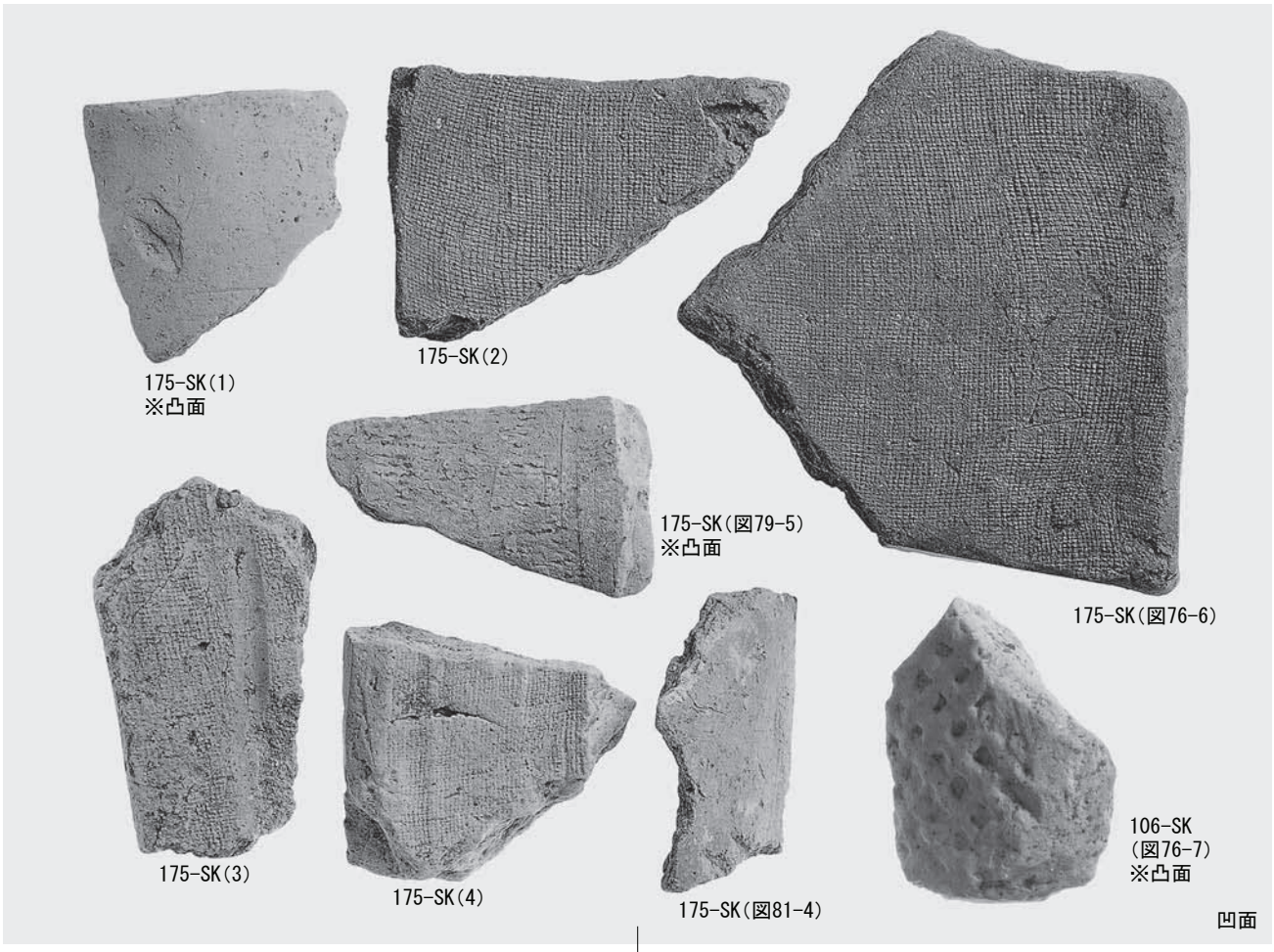

175-SK(1)
209-SK(図80-2)
209-SK(図77-4)
209-SK(図80-3)
175-SK(2)
凸面

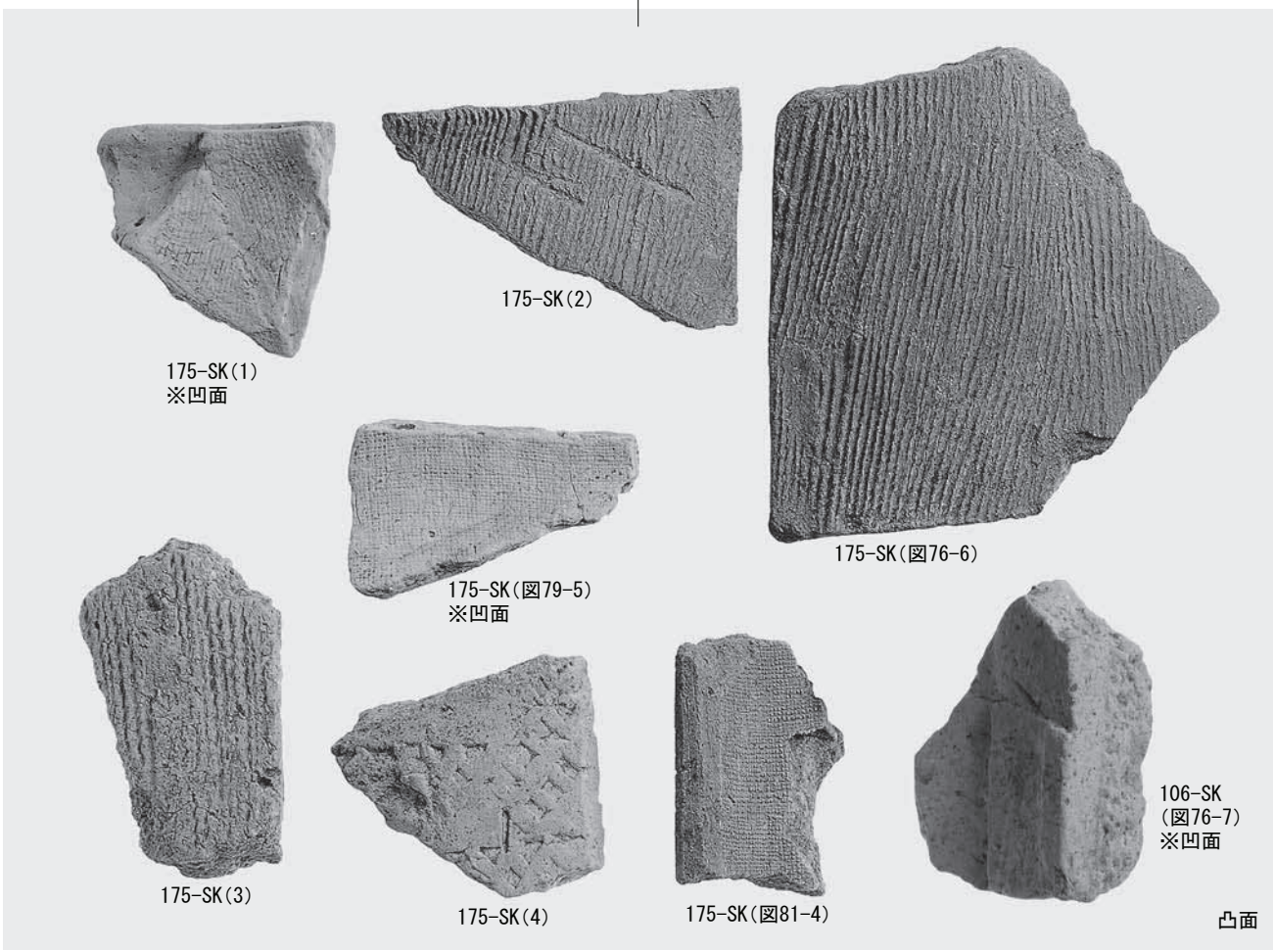

175-SK(1)
209-SK(図80-2)
209-SK(図80-3)
209-SK(図77-4)
175-SK(2)
凹面

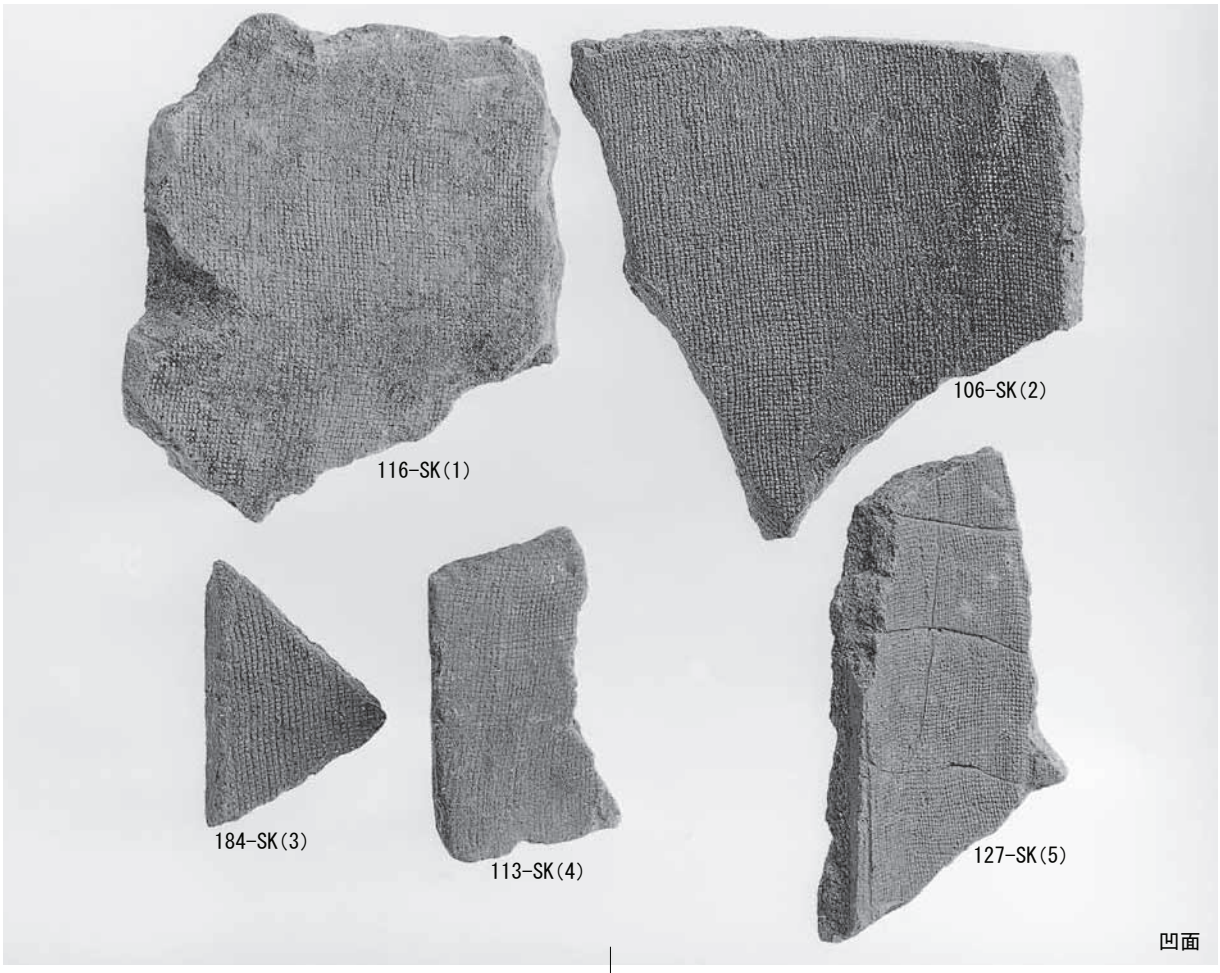

86-SK(図81-5)
218-SK(図81-1)
97b-SK(図81-3)
88-SK(図80-7)
184-SK(図81-6)
211-SK(図85-1)
※凹面
85b-SK(図81-2)
※凹面
凸面

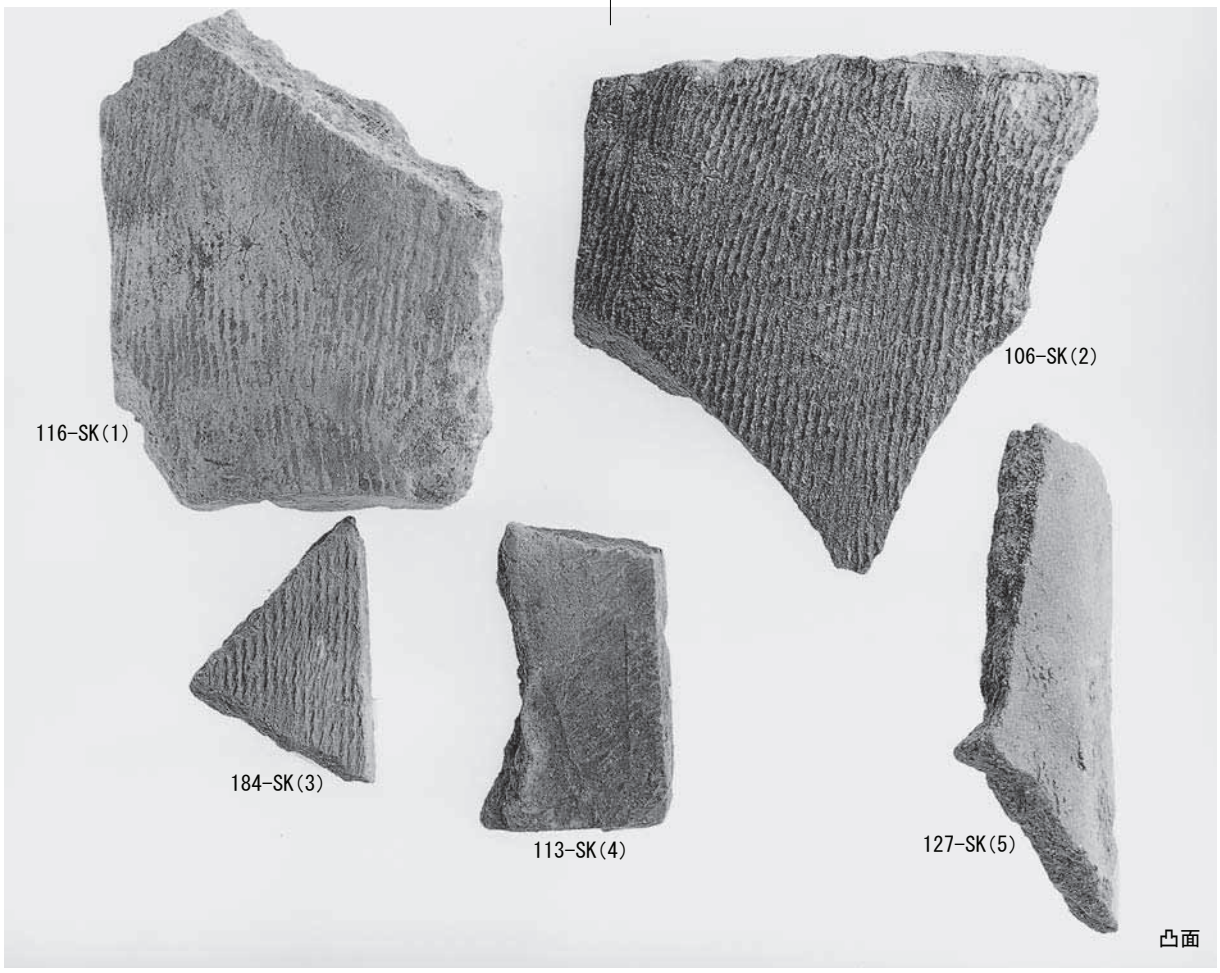

97b-SK(図81-3)
218-SK(図81-1)
86-SK(図81-5)
88-SK(図80-7)
85b-SK(図81-2)
※凸面
184-SK(図81-6)
211-SK(図85-1)
※凸面
凹面

2区出土瓦9

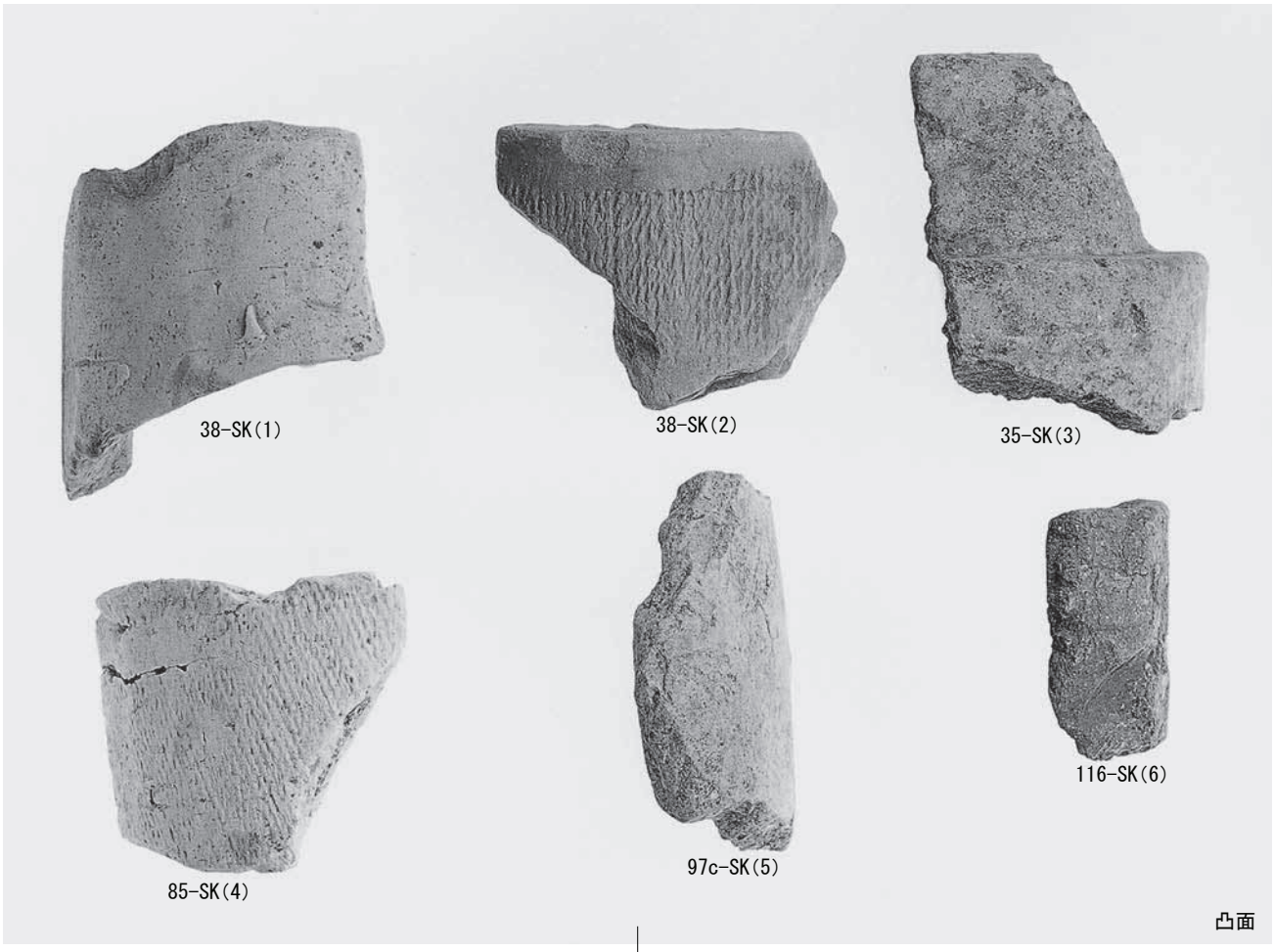

175-SK(1)
※凸面
175-SK(2)
175-SK(図79-5)
※凸面
175-SK(図76-6)
175-SK(3)
175-SK(4)
175-SK(図81-4)
106-SK
(図76-7)
※凸面
凹面

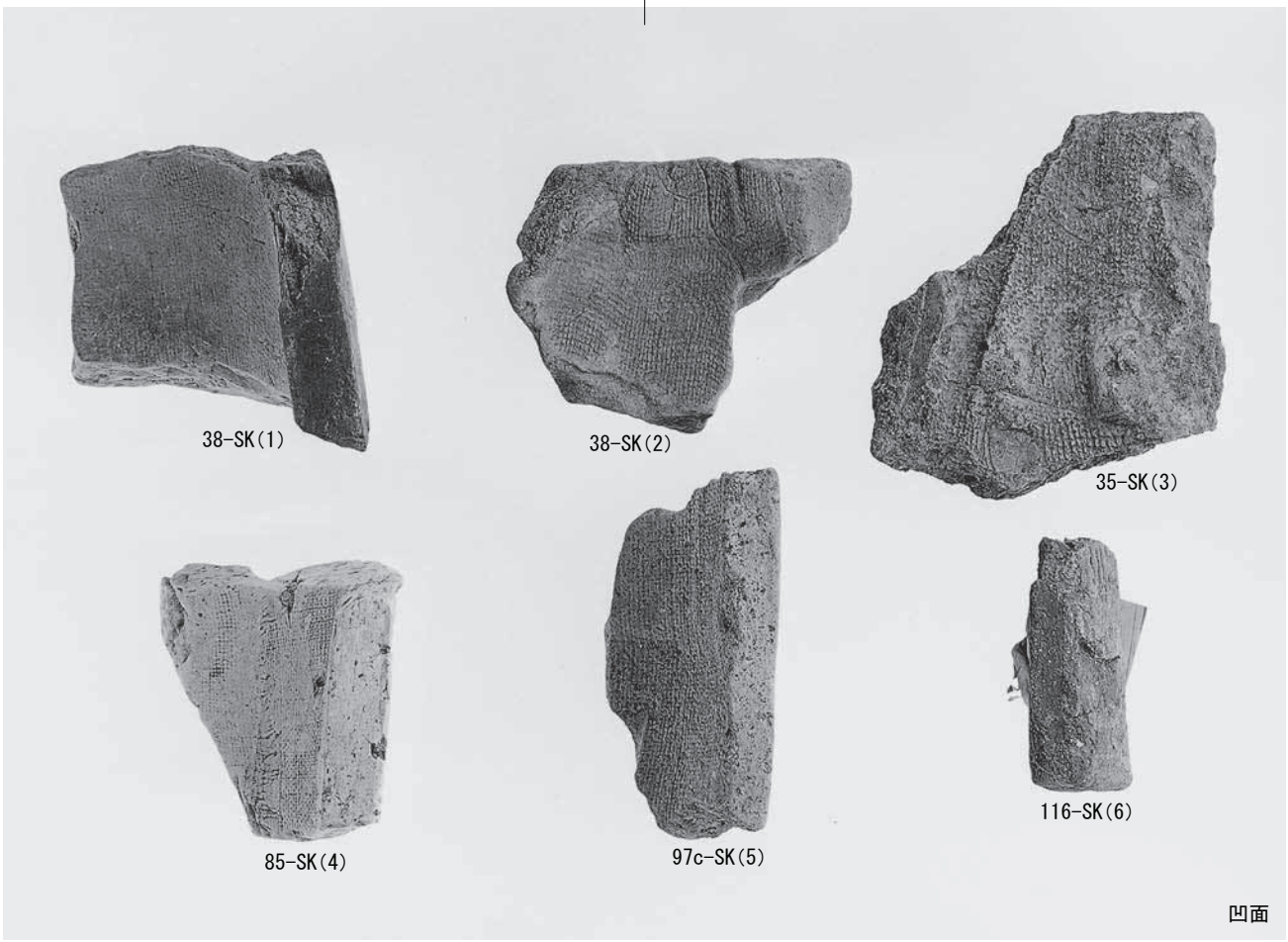

175-SK(1)
※凹面
175-SK(2)
175-SK(図76-6)
175-SK(図79-5)
※凹面
175-SK(3)
175-SK(4)
175-SK(図81-4)
106-SK
(図76-7)
※凹面
凸面


116-SK(1)
106-SK(2)
184-SK(3)
113-SK(4)
127-SK(5)
凹面

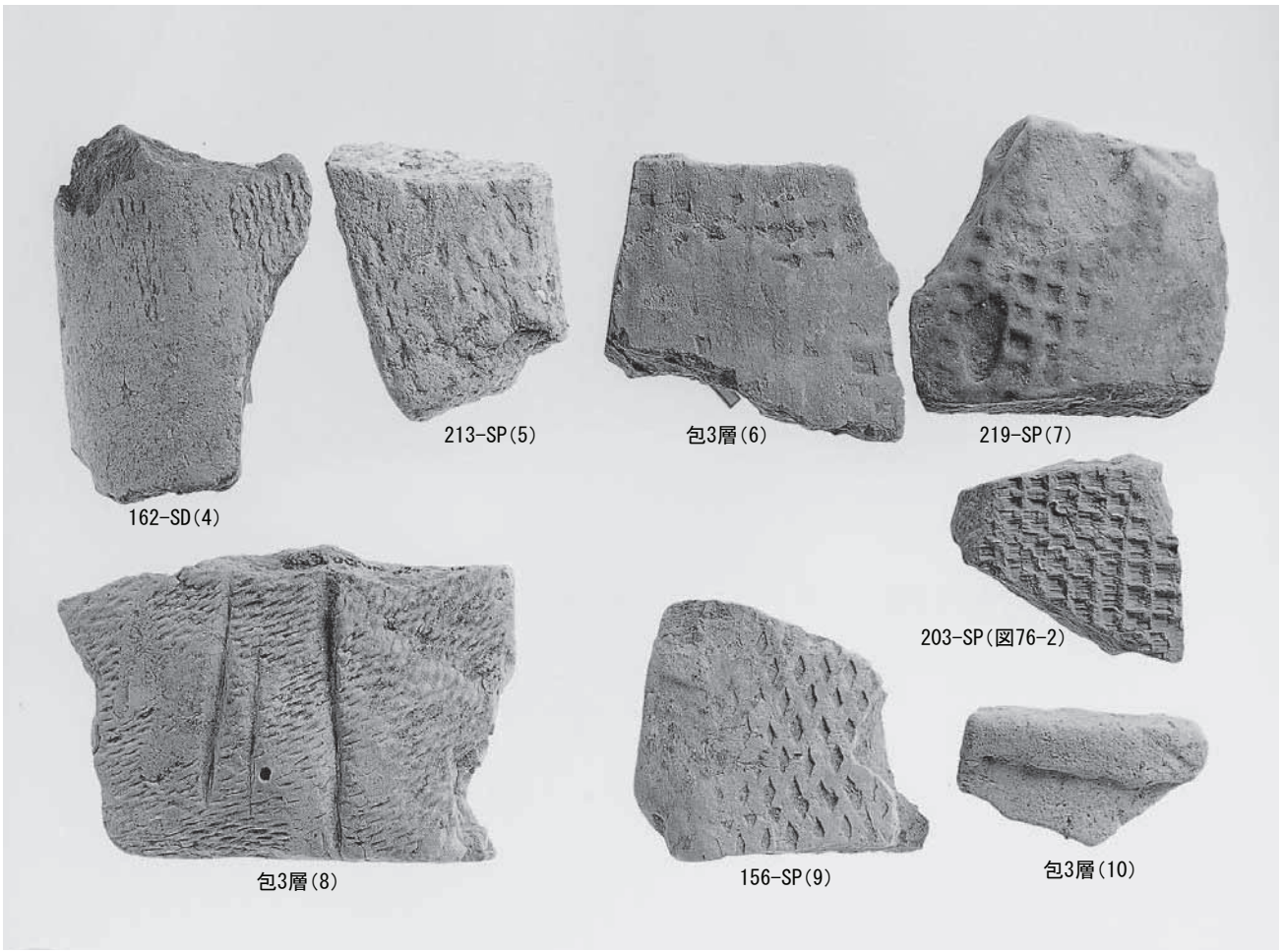

116-SK(1)
106-SK(2)
184-SK(3)
113-SK(4)
127-SK(5)
凸面

2区出土瓦11

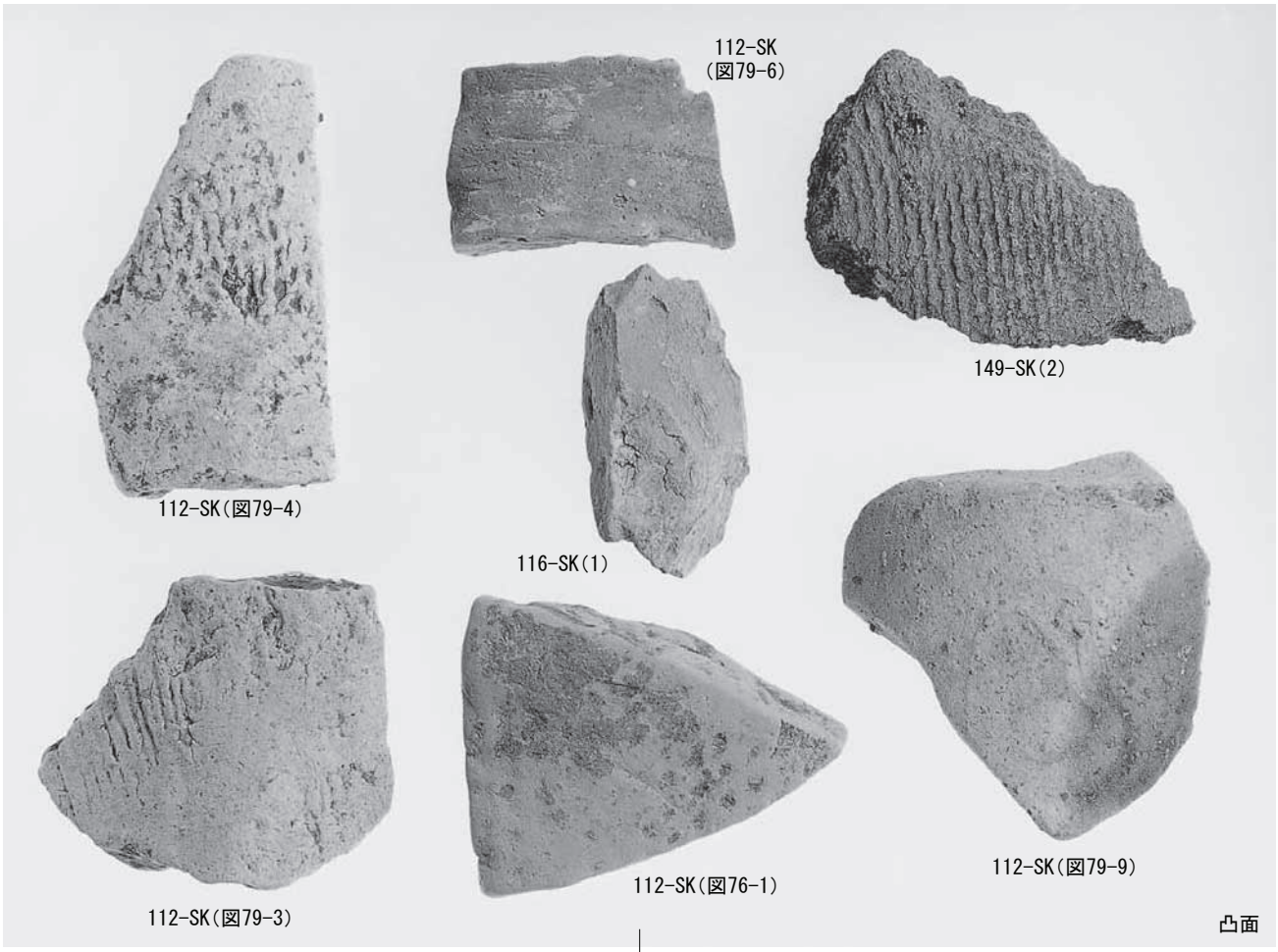

38-SK(1)
38-SK(2)
35-SK(3)
85-SK(4)
97c-SK(5)
116-SK(6)
凸面

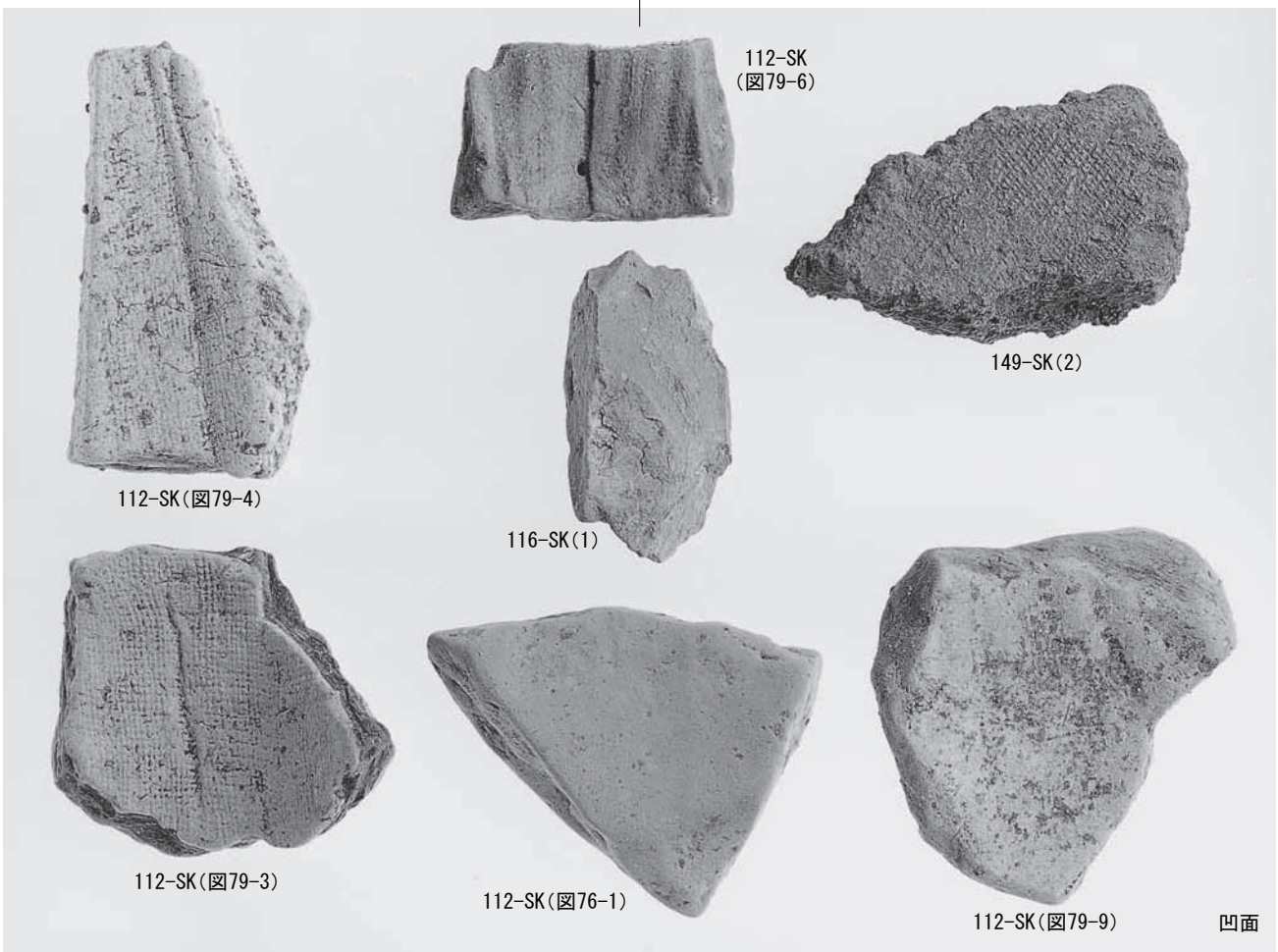

38-SK(1)
38-SK(2)
35-SK(3)
85-SK(4)
97c-SK(5)
116-SK(6)
凹面

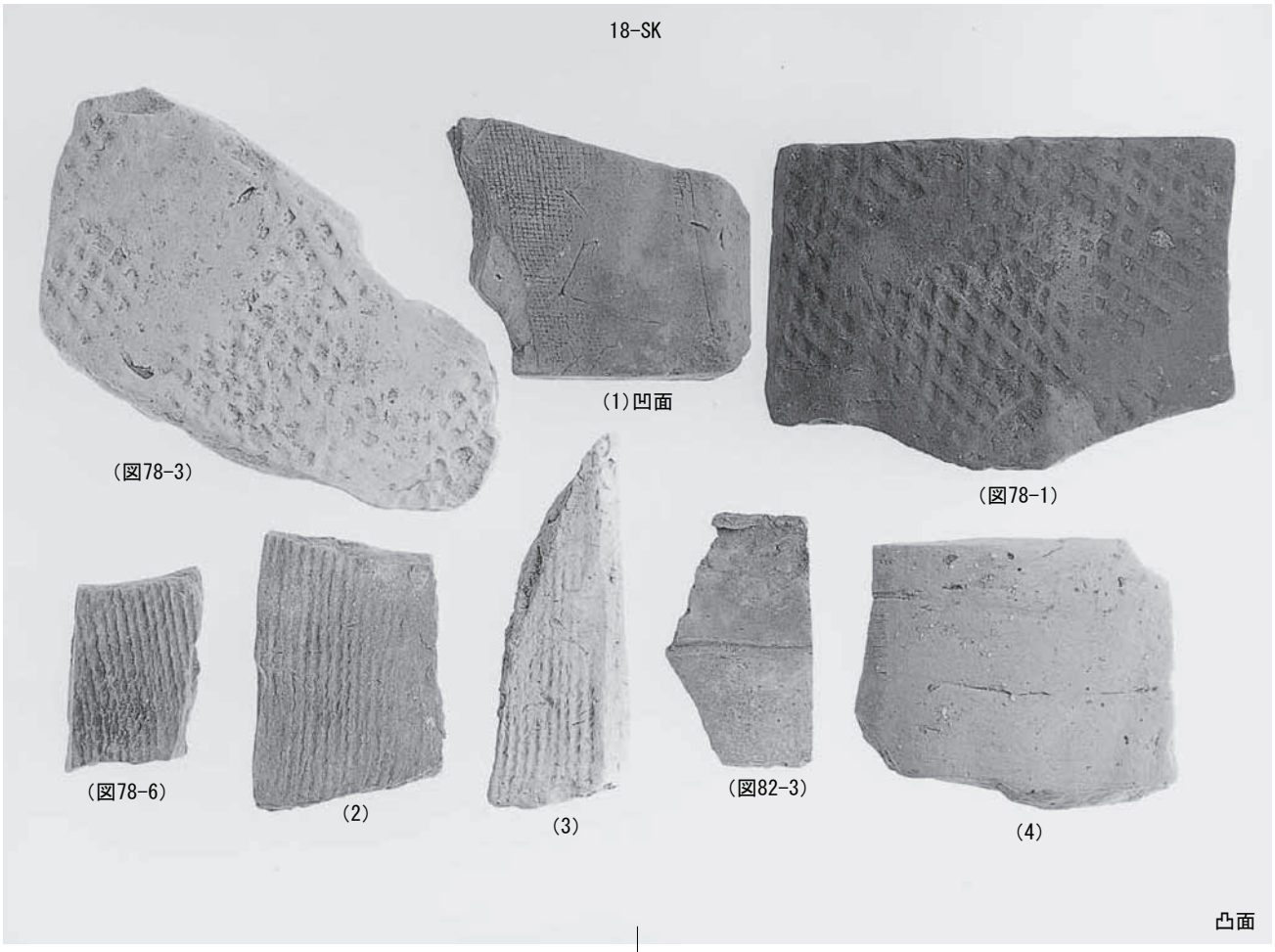
97-SK(1)
111-SK(図76-5)
39-SK(2)
184-SK(図75-1)
35-SK(3)

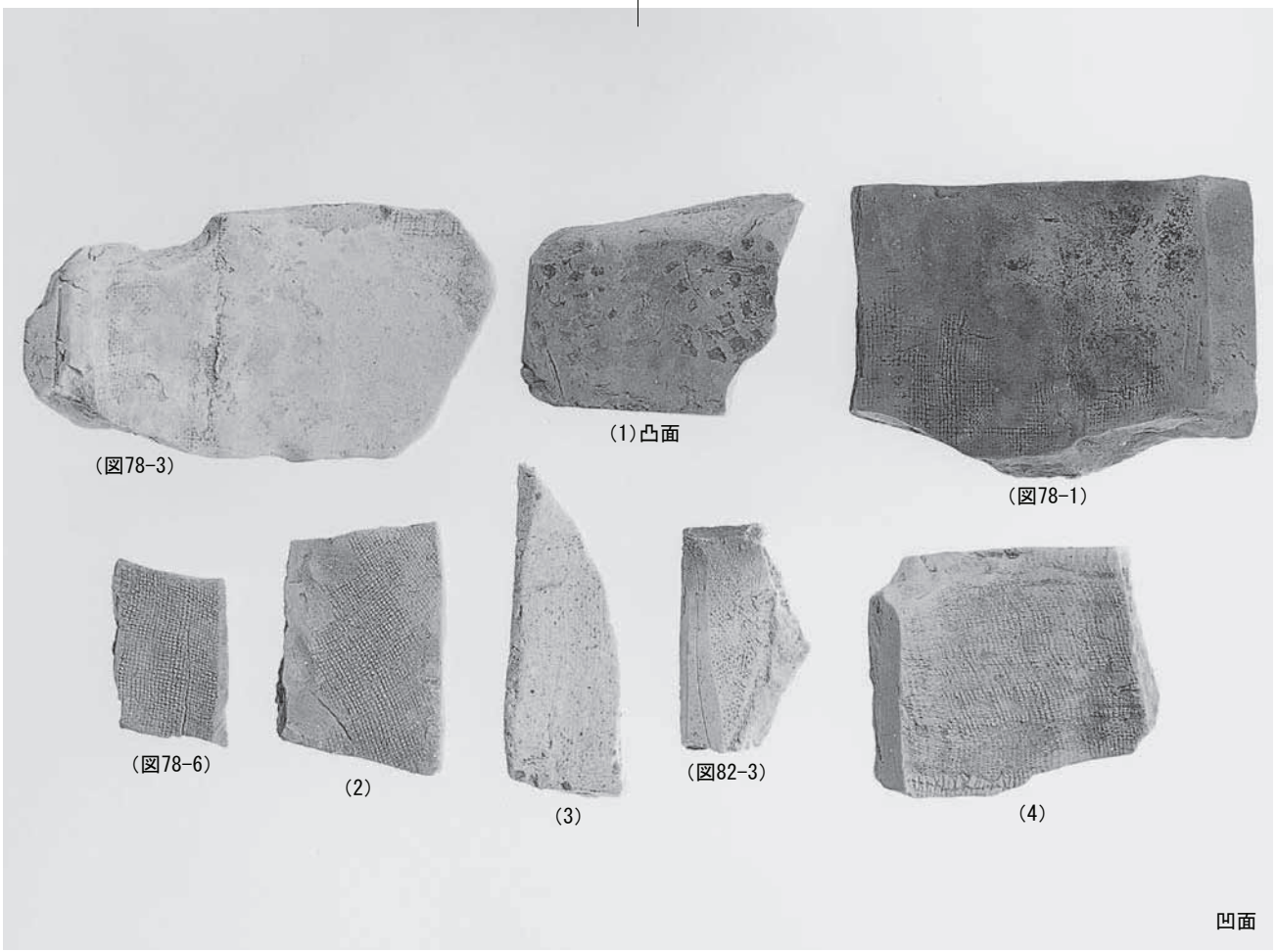

213-SP(5)
包3層(6)
219-SP(7)
162-SD(4)
203-SP(図76-2)
包3層(8)
156-SP(9)
包3層(10)

2区出土瓦13

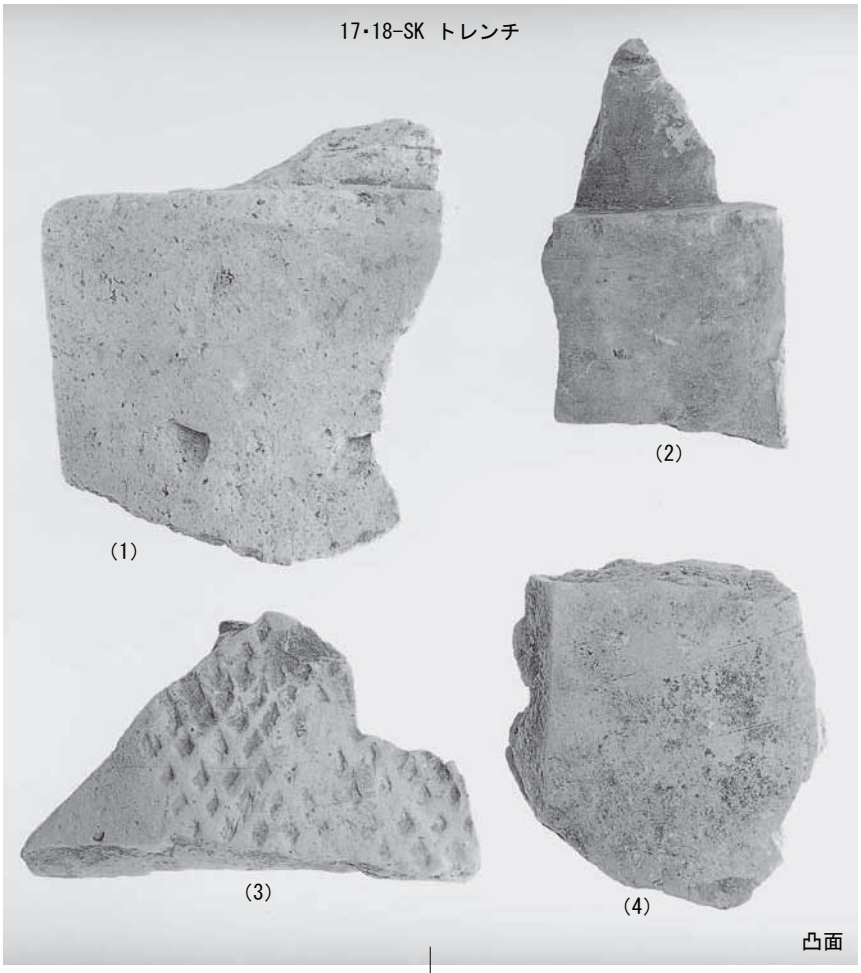

112-SK
(図79-6)
149-SK(2)
112-SK(図79-4)
116-SK(1)
112-SK(図79-3)
112-SK(図76-1)
112-SK(図79-9)
凸面


112-SK
(図79-6)
149-SK(2)
112-SK(図79-4)
116-SK(1)
112-SK(図79-3)
112-SK(図76-1)
112-SK(図79-9)
凹面

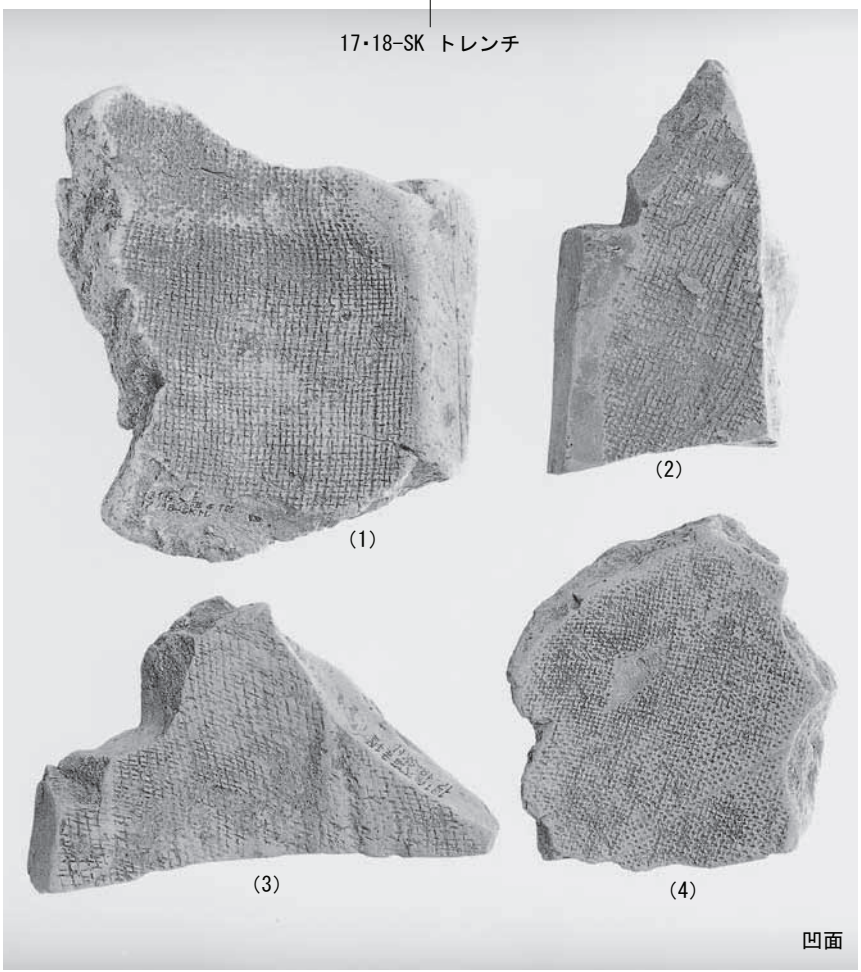

18-SK
(図78-3)
(1)凹面
(図78-1)
(図78-6)
(2)
(3)
(図82-3)
(4)
凸面

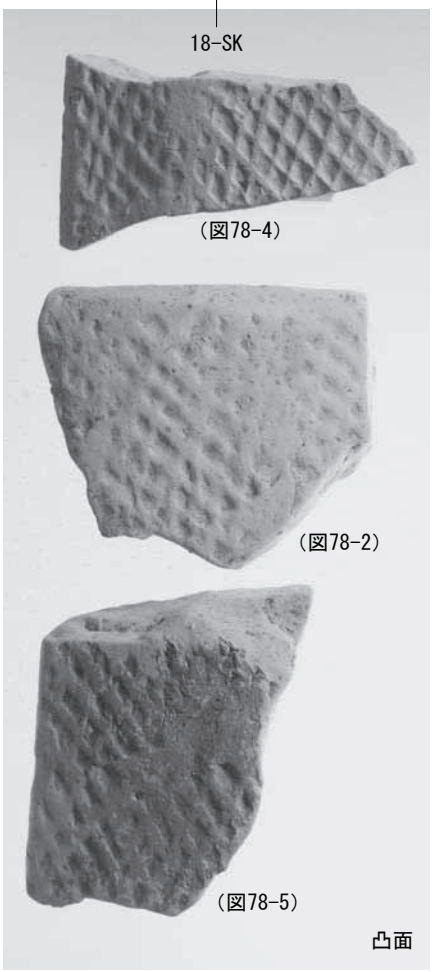

(図78-3)
(1)凸面
(図78-1)
(図78-6)
(2)
(3)
(図82-3)
(4)
凹面

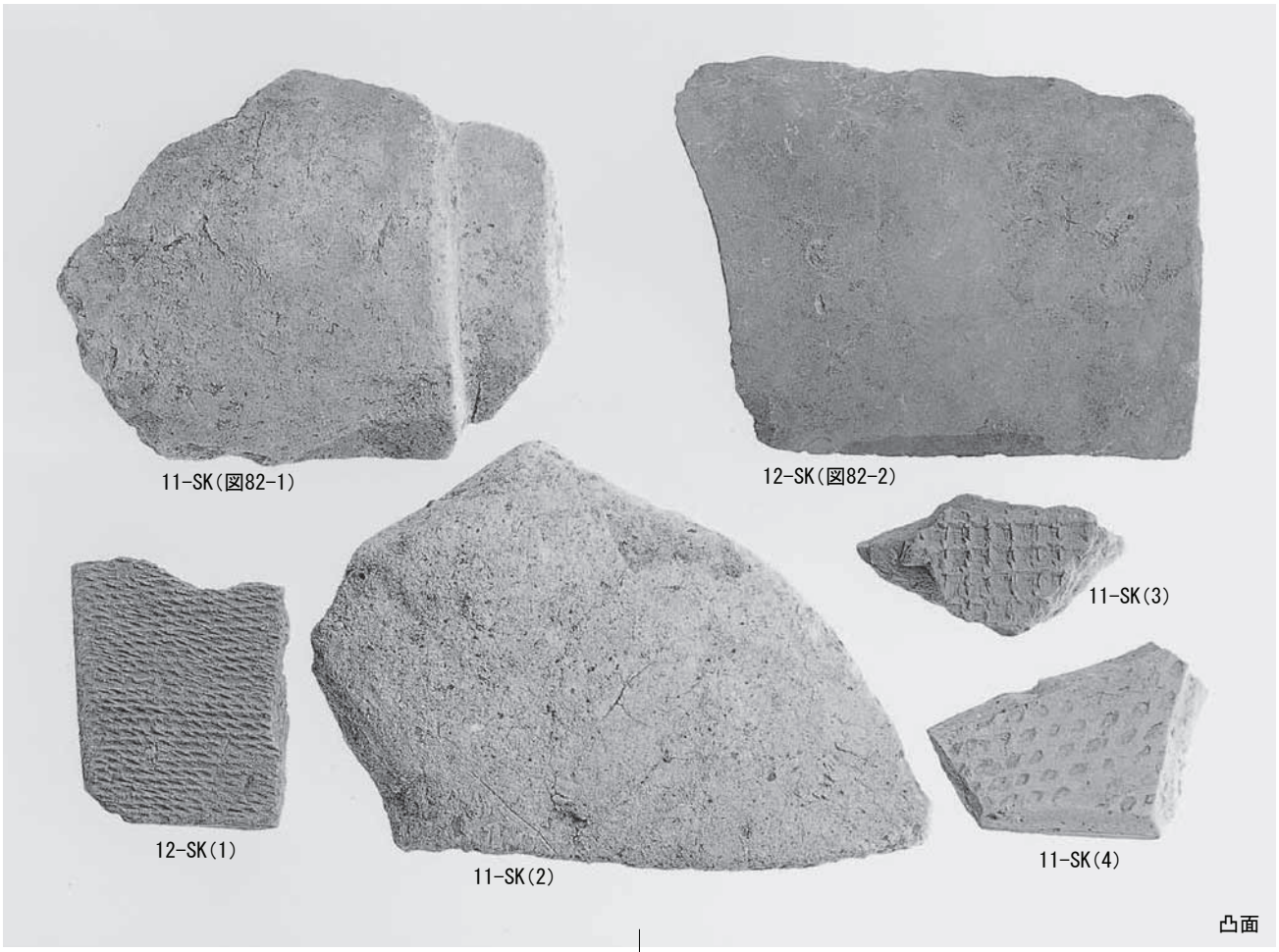
1区出土瓦2

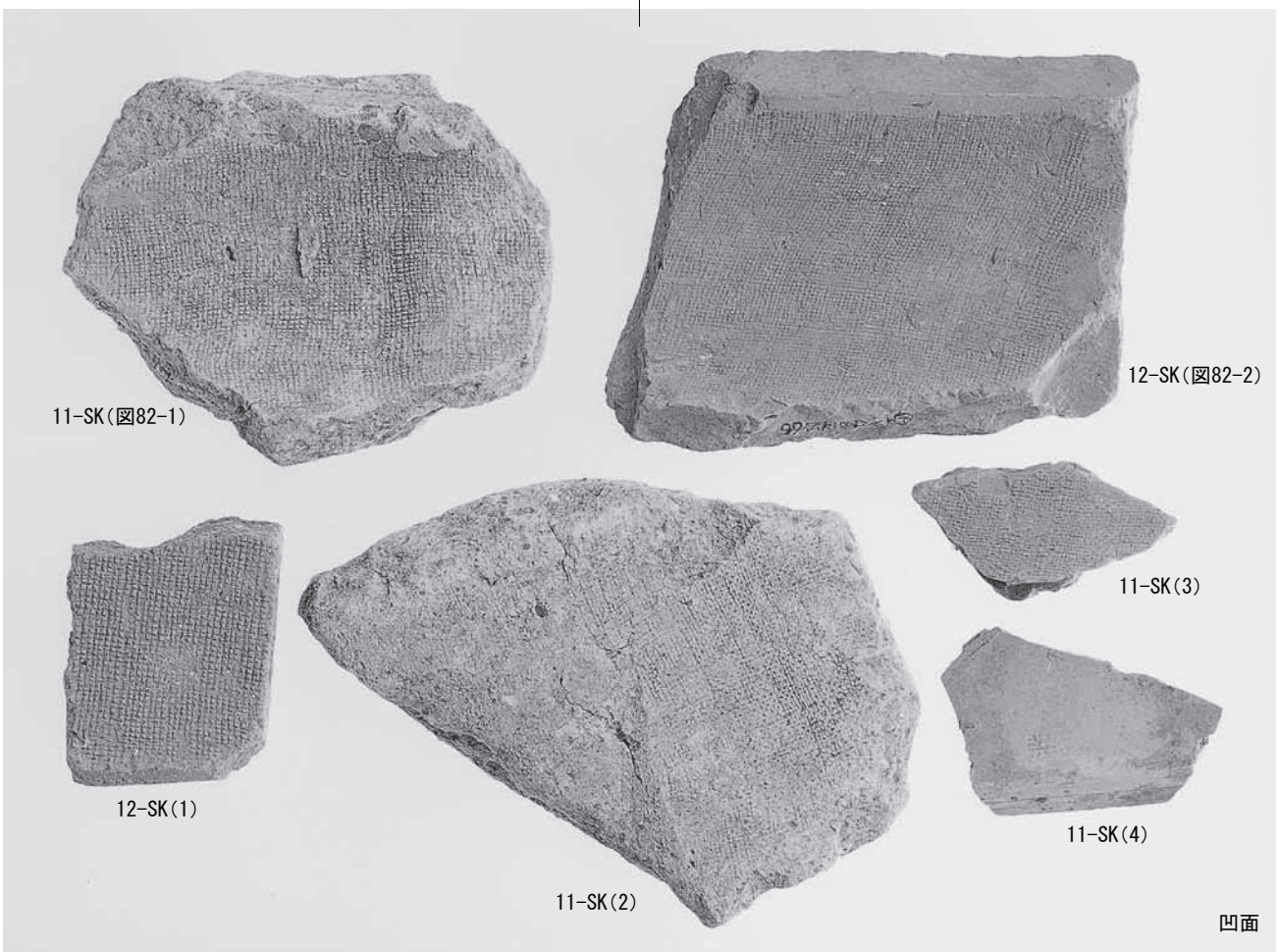

17･18-SK トレンチ
(1)
(2)
(3)
(4)
凸面

18-SK
(図78-4)
(図78-2)
(図78-5)
凹面


17･18-SK トレンチ
(1)
(2)
(3)
(4)
凹面

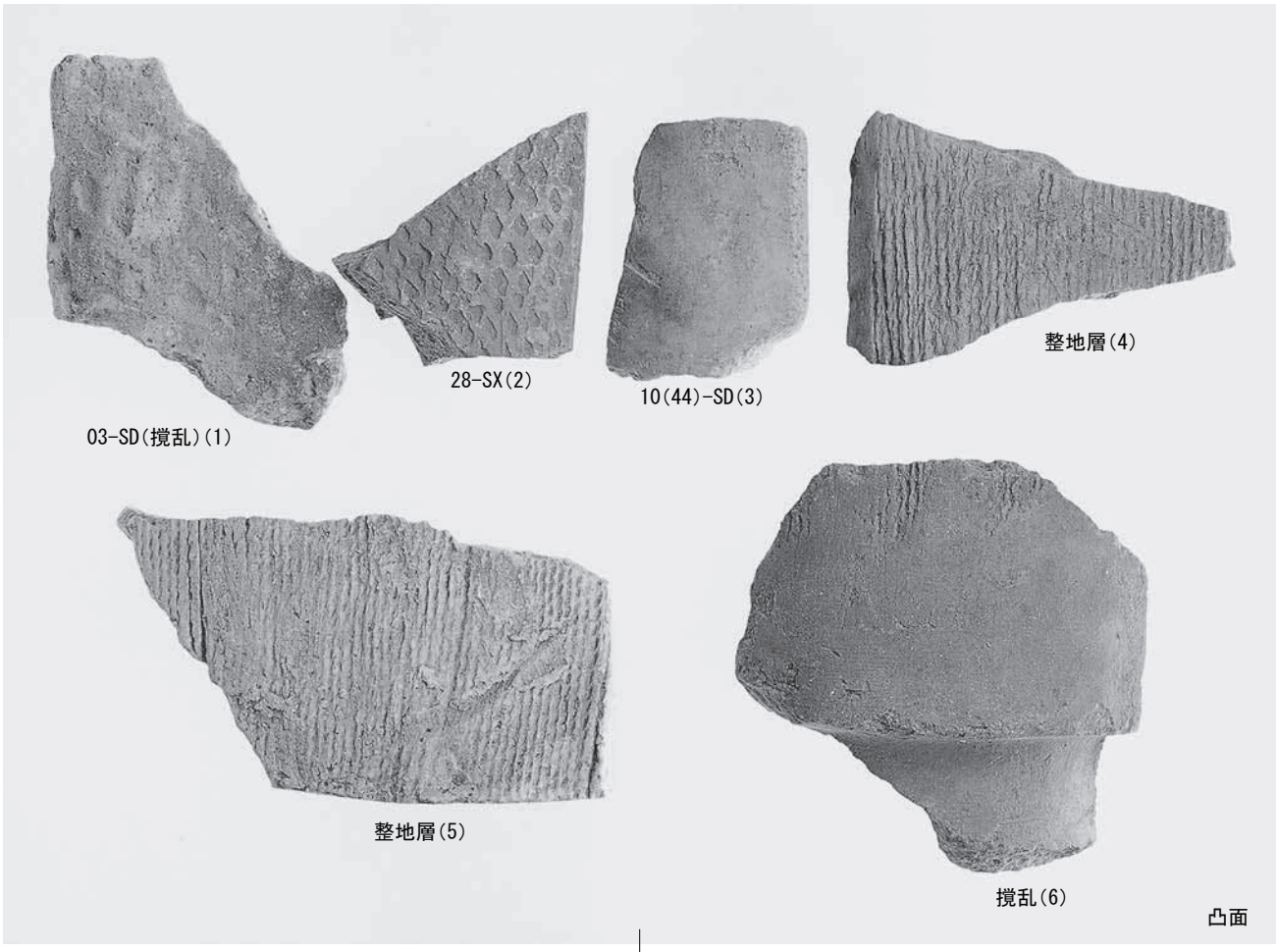

18-SK
(図78-4)
(図78-2)
(図78-5)
凸面

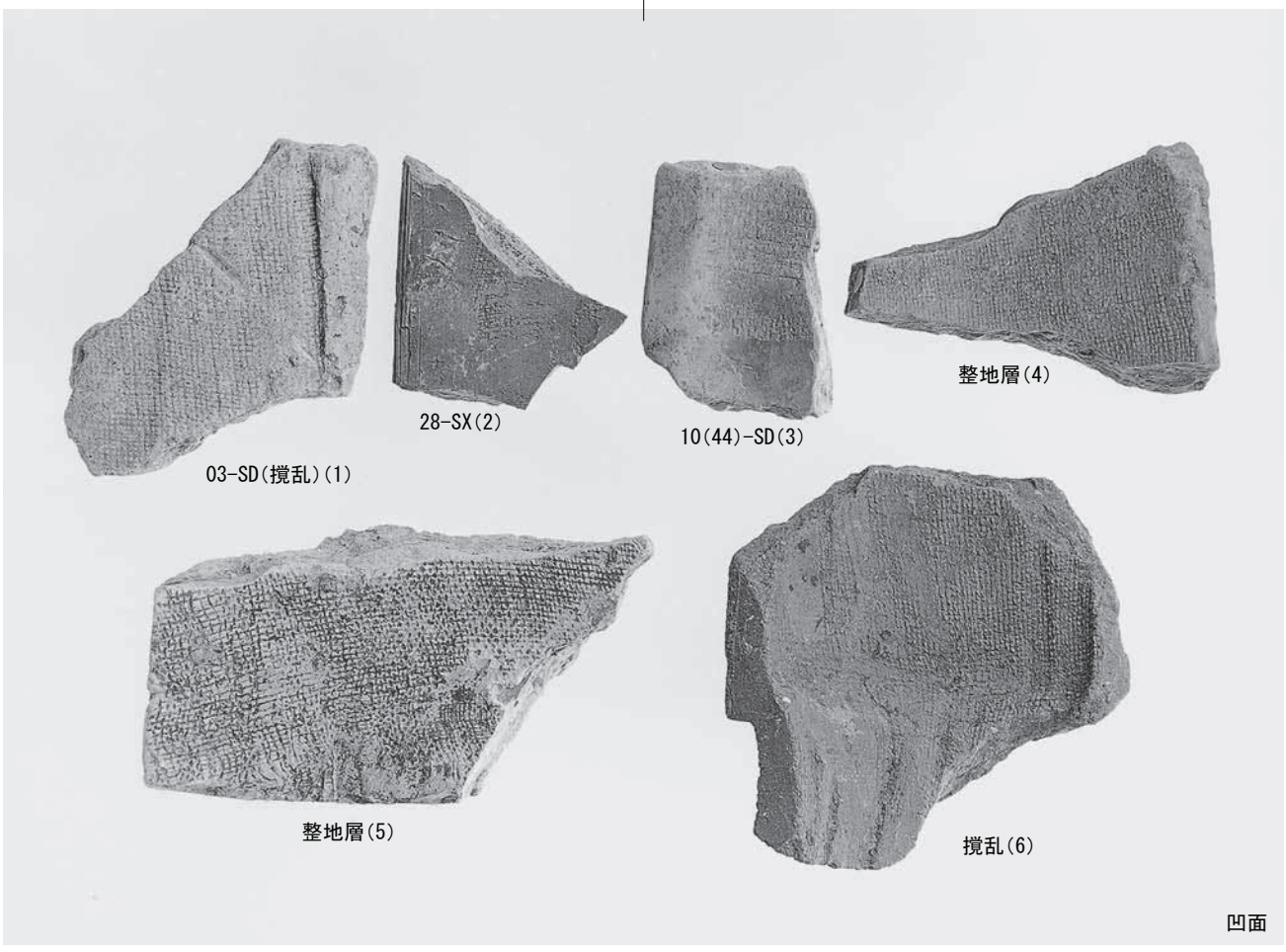

11-SK(図82-1)
12-SK(図82-2)
11-SK(3)
12-SK(1)
11-SK(2)
11-SK(4)
凸面


11-SK(図82-1)
12-SK(図82-2)
11-SK(3)
12-SK(1)
11-SK(2)
11-SK(4)
凹面

Ph. 88

1区出土瓦4


03-SD(撹乱)(1)
28-SX(2)
10(44)-SD(3)
整地層(4)
整地層(5)
撹乱(6)
凸面


03-SD(撹乱)(1)
28-SX(2)
10(44)-SD(3)
整地層(4)
整地層(5)
撹乱(6)
凹面

134b-SK(1)瓦No.28

159-SK(図84-1)瓦No.25

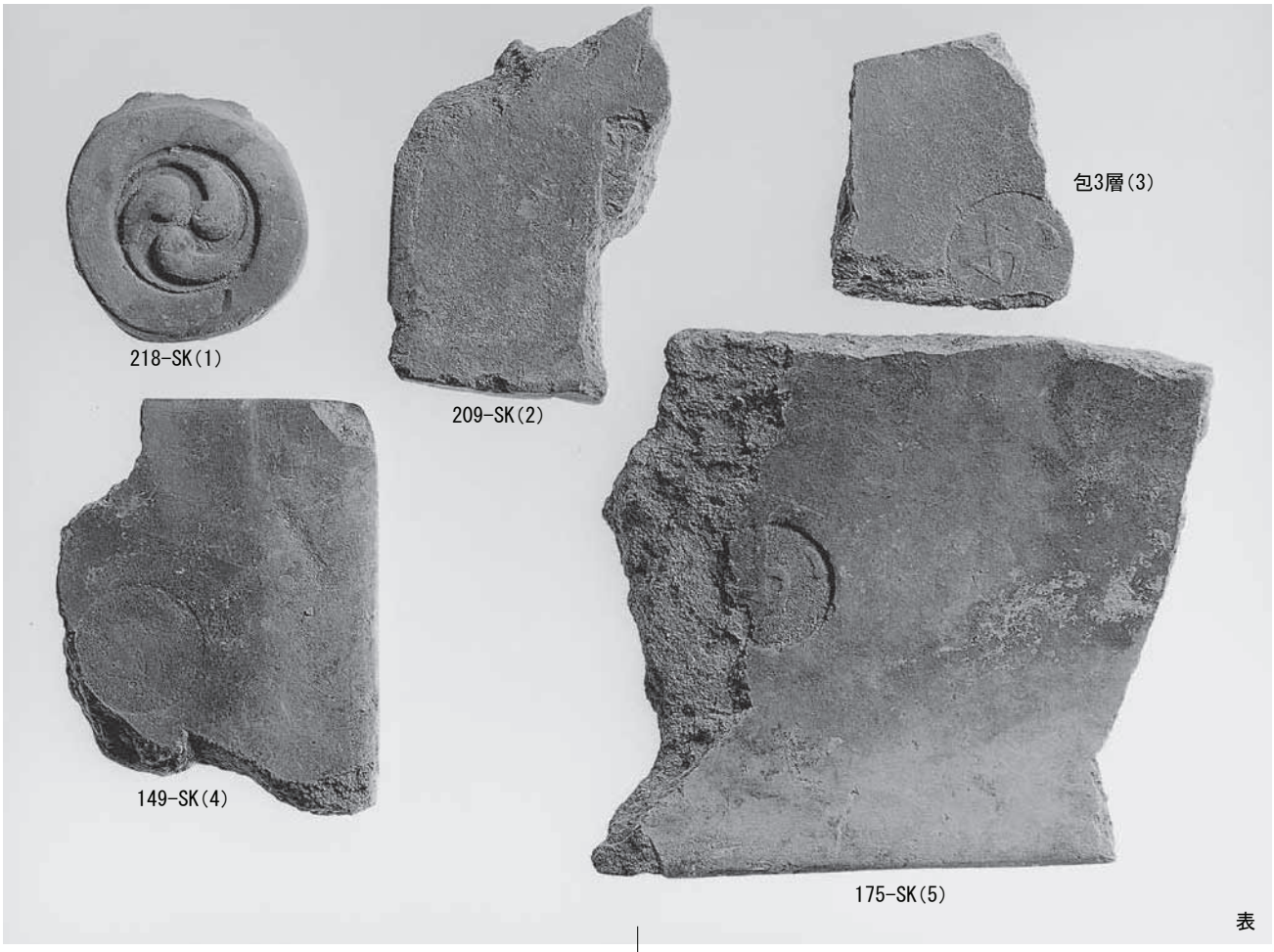
209-SK(2)

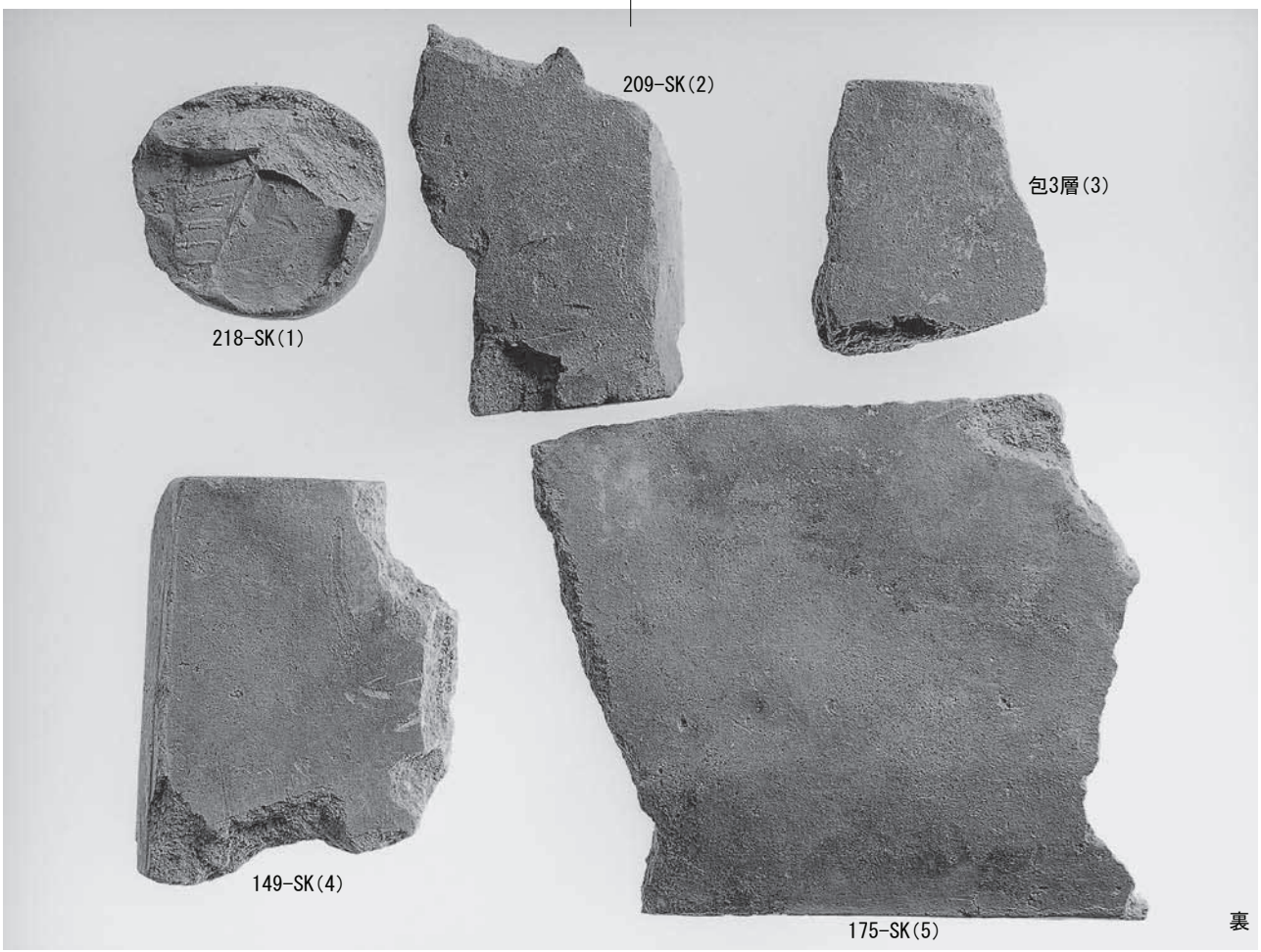
表土(3)瓦No.38

218c-SK(4)瓦No.32

包3層(5)瓦No.29

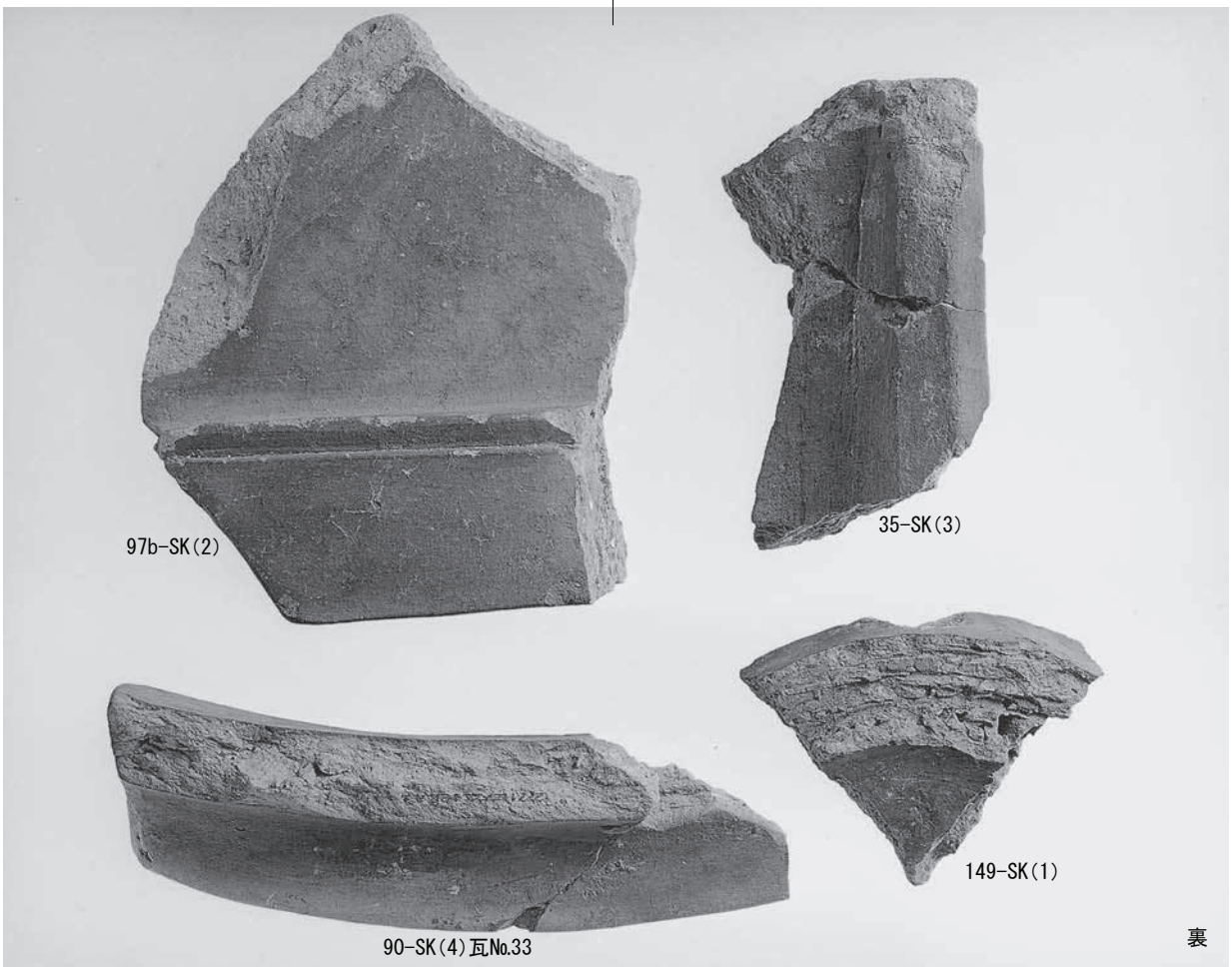
2区出土近世瓦2


218-SK(1)
209-SK(2)
包3層(3)
149-SK(4)
175-SK(5)
表


209-SK(2)
包3層(3)
218-SK(1)
149-SK(4)
175-SK(5)
裏

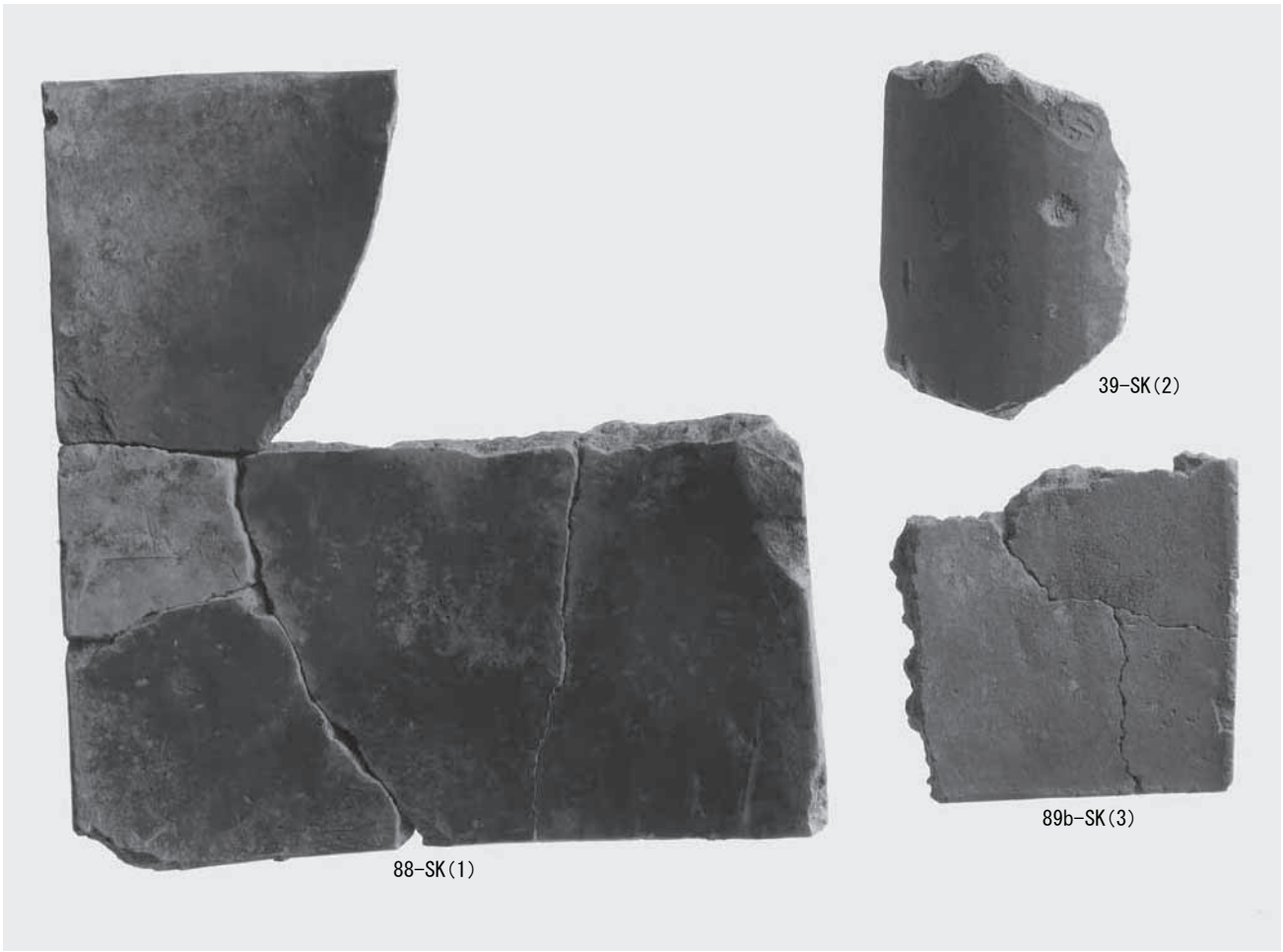
149-SK(1)
97b-SK(2)
35-SK(3)
90-SK(4)瓦No.33

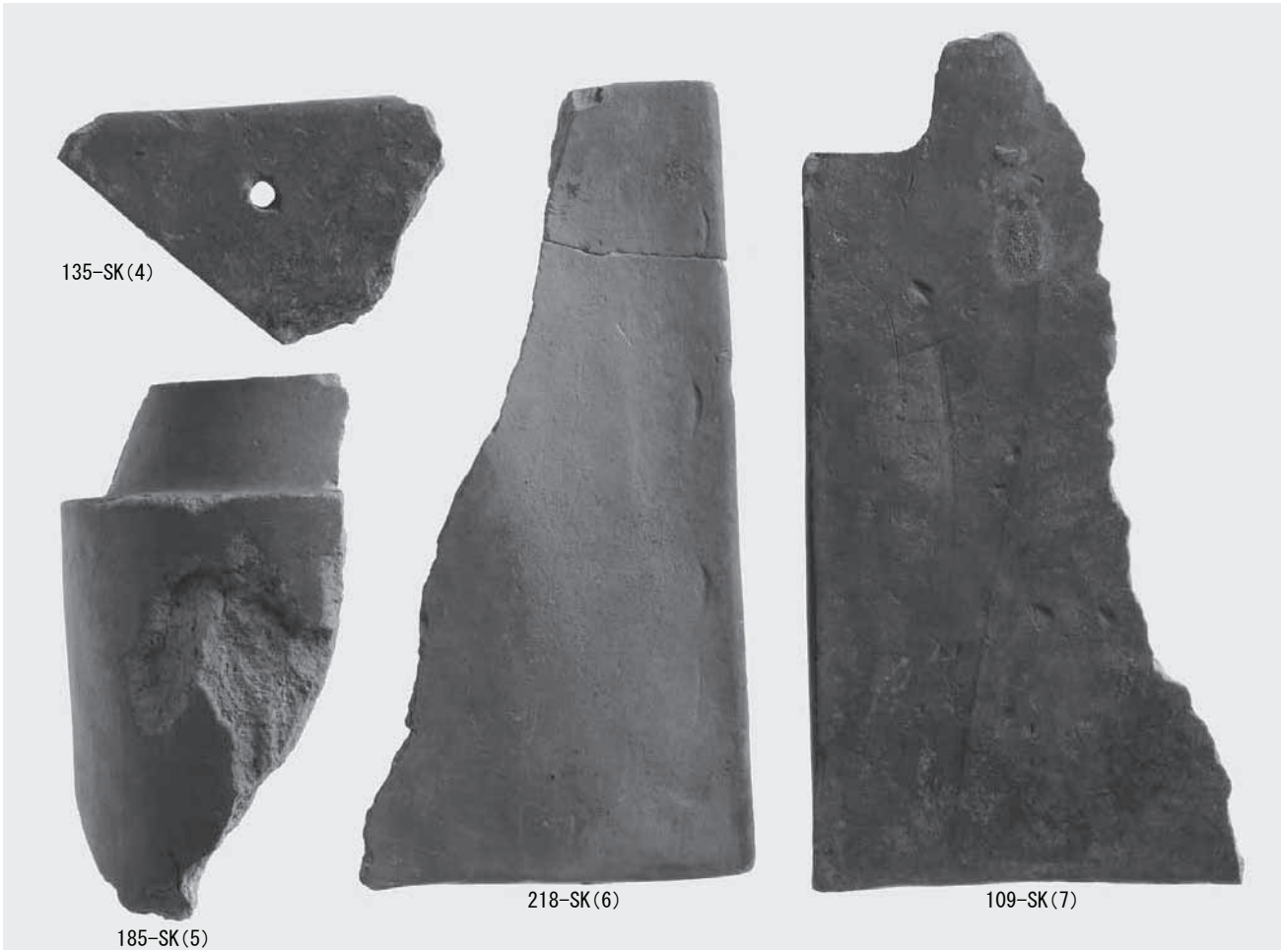
表

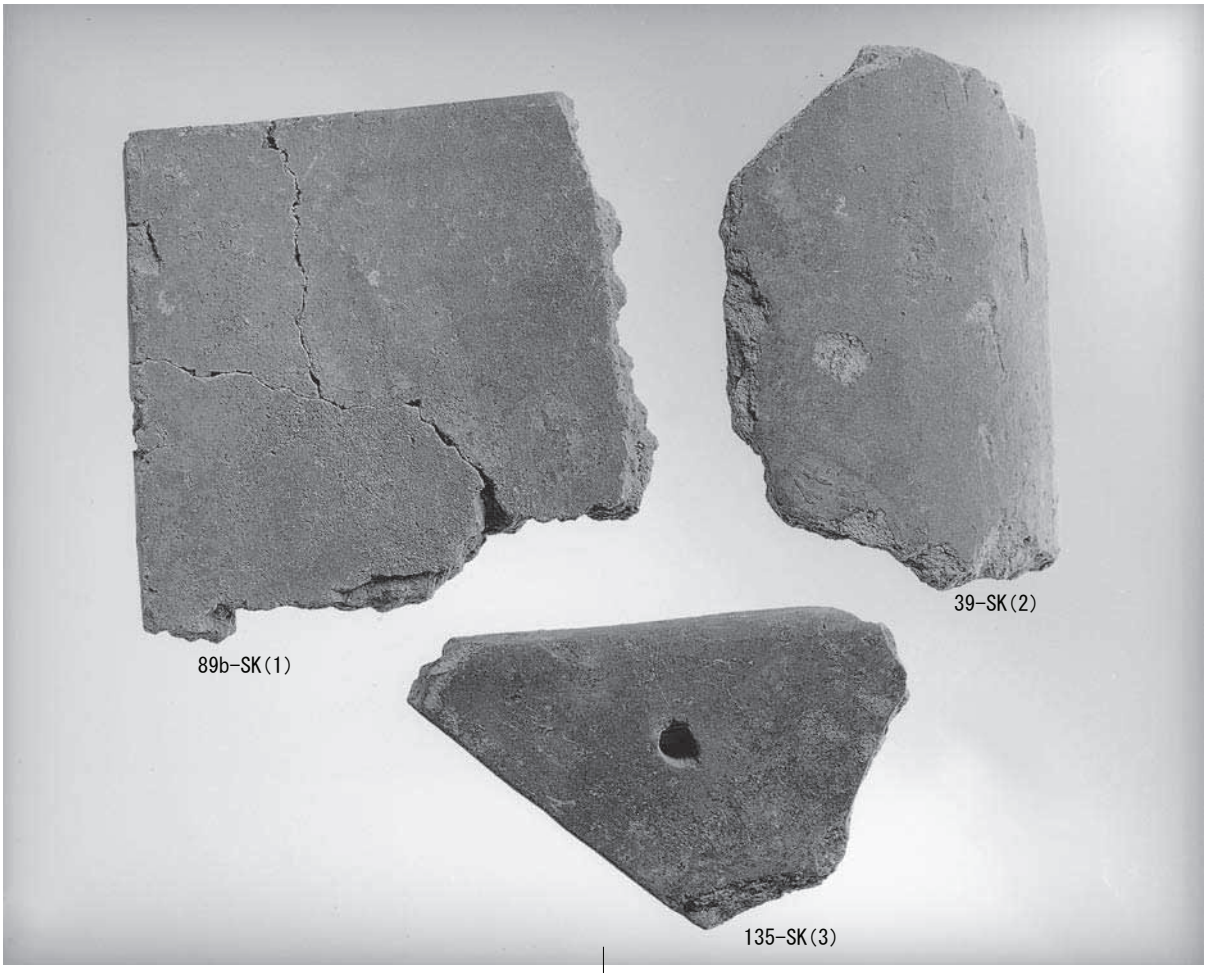

97b-SK(2)
35-SK(3)
149-SK(1)
90-SK(4)瓦No.33

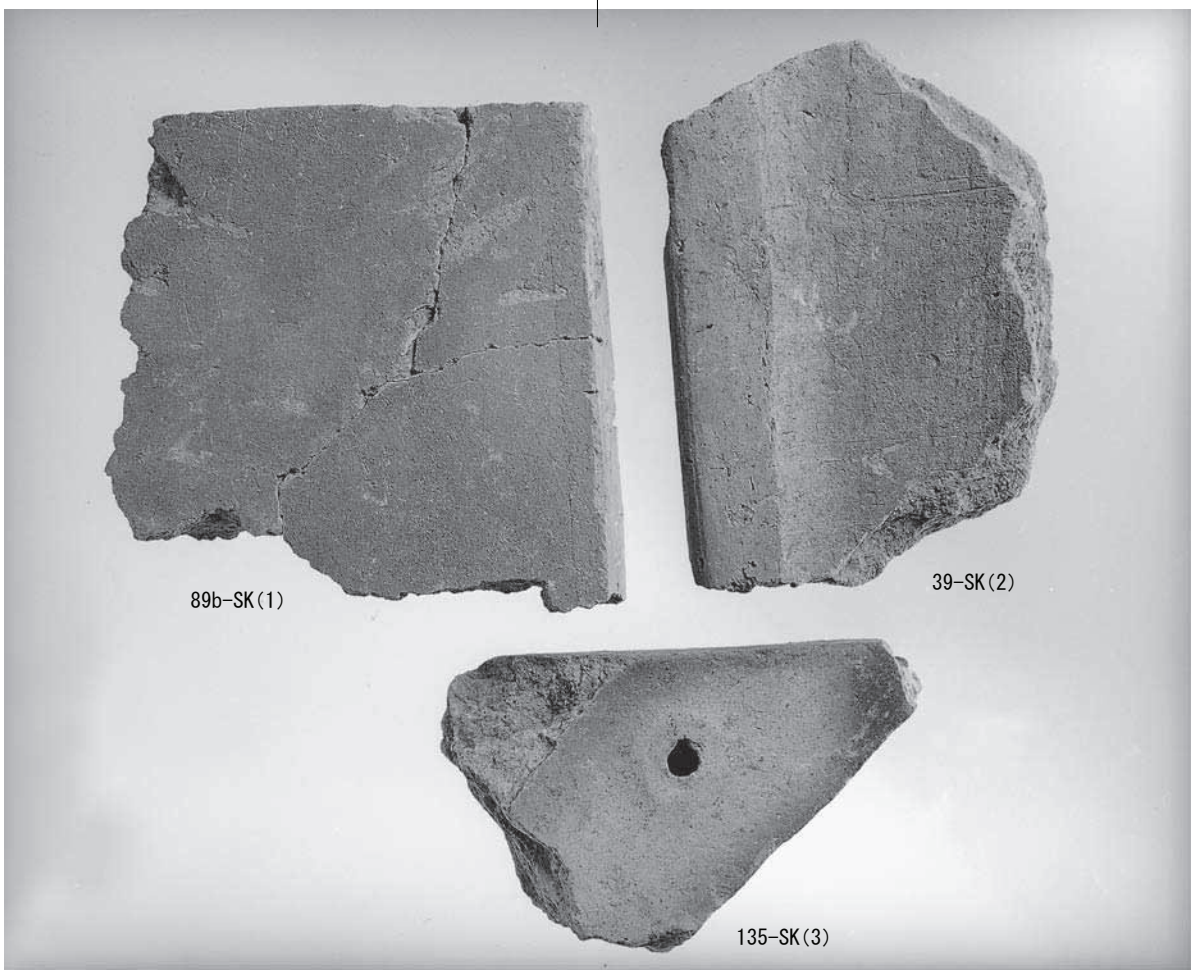
裏

2区出土近世瓦4



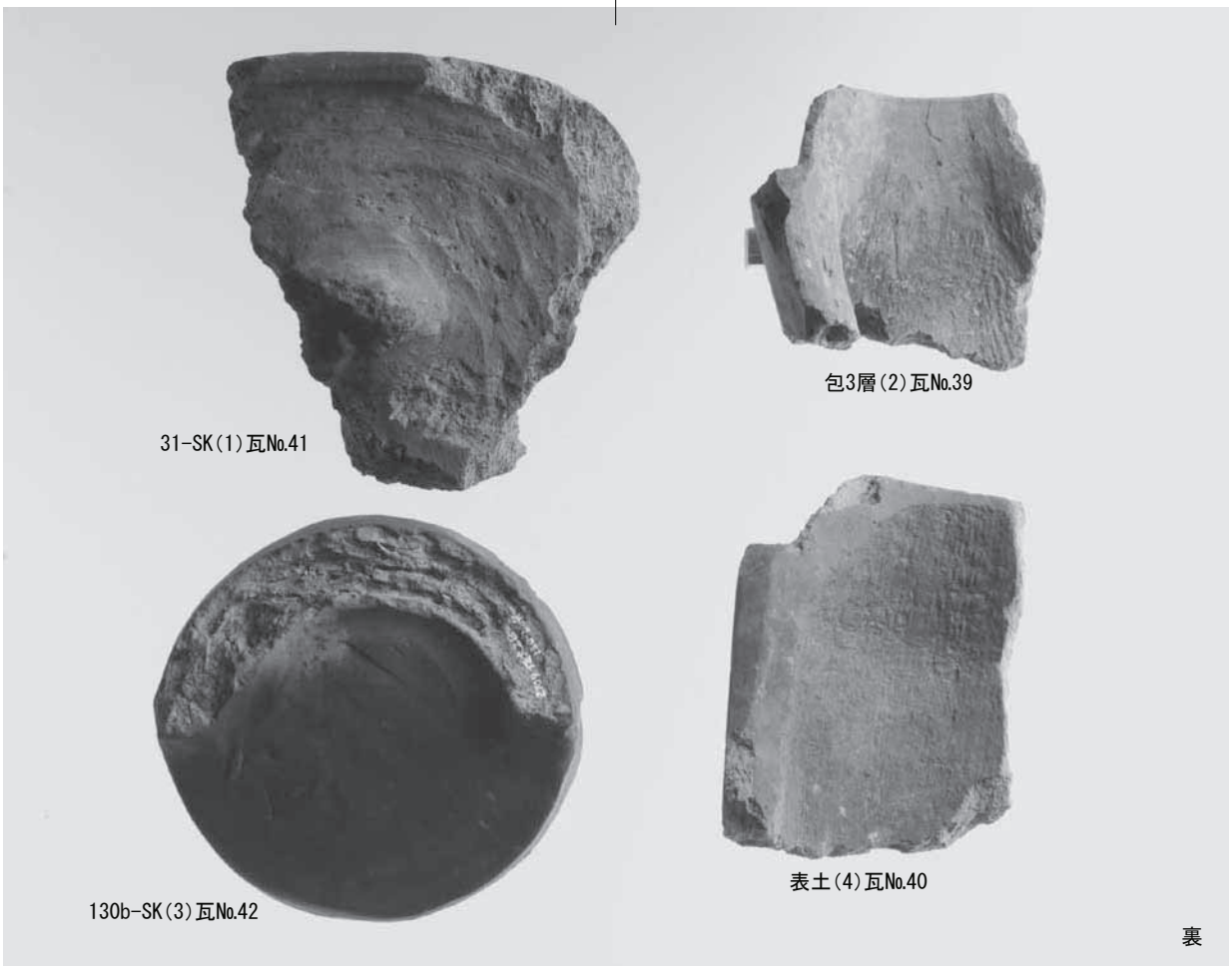



89b-SK(1)
39-SK(2)
135-SK(3)


89b-SK(1)
39-SK(2)
135-SK(3)

2区出土近世瓦6

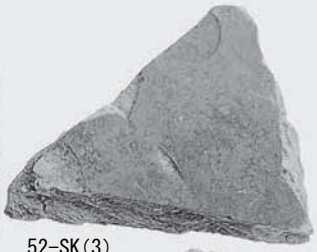
31-SK(1)瓦No.41
包3層(2)瓦No.39
130b-SK(3)瓦No.42
表土(4)瓦No.40
表


31-SK(1)瓦No.41
包3層(2)瓦No.39
130b-SK(3)瓦No.42
表土(4)瓦No.40
裏

1区

SK-12(1)瓦No.31

SK-15(2)瓦No.30



52-SK(3)

52-SK(4)

52-SK(5)

03-SK(撹乱)(6)

2区

98-SB・134a-SK(図83-2)瓦No.26

185-SK(図83-3)瓦No.27

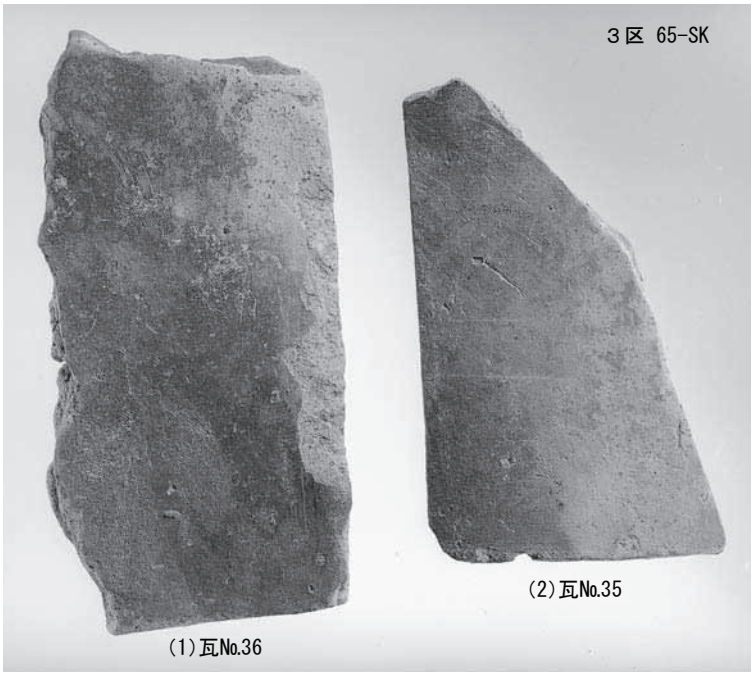
表

98-SB・134a-SK(図83-2)瓦No.26

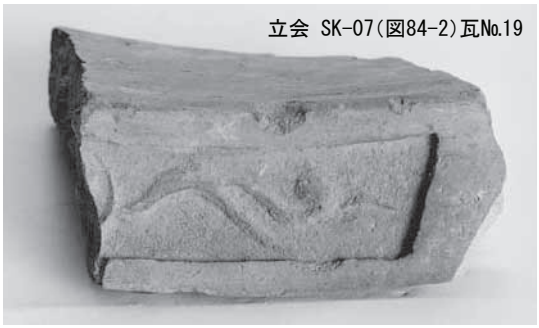
185-SK(図83-3)瓦No.27

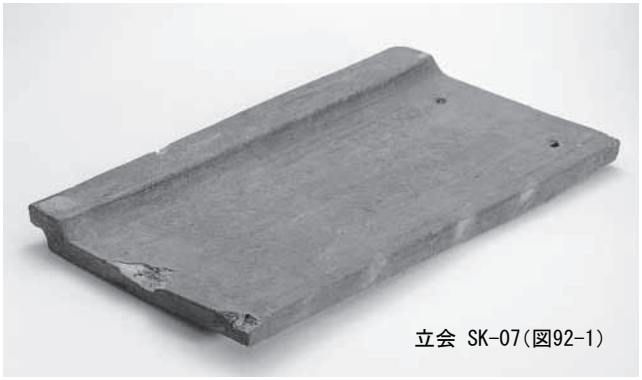
裏

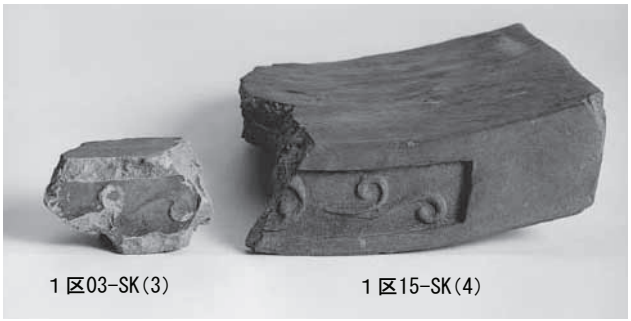
1・3区、立会出土近世瓦

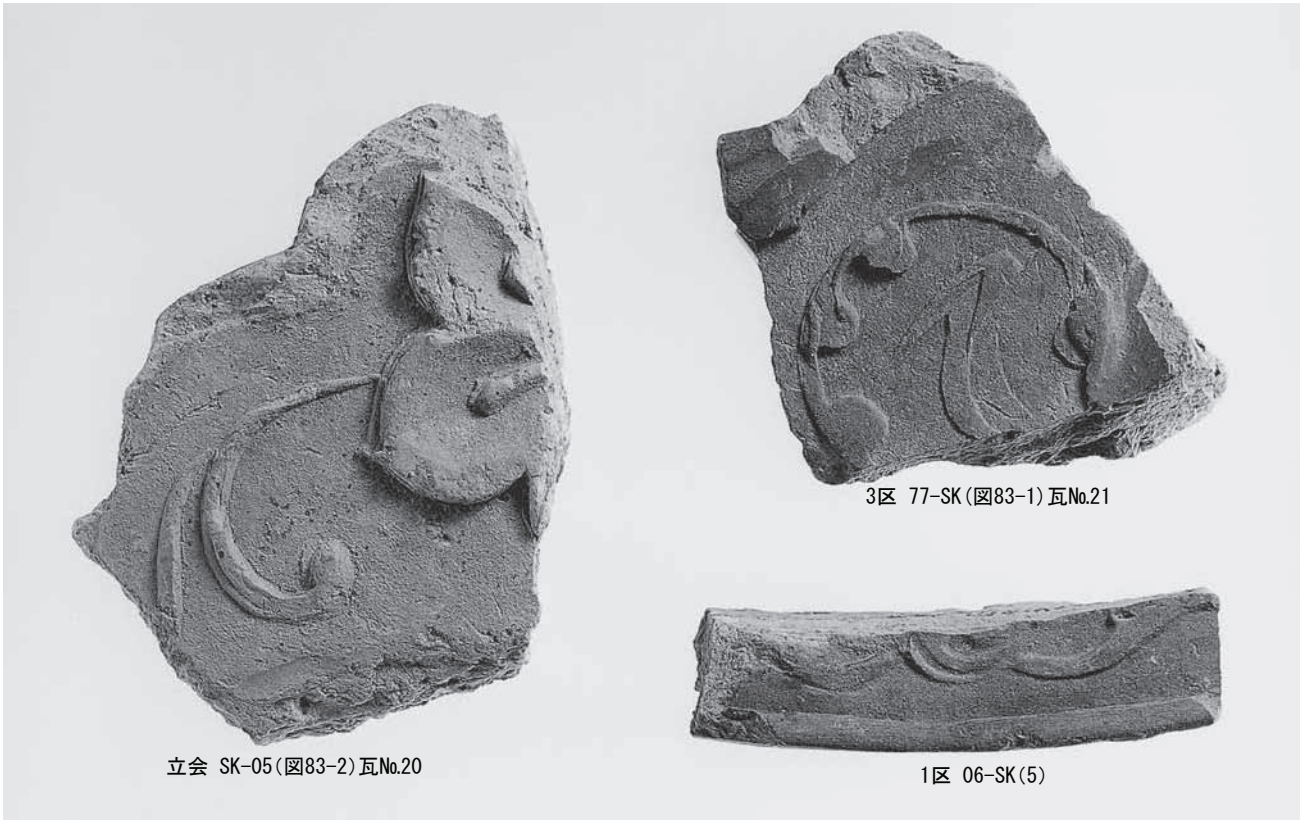

3区 65-SK
(1)瓦No.36
(2)瓦No.35

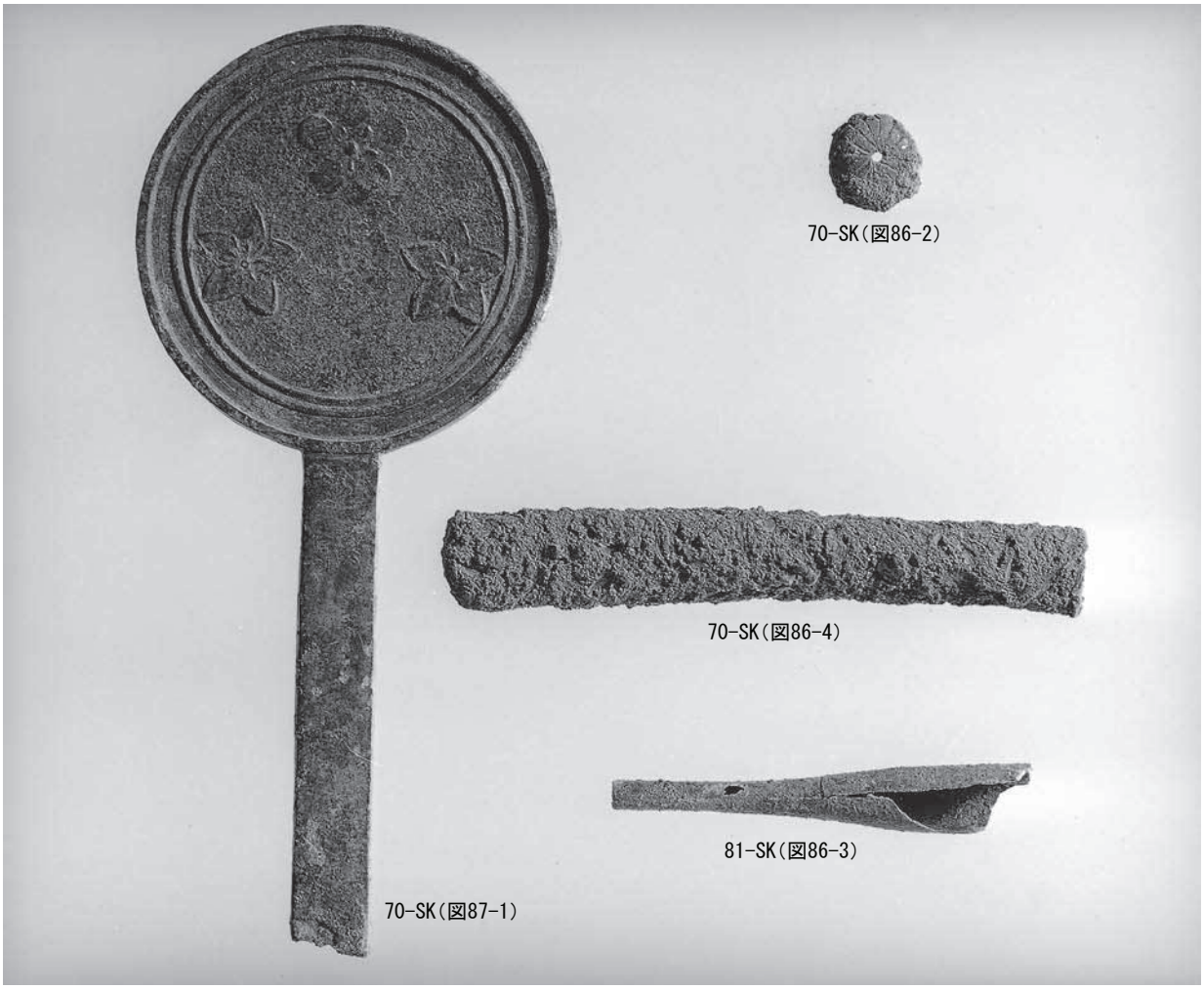
3区 77-SK(図85-2)
瓦No.22

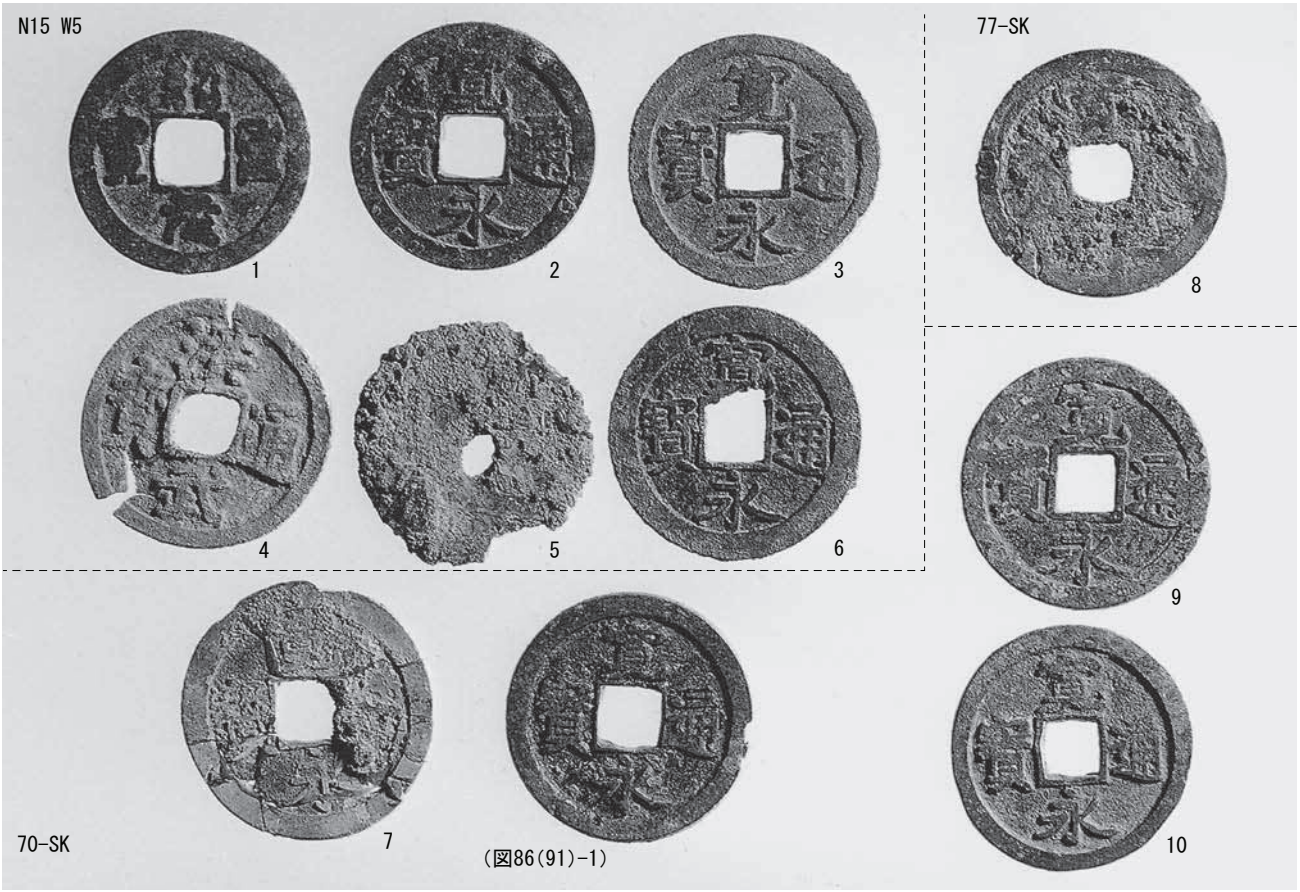

立会 SK-07(図84-2)瓦No.19


立会 SK-07(図92-1)

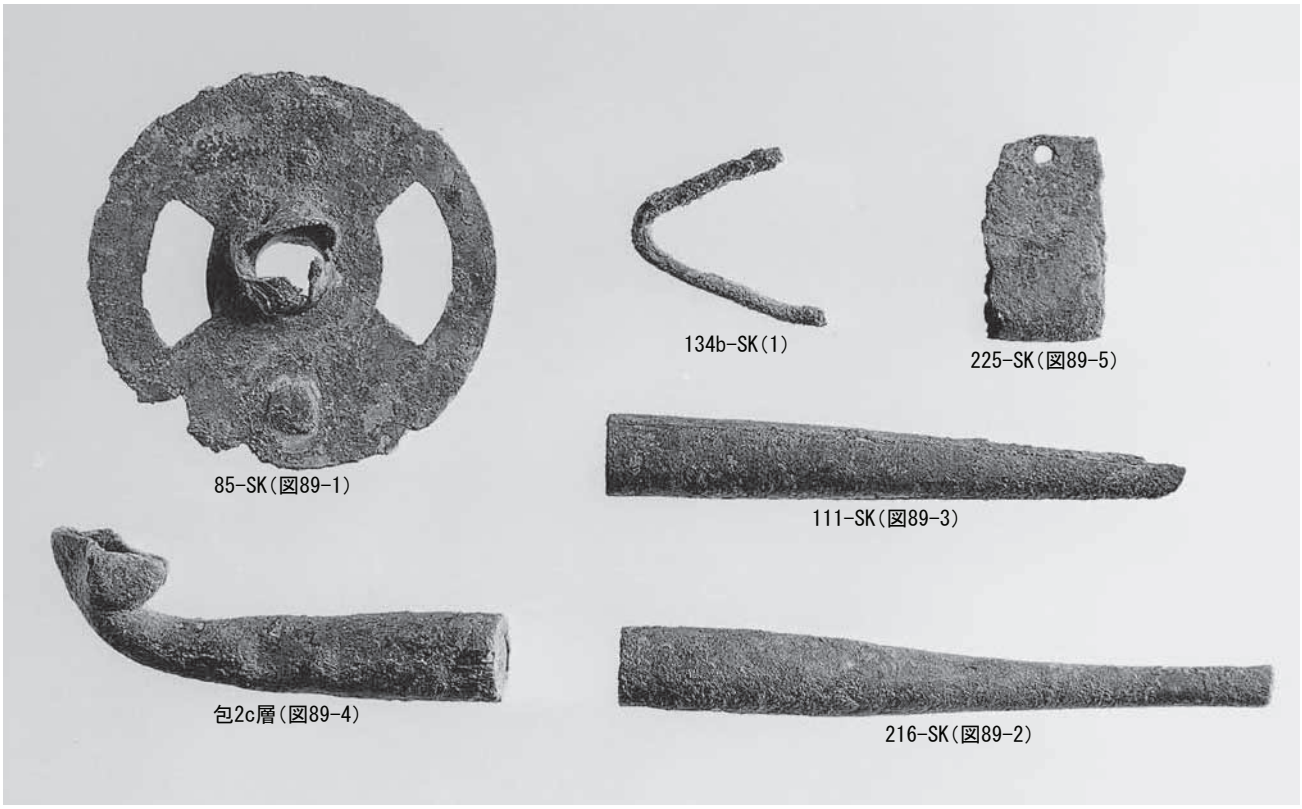

1区03-SK(3)
1区15-SK(4)


立会 SK-05(図83-2)瓦No.20
3区 77-SK(図83-1)瓦No.21
1区 06-SK(5)


70-SK(図86-2)
70-SK(図86-4)
81-SK(図86-3)
70-SK(図87-1)


N15 W5
77-SK
1
2
3
4
5
6
8
9
10
7
70-SK
(図86(91)-1)

2区出土青銅製品



85-SK(図89-1)

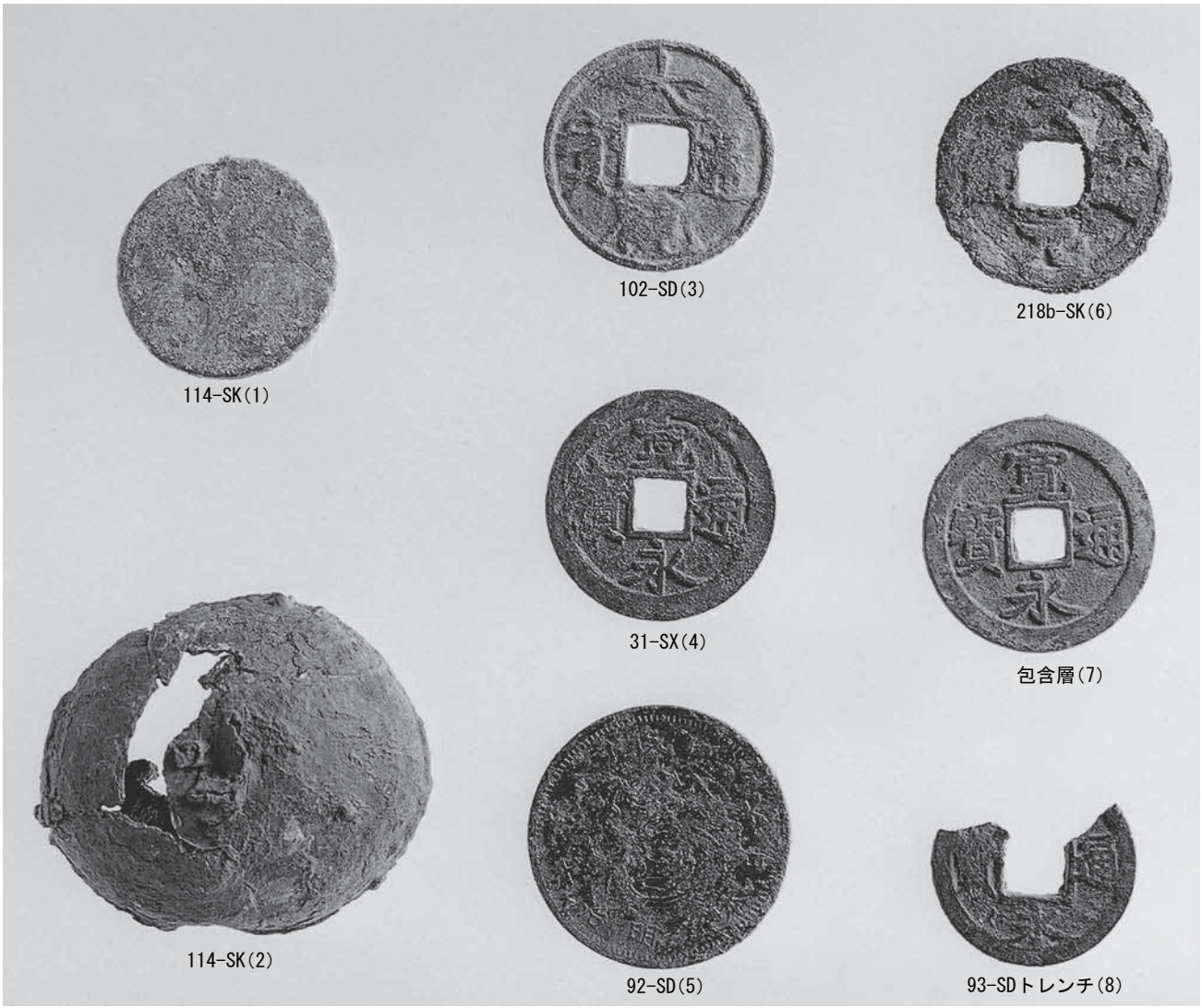
134b-SK(1)

225-SK(図89-5)

111-SK(図89-3)

包2c層(図89-4)

216-SK(図89-2)



114-SK(1)

102-SD(3)

218b-SK(6)

31-SX(4)

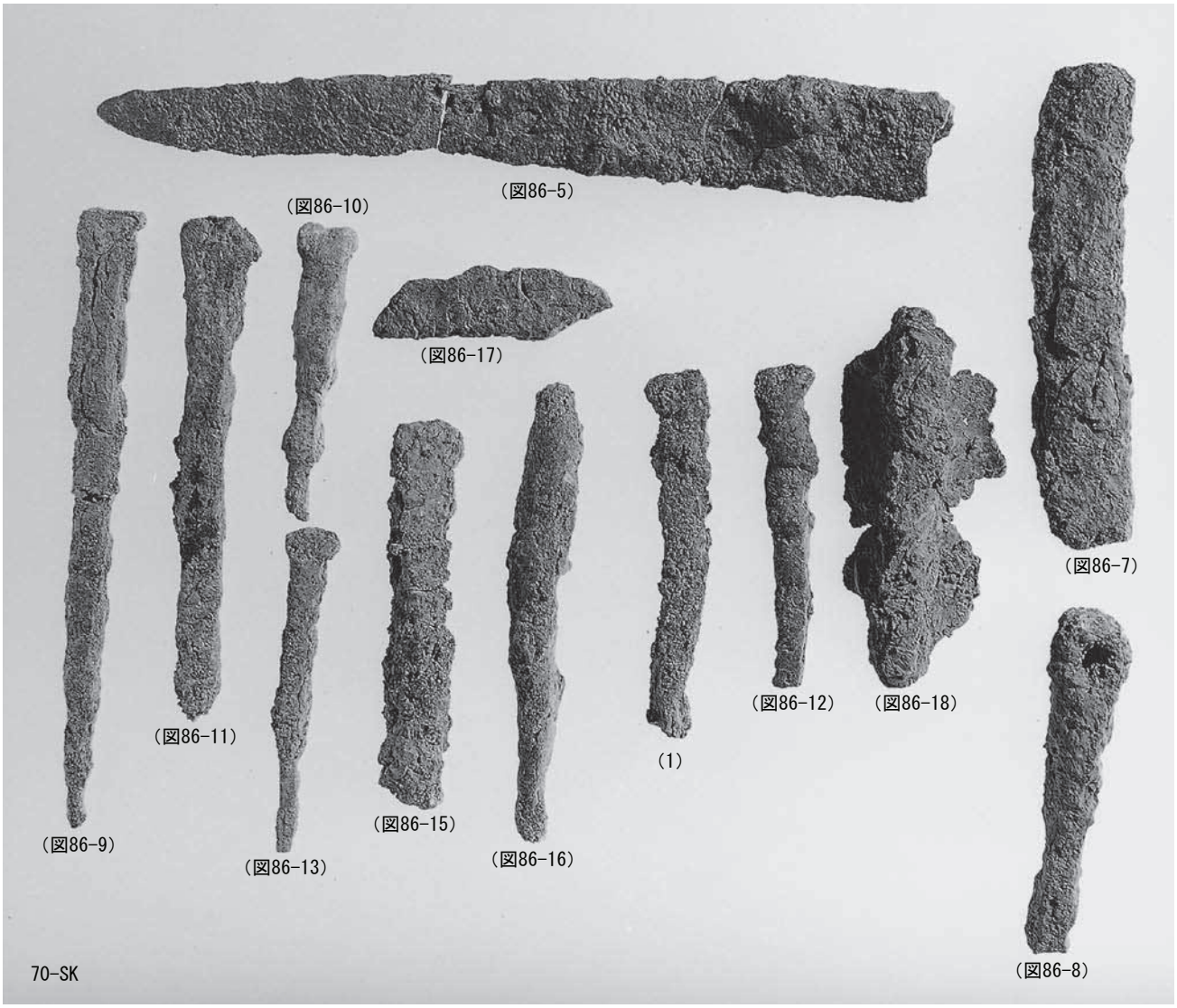
包含層(7)

114-SK(2)

92-SD(5)

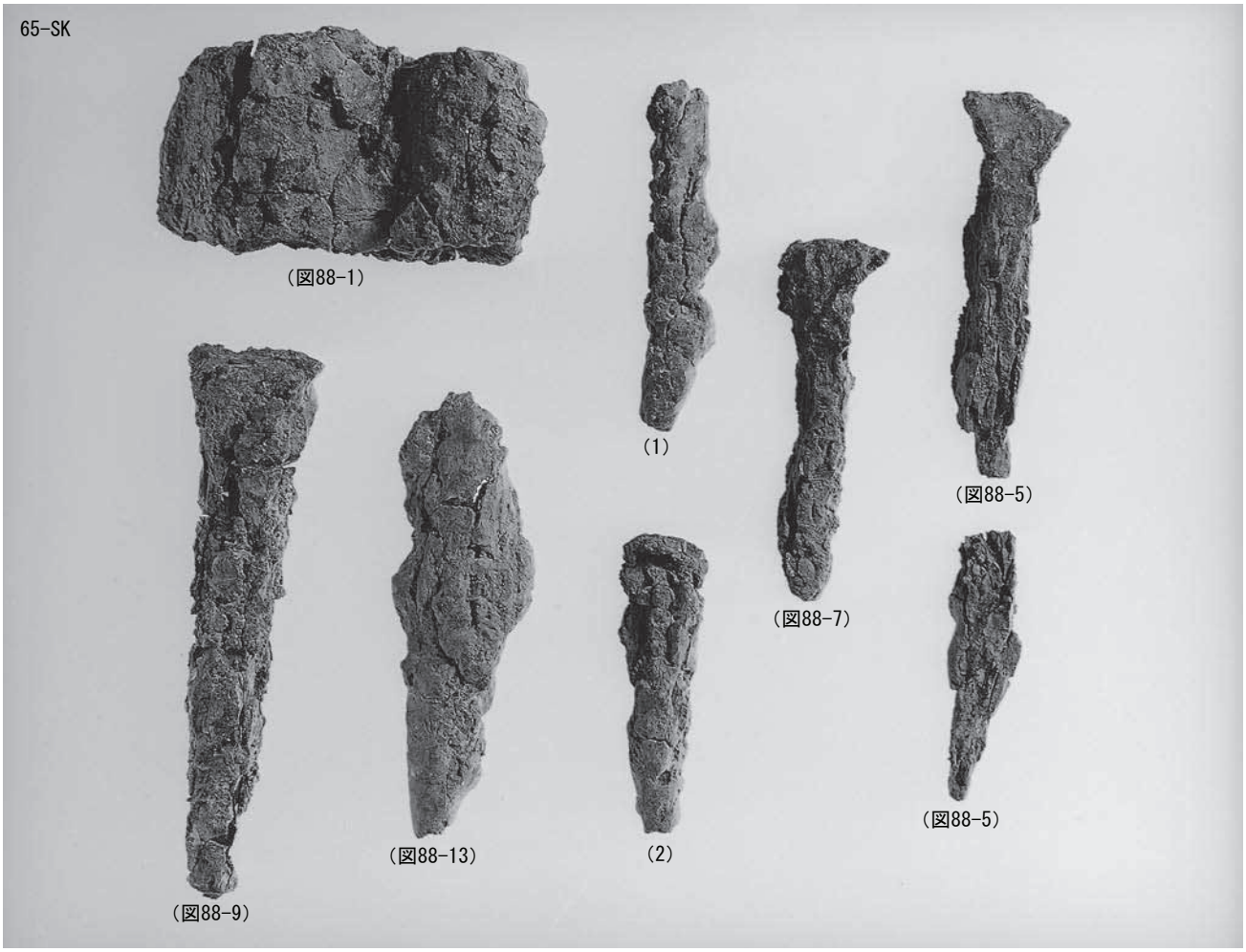
93-SDトレンチ(8)

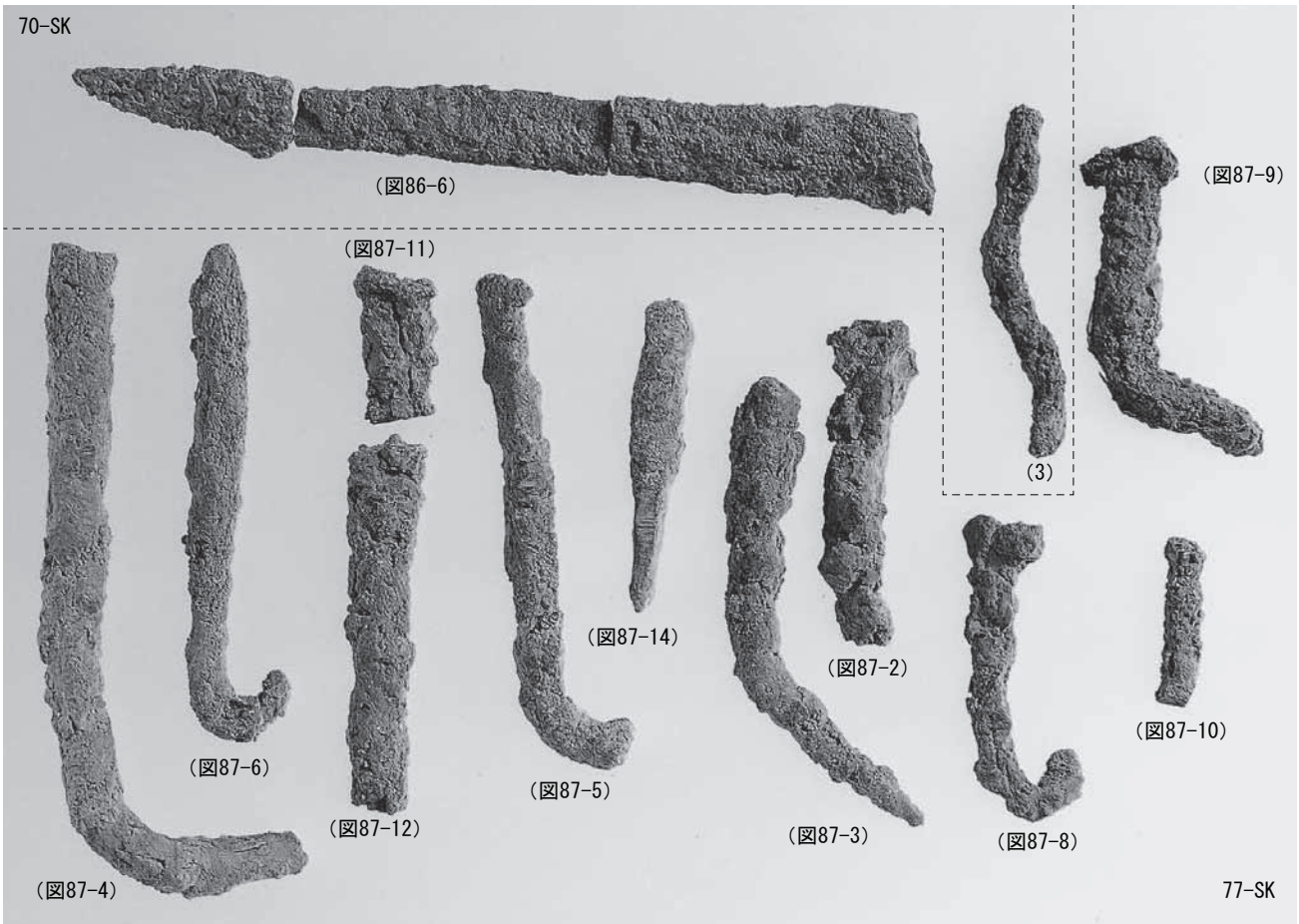
65-SK(図88-14)



70-SK

3区出土鉄器2


65-SK
(図88-1)
(1)
(図88-5)
(図88-7)
(図88-13)
(2)
(図88-5)
(図88-9)

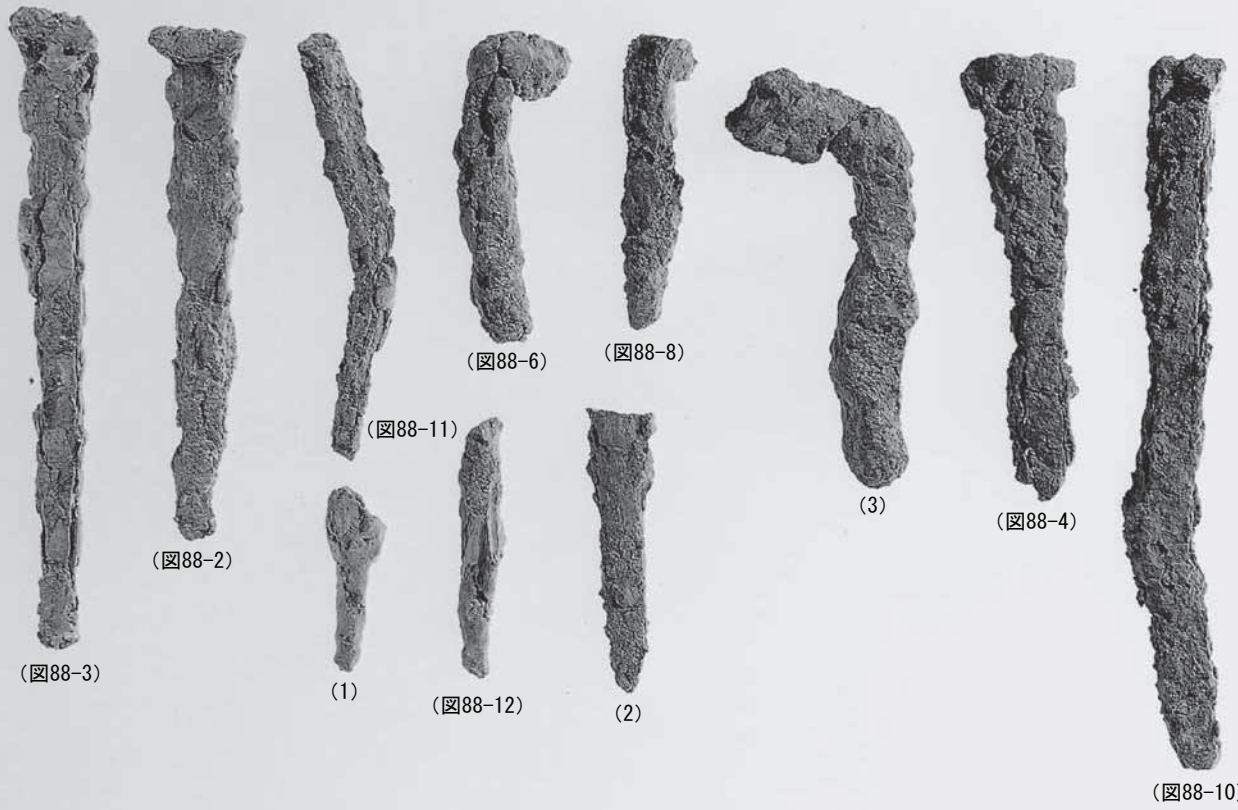

70-SK
(図86-6)
(図87-11)
(図87-9)
(3)
(図87-14)
(図87-2)
(図87-6)
(図87-5)
(図87-10)
(図87-12)
(図87-3)
(図87-8)
(図87-4)
77-SK

31-SK(図89-14)

134a-SK(図89-10)

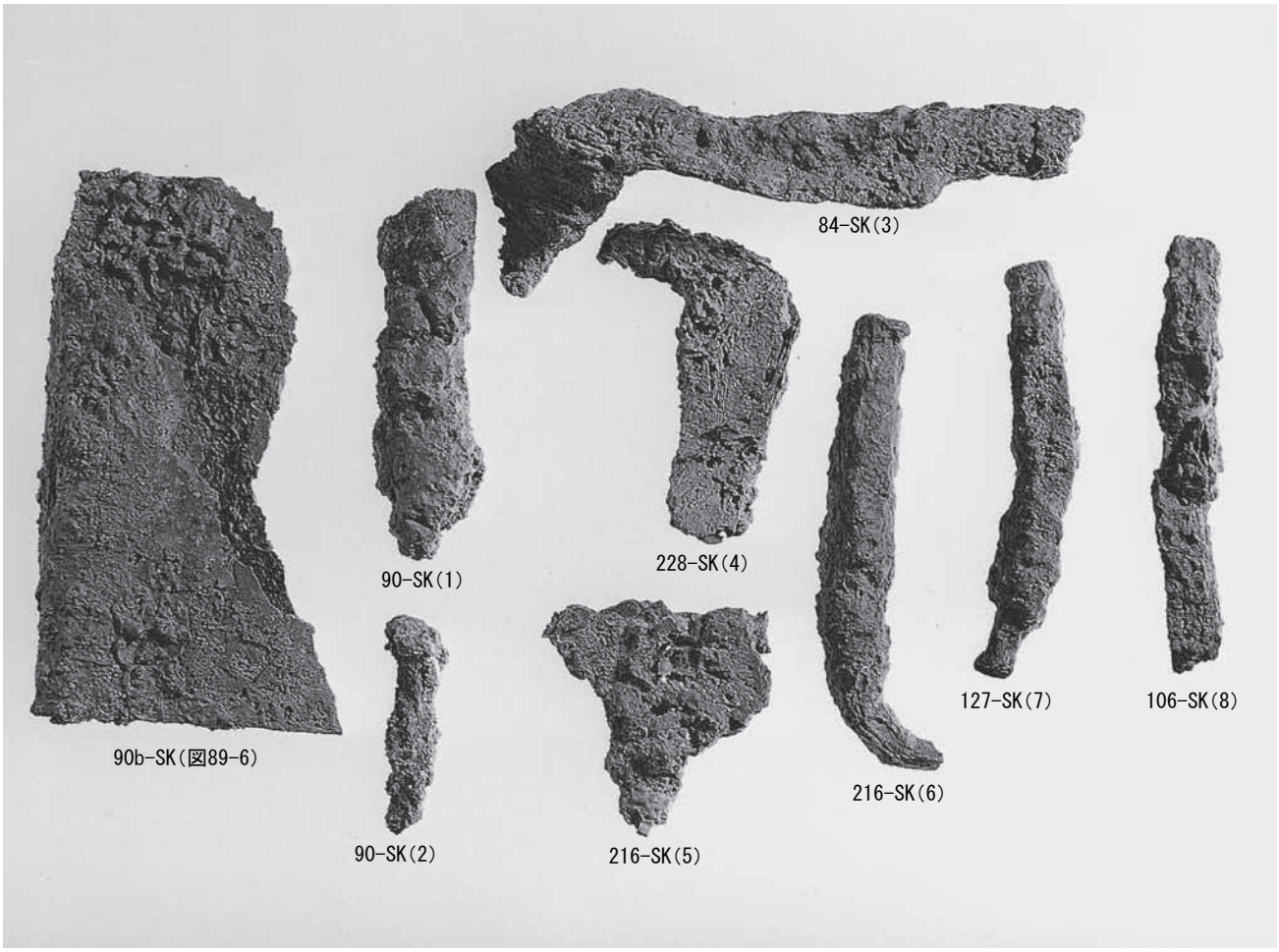
134b-SK(図89-7)

2区

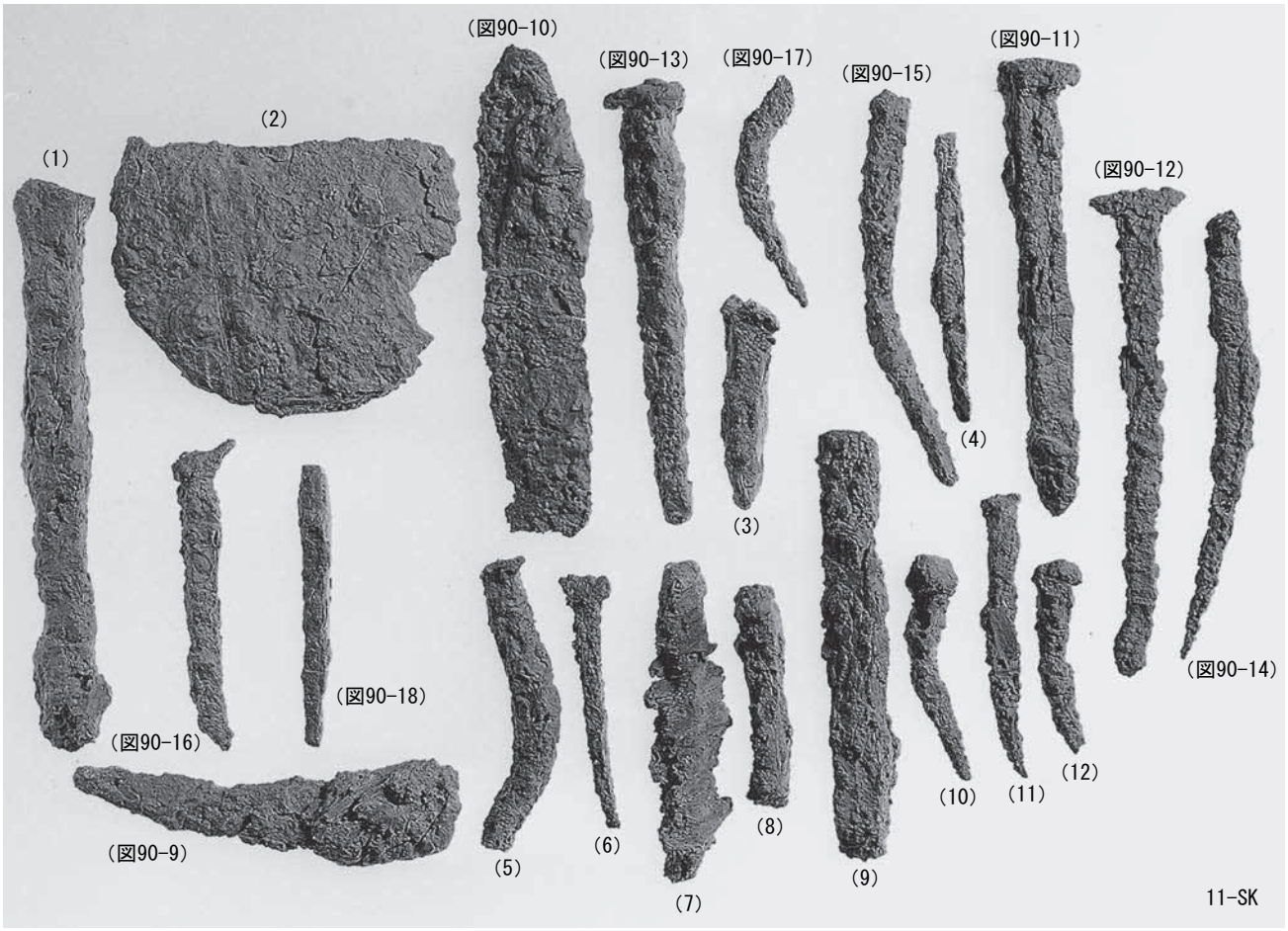


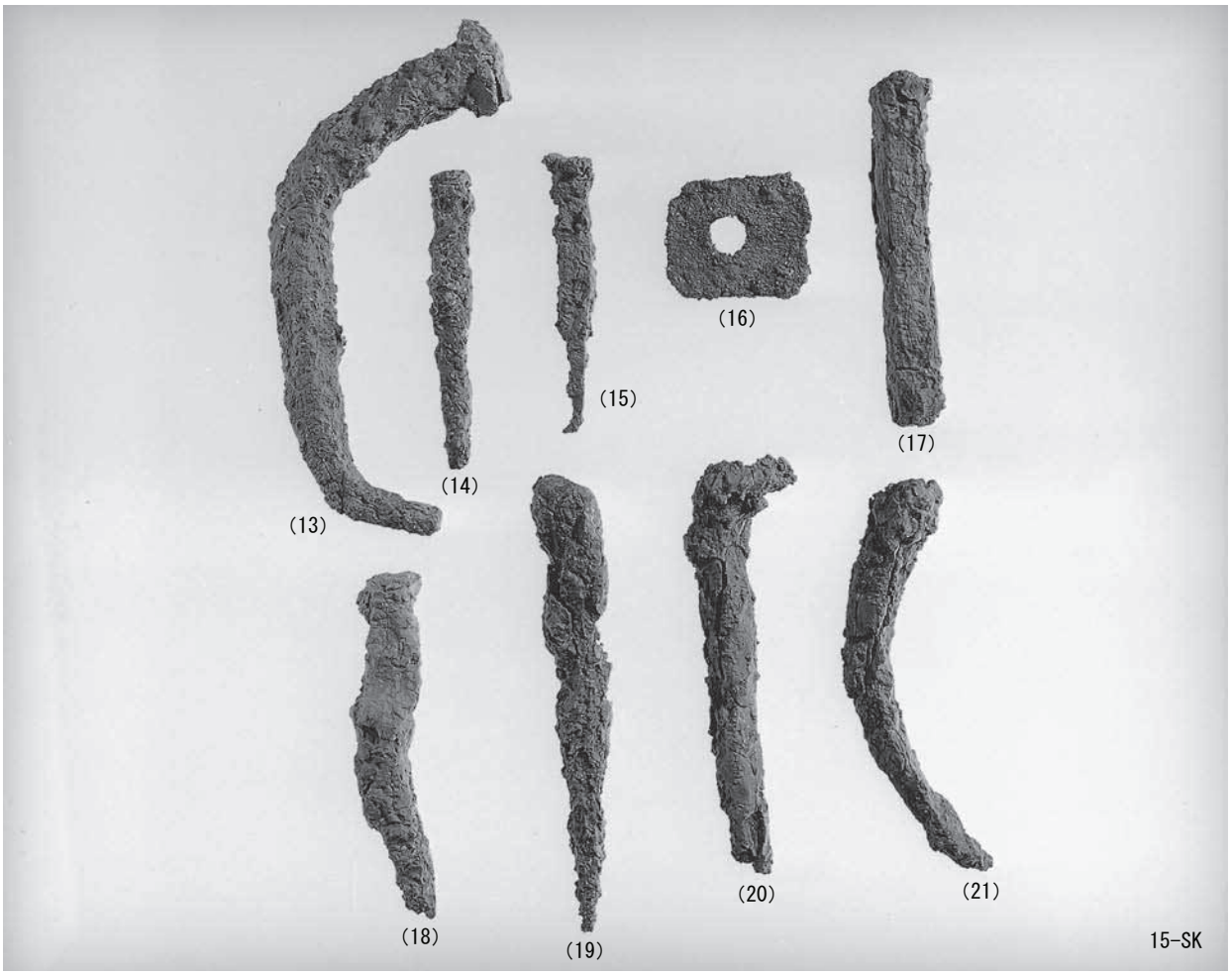
3区 65-SK

2区出土鉄器

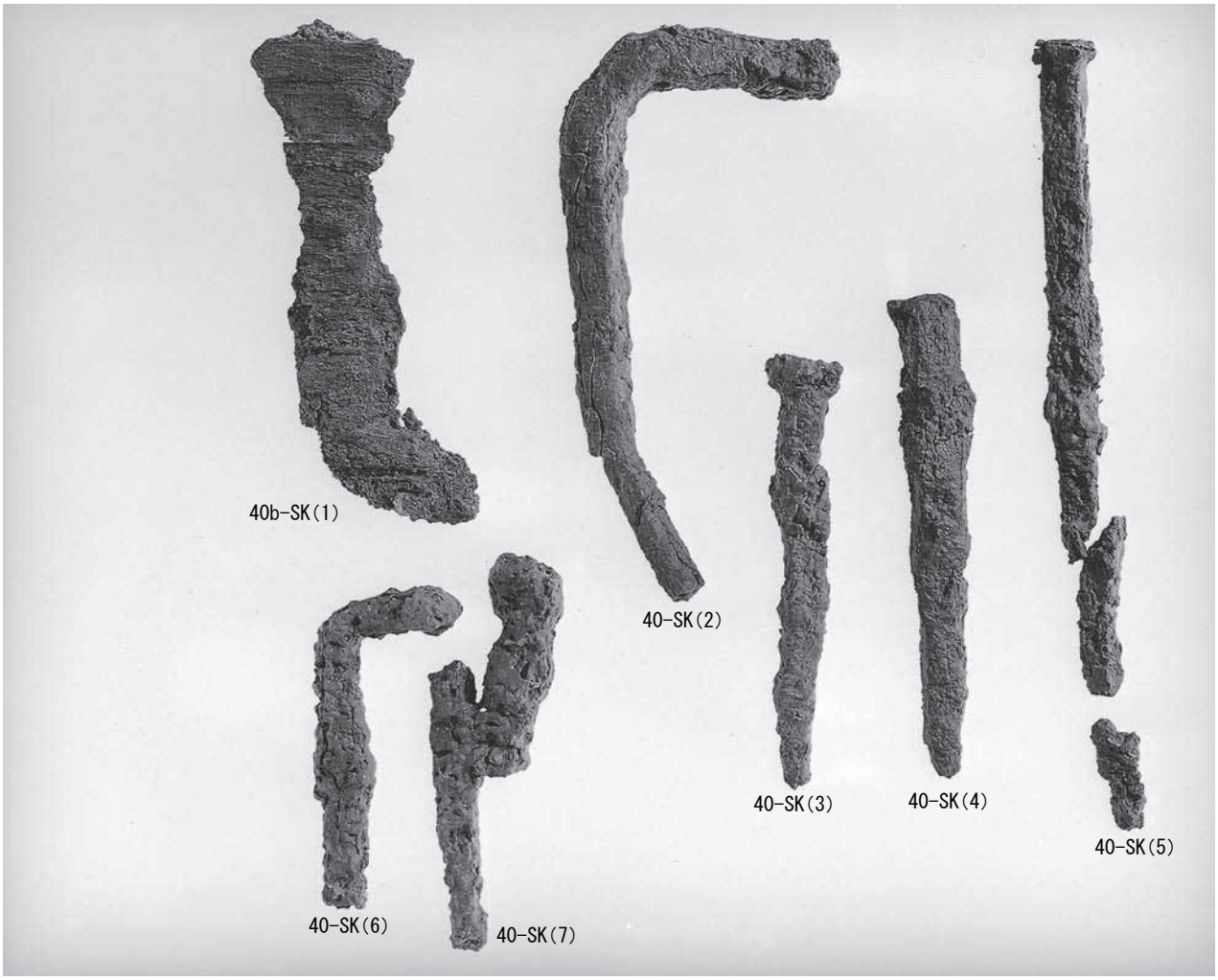

84-SK(3)
90-SK(1)
228-SK(4)
127-SK(7)
106-SK(8)
90b-SK(図89-6)
216-SK(6)
90-SK(2)
216-SK(5)

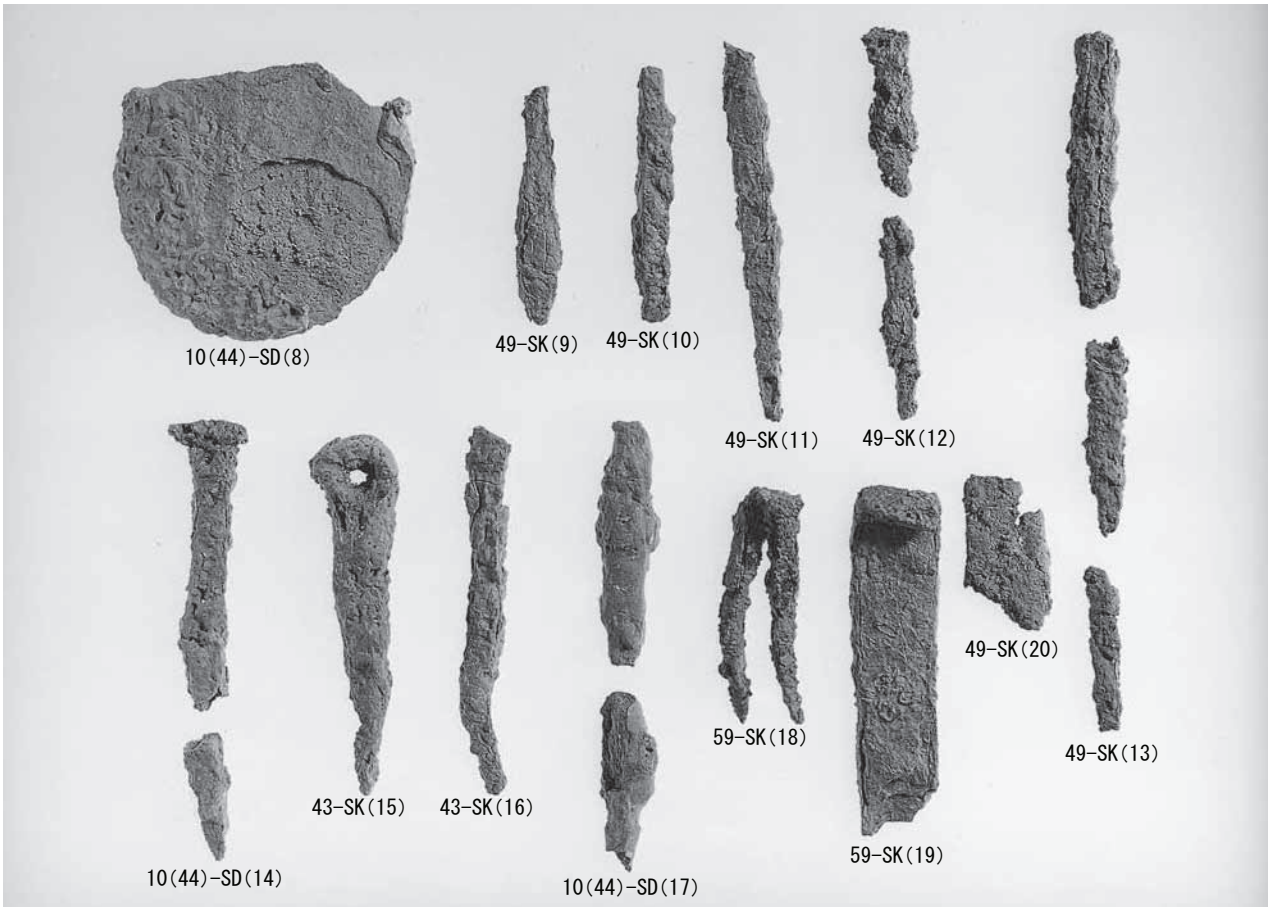
119-SK(9)
186-SP(10)
93-SD(12)
182-SP(13)
102-SD(14)
93-SD(11)
表土(図89-11)
表土(図89-8)
包2b層(図89-12)
包含層(図89-13)
包2b層
(17)
包3層
(18)
包2c層
(15)
包2c層
(16)
表土(図89-9)

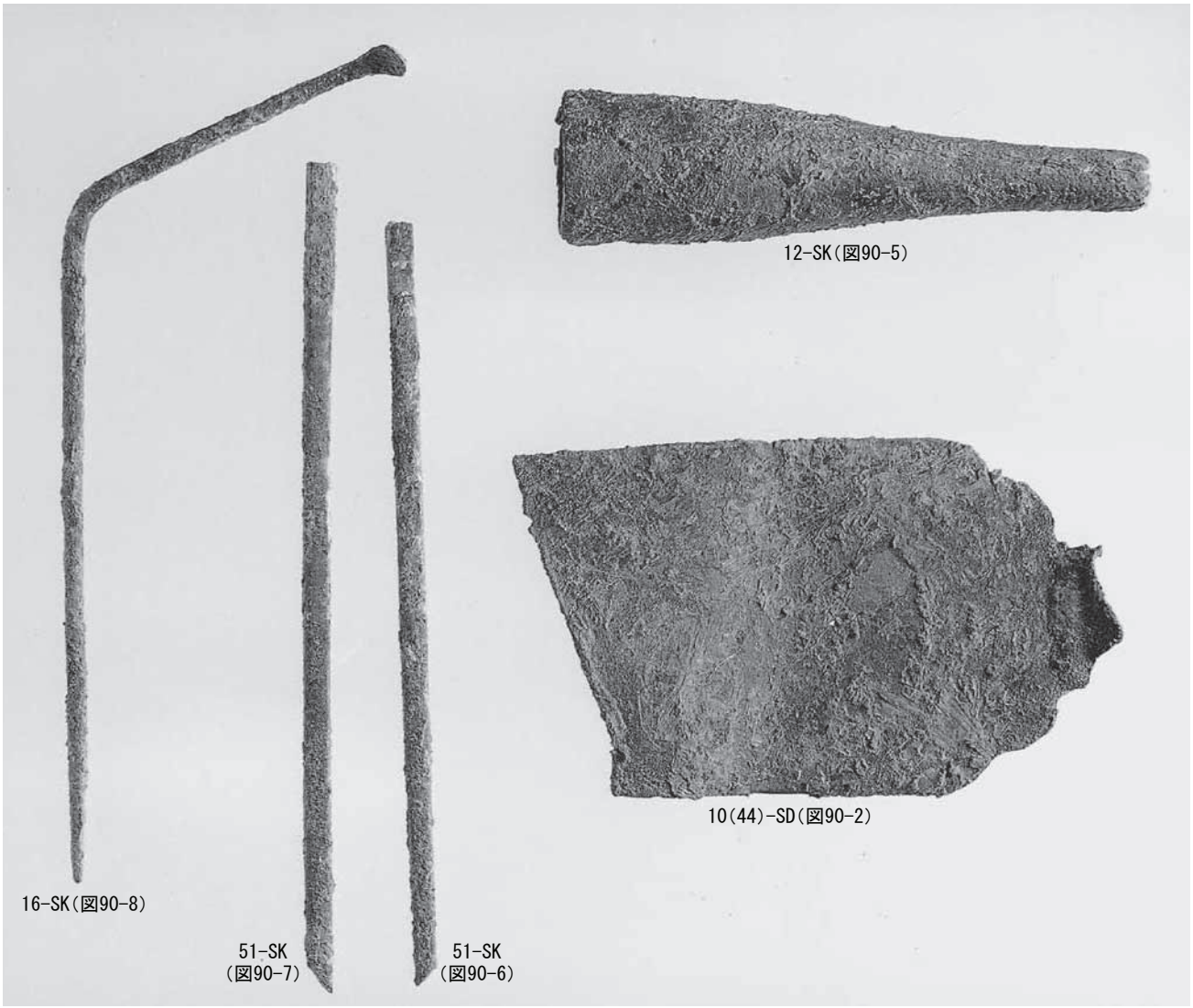

(図90-10)
(図90-13)
(図90-17)
(図90-15)
(図90-11)
(図90-12)
(1)
(2)
(3)
(4)
(図90-14)
(図90-18)
(図90-16)
(図90-9)
(5)
(6)
(7)
(8)
(9)
(10)
(11)
(12)
11-SK


(13)
(14)
(15)
(16)
(17)
(18)
(19)
(20)
(21)
15-SK

1区出土鉄器


40b-SK(1)
40-SK(2)
40-SK(3)
40-SK(4)
40-SK(5)
40-SK(6)
40-SK(7)


10(44)-SD(8)
49-SK(9)
49-SK(10)
49-SK(11)
49-SK(12)
49-SK(13)
49-SK(20)
59-SK(18)
59-SK(19)
43-SK(15)
43-SK(16)
10(44)-SD(14)
10(44)-SD(17)



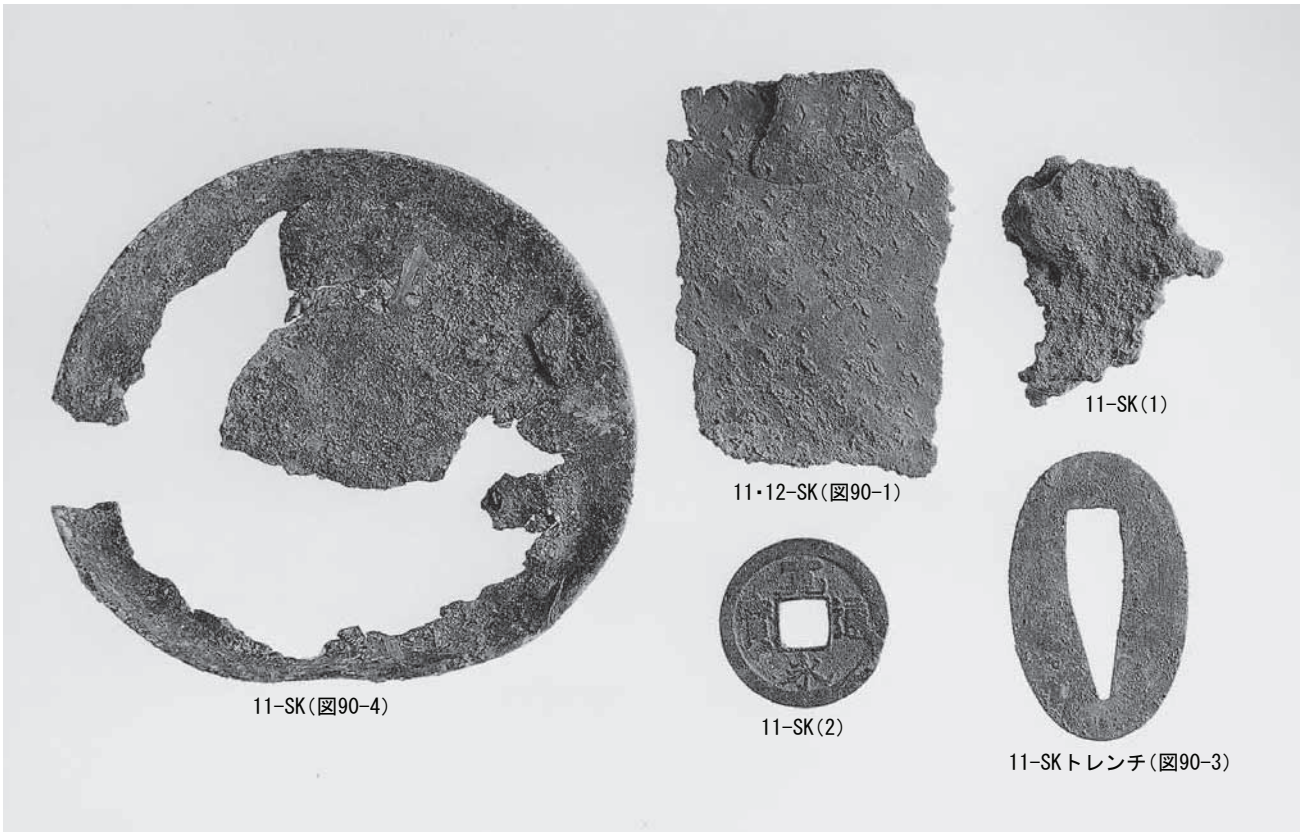
12-SK(図90-5)

10(44)-SD(図90-2)

16-SK(図90-8)

51-SK
(図90-7)

51-SK
(図90-6)



11-SK(図90-4)

11・12-SK(図90-1)

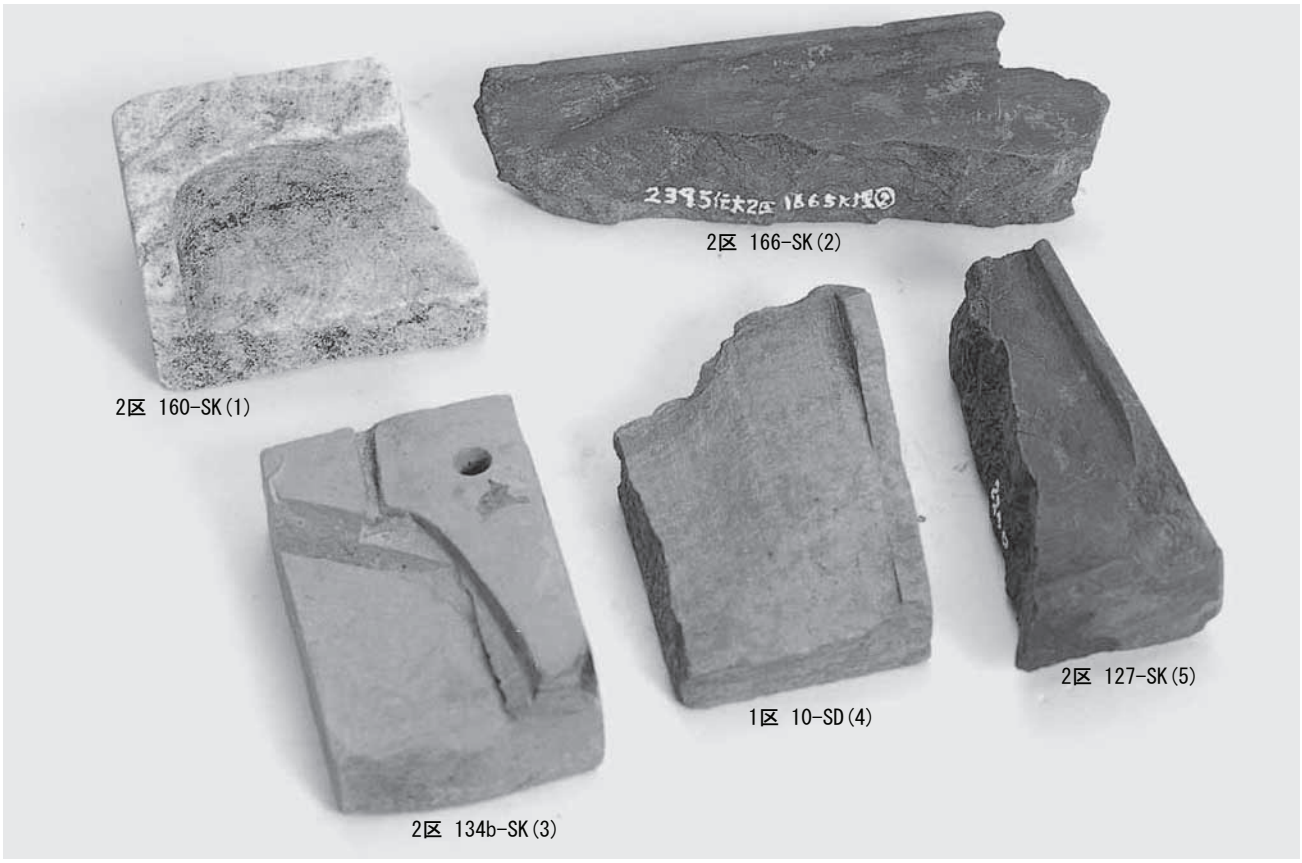
11-SK(1)

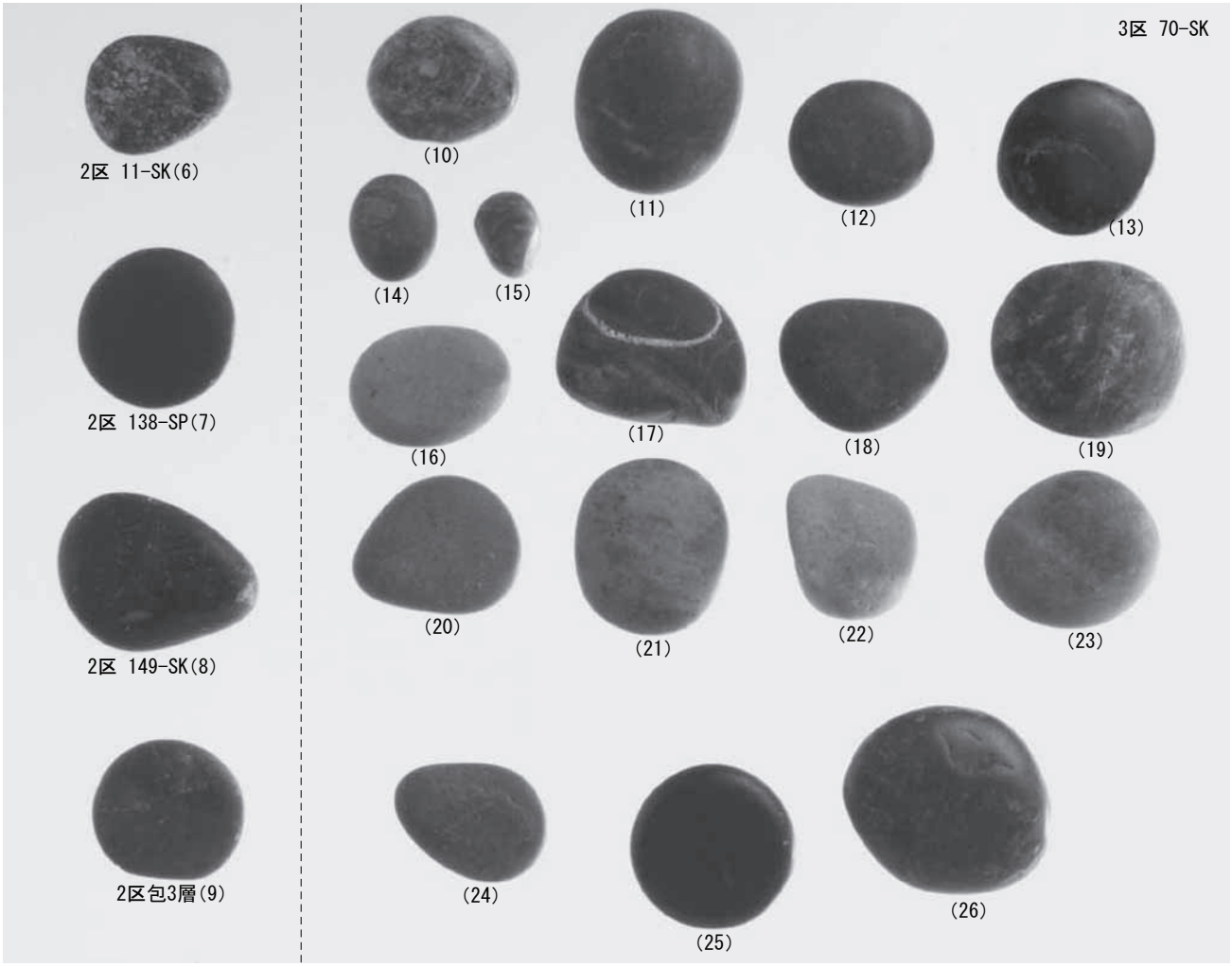
11-SK(2)

11-SKトレンチ(図90-3)

Ph. 106

1・2・3区出土硯・碁石





2区 130 防空壕(1)

2区 130 防空壕(1)

91-SK(2)

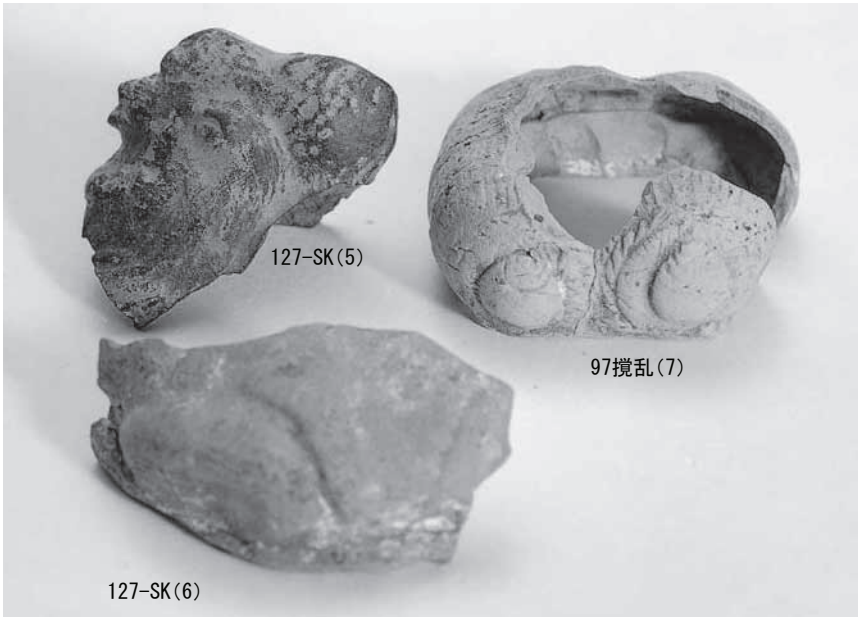
218b-SK(3)

134a-SK(4)

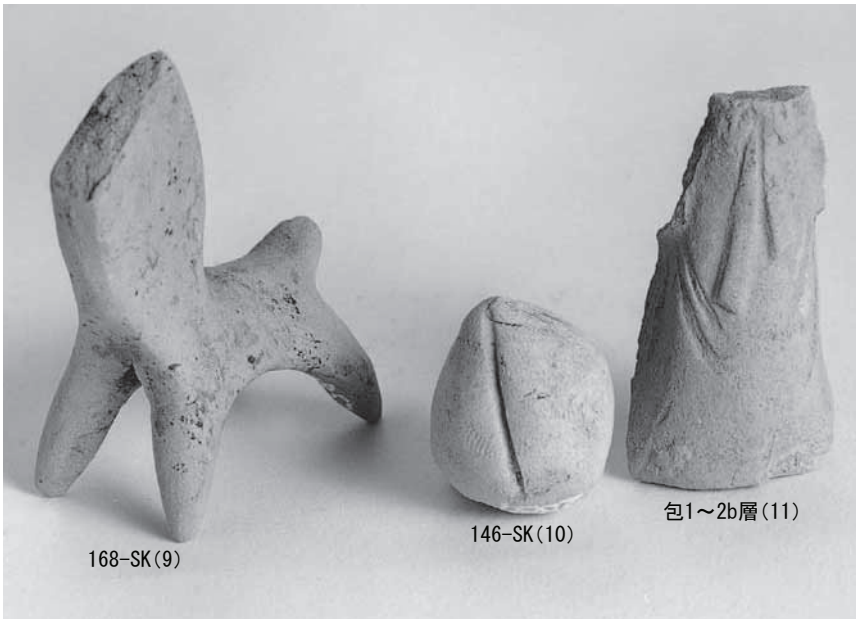
88-SK(5)

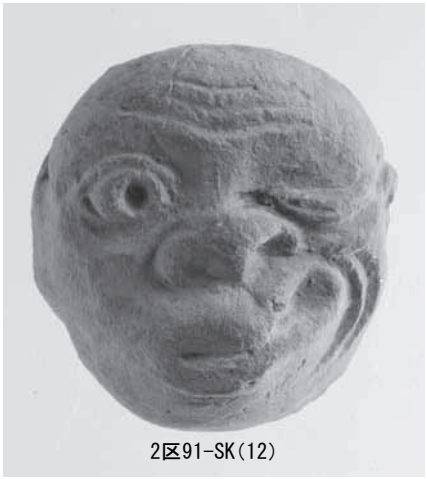
113-SK(1)　216-SK(2)　216-SK(3)

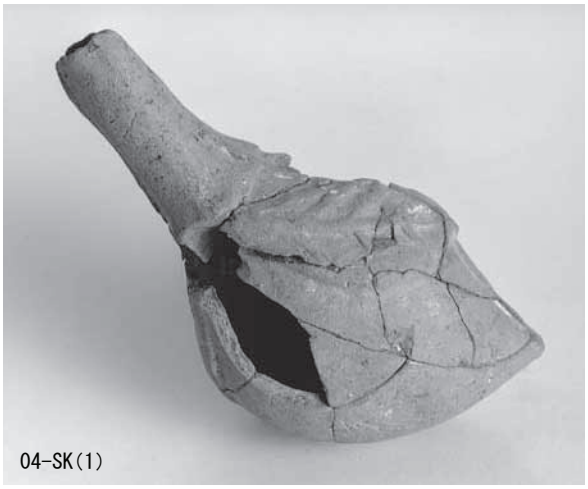
3区70-SK(4)


127-SK(5)　97撹乱(7)　127-SK(6)

3区68-SE(8)


168-SK(9)　146-SK(10)　包1～2b層(11)


2区91-SK(12)



04-SK(1)

09-SK(2)

09-SK(3)　09-SK(4)

09-SK(7)

09・15-SK(5)　09・15-SK(6)

12-SK(8)

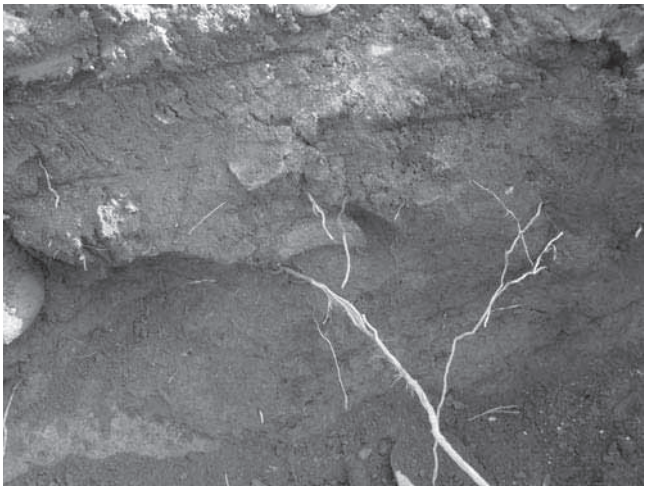
09-SK

(10)　(12)

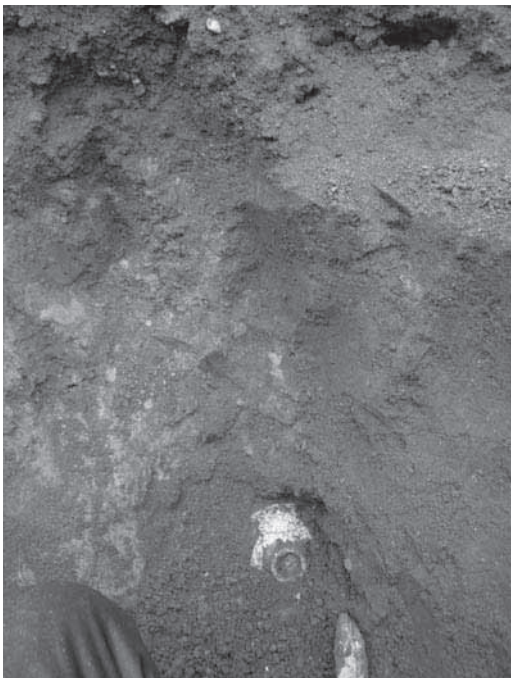
(9)　(11)

熊本地方気象台旧敷地内立会調査

1. SK-01-L 2



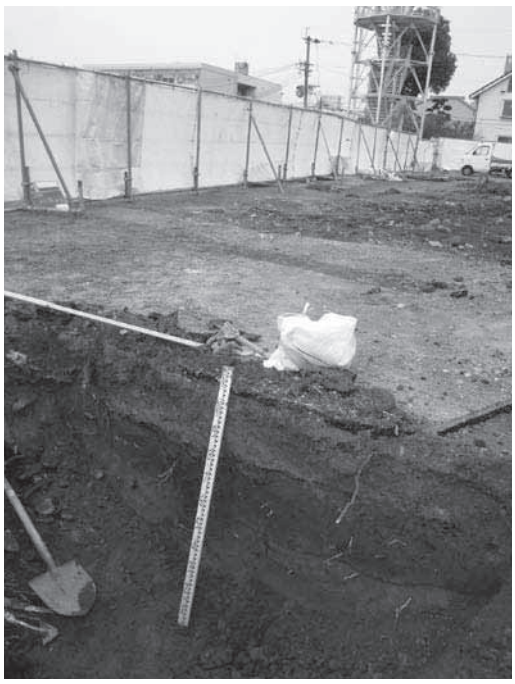
2. 立会502-SK A-3土層断面



3. SK-01-L 2

4. SK-07 D地点

5. SK-11～14 B地点



6. A-1土層断面

報告書抄録

ふりがな	でんだいどうじあといせきぐん
書名	伝大道寺跡遺跡群
副書名	熊本地方気象台遠隔露場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	熊本県文化財発掘調査報告書
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第293集
編著者名	亀田　学、藤島　友美
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8609　熊本県熊本市中央区水前寺6丁目18番1号
発行年月日	2013年3月29日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
でんだいどうじあと 伝大道寺跡 いせきぐん 遺跡群	くまもとけんくまもとしちゅうおうく 熊本県熊本市中央区 きょうまち2ちょうめ12ばん1ごう 京町２丁目12－1	２０１	２４１	32° 48′ 50″	130° 42′ 26″	2010年5月 21日～ 2005年7月 31日	約180㎡	熊本地方気象台遠隔露場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伝大道寺跡 遺跡群	寺院、屋敷	古代､近世、 近代	土坑、掘立柱建物、溝、石組遺構	瓦、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器､青銅器（柄鏡･飾金具）、鉄器（鎌・釘・刀子等）	弥生土器（後期）もあり

要約

伝大道寺跡遺跡群は豊前街道、豊後街道の起点に当たる地域であり、熊本城の北側400mに位置する京町台地に位置する。『肥後國誌』に仏厳寺の北東側に大道寺と言う天台宗の寺があったと伝えられた地である。

今回少なくとも平安時代前期にさかのぼる整地層と土坑を確認した。また、単弁蓮華文軒丸瓦及び凸面格子目タタキ平瓦が出土して、少なくとも奈良時代前期にさかのぼるような遺構が存在した可能性が高いことが判明した。その時期と判明する土器は1点であるが出土している。

また、複弁蓮華文軒丸瓦や偏行唐草文軒平瓦も出土している。桶巻き作りの痕跡も見られる。凸面縄目タタキの平瓦も多数出土している。その時期の土器も少数ながら出土している。

さらに、寛文6年（1666)、元禄7・8（1694・1695)、の京町の絵図では武家屋敷になっており、当地が町奉行もした1000石取りの春木氏の屋敷の南側になっている。今回の調査で江戸前期17世紀中頃の土坑等を検出した。また、春木氏の家紋である木瓜紋（もっこうもん）の鳥衾や丸に金字の紋の鬼瓦の出土から、そうしたことも伺える。その時期の土坑からは唐津系の胎土目の溝縁皿・青銅製柄鏡・銅製小刀の鞘や高麗聖人の磁器の灯芯押の人形等が出土している。茶器や芙蓉手の皿も1点ではあるが出土しており、やや身分の高い武士階級の生活が垣間みられた。1区の北側を調査すれば、春木屋敷の建物等が解明される可能性がある。

明和7年（1770）以降の南京町の絵図では明和の大火以降、春木屋敷は3分割され、当地は5区画に区画された下級武士の屋敷に区画替えされている。

18世紀後半の遺構は19世紀以降のゴミ捨て穴や貯蔵穴に壊され必ずしも明確でないが、石組の貯蔵穴等貯蔵施設等が調査区の周りにあり、建物は中央にあった可能性がある。

18世紀後半から19世紀代は遺物が多様である。熊本県内では小代焼、八代焼、松尾焼、網田焼から天草高浜焼等がかなりの割合で流通していたことが判明した。

あ と が き

調査終了からようやくその成果の一部を公表できることに感謝します。

この一冊の本ができるまではたくさんの人々の協力があって作成されています。事業者や地元各位はもちろん、現地調査で遺物包含層や遺構を掘削して頂いた作業員の皆様。現地から持ち帰った遺物の洗浄・注記・接合・復元をしないと、実測（図面）や写真として記録できません。

本報告の例言にお名前を挙げた方々以外にさらにたくさんの方々に協力をお願いしています。

以下にお世話になった一部の方の御芳名を記して感謝の意を表します。

木村洋子、平尾百々代、水上順子、米光早苗、柴田やよひ、三宅幸生、森田　登、伊津野博、太田黒政二、吉田秋満、河野義勝、豊民誠之、松下義章、羅美麗、米光司朗、笹木　薫、松本晋治、土島安臣（順不同）

本報告の編集者も報告書作業に携わる時間が少なく、かなりの部分を嘱託・作業員さんに頼らざるを得ませんでした。

現地調査及び報告書作成に携わって頂いた人々に感謝すると共に、本報告及び遺物等が地域で活用されることを希望します。

また、当遺跡の発掘の進展にあたり、地元諸氏や地元教育委員会や事業者の協力および理解があり、本報告書の刊行に至りました。記して感謝します。

熊本県文化財調査報告　第２９３集

伝大道寺跡遺跡群

－熊本地方気象台遠隔露場整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告－

平成 25 年 3 月 29 日

編集
発行　熊 本 県 教 育 委 員 会

〒 862-8609 熊本県熊本市中央区
水前寺 6 丁目 18 番 1 号

印刷　株式会社　河田印刷

〒 861-4101 熊本県熊本市南区
近見 8 丁目 5-105

発 行 者：熊本県教育委員会
所　　属：教育総務局文化課
発行年度：平成24年度

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 293 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 伝大道寺跡遺跡群
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。
熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/